

ガンブラ格闘浪漫 リーオーの門

いぶりがっこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

闘いの意味を求める空手屋がいる。

闘いの場所を求めるレスラーがいる。

闘うべき獲物を求める古武術家がいる。

これは、群れから浮浪れた野良犬たちの物語である。

情熱と希望と可能性に満ち溢れた、「人」の世界——【ガン普拉バトル】

華やかなる舞台の路地裏で、牙を持って余した畜生たちが今宵もじやれ合う。

憐れなる獣に与えられた最後の玩具の名は【ガン普拉・トレース・システム】

——カラン、コロン、と。

時代錯誤の高下駄の音を響かせて……。

さあ今日もまた、馬鹿げた狂乱の一夜が始まる。

・
・
・
本作では、セカイ君たちトライ・ファイターズがガン普拉バトル選
手権優勝を目指し青春している一方その頃、人知れず繰り広げられて

いるアングラな格闘大会の顛末を追い駆ける予定です。

よってオリ主、オリ設定、原作無視、板垣イズム、夢枕獯リスペクトなどが頻出します。

苦手な方はご注意ください。

目次

群狼編

空手家 永樂莉王（ナガラ・リオ）① | 1

空手家 永樂莉王（ナガラ・リオ）② | 17

プロレスラー ビグザム剛田（ゴウダ） | 35

その名はヒライ・ユイ① | 53

その名はヒライ・ユイ② | 74

舞術家 安室恋（アムロ・レン）① | 94

舞術家 安室恋（アムロ・レン）② | 105

舞術家 安室恋（アムロ・レン）③ | 128

転章 | 146

黄龍編

次元霸王流拳法 | 158

全選手入場 | 174

思春期を殺した少年の翼 | 185

ユニバース | 201

F i s t o r T w i s t | 214

はじまりのG | 238

いけ！いけ！ぼくらのアツガイさん | 257

T h e w i n n e r | 274

私の愛馬は凶暴です | 289

アムロ再び | 314

敗者たちの栄光 | 339

ガチぴよん大勝利！ 希望の未来へレディ・ゴーツ!! | 363

嵐の中で輝いて | 390

可能性の獣

—

411

何も考えずに走れ！

—

440

オルフェンズの涙

—

472

ココロオドル

—

507

サイレント・ヴォイス

—

532

獅子の門

—

561

少女が見た流星

—

587

黄金の秋

—

616

エピソード

俺たちのガンπρα

—

657

群狼編

空手家 永樂莉王（ナガラ・リオ）①

——カラン、コロソ。

下駄が鳴る。

東洋の大都会、東京のコンクリートジャングルに、時代遅れの乾いた下駄の音が響く。

年季が入った洗い晒しの空手道着に、黒の学生服を肩で羽織っただけの後ろ姿。

身長はようやく160cmを越したかと言う、未だ成長途上の少年である。

伸ばすに任せた蓬髪さえ何とかすれば、相応にあどけなさの残る面立ち。

だが容貌に反し、やや色素の薄い瞳が、まるで青白い鬼火のように慧々と暗い光を放っていた。

（今日は、死ぬにはいい日だ）

時折、すれ違いざまに広がる、むわつとした獣臭が、奇抜なコスプレに見馴れた筈の通行人たちをも振り向かせる。

そんな周囲の視線を気にするでもなく、飄々と肩で風を切って歩く。

軽妙な下駄履きの足音が、スクランブル交差点の手前でピタリと止まる。

ほどなく周囲より上がった歓声に反応し、少年が碧い瞳を上空に向ける。

その視線の先、摩天楼に設けられた巨大なオーロラビジョンには、広大な宇宙に煌めく閃光と『Live』の文字。

そして漆黒を切り裂いて火花を散らす、二体の人型ロボットの姿を映し出しだしていた。

（……ガンプラ、バトル?）

熱狂に取り残された茫漠とした瞳が、記憶の底にあったキーワード

を掘り起こす。

眼前で映し出される光景は、無論、現実の宇宙戦争では無い。かつてプラフスキー粒子なる発見により実現したと言う、プラモデル同士の真剣勝負。

オーロラビジョンはその大会の一幕を映し出しているのだ。

妙な居心地の悪さに、少年がキョロキョロと視線を泳がせる。

憧憬、眩い瞳でオーロラビジョンを見上げる、人々の顔、顔、顔――

老いも若きも、男女の別も無い。

ただ時代外れの下駄履きだけが、その場の一体感から取り残されたように、独りであった。

無論、少年とて化石では無い。

人々の瞳の輝きに共感は出来ずとも、ある程度なら理解も出来る。オーロラビジョンが煌めき放ち、一条の光が虚空を走る。

製作者の創意が宿った、世界にただ一つだけの、ビーム・ライフルの光である。

純白の機体が鮮やかに翼を広げ、舞うようにして閃光を避ける。

熟練の指先が為した、人機一体の動きである。

自らの手で、あれほどの機体を生み出せたならば、どれほど楽しい事であろうか？

自らの機体を、あれほど自由に躍らせる事が出来たならば、どれほど震える事であろうか？

ガンダムと言う作品世界について、何一つ知らない少年ですら、そう思う。

ましてや、シリーズを愛する全ての人々にとっては、正しく夢の現に違いあるまい。

事実、今日においてガンプラは、世界の中心であった。

世情に疎い少年は知らぬ所だが、ガンプラバトルは今や、世界で最も注目を集める祭典へと成長を遂げていたのだ。

三十余年に及び、世界中のお茶の間で愛され続けるTVアニメ「ガンダム」シリーズ。

そのドラマを彩った数々の名機、MSを、思い思いに作り、自らの手で自由自在に動かせる。

そんな遊戯が現実存在したのだから、人々が熱狂するのも無理はない。

とみに近年、ヤジマ商事がバトルに関する業務を引き継いでからは、その傾向が加速していた。

レギュレーションの細分化で競技としての公正さを図る一方、システムの拡張とガイドラインの充実により、ビギナーからプロまで、個々のニーズに応えられる環境の構築が始まっていた。

競技人口が増える。

スターが生まれ、人が動く、金が動く、駆け引きが成熟し、最大の宴が始まる。

遊戯としての裾野は広く。

しかし競技としての頂は、なお高く。

老若男女、誰もが気軽に手に取って、心のままに、思い思いの一時を過ごせる。

ガン普拉バトルとは、まさに現代社会のエデンであった。

……しかし。

しかし、である。

例えば、一人の男の繰り出す空手チョップが、この熱狂の中心だった時代がある。

単純な殴り合いを、芸術の域にまで昇華させた競技がある。

「最強の武術とは？」 教室の片隅で、下らぬ激論が交わされた日々がある。

姿三四郎のような、あるいは空手バカのような無頼が、子供たちのヒーローだった時代がある。

世界、最強。

何時いかなる時代であっても、男なら、誰もが一度は志す夢がある。彼らは何処に行ったのだろうか？

彼らの夢を覚えている者は、果たして、この世界にどれくらい残っているのだろうか？

ふへっ、と少年の口元に自嘲が浮かんだ。

我ながら、何と言う女々しいひびがみであろう事か？

ふっ、と視線を落とし、己が掌を見る。

まるで猛禽のように、みちみちと逞しく、歪に膨れ上がった指先を見る。

空手家の拳である。

少年にとって、それが唯一の財産である。

そうとも。

この拳が、自分の標だ。

世界の中心が何であろうとも、今日、死ぬと定めた野良犬には、無縁の話に違いあるまい。

やがて信号が青に変わり、人々の群れが再び動き始める。

その流れに紛れるように、一頭の獣がゆつくりと歩き始めていた。

その顔には、先ほどまでの笑みは、既に無い。

ガン普拉バトルの事はもう、きれいさっぱりと頭の中から消え去っていた。

(――今日は、死ぬにはいい日だ)

ナガラ・リオ(永樂莉王) 十六歳。

カラン、と。

小気味良い下駄の音が、不意に止まった。

ギリリと見据えた抜き身のような眼光の先には、年季の入ったビルディングがあった。

【空手道 三雷会館】

入口に掛けられた木製の看板には、雄大な毛筆でそう綴られていた。

一昔前、空手界に龍虎あり、そう謳われた二人の男がいた。

共に同門の伝統派空手を修めた男たちである。

年齢には十ばかりの開きのある二人であったが、彼らは内に秘めた

野心を同じくしていた。

即ち、伝統に塗れ形骸化した空手道を打倒し、自分たちの手で真の近代武術の礎を築く、と。

二人は師の下を離れ、他流派はもちろん柔道、プロレス、拳闘、古武術と言った流儀の別を問わず他流試合を繰り返し、やがて総合空手【三雷会】を立ち上げるに至った。

果てしなく続く研鑽の日々。

だが歳月は、いつしか二人の立場を微妙に変えていった。

かつての龍は千人を超す門弟を抱える指導者となったが、そのナンバー2たるべき虎は、相も変わらず一介の武芸者のままであった。

ある夜、龍が言った。

ルールを作る。

小難しい屁理屈を蹴散らして、世の万人が理解できる試合の雛形を作る。

目突き、金的と言った危険な攻撃の禁止。

防具、グローブと言った万全の対策を前提とした頭部への打撃の解禁。

体重別の階級制の導入による試合の公正化。

諸々の試合運びの制定と、それに対応できるノウハウを持った指導員の育成。

支部毎にてんでバラバラに行われている三雷会の指導法を体系化して、空手の地位を世界の高みまで引き上げるのだ、と。

虎は激昂した。

戦いの場に巻き込まれた時、体格の差を言い訳に逃げるのが武術家か？

実戦において有効な急所攻撃を封じた歪な技術が、総合空手などと呼べるものか？

言うに事欠いて保護具だと？

そんな物がまかり通るならば、かつて我々がダンスと揶揄した古流派の方が、まだしも実戦の怖さを理解しているではないか、と。

当時の二人の対立がどれほど凄惨なものであったか、今となっては

知る術は無い。

ともかく幾度かの衝突を経て、虎は幼子を連れて道場を去り、以後、三雷会は空手の代名詞として全世界に名を馳せる所となったのである。

・
・
・
——十年。

幼少の日、父に手を曳かれて歩いた因縁の廊下を、下駄の音を響かせ虎の子が往く。

時折すれ違う視線が不審げに彼を捉えるも、その歩みを咎める者はいない。

いかに見知らぬ顔とは言え、いかに他流派とは言え、道着は道着である。

果たし合いだの道場破りだのと言った慣習は廃れて久しい。

他所の道場からの出稽古、あるいは経験者の入門希望。

周りの大人の目からは、そのように解釈されていても不自然ではない。

(……そんな、モンなのかよ?)

ふっ、と脳裏によぎる嘲り、あるいは失望を即座に打ち消す。

十年の内に、『武』と言う概念に対する向うの解釈がどのように変質したかは分からない。

だが少なくとも少年にとって、ここは敵地であり、即ち死地である。

あの廊下の曲がり角から、突如日本刀で斬り付けられたとしても文句は言えないし、言うつもりもさらさらない。

そう言った不転の決意で以って、今日、この時に臨んだ筈なのだ。

郷愁も失望も、全ては技を曇らせる雑念に他ならない。

正面のエレベーターを避け、脇の階段をゆっくりと昇る。

辿り着いたフロアーの先で、おもむろに非常口のドアを開ける。

びゅう、と言うビル風が少年のざんばらな前髪を揺らす。

錆かけた螺旋階段には、幸い障害となるような物も見当たらない。

最悪の場合、ここから階下に飛び降りて、そのまま裏路地に紛れる

ことも可能であろう。

鉄扉を閉め、おもむろに後背を振り返る。

長い廊下の先に見える、両開きの分厚い木扉。

その先には近代空手の総本山、三雷会の本道場が広がっている。

ぶるり、知らず体が震える。

幼き日、初めてあの扉を開けた時の「セイツ！ セイツ！」と言う

男たちの掛け声が、ビリビリと耳元で残響する。

(……死ぬには、良い日だ)

おまじないのように呟いて、自身の中の逸る野獣をかろうじて抑え込む。

どれほど心中に言い聞かせても、昂る肉体の震えは抑えようがない。

どだい無理からぬ話である。

薄い扉を一枚隔てた向うでは、今も屈強な男たちがその技を磨いて……。

(…………?)

妙だ。

握り締めた扉の取手からは、いかなる熱気も少年には伝わってこなかった。

三雷会の修練に、休暇の二文字は無い。

仮に指導員たちの講義の最中であっても、刺し貫くような真剣さが扉越しに浴びせられねばならぬ筈なのだ。

それがまつたくの静寂。

漠然とした不安が、ぞわり、と少年の胸中をよぎる。

「……ッ！ たのもおうッ!!」

萎えかける心を一喝し、声を張り上げ勢い良く扉を開けた。

直ちに乱入者に向けて浴びせられる奇異の目、目、目……。

ぽかん、と場違いに間の抜けた空気がその場を支配する。

だがその時、少年の視線を釘付けにしたのは、そんな人々の好奇の顔では無かった。

「ガ……、ガン、プラ？」

ガンプラだ。

ガンダムのプラモデルである。

今や世界中の少年たちを熱狂させてやまない、あのガンダムのプラモデルである。

男たちの血と、汗と、涙が染み付いた懐かしの修練場。

そこに所狭しと置かれた長机の上には、作りかけのガンプラやニツパーやランナーの類が並び、白帯姿の子供たちが、あるいは作り方の指導を受けたり、あるいは愛機を手本に構えをとったり、思い思いに一時を満喫しているではないか？

畜生。

じわり、と思わず目頭が熱くなる。

ここは空手の道場だろうか？

それどころか、伝統派の老人達を片っ端から叩き潰して押し上がった武闘派集団・三雷会の聖域であるはずだ。

それが何でこんな目に遭わせられねばならないのだ。

「あく、えつと、君、道場の見学希望者かい？」

うるせえ馬鹿。

罵倒と同時に飛び出しかけた右拳を必死で呑み込む。

「……館長に、ヒノ・イズル（日野入竜）に会わせてくれ」

俯いてぎりりと奥歯を噛み締め、かろうじてそれだけを告げる。

「永樂のガキが来た、それだけ言えば伝わるよ」

「……はっ？」

学生と思しき黒帯のどっぴい対応に、ぴしり、と青筋が走る。

そうじゃない、そうじゃないだろ馬鹿が。

他流派の人間が、館長を出せと乗り込んで来たのだ。

目玉を抉るべきだ。

金玉を潰すべきだ。

両手両足を押し折るべきだ。

目玉を抉られる覚悟をしていた。

金玉を潰される覚悟をしていた。

両手両足を押し折られる覚悟をしていた。

目玉を抉るつもりだった。
金玉を潰すつもりだった。

両手両足を押し折ってやるつもりだった。

(構う事はねえ、こっちから始めちまえ)

少年の中の野良犬が言う。

目の前の三下をブチのめす。

慌ててかかってきた黒帯連中を片っ端から叩き潰す。

それで館長が出て来るのか、それとも警察が出て来るのかは分からないが、どっちみち三雷会はお終いだ。

たまたま居合わせたガキどもにはトラウマもんだろうが、それが何だと言うのだ。

俺がアイツらぐらいの年齢には、そう言った世界の厳しさを、親父から徹底的に叩き込まれていたものではないか？

「……り、リオ君？ ナガラ・リオ君かい？」

自分の名を呼ぶか細い声に、ふっ、と狂気が緩む。

「あ、館長、この子がですね……」

「……館長？」

少年、ナガラ・リオが、訝しげな視線を眼前の男に向ける。

中背で痩せ型の、白髪交じりの柔和な顔。

それは記憶にある仇敵の物ではない。

三雷会館長、ヒノ・イズルは全てにおいて太い男であった。

体も、首も、顔も、拳も、声も、そしてその生き方、精神の在り様までも。

その存在の太さで、ただそこに居るだけで周囲を圧迫するような男であった筈だ。

「おお、やはり親父さんの面影がある」

リオの戸惑いを気にも掛けず、男が感極まった声で掌を包み込む。

その温もりが、不意の少年の記憶の糸を引っ張り出す。

父と三雷会の関係が未だ良好であった時代。

確かに今日のような温もりで以って、幼い自分に拳の握り方を教えてくれた人間がいた。

「……ハジメさん？ 肇おじさんかい？」

「覚えていてくれたか。」

ああ、本当に大きくなったな、リオ君」

男が一つ頷いて笑みをこぼす。

そのお人好しの目尻に、きらりと光るものが溢れる。

ぎりり、とリオが必死で奥歯を噛み締める。

（何をしている！ 早くそいつをブツ殺せッ!!）

胸中の野良犬が叫ぶ。

分かっている、分かっているのだ。

自分が望んでいたのは、こんな茶番では無い、と……。

「義兄は、前三雷会代表、ヒノ・イズルは亡くなったよ。

今から五年前、急な脳梗塞で倒れてね」

「……そう、でしたか」

十分後。

通された応接室で、リオは仇敵の死を知らされた。

「それで、君の親父さん。

ナガラ・セイイチロウ（永樂誠一郎）さんは、今はどちらに？」

「死にました」

ためらいがちな問い掛けに対し、にべもなくリオが答える。

ハジメが一つ頷いて嘆息を吐く。

かつて袂を分かった筈の虎の子が、たった一人で訪ねてきたのだ。

その答えは想像に易いものであった。

父の死を口にして、リオもまた自らの愚かさを噛み締めていた。

あの巖のようにそびえ立つ父ですら、死ぬ時はあっさりとした死んだのだ。

いかに全身が生気の塊のような太い男であったとは言え、亡父より十も年長の空手家が、いつまでも健在であろう筈も無い。

「——三雷会は、義兄の存在に拠って成り立っていた組織でした。

その義兄が斃れた後は、本当に色々な事があったよ」
どこか言い訳でもするかのように、ハジメが訥々と昔語りを始める。

その口から出たのは、いつの時代、どこの家でも繰り返される、ありふれた相続争いであった。

全国に幾つもの支部と、万を越す門弟をもつ法人ともなれば、それはもう途轍もない財産だ。

事は綺麗事だけでは済まない。

骨肉の争いだって起こるだろう。

けれど三雷会は営利企業ではない、武道の看板なのだ。

偉大な先達亡き後、身内の醜い争いを見せられたのでは高弟たちもたまった物ではない。

ついてくる部下がいる者なら、自分の流派を起こすだろう。

鴻鵠の志を抱く者なら、別の世界に飛び込むであろう。

武の崇高さに幻滅した者は、当然空手をやめるだろう。

そんなどこの世界でもあるような御家騒動の果てに、三雷会はすっかり牙の抜け落ちた道場となってしまったと言う。

その頃、時を同じくして立ち上がった、立ち技最強の格闘技を決めるトーナメント。

その参戦が致命的となった。

確かに一時的なムーブメントにより道場は息を吹き返したものの、それにより三雷会は、武道ではなく、キックボクシングまがいのルールで勝つための技術に教育を裂く事となる。

そしてTV屋が主導で仕掛ける企画など、所詮は一時的な熱狂に過ぎない。

ブームが去った三雷会に残ったのは、歪な格闘技もどきの流派に過ぎなかったと言う……。

「——武を見世物にするならば、必ずその本質を失う事となる。

セイイチロウさん、いつもそんな風に言ってたっけな」

「それで、ガンプラですか？」

「ああ、それでガンプラだ」

恨みがましい視線を真っ向から受け止めて、ハジメが静かに頷く。「実は最近、子供たちの間で格闘技の習い事が流行っているんだ。何でもガン普拉バトルの大会出場者の中に、格闘技の経験者が多いみたいだね。」

幸いウチの若いものの中にも、そう言うのが好きな奴も多い。

それで週に何度かは、今日のように子供たちにプラモの作り方を教えていると言う訳だ」

「館長、けれどそれでは……」

「……これで良かった、そう私は思っているよ。」

もう、生きるだ死ぬだの、斬った張ったが許される時代じゃない。

どう言っただきっかけであれ、子供たちが武道に触れ、それが少しでも彼らの健全な育成に繋がるのなら、それで十分だと私は思うよ」

そう言い切って、ハジメがじっと少年の手を見つめる。

未発達な体躯に反し、そこだけがみっちり膨らみ、ザラザラと角質化した異形の指先。

人間をぶつ叩くための拳である。

華奢で繊細な指先の骨で人間を叩く事を前提として、巻き藁を突き、砂袋を叩き、幹を叩き、ブロックを叩き、何度も何度も潰しては再生を繰り返してきた空手家の拳である。

その指先が常人のそれに戻るには、きつと、鍛えた時以上の時間を要する事であろう。

「さて、随分と長話につき合わせてしまったね。」

「……いらでそろそろ始めるとしようか?」

「……始める?」

「お父上の代からの因縁の決着、それをつけに来たのでしょうか?」

訝しげなりオの視線に、困ったようにハジメが苦笑する。

「君としては望みが外れた、と言った所だろうが、私もこれで三雷会の代表だ。」

その責任の在り方について、今更逃げるつもりは無いよ」

「ハジメさん……」

リオは静かに俯くと、その内にふへつ、と振れたような笑いをこぼ

して呟いた。

「もう始まつてるよ」

瞬間、ドガツと言う鈍い音を立て、二人の間にあつた木製のテーブルが宙を舞つた。

花瓶と湯飲み茶碗が中空に踊る中、立ち上がる木目の壁が少年の姿をすつぽりと覆い隠す。

ハジメもまた反射的に立ち上がり、半身を取つて左手を差し出していた。

左右に避けるか、或いは押し返すか？

刹那の選択がその身の生死すらも分か――。

「――ッ!？」

バギヤツ、と乾いた音が響き渡つた。

木壁を真つ二つに断ち切つて、分厚い指先が、ぬうつ、とハジメ喉仏に突き付けられる。

間を置かず茶碗が割れ、テーブルの残骸が跳ねる音が室内に反響した。

雷光のような一幕であつた。

ハジメは身動き一つとることすら叶わなかつた。

義兄のような天鬢を持たずとも、数十年間、鍛錬を欠かす事の無かつた男である。

例え虎と称された天才の子が相手であつたとしても、僅かばかりに残つた意地の片鱗くらいは見せられる筈。

そんな執念すら、今となつてはただの耄碌に過ぎなかつたと、ハジメは認める他なかつた。

「……敵討ちだとか、看板だとか、言うんじやないんです」

指先一つで相手を制したまま、虎の子が哭く。

どつと、遅まきにハジメの背から汗が溢れる。

「ただ、親父の正しさを証明してやりたかつた……、一番強い奴の前で」

「リオ君……」

呻くように、かろうじてハジメが少年の名を呼ぶ。

本物だ。

目の前の少年は、未成熟ながらも空手会の猛虎と恐れられた男の遺伝子を継いでいる。

（セイイチロウさん……、なんと、なんと言う事をしてくれたのだ！）
思わず故人への恨み言が胸中にこみ上げる。

これが三十年前であったなら、少年には、その覚悟に相応しい波乱に満ちた生涯が待ち受けていた事であろう。

だがハジメ自身が告げた通り、もはや、そんな時代は遠い過去にか存在しないのだ。

この若年で異形と化すまでに鍛え込んだ指先を隠して、彼にこの先、一体どのような人生を歩めと言うのか？

「帰るよ」

言うと同時に傍らの制服を拾い、クルリとリオが背を向ける。

ハジメが一瞬その指先を伸ばし、しかし結局何も出来ぬままに手を下ろす。

カランコロンと、次第に遠巻きになっていく下駄の音だけが室内に残響していた。

・
・
・
雨。

雨が降っていた。

三雷会のビルを出ると同時に降り出した雨は、強くなる一方だった。

濡れるがままに任せ、少年が空模様を見上げる。

死ぬには良い日であった筈の青空、その爽やかな風はどこにも無い。

強くなり出した雨足を避けるようにアーケードへと逃げ込む。

視線の先に飛び込んできたのは、ややくたびれた玩具屋のテナン

ト。

ズラリと立て掛けられたショーケースには、おそらくは店の常連たちが作ったと思われるガンプラ達が、実に綺麗に並べられていた。

(ここでもガンプラ、か?)

ふへ、つと三たび自嘲がこぼれる。

自分の人生に交わらぬもの、そう斬って捨ててからまだ半日である。

運命の神様と言うものは、よほど無意味な悪戯がお好きなものらしい。

青みがかった瞳が、ガラスの中の作品たちを興味深げに見つめる。

元より、ガンダムは愚か、娯楽らしい娯楽に触れた記憶すら無い少年である。

機体の名前など分からない。

だが、それでも眼前のプラモに込められた、作り手たちの情熱だけは伝わってくる。

原作の再現なのか、意図的にパーツの一部を壊し、その断面までも緻密に作り込んである機体。

女の子らしいシヨツキングピンクに彩られ、思い思いのビーズやリボンであしらわれた機体。

歴戦の兵が搭乗していると思われる、いちいち泥の色で汚された迷彩柄の機体……。

驚くべき事に、それらは全て素人の作品であると言う。

タイトルを見れば、製作者には自分よりも年下の者すらいるではないか。

(世が世なら、俺もこう言った製作者の一人になっていたんだろうか?)

くつくつと、自らの想像力に、一人笑いをこぼす。

改めて、じつと手を見る。

人間をぶっ叩くために、まるで分厚い肉の手袋を纏ったかのようになるまで鍛えた指先である。

この太い指でニツパーを握るのか? ヤスリを掛けるのか?

接着剤を塗り付けるのか？ エアブラシを吹くのか？
今更出来る訳も無い。

「おやあ？ こんな天気にお客さんですか？」

カラン、と入り口のベルを鳴らして、間の抜けた男の声が、横から聞こえてきた。

ヒヨロリと背の高い、丸縁のサングラスにニット帽。

チェック柄のシャツの上に掛けられた『超級堂』のエプロンが、その男の立場を示していた。

「あれれ、もしかしてお客さん、三雷会館の？」

「いや、俺は……」

「まっ、そんな事はどうでも良いんです。

胴着姿でずつと表に立たれてるのもアレですし、少し遊んで言ったらどうですか？」

「遊ぶ……、ってのは？」

「フフ、お客さんはどうも作る方はからっきしのようですからね。

遊ぶと言ったら一つしかないでしょう？」

戸惑うリオに人当たりの良い笑みを浮かべつつ、男がくいとサングラスを持ち上げた。

「そう、ガンプラファイト、ですよ」

「……………」

困ったように、リオがアーケードの外に目を向ける。

降り続ける雨は、しばらくは止む気配を見せないようであった……。

空手家 永樂莉王（ナガラ・リオ）②

階段を下りた先には、存外に広い地下室が広がっていた。

昼間見た三雷会の道場ほどではないが、それでも上のくすんだプラモ屋よりは間違いなく広い。

（……ガン普拉バトルってのは、こんなに広いスペースが必要なものなのか？）

ガン普拉事情に疎いリオが、興味深げに室内の設備を眺める。

中央に置かれた物々しいテーブル、これはまあいい。

このテーブルが戦いの舞台になるのだと、それくらいの知識は持ち合わせている。

気になるのは、その正面に置かれた奇妙なカプセルである。

ゲームセンターなどにある大型筐体よりも、更に二回りばかり大きい、まるで小型の宇宙船でも連想させるようなカプセル。

今日びのガン普拉バトルと言うものは、こんな大げさな設備が必要なのであろうか？

「ウチの店に置いてあるのは、新作ガン普拉バトルのモニターのような設備でしてね」

少年の疑念を汲み取ったかのように、傍らの丸眼鏡が説明を始める。

「ネット回線による遠方のファイターとの対戦を可能にしたテスト品、と言う訳ですよ。」

まあ、何はともあれ、まずは実際に動かしてみるのが一番ですね」
そう言っつて、リオの手に一つのプラモを手渡してきた。

白いガンプラであった。

テレビのように四角い頭部のモニター。

右肩に背負った長めの銃身。

それ以外には、さして特徴と言うほどの特徴も見当たらない。

その潔さが、却って量産型のスタンダードと言った雰囲気醸し出している。

今、このタイミングで渡されなければ、それがガンダムシリーズの

ロボットである事にすら気付かなかったかもしれない。

「こいつは？」

「新機動戦記ガンダムWに登場する、ACの量産型モビルスーツ第一号『リーオー』ですよ。」

本来はモスグリーンを基調とする色合いなのですが、これはちよつと特別製でしてね」

「なんつーか、その、所謂ガンダム、じゃあ無いんだな？」

「まるでやられメカみたい、ですか？」

ふふ、けれど作りがシンプルな分だけ、初心者には扱い易い機体ですよ。

それにガンプラの強さは、劇中の性能に左右されませんから」

「ふーん」

さしたる感慨もなく、自分と同じ名を持つプラモを手に取りカプセルへと乗り込む。

丸眼鏡に促されるままに機体を据え、球形のコントローラーへと両手を伸ばす。

「さて、それでは早速始めましょうか」

男の声に合わせ、ブウウウンと言う振動音が機内に広がり、内壁が砂の嵐を刻み始める。

「行きますよオー。」

ガンプラファイトオツ！ レディー……、ゴオオ——ツ!!」

「……ッ！」

掛け声と同時に、突如、肺腑を持ち上げるような強烈なGがリオを襲った。

驚く間もなく周囲の壁が広大な蒼天を映し出し、その全身が中空へと投げ出される。

「くうっ！」

ズンと機体が一つ揺れ、モニターの先でリーオーが荒々しく大地に降り立つ。

大きく息をついて周囲を見渡す。

全周囲モニター、視線の先に広がるのは、どこまでも広大な荒野で

あった。

ひゆう、と一つ口笛を吹く。

成程、この臨場感、世の少年少女が夢中になるのも分かつとう言うものだ。

「これが、ガンプラを戦わせるフィールド、つてえワケかい？」

「ええ、そして御覧なさい。」

あなたの相手の方も到着したようですよ」

男に言われ、リオが遙か上空へとモニターを動かす。

視線の先に映し出されたのは、何やらずんぐりむつくりとした、三体の機影であった。

「練習用プログラム機体『ハイモック』です。」

さて、まずはそちらのドーバーガンを試して見て下さい」

「これか？」

言われるままに右肩の銃口を構え、ぶっきらぼうに撃ち放つ。

反動でリーオーが勢い良く引っくり返り、銃弾が明後日の方向へとすつ飛んで行く。

「ハハハ、いきなりそんなぶつ放したって駄目ですよ。」

しっかりと構えて十分に狙いを絞って撃たなきゃ」

「糞！」

短く舌打ちして、不格好に腰を落として銃を構え直す。

間を置いて第二射、第三射。

だが砲身は大きく跳ね、照準のブレた銃弾は掠めもせずには彼方へ消えるばかりである。

「おい、なんだこの大雑把な銃は？ 使い辛いにもほどがあるだろ」

「それが良いんですよ、それが。」

一番最初に扱いにくい武器をマスターしておけば、他の兵器も楽勝で使えるところで」

「適当な事を言いやがって」

ぎりぎりと、じれるように奥歯を噛み締める。

元々リオは病的と言うべき程の肉体信奉者である。

ラジコンのように指先で銃口を操る事自体、その本分ではないの

だ。

(……ラジコン、か)

ふっ、と囊中に沸いた悪戯を実行に移すべく、右肩のドーバーガンをあつさり打ち捨てる。

「おやおや、どうしました？　もう降参ですか？」

外野を無視して指先を操り、すつとリーオーの腰を落とす。

スタンスを開けて半身を取り、開いた左掌を緩やかに差し出し、右拳はぴたりと脇へと添える。

「ほう……」

「セイツー！」

咆哮と共に腰、肩を連動させ、右拳を一直線に正面へと捻じり込む。

ブオン、と言う拳圧が巻き起こり、空手で言う所の正拳が、空気の壁をピシヤリと叩く。

「ハァー！」

ビリビリと確かな手応えを感じながら、返す刀で左の正拳。

更にくると踵を返し、後方に向け左の上段蹴りを打ち放つ。

しかし、さすがにそれは無理があつたのが、重心を崩したリーオーの体がグラリと揺らぐ。

「……つとと、成程成程」

咄嗟に体勢を立て直しながら、肉体信奉者が不敵に笑う。

馴染んだ空手の動きを表演した上で、分かった事が幾つかあつた。

まず第一に意識するべきは、機体の重心である。

生身の体ならば気付きもしない重心の働きを理解する事で、機体は更にイメージに近い動作を可能とする。

加えて気付いた事がもう一つ。

この機体、リーオーの基本性能の高さだ。

重心のバランス取りが良く、関節の稼働域も驚くほどに広い。

丸眼鏡の言った『特別な機体』の一端が少しだけ理解できた。

先程は体勢を崩したものの、習熟すれば大概の武術家の動きを卜レース出来る事であろう。

「ふふ、自主練も結構ですが、敵さんは待つてはくれませんよう。」

「ムッ」

男の言葉に従うかのように、大地に降り立ったハイモックが周囲を取り囲む。

リーオーはやや内股気味に構え、油断なく両掌を前方に構える。

「ケイアッー」

殺気は後方。

後の先を取ってリーオーが動いた。

上体を大きく逸らしながら、横薙ぎの後ろ回し蹴り。

戦槌のような踵の一撃が、丸っこいモックの頭部を大きくひしゃげさせる。

同時に動き出した一体の懐に潜り込み、鳩尾を左掌底で突き上げる。

ボゴン、と大きな音がして、くの字に折れた巨体がバーニアも無しに宙に踊る。

慌てて迫る最後の一体目がけ、振り向きざまに裏拳の一撃。

振り切れた頭部が跳ね上がり、ヒートホークをかざしたまま、首なしMSが大地に両膝を突く。

(……見たか！)

ヒュウウウ——、と大きく息を吐き出し、リオが会心の笑みを浮かべる。

長年己に課してきた過酷な修練は伊達では無い。

コツさえ掴めば、こんなゲームで早々遅れを取る事など……。

「……何をやっているんだ、俺は？」

ふっ、と急速にリオの中から情熱が引いて行く。

長年かけて己が肉体を凶器へと作り変えてきたのは、こんなゲームに勝利するためだったのか？

十円玉を折り畳める指だ。

土管に風穴を開ける拳だ。

角材を切り裂く手刀だ。

そんな血反吐を吐くまでの修練で磨き上げた力を、プログラムの玩具相手に振るってご満悦か？

パチパチパチ、と。

少年の胸中も知らず、プラモ屋が感服したように拍手を送る。

「いやいや、お見事お見事。」

その黒帯も決して伊達では無かった、と言う訳ですね?」

「……………」

「おや、どうかなさいましたか? 次の相手はもう少し骨のある奴ですよ」

「…………いや、俺は」

「そんなつれない事は言わず、もう少しだけ付き合ってくださいよ。きつとあなたも気に入る趣向のハズですよ。」

…………ねえ、ナガラ・リオ君?」

「——ツ!?!」

不意に浴びせられた殺気と同時に、リオの肉体が突如拘束された。ゆっくりと上空から降りてきた灰色のリング。

それが肉体を通過する際に、みちみちとしたゴムのような感触が、未熟な少年の肉を締め上げ、骨に至るまで軋みを上げさせる。

「ぐおっ!?! う、うおおああっ!!」

全身をアナコンダに締め付けられているような強烈な圧迫感。

必死で全身を強張らせている内に、不意にスパン、と言う弾けた音と共に拘束が緩んだ。

大きく息を吐いて全身を見つめる。

いつの間にかリオは、まるでゴムのような黒色のスーツでその全身を覆われていた。

「ふむ、ファイティング・スーツの着用の方も、どうやら問題は無いようですね」

「フザけんじゃねえ!」

こんなモンを俺に着せてどうしようってんだツ!」

激情のままに、リオが右腕を真横に振るう。

瞬間、画面外のリーオーがシンクロするかのようにブオンと右腕を伸ばした。

「…………ツ な、なんだ!?!」

「これぞ、ガンプラ・トレース・システム。

と言っても、アナザーガンダムを知らない君には訳が分からないでしょうが。

とにかく今、君の肉体はそのスーツを通じて、画面上のリーオーと一体化しているのですよ」

「ハーン！」

それでこのリーオーとやらに空手でもさせようってえのか？

えらく手の込んだ仕事をするじゃねえか？」

「お喋りはその位にしておきなさい。

勝負の場で余計な事を喋っていると、命を落としますよ？」

「!？」

不意に彼方よりの風切り音を耳にして、反射的にリオが、リーオーが真横に跳んだ。

間をおかず爆音が轟き、旋風が少年の頬をビリビリと撫でる。

飛散した礫の一つがリーオーの額を掠め、同時に少年のこめかみに赤い筋を描く。

「痛ウ……、こいつはどう言う」

「リーオーと一体化している、と、確かに伝えたはずですよ。

リーオーが戦闘で負ったダメージは、当然キミの肉体の方にもフィードバックされる」

「……んだとオ？」

「尤も、致命傷に至るダメージは遮断できるようシステムを調整しているのですが……。

ふふっ、何せテスト中のマシンなのでね、保障は出来ません」

「サド公め、俺は実験用の鼠ってか」

噛み付いてやる。

その瞳に危うい輝きの炎を宿して、少年が土埃の彼方を睨み付ける。

土煙の先でモノアイが真紅に煌き、直後、黒塗りの巨体がズワツと少年の前に飛び出して来た。

『MS-09『ドム』。』

熱核ジェットによるホバー走行の採用で、重装甲、高機動を実現したツイマッド社の名機です。

さて、そのリーオーでどう捌きますか？」

「くうっ」

「ひへへへっ！ 受けてみなア空手ボーイ!!」

下卑た笑いを響かせて、両手に鉄鞭を携えたモヒカン頭のドムが高速で迫る。

太く、重厚な鈍色の鉄腕。

右と左、どちらの一撃をマトモに受けても致命傷は免れない。

咄嗟にリオが真横に跳んで、敵機との接触を避ける。

「ぴゃほほオー！」

「ぐ、ぐオ!?!」

間を置かず首筋に絡み付いてきた鎖分銅に、リオは己のミスを悟った。

敵は一体では無かったのだ。

三機のドムを一行に走行させ、先頭の動きに対応して後衛の二人が仕留める。

初めから敵は、こちらとまともなケンカをするつもりなど無かったのだ。

不明を恥じる間もなくその身を引きずられ、リーオーのボディが荒野を転がる。

「デカしたぜえ、柎！ そいつを放すなや」

「ぴゃほほっ！」

「グへへ、J・S・Aも知らねえとは、とことん素人のボウヤだなア！」

「グオアアアアアッ!!」

容赦なく挟られる背中が灼けるように熱を持ち、首筋の締め付けが呼吸を奪う。

揺らめく少年の視界の先で、赤熱化した大上段の青竜刀が光を放つ。

「オオッ！」

リオが短く呻き、同時に振り下ろした右の踵で、思い切り大地を打ちつけた。

リーオーは煽られた風のようにならずに不自然にバウンドし、瞬間、必殺の一撃がかりうじて空を切る。

直後、ガンプラのボディが強かに岩肌に打ち付けられ、首筋の鎖が漸く外れた。

「カハッ！」

機体とのリンクがもたらす背面の痛撃に、思わず息が詰まる。

全身がバラバラになるかのような激痛。

だが、失態の代償と言うのはこうでなくてはならない。

「あのボウズ、中々味な避け方をするでねえの！」

「輝さん、柘、もう一度J・S・Aを仕掛けんぜ！」

「ぴゃっほう」

彼方から聞こえる嘲笑の聲が、少年の怒りのボルテージを引き上げる。

許せないのはアイツらではない。

下らない罠にハマてくれたプラモ屋でもない。

そんな下らぬ誘いに引つ掛かり、ゴロ付き相手に辛酸を嘗めさせられている自分自身だ。

常在戦場。

戈を止むと書いて「武」。

例え暴漢に襲われようが、猛獣と出くわそうが、空からミサイルが降って来ようが、凶器と化すまでに磨きぬいた五体を頼りに生き抜けるのが、亡父より学んだ空手であった筈なのだ。

それが下らない感傷に流され、所詮はゲームと油断した挙句、愚にもつかない三下相手に酷い手傷を負わされている。

「うおおああああああアアア——ツ!!」

少年が叫ぶ。

叫んで叫んで叫びつくして、愚かで弱い自分などこの体から出て行けと。

下らぬ感傷が空っぽになるまで吼え尽くし、少年の中の獣がくつく

つと笑いをこぼす。

よくぞやってくれた！

よくもやってくれた！

この虚しくも平和な世界で、よくぞこれまで、暴力を貫いて生きて
いてくれた、と。

「来やがれエ、三下ども！ 本物の空手屋をタダで殺れると思うな
よッ!!」

ナガラ・リオが吼えた。

無表情のテレビ顔の下で、野獣が嗤っていた。

・
・
・

——PRRRR、PRRRR

モニター上の惨劇から視線を話さぬまま、丸眼鏡が携帯を耳元へと
寄せる。

「——やあキミコ君、中継の首尾は如何ですか」

『ハツハハ、通信の方は問題ないけどね、視聴者の反応はさっぱりだ』
スピーカーの先で「キミコ」と呼ばれた女性が快活に悲観の声を上
げる。

『旦那の眼力を疑うつもりは無いけどさ、あの少年、本当に大丈夫かい
？

向こうの惨煉^{さんれんせい}とか言うのだから、元は小火^{ポヤージ}鯨組の代打ちなんだら
う。

いくら技量の差を埋めるためのガンブラ・トレース・システムと
言ったって、素人には荷が勝ち過ぎる相手だろうに』

「ええ、私も今、それを懸念していた所なんですよ」

丸眼鏡はそう言って大袈裟に肩を落とす、しかる後、不敵な笑みを
浮かべて呟いた。

「ふふ、『孤高の虎』ナガラ・セイイチロウの忘れ形見がここまでは、
ね。

ヤクザ崩れの素人如きが相手じゃ、そりゃあ、お話になりませんよ

ねえ……?」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ——ツ!!」

リオが吠える!

吠えながら駆け、駆けながら吠える。

獲物を捉えた餓死寸前の猟犬のように、両眼に爛々とした煌めきを燃やす。

「何だア——? アイツ真正面から、とんだ素人だぜ!!」

「弾き殺されてえのかよ、このドムの重甲を相手によ!」

「ぴやは!」

下卑た嬌声を上げ、モヒカンの列が鮮やかに機体を翻す。

その鼻先目がけ、脇目も振らずに野良犬が駆ける。

「ヒイヤツハアーツ 望み通り脳天カチ割ってやらアよオ!!」

「ヌリヤアアアアアアアア——ツ!!」

先頭のモヒカンが威勢良く鉄鞭を振るう。

それを目の当たりにしながらも、尚もリオが狂ったかのように速度を上げる。

「……………ツ!?!」

「キエエアアアアアアアアアア——ツ!!」

リオは完全に狂っていた。

ぐるぐると両目を狂喜に滾らせ、凄まじいばかりの全力疾走でドムの元へと迫る。

狂奔。

脳天をブチ砕かれ、そのまま正面衝突してミンチになるのも厭わぬほどの全力疾走。

ぞくり、とモヒカンの背に冷たい物が走り、そのスピードが一瞬緩む。

(勝ったツ!!)

直後、前蹴り、一閃。

ズゴン!

砲撃でも受けたような轟音を上げ、くの字に折れたドムの巨体が後続とクラツシユする。

「トーシロがアツ!!」

無表情のモニター顔に野獣の笑みを宿し、氣勢を吐いてリーオーが疾る。

軽量の量産機がドムの重装甲を吹っ飛ばす大理不尽。

だがそんなものは、技巧でも無ければ理合でも無い。

速度を伴わぬホバー走行のMSなど、宙吊りにされたサンドバッグも同然なのだから。

「キャラアツ」

「う、うおああああ!？」

「あ、兄貴イイイ——ツ!？」

叫びと同時に右のミドル。

パアンと黒い胸甲が跳ね、人形のようにドムが躍る。

(見たか、見たかよッ！)

更に勢い良く踏み込んで左の掌底。

後衛とサンドイツチにされた重MSに逃げ場は無い。

何がジエツトストリームなんだ。

内心でハツ、と吐き捨てる。

そんなモンは、相手をビビらせ道を開けさせるだけのヤクザの喧嘩に他ならない。

三人がかりの利を、一対一×3に変える大悪手。

一たび攻めの枕を抑えられたならば、後は勝手に自滅するのみではないか？

仲間が三人居たならば、即座に囲んで棒で叩け。

そう言った意味では、先ほどの機械人形の方が余程実戦を理解していた。

本物の武術と言うは、残酷で情け容赦のない概念なのだ。

吠えながら殴り、殴りながら踏み込み、踏み込みながら蹴り上げ、よろめく相手に額を押し付けながら叩いて叩いてなお焚き付ける！

『うつひゃあ!? ドム三機を真つ向から押し込んじゃうのかよ!!』

あの少年、心臓にスーパーバーニアでも積んでるのかい!？」

電話口から伝わる興奮の声に、にい、と丸眼鏡が笑みを浮かべる。

「プラフスキー粒子の発見より幾星霜——」。

己が愛機を自由に動かしたい、と言う子供達の願望は、ガンプラバトルの形で実現しました。

……ですが、本当の意味でガンプラを手足のように動かせるファイターと言うのは、果たしてプロの連中の中にもどれだけいる事でしょうねえ？」

カツと両目を開き、諸手を挙げて丸眼鏡が叫ぶ。

「私は見たい！」

ドモン・カツシユを！ 東方先生を！ アレンビー・ビアズリーを！

競技と死合いの狭間で、骨を軋ませ血を吐きながら肉をぶつけあう彼らの姿をツ!!

あの少年が、そしてガンプラ・トレース・システムが、それを現実の形にするのですよ！」

「ごんのオツ ヤクザをナメンな！ 小僧ツ!!」

モヒカンが雄叫びを上げ、スクラップと化した胸甲からビーム砲のハッチを開く。

(有難うよー)

短く呟き、ためらいもせず右の貫手を捻じり込む。

リーオーの手首が深々とめり込み、バチンと火花を散らす。

ガクガクと痙攣する頭部にダメ押し飛び膝。

更にモヒカンを踏付け、勢いのままに若き獅子が跳ぶ。

「ぴゃつ！ ぴゃほわアアアツ!!」

たちまち飛んできた分銅が機体の頭部を掠め、同時にリオの額に鮮血が走る。

ぬるりとした体温を鼻筋に感じ、少年が嗤う。

言語が不自由な次男坊だが、こいつが一番筋が良い。

「オオッ！」

高さをそのまま速度に変えて、渾身の踵を次男坊の脳天に叩きつける。

ボゴンと頭部が胸板にめり込み、一撃でドムが大地に沈む。

その有様を目の当たりにしながら、尚もゆつくりとリーオーが右足を上げる。

踵。

踵。

踵。

踵。

踵。

人間機械問わず、二足歩行の個体にとって、最も強固な踵の部位。

それを無抵抗のプラモに目掛け、振り上げては打ち降ろし、叩きつけては振り上げる。

「やッ、やめねエかボケ!? 決着はもうついてんだろうがッ!!」

ボケはお前だ、とつととかかかって来い。

ヒート青竜刀を携えたラスイチを気にも止めず、リーオーがひたすらに踏む、踏む、踏む。

敵がやっているのは、あくまで通常のガンプラバトル。

ぶつかり合った際の反射、機体のリアクションを見れば一発で分かる。

遊びのバトルゆえ、リオがどれだけ必死で踏んだ所で、肉体にダメージを負う事は無いだろう。

だが、だからこそ、足もとの木偶は徹底的に破壊せねばならない。肉体に痛みが残らずとも、今日の事を思い出すだけで心が壊れてしまうほどに。

空手屋に喧嘩を売った愚かさを、骨身に刻むまで踏まねばならない。

「やアめろおおおおおおオオオ!!!」

悲痛な叫び声を響かせて、大上段の青竜刀がリーオーを襲う。

彪——つと軽く息を吐いて、リオが右手を横一文字に滑らせる。

ビギン、と言う鈍い交錯。

「……ッ!?」

声も無く、最後のモヒカンがよろりと揺らめく。

根本よりばつかり断ち切られ、随分と短くなってしまった右手の凶器。

その弾け飛んだ片割れが、今、どつかと大地に突き刺さった。

「丹田……」

ぼそりとリオが呟き、風を巻いて下腹部への一撃!

ズンツ、と言う重い衝撃と共に前かがみとなるドム。

そのスカートを、空手屋の握力が強引に耒り取る。

「金的!」

鋭い前蹴りが股間を捉え、ピン、と爪先立ちになったドムの機体が跳ねる。

「水月! 秘中! 人中!」

懐に潜り込んだリーオーの連打が、正中線を真っ直ぐに駆け上げる。

MSに無論、径穴^{ツボ}などと言う概念は無い。

だが、それがどうしたと言わんばかりの丁寧な拳。

最後に顔面を捉えた一撃が、遂に単眼を突き破り、ドウツとばかりにドムが倒れ込んだ。

今度は油断はない。

素早く拳を返し、リーオーがゆるりと残心を取った。

——ワアアアアア、と言う割れんばかりの歓声が、少年の耳に響いてきた。

「ムツ」

「移ろい行く風景を前に、油断なくリオが周囲を見渡す。

全周囲モニターが一瞬、砂の嵐を映し出し、やがて闘いの舞台はアリーナへと変わっていく。

網膜にまで焼き付くようなスポットライトの白色。

その下に照らし出された正方形のマットに、周囲を取り囲む赤色のロープ。

そしてビリビリと肌を叩く、バーチャルにしては、どこか憑かれたような観客たちの熱狂。

「やあやあお見事！ さすがに虎の子は見せてくれますねえ」

「……テメエ」

キツと刺し貫くような視線を、ホール上段のオーロラビジョンに向けてる。

そこに映し出されたのは、上等なスーツの上からロングコートを肩で羽織った、件の丸眼鏡の姿であった。

「お前、ただのプラモ屋じゃあねえな？」

「私の名は李……、リー・ユンファ（李 潤發）！

キミを今宵、最高の地獄にスカウトしに来た者ですよ」

「地獄？」

ペツとリオが吐き捨てる。

「こんなまやかしの観衆が何だつて言うんだい」

「フフ、この映像は偽物にして偽物ではありません。

先ほどの闘いの始終はネットを通し、世界中の格闘オタクが観戦しておりました。

この観衆の熱狂は、彼らユーザーのリアクションを直に反映した結果なのですよ」

ピシリ、とリーが指先を突き付ける。

「分かりますか、ナガラ・リオ君！

今や野に伏せた世界中の格闘ファンが、君のこれからのファイトに期待しているのです！」

両手を広げるリーの仕草に合わせ、オオオオオオ、と会場全体が鳴動する。

そんな熱狂に反比例するように、灼けた鉄が醒めていくのをリオは皮膚で感じていた。

「……勝手にやっつてろや、俺は帰るぜ」

「おやおやあ、つれないですねえ〜？」

今までずっと出待ちしていた『彼』の気持ちを汲んであげてもいいじゃないですか？」

「……ッ!？」

ふっ、と不意に頭上に影が差す。

ぞくりと背筋が震え、本能のままにリオがコーナーへと飛び退く。

——ドワオツ!!

直後、凄まじい爆音がリング中央で炸裂し、衝撃波がビリビリと会場全体を共鳴させた。

「っ、っいつあ……い！」

思わずリオが息を呑む。

黒い、山であった。

空気が静止した時、リング中央に、黒く大きな塊が深々とめり込んでいるのを、少年は見た。

と、不意に真紅の両眼が瞬いて、漆黒の巨体がぬうつ、と動いた。

それは、黒く、太いガンダムであった。

金色に輝くV字のアンテナ。

赤色に光る双のカメラアイ。

その顔面の特徴だけが、かろうじてガンダムと呼べる名残を残す。黒色を基調としたマツシヴなボディ。

頭部よりも大きく蔽つい球形の両肩。

追加装甲でも纏ったかのように武骨に膨れた手足。

大胸筋、後背筋の発達を想起させる逆三角形の重装甲。

スカートアーマーは無く、股関節は悪趣味なビキニパンツのように金色に輝く。

まさしくそれは、男と言う生物をそのまま鋳型に閉じ込め熱したか

ような、黒く、太く、逞しいガンダムであった。

むわっとした野生を感じ取った野良犬が、少年の軀をぶるりと震わす。

「レデイー——スツ エ——ンドツ ジェントルメエ——
ンツ

只今より、ガンプライフイト・セミファイナルを開始致しますツツ
!!!」

純白の翼を広げたMS少女がホールに踊り、民衆にバカげた一夜の
始まりを告げる。

「赤ア——コオナアア——!!」

188センチ257パウンド、元・超日本プロレス所属、『人間モビ
ルアーマー』

ビグウ——ザムウ——ゴウウ——ダアアア——ツ!!

使用機体ツ AGE1タイタスウ……【NOAH】ツツ!!!」

フリーレスラー『ビグザム剛田（ゴウダ）』

——ファン曰く『日本のパウンド・フォー・パウンド』

——ファン曰く『若手の壁を強いられている男』

——ファン曰く『ビグザムだけはガチ』

——ファン曰く『ELSが相手でもプロレスが出来る男』

たまらぬレスラーの登場に、ドウツ、と一つ会場が震えた……。

プロレスラー ビグザム剛田（ゴウダ）

ビグザム剛田。

タフな男である。

耐える、吠える、投げる。

それだけしか知らない男である。

パフォーマンスに秀でた同期がいた。

空中殺法を得意とする同期がいた。

グラウンドに長けた同期がいた。

何でもできる同期がいた。

ただひたすらに耐えて、吠えて、投げる。

魑魅魍魎が集う黄金期の超日本プロレスを、その三つだけで生き延びてきた男であった。

ガンダムAGEI『タイタス』

タフな機体である。

しかし、不遇な機体ではあつた。

脚本は、僚機の見せ場を求めていた。

演出は、Xラウンダーを生かせるスピードを欲していた。

考証は、彼に空戦の機会を与えなかつた。

ただ悪戯好きのモデラーたちだけが、そのベビーに不釣り合いな、彼の武骨な手足を愛した。

結果、タイタスはタフな機体としてではなく、魔法少女用のタフな換装パーツとして、一部の数寄者たちの記憶に残る所となつた。

「赤ア——コオナアア——!!

188センチ257ポンド、元・超日本プロレス所属、『人間モビルアーマー』

ビグウ——ザムウ——ゴウウ——ダアアア——ツ!!

使用機体ツ AGEIタイタスウ……【NOAH】ツツ!!!

MS少女のアナウンスに、会場が震えていた。

観客たちは直感していた。

最もタフなプロレスラーに、最もタフなガンダム。時代に愛されなかった二つのタフ。

それらが出会った時、「とてつもない事が起こる」と……。

「青オ——コオナアア——!!」

165センチ164ポンド、『Gate of Leo』

ナガラア——リイ——オオオ——ウツ!!

使用機体ツ プロオトオ——ツリイ——オオオ——ツ!!!

アナウンスと同時に、熱狂が少年の肌を叩きつける。

頭を軽く振り、大きく一つ息を吐く。

武とは揺るぎないもの、武とは迷わぬもの、武とは躊躇わぬもの。

今日、この時に至るまで繰り返して来た失態を、二度と犯したくはなかった。

「無理しなくても良いんだぜ、厭なら家に帰ったつてよオ」

会場の熱気に片手で応えながら、飄々とタイタスの中の『彼』が言う。

「お前ら空手の先生たちは、みーんなそんな感じよ。

どれだけ金を積もうとも、超日本のリングにや上がってくれねえ。

無理もねえ話さ。

何せマットの上じゃあ、俺らとハンデが付きすぎるからあな」

そう言つて、マスクの内側でいっと啗う。

つられたリオもくつくつと啗う。

流石プロレスラー、良い空気を作ってくれる。

「概ね同意するよ。

けどよオ、親父の教えはちよつとだけ違つたぜ」

「ほう?」

「空手は標だ。

男が一匹、誇りを貫いて生きるための手段だ。

その道先に気に入らねえヤツがいたら、片っ端からぶつ潰しちまえ

……つてなア!!」

「——ツ!?!」

ゴウダが後背の観衆に手を振つた一瞬。

その瞬間に、リオはマットを蹴っていた。

「オオオッ!!」

振り向く巨漢の眉間を目掛け、リオが拳を突き上げる。空手家の拳では無い。

目ざとく鎖分銅を巻き付けていた即席の鈍器。

ビギン、と言う鈍い音がして、タイタスの巨体が仰向けに跳ね上がる。

「空手小僧が突っかけやがった!」

「眉間直撃じゃねえか!」

「ブツ殺せエゴウダア——ッ」

「構いません、このままゴングを——」

リーの一声に頷いて、MS少女が高らかとゴングを鳴らす。

その残響も消えぬ内に、リオが渾身の前蹴りを繰り出す。

「——ヌッ!」

爪先が深々と腹部にめり込んだ瞬間、リオが違和感に気づいた。

例えるならば、極限まで圧縮したゴム。

分厚い鋼の装甲の内側に、高反発の肉がみっちり収められているのが、蹴り足の感触から十二分に伝わってくる。

「フン!」

ゴウダが腹筋を張る。

太いゴムがたちまち巨岩と化して膨張し、リーオーの体が一瞬泳ぐ。

「なんとオー!?! 空手家の前蹴りを腹筋だけで押し返したア!!」

ざわめく観衆をひらひらと片手で制し、おどけた仕草でタイタスが嗤う。

「おーおう、ちちっ!」

へへ、良い親父さんじゃあねえかよ?

こりやあ一緒にうまい酒が呑めそうだなあ、おい」

「——!・もう、いねえよッ!!」

短く吐き捨て、手にした分銅を力一杯に投げつける。

悠々と上体を逸らしてタイタスが避ける。

その間隙を縫って、一足飛びでリオが懐に飛び込む。
肝臓。

(――違う)
短い舌打ち。

まるで大型重機用のゴムタイヤでもブツ叩いたかのような反動が、
急所への浸透を阻む。

腎臓。

(これも違う)
矛が通らない。

まるで粘り強い岩石でも打つかのような徒労感。
胸骨。

(これも)
比較的、肉の薄いはずの胸元。

そこへの打撃すらも大胸筋の壁に阻まれる。

「ほうらよッー」
恐ろしく気軽に繰り出されたタイタスの右膝。

すかさず左脚を引いて距離を取り、リーオーが標的へと照準を合わせ
せる。

「セイヤ」

「グオー！ ……痛うッ!!」

巨漢の泣き所、膝頭への下段突き。

ガツンと言う確かな手応えと共に、タイタスの巨体がグラリと揺ら
ぐ。

(ンーン！)
斜めに傾いだタイタスのこめかみ、リーオーがたちまち体を躍らせ
る。

風を卷いた竜巻の如き上段蹴りがタイタスの頭部を強かに打ち抜
く。

「……！」
いや、打ち抜、打ち抜けない。

腕力の三倍の威力を持つ筈の脚が、プロレスラーの太い頸に阻まれ
ている。

(そうか、こいつ……！)

ようやくカラクリに気が付いた。

タイタス外見上の最大の特徴である、球形の両肩。

頭部よりデカイ肩甲骨をピタリと左頬に当て、瞬間、頸を支えるストッパーとしたのだ。

ガンプラだからこそ、そしてプロレスラーだからこそ出来る、打たせる事前前提の防御法。

「サービスタイム終了だ」

凄まじいばかりの膂力に引き寄せられ、たちまちリオが重力を失う。

観客席が反転し、網膜に眩いばかりのスポットライトが突き刺さる。

「どっセイリヤアツ!!」

急速にマットに叩きつけられ、リーオーの体が大きくなるのけぞる。

全身が痺れ、息がつまり、チカチカと視界が煌く。

シンプルにして至高、プロレスラーのボディスラム。

「あ……ア……」

「へへっ、マットの上で良かったなア空手屋よオ!!」

怪しげに輝くスポットライトの世界。

そこに突如、ぬうっと死の影が差す。

知っている、ダメ押し、ギロチンドロップ。

必死に転がり、逃げる、避ける。

ドン、と一つマットが揺れる。

「まだまだアー！」

かろうじて起き上がった先に、横薙ぎの一撃。

これも古典、逆水平チョップ。

技術もへつたくれも無い渾身のフルスイング。

だが完璧なタイミング。

避けようが無い、両腕で受ける。

——ベツチイイイツ!!

乾いた音を響かせ両腕が爆ぜる。

ガードの上から体が浮いて、息が詰まる。
驚愕する。

タイタスはもう動き出している。

飛ぶ。

飛ぶのか？

あの巨体が、真横に――。

「~~~~~ッ!!」

お約束、ドロップキック。

両手のブロックを挟み開けて、巨大な靴底が顔面を捉える。
ぐちより、と鼻の粘膜が悲鳴を上げる。

空飛ぶ116キロ。

支えられない、ぶっ飛ぶ、背中にポスト、痛烈。

ゴウダが走る。

コーナー、逃げられない、ショルダー、めり込む、沈む。

ふっ、と圧迫が緩み、体が前方に揺らぐ。

がしり、と豪腕が後頭部を掴む。

「死ぬなよ小僧」

心の底から心配そうな、ゴウダの小声。

(無茶言ってくる)

思う間もなくブン投げられる、走る、走る。

前方にロープ、存外硬い、揺らぐ、よろめく。

タイタスが走る、全力疾走、迫る。

これも知っている。

よく馬鹿にした、片手を伸ばして、ただ走るだけ。

『――己が鍛えた技を見世物にするなら、その瞬間に武術は死ぬ。』

死んだ技、死んだ攻撃など、本身の前では恐るるに足りん――』

「クソ親父……」

ポツリ、知らず悪態がこぼれる。

プロレスラーが腕を伸ばして走ってくる。

それはもう兵器。

(強エじゃねえか！ プロレ――)

「フ、ノンビームラリアート、炸裂う〜〜ッ!?

リオ選手の体が、空中で半回転したアアア——ッ!!」

凄惨なる光景の前に、海千山千の観衆たちがオオオオオ、とざわめく。

武術に幻想を持ち過ぎていた。

本当は誰もが気が付いていた。

体重差も気にせずにバトルを組めば、こう言った結末が待ち受けていると。

「へえ……」

会場の空気が冷え込む中、ただ一人、当のゴウダ本人のみが、目を丸くして感嘆の声を上げる。

「ますます気に入ったぜ。

空手なんかやめてプロレスやろうぜ、なあ小僧」

ゴウダの声に呼応して、プルプルと生まれたての小鹿のようにリーオーが立ち上がる。

「なんとおオオオ——ッ!?

立ち上がる！ 少年！ 何と言うド根性!?!」

わっ、と再び会場が沸く中、にへっとゴウダが笑みを浮かべる。

「そりゃあ立ち上がれるだろうよ。

自分から回転して、俺のラリアートを完全に殺してくれたんだからなあ」

ゆっくりとタイタスが右腕を伸ばす。

太い腕が防御を容易くすり抜け、リーオーの首筋を捕え、その身を宙に高々と吊り上げる。

「ぐがッ」

「へっへ、だがどうする小僧?」

「ここらで看板にしとくか」

「ネ、ネッグハンギングツリー? しかも片腕!

なんとという光景！

体格の差とは、これほどまでに無慈悲な物なのか——ツ!?」
MS少女の悲痛な声。

それは観衆たちの叫びの代弁でもある。
彼らはみな、それなりの格闘技通だ。

階級の差が絶対である事を誰もが知っている。
知っているからこそ見たいのだ。

窮鼠が猫を噛む、その瞬間の輝きを。

「……………あ、が、ぎ……………」

声にもならぬ呻きを漏らし、リーオーが必死で体を振じらせ、絡みつく手首を握り締める。

余りにも淡い最後の抵抗。

——瞬間、ビギン、と言う鈍い音。

首が折れたか？

シン、と会場が静まり返る。

「おっ！ おおおおっ!」

だが、驚きの声を上げたのはゴウダの方だった。

間断いれず、右の前蹴り。

高らか伸びた爪先がタイタスの顎をハネ上げ、ようやくリオが脱出に成功する。

「ハア……………！ ハアツ ハアツ!」

「こ、小僧、お前……………」

狼狽の声を漏らしながら、そつとタイタスが右手をかざす。

中指が、あらぬ方向に捻じ曲がっていた。

「お前一体、何をしたア——ツ!!」

「…………ツ」

両手を突き出し、野獣のようにタイタスが迫る。

ギラリと獲物を睨み据え、リーオーもまた両手をかざす。

パン、と言う乾いた音がリングの中央で炸裂する。

手四つ。

男比べ。

両者の力が一時的に釣り合い、二機のMSがライトの下で静止する。

「うおっ、うおおおおおおオオ——ッ!!」

驚くべき事に、先に悲鳴を上げたのはゴウダの方であった。

チビがデカブツをパワーで圧倒する。

あまりにもファンタステイックな光景に、観衆が再びどつ、と沸き返る。

同時に皆が状況に気が付いた。

絡み合わせた四つの掌、そのタイタスの指先だけが、パキパキと乾いた音を立て始めている。

「握力！ それも指先のピンチ力ですね！」

パシリ、とリーが手にした扇子を打ち鳴らす。

正拳、平拳、貫手、一本拳——。

ヤワな掌で敵をブツ叩くため、異形と化すまでに鍛え込んだ空手家の指先。

プロレスラーの総合的なパワーの前に、少年は指先の力と言う一転突破で対抗していたのだ。

「そいつが、どうしたってんでイツ!!」

思い切り怒声を吐き出しながら、タイタスがヘッドバットを叩き込む。

ファーストコンタクトで叩き割られた筈の額を、リーオーの頭部に。

リオの視界がグラリと暗転し、両膝がガクリと沈む。

「もうイツペア——……」

「ナメんじゃねえプロレス屋アアアア——ッ」

大きく上体を逸らし、第二撃に移ろうとしていたタイタス。

その両手を力一杯に引き寄せながら、リーオーが前足を振り上げる。

ズゴツ、と言う鈍い音と共に前蹴りが突き刺さり、くの字に折れた巨体がよろよろと後退する。

「と、通ったアアアア——ッ!!」

空手少年の執念の一撃が、ついにレスラーの装甲を貫いたア——
「ッ！」

会場のボルテージが高鳴る中、ブツとリオが鼻血を搾り出す。

「そりゃア効くよな、受ける準備をさせなかつたんだ。

風船がパンツパンに膨らんだ所を、思い切り突いてやったんだから
よオ!!」

叫ぶと同時に勢いよく駆け出し、前屈みとなった頭部に肘を叩き込
む。

打ち抜けなくても構わない。

腰を返して、縦にカチ上げるショートアッパー。

果たしてそれが空手であるのか、今は考えまい。

ガラ空きとなった正中線に一步踏み出し、しつちやかめつちやかに
拳を叩き込む。

わっ、と一段歓声が上がる。

(バカ野郎！)

口中で一つヤジを吐く。

打っているのではない、打たせられているのだ。

将棋で言うならば、これは穴熊。

致命傷になる一撃をかるうじて防ぎながら、敵は最後の一投げの機
会を待っている。

だが、そうと知っていても進まねばならない。

敵は思っている。

この程度の猛攻ならば耐え切れる、と、反撃の余力はある、と。

空手家に叩きつけられた挑戦状、その驕りを叩き潰さねば気がすま
ない。

死ぬ物狂いの乱打の中に、一点、搦め手を混ぜる。

敵は側頭部からの衝撃に対し、絶対的な自信を持っている。

それがミソ。

拳の形は一本拳。

小さく、鋭く、正確に。

狙いは上顎と下顎の付根——。

「~~~~~ツツツ!!!」

成功だ。

声にならない声を上げ、ゴウダが大きく背を逸らす。

タイタスの頭部に損傷は無い。

外目には何が起こっているのか、理解できる者は少ないだろう。

ただ顎を外されたゴウダだけが、その遣り所の無い痛みを理解している。

戦闘力を奪うため攻撃ではない。

現在進行形のこの痛みすら、眼前のタフガイは耐え切るかもしれない。

だがそれでいい。

ただ一瞬、次の一撃への抵抗の余地を奪えば十分だ。

すうっと短く息を吐く。

右手の形は貫手。

(知ってるぜえ、プロレスラー)

腰を落とし、一直線に右手を突き出す。

(日本で一番偉大なプロレスラーは……、刺されて死んだんだ!)

狙いは、水月。

腹筋と大胸筋の間に、ナイフのように手刀を滑らせる。

ズン、と言う音を立て、装甲の間に、リーオーの右掌が深々とめ

り込む。

「――!」

違う!

抜けない。

右掌が筋肉の顎に捕えられ、リーオーの動きが封じられる。

パァン、とリオの耳元で何かが爆ぜ、視界が一瞬にして真っ白に染まった。

モンゴリアンチョップ、あるいはハナから両耳を狙った張り手か。

(バッキバキに折れた指で、それをやるかよ……)

頭上からの圧力で上体が折れ、がしり、と腰周りをクラッチされる。

「ふがまえひゃひええエ〜 ひよぞオ〜」

謎の念仏が聞こえる。

意味がわからない。

分からないままに、リオの体が大地を失う。

ぐるん、ぐるんとリオの視界が縦に回る。

カッと閃光が瞳に突き刺さり、瞬間、視界がクリアーになる。

(高い……)

ポツリと感想が漏れる。

幼き日、あの父が肩車してくれた事があった気がする。

その時よりも今は高い。

それに、とても静かだった。

静寂の中、キーンと言う耳鳴りだけが遠くから響いている。

澄み切った視界、アリーナが一望できる。

薄闇の中、周囲を照らす眩いばかりのスポットライト。

二階席、三階席の観客一人ひとりの顔までくつきりと見える。

全てが静謐で、美しい世界。

(ああ、そうか……)

ようやくリオは思い出した。

(今日は、死ぬには良い日、だったよな)

刹那、再び視界が白色の閃光に包まれて――、

リオの体は、急速に大地に沈んだ……。

・
・
・

――気が付いた時には、雨はもう降ってはいなかった。

「……………」

うつすら開けた瞳の先には、満天に輝く星空があった。

ふつと、一瞬、童心に帰る。

父に手を引かれ、共に歩んだ山籠りの日々。

散々に打ちのめされたその後で、こうして草原に寝転がり、星空を

眺めた夜もあった。

「い〜い夜だなあ、坊や」

傍らから掛けられた声に、かろうじて上体を起こす。
倒れていたのは、あの日の草原などではない。

コンクリートのスタンド。

先ほどの仮想空間と似た作りの観客席であったが、少し違う。

改めて周囲を見渡せば、そこは何やら年季の入った作りの野球場のようであった。

「感服したぜ、坊や。」

マジで俺と一緒に、プロレスをやってみねえかい」

そう言つて、傍らの巨漢が愛嬌のある笑みを見せる。

リオの記憶には無い、ボツコボコに打たれた馬面の男。

だが、確かにどこかで出会ったような気もする顔。

男の太い手が、力強くリオの背を叩く。

直後「いつてえ！」と、大げさに男が掌を振るう。

ギブスでガチガチに固められた男の指先。

ようやくリオの中で、記憶の糸が繋がって行く。

「アンタが、ビッグザム剛田……、さんかい？」

「おうよ、俺が坊やに顎をやられたせいで晩飯を食い損ねた、ゴウダ・

カオルその人よ」

そう言つて、ゴウダが欠けた歯をきひつと覗かせる。

つられてリオもふへつと笑う。

「ゴウダさんよお、ここはドコだ？」

「来春取り壊し予定の県営球場よ。」

つつても、電気系統の方はまだ生きてるってんでな。

メインイベントの観戦には持つて来いつてえ訳だ」

「メインイベント？」

「やあやあやあ！ 少年、ようやくお目覚めかい？」

リオの疑問を遮つて、やたら陽気な女性の声が彼方より響く。

ちらつとリオが視線を向ける。

ブロンドのソバージュを揺らして笑う、藍色のセーラー服の女。

時代錯誤のロングスカートに、センスを疑う指抜きのレストラン・
グループ。

更にその上から何故か陣羽織と言うイカれた出で立ち。

一目で分かる、見まごう事なき変人。

呆然とするリオの両手をガシリと掴み、変人がキラキラと両目を輝かせる。

「イヤ〜！ 感動したぞ少年!!」

絶対の体格差を覆す武術家の意地、確かに見届けさせてもらったぞ」

「……………」

「この指か！ この太い指がおっさんの手を破壊したのだな！

何と言ういじましいまでの努力！

素晴らしい、抱き締めたいなあ少年!!」

「つてオイ！ もう抱き付いてんじゃねえか!!

何なんだお前は、いいから離れろ」

「やや、こりゃ失礼」

やや気取って距離をとり、変人がらしからぬ愛嬌ある笑みを見せる。

「エイカ・キミコ（詠歌 公子） 25歳、乙女座のB型。

先ほどの戦いを、MS少女を通じて見届けさせてもらった者だ。

親しみを込めて『ハム姉』とでも呼んでくれ」

「ハ、ハム姉……………」

「とにかく少年、私は君のファイトに心底惚れた。

だからやろう！ 少年！（ガンダムファイトを）

私に（実況）させてくれ!!」

「ええい、ウザってえ！ 離れろつつってんだろうが！」

「ゲハハハ！ ほどほどにしとけよハム子。

空手屋ってえのは童貞切っちゃまうと弱くなるって言うぜ」

「~~~~~ッ じゃねえよッ!!」

何なんだお前ら、ガン普拉ファイトってえのは変人の集まりかよ!？」

「ハハハッ ガン普拉ファイトなんてものは、どこかイカレてなければあ務まりませんよ」

飄々とした男の声が、無人の観客席に響き渡る。

カツン、カツンと靴音を響かせ、変人の親玉がようやく三人の前に顔を出した。

「勿論あなたも含めて、ねえ、ナガラ・リオ君」

「……プラモ屋」

突き刺すようなリオの視線に微笑して、丸眼鏡、リー・ユンファが客席に腰を下ろす。

「どうでした、リオ君。」

ガンプライフアイト、そのデビュー戦の感想は？」

「……どうもこうもあるかよ、人攫いが」

「ふふ、つれないですねえ？」

けれど、リオ君、あなたは先ほどのファイトの中で、何かしら日常に欠けていた充足感を得ていたのではありませんか？」

「……………」

むつつりと、リオが押し黙る。

十年。

ただひたすらに、父の正しさを証明するために走り続けてきた。

けれど今やその日々の意味は無く、さりとして日常に埋没して生きられるほど老成してもいない。

ただ一人、目の前のロートルレスラーだけが、行き場の無いリオの全力を受け止めてくれた相手であった。

リオが本当に生きる喜びを求めるのなら、それはあるいは、この非合法のガンプバトルの中にしか存在し得ないのではあるまいか？

「プラモ屋、お前、一体、何のためにこんな事を？」

「何のためって、そりゃあ道楽ですよ？」

金持ちが道楽のために金を使って何が悪いんです？」

「道楽……」

「あなただって同じですよ。」

人の一生は短く、最強の武は時間と共に容易く衰える。

ならばあなたが青春を犠牲にして得た力は、あなた自身の充足に使われるべきなのですよ」

「……親父の空手を、見世物にするつもりは無え」

複雑なる想いを抱えながら、かろうじてリオが呟く。

リーの甘言に一抹の魅力を感じている事、それを否定は出来ない。けれども、彼の誘いに乗ると言う事は、そのまま亡父の教えの否定であり、積み上げてきた歳月を否定する行為に等しかった。

「……まあ、今すぐに結論を出す必要はありませんよ。」

どうせ今のあなたの怪我じゃ、当分、次のカードを組む事はできませんしね」

言いながらリーが大げさに肩を竦める。

「けれど、せつかく今日は特等席を用意したんですから。」

今夜はせめて、最後まで楽しんでいって下さい」

「特等席？」

パチン、とリーが掲げた指を弾く。

同時にバックライトが一斉に点灯し、オーロラビジョンが熱狂に揺れるアリーナを映し出す。

無人の球場が、一瞬、先ほどの闘技場へと変わってしまったかのような錯覚に、リオの肌がざわりと粟立つ。

熱狂の中心にいたのは、金色のモビルスーツであった。

丸っこい頭部に、筋骨隆々とした逞しいボディを持った、気品溢れるモビルスーツ。

バランスの悪さを苦にもせずに大きく腰を落とし、丸太のように太い右足を、ピンと天空に突き立つまでに高らかと掲げる。

ゆっくりと時間をとり、ズン、と大地を一つ揺らす。

とくん、とリオの心臓が震える。

物言わぬ機体から醸し出される、圧倒的な存在感。

その魂の輝きが、まるで金色の外装に乗り移ったかのように、少年の目には映って見えた。

「いつやア、壮観だねえ少年。」

まさかあの『スモーク』で横綱の土俵入りが見られるなんてね。

ここまですつと、ガンプラファイトを追い駆けてきた甲斐があったってもんだ」

「……横綱？」

「そうさ少年。」

それくらい『格』が無ければ、今宵の相手は務まらない」
驚く間もなくカメラが切り替わり、一斉に観客たちの歓声が轟く。
反対のゲートから現れたのは、真紅のモノアイを煌かせる、新緑色の機体であった。

その名前だけは流石に知っていた。

宇宙世紀を、いや、ガンダムシリーズを代表する量産機『ザクⅡ』
真つ赤なグローブを両手に嵌めたザクが、時折シャドーをしながら
花道を歩いている。

「ボクシング元ヘビー級チャンピオン、ルクス・ランドア。」

今日の横綱の相手の名前さ」

ルクス・ランドア。

フィラデルフィアの英雄。

伝説の王者。

飛び抜けたテクニックを持っていた訳ではない。

不滅の記録を打ち立てた天才でもない。

だがそれゆえに、今なお数多の人間の魂を揺さぶってならない、闘
志のファイターである。

オオオオオオオ、と客席よりどよめきが起こる。

既に50歳近くにもなろうかと言うロートルボクサー。

だが、そのファイティングスーツ姿は、全盛期の肉体と比べても何
ら遜色が無い。

米国の生ける伝説が、全盛期の肉体を作って帰ってきた。

横綱にガンプラで勝つために、全盛期のトレーニングを積んできた
と言う。

「バカな……、みんな、なんで」

「そう、みんなバカなんですよ。」

ここにいる者はみんな君と同じです。

健全なる世界の中で、いつだって牙を持て余して乾いている」
そう言つて、どこか寂しげにリー・ユンファが苦笑する。

「健全なだけの世界は歪んでいます。」

我々のような野良犬には、どこかでガス抜きが必要なんです」

「……！」

「ねえ、やりましょうよりオ君。」

私たちとガンプライフアイトを」

「~~~~ツ うおおああああああああアアア————ツ
!!!!」

矢も盾も堪らず、リオが吼えた、吼えながら哭いた。

何故なのか分からない。

だが、この光景には確かに救いがあった。

体の中で煮えたぎるような感情が溢れ出し、ただそうせざるを得な
かった。

リー・ユンファが笑っていた。

エイカ・キミコも、ビッグザム剛田も笑っていた。

観客のボルテージは、いよいよ最高潮に達しようとしていた。

熱狂の一夜、その最終章が幕を開けようとしていた……。

その名はヒライ・ユイ①

——カラン、コロソ。

ちらちらと桜吹雪の舞う河川敷に、時代外れの下駄履きが乾いた音を立てる。

洗い晒しのジーンズにTシャツと言う、ラフな格好の少年。

ただ、切れた唇と額の傷。

それに鼻の頭を押さえるガーゼだけが、先日の死闘の爪痕を匂わせていた。

ナガラ・リオである。

涼やかな一陣の風が頬を撫でる。

だが、鮮やかな世界とは裏腹に、少年の足取りは重い。

三日前には死んでも良いとさえ思った悠久の空。

その空の色は、あの時と何一つ変わりが無い。

変わったのは少年の心だ。

右手の指が、そつとポケットの内側に触れる。

さして大きくもないズボンの裾をパンパンに膨らませている茶封筒。

200万、入っている。

リオの心根を曇らせている一端がそれであった。

・
・
・

リー・ユンファがリオの下を訪れたのは、検査入院を終え、荷物をまとめていた頃合であった。

「この間のファイト・マネーですよ。

どうぞ受け取ってください」

そう言っただけで差し出された茶封筒を、リオは怪訝な瞳で受取り、開口より中を改め、そして無言でリーへと突き返した。

「どうしました？ 200万じゃ安過ぎましたかね？」

「貰う謂れがねエ。

親父の空手は見世物じゃないんだ」

「迷惑料も兼ねて、と言つても、君は嫌がるのでしょうかねエ？」

では、こう考えてはどうでしょう？」

次の試合に向けての契約金と、それまでの栄養費と言う事で」

「……次の、試合？」

「引き受けて頂けるのでしょうか？」

先日のガンプラ・ファイトの反響も上々でした。

キミコ君や他のユーザーたちも、君の本格参戦を心待ちにしていますよ」

「……………」

ガンプラ・ファイト。

とくん、とりオの心音が跳ねる。

数年ぶりに人里に下りてきてから、今日に至るまで度々感じていた、何とは無しの疎外感。

ただ一つ、あの夜のバカげた闘いの最中だけは、その侘しさが払拭されていた。

あの興奮を、もう一度舞台の中心で味わいたい。

そう考える自分がいる事を、一概に否定は出来なかった。

だがその想いは同時に、真の武術の在り方を求めて三雷会と袂を分かった、亡父の生き様の否定に過ぎない。

「まだ、俺はやると決めたワケじゃあ……」

「では、どうします？」

お父上の目指した空手道を復興する、そのための具体的なプランがありますか？

高邁な志を抱きながら、日雇いの合い間にも稽古を続けますか？

ガンプラマファイア連中の用心棒でもやって糊口を凌ぎますか？

ああ、それともいつそ俗世とのしがらみを断ち切つて、もう一度山にでも籠りましょうか？」

「テメエには関係ねえ話だろうか？」

ぶつきらぼうなりオの言葉を遮って、リーがずっと身を乗り出す。

「私はねえ、悲しいのですよりオ君。

腕つぶしが強いという事は、それだけで素晴らしい事なんです！

あなたのように体格に恵まれない者が強いというのは、特に。

……けれど哀しい哉。

現在において達人たちの多くが、世間から真つ当な評価を受けてはいません。

絶域の技と満たされぬ心を抱えながら、誰もが慎ましやかな生活を強いられている」

「……………」

「受け取るのです、リオ君。

それでうまい食事を取り、最高の環境を整え、万全の肉体を作り上げるのです。

その上で君が参戦を拒んだとしても、それは投資家である私の目が節穴だったと言うだけの話。

世の武道家たちの為にも、君はこれで良い生活をするべきなのです」

と、言いたい事だけを一方的にまくしたてながら、リーが再び茶封筒を捻じ込んで来た。

反応に窮したりオが返す間もなく、クルリと背を向ける。

「ですがねえ、リオ君、世の中は一樹の縁とも言います。

今日の縁が次回のファイトに繋がる事。

一人の格闘技ファンとして、勝手に期待させてもらいますよ」

そう言っつて笑みを向け、飄々とリーは立ち去って行った。

結局その時のリオは、返すべき言葉を見つけない事が出なかった。

・
・
・

三雷会の空手を打倒して、父の正しさを証明する。

そのためであれば死んでも良いと思っていた。

それで死ねたなら、どんなに良かった事であろう。

だが現実には、こちらが命を賭けるほどの事もなく、敵は戦わずし

て自壊していた。

そして自分は、失意の中で戦いに敗れた。

生前に亡父が否定していたプロレスに、リングの上で敗れたのだ。

三日前のリオであれば、リーの言葉を茶封筒ごと突き返していた事だろう。

だが今のリオは、そう出来るだけの軸を失っていた。

これから何を目標にして、何を支えにしてこれからを生きれば良いのか？

己の抛り所と言う物を完全に見失ってしまっていたのだ。

(それともいつそ俗世とのしがらみを断ち切って、もう一度山にでも籠りましょうか?)

先刻のリーの言葉が、ワヤになった頭の中に響く。

それも良いかもしれない、と思う。

三雷会打倒の目的を成すまで、そう思い耐え続けた苦難の日々。

だが、その苦しく侘しかった日々が、今ではもう懐かしい。

人の世がこんなにも息苦しいものであるとは、思ってもいなかった。

今、この茶封筒を思い切り河川に投げ捨て、山に帰る。

そうすればどれだけ足取りが軽くなる事であろうか。

「……それで親父の教えてくれた空手は、そのまま埋もれちまうってのか？」

冗談じゃねえ、と思う。

栄光が欲しい、と思う。

平穏が欲しい、とも思う。

ぐるぐると堂々巡りを繰り返しながら、少年の足は古い記憶を辿る。

この河川敷を抜ければ、ちよつとしたドヤ街に出る。

そこの外れに、古い木造の一軒家がある。

狭っ苦しい住居に、道場とは名ばかりの板の間。

それにかろうじて巻き藁が置けるだけの中庭がある。

山に籠る前に、父と暮らしていた家だ。

もう、十年も前の話になる。

ここいらの風景もだいぶ変わった。

あるいはもう、そんな時代錯誤な家屋は残っていないかも知れない。
い。

それでもいい。

このまま人の世界に留まるのか。

あてもない放浪の暮らしに戻るのか。

そんな決断のきっかけが、わずかでも残っていてくれたならば
……。

・
・
・

妙であった。

十年ぶりの我が家を前にして、リオの足が止まる。

結論から言えば、実家は確かにそこにあつた。

記憶に残る当時の姿と寸分たがわぬ懐かしの家。

だが、それこそが妙だ。

十年、碌な管理もせずに放つて置かれた家だ。

取り壊されていてもおかしくはない。

運良く原型が残っていたとしても、廃墟同然のお化け屋敷になつて
いるのが自然であろう。

「やあやあ、戻ってきたのか少年！

どうしたんだい？ 突っ立ってないで入ればいいのに？」

ガラガラと不意に戸が開き、伸ばしかけたリオの手を遮って、三角
中に割烹着姿のブロンドが、にゅつと玄関に顔を出した。

「いやいや、この玄関がまた苦勞したんだよ。

やけに鍵が開かないなくつと思つたら、単に建付けが悪いだけでや
んの」

「……………」

「おっと、この恰好じゃ分からなかったかい？」

言いながら、ブロンドがいそいそと割烹着を外しにかかる。

ソバージュの髪が風に揺れてふわっと広がり、白衣の下から藍色のセーラー服が現れる。

ああ、トリオの口から眩きが漏れる。

三日前、球場跡で出くわした、変な女だ。

さすがに陣羽織こそ纏ってはいないが、これだけ強烈なキャラクターを見紛う筈もない。

「そう、変なお姉さんことエイカ・キミコだ。

いつやく、待ちかねたよ少年」

「人の心を読むんじやねえ。

て言うかアンタ、俺の家で何をやってるんだ？」

「そう、それ、キミの家。

そいつを守るためにここ数日、ハム姉さんは色々と骨を折っていたんだぜ」

呆然とする少年の心を置き去りにして、ハム姉がバシバシとその背を叩く。

「少年、お父上が亡くなられた時、まともに相続手続きを行っていないかっただろう？」

そのせいでここは小火^{ボヤージュ}鯨組の地上げを喰らって、危うく取り壊される寸前だったのさ」

「そう、だったのか？」

「んで、ほうぼうに手を尽くして権利書を取り戻したのが二日前。

それからは窓の修繕に畳の張替に室内の大掃除。

いやいやいや、人の住める家にするってのも大変なモンだ」

「……そいつはあの、リーとか言うプラモ屋の差し金か？」

「ふふ、これはエイカ・キミコ個人の趣味さ。

この家が残っていなかったら、キミがすぐにどこかに行っちゃもうよ
うな気がしてね」

「……………」

「家主に言うのもおかしな話だが、上がって行きなよ、少年。

せつかくここまで来たんだ、実家の敷居をまたがずに帰る手は無い
だろう？」

「ああ」

言われるがままに下駄を脱いで廊下にかかる。

ぎしり、と年季の入った板の間が軋みを上げる。

どこか懐かしさを覚える、すえたような旧家の匂い。

「ガスと電気は使えるようになったんだが、台所の水回りは時間がかかりそうだね。

今日の所は外食で済ませるとしよう。

それにしても、今時露天風呂とは風流な家だねエ」

キミコの碎けた物言いに、知らずリオの顔にも苦笑がこぼれる。

ちらり、と中庭とも呼べぬ狭い土間を見れば、新しく打ち直された巻き藁の横に、わざわざシヨツキングピンクに塗り直されたドラム缶が据えられている。

郷愁を噛み締めながら襖を開ける。

真新しい畳の香りがたちまちに鼻腔を突く。

六畳一間。

仏間を兼ねた、この家唯一の生活空間である。

襟を正して腰を下ろし、ピカピカに磨かれた小さな仏壇の前で正座を組む。

荷物とも言えぬ小さな袋の中から、比較的新しい位牌を取りだし、そこに据える。

木魚も線香も無い、宗派も読経も分らないが、そこにこだわる親父でもないだろう。

手を合わせる。

瞑目。

瞑目。

瞑目。

「……ああ、その、エイカさんよお」

「ん、どうした少年、改まって？」

「いや……、今回はその、色々と世話になっちまって」

そう言つて、リオがバツが悪そうにそっぽを向く。

素直に礼を言われるとは思つてもいなかったのだろう。

キミコはしばし、ぱちくりと目を丸くしていたが、その内に人懐こい笑みを浮かべて言った。

「ふっふっふ、礼を言うのはまだ早いな、少年。

道場の方を見てご覧よ。

きつと君もド肝を抜かれると思うぜ」

・
・
・

啞然。

呆然。

自失。

道場の鴨居の前にあつて、確かにリオはド胆を抜かれていた。

生まれ変わった道場、その余りにも凄まじい有様に。

鏡のように輝き放つまで磨き抜かれた板の間に、わざわざ打ち直された小さな神棚。

これはまあいい。

当事者の武道と言う概念に対する愛着が隅々まで感じられて、思わずセーラー服の25歳に恋しそうになる程の心配りに溢れた部屋だ。だが問題は、部屋の中央を占拠する異物の存在である。

ゲームセンターにある筐体などよりも二回りばかり大きい、小型の宇宙船のようなカプセル。

無論、知っている。

それは三日前、リオに地獄を見せてくれた装置。

『ガンプラ・トレース・システム』のシュミレーターであった。

「な、なんじゃアこりゃああアアア——ツ!？」

「いつや、狭い道場内で組み上げるのがまた一苦労でねえ。

電気系統の接続も今日中には終わるから、明日っからはガシガシ特訓できるよー!」

「……ッ　じゃねえよ!？」

とつととコイツをのけろ!

こんなんじやあ組手も稽古もできないじゃねえかッ!」

ナガラ・ルオが激昂する。

いかに何年もほっぴり出していた家とは言え、こうも好き勝手されてはそりゃあ怒る。

だが、その辺の反応も既に予想済みだったのであろう。

キミコは特に悪びれた様子も見せず、しゃあしゃあと口を開いた。

「……組手く？ やる相手がいるのかい、少年？」

「ぬっ」

「型稽古をやったり、サンドバッグを蹴れるぐらいのスペースなら十分にある。

庭に下りて巻き藁をぶっ叩いたっていい。

しばらくは一人きりの道場なんだろう？

シュミレーターの一つや二つ、置いてあつたって邪魔にはならんだろうに」

「勝手な事ばかり言ってるじゃねえ！

俺はまだやるなんて一言も言ってるぞ！」

「……それでも、さ。」

やると決めてからじゃあ遅いんだよ、少年」

声のトーンを落としたキミコの物言いに、思わずリオの氣勢が削がれる。

「少年も知つての通り、ガンプファイトは非公式、非合法のアングラな大会だ。

通常の格闘技のマッチメイクのように、十分な調整期間を設けて……、

なんて言うスケジュールの余裕はない。

明日、急遽試合を組まれても対応できる。

それくらい心の構えで実戦と調整を進めて置かなきゃ、メインイベンターは務まらない世界さ」

「けれど、俺は……」

「ゴウダのおっさんの道場にだって、勿論シュミレーターはある。

やると決める、それから準備する。

プロの世界じゃあ、その数日が命取りだ。

ウジウジ悩んでばかりいたんじゃ、時代に置いて行かれちゃうよ、少年」

「……………」

「ま、少年にどうしてもその気が無いなら、機械の方は明日にでも撤去するさ。」

とりあえず私は台所の方にいるから、何かあったら声をかけてよ」むつつりと押し黙ったりリオの肩をポン、と叩いて、そのままキミコが廊下へ消える。

ポツン、と一人残された道場で、リオが深くため息を吐く。

(……ゴウダの道場にも、シュミレーターはある)

その一言は存外に堪えた。

ゴウダ・カオル、41歳。

職業：プロレスラー リングネーム『ビッグザム剛田』

ショー・プロレスで鍛えた体を切り売りするのが生業の男である。

ナガラ・リオが空手に捧げて来た倍以上もの時間を、見世物の舞台上上がるためのトレーニングに費やして来た男である。

亡父の教えの前に立ち塞がり、ものの見事に粉碎してくれた『仇敵』である。

——そして、この人里に下りてきてから初めて、リオの全力に付き合ってくれた、タフな男。

これからリオが、父の教えを貫いて生きるつもり、ゴウダは絶対に越えねばならない壁だ。

最強のプロレスラー。

その存在は、ただそこに在るだけで、亡父の生き方を真つ向から否定する。

もう一度、あの男の前に立ち、全力を尽くして打倒する。

リオの新しい人生は、その先にしか見出す事は出来ないであろう。だが、それは同時に、父が否定した興業、見世物の舞台に立って口に糊する事を意味している。

理想と現実、二律背反の狭間にあって、息が詰まるほどの苦しさを覚える。

「……俺は一体、どうすりやいいんだい、親父よお？」

『——ガンプラが嫌いなら、そんな世界に関わらなければいい』
「ん？」

ふっと、幻聴のようにか細い声が聞こえた。

訝しげにリオが、庭先へと視線を向ける。

そこにいたのは、これまでのゴウダやキミコに劣らぬ、異様な個性の持ち主であった。

年の頃は、13〜14と思われるおさげの少女。

身長は、成長途中のリオよりもさらに低い、140台後半と言った所か。

年齢についてはおそらく間違いない。

学校指定と思われる、小豆色で二本線のジャージ。

ぺったんこな胸部に縫いつけられた刺繍に『三区王堤2―B 平井』の文字がデカデカと踊る。

やや赤みを差した両頬には、年相応のそばかすが浮く。

おそらくは化粧もした事がないのであろう。

視線を遮る瓶底のようなグルグル眼鏡だけが、少女にとって唯一のアクセサリーであった。

「ああ、えっと、どちらさんで……」

「……………」

「ウチに、何か用かい？」

「……………」

反応が、無い。

少女はただ、じつと無言でリオの方を見つめている。

睨まれているのか、熱烈なラブコールなのか、あるいは立ったまま寝ているだけなのか。

分厚い眼鏡に阻まれて、少女の真意が読めないままに、虚しい時間が過ぎ去っていく。

——と。

「やあユイちゃん！

何だい、来てくれるんなら連絡してくれりやよかったのに」

明るい声を弾ませながら、パタパタとキミコが台所からやってきた。

ちらりと、リオが横眼で藍色のセーラー服を見やる。

「やっぱりアンタの関係者だったんだな」

「ハハ、喜べ少年。」

私のは単なる戦闘服だが、彼女の方は現役だぞ」

言いながら、キミコが少女のジャージにポン、と手を乗せた。

「紹介しよう。」

三区王堤女学院、中等部二年、ヒライ・ユイ（平井唯）ちゃん十四歳。

超級堂でファイター用のガンプラ制作を手伝ってもらっているんだ。

何を隠そう、少年のリーオーを作ったのもこの子なんだよ」

「ああ、あのプラモを……」

まじまじと、リオが少女の顔を覗き込む。

先日の、純白のリーオー。

素人目にも、確かに出来の良いプラモだとはおもっていたものの、それが自分より幼い少女が手がけた作品だったと言う事実には、少年はいささか驚きを隠せずにいた。

「ユイちゃん、改めて紹介するけど、こっちの少年は……」

「知ってる」

キミコの言葉を遮って、ヒライが淡々と口を開く。

「私のリーオーで、無抵抗のドムを破壊した人」

「……………」

空気が凍る。

一瞬、何を言われたのか分からなかったリオも、すぐに少女の言葉に宿る棘の正体を理解した。

三日前の最初のガンプラ・ファイト。

三機のドムと対峙した時の、ナガラ・リオのやり口を咎めているのだ。

確かにあの日、リオは戦意を失った相手の機体を、徹底的に破壊し

た。

ガンプラを愛する少女にとって、手がけた愛機が他人のガンプラを蹂躪する有様は、決して心地の良い光景ではなかったであろう。

無論、リオにだって言い分はある。

唐突に命のやり取りに巻き込まれ、落ち着いて対処できるだけの余裕が無かったのだ。

その後のダメ押しにしたって、武術家の立場としては当然の制裁であつた。

「……………」

だが、それを敢えて口に出しては、恥の上塗りである。

余裕がなかった、あんな三下を相手に、命賭けの戦いを強いられた。

その状況、それ自体が『武』の敗北である。

常在戦場。

武の真髄とは、そもそも日常の心掛けにこそあるのだ。

ナガラ・リオが、いっぱしの『武術家』であつたならば。

少なくともあの場面で、あれ程の醜態は晒さずに済んだ。

凄惨な私刑を行わずとも、事を収められる余裕も持てた筈である。

「私のプロトリーオーは、そこいらのガンダムに遅れを取るような機体じゃない」

「……………」

ダメ押しのように、少女の舌鋒がリオを叩く。

咄嗟に反論しかけ、しかし結局、何も言い返せないままに口を閉ざす。

リングで対峙したタイタスの姿は、とても「そこいらのガンダム」と言い捨てられるような威圧感ではなかった。

だが、思い返してみれば、確かに機体自体に特殊なギミックが仕込まれていた訳でもない。

だとしたら、それが中の人、単純に自分とゴウダの、戦士としての格の違いなのか……………？

「ガンダムを愛してもいない人に、ガンプラバトルに関わってほしくな——」

「ていつー！」

「あ……」

貝のように凹まされた空手少年に代わり、エイカ・キミコが物理的に動いた。

止める間もなかった。

ハム姉の柔い張り手が、ぺちり、と少女の頬を叩いた。

「初対面の相手に何を言ってるのさ。」

分かっているだろ、ユイちゃん？

あの日、少年は自分に出来る最善を尽くして戦った」

「……………」

「怒りをぶつける相手が違うだろう？

あの場で起こった事の責任は、私とリーの旦那にある。

何で私を、直接殴りに来ないんだい」

生粋の格闘技オタグが、諭すように懇々と語る。

ヒライ・ユイは、何か言いたげに一瞬口を開いたが、結局そのまま口を閉し、くるりと家の外へと駆け出してしまった。

少女の姿が完全に視界から消え、ふうつ、と一つ、キミコが大きなため息をついた。

「いや、悪かったね少年。

ユイちゃんもさ、普段は素直で良い子なんだけど……………」

ああ見えて、ガンブラに関しては少々一途だね」

「いや、いいよ」

「…………… どしたい、少年？

無頼の空手屋が、随分と言われたい放題だったじゃないか？」

「ああ……………」

ぼんやりと、少女の走り去った庭先を見つめる。

事実、リオ自身もあややな自身の感情を持って余っていた。

不思議と怒りや苛立ちと言った感情は湧かなかった。

気持ち良く打たれすぎたからかもしれない。

さっきのが舌戦ではなく殴り合いだったなら、今頃リオは大の字で空を仰いでいた所だ。

(そういや、親父以外の人間に叱られたのは初めてだっけな)

ふっ、と苦笑が漏れる。

空手、武術、と言う世界に関してならば、散々に殴られ、罵倒され、その厳しさを肌で味あわされてきた少年である。

だが、ガンブラと言う世界において説教されたのは、無論、これが初めての事だ。

リー・ユンファもエイカ・キミコも、格闘技に対する真摯さだけは随所に見られたものの、その情熱をガンブラに対しても持ち合わせているか言えば、いささか疑わしい所があった。

安心。

ナガラ・リオはきつと、安心したのだ、と思う。

ガンブラ・ファイトの世界に飛び込むか否か。

目先の選択に囚われるばかり、先程までのリオは、己が慢心に気付いていなかったのだ。

生きるか死ぬかの世界で、本物の空手の拳を学んできた。

その自分が戦うのだから、ガンブラ・ファイトの世界でも食っていないなどワケも無い事。

知らず、そんな当然の思いを抱いていた。

その驕りを少女は叩いてくれたのだ。

ガンブラの世界を舐めるな、と。

実際の所、少女がリオの何処に対して憤りを感じていたのか、ガンブラを知ってから日の浅い少年には、その心理を正確に理解する事はできない。

だが、ガンブラ・ファイトと言う世界に、それだけの真剣さで挑む少女がいる。

今、目の前の門の先に広がっているのは、そう言う厳しさを持った人間のいる世界なのだ。

この事実こそが、リオにとっては僥倖であり、救いだ。

ガンブラの世界を侮っていた自分が非難されるのは当然であり、それを気付かせてくれた彼女には感謝こそすれ、怒りの矛先を向ける理由は無。

「……良い子だな、彼女」

率直に、ナガラ・リオが少女の印象を語った。

「キミも相当に歪んでいるな、少年」

対し、キミコはどこか呆れたように首を振った。

・

・

・

鉄板焼き『菜宅』は、全国に36の店舗を構える外食チェーン店である。

お好み焼きをメインとしながらも、そのメニューは通常の肉料理に海鮮、焼きそば、もんじやとバリエーションに富み、アルコールを加えても庶民の懐に優しい値段設定となっている。

自然、休日の夜ともなれば、家族連れや常連の飲み会が店内を賑わす事となる。

「デツハハハ！ どうした坊や、ジャンジャン食べジャンジャン」

「いきなり酔っ払ってんのか、おっさん。」

まだ何も焼いてないだろうが！」

活気に満ちた店内に、一際太い笑い声が響く。

190近い屈強の体格に、やや後退の始まった髪を後ろで束ねた、愛嬌ある顔立ちの面長の男。

ゴウダ・カオル。

プロレスラー『ビッグザム剛田』その人である。

対面で威勢良くジョッキを煽る巨漢に辟易しつつ、慣れぬ手つきでリオがボールを掴む。

「おい、違えよ馬鹿。」

キャベツ、キャベツを最初に焼くんだ。

具材で土手を作ってやらなあ、出汁が垂れ流しになっちゃうだろうが」

「んだとおく？」

「ハツハツハ、私がやろう少年。」

男子厨房に立ち入らず、だな」

言いながら傍らのキミコがボールを奪い、二丁のヘラでダカダカと具材を刻み始める。

手持ち無沙汰になったリオの前に、ゴウダがぐいっと大ジョッキを差し向ける。

「……飲まねえぞ、俺は」

「なんだあく未成年、今更になって優等生ヅラかよ」

「そんなんじゃねえよ」

ただ、とバツが悪そうにそっぽを向いてリオが言う。

「……酒が、判断を鈍らせる事もあるからよ」

「ククッ！ そいつも親父さんの教えか？」

「武術家なんてえ志すもんじゃねえなあ」

小馬鹿にしたような声色に、リオが恨みがましい視線を向ける。

そんな不穏な空気を気にした風も無く、飄々とゴウダが葉巻を啜える。

手元を止めないまま、傍らのキミコが楽しむように会話に割って入ってくる。

「ふふっ、少年。」

日中も思っただけれども、戦っていない時の君は、本当にからつきしだねえ？」

「……ほっとけ」

「私は褒めているんだよ？」

いびつで歪んでいるからこそ、常人には出来ない事ができる。

そうでなければ、自分より40キロ以上重いレスラーの額をカチ割ったりはできないさ」

ドーナツツ状に築いた土手の中心に、慣れた手つきで出汁が注がれていく。

ジュウウ、と香ばしい音を立てる鉄板の中心を、無言でリオが見つめる。

これが数日前であったなら、キミコの賛辞を素直に受け取る事が出来ただろう。

常識知らずで結構。

武術家として全うに生きられればそれで良い、と。けれど、リオは敗北してしまった。

目の前にいるプロレスラーに、リングの上で。

今のリオにとっての武術は、和気藹々とした夕食を妨げる重荷に過ぎない。

失った誇りを取り戻すにはどうすれば良いか？

目の前の男を倒せばよい。

例えば、今、この場で立会いを望めばどうか？

眼前の豪放なタフガイは「メシの後でやろうや」等と応じるかもしれない。

いや、そもそもが双方の合意などもない。

武術とは突き詰めれば勝つ事、生き延びる事だ。

目の前の焼けた鉄板、無造作に置かれた粉鯉、隣の女が手にしているヘラ。

仕掛けるための手段はいくらでもある。

(……そう言う事じゃねえだろ)

熱しかけた少年の中の芯鉄が、急激に冷めていく。

全てはごまかしだ。

少年の中にある凜呼とした意志が、リングの上での再戦を望んでいる。

理屈の問題ではない。

リングの上でやられたカリは、リングの上でしか返せない、少年の中の獣が喚いているのだ。

「……なあ、おっさんは何でガンブラなんかやっているんだ？」

「金さ、あとは試合の場所な」

リオが問う。

即座に太く、シンプルな答えが返ってきた。

いかにもこの大男らしい、楽天的で単純な回答。

そして戦いの舞台では、シンプルな者ほど強い。

「ふふっ、このおっさんはプロレスはとにかくとして、経営の方がメタメタだね。」

社長に啖呵切って独立したまでは良かったんだが、色々あつて残ったのは、小さなプレハブに粗末なマットだけって有様なのさ」

「ダハハ、世の中ままならない方が面白いってモンよ！」

ゴウダの物言いに苦笑しながら、キミコがお猪口をちびちびと煽る。

「まっ、だからこそ私は少年に期待しているんだけどね。」

おっさんのプロレスの醍醐味は、耐え切ったからの逆転劇。

けれど生憎、今のプロレス界には、おっさんを本気で攻めきれないだけの相手がいない」

「へっ、時代の移り変わりだわな」

「だからこそガン普拉・ファイトが、何とか足しになれば良いんだがね。」

おっさんや少年みたいな『本物』が、もう一度世に出るきっかけに、さ」

「……………」

二人の軽妙なやり取りを、むつつりと押し黙ってリオが見つめる。

動機の純不純はとにかくとして、二人がガン普拉・ファイトの世界に本気で可能性を求めている事だけは理解できる。

この男にリングの上で勝とうと思っただけならば、リオもまた必死にならないざるを得ないだろう。

武術や父の意志はさておき、ガン普拉・ファイトと言うものに真っ向から向き合う必要がある。

(ガン普拉、か)

ふっ、と少年の思考が、昼間の少女の姿に切り替わる。

ヒライ・ユイ。

少年が初めて出会った、ガン普拉と言うものに真摯な情熱を向ける少女。

何か言いたげな眼鏡の奥の瞳は、果たしてあの時、泣いていたのか、怒っていたのか。

(……………)

ガン普拉がいる。

今更ながらにその事実気付いた。

戦場において己が身を預けるに相応しいだけのガンプラが。

リーやキミコに頼めば、それなりの制作者を紹介してくれるだろうか？

最悪の場合は、一から自分で作る必要もあるかもしれない。

だが、それは何か違うような気がした。

あるいは、初めて手にした純白のリーオーに対して、思いのほか自分でも未練を感じているのかもしれない。

昼間、少女から突き付けられた刃。

それに対する回答を持たぬまま先に進む事が、今のリオには、妙に不義理な行為を働いているように感じられてならなかった。

「ん〜、どうしたんだい少年？」

「さつきからずっと、黙っちゃって？」

「ああ、いや……」

『——私のプロトリーオーは、そこいらのガンダムに遅れを取るような機体じゃない』

ふつとリオの脳裏に、昼間のユイの言葉が蘇り、それがそのまま口を突く。

「俺が最初に使った、あの、リーオーとか言うの。

あれはやつぱり、凄いやガンプラだったのか？」

「ありや？　なんだい、自分で使ってて分からなかったのかい？」

「いや……」

「冗談だよ。

何せ初めて使った機体とあっちゃ、その凄さを実感できないのも無理ない所だろうけど……」

と、そこまで言いかけた所で、不意にキミコの瞳が悪戯好きの子猫のように煌いた。

「なあ少年。

リーの旦那から貰ったこの間のギヤラ。

あれ、私に預けてみる気は無いかい？」

「……？　別に良いが、どうする気だ」

「ふっふっくん、悩める少年のボーイ・ミーツ・ガール。

ハム姉さんが助けてやろうか、ってね！」

言いながら、焦げかけたもんじやをかき集め、ちびちびと口元に運ぶ。

ハム姉さんの瞳は、何やらガールズ・トークが大好きな女学生のよう
うに爛々と輝いていた。

その名はヒライ・ユイ②

「ハアッ！・ハア……！」

呼吸が乱れる。

体が重い。

直前に貰った脇腹への一発、それが思いのほか響いていた。視界の外へ逃れた敵を必死に探す。

しかし、首が回らない。

腰も。

勢い余って足がもつれ、機体がたたらを踏む。

「ほれほれエ、敵は右手だよ、ガードガード」
うるせえ。

外野に毒付きながらも右腕を畳む。

その防御を掻い潜り、更にボディがくる。

息が詰まる。

小憎らしいほどに出来の良いAI。

「くうっ」

右の裏拳、更に体を開きながら左の直突き。

丸っこい頭部を捉える、しかし手応えは薄い。

文字通り腰が入っていないのだから当然だ。

とにかく体を返して、モスグリーンの敵機と向き合う。

練習用機体『ハイモック』

飛んできた右のストレートがキレイに顔面を捉える。

鼻血が噴き出す。

ガクガクと膝が笑う。

(上等)

ぐっ、と踏み止まり、力いっぱい殴り返す。

フォームも何もない根性の一撃。

立ち回りで負けている。

空手も使えない。

後はもう、鍛え抜いた肉体を信じ、ひたすら根性で殴り合うしかな

い。

足を止めての打ち合いは、むしろ好都合であった。

(倒れる倒れる倒れる倒れる倒れる倒れる倒れる倒れる倒れる)

右が飛んでくる。

右を打ち返す。

左が飛んでくる。

左を打ち返す。

相打ち、相打ち、相打ち。

無呼吸。

視界が揺らぐ。

渾身の右。

空振り。

潜られた、来る、覚悟――。

《BATTLE END》

「あ……」

大きく息をつく。

どっと汗が噴き出す。

ようやく気が付いた。

頭部をひしゃげさせたハイモックが、いつの間にか地に伏していた事を。

「ふう……」

モニターが暗闇に変わった事を確認すると、ナガラ・リオはよろよろとシュミレーターから這い出した。

パチパチと言う拍手と共に、真っ白なタオルが少年目がけて飛んでくる。

「いやいやいや、お見事お見事。

まさか本当に倒しちまうとは、恐れいったよ少年」

「厭味はやめろよ」

「厭味なもんかい。」

ハイモックは現行の技術で作られた優秀なガンプラだ。

AIだって実際のプロの行動パターンを取り入れた強烈なモンだよ。

「そいつに二十年近くも前の、それも素組みの機体で勝つなんてさ」
そう笑って、キミコがテーブルの上に置かれたプラモを両手で包む。

「……なあ、本当にそれが、この間と同じ機体だって言うのかよ？」
「うん。」

と、言うよりむしろ、これが本来のリーオーと言った方が良かったらうね。

リミテッドモデル『リーオー』

現行のガンプラの中では、これが唯一のリーオーのキットなんだ」
「現行唯一の、リーオー」

キミコより手渡された機体を、まじまじとリオが覗き込む。

未塗装のTVモニターのような頭部が、無表情で天を仰ぐ。

記憶にある機体よりも幾分細い手足に、首、腰が一体化したシンブルな作り。

サイズ自体には大きく違いは無い。

だが、リオの知る白色のリーオーは、もっと部品の一つ一つまで、細やかな仕事が行われた機体であった。

最近のプラモは随分と出来が良いなどと、その時はそれくらいにしか感じていなかったリオだが、その感想が今さらながらに見当違いであった事に気付く。

あの眼鏡の少女、ヒライ・ユイの怒りももつともだと思ふ。

手塩に掛けた愛機を素人に使われた挙句、メチャクチャに壊されてしまったとあっては。

「まっ、庭先で汗を流してきたらどうだい？」

その間にこちらは準備を終わらせておくよ」

「準備……って？」

呆然とリオが道場の入口を見つめる。

その入り口に立ってかけてあるのは、古ぼけた板の間には似つかわし

くない薄型のテレビ。

そしてわざわざ台所から這わせた電工ドラムに、何やら分からぬダンボールの梱包。

「……何だ、それ？」

「うん？　65インチのハイビジョンプラズマTV。

それに最新のブルーレイレコーダーに、『新機動戦記ガンダムW』ブルーレイBOX上下巻だね」

「いくらした？」

「全部でだいたい75万くらいかな？」

「いや、いい買い物したな、少年」

「……………」

「ん、どうした少年。

早く着替えないと風邪をひいてしまうぞ？」

嗚呼。

理解する。

バカなんだ、この女性。

頭が良くて行動力があつて仕事出来るバカ。

恐ろしく性質が悪い。

「その……、ガンダム、ウイング？　俺が見るのか？」

「そうだよ。

新機動戦記ガンダムW、TVシリーズ全49話、今から君が見るんだ。大丈夫、ついでにエンドレスワルツまで観賞しても三日はかかんないから」

まっすぐに見つめる、キミコの瞳。

いや、確かに言わんとする事は分かる。

敵を知り、己を知れば即ち百戦危うからず。

ガンプラを手にしながらガンダムを知らない。

それは未知の敵に徒手空拳で挑むに等しい愚行である。

あの少女が何を求め、あそこまでリーオーと言う機体に愛着を見せるのか？

それを理解するには、ガンダムWという作品に直に触れてみるしかないのだろう。

だが……。

「……せめて仏間に運べ。」

道場で観るようなものじゃ無いだろ?」

「いいや、ダメだ少年、道場で見るんだ」

きっぱり、と強い口調でキミコが言う。

その瞳の真剣さに、ふつとりオの背に悪寒が走る。

「ゆめゆめ油断するなよ、少年。」

このアニメはな、私の思春期を殺した少年の翼だ」

悔っていた。

認めざるを得ない。

キミコの言葉を真摯に受け止めながら。

真剣な魂を持った少女の存在を知りながら。

それでもなお、ガンダムと言う作品に対する見通しが甘かった。

そう言わざるを得なかった。

この、ガンダムWと言う作品。

正直、ストーリーはまっとうな代物とは思えない。

物語としては群像劇、だが状況が余りにも混沌^{カオス}。

わずか一話の内にシナリオが大きく狂い、敵と味方、勢力が入り混じっては裏返し、そこに翻弄される人々が集合と離散、迎合と敵対を繰り返す。

何と言う混沌。

モニターを通して制作サイドの混乱までもがダイレクトに伝わってくるような圧倒的混沌。

突き詰めて考えるならば、アニメの本質はあくまでも娯楽である筈。

現実の情勢がどうであったとしても、フィクションの物語はもつと

シンプルに、視聴者に伝わる物であらねばならない筈だ。

——だが、そんな事はどうだっていい！

このアニメは混沌としたシナリオを楽しむ為の物では無い。

MSの指先一つにまで宿った戦いの美学に。

そして、時代の奔流に振り回されながら、尚毅然として発つ少年たちの魂に触れるアニメなのだ。

一つだけ、揺るぎない骨子がある。

それはこの物語において、主役である筈の少年たちは、決して勝者に成り得ない、と言う事実だ。

兵士として完成された能力を持ち、他を圧倒する規格外のMS・ガンダムを駆りながら、それでも大勢は動かず、数の力に敗れ、民衆の理解を得る事なく足掻き続ける少年たち。

人は人生の勝者たりえず、ただ戦う事ができるのみ。

その戦い続ける姿勢こそが、まさしくガンダムWと言う作品世界を語る上での要であるのだ。

『力の無い者がうろろするな！』

『敵が弱いと、戦った後も虚しくなるんだ！ くっそおおおオオ——ッ!!』

液晶モニターの中で張五飛が叫ぶ。

五人のガンダムパイロットの中でも、彼の感性が一番リオに近い。

かつて、リオも望んでいた。

倒すべき敵、三雷会が強大かつ尊大な難敵である事を。

だがそんな絵物語のような都合の良い敵など、現実には存在しない。

死にそびれたりリオに残ったのもまた、虚しさだけであった。

『俺にはこの生き方しかできない』

自らに向けた引鉄を少女に預け、ヒロ・ユイが言う。

過ちを重ね、敗北を重ね、戦うための牙を失い、一度は自らの命までも捧げながら。

それでも彼は贖罪から、自らの出来る事を、一つずつ積み直そうと
している。

人はそこまで、ひた向きに生きられるものなのか？

リオは思わずにはいられない。

もしも自分に、その実直さがあつたならば……。

『私はこう言う体裁を、この戦いで掃き捨てたいのだ！』

仮面の男、ゼクス・マーキスがビームサーベルを振るう。

高貴な身に生まれ、人並み以上のカリスマと才能を有しながらも、
この男の戦いは常に迷いの中にある。

ガンダムWとは、彼が戦士としてのプライドを、剣を振るう意味を
取り戻すまでの物語でもあるのだ。

『見てろよ……、俺、もう一度、死神に戻って……、やる……ぜ……』

散々にぶちのめされたボロボロの体で、デュオ・マックスウエルが
不敵に笑う。

ツキの無い男だ。

貧乏くじの似合う男だ。

しかし、その軽薄そうな見た目に反し、驚くほどに強かでタフな少
年でもある。

彼のようにしぶとく生きられたなら、そう思う。

しかし、そのための光明が何処にあるのか、それが今のリオには分
からない。

『認めなくてはならないらしい。』

俺達は、この時代に必要の無くなった兵士なんだ』

爆発寸前のコックピットの中で、トロワ・バートンが淡々と語る。

無愛想な外見に反し、誰よりも優しく他人思いな少年だ。

友人の魂を救うために、悲痛な現実をいの一歩に受け入れようとし
ているのだ。

『——だからカトル、時代を受け入れよう。』

そして優しいカトルに戻ってくれないか』

「いやだッッ!!」

悲痛な叫び声を上げてリオが立ち上がる。

矢も盾も堪らず、裸足のままで庭先へ飛び出す。

「うおおあああああああッ!!」

やり場の無い激情を込め、勢い良く巻き藁をぶつ叩く。

基本もクソも無いメチャクチャなフォーム。

ビリビリとした衝撃が、一拍遅れて右拳を突き抜ける。

腰を返し、直ちに左を繰り出す。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

叫びながら叩いた。

叩きながら泣き叫んだ。

指先の感覚など既に無い。

十円玉を折り畳める指だ。

土管に風穴を開ける拳だ。

角材を切り裂く手刀だ。

そうなるまでに己を苛め続けた異形の拳だ。

認めたくは無かった。

この技が、積み重ねた十年が、既に必要の無い時代であるなどと

……。

「ハア……、ハア、ハア……」

大きく肩で息を吐く。

気が付いた時、頭上では柔らかな月がリオの背を照らしていた。

涼やかな真夜中の外気が、リオの中の熱狂を奪い去っていく。

「……続き、続きを」

よろりとおぼつかぬ足取りで、リオが再び道場へと這い上がる。
続きを見なければならぬ。

戦いの果てに彼らがどんな答えを出したのか、それを見届けなければならなかった。

そこにはきつと、リオが求めて止まない真実があるのだから。

『——私は、敗者になりたい』

長い演説の果て、トレース・クシュリナーダがその心魂を吐く。

常にアフター・コロニーの中心であった筈の男だ。

栄光と勝利を約束されていた筈の男だ。

地球とコロニーの全人類を導く、新たな指導者になるべきだった筈の男だ。

ヒイロたちガンダムパイロットの前に立ちはだから、最後の首魁になるべきだった筈の男だ。

その男が言う。

勝利の先にあるのは、ただ衰退の宿命だけだと。

新しい力は、常に敗者の側から生まれてくるものだ、と。

(……そうなのか、トレース?)

敗北の苦味を、ぎりりと奥歯で噛み締める。

最強の武であるべき空手が、リングの上で敗れた。

あのエレガントな男の言葉が真実であるのなら、この胸の痛みも、苦しさすらも、新たな物語の始まりとして受け入れるしか無いと言うのか……?』

『——地球は、優しかったんだよ』

誰よりも敏感な少年、カトル・ラバーバ・ウイナーがそつと呟く。そうかも知れない、と思う。

自分と言う存在が、既に不要となってしまった筈の地球。

だがそこにはまた、確かに手を差し伸べてくれる人もいた。ともに支えてくれる人もいた。

不本意であっても、息苦しさに満ちていても、彼らが居てくれるこの地球で、未だリオの物語は続いている。

様々な思惑を呑み込みながら、少年たちの戦いは、一つの奔流へと

導かれていく。

未だ見えぬゴールを求め、戦いはクライマックスへ。

『ゼクス、強者など何処にもいない。

人類全てが弱者なんだ。

俺もお前も弱者なんだ』

ヒイロが吠える。

その通りだヒイロ。

己の弱さを知る。

そこから始めなければ、人は再び立ち上がる事は出来ない。

『——私はまだ、自分を弱者と認めていない！』

ゼクスが叫ぶ。

ああ、その通りだゼクス。

男ならば何処までも突っ張って、己の意地を貫き通すべきなのだ。

少年たちの激情を一身に受けて、リーブラが燃える。

沈みゆく船。

大気圏に煌めく翼。

爆走する機体。

揺れる照準。

滅亡へのカウントダウン。

『……俺は、死なないイツ!!』

ヒイロが叫ぶ。

徹胴徹尾、己を消耗品として扱ってきた少年が。

ただひた向きに、戦いの終わりを望んでいた少年が。

絶望を打ち砕く、最後の一撃を放った少年が。

「あ、ああ……い！」

霧が晴れたように、視界がクリアーになった。

答えは出た。

あまりにもシンプルな回答。

そうか。

そうだったんだ。

「——宇宙の心は、彼だったのか……！」

——ヒライ・ユイからの手紙に気付いたのは、エンドレスワルツの観賞を終えた三日目の朝だった。

手紙には筆まめの女の子らしい細やかな文字で、先日の一件に対する謝罪が懇切丁寧に書かれていた。

三日の内に少女の心境にどのような変化があったのかは分からない。

けれど、土、三日会わざれば、と言う言葉もある。

長編アニメを一本見た、ただそれだけの事でも人の心は変わり得るのだ。

そして今、括目すべきナガラ・リオ少年は手紙を手に、一路ユイの住居を目指していた。

手紙の文面は、本当に謝罪の言葉だけである。

返礼だけならば、それこそこちらも手紙だけで足りるのだろう。

だがそれでも、リオは直接ユイに会って話をしたいと思っていた。

何を話せばよいのか、そこまで考えているわけではない。

ただ今ならば、彼女に会う事で、リオ自身の本心を見つけられるような気がしていた。

あるいは徹夜明けのテンションの高さが、そんな錯覚を引き起こしただけなのかもしれないが。

「ハイツ『ビグ・ラング』603号室……」

ちらりとリオの目が、年季の入ったコンクリート造の集合住宅を見上げる。

そこがオートロック式のマンションでは無かった事に感謝しつつ、目的の部屋の呼び鈴を鳴らす。

待つ、十秒、反応は無い。

留守かと思いきや軽くドアノブを回す。

ドアは普通に開いた。

「——ヒライ、いるのか？」

軽く深呼吸し、意を決して廊下の奥へと呼びかける。
程なく、か細い声で返事が聞こえた。

「……ナガラ？」

「ああ、そうだ、ナガラ・リオだ」

「入って」

玄関に姿を見せるでもなく、用件を聞くでもなく、あつけらかんと少女が言う。

やや緊張した面持ちで、下駄を脱いだリオが廊下の戸を開ける。

なんだこれは？

なんだこれは？

なんだこれは？

部屋の入り口でリオが絶句する。

ガンプラだ。

山と積まれたガンプラの箱だ。

完成品たちが所狭しと並ぶ棚だ。

呼び方も知らない工具が無造作に置かれたテーブルだ。

そしてその奥、こちらに背を向けて机に座る、ジャージ姿の少女の背中だ。

幻想が死ぬ。

これが思春期を殺した少女の部屋だ。

もしも今、ここが超級堂のガンプラ秘密製造工場なのだと言われたら、リオは二も無く信じる所である。

集中を妨げないように、静かに引き戸を閉める。

傍らのブラウン管では、ビーム砲を外したグラスアンが何か言い訳を言っている。

職人の中には音が無いと集中できない輩がいると言うが、あるいは彼女がそうなのかもしれない。

そつと少女の机を覗き込む。

作業台の上には、白を基調としたMSのパーツが、部位に合わせて丁寧に分解されて置かれている。

そして肝心の少女はと言えば、その内のパーツの一つを手にとって、丹念にヤスリ掛けをしている所であった。

「こいつはリーオー……、ではないみたいだな」

「1/144スケール、HG『トールギスⅢ』

私のプロトリーオーは、このキットを使ったセミ・スクラッチ」

「せみ……」

言いかけてリオが「ああ」と頷く。

つまりあの白色のリーオーは、キミコの用意したリミテッドモデルではなく、目の前のトールギスを成形し直して作った機体だったと言うわけだ。

そう言えば劇中のトールギスもまた、かつてプロトタイプリーオーと呼ばれる機体であった事を、遅まきながらに思い出す。

だが……。

「それじゃあサイズが合わないんじゃないのか？」

トールギスは確か、随分と大柄な機体だった筈だろ？」

「トールギス17.4メートル、リーオー16.2メートル。

単純に意匠を改造しただけでは、トールギスはリーオーたり得ない。

だから全体のバランスを確認しながら、パーツを丁寧に成形し直す必要がある」

一切視線を変える事なく、淡々とユイが語る。

やがて納得が行ったのか、ふっと一つ息を吹きかけると、そこでパーツを置いてリオに向き直った。

「ガンダム、勉強したのね？」

「……見たよ、W」

「そう……」

と、折角の会話がそこで途切れてしまう。

相変わらず表情を読む事を阻む、少女の瓶底眼鏡がいけないのだからか？

あるいは知らず、この敵地の雰囲気、リオ自身が吞まれてしまっているのか？

だが意外な事に、次の会話はユイの口から始まった。

「ナガラ、手を、見せて」

「……手？…俺のか」

「そう、空手家の手」

少女に促され、やや躊躇いがちに右手を差し出す。

みちみちと、指先までが異形と化すまでに膨れ上がった、空手家の拳。

先日の若気の至りで、手の甲にはグルグルと巻き付けたバンテージの下から、うっすらと朱の色が滲み出ている。

その血染めのバンテージの上を、そっと少女の細い指先がなぞる。分厚く膨れ上がった掌をぐにぐにと両手で弄び、やがて納得が言ったのか、ふうつとユイがため息を吐く。

「見て」

そっと、机に置かれていたパーツの一つを手に取り、リオの前へと差し出す。

「……いつは？」

「この間の、プロトリーオーの手」

まじまじと、リオがその小さなプラスチックの手を見つめる。

成程、試合中に深刻なダメージを受けた記憶こそ無かったものの、確かにその指先は大きくひび割れ、今やかろうじて原形を保っていると言う有様であった。

「……俺が、後先も考えずに滅茶苦茶にぶっ叩いたから、こんなになっちまったんだな」

深刻に声をトーンを落としたりオに対し、ふるふるとユイが首を振るう。

「違う。」

ナガラの拳は、どこも壊れてはいない。

ただ、私のリーオーの指先が、空手の威力に耐えられなかっただけ」

「……………」

「最後の貫手……。」

ていた」

そう言って俯くユイの横顔に、リオは先刻の手紙の意味を知った。ガンプラを愛する少女である。

表面的な性格は違えど、あの劇中のヒロ・ユイのようにストイックな少女である。

自らのミスによって、リオとリーオーは敗北した。

その事実が少女の魂を苦しめていたのだ。

(それは違うぞ、ヒライ)

そつと心の中でリオが呟く。

あの技が決まっていれば、だとか、あそこで怪我をしていなければ、だとか。

ビグザム剛田との一戦は、そんな仮定が通用しない惨敗であった事を、戦ったりオ自身に誰より理解しているのだ。

だが、それを彼女に告げた所で何になるだろう。

リーオーの指先は、現に壊れてしまっているのだ。

彼女にどんな慰めを掛けられたとしても、リオの中の敗北感は拭えないように。

リオがどのような弁護をしようとも、それは所詮、傷の舐め合いにしかないのだ。

「ヒライ」

意を決し、リオが少女の名前を呼ぶ。

エレガントな一手が必要とされる場面であった。

彼女を包む敗北感を、新たに立ち上がる力に変えられるような一手が……。

「少し……、表に出ないか？」

ちらちらと、桜の花が舞っていた。

鮮やかな桜吹雪の河川敷を、黙々と二人は歩き続けた。

カラン、コロンと言う下駄の音。

一步遅れて、カーデイガンを羽織っただけのジャージの少女。
どこか、当てがあつた訳ではない。

ただ、言い知れぬ敗北感を共にする二人にとって、あの部屋はあまりにも息苦しいとリオは感じてしまったのだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……俺も」

「…………え？」

ゆつくりと、リオが重い口を開く。

ここに来るまでに考えていた、ユイに伝えたかつた事。

それが何であつたかを十分に自問する。

「俺も、リーオーが一番好きだ」

「…………そう」

「……………」

「……………」

——会話が、途切れる。

おもむろに足を止め、川べりの土手に腰を下ろす。

少し躊躇つて、ユイもその斜め後ろにちよこんと座つた。

「……………」

「……………」

それつきり、しばらく二人は無言であつた。

だが、その居心地は存外に悪くない。

あるいは本当は二人とも、言葉など求めていなかったのかもしれない。
い。

本当は二人は、ただ少しの間、ガンプラや空手から離れて、ぬぼーつと川の流れを眺めるだけの時間を欲していたのではないだろうか？

キラキラと太陽の光を反射して、いつかのスポットライトのように水面が煌めく。

あの夜の熱狂など忘れてしまったかのように、ゆつたりと世界が時

計を刻む。

「……なあ、どうして、ガンプラファイトだったんだ？」

どれほどの時間が流れただろうか？

ほつり、とりオが胸中に沸いた疑問を口にした。

非公認、非合法のガンプラファイト。

カタギの少女が容易く足を踏み入れる世界とも思えなかった。

「友達がいらないから」

ややあつて少女から返ってきたのは、掴みどころのない回答だった。

「ガンプラバトルの学生公式大会は、三対三の団体戦。」

私には、チームを組んでくれる友達がいらない」

「ああ……」

「ガンプラファイトは、ネットで知り合ったハム姉が教えてくれた。

私にとって、あそこがガンプラを発表できる唯一の場所」

「……………」

そして、その彼女の居場所に突如、土足で踏み込んできた素人こそが、ナガラ・リオである。

今ならば、最初に出会った時の彼女の苛立ちも良く理解できる。

と、そこまで言われて、ようやくリオも気が付いた。

今日は休日では無い。

学校指定のジャージを着た少女が、こんな所をうろついている状況は異常だ、と。

学校はどうだ？ 家族は？ 友達は？

普通一般の世間話と言うのは、そう言った所から入るべきだったのだろう。

あるいはリオがまっとうな真人間だったならば、ここは彼女の更生のために尽力するべき場面なのかもしれない。

けれどもリオはまっとうではない。

先日キミコが言ったように、戦っている時以外はからつきしの男だ。

三日前までは、プロレスに負けたショックで山に引き籠ろうとして

いた男だ。

いびつで結構、そう胸を張って言えるような生き方を取り戻そうと
している男だ。

「ヒライ」

だからリオは、いびつな人間なりの助言を送る事にした。

「……なに？」

リオから差し出された、やや歪んだ茶封筒を瓶底眼鏡がまじまじと
覗き込む。

「100万ある。」

「この間の試合の、お前の取り分だ」

「……………」

無言。

けれどその静寂の持つ意味合いは、先刻までの空気とはまるで違
う。

初対面の時のような、やや張り詰めた緊張感。

少しずつではあるが、リオは少女の眼鏡の奥の感情の色を判別でき
るようになりつつあった。

すつと白い指先が茶封筒を押し返す。

「私のガンプラは、お金儲けの道具じゃない」

「俺だって同じ気持ちだ。」

親父の空手は見世物じゃねえ」

と、ひとまず少女の言葉を肯定しながら、それでもリオは封筒をし
まおうとはしない。

「それでも受け取るんだ、ヒライ。」

この金で新しいプラモを買って、工具を揃えて、最高のガンプラを
生み出す環境を作るんだ」

「……………」

「お前は俺と同類だよ、ヒライ。」

俺たちに必要なのは常識じゃない、プライドだ。

一度失った誇りは、戦って噛み付いて取り戻さなけりゃ、後は野垂
れ死にするだけだ」

「……私にはもう、あなたと組む資格が無い」

「言つたら」

ゆつくりとリオが向き直り、再びずっと封筒を突き付ける。

「俺はリーオーが好きだ、それが答えだよ」

ざつ、と一際強い風が吹き付け、桜の花びらが千々に踊る。

リーオーが好きだと言う、その言葉は決して偽りでは無い。

自分でもおかしな感性であると思う。

あるいは初めて手に取った機体と言う愛着が、知らずそう思わせただけかもしれない。

だが、骨格にまで戦いの美学が宿るかのようなACのMSに惚れ込みながらも、それでもいつしか、リオの瞳は敗れ行くリーオー達の姿を追い駆けていた。

「……ザクⅡFZ型、リーオー、GN-X」

ポツリ、と何かのおまじないのように、少女が呟く。

「アニメの中で、『ガンダム』を倒した量産機の名前。

本来ならば、それは絶対に起こり得ない奇跡……」

リオが静かに頷く。

ユイの言わんとしている事、自身の抱く愛着、その回答が少し分かった気がした。

「リーオーは何処にでもある、ありふれた機体。

でも、だからこそ特別な機体、可能性の獣」

「……………」

「いつの頃からか、私は自分がガンダムではない事に気が付いた。

だから、だから私は、リーオーになりたい」

そつと少女の細い指が、茶封筒の端を掴む。

二人を挟んで引きあつた封筒の中心に、ひらり、と花びらが舞い降りる。

「縁起の良い話だな」

そう口にして、にっ、とリオが笑みを見せる。

そう言えばゴウダの愛機もガンダムタイプだったな、と今更ながらに思い出す。

彼女はどうかだろうか？

こちらをまつすぐに見つめる瓶底眼鏡は、相変わらず表情を読ませ
てくれない。

——笑っていれば、良いと思う。

「とりあえず、さ——」

そつと封筒の端を放して、パンパンとジーンズの土を払う。

この新しい盟友と何を成すか。

野望の第一歩目は、既に決まっていた。

「昼飯にしようぜ、ヒライ。

俺がもんじやの焼き方を教えてやるよ」

舞術家 安室恋（アムロ・レン）①

——六月。

燦々と太陽が照り付けていた。
霧雨に煙る本州の梅雨空など嘘のように、乾いた南風が潮の匂いを運んでくる。

根平島（ねだいらじま）

沖縄本土より東に120kmほどにある、猫額のような小さな離島。

島民およそ400人あまり。

年間を通して穏やかな気候で風光明媚な地として知られるが、交通の便が悪く、また近辺の島々に比べ観光資源にも乏しい。

行楽シーズンを外れたこの時期に島を訪れるのは、よつぼどの物好きと言えるであろう。

「……暑い」

そして今、そんな物好きの一人が、手製の地図を片手に慣れぬ道をとぼとぼと歩いてた。

洗い晒しのTシャツにジーンズと言う、旅行者とも思えぬラフな出で立ち。

背は低く、決して肉厚ではないが、しかしよく見れば相応に引き締まった体躯。

ジャリジャリと海砂を噛む愛用の下駄。

ナガラ・リオである。

全身がこれ、そのまま空手と言った少年である。

彼が異郷を歩くならば、観光と言うより回国修行と言った方がしつくりくるだろう。

だが今日、彼がこんな場違いな通りを彷徨っているのは、観光のためでも修行のためでもない。

「……多分、この辺りなんだろうけどな」

ボリボリと頭を搔いて、困ったように周囲を見回す。

と、その碧い瞳が一軒の旧家を捉える。

ややくたびれた感のある、気持ち広い敷地を持った平屋。

伸びるに任せた生垣に阻まれ仔細は分からないが、何とは無しに実家と似た雰囲気があるのだ。

おそらくは道場があるのだ。

ひよこりと玄関を覗いてみると、朽ちかけた看板には「ほね つぎ篤人」の文字がかすれて見えた。

「——ごめん下さい」

意を決し、開けっ放しの玄関に挨拶をする。

やや間を空けて、もう一度。

反応は無い。

(留守……、なのか)

はて、と一つ首を捻る。

何せ世俗とかけ離れた離島の家である。

防犯対策、などと言う習慣もないのかもしれない。

一度出直すか、さりとて時間を潰せるような場所も分らない。

と、不意にみしり、と床板の軋む音を耳にして、返しかけた踵が止まる。

家人がいるのか？

しばしの逡巡の後、リオは音の正体を確かめるべく中庭へと回った。

・
・
・

炎が舞っていた。

炎のような、鮮やかな紅の髪の毛だった。

少女である。

年の方はリオよりも一つ二つ上か？

身長は170前後と、女性としては長身の部類に入る。

白の胴衣に藍の袴、更に足袋履きと言う清楚な出立ち。

そんな中で、ポニーテールに結び上げられた真紅の髪の毛だけが、まるで彼女の生来の気質を曝け出すかのよう、道場の中心でひら

り、ひらりと舞っていた。

(……舞踊?)

中庭から呆然とリオが視線を送る。

ここがもし踊りの道場であるならば、まったく見当違いの家に不法侵入してしまった事になる。

しかし少女の装束は、踊りと言うよりも、やはり古い武術家のそれに近いように思える。

だとしたらあの動きもまた、噂に聞く篤人流古武術の型の一つなのであろうか?

「出歯亀、いつまでタダで覗いとるつもりじゃ?」

一切の動きを止めず、振り向きもせず少女が言う。

問われ、リオが軽く会釈をする。

「こちらの道場に、アツト・フスノリ(篤人伏朔)先生はおられますか……?」

「なんじゃ、じいちゃんの客かえ?」

カカ、今どき酔狂な小僧もおつたもんじゃ」

童女のように透き通る声で、老婆のように少女が口を利く。

「じいちゃんは外回りじゃ。」

この時間帯は、島の足腰立たぬ老人どものお守りをしとるのよ。

そのうち戻るじやろうから、勝手に上がって待つとれ」

茶は出ないがな、と少女がカラカラと笑う。

下駄を脱いで道場に一礼し、板の間へと腰を下ろす。

その間も少女はマイペースで、ゆるゆると舞を止めようとはしなかった。

(……やっぱり、ただの踊り、か?)

道場の隅で、少女の真贋を見定めようとしてリオが見つめる。

少女の優雅な動きに、攻撃的な疾さは皆無である。

しかしどこかに違和感がある。

例えば、このままおもむろに立ち上がって、小細工抜きの前蹴り。

あるいは、全力疾走からの体当たり。

あるいは意表を突いて、一足飛びに胴廻し回転蹴り。

考えうる幾つもの攻撃パターンを、心の中で幾つも試してみる。しかし、イメージが追いつかない。

リオの攻撃は当たるようでもあり、また、当たらないようでもある。ゆらりと揺らめく少女の動きが、次の反応を掴み所のないものへと変えているのだ。

(あの、袴、だ)

リオの瞳が、少女の下半身へと移る。

明治以降の近代武術においては廃れる傾向にある袴姿。

機能性を欠き、時代の主流から外れながらも一部の流派でしぶとく残り続けた理由の一つが、足捌きの隠蔽、迷彩にあると言う。

先の読めない少女の足取りは、まさしくその理念と合致する。

少女の舞の中には、隙を見せた次の瞬間には、ゆるりと一足一刀の間合いを越えかねないような怪しさが感じられた。

ゆらりと振り向いた少女の燃えるような紅い瞳が、ちろちろと燃える少年の青白い瞳と交錯する。

(……わざと、か)

嗤っている、彼女の方から誘っているのだ。

どうした、打って来い、さもなくばこちらから仕掛けるぞ、と。

くつ、と、膝の上で握り締めた少年の拳が、気持ち固くなる。

少女の間合いが読めない以上、少なくとも正座はまずい。

腰を浮かし膝立ちをとり、次の動きに即座に対応しなければならぬ。

だが、少しでもリオが動けば、それが開始の合図になりかねない。道場の空気は、いつしか一抹の怪しさを孕んでいた。

「おう、レンよ、お客さんかい？」

絶妙なタイミングでかけられた一言で、道場の空気がふつと緩む。

ほどなく、白髪頭の小柄な老人がひよつこりと顔を見せた。

「ただの出歯亀じゃ」

興が削がれたと言った風に、少女がぱたぱたと胴衣を煽る。

はだけた胸元からちらりとサラシが覗く。

「……東京から、リー・ユンファの使いで来ました」

少女を無視してリオが老人に一礼する。
あれも罠だ。

鼻の下を伸ばした瞬間、人中を穿つ腹積もりに違いあるまい。
「ああ、それじゃ君がナガラ君かい？」

話の方はリー氏から聞いていますよ。

ま、こんな所で話もなんだ、居間の方にお上がんなさい」

老人、アツト・フスノリはそう言つて皺だらけの顔に笑みを浮かべた。

リオは一瞬、少女の背中を視線で追うと、すぐに振り向き老人の後に倣つた。

篤人流は、その起源を戦国期の組み打ちにまで遡る事が出来るという古流武術の大家である。

本家は江戸中期から後期にかけて衰退したが、寛永期に琉球に移り住んだ庶流はなお現在まで存続している。

今、リオの眼前にいる豊鑠とした老人こそが、現代の宗家、アツト・フスノリであり、古流など理屈倒れの舞踊、と嘲笑う武術家達であっても、彼の技だけは別、と噂するほどの名人であつたと言う。

「さて、リー氏からの依頼と言う事は、やっぱり例のガンダム……とか言う奴の話かな？」

「はい」

年季の入つたちやぶ台を挟み向かい合つて、やや困つたように二人が苦笑する。

「すでにリーから連絡はあつたと思いますが、今年の八月に彼が企画している【ガンプラ・ファイト最大トーナメント】

その出場依頼について、アツト先生の意向を確認してくるようになつて、と言われています」

「うん……」

曖昧な口取りで、アツトが啜えた煙草に無造作に火を点ける。

先ほどの少女と同じ、意図的に隙を見せている動作であるが、その意図する所は少女とは真逆である。

「まあ、やはり色良い返事はだせないな。

見ての通り、儂はもう楽隠居の身分でね、今更、武術の世界に舞い戻ろうなどとは思えないよ」

「そうですか」

「ナガラ君には、わざわざ遠方よりご足労願っておいて申し訳ないんだが」

「構いませんよ。

とりあえず答えを聞いてくれば良い、と言うのが俺の仕事ですから」

そう言つて、清々したようにリオが笑う。

元より、日銭に困つてさえないなければ受けるほどもない小間使いである。

広いガン普拉バトルの世界には、トッププロと渡り合うほどの業前を持った老人もいる、と言う事はヒライ・ユイの受け売りで知っていたりオであったが、この老人の住居を見るに、そう言ったハイカラな趣味があるようでもない。

おそらく、初めからダメで元々の依頼だったのであろう。

ただ一つ、ここまで来ておきながら、名に聞く篤人流の技を目にせずには帰る事だけは残念であったが、それを強いて目の前の老人に求める事も出来ない。

「これまでも騙し騙しやって来たもんだが、流石に時勢と言う奴だろうね。

道場の方も、儂の代で終いにするつもりだよ」

「……さっきの娘は、門下生ではないんですか？」

「ああ、ありやあ孫娘のレン（恋）でね。

やってるのは武術じゃない、安室流の舞踊さ」

「安室流？」

リオの問いかけに対し、アツトがふう、と煙を吐き出す。

「この島の土着の舞踊でね。

ウチの先祖が根平島に流れ着いた際に、当地の舞踊を保護したのが看板の始まりってワケだ。

以来、ウチの道場では、男は武術、女は舞踊を代々教えて来たんだよ」

「そう、だったんですか」

「息子夫婦が死んじまって、そっちの方も店じまいにするつもりだったんだが、誰に似たのか頑固な娘でねえ」

「はあ……」

半信半疑と言った風に、リオが首を傾げる。

宗家の言葉に間違いがあるとは思えないが、さりとして先刻の剣呑な空気が、ただの演者の技とはどうしても思えなかった。

「まっ、しち面倒臭い話はこれくらいにして」

ぽん、と一つ柏手を打ち、アツトが砕けた好々爺の笑顔を見せる。

「せっかく遠い所から来てくれた事だ。

ナガラ君、今日はゆっくりして行きなさい。

何にもない島だが、魚の方は絶品でね」

「あ、いえ、折角ですが……」

できれば今日の内に本土に戻ろうと思っています」

「今日？」

アツトは一瞬、訝しげな視線を向けたが、その内にカラカラと笑い声を上げた。

「ハハハ、どうやらリー氏に誑かされたな、ナガラ君」

「……はい？」

「本土からの船は二日に一本、明後日の昼までは帰れやせんよ」

・
・
・

「……と、まあそんな訳で、俺はあと二日は沖縄だ。

悪いがしばらく、ガン普拉作りは手伝えねえ」

「……………」

黒電話越しに溢れる沈黙に、リオが一つ溜息を吐く。

通話先の少女、ヒライ・ユイの感情の色を、最近ではおぼろげながらに理解できるようになってきたリオであったが、さすがに顔が見えない状況ではそれも叶わない。

「……安室流、恋……」

「うん？」

数秒後、受話器から聞こえたのは予想外の言葉であった。

「今年のガン普拉バトル選手権オープントーナメント。」

九州予選のファイナリストの名前が、アムロ・レン」

「——！ そうなのか、ヒライ？」

「うん。」

常連で固まる九州地区に現れた超新星。

圧倒的な実力で決勝まで勝ち進んで『リアルニュータイプ』とか呼ばれてた」

「ニュータイプ……？ ああ、そう言う……」

「でも、なぜか決勝戦に現れなかった、謎の多いガン普拉ビルダー」

「……………」

「……多分、私の考えすぎ。」

その娘の本名がアツト・レンなら、きっと別人、ただの偶然」

「どうだかな」

ちらりとリオの脳裏に、ドヤ顔でほくそ笑むリーの顔が思い浮かんだ。

篤人流古武術とガン普拉・ファイトを繋いだ細い糸。

リオにはどうしても、それが単なる偶然とは思えなかった。

ため息を吐いて受話器を置くと、リオはアツトに断りを入れて外に出る事にした。

月光に照された寒村の砂浜を、一人歩く。

観光シーズンを外れているとは言え、交通の便が悪いとは言え、流石に風光明媚の地である。

波の音と潮の香り、きらめく波濤。

少年の中をゆったりと流れていく時間。

それがもどかしい。

八月、本格的に動き出す事になる、ガンブラ・ファイト地下トーナメント。

二か月前の敗北よりようやく回ってきた、自分を取り戻すための戦いの時。

何もしていない時間が耐え難い。

どんなガンブラを作れば良いのか。

自分は本当に強くなっているのか。

不安の埋め方を、亡父は己の体を虐める方法でしか教えてくれなかった。

もつと体を鍛え、技を磨き、ヒライとリーオーの話をしたい。

(……本音を言えば、見たかったな、篤人流)

とりとめの無い事を考えながら、黙々と砂浜を歩く。

行き場の無い野良犬が、胸の中で空きつ腹を抱えている。

——と、

(……なんだ?)

砂浜の先、棧橋に小型の漁船が停まっている。

暗くて判別はつかないが、幾人かの人間がいるようである。

近づくほどに喧騒が大きくなり、剣呑な空気を孕んでいく。

嘲弄するような女の声、何やら捲し立てる男の声。

「おい、アンタら、何やってんだ?」

「ウルセえッ!! お前もこの女の仲間か!」

言うが早いのか、目前にいたパンチパーマが拳を振りかざす。

余程頭に來ているのか、弁解の暇もない。

「おいおいおいおい」

言いながら右手の甲で拳をはたき落とし、下駄の刃で向う脛を蹴り上げる。

「うげえ!」と一つ声を上げてパーマが転がる。

「テ、テメエ……」

「おい、そっちは大丈夫か?」

片足を抱えてうずくまったパーマを無視して、奥の三人に声をかけ

る。

殺気だった瞳でこちらを振り返る二人の男。

そして、その後ろでうづくまっっているワンピースの女。

「ぐッ……！ うゲアアアア——ッ!？」

と、次の瞬間、異変が起こった。

女の傍らに居た男が、突如として悲痛な叫び声を上げたのだ。

すっく、と女が立ち上がる。

後ろに取られた男の左腕が、あらぬ方向にねじ曲がっていく。

「……カカ！ カア——ツカツカツカッ!！」

童女のように澄み切った声で、悪魔のように女が嗤う。

パシィツと、勢い良く男の脚が払われて、捻じられたベクトルのま

まに宙に舞い、棧橋から海へと落ちる。

「お、おま……」

「ケキヤア——ッ」

純白のワンピースを惜しげもなく翻し、少女が残った一人の股間を
思い切り蹴り上げる。

声もなく崩れ落ちる男の背を踏み、月下に紅蓮の髪が躍る。

「~~~~ツツ!？」

「シヤアアア——ッ!!」

風を巻いて飛来した横薙ぎの爪を、首を捻じってかろうじてリオが
避ける。

一拍遅れ、頬に赤い筋が走る。

驚く間もなく空いた少女の右手がVの字を作り、リオの両眼めがけ
て思い切り突き出される。

咄嗟に右腕で払い、左の掌て——

（……ッ！）

返す間もなく、リオの世界が反回転する。

掴まれている、右手。

いつの間に崩された？

（受け身！）

すぐさま我に返り、体を丸めて砂の上に落ちる。

刹那、思い切り顔面を蹴られる。
サンダル。

鼻血が吹き出し、両眼が砂で塞がれる。

「カハッ」

迷わず跳ね起き、大きく飛び退く。

ボヤける視界の中で、少年は焔の瞳が爛々と煌めくを見た。

飛んでくる。

殺気。

（――肩間?!）

リオの眼前で、ガギン、と鈍い音が爆ぜる。

月明かりを浴びて光る、銀色の簪。

それが今、咄嗟に左手で差し出した下駄の上に突き立って、ビイ
イイイン、と震えていた。

「カーツカツカツカツ、惜しかったのう空手小僧！

どうやら今度は殺し損ねたわい」

燃え盛るロングヘアをたなびかせ、少女のように野獣が囓う。

アツト・レン。

いや、きつと彼女の基準では、アムロ・レンと呼ぶべきなのだろう。
くつくつと、少女につられてリオも囓う。

安心していた。

この分ならあと二日、少なくとも退屈に殺される事は無さそうだと。
と。

舞術家 安室恋（アムロ・レン）②

——深夜。

担ぎ込まれた急患たちを孫娘ごと駐在に預け終えると、アツト老人はえらく疲れた様子でどつかと居間に腰を下ろした。

古ぼけたちやぶ台を挟み、リオが無言で老人を見つめる。

「……あく、さっきの男衆だがね。」

駐在の話じゃあ、やつぱりここいらを荒らし回つとる密漁者の類のようだね」

「密漁……、ですか？」

怪訝な顔をする前で、アツトは頷きながら煙草に火を点けた。

「うん。」

本土の方は何を今時、と思うやもしれんが、昨今はそう言った輩が多くてね。

漁協に属さず、高級魚や海産物ばかりを狙って好き勝手やりよる。

酷いになると、地元の者たちが丹精込めた養殖場まで荒らしていく。

さりとて離島の寒村じゃあ、まともに警戒する事も出来んで手を焼いとるのよ」

「ははあ……」

気のない返事をしつつ、老人の言葉の意味を、リオが頭の中で咀嚼する。

「つまりレン……、お孫さんは海岸で怪しげな船を発見して、そこでさっきの連中と口論になり、咄嗟に手が出てしまった」

「うん、まあそんな所だろうね」

「で、その後、気が動転した彼女は、たまたま居合わせた俺を、連中の仲間と勘違いして襲ってきた？」

「うん……」

「そんなワケないでしょ」

ふへら、と呆れたように苦笑がこぼれる。

つられた老人が、いかにも気恥ずかしそうに頭を搔く。

先刻の少女のやり口、あれは明らかに手慣れた喧嘩屋の犯行である。

手当たり次第に暴力を振るいたい、などと言う可愛らしい欲求ではない。

血の気が多く、脛に傷を抱え、警察沙汰になっても泣き寝入りするしかないゴロツキ。

今宵の彼女は、そんな格好の獲物を求めて人気の無い海岸線を徘徊していたのだ。

「いや、君をこんな身内の恥に巻き込んで、本当に申し訳ない」「俺の方は構いませんがね、そろそろ教えてもらえませんか？」

安室流の舞踊つてのは、一体何なんです？」

「うん……」

そこで一つ言葉を区切ると、アツトは観念したかのように煙を吐き出した。

「昼に君に話した通り、安室流は寛永期に根平に移り住んだ当代の篤人が、現地の舞踊を保護したのが興りなワケだが……」

その起源はもつと古く、唐代の宮廷武術が形を変えて伝わったもの、と主張する先生までおる」

「宮廷武術……、中国拳法、ですか？」

「まっ、あくまで仮説の一つ、としてね。」

とにかくウチのご先祖さまは、安室の女の動きの中に何らかの武芸の極意を見出したらしい。

やがて二人は結ばれる所となり、その後、篤人家は代々、男は武術、女は舞踊を修めるようになった」

「そしてレンは篤人流と安室流、両方の技を継いでいる、と？」

リオの推測に対し、アツトが悲しげに首を振るう。

「儂はアイツに直接、技を教えた事など無いよ。」

君に話した通り、古武術は儂の代で終わりにするつもりだったんだ」

「けれど、先刻の彼女の動き、とても一朝一夕で身に付くものとも思えません」

「一朝一夕で身に付いたのよ。

大好きだった祖母の舞踊を続ける内に、何かしら閃く所があったらしい。

儂の型稽古を盗み見し、伝来の覚書を密かに読み耽り。

それだけでアイツは篤人の技の粗方を修めてしまった」

「馬鹿な……」

「世の中にはそう言った天才、一種の化物が少なからずおる。

だが奴の力は君のように、地道に一歩ずつ手順を積み重ねて築き上げた物では無い。

よく斬れる名刀ではあっても、それを納める鞘拵えがなっておらんのだ」

嘆息を吐いたアツトに対し、リオが静かに頷く。

リオの心の中にも、確かに先ほどのレンのような野良犬が住んでいる。

だがその獣は、亡父から施された武の鎖によって、かろうじて繋ぎ止められていた。

少なくとも彼女のように、獲物を求めて徘徊するような浅ましさは無い。

「何とかならないもんでしょうか？

このままじゃあの女は、遠からず人の道を踏み外します」

孫ほども開きのある少年からの真摯な忠告に、さしもの好々爺も襟を正して頷いた。

「こう見えて儂は儂で、色々と考えてはみたんだよ。

今から武術の心構えを教えるのが不可能ならば、せめてその興味を暴力以外に向けられないかとね。

例えば、アイツに買い与えたプラモデルなんかは良い線行っておつたと思うのだが。

奴め、昨年の特ナメント決勝を目前にして、突然全てを投げ出してしまっておったわ」

プラモデル。

先のヒライとのやり取りを思い出し、リオの中で全ての線が一本に

繋がる。

「……ようやく話が見えて来ました。

先生、アンタ初めからプラモ屋とグルだったんだ。

アイツにガンプラ・ファイトをやらせる為に、俺をアテ馬に使うつもりで呼んだんだね？」

「いやいやいやいや！ ナガラ君にはまっこと申し訳ない事をした！」

そう言っただけで老人が困ったように頭を搔く。

人懐っこい、どうにも憎めない笑みであった。

「構いません、むしろ最初からそう言ってくれた方が早かった」

ふう、と一つ苦笑しながら、リオがおもむろに立ち上がる。

「もう一度、電話をお借りしますよ。

明日の夕刻、俺のために用意したガンプラを持って砂浜に來い、と。
レンの奴が戻ったら、そう伝えといて下さい」

・

・

・

——バラバラと、ローターの音が静寂の海岸線にこだまする。

おもむろにリオが顔を上げる。

沈み行く夕闇の空に違和感を以て浮かぶヘリコプター。

そのサイズが異常に大きく見えるのは、決して遠近法による錯覚ではない。

アムロ・レンと一戦交える。

そうリーに告げてからわずか一両日中の行動力に、非日常に慣れたリオも驚かざるを得ない。

「あれがリー・ユンファアご自慢の魔改造H a i r o かね？」

カカカ、金持ちと言うのはイカれておるのう。

野試合一つに幾らかけるつもりじゃ？」

パチパチと爆ぜる篝火の向うで、真紅の長髪が紅蓮の炎のように揺らめく。

初めて出会ったときと同じ、白の胴着に藍の袴姿。

安室流舞踊、アムロ・レン。

古風の清楚さを持った出で立ちと、なお隠し切れぬ野生のギャップが、少女の立ち居振る舞いに並々ならぬ妖絶さをもたらしている。

「……初めから、お前とプラモ屋の間では話がついていたんだな、アムロ」

「然り。」

以前、あの男が根平を訪れた時にこう言ったのよ。

いずれ、儂の心を熱く出来るだけの戦士を用意する。

ガンプラ・ファイト参戦の是非は、その勝負の後で聞く、とな」

舐めるような視線でリオの全身を値踏みしながら、さらにレンが言葉を重ねる。

「じゃがのうナガラよ。」

なんだって今更、こんな茶番が必要なんじや？

儂らが遊ぶだけなら、あんな大袈裟な玩具は要らぬ。

昨日みたいに勝手に始めてしまえば良いだけではないか」

そう言つてカカカと嗤う、真つ赤な唇、真紅の瞳。

蟲惑的な熱気に当てられ、くらりと一つ頭が揺れる。

なんて良い女なんだ。

少年の中の野良犬が、少女の言葉を全身で肯定して震えている。

「……俺はゴメンだな。」

遊び一つの為に殺人犯になりたくはねえ。

アツト先生との約束もある」

獣を必死に鎖で繋ぎ止めながら、淡々とリオが嘯く。

すつ、と紅い瞳に剣呑な輝きが宿る。

「随分と気取りよるのう、心にも無い事を。」

うぬはもしや、儂よりも強いつもりでおるのか？」

「どつちが上でも同じだ。」

俺はあのじいさんの事が気に入った。

俺とアンタのどつちが勝っても、それで先生を悲しませたくは無い

んでね」

「ハン！ 模範解答じゃな空手小僧。」

一番ぶちのめしてやりたいタイプじゃ」

やがて凄まじい旋風と砂嵐を巻き上げて、パースでも違えたかのような大型回転翼機が二台、砂浜へと降り立った。

旧ソビエト連邦製大型輸送ヘリコプター、Mi-26。

全長40・025メートル、最大定員150名。

現行機最重量を誇る圧巻の八枚翼。

だがそれも今となっては、荷台をまるごとガンプラ・トレース・システムに置き換えられた李大人のおもちや箱に過ぎない。

——ほどなく、ローターが完全に静止すると、見覚えのある小豆色のジャージ少女が、ひよっこりと砂浜に飛び降りた。

「ヒライ、わざわざお前が一人で来たのか？」

意外そうに声を上げたリオに対し、相変わらず思考の読めない瓶底眼鏡が小さく頷く。

「操縦士さん以外は、私だけ。」

武術家の立会いに介添人がゾロゾロいくのは無粋だって、ハム姉が言った」

「……妙な所で気を遣うな、あの人は」

「プロトリーオーは、私とあなたのMF。」

だから、リーオーの戦いを見届けるのは私」

そう言つて、鞆から取り出したガンプラをリオへと差し出す。

修復を終え、更にいくつかのチューニングが施された白色のリーオー。

いくつもの意見を重ねあいながら研鑽してきたこの機体が、かの『リアルニュータイプ』とやらにどこまで通用するのか。

久方ぶりの実戦の機会に、ぶるりと指先が震える。

「カーツカツカツカツ！」

神妙なる空気を遮つて、鬼の首でも獲ったように悪魔が嗤う。

「青春しておるのう小僧！」

武術家同士の仕合に女連れとは、随分と余裕ではないか？」

「おい……」

「それは違う」

リオの反論を遮って、ずいっとユイが一步前に出る。

「ナガラ・リオは、童貞」

「——!?!?」

……空気が凍る。

そんな周囲の変化を気にするでもなく、淡々とユイが言葉を重ねる。

「空手道の追求の為に、女人を絶って鍛錬に人生を捧げている。

男の中の男。

この人を侮辱する事は、私が許さない」

「……ッ!?!」

「……カカ!」

「カカカツ！ カーカカ！ カーツカツカツカツカツカツ!!」

アムロ・レンが嗤う。

嗤う。

嗤う。

嗤う。

因縁の死闘を前に、腹筋が崩壊して死にかねない勢いで身をよじらせる。

「ヒライ、お前は俺を……、そんな風に見ていたのか？」

「……？ 違う、の？」

意外そうな声を上げてユイが振り返る。

その瓶底眼鏡の奥底からは、彼女があなたかもリーオーに相對している時に見せるような、溢れんばかりの尊敬リスペクトの眼差しが伝わってくる。

「今の話、誰から聞いた？」

「ハム姉」

ああ。

理解した。

帰ったらブチのめそう。

そう深く心に刻みつつ意識を切り替える。

こんな些細な遣り取りが遠因で技を曇らせて負けたとあつては、亡父に対してあまりに申し訳が立たない。

「カカ、前言撤回じゃ！」

気に入ったぞ童貞野郎。

よもや今宵は女の味も知らずに死ぬ覚悟とはなッ！」

「うるせえッ！ どこでどう死のうが男は男よ！」

とんでもなく下卑た売り言葉に意味不明な買い言葉を返しながら、憤然とリオがヘリへと乗り込もうとする。

その背に向けて、おもむろに鞆から火打石を取り出したユイが、ガツガツと二回、切火を切る。

「武運を」

「……おう」

相変わらず感情の読み取れない瓶底眼鏡の少女の顔が、せり上がる鉄扉で次第に見えなくなっていく。

やがてゴドン、と言う音と共に機内は暗闇に包まれ、代わりに計器の明かりがそこかしこに灯り始める。

頭上から緩やかに下りて来たリングが容赦なく肉体を締め上げ、心の中の狂犬が否が応にも猛り出す。

「……ガンプライフアイト、レディー……、ゴー」

淡々とした少女の合図と同時に、少年の視界が鮮やかに一変した。

波の音が聞こえていた。

静かな月の夜だ。

足跡一つない真つ白な砂浜に、寄せては返す波の飛沫。

ただ一つだけ、先刻までと違う事。

それはこの世界がガンプら同士の雌雄を決するための仮想空間であり、リオは今、リーオーの鋼の足で以って砂浜を踏みしめていると

言う事だ。

(……今日は、死ぬには良い日だ)

心中の逸る獣を抑えるように、そっと胸中で呟く。

無論、致命傷をカットできるガンプラ・トレースシステムに於いて、果たし合いで死ぬ事は無い。

だが、そう心で安堵してしまえば、たちまちに武は本物で無くなる。人を殺せる技を使う。

しくじれば、いや、時にはしくじらずとも自分も死ぬ。

故に拳を握る時、まず最初に殺しておくべきは己自身だ。亡父の教え。

ナガラ・リオのガンプラ・ファイトは、そこから始める。

月を朧に覆っていた雲が去り、松の木の下に、一つの影を照らし出す。

ゆらりと一歩、月の下へと踏み出したのは、奇しくも同じ白色のMFであった。

窪んだ眼窩にはジオン系統機を思わせる深紅のモノアイ。突き出した鼻先と、額に屹立する一本角が特徴的な強面。

その厳つい顔立ちに相応しい厚めの胸板。

バックパックはなく、白地のボディに生える紅の襷を背に回している。

更に特徴的なのは、赤色の胴、紺色の垂の下に流した藍染の下半身。ガンプラ・ファイトにおいてはデッドウェイトでしかない筈の、脚部ブースターのアーマー。

その裾を却って広く取り、腰部から爪先まで、あたかも一体型の袴姿のようにすっぽりと覆い隠しているのだ。

和装としては正当、兵器としては異端。

今宵、リーオーの前に姿を見せた獣は、そんな古兵のような風格を持った異形のMFであった。

「あれは……、確かゲルググ、って言うやつか？」
『違う』

独り言のようなりオの呟きに対し、短くユイが答える。

『放熱フィンが無いから分かり難いけど、あれは多分、MSK-008
【デিজエ】

歴代のアムロ・レイ専用機の中で、唯一ジオン寄りのシルエットを
持つ異端のMS』

「異端……、捻くれ者のアイツ好みってワケか」

短く通信を切って半身を取り、爪先でじりじりと間合いを縮める。

一方のデিজエは無形。

だらりと両手を下げ、右足を僅かに出して前傾をとり、ゆらゆらと
上体を揺らしている。

（厭な感じだ）

ぴたり、と間合いの半歩外でリーオーが静止する。

デিজエは相変わらぬ脱力。

ゆらりと残像を描く深紅の単眼は、こちらに興味が無い様でもあ
り、そう見えた次の瞬間には、ゆるゆると撃尺の間境を超えていそう
な危うさもある。

「どうしたえ、先輩？」

けらけらと嘲笑うように、アムロ・レンが口を利く。

「今宵はうぬの手番では無いのか？」

ガンブラ・ファイトの面白さとやらを、手取り足とり教えてくれる
のであろう」

そう言って軽く左手を差し出し、厳つい外見に不釣り合いなしなや
かな人指し指で、くい、くい、と挑発する。

「……そうだな」

ふうっと、一息を吐いて、リオが一步踏み出――。

瞬間、デিজエが風を巻いて疾り出していた。

低い、四足獣のような極端な前傾。

（足取り？）

文字通り浮足立った右を押し留め、腰を落として迎え撃つ。

ぞくり。

殺気。

迎撃に向かう下半身に敢えて背いて、リーオーが大きく上体を反ら

す。

ひゅん、としなやかな指先がモニターを掠め、リオの鼻先に血玉が舞う。

「ちいイイイッ」

反撃の下段突き。

だが、既に敵はいない。

再びデージェは潜行し、リーオーの脛目掛けて体を浴びせる。グラリ、つんのめる。

肉体が咄嗟に踏み止まろうと力を入れる。

（イカんだろ、それは――！）

既に蔓の間合い。

足を止めれば腱を斬られる。

本能に抗いリーオーが思い切り前方に転がる。

砂地。

前回り受身。

振り向きざまに両者の体が入れ替わる。

デージェが上、リーオーが下。

斜めにかち上げる直突き。

読まれた。

右の膝頭を抑えるデージェの足。

立ち上がれない、迫る、打ち下ろしの手刀。

「シヤッ」

砂でも喰らえ。

左での目潰し、すかさず右手で足取りに行く。

スカされる。

あつさりと優位を捨て、片足立ちのデージェがゆるりと舞うように回る。

ようやく立ち上がったリーオーの前で、くるりと背面立ち。

隙だらけ、だが微妙に遠い。

逡巡。

「ケカツ！」

レンは見逃してくれない。
後ろ蹴り。

リーオーの股間目掛け、振り向きもせず真っ直ぐに踵を振り上げてくる。

「~~~~ッ!!」

受け、クロスした拳がころうじて間に合う。

そのまま後方に飛び退き、ヒョウツとひとつ息を吐く。

ゆらり、と再び幽鬼のようにデিজエが振り返る。

(何てえ事をしやがる)

恐ろしく冷たい汗が背中を流れる。

嗤う、それしか出来ない。

きつと眼前の少女も愛機の中で、同じように嗤っているだろう。

ガンプラ・ファイトは言ってしまうば遊びだ。

目突き、金的、脊椎。

致命的な攻撃、あるいは深刻な肉体の障害を伴うダメージを遮断できるようシステムが設定されている。

そして、それ故に禁じ手はない。

だからこそ躊躇なく突ける、蹴れる、打てる。

そんなワケがあるか。

理屈の上で分かっていたとしても、それを気兼ねなく遂行できる奴は気が狂っている。

故にセイイチロウの空手は、最初の一太刀でまず自分を殺す。

死人になって狂うのだ。

死人でも無いのに簡単に狂えると言うのなら、掛け値なしに彼女は天才だ。

(奴の頭の方はきっておき、問題は足元——)

ちらりと視線を敵の腰下に移す。

間合いに入って分かった。

脚部のアーマーはプラスチックではない。

もっと柔らかな素材、あるいはそれこそ本物の正絹を使っているのかもしれない。

大胆な意匠に反し半身が柔らかく動き、道場で垣間見た鶴のような歩調を再現しているのだ。

(……もう、考えてもしょうがないわな)

諦めて、腹を括って前に出る。

悠然と、無造作に、最短距離で。

待つて打てる手など無い。

篤人流も結局見れなかった。

何より、やられっ放しは性分ではない。

「ジャアアッ！」

歩きながら繰り出す、渾身の前蹴り。

間合いの外一杯、リーオー最長の槍。

ぬるりとティージェが沈む。

蹴り足をすり抜け下から迫る。

想定通り。

体を畳んで迎え撃つ、最短距離を駆け抜ける直突き。

至近、苦しい距離。

苦しいが、ギリギリ間に合う、ギリギリで打撃の間がある。

(——じゃろうのオ!!)

ぎりりとレンが歯を喰いしぼる。

想定通り。

ギリギリでリオは乗せてきた。

最短の直突き。

レンの方も想定通りならば、これは捌ける。

腹を括る。

ギリギリで間に合う、ギリギリで捌ける。

武術家の立ち合いは、常にギリギリでのせめぎ合——

(!)

緩い？

リーオーの右拳。

掴みにしては荒い。

打撃にしては温い。

2—3のフルカウントで突然ストップ抜けたかのような、完全に想定外の棒球。

想定外、故に捌けない、避けせない。

ただなんとなく、腕を交差して受け止めてしまう。

——着弾まで10センチ、突如としてリーオーの拳が爆ぜる。

「おわっ！ おおおおオオオ!?」

防御が浮く。

機体が泳ぐ。

初めてレンが狼狽の声を上げる。

(粒子発勁!?)

吹き飛ばされながら咄嗟に思う。

多分違う、あのシンプルな外見のリーオーに、きつとそんな小癩な技はない。

寸打、寸勁、ワン・インチ・パンチ……、だったか？

そつちのが近い気がする。

うる覚えな漫画の記述を信じるならば、それはオカルトではなく詐術。

拳を走らせる距離が無く、一見、力も入っているように見えない。

けれど実は体重が乗っていて、十分に威力が出せる。

秘訣はしなやかに連動する全身の関節。

唐突にふつと脳裏に過ぎる、ジャージ姿の瓶底眼鏡。

(いい娘を飼っておるッ！)

短い舌打ち。

思う間もリーオーが迫る。

立て直し切れない。

リーオーが追いながら打つ。

よろめきながらデিজエが捌く。

算盤を弾く、までもない。

足らない、間に合わない、TV顔、至近、踏み込まれる、今——！

「え……う？」

呆然と一つ呟いて、ヒライ・ユイが液晶端末に疑念を零した。完全に獲物を捉えたかに見えたりーオー。

その最後の一撃が放たれんとした刹那、不意に二機の動きが静止したのだ。

だらりと両腕を垂らし、大きく胸元を上下させるディージェ。

右拳を振りかぶったまま、ピタリと動きを止めてしまったりーオー。

マシントラブル、ではない。

ユイの瞳には無表情の筈のりーオーのTV顔に、苦悶の色が浮かんでいるのがありありと見えた。

「なんで、どうして……？」

何故だ？

りーオー、なぜ動かん？

ニュータイプ、バイオセンサー、しかも脳波コントロー……。

「……違うー！」

違う違う。

ようやく気付いた、これはオカルトではない。

撃尺の間合いで固まった二機は、その実ある一点で交錯していたのだ。

「……カカツ！ 惜しかったのう空手小僧」

ディージェが舞踏会のように両指で股立ちをつまみ、するすると袴をたくし上げていく。

ちらり、と白い足が覗く。

白無垢の足袋。

武骨で蔽つい重MFに不釣り合いな、女性のように細くしなやかな脚に鋭い爪先。

雀蜂のように獲物を穿つために、細く、鋭く作られた邪悪な爪先が、

今、リーオーの甲の一点を押さえている！

「そのための袴……！」

ヒライ・ユイが戦慄する。

異端の発想。

だが、捻くれ者などでは決して無い。

歴代のアムロ・レイ搭乗機の中から、レンは極めて合理的な観点で
デিজエを選択していたのだ。

細くしなやかな牙を隠蔽するための、太く、蔽ついジオン系MSを。
「さっきの寸打はちいつとばかり焦ったが。

後はまあ、だいたい道場でのシミュレーション通りじゃったのう、
ナガラよ」

「……ッ！」

通常の死合いではあり得ぬ至近で、カラカラとレンが嘲笑う。
反論できない。

テレビとかでよくある、やせっぽつちな合気の先生。

足のツボを踏まれ、大げさに悲鳴を上げる大男。

(そいつを……、実戦でやるかよ!?)

声が出ない。

灼けた鉛でも脊髄に直に流し込まれているかのような激痛。

「つまらんの、こんなザマならやはり道場で殺しておけば良かったわ
い」

「……オオッ！」

少女の嘲笑に対し、空手小僧がド根性で応じる。

全身全霊の、しかし見る影も無い正拳突き。

「ほうれ！」

ゆうゆうと拳を避け、左の爪先に全体重を乗せる。

そのままぐつと踏み込んで、開いた右膝を思い切りリーオーの股間
に叩きつける。

「グヌッ!？」

ゴギンと鈍い音を立て、リオが一つうめき声を漏らす。

深紅の唇がにいつと歪み、邪悪な嗤いがこぼ
r

——パンツ

「によわっ!？」

突如、顔面で何かが弾け、デイジエが思い切りはしたなくひっくり返った。

何が起きたか分からないと言った風に、ぱちくりとレンが対主を見上げる。

目の前にいるのは、大きく体を傾げ前方に右掌をゆるりと突き出したリーオー。

右の掌底。

顔を打たれたのだ。

「じゃが、なぜじゃ……」

つつ、と流れ落ちる鼻血を気にも留めず、呆然とレンが呟く。

金的。

直接の痛みは知らないが、蹴り抜いた後の男どもの反応ならば良く知っている。

屈強な大男もヤクザの兄貴も、一たび蹴れば皆反応は同じ。

修行だの努力だの根性だの気合いだのが、何の意味も成さない激痛。

「ぴぎゃ」だの「うげげ」だの声にならない悲鳴を上げて、白眼を剥いて脂汗をかき、ピクピクと痙攣する。

愉快痛快。

目の前の木偶だって同じ事だ。

たとえシステムが玉を潰れるのを防いでくれたとしても、今頃は懸命に股間を押しさえて這い蹲っていないければおかしい筈だ。

それを……。

「なんじゃ、うぬはよもや……、ついとらんのか？」

「……なワケあるか、ボケ」

ぜえぜえと荒く息を吐き、ようやくリーオーが顔を上げる。

「滅茶苦茶痛え……、隠してなけりや死ぬ所だった」

「隠す？」

「アツト先生は教えてくれなかったか？」

嘲るようなリオの声が、カチンと癩に障る。

だが、そのヒントで分かった。

琉球空手、骨掛け、釣鐘隠し――。

確か、漫画だとそんな名前だった。

腹筋を操作するだの自分の手で押し込むだの作品によって色々描かれていたが、とにかく事前にキンタマを体内に隠してしまう、と言う技術だった筈だ。

「……マジでそんなん出来るんか？」

気持ち悪いのう、お主。

万国ビツクリ人間コンテストにでも出たらどうじゃ？」

「まあ、そんな事はどうでも良いんだがよ……」

いいながら、かざした右掌をディジェの眼前に向け、にゅつとVの次を作って見せる。

「今のはお前の『死に』だよな、アムロ」

「……………」

すつ、と空気が凍る。

音も無くディジェが立ち上がり、パンパンと袴の裾を払い、続けてぐつ、と鼻血を拭う。

そうしておいて再びゆらりと無形の位を取る。

物言わぬディジェの面構えから、既に少女の笑みが消えているであろう事が伝わってくる。

(ようやく本気になるかよ)

ゆるりとリーオーが天地に構える。

待つ。

焦れる必要はない。

レンの方から仕掛けてくる。

見てみたい、安室の技、篤人の技。

(何が来る……、やって見る、ア――)

パン、と不意に飛んできた。

天にかざした右手と、地を抑えた左手、そのど真ん中を最短で来た。

(……ッ それかよ?)

鼻血が噴き出す、頭を振るう。

完全に読めなかった、篤人流四百年が見せた幻の当て身。

それは、ジャブ。

黄金の左、近代ボクシング最速の弾丸。

「シヤッ」

流れのままにディージェが踏み込む。

袴を翻す、対角線、ローキック。

バチンと左腿が跳ねる。

脚の細い魔改造ディージェにとっては両刃の刃。

それをキレイに当てて来た、蹴りなれた鞭のような一撃。

(この、脚の戻り……!)

合わせてリーオーが動いた。

あまりにもキレイに蹴られたので、咄嗟に動いてしまった。

一瞬、忘れてしまった。

目の前の武術家の本分が何であったか。

右拳、空を突く。

避けながらディージェが潜り込んできた。

避けた右腕を両手で引き、同時に体を返してリーオーを腰に乗せ

る。

柔術では無い。

一本背負い、柔道、逆輸入。

(……だけじゃあ、済まないだろうな)

案の定、体を丸めてディージェが跳んだ。

大きく弧を描くりーオーの内側を、更に小さくディージェが廻る。

武道、精神修養、そんなものをこの怪物は理解しない。

「ガハッ」

大地と機体にサンドイッチにされ、受身が取れない、息が詰まる。

全体重を乗せた肘の一撃が胸甲を貫き、同時にリオの胸骨が悲鳴を上げる。

(まだ……、リーオーの芯はブレちゃいねえ！)

有難い。

まだ戦える。

寝技、必死に腕を伸ばし、だが虚しく空を掴む。

あつさりと上の優位を捨て、何事も無かったかのようにデイジエが立つ。

——瞬間、顔面を刈り取るかのようなサッカーボールキック！
衝撃、鼻骨まで響く。

欠けた歯がカリカリと口の中で鳴る。

だが有難い。

おかげでようやく立ち上がれる。

風を巻いてデイジエが迫る。

右拳。

『世の中にはそう言った天才、一種の化物が少なからずおる』
アツト老人の言葉、今なら分かる。

左のミドル。

舞踊や古武術だけじゃない。

掴み。

ボクシングを見ればそこそこのジャブを出せる。

キックをやればそこそこの蹴りが打てる。

柔道を知ればそこに投げれる。

肘。

膝。

こいつはそう言った類の天才。

蹴、正面。

『ただ、親父の正しさを証明してやりたかった……、一番強い奴の前
で』

俺の声。

気取ってんじゃねえ、バカが。

目突。

避。

下段。

思い切りやられちまつてんじゃねえか、素人に。

『空手は標だ。』

男が一匹、誇りを貫いて生きるための手段だ』

親父の声。

面目ない。

分かっている。

足刀。

踵。

いつも通りだ。

左拳。

兎に角、最後に立ってればいい。

(もう、二度と負けねえ)

『私のプロトリーオーは、そこいらのガンダムに遅れを取るような機体じゃない』

ヒライの声。

右フック。

ああ、分かっている。

左のショート。

見る、まだリーオーは堪えている。

オープントーナメント九州地区ファイナリストの作ったガンプラを相手に、真っ向から。

右ストレート。

防。

左フック。

避。

足りないのは俺だ。

(大丈夫、何とかする……)

掴み、来る、喉輪。

ようやく見えた。

こいつを叩き落とす。

——胸先10センチ、突如ディージェの拳が爆ぜた。

(……寸打ッ！)

ヒビの入った胸骨の上。

衝撃がダイレクトに心臓を貫く、雷撃の一打。

体が硬直する。

ディージェはもう次の動きに入っている。

袴を翻す鮮やかな入り。

先ほど見たローキックの動き。

(違う)

分かっている。

分かっているのはいるのだ。

このタイミングで見せた寸打。

次の一撃で仕留めに来る。

次の攻撃は、あれだけ見せた天才のバリエーションの中で、未だに

見せていない技。

くるん。

中空で膝が返る。

ほれ見ろ。

左脚に打ち下ろされる筈の爪先が、まっすぐ斜め上方に跳ね上がってくる。

右のハイキック。

あの雀蜂の一刺しで、リーオーのこめかみを打ち抜くハラだ。

分かっている。

だから頑張れ、リーオー。

(動け——)

パァン、と。

刹那、
リオの視界が白色に染まった……。

舞術家 安室恋（アムロ・レン）③

——闇の中に居た。

底深く、暗い闇だ。

静謐さに満ちた孤独な闇では無い。

逢魔ヶ辻。

自分の遙か背後から、或いは光の及ばぬ一寸先に……。

何やら得体の知れぬ魔物が棲みついでいて、ずっとこちらを観察している。

そんな、おぞましい闇だ。

「ゼア……、ゼアッ！」

自分のものとは思えない荒い吐息が漏れる。

それで手が止まっていた事に気付く。

打たなければならぬ。

「イイアアアアッ!!」

悲痛な声を上げて右拳を突き出す。

ガツン、と言う鈍い音。

たちまち激痛が、指先から脳天まで稲妻のように駆けあがる。

「……イギツツ!!」

声が出せない。

ぬるり、と右拳が壁から離れる。

暗闇の中で分からないが、きつと指先はとんでもない事になっている。

それでも止めてはならない。

激痛を振り払うように体を返し左拳を叩き込む。

ガツン、激痛、悶絶。

息が詰まり、脳が揺れ、体が震える。

じんじんと熱を持った両手が限界だと悲鳴を上げている。

それでも止めてはならない。

父がそうしろと言ったのだ。

巻藁、などと言う可愛い代物ではない。

単に藁を巻き付けただけの太い幹だ。

数え八つの子供には手が余る。

それを父は、突け、と言った。

「止め」と声を掛けるまで、止めてはならぬ、と。

言われるがままに百回突いた。

それでも父は「止め」とは言わなかった。

きつとこれは数の問題ではなく、質の問題なのだと思った。

そこから先は数えるのをやめた。

父の言葉を思い出しながら、一本一本、全身全霊を込めて打った。

ついに、日が傾き始めた。

いい加減、拳も限界に近い。

きつとこれは、技や肉体を見ているのではない。

自分がこれから過酷な鍛練について行けるか、その根性を見ている

のだと思った。

だとしたら、止めるわけにはいかない。

どんなに不恰好であっても、腕が上がる限り突き続けねばならな

い。

やがて、とつぷりと日が暮れた。

ようやく気付いた。

自分は捨てられたのだ、と。

ガツン。

人の手の届いたキャンプ場ではない。

地理も分からぬ深い山の中だ。

水場も分らない。

寝床もない。

焚き火の準備もしていない。

ガツン。

それでも叩くのを止めない。

止めてしまつて何になる。

たかだか八歳の少年が、人跡未踏の山中で生きて行ける筈がない。

手を止めて、その後の現実と向き合うのが怖い。
ガツン。

打ち続ける限り、自分はまだ修行の最中にいる。

次の一突きで、父が「止め」と言ってくれる可能性がある。
それならもうそれでいい。

ガツン。

自分はもう、死ぬまでこれを打ち続けよう。

意識が途切れ、そのまま野垂れ死んでしまうまで。

ガツン。

しかし存外、人体はしぶとい。

もう意識を手放してしまおうと思っても、次の激痛に引き起こされる。

ガツン。

また眼が醒めた。

ガツン。

また、もう一打だ。

ガツン。

まったく、人体はしぶとい……。

ガツン。

まったく……。

ガツン。

ま……。

ガツン。

……。

ガツン。

ガツン。

ガツン。

——ぞわり。

不意にそれは来た。

鼻を突く獣臭。

おぞましいばかりの殺気。

背後、自分のほんの真後ろに、得体の知れない怪物がいる。

(熊……ッ!?)

咄嗟に思った。

本物の熊を知っているワケではない。

ただ背後の異常に巨大な気配に対し、当てられる物差しがそれしか無かったただけだ。

いずれにせよ次の瞬間、奴の牙が襲ってくる。

恐怖、死——

「イエアアアアアア——ッッ!!」

だが肉体は、思いもよらず動き出していた。

素早く踵を返し、どこにそんな力が残っていたのかと言う疾さで。

パン!

凄い音になった。

右拳から突き抜けた衝撃で、全身の細胞が目覚めるような音だった。

ゆっくりと雲が去り。

暗闇の世界に少しずつ月光が差し込んでくる。

父だった。

いつだって巖のように立ちはだかる父。

その父が今、自分の拳を真っ直ぐに受け止めている。

差し出された左の掌。

人差し指があらぬ方向に捻じ曲がっている。

「覚えたか」

父が言う。

何の話か分からない。

分からないが、がくがくと体が震える。

歯の根が合わずガチガチと鳴る。

「――神は、精神ではなく、肉体の方に宿る」

捻じ曲がった指先を右手で直し、その大きな手が、震える拳をしっかりと包む。

「頭の方がどれだけ悲鳴を上げていても、肉体の限界はその先にある。

そう言うものを、俺はお前に教えている」

どっ、と軽く、父の拳が胸を叩く。

ぶるん、体が一つ震える。

「この体が、お前の標だ」

そう言つて、父が笑う。

――笑う？

あの父が、まさか？

(この体が、俺の標……)

心臓が体の内側から熱を持って高鳴っていた。

体の震えは収まりそうにもなかった。

・

――ナガラ・リオは、ようやく長い夢から目を醒ました。

「……………」

悠然と辺りを見回す。

月下の海岸。

きらきらと月光に煌く海面と、白く輝く砂。

ここ二日ですっかり馴染みとなった、風光明媚な離島の光景。

ただ一つの問題は、それが現実の根平なのか、それとも仮想の映像世界であるか、と言う事だ。

――と、

見覚えのある豚鼻を視覚に捉え、ふう、と一つ息を吐く。

MSK―008【ディージェ】

アムロが未だあの機体を纏っていると云うのなら、戦いはまだ最中と言う事になるのだろう。

(だがなぜだ、なぜそんな遠くにいる……?)

波間を背負い、珍しく両手を開手に構えたデイジエ。

その距離はおよそ5メートル。

なお慎重に、じりじりと円の動きを取る。

先のハイ・キック、必殺の間合いに入っていた。

既に積み筋に迫っていた筈のレンが、なぜ自ら距離をとる必要がある?
る?。

ふるり、デイジエが軽く左手首を振るう。

その姿にはつと目を見張る。

ヒビの入った手甲。

間違いない、レンは左手を痛めている。

(いつだ、アムロ、いつ痛めた?)

そこでようやく気付いた。

視界の端に映るリーオーの拳。

正拳の形を取っている。

(やったのか、あれを……?)

あの時のように、ブルリと体が震える。

魂を超えて走る肉体の働き。

あの神の一撃を、人ならざるリーオーの拳で。

(凄え……)

笑みがこぼれる。

ヒライ、このリーオー凄いや。

親父に刻み込まれた空手の技を、心が思う前に実行している。

そのおかげでまだ、戦場に踏み止まっていられる。

(どうしたよアムロ、この程度でビビっちゃうタマか?)

すつ、と構えを解き、自然体で腕を開く。

そうして、深く息を吸い込む。

空手の息吹……、ではない。

正真正銘、単なる深呼吸だ。

かろうじて一命を取り留めたとは言え、肉体の回復にはまだ時間がかかる。

酸素を取り入れる。

細胞の一片にまで染み渡るように。

(来いよ、さもなければ回復しちまうぜ)

戦いの最中に休息を始めた敵を前に、ぎりり、とデイジエの中でレンが歯噛みする。

先の交錯の瞬間、とんでもない速さで拳が伸びてきた。

左手が間に合ったのはまさしく奇跡としか言いようがない。

結果、浅いながらもデイジエの蹴りは顔面を捉え、一方でリーオーの中段は、デイジエの左手の前に阻まれた。

だが、それでもダメージを負ったのはデイジエの方である。

デイジエの細い脚先は、リーオーの意識を断ち切るには至らず、一方リーオーの拳の衝撃は、デイジエの繊細な手の甲を思い切り突き抜けてしまった。

それはまあいい。

過ぎた事を悔いても仕方ないし、逆襲と呼べるほどの怪我を負った訳でもない。

問題は、今の状況だ。

リオの動きは挑発でも罠でもない。

蓄積されたダメージから、本当に休息を挟まなければマトモに動けないのは分かっている。

先の一撃が、そうそうに何度も繰り出せるような拳ではない事も分かっている。

そう分かりながら、わずかに残るカウンター狙いの可能性を前に、迂闊に踏み込めないでいる。

その自分の弱さが憎い。

(たわけが！ たかだか玩具遊びに怯えて、何の天才じゃッ!!)

動こうとしない鋼の肉体に対し、レンが必死で鞭を振るう。死にかけてた肉体を蘇すために、リオが悠然と呼吸を整える。

(行くぞ行くぞ行くぞ行くぞ行くぞ……)

(殺す殺す殺す殺す……)

(今——！)

ダツ、とバネで弾かれたかのように、二つの機体が大地を蹴る。両者の間合いが一瞬にして潰れる。

「~~~~ツツ!?!」

思いもよらぬ急転、二人の表情が固まる。

だが、揺れる心を置き去りにして、リーオーの肉体は動き出していた。

先を取る右の中段突き。

折れた左手では受けきれない。

咄嗟に手首を返していなしながら、デイジエが更に一步踏み込

「フーン」

返しの頭突き。

ベキリとデイジエの角が折れ、上体を沈めながら、二、三步よろめく。

(追撃——)

そう思うリオの肉体が、突如、金縛りのように動きを止める。

何故？

間髪入れず理解する。

デイジエの右の爪先が、リーオーの追い足を押さえに来ていたのだ。

目で見て、頭で理解するその前に、リーオーの体は踏み止まっていた。

『——ナガラの右腕、左腕よりも2センチ長い』

唐突にヒライの声が聞こえる。

出会ってから二週間くらいたったある日、リオを前習えさせながら言った台詞だ。

そんな記憶を引っ張り出しながら、デイジエの右足を思い切り払い上げる。

『——半身に構えた時、右脚と左脚の働きは違う。』

重心の位置も関節の動きも、本当は、左右対称であってはならない』よろめく相手を追いながら思い出す。

ヒライの言葉。

普段は無口だが、その説明は分かり易く面白い。

『——あなたがリーオーに合わせる必要は無い。

私のリーオーが、あなたの動きに合わせて。

特別な事は何もしない。

左右均等に作ったりリーオーのパーツを、あなたの動きに合わせて、

少しずつ歪に修正していく』

ヒライの言葉。

その先が気に入った。

それを続けていくとどうなる？

『——やがてガンプラに、神が宿る。

プラフスキー粒子が、あなたの空手を理解しようとする』

神。

自分よりも年下の少女が、親父と同じ言葉を吐く。

『——思いのままに機体が動く、それでは足りない。

思いもよらず機体が動く。

それが自然、私の理想』

嗚呼。

自分は本当にバカだ。

ヒライの言葉、本当にただの理想と、そう言う心構え、としか考え

ていなかった。

少しずつ調整を繰り返していたから気付かなかった。

リーオーと一体化する時に、何とは無しに感じていた引っ掛かり。

それが今では、まるで羽毛のように軽い。

思う前に体が動く。

動いてから、その理由を頭が理解する。

本当に何と言うことのない、ほんのちよつぴりの差。

その僅かな働きの中に、確かに神が宿っている。

(その機体、苦しいだろう、アムロ……?)

右の追い突き。

完全に見切られていた筈の一撃が、デイジエの鼻先を浅く捉える。

理由は分かっている。

リーオーの右腕が、左腕より2センチ長いからだ。

厳ついジオン系MSの上半身に、細くしなやかな女性の下半身。

そんなアンバランスな機体を、シュミレーターも無しに苦も無く操って見せる。

紛れも無く彼女は天才だ。

だがその一事が、ほんのちよっぴりの差を更に大きく縮めている。

こちらにはヒライと言う盟友がいる。

事実上の二対一だ。

これなら負ける訳がない。

よもや、卑怯とは言うまいな、アムロ——？

(こんつの……、卑怯者がア!!)

ディジェの中で、息を切らしながらレンが毒づく。

たちまち飛んでくる、左の追い突き。

(これは捌ける)

そう思いながらも、距離をとって避ける。

真つ直ぐに迫る、右の前蹴り。

(これも取れる)

そう思いながらも、上体を逸らしてかろうじて避ける。

リーオーの動きには迷いが無い。

腕の一本、足の一本を落とされても、返す刃で一発当てさえすれば勝てる。

そう言う思い切りの良い動きだ。

そして、それは事実、当たっている。

『——あれは天才、一種の怪物よ』

そう言っ一つ、祖父が溜息を吐く。

『こ、こんの化け物がッ!?!』

屈強の大男たちが、捨て台詞を吐いて逃げ去っていく。

『ええい！ 沖繩のニュータイプは化物かッ!?!』

腕に覚えのあるビルダー達が、大げさに叫び涙を浮かべる。

(たわけ共がッ！ どいつもこいつも何も分かつたらん！)
心の中でレンが叫ぶ。

——女に生まれた。

50パーセントの確率で、レンは神から嫌われた。

アット・レンになれず、だからレンは『アムロ』になった。

どれほどの才能があろうとも、レンにとってはそれが全てだ。
見ろ。

何度踏んでも立ち上がってくる、目の前のリーオーを。

レンよりも背は低い。

要領も悪い。

はつきり言つて才能が無い。

だが、ナガラ・リオは50パーセントの確率で天に愛された。

男と言う境遇が、その未熟な五体を凶器となるまで虐め抜く事を許した。

物覚えの悪い頭に代わり、肉体が勝手に判断できるまで鍛え抜く事を許した。

レンが一足飛びで抜き去った壁を、異形と化した指先で必死によじ登ってきた。

それが許せない。

レンの全身が叫ぶ。

持つて生まれた才能だけで、この男の十年を否定してやる、と。

「キィヤッ！」

突き出された右拳。

合わせてデージェが跳ぶ。

しなやかな半身の軽さを生かした、一か八かの飛躍。

中空で大きく弧を描き、リーオーの背中に落ちる。

間髪入れず、しなやかな腕がTV顔の頭部に纏わりつく。

「ウヌッ！」

裸締め。

ニュータイプが最後に頼ったのは、小細工抜き力技。

子泣き爺のように背にしがみ付き、必死に締め落とさんと歯を喰いしぼる。

(さすがに……、天才めッ！)

必死に奥歯を噛み締め踏み止まりながら、それでもリオが嗤う。

これが通常の立会いならば、この形になっては反撃の術が無い。

(だがこれはガンプラ・ファイト。

アムロ・レンは二つ、過ちを犯している)

過ち其の一。

デিজエの下半身の軽さ。

魔改造を加えたデিজエの軽さゆえに、膝での当身が不十分に終わっている。

ゆえに小柄なりオでも、未だその重量を支えて踏み止れている。

過ち其の二。

リーオーの首周りの構造。

ヒライが良く嘆いていた。

「リーオーは首周りの稼動が狭い」と。

陥没した頭部と襟周りの盛り上がりにも阻まれ、稼動域を取るのが一苦労だと。

だがそれがいい。

その狭い間隙と、デিজエの上腕の太さに阻まれ、完全に極まった筈の首締めが極まり切っていない。

(結論、走れる……、十秒ならッ!!)

そう短く覚悟を決め、次の瞬間、リーオーが勢いよく走り出した。

10メートル、5メートル……。

目標目掛けて、大地を踏みしめ、勢いよく跳ぶ。

必死にしがみつくデিজエを背負ったまま。

中空で半回転し、背中から落ちる。

目標は海面。

ザブリと勢い良く水飛沫が跳ね、二つの機影が水底に沈む。

(どこに行った、アムロ……?)

リーオーが体を振るう。

いつの間にか、背中から重さが消えていた。

ディージェの姿を必死で追う。

だが現状では、どちらが上でどちらが下なのかすら分からない。

と、不意にするりと伸びてきた両手が、正面からリーオーの頸部を捉えた。

それでようやく理解できた。

成程、そっちが海面か。

「キイイイイ」

万力を込め、しなやかな指先がリーオーを落とすにかかる。

相手の顔を水に付け、必死で締める。

それはもう武術家の技ではない。

絶体絶命の窮地で、にいつとリーオーが嗤う。

武術家同士の立会いでは、先に手の内を出し尽くした方の負けだと。

(なぜ空手家が打撃しか使わないか、知ってるか、アムロ?)

ぐつ、とディージェの右腕を掴み、その顔を海面に引き寄せる。

合わせて下半身を跳ね上げ、右内腿をディージェの首筋に絡み付ける。

(空手家が打撃しか使わない理由……)

それは、本当にどうしようもない時に、確実に相手を絞め殺すためだ!)

「……ッ!」

グツと下半身に力を入れる。

たちまちレンの頸動脈が絞まる。

三角締め。

打撃屋、ナガラ・リオが残しておいた、最後の最後の取って置き。

「~~~~~ッッ」

声にならない声を上げ、ディージェが必死で空いた左腕を振るう。

だが、全ては空しい努力だ。

先ほどまでリーオーを追い詰めていた水が、今は打撃を阻む壁となってくれている。

武術家が全ての技を見せた以上、後は決着の時を待——。

「……ギャバ!?!」

不意にビンツ、トリオの首が絞まり、貴重な酸素が海上に逃げている。

この体勢で締め技？

狼狽の色も露わに、リオが必死に視線を泳がせる。

(~~~~!?! そのための襷ツツ!!)

ようやく気付いた。

デイジエは目ざとく背中中の襷を外し、いつの間にか自身の両手に、そしてリーオーの首筋に巻き付けていたのだ。

卑怯、ではない。

ガンプラ・ファイトとは言い野試合、ルールなどある筈が無い。

(むしろ、俺が巻き付けてやるべきだった！)

薄れ行く意識の中で決意する。

今度コイツと闘る時は、ヒライにヘビーアームズを持ってきてもらおう、と。

だがそれもとりにあえずは、今日の死合いに勝ってから、だ。

三角締めは捨てる。

そう潔く決意して、自由になった両足で、思い切りデイジエを蹴り上げる。

うら若き乙女の顔面を、躊躇いもせずに全力で。

「ギャガツツ!?!」

「ウギャバツ!!」

拷問を受けるリトルグレイのような悲鳴を上げ、両者がようやく海上に立つ。

水深はおよそ腰まで。

デイジエの方がダメージが大きい。

リーオーに背を向け大きくむせている。

「アアムロオ~~~~」

よろよると、ゾンビのように水面を掻き分けリーオーが迫る。とつとどこつちを向け。

その瞬間に、渾身の右を叩き込んでやる。

「シャバアアア!!」

「ンギッ!」

振り向き様に、凄まじいばかりの水圧を顔面に叩きつけられる。唐突にいつかのヒライの言葉が過ぎる。

「口からビームを吐くザクがいる」と。

(そんな所まで、改造していやがったかッ!?)
すまんヒライ。

ちゃんと聞いたときや良かった。

目潰し、前が見えない。

構わない、もう敵は正面。

(リーオー、お前に任せる)

全てを相棒に委ねる。

ただ真つ直ぐ、最速最短を駆け抜ける直突き。

残された全身全霊を込める。

(その一発を待つとつたんじゃア!!)

海面スレスレまで腰を落とし、渾身の一撃を避ける。

グラリ、リーオーの体が泳ぐ。

必殺の間合い。

デিজエが大きく両腕を開く。

右手は掌、左手は手刀。

あたかも鍬形の大顎のような渾身の打撃が、リーオーの頭部目掛け放たれる。

右の掌底が的確にこめかみを打ち抜き、刹那、左の手刀が顎先を走り抜ける。

間断入れぬ連携に頭部の衝撃が加速される。

脳震盪。

グラリとリーオーの体が大きく傾いで、デিজエの左脇を抜けていく。

10カウントはいらない。
努力も、根性も、執念すらも断ち切る快刀の一太――

ドン

(……！)

不意にレンの左脇腹に重い衝撃が来た。
みしり、と湿った音が体内に響く。

(不意打ち?)

咄嗟に思う。

そんな訳がない。

ここは仮想空間、第三者の介在する余地など無い。

一つだけ確かな事。

今の重さは致命的な一撃。

この信号が脳にまで到達した時、それは――

「……ンツツ……ギ……ツツツ!!」

来た。

ついに来た。

才能も、プライドも、怨恨すらも打ち砕く鉄槌の一撃。

どうしようもない。

堪え様も無い。

胃の腑の液体が思い切り逆流し、口から鼻から思い切り吹き出す。

がくりと膝が折れ、上体が海中に没する。

息が出来ない、だがそれどころではない。

(追撃……！)

来る。

分かっている。

このままの体勢では、後頭部を思い切り踵で踏み付けられる。

分かっている。

だがどうしようもない。

来る。

来ない。

何故来ない？

(何をやっとする、このノロマ！)

必死に心の中で叫ぶ。

とつとと殺せ！

死にたくない。

ただ、待つ時間が恐ろしい。

その内に、ふっ、と諦めが付く。

どうにでもしようと、仰向けになる。

そうして必死に片腕を伸ばし、浅瀬を求めて海中を這い回る。

「ぶはっ」

ようやく水面上がった。

震える体に鞭を入れ、何とか上体を起こそうとする。

いい加減、気が付いていた。

リーオーは追撃しないのではない、追撃できないのだ。

最後の一撃は、やはりリオの意識を刈り取っていたに違いない。

そして、それでもなおリーオーの右手は動いたに……。

「……あ」

むりやり引き起こした視界の先に、ようやくリーオーを捉えた。

瞬間、一瞬だが腹の痛みが引いた。

リーオーは、海中に没してはいなかった。

大きく頭部を傾がせ、背中を丸めながら、それでも両足は大地に踏

み止まり、掲げた両の拳を見えざる敵に備えている。

知っている。

アレは『残心』だ。

心シンを残す、身シンを残す、芯シンを残す。

油断なく、次の敵に対し備える。

現代の武道の多くにおいて、その心構えを見せなければ有効な打突

とは認められない。

「あ、ああ……」

思い出す。

道場で垣間見た、数々の祖父の技。
型稽古を一つ見るだけで、その理合、理念があっさりと頭の中に
入って来た。

時折盗み見た秘伝書もまた、それらの答え合わせに過ぎなかった。
そして実戦、何度も何度も試した。

間違いは何一つ無かった。
ただ一つ。

一つの型を終える度に、祖父が行っていた残心。
何故かそれだけは、すっぽりと頭の中から抜け落ちていた。

何十回何百回と目にしておきながら、これまで一顧だにする事が無
かった概念。

(アレをやれば、良かったのか……)

はつきりと、納得してしまった。

アレをちゃんとやっておけば、こうして無様に這い蹲る事は無かつ
た。

リーオーは既に事切れている。

それなのに、なんでアイツは、あんな事が出来るんだろう？

何で自分は、アレをやらなかったんだろう？

『ほれ見た事か！』

お前の言う武術とやらは、肝心の鞘拵がなつとらんのよ』

仮想空間の風に混じって、カラカラと好々爺の笑い声が響く。

畜生。

畜生。

畜生。

「……会いたいよ、おばあちゃん」

ポツリと泣き言が漏れる。

レンの悲しみを理解してくれる唯一の人。

その人ももういない。

ただ、架空の月だけが、孤高の少女を優しく照らしていた……。

転章

——再び、深い闇の中にいた。

先ほどのまでの、暗く、孤独で、おぞましいばかりの闇とは違う。

この闇はむしろ、自分の姿をすっぽりと覆い尽くし、外の世界から守ってくれる優しい闇だ。

辛い時、苦しい時、悲しい時は、いつだってこの闇の中に逃げ込んで来た。

懐かしい甘い匂い。

心地よい温もり。

穏やかな波の音。

瞳を閉じ、体を小さく丸め、そっと聞き耳を立てながら、その時を待つ。

やがて、どんどんと足音を響かせ、馴染みとなったサウンド・ドラマの幕が開ける。

「——オトメッ！」

ボタン、と勢い良く扉を開け放ち、切羽詰った男の声が響く。

父の声だ。

その声色には自分が知るよりも若いハリがあり、また、らしからぬ動揺の色が混じってはいるが、それでもずっと二人でやってきた人の声を間違えう筈がない。

「もう、落ち着いてよセイ兄さん。

私たちだけの病院じゃないのよ」

そう言つて、困ったように『彼女』が苦笑する。

透き通るような声が、空気を通してではなく、『彼女』の体を通して体内に染み渡る。

「これが落ち着いていられるかよッ!?

オトメ、お前だつて先生から聞かされているんだらう?

今の自分の状態を」

「……うん」

「先生に言われたよ。」

決断するのなら、今しかない、ってな……」

それつきり、二人がしばらく口を閉ざす。

長い静寂。

ゆったりとした心臓の音、それしか聞こえない。

二人は今、どんな表情をしているのだろうか？

「……堕ろせ、オトメ」

長い沈黙の果て。

感情を押し殺した、重く、短い声で、父が言う。

自分を殺せ、と、あの父が言う。

「難産になると、そう言われたよ。」

母胎にかかる負担が大き過ぎる、とまで言われた。

生来体の弱いお前には、あまりにも危険だ、とな」

『彼女』はただ押し黙って、静かに父の話を聴いている。

貝のようになってしまった『彼女』に対し、更に強く、父が言葉を重ねる。

「運良く無事に出産できても、まともに生まれてくる可能性は低いぞうだ。」

お前が愛した男も、もういない。

女手一つ、そんな体で未熟児を抱えて、それでどんな風に生きていけるって言うんだ？」

父の言葉。

重く、短く、感情を完全に押し殺していた筈の音が、次第に弱く、熱く、悲しいほどに熱を帯びていつてしまう。

「……なあ、オトメよお。」

俺は、空手しか生き方を知らない男だ。

この上、この世でたった一人の妹まで失いたくはない」
父の言葉。

知らない、こんな父は知らない。

いつだって、巖のようにそびえる父であった。

どんなに強い風も、雨も、雪も、彼の心を揺さぶる事など出来はしなかったと言うのに。

「聞き分けてくれ、オトメ。」

お前までいなくなったら、俺には本当に、この拳しか頼れる物が無くなっちゃう」

父の言葉。

知らない。

自分の知る父は、こんなにも真摯に一人の女性を愛せる男ではない。

だとしたらやはりこの世界は、自分にとって都合の良い、妄想の産物に過ぎないのだろうか？

「……だからだよ、兄さん。」

だからこそ、この子を生むの」

『彼女』が言う。

きつぱりと、凜としたよく通る声で。

「——二十年、ただひたすらに、まっすぐ、悔い無く生きてきた。人並に生きたいと、背伸びして、胸を張って、恋をして……」

「オトメ……」

「まっすぐに駆け抜けた青春の集大成、それがこの子。」

私の誇り。

兄さんの空手と同じ、捨てたりしたら生きてはいけない」

彼女の声。

何一つてらいの無い、澄み切った声。

まっすぐに相手の心臓を叩く、正拳のように力強い声。

「この子は私たち兄妹の、かけがえの無い家族になるために生まれてくるの。」

だから私が守る。

この子の笑顔も、幸せも、未来も、全部全部全部」

「……家族、か」

「名前だって、もう考えてあるの。」

リオ……、ナガラ・リオ。

リオ、莉王、璃桜……、男の子でも女の子でも同じ名前」
そう言つて、『彼女』がぽん、と自分に触れる。

この暖かな手の平は今、どちらの漢字を自分に当て嵌めているのだろうか。

「もしもこの子が女の子だったなら、この世で一番、幸せな子供にする。

瑠璃のように桜のように、キラキラと輝く素敵な女の子にするわ」
そう笑う『彼女』の声に合わせ、とくん、とくんと世界が高鳴る。
どうしても考えてしまう。

あるいは自分が女だったら、『彼女』は長く生きられたのではないかと。

自分と、『彼女』と、そして『伯父』。

家族三人、肩を寄せ合い慎ましくも幸福に暮せていたのではないかと。

「……もしも、もしも男だったら？」

不安げな父の声に対し、高らかと謳うように『彼女』が言う。

「この世で一番、強い子に育てるわ。」

草原を駆ける獅子のように、夜空に煌めく星座のように。

どんな世界でも、己が身一つを誇りに生きて行ける、強い強い子供に」

「しし座の、子供……」

「もしもこの子が、男の子だったなら、その時は空手を教えてあげて欲しい。」

男が一匹、誇りを胸に生きて行くための、セイ兄さんの『標』を……『彼女』が、再びそつと自分を撫でる。

積み重ねた時間の全てが報われていく。

嗚呼。

何と言う事は無い。

自分と言う存在は、生まれる前から救われていたのだと思ひ出す。

この世界が事実か贋作か、それも問うまい。

自分の中でかけがえのない真実であり続けるのなら、それでいい。

全てを思い出したならば、もう一度、歩きださねばならない。
辛い事も、苦しい事も、悲しい事も、もう何も無い。

『彼女』に、父に感謝して、再び瞳を開けるのだ。
彼らが示した標を頼りに……。

——炎の瞳が、まっすぐにこちらを見下ろしていた。

紅蓮の炎のように、紅く、どこまでも紅い瞳であった。

闇の中で広がった猫のような右目と、大きく腫れ上がった瞼から、
かろうじて光を放つ左目。

激しい色合いとは裏腹に、落ち着いた両の眼が、自分の顔を逆さま
に覗きこんでいた。

波の音が聞こえる。

潮の匂いと、血の匂いがする。

柔らかな月の輝きが、少女の輪郭を照らす。

炎のように紅いしゃぐまが、鼻の頭をそっとくすぐる。

どれほどの時間がたったか。

やがてナガラ・リオは、自分がアムロ・レンの両膝に抱かれている
事に気付いた。

(……それで、か)

ふうっ、と一つ溜息を吐く。

随分と久しぶりに、あの夢を見た。

幼い頃に何度も何度も見た、懐かしい闇。

『彼女』を想う自分の顔を、目の前の少女にずっと観察されていた。

何だかそれが、えらく気恥ずかしい事に思えた。

「……なんで、泣いておるんじや？」

「何？」

ぼつりとレンに問われ、それでようやく、自分の両眼から涙がこぼ
れている事を知った。

「いや……」

慌ててぐしぐしと瞳を拭いながら、適当な言い訳を探す。

「……何だか俺、最近、負けてばっかだなんて」

「たわけ」

ぴしりとレンが口を挟む。

童女のように、『彼女』のように良く通る声で。

「さっきの勝負な、勝ったのはお主よ」

「あん？」

「何も覚えておらぬか。」

最後の一撃、お主は耐えて踏み止まり、儂は耐え切れず地に伏した」

「……………」

「戦いの決着は、敗者が地面に這い蹲るもの。」

「どちらが勝ったかは明白よ」

まるで憑き物でも落ちたかのように、淡々とレンが語る。

だが、記憶の無いリオにとって、それは譲られた勝利に過ぎない。

それを彼女の膝の上で、こうしてぬくぬくと受け取るのもまた、癪であった。

「……敗者が、地面に這い蹲るって言うならよ。」

「まさに今がそうさ。」

こうして俺はお前を見上げ、お前は俺を見下ろしている」

碧い炎を残した少年の瞳が、真っ直ぐにレンの紅を見上げる。

「俺はまだ、まともに体を起こす事も叶わねえ。」

「こいつが戦場だったら、何度もお前に首を落とされている所だ」

「……………」

「この戦いの、勝者はよ……」

「……言うなッ！」

はたと一雫の熱い物がリオの頬を濡らし、二の句を遮る。

はっ、と見上げた視線の先から、ぼろぼろとこぼれ落ちる涙の雨が、少年の顔を叩く。

「ごんの……、たわけ！ たわけっ！ 大たわけめっ!!」

泣いていた。

あの鼻持ちならない天才、アムロ・レンが泣いていた。

呆然とするリオの心を置き去りにして、童女のような声が響き渡る。

「儂が、この儂が負けたと言うておるのじゃー！」

才気に溺れ、手順を損じたその挙句、

最後の最後で油断して、勝てる勝負を自ら手放しおったのよッ!!」

「おい……」

「無様じゃッ！ 惨めじゃッ！」

こんなのはもう、一生、一生消えぬ傷じゃッ！

それを何じや貴様ツツ

安い駄賃のように……、軽々しく投げ返す奴があるかツツ!!」

言葉失ったリオの上に、少女の激情が止めどなく降り注ぐ。

戦いが始まる前、リオはレンに対し、彼女には持ち得ぬ武器が自分にはあると考えていた。

それは敗北。

本当に心底から勝利を欲しているのは、敗北を知っている自分の方だと。

それが生死の境において明暗を分ける筈だと、そう思いあがっていた。

だがどうだろうか？

物心付いた頃から踏みにじられ続けた自分にとって、敗北とはここまで絶望的で救いの無いものであっただろうか？

目の前の少女の悲しみと比して、自分のそれは、果たして敗北と呼べるほどの躓きであっただろうか？

(……やっぱりよ、アンタは間違ってるぜ、トレース。

こんなにもどうしようもない想いが、敗北だって言うのなら……。

敗北なんて知らずに済むなら、それに越した事は無いんだ)

ぎゅっ、とリオの胸に、締め付けられるような息苦しさが溢れ始めた。

目の前の少女の悲しみをどうにかしたい、と。

リーの思惑もアット老人の願いも超え、リオの肉体は勝手に動き出していた。

「アムロよオ……、やろうぜ、ガン普拉・ファイト」

まっすぐに少女を見つめ返し、自分の心を言葉にする。

そっと伸ばした手で真っ赤なしゃぐまを掬い、その指先で少女の涙を拭う。

「なん……!?! き、気易くするでないわイツ！」

「お前がどれだけ喚いた所で、俺はもう、自分の勝利を受け入れられない。

後はもう一度、仕切り直して決着を付けるしかないと思っている。

けどよ……」

言いかけた言葉が、ふっ、と途切れる。

心の中の自分が叫ぶ。

それ以上は言うな。

そこから先は武術の否定、父の人生の否定だと。

構う事はねえ、もう一人の自分が叫ぶ。

アムロは今、泣いているんだ。

女ひとりの悲しみも救えないようなポリシーなんざ、ドブに捨てちまえ、と。

「……けどよ、アムロ。」

俺はもう、こちらではお前を殴れねえ。

お前の目を抉ったり、内臓を潰したり、命を取ったり。

そうまでしてでもお前に勝ちたいとは、どうしても今の俺には思えねえ」

「……!」

「この国には俺やお前みたいな奴は、ほとんどいなくなっちゃったよ。俺達が心置きなく遊べるような場所は、きつともう、あそこぐらいしか残ってないんだよ」

アムロ・レンの慟哭は、いつしか止んでいた。

心の底にあった言葉を全て吐き出し、ほうっ、と息を吐く。

言い切って、そして、自分でも納得する。

もう一度こいつと気兼ねなく遊べたならば、どんなに素敵な事だろうか、と。

「……一つだけ、条件がある」

長い沈黙の果て、意を決したようにレンが口を開いた。

無言で一つ頷いて、リオが続きを促す。

「……これからは僕の事は『レン』と呼べ。」

二度と『アムロ』とは呼ぶな。

あと『ニュータイプ』とか『白い悪魔』とか、他の奴らにも絶対呼ばせるな」

「……は？」

ぱちくりと、リオが瞳を瞬かせる。

あまりにも真剣な、少女の紅い瞳。

ゆっくりと、言葉の一つ一つをよく咀嚼して、彼女の言わんとしている意味を考える。

「ああ……、ええつと、つまり、レン。」

お前は、名前をからかわれるのが嫌で……。

ま、まさかそんな下らない理由で、ガンプラバトルをやめたってのか？」

「……ッ」

「イヤー！ イヤイヤイヤ!」

それなら初めっから本名で、『アツト・レン』で登録すりゃあ良かっただけの話だろ?」

「聞いた風な口を利くなッ!

僕は、おばあちゃんを、そして『安室』の姓を心から誇りに思っておる!!」

「だったらせめて、アムロ専用機は使わない、とか……」

「僕はな……、僕は、アムロ・レイが大好きなんじゃあツツ!!!」

「……カカ!」

「カカカッ! カーカカ! カーツカツカツカツカツカッ!!」

ナガラ・リオが嗤う。

嗤う。

啞う。

啞う。

腹筋が割れる、内臓が振れる、骨が軋む。

ズタボロになった全身が悲鳴を上げている。

それでも啞わずにはいられない。

「笑うなあアアアア—— ツツツ!!!」

みしり。

凄い下段が来た。

折れた筈の左手、それを折れたりオの鼻骨に全力で叩きつけてきた。

せつかく手当ての済んだ鼻の穴から、再び滝のように鼻血が噴き出す。

それでも啞いは収まらない。

啞いながら哭き、泣きながら笑い、そして思った。

やはり標の先に救いはあった。

いや、きつと俺達は初めから救われていたのだ、と。

・
・
・

「——しっかし、タフだねえアイツら。

鼻血噴き出しながらじゃれついてやがるよ」

「それじゃあヒライさん。

自分たちは少し仮眠を取ってますんで、彼らの支度が出来た所で声をかけて下さい」

職務熱心な操縦士たちにペコリと一礼し、H a l o のボディに背中を預ける。

ほどなく扉が閉められ、風光明媚な砂浜には、ヒライ・ユイただ一人となった。

「リーオー、ご苦労さま」

中破した白いガンプラにそつと労いの言葉をかけ、慈しむ様に胸に抱く。

夕刻より随分と無残な姿となつてしまつた愛機に心が痛む。その一方で、最後まで相棒、ナガラ・リオの要望に応え戦い抜いた事が誇らしくもあつた。

仕事は一応果たせた。

だが、結局は勝負は付かず、反省すべき点も多い。

リーオーを通して、さまざまな思いが胸の内に溢れて来る。

一刻も早く東京に戻つて、この忠実な兵士を修復してやりたい。戦いを見ている内に、新たなリーオーの強化プランも纏まり出した。

今、胸のうちにあるアイディアを口にした時、リオは一体、どんな顔をするであらうか？

アムロの作つたデিজエの戦法にも驚かされた。

無難で堅実な仕事しかできない自分にとっては、まるで異端なMF。

新型のリーオーに乗せるギミックについては、リオの意見もぜひ取り入れたい。

八月のトーナメントに向けて、やるべき課題はいくらでもある。

今はただ、一分、一秒が惜しい。

(……けれど、それでも今はダメ)

潮風に乗つて、野良犬たちの笑い声が響いてくる。

ユイにとつてそちらの世界は、あまりに眩しすぎて直視できない。だから代わりに月を見上げる。

「……まだ、月が出ている、から」
ぽつり、と月に八つ当たりをこぼす。

古来よりぽつかりと闇夜に浮かび、人の心に獣をもたらしてきた月の輝き。

その柔らかな光に導かれ、未だ彼方の砂浜では、野良犬たちのロス・タイムが続いている。

かつてリオは、ユイの事を『同類』と呼んだ。

だが今では、それがとんだ見当違いだったと分かる。

本当の『同類』とは彼女の事だ。

ユイは彼らと同類ではない。

だからこそ殴り合う事もなく、日の下でずっと一緒にいられるのだ。

(——早く、朝になればいいのに……)

子供のような事を考えながら、ヒライ・ユイがじつと夜明けを待ち続ける。

ただ穏やかな波の音だけが、野良犬たちの遠吠えを、優しく掻き消してくれていた。

黄龍編

次元霸王流拳法

——三雷会館。

かつて二人の男が、地上最強の武術を看板に掲げた始まりの地。時は流れ、その竜虎も共に亡く。

今ではただ、子供たちの健全な育成を目指す道場としてのみ存続している。

兵どもが、夢の跡。

その終わってしまった物語の舞台で、二人の男が向かい合っていた。

「いいかげん、頭を上げて下さい、ナガラ君」

白髪混じりの柔和な顔が、どこか困ったように笑い掛ける。

その言葉に黒髪の少年——、ナガラ・リオもゆっくりと頭を上げた。

「ハジメさ、いえ、館長。」

先日は、事情も知らずに不躰な真似をして、本当に申し訳ありません」

「……武術家が二人、立ち合った。」

そして、単に私の力量が足りなかった、それだけの事だよ」

「ですが——」

「この話はもうよそう。」

強いて謝罪を重ねられては、私の立つ瀬が無くなってしまう」

そう軽く苦笑して、ハジメが膝を崩す。

「それで、今日はどうしたんだい。」

わざわざ来たのは、単に謝罪のためだけでは無いのだろうか？」

「館長」

そこで一つ言葉を区切り、リオがまっすぐに瞳を向けて言った。

「恥を忍んでお願いします。」

俺に、空手を教えて頂けないでしょうか？」

「空手を？」

「はい、三雷会の空手を」

きつぱりとリオが言う。

慮外の言葉に、思わずハジメが鼻白む。

かつて、『孤高の虎』ナガラ・セイイチロウは、三雷会の提唱するフルコンタクト空手を『偽物』と称して表舞台から去った。

偽物の空手を打倒し、父の無念を晴らす。

それこそがこの少年の費やした十年の宿願であった筈だ。

「教える、と言っても……」。

知つての通り君の空手は、既に私の技を追い越しているのだが」

「足りません」

短く、淡々とリオが言う。

「俺は、父の教えてくれた空手しか知りません。

その教えも、今は半ばで途切れてしまいました」

「……………」

「これからはもっと、様々な技に触れてみたいと思っています。

単なる父のコピーではなく、その教えを内包した、俺の流儀を磨き

たいんです」

まっすぐに見上げた少年の瞳を、じつ、とハジメが覗き込む。

その瞳に、再会した直後のような危うい輝きは無い。

だがその分、より切実な色を宿した碧い炎が燃えていた。

きつと、この二カ月の間に何かがあったのだ。

少年の十年に及ぶ執念を過去の光に変えてしまうような鮮烈な出会いが。

人と人の出会いは、時にそう言った凄まじい変革をもたらす。

居を正し、ハジメもまた少年を見つめ返す。

「君も知つての通り。」

この三雷会の空手は、前館長のイズルとセイイチロウ氏の二人で築き上げたものだ。

三雷会の技で、君の父上が知らないものなど、何一つ無いよ」

「……………」

「その上で君に伝えられなかった技術があるとすれば、それはセイイ

チロウさんが無駄と、不要の技と判断したと言う事だ。

今さらウチの教えを請うたとしても、却って君を混乱させ、技を曇らせるだけかもしれない」

「それは、そうかもしれないませんが……」

「……まあ、それでも構わないと言うのであれば、いつでもここに来なさい。」

私に教えられるものは、全て君に預けよう」

「館長……！ あ、ありがとうございます……！」

澆刺とした少年の声を受け、お人よしの眼尻に小皺がよる。

「礼などは不要だよ。」

元々、三雷会に残したセイイチロウさんの置き土産を、君に還すだけの話だからね。

それにこの話を聞けば、義兄もきつと草葉の陰で喜ぶよ」

「前館長が？ まさか……」

「喜ぶだろうさ。」

かつて袂を分かった虎の子が帰って来たんだ。

武術家が二人、それぞれの信念から道を違えるのは仕方ない。

彼らにとつての不幸は、その後の和解に至るまでの時間を持ち得なかった事。

ただ、それだけだからね」

ハジメが静かに笑う。

そう言うものかもしれない、と思う。

もしもヒノ・イズルが本当に許せない敵であったならば、あの父はきつと、這つてでも決着の場に臨んでいた筈だ。

「やあ、それにしても、まだ六月だというのになんだろうね、この暑さは」

そう言つてハジメが木戸を開ける。

たちまち眩いばかりの日の光が、道場の中へと差し込んでくる。

「今からこれじゃあ、今年の夏は凄い事になるな」

呆れたように苦笑するハジメにつられ、リオも微笑する。

少年の心の中で、季節が変わり始めていた。

——そして、八月。

灼熱の季節。

ハジメの予言したように、少年にとって凄まじい夏が訪れようとしていた。

明朝、夜も明け切らぬ群青色の世界に、ナガラ・リオが駆け出ししていく。

立て付けの悪い玄関を開け、馴染みの商店街を抜け、若葉が茂る桜並木の河川敷を走る。

日が昇れば、すぐにうだるような暑さが襲ってくる。

そうなる前にランニングを終え、一汗流しておかねばならない。

そのあとは胴着に改め、日課の鍛錬。

部位の強化に筋力強化、素振り、柔軟、型稽古。

やるべき事はいくらでもある。

午後には三雷会の道場に赴く約束を取り付けてある。

シユミレーターによる模擬戦も可能とは言え、生身の相手と組み手が出来るのはやはり有難い。

脳内でスケジュールをまとめている内に、いつしかリオは年季の入った集合住宅の前まで辿り着いていた。

順調に進んでいた足取りが、ふっ、と止まる。

ハイツ『ビッグ・ラング』603号室。

盟友、ヒライ・ユイの眠る部屋に、何とは無しに瞳を向ける。

ここ数日、彼女は家に顔を見せてはいない。

兼ねてより打ち合わせを続けていた新型リーオー。

その製作が佳境に入っているのだ。

『リーオーの骨格を作る』

沖縄から帰ってきた翌日。

ヒライ・ユイは満身創痍のリオに対しそう宣言した。

『強固なフレーム同士を連結させて、骨の頑丈さと関節のしなやかさ

を両立させる。

その上から、比較的柔らかかな外装を重ねる。

国産車のフロントと理屈は同じで、外装で衝撃を吸収して骨格を維持する。

折れず、曲がらず、日本刀のようなMF——』

日本刀。

その言い草がよっぽど気に入ったのか、瓶底眼鏡の奥の瞳は、心なしか興奮してるように感じられた。

だが、内部フレームを一から作るなどと言うプランは、既に女子中学生のホビーの域を超えている。

彼女のために、自分に何か出来る事はないか？

そんな殊勝な考えを一度は抱いたりオではあったが、すぐに考え直した。

彼女に報いるとは、すなわち彼女のリーオーで勝利すると言う事だ。

余計な些事に気を払うべきでは無い。

体を鍛え、技を磨き、勝利を目指し一步でも努力する。

それ以外の思考は全てが邪念だ。

(ガンプラ・ファイト、地下トーナメントの開催まで、あと一週間……)

心の中で暦を数え直す。

いくつもの因縁を清算し、積み重ねた時間の濃厚さを証明するため
の舞台。

今日か、明日か。

大会に向けて、新型リーオーと自分の動きを調整する為の時間がいる。

劇中のヒロ・ユイのようにストイックなあ少女なら、確実にその
タイム・リミットに新型を間に合わせて来る筈だ。

呼吸を整え、古びたマンションに背を向ける。

時間はまだ十分にある。

焦る必要など何もない。

そう考えようとしても、胸の奥の疼きは止められそうもなかった。

新型のリーオーに対する溢れんばかりの昂揚と、僅かな不安。逸る心を抑える代わりに、精一杯に肉体を動かす。

再び河川に合流する。

そのまま北上してしばらく走ると、やがて陸橋に出る。

そこで一度、河川敷に降りて呼吸を整え、時には軽く体を動かしてから帰路につく。

それが現在のリオの日課であった。

「……………」

ふっ、とリオの足が止まる。

普段なら無人の明朝の河川敷に、先客の姿を見出したためだ。

歳の頃は、おそらくは十三、四。

ヒライ・ユイと同じくらいの年代の、あどけなさの残る少年。

空手のような稽古着を纏い、両手にバンテージを巻いている。

リオにとって、見覚えのある少年である。

今日のようにロードワークの途中ですれ違い、二言三言挨拶を交わす。

そんな程度の間柄の少年だ。

その少年が今、河原で一人稽古を行っていた。

これまでは、たまたま時間が重ならなかったのか、少年の拳法を目の当たりにするのは初めての事だ。

沖縄の少女を思い出させるような赤髪。

それを鮮やかに振り乱し、流れるように拳を繰り出す。

右の中段、空手で言う正拳突きから入り、直ちに左を返す。

そのまま半歩踏み出し、左の横蹴り、すぐに膝を畳んで上段に切り替える。

年齢に反し堂に入った見事な動き。

だが、リオの目には何か違和感を覚えるような体の入りだ。

少年はリオと同じ打撃屋ではあるようだが、その母体はあるいは、空手とはまた違った流派なのかもしれない。

「ハアッ！」

掛け声と同時に繰り出された右の上段突き。

それが直前に掌の形をとって空気の壁をピシヤリと叩く。
少年の心根まで現れるかのような真つ直ぐな一撃だった。

「よう、朝っぱらから元気だな」

「え……う？ ああ、おはようございます」

見知った顔を視界に収め、少年がすぐに澆刺とした笑顔を向ける。
快活で礼儀正しい、今時たまらぬ少年であった。

「珍しいモン見せてもらったよ。」

空手……、とは、ちよつと違うみたいだな」

「あ!? 分かりますか?」

俺、『次元霸王流』って言う拳法をやってるんですけど……」

「次元、霸王流?」

「……と！ すいません。」

俺は聖鳳学園中等部二年、カミキ・セカイって言います」

「カミキ・セカイ……、それじゃあ君が」

リオがまじまじと目を見張る。

マイナーな拳法の方とはかくとして、少年の名前には聞き覚えがあった。

「え？ 俺の事、知ってるの?」

「三雷会の道場でガキどもから聞いたよ。」

ガンプラバトルの大会で暴れてる拳法家がいるってね」

「三雷会……、空手をやってるんですか?」

「ああ、俺はナガラ・リオ。」

と言つても、俺のは他流派だけどね」

そう言つておもむろに河原の中央に進み、天地に構える。

そうしてひゆうっ、と息を吐きゆるりと拳を中空に突き出す。

太極拳のように緩やかな、しかし淀みのない動き。

タン、と半歩踏み込んで、さらにスロー・モーションのような左掌底を放つ。

「カミキくん」

傍らの少年に呼び掛けながら、続けて中段蹴り。

その意図を理解したセカイが、にい、と笑つてリオの前に立つ。

「セイツ」

短い気合いを放ち、セカイが右手を打ち出す。

リオと同様の、緩い右の中段突き。

その動きに合わせ、リオが左手を廻す。

交錯の直前で二人の両腕がぴたりと止まる。

返す刀でリオの下段蹴り、それも中空で静止する。

寸止め。

お互いの技を確認するかのように、一つ一つ、交互に繰り出していく。

型稽古のように『お約束』を繰り返していた両者の動きが、やがて、どちらからともなく速度を増していく。

(……親父が見たら、なんて言うかな?)

ふつ、と厳格な父の顔が、リオの脳裏をよぎる。

寸止め空手などダンスと一蹴し、厳密な闘争の世界に身を置いてきた男だ。

よくて破門か、あるいは殺されるかもしれない。

(仕方ねえだろ、こればっかりは)

軽く頭を振るい、雑念を追い出す。

表のガン普拉バトルで名を上げた拳法少年。

一体どんな技を使うのか、その底を見てみたいと言う単純な興味が勝った。

さりとして堅気の少年に、ほいほいと喧嘩を売るわけにもいかない。

ガン普拉バトルの学生大会は3対3。

そう教えてくれたヒライの真剣な顔を思い出せば、大会を控えた少年に、己が我侭で怪我を負わせる訳にもいかない。

いつしか両者の攻防は、本気、と言っただけの域に達していた。

半端に止めた拳では、相手に敗北を理解させる事が出来ない。

文字通り寸での所で止め、極める。

だが、お互いの体が高速で動いている以上、必ずしも拳は寸で止まらない。

打撃が防御の上を叩き、拳圧が頬を掠め、拳と拳が中空で力チ合う。

(今のは浅い)

そう思いながら、リオが返しの連撃を見舞う。

(これも浅い)

そう思いながら、セカイが対主の追い突きを捌く。

高速回転する思考と肉体が、面白いようにシンクロする。

まったく別の流派でありながら、二人の戦法ががちりと噛み合っているのだ。

(こいつ……、とんでもねえ！)

セカイの連撃を凌ぎながら、リオが内心で舌を巻く。

自分の方が二年は年長だ。

リーチも自分の方が長い。

体格も自分の方がいい。

技量でも、自分が劣るとは思えない。

だが、目の前の少年は軽量を活かした入りで、こちらの懐に果敢に潜り込んで来ようとする。

釣り合っていた攻防の天秤が、徐々にだがセカイの側に傾き始めている。

やがてリオは気付いた。

まっすぐにこちらを見つめる少年の瞳。

彼が突き出した拳の先に見ているのはリオでは無い。

リオの体を通して、さらにその先にあるものを目指しているのだ。

(いるのか?)

中学生の、それもガンブラ・バトルの世界に?

そうまで思わせるほどの強敵が……)

ぞくりと体が震える。

少年の強さの芯、それを理解する。

人と人の出会いが肉体にもたらすもの。

そう言う神秘をこの四か月ばかりで体験してきたリオである。

自分の場合はどうだろうか?

目の前の少年の流儀に合わせ、拳の先に『敵』を見据える。

『カーツカツカツカツ!!』

恐ろしいまでの空耳と共に、両目を狙った目突きが飛んでくる。思わず苦笑しながら、実際に迫るセカイの拳を払う。

(集中……、集中しねえと)

ぐっ、と奥歯を噛み締める。

確かに今、お互い暗黙の内に技を止めてはいるが、それでも一発一発、相手を殺す気迫で打っているのだ。

半端な受けは相手に対する侮辱になる。

目の前の攻防に全身全霊を込めねばならない。

と、いうよりも、もはや他の事を考えている余裕はない。

そこまでリオは追い詰められている。

集中しなければならぬ。

だが、そう思おうとすればするほど、却って余計な雑念が胸中に沸いてくる。

——今、こうして戦っている時間は本当に楽しい。

親父は否定した遣り方だが、お互いに繰り出した技を通して、相手の思惑を、その信念を読む。

それだけの事に付き合ってくれる相手がいる、それも嬉しい。

……だが、なぜ自分は、これだけでは満足できないのだろうか？

例えばアイツが相手であったならば、やはりこんな風には遊べない。

目を突き、金的を蹴り、砂を浴びせ、噛み付く。

お互いに学んだもの、覚えたもの、考えた事を全てぶつけ、本当にどっちが強いかを決めたいと思うのだろう。

自分の心の中で、そう言った世界の方を望んでいる。

ああ、また余計な事を考えてしまっていた。

もう限界だ。

これ以上は返しきれない。

もう一度、一打、一打に集中するのだ。

自分たちは今、人を殺せるだけの技を——

「ハアッ！」

「——！」

裂帛の気合いと共に飛んできた右掌。

それが、いなしに掛った左手を押し切って、まっすぐに顔面に添えられた。

妄執を打ち砕く一撃。

完敗である。

実戦だったら首から上が吹き飛んでいた所だ。

互いの技量や実力とは別に、目の前の戦いを楽しむと言う純粹さの一点において、リオは眼前の少年に大きく水を空けられてしまった。

それからしばし、乱れた呼吸を互いに整えた後、ようやくと言った風にリオから口を開いた。

「いやあ、参ったぜ。」

「すげえもんだな、次元霸王流って言うのは」

「……………」

「…………カミキくん？」

ぽつりとリオの口から疑念がこぼれる。

当のカミキ・セカイはしばし、最後に繰り出した右手を抑え、ぶるぶると震えていたが、その内にはっ、と顔を上げて言った。

「ナガラさん！ もう一本だけ付き合ってください」

「ん、もう一本……、つてのは？」

「あの、俺の勘違いかも知れないけれど……。」

ナガラさんは何て言うか、まだ本気を出してないんじゃないかなって」

「——！」

今度こそリオが目を見張る。

リオがセカイの拳の先にあるものを見ていたように、セカイもまたリオの技の中にある、何とは無しの迷いに気付いたと言う事なのだろう。

「ナガラさん、俺の事なら大丈夫だから——」

「武術家が、手の内を全て見せる時はよ……」

セカイの言葉を遮って、リオが口を開く。

一瞬、続きを言うのをためらう。
だが、誤解は正されねばならない。

「……相手が自分、どちらかが死ぬ時だ。
師匠からはそう教わったよ」

「え……？」

「立派な師匠だろ」

思わず声を失ったセカイに対し、おどけた調子でリオが笑いかける。

なるほど、次元霸王流は大した『武道』である。

拳を通じて想いを伝える。

拳を通して相手を理解する。

余程の感性に、そして優れた師に恵まれねば出来ぬ事である。

だが、自分の『武術』の師だって、捨てた物では無いと思う。

厳しい世界で男が一匹、戦い抜くための牙を与えてくれた。

己の道を切り開くための、屈強の肉体を与えてくれた。

父の教えを離れ、己が流儀を模索している今だからこそ、却って故人の与えてくれた物の大きさが理解できる。

カミキ君とは良い友人になれそうだが、それでも今日のように遊ぶのが精々、と言う事になるのだろう。

「さっきのはお互い、拳を当てないように戦ってた。

俺はそのルールの中で最善を尽くし、そして、負けた」

「……………」

ちらりと、セカイ少年の顔を見つめる。

自分よりも遥かに聡い子ではあるが、それでも釈然としない物は残るであろう。

拳以外で語る、リオにとっては難事である。

「……ああ、なんだ、カミキくん。

ゲームってヤツはよ、お互いに公平なルールがなければ成立しねえ」

「はあ……？」

「限られたルールの中でよ、お互いに出来る事を全部やって……」

だから安心して遊べる。

そう言うのって、なんて言うか……、良いよな？」

「……ああ！ それ、俺もスツゲー分かります！」

「そっか」

ようやく得心が行ったのか、セカイが再び澁刺とした笑顔を見せる。

つられたリオも気恥ずかしげに苦笑する。

「再戦も良いけどよ、時間の方は大丈夫か？」

いつもよりも随分と遅いだろ」

「あつ!? いっけね！」

早いトコ戻らないと、ユウマの奴がうるさいんだっ！」

そう言うが早いか、セカイが慌ただしく背を向ける。

「スンマセン、ナガラさん！ 続きはまた今度で！」

「おう、また今度、遊ぼうぜ」

軽やかに階段を駆け上る少年の背を、リオが眩しげに見つめる。

真っ直ぐに正道を往く光の道だ。

彼らの行く先には、ガンプラバトル全国大会と言う大舞台が待ち受けている。

楽しいエキシビジョンではあったものの、やはり二人の目指す先は違う。

「……帰ろう」

ぼつりと一つ呟いて、リオもまた走り出した。

セカイほど大層な道ではないが、リオにも自分の事を待ち侘びている、クソつたれな野良犬どもがいる。

こんな所で体を冷やして、体調を崩す訳にも行かなかった。

「……………」

階段を登り終えた足が、ピタリと止まる。

帰り道。

そのアスファルトの先に、逆光を背負う人影がある。

この酷暑にも関わらず、季節外れの迷彩柄のパーカー。

目深に被ったフードの奥から、金銀の煌めきが怪しくリオを捉え

る。

ふうっ、と一つ溜息を吐く。

どうやらクソつたれな野良犬が一匹、待ち切れずにここまでやって来たらしい。

おかげで爽やかな朝が台無しである。

ゆっくりと、気負いせずに悠然と歩を進める。

近づくほどに空気が濃密になっていく。

20メートル。

10メートル。

5――。

「ケイアーツー！」

「……！」

突如としてパーカー男が跳んだ。

立ち会いどころか、走り幅跳びでもやろうかと言う距離だ。

雄々しい黒豹のようなしなやかな跳躍。

背に負った逆光の中に身を隠し、一直線に悪意が牙を剥く。

「くっ！」

かろうじて身をよじり、烈風の如き跳び蹴りを紙一重で避ける。

顔の真横を通過する足刀が、ざんばらな前髪を一つ二つ持つて行く。

「へっ！ ままごとヤッてんじゃねエツツ!!」

振り向いた視線の先、男は既に動き始めていた。

脱げたフードの中から現れた褐色の肌。

金眼、銀眼。

輝きの異なる左右の瞳が、野生の狂気を宿してリオの許に迫る。

「……ハッ！」

「アアウツ!!」

ビン、と鈍い音がして、褐色の男が狼狽の声を上げる。

リオの放った右の指弾。

うろたえる男の額の上で、役目を終えた百円玉が宙に踊る。

「オオラアツ!!」

よろめく隙を見逃さず、リオが思い切り前足を蹴り上げる。
睾丸を両方とも潰してやろうと言う、一切の躊躇の無い蹴上げ。
すんでの所で腰を引いた男に対し、更に軸足で踏み込んで前蹴りを
浴びせる。

「ンギイ！　ちよ、ちよいタンマ!？」

蹴り足を両手で受けながら、男が大きく後方へ逃れる。

「何なんだよ、テメエツ!？」

「さっきまでのお遊戯と全然違うじゃねえか!!」

「ノボせんよ犬っコロ！」

なんで俺がお前みたいなのと、丁寧に遊んでやらにやあならねえんだ?」

「……ケケツ！　違いねえ。

この分なら、一週間後も楽しめそうだなア」

一週間。

リオがわずかに眉を歪める。

そんな言葉が飛び出す以上、この野良犬は、やはりガンプラ・ファイトの関係者なのだろう。

襲撃の意図は分からないが、男の纏う危険な空気は、いかにもあのプラモ屋の好みであった。

にいつ、と口元を歪め、男が足元に転がった硬貨を拾い上げる。

「へっ、舌なめずりしてきてみりゃ、何せあんなボンボンと遊んでやがるからよオ。

どんなボンクラかと思ったが、おかげで安心したよ、先輩」

そう捨て台詞を残し、男がくるりとリオに背を向ける。

「……おいー!」

「これ以上はやらねえよ。

今日の怪我のせいで本気を出せなかったなんて、本番で言い訳されちゃあ敵わないからな!」

「何なんだお前……、カミキくんの知り合いなのか?」

「直接の面識はねえよ。

まっ、血を分けた遠い兄弟って所だろうな?」

「兄弟……？」

リオの眩きを受け、男の足がぴたりと止まる。

振り向いた横顔で、金色の瞳が慧々と瞬く。

「ブラジリアン霸王流、ジョージ来栖（クルス）！」

いずれガンブラ地下ファイトの全てを牛耳る男の名前だよッ！」

全選手入場

——埼玉県S市。

群馬、長野との県境に程近い山中に、その『遺跡』はある。

軽車両がすれ違うのが精々、と言った峠道を進むこと三十分あまり。

突如としてぽっかりと開いた窪地に、山中に不釣り合いなコンクリートの広大な敷地が姿を現す。

総合アミューズメントパーク『ラビアンローズ』跡地。

1980年代半ばからのバブル経済、それに伴う再開発事業に後押しされ、国内最大規模のテーマパークとして計画された建設予定地。

結局、まともな道路が通る事も無く、バブルの崩壊と共に事業は白紙に転じ、広大な駐車場といくつかの施設、そして建設中のシンボルトワーを残したまま、この遺跡は時間を止めてしまった。

その『ラビアンローズ』は西ブロック。

カップルや小さいお子様向けに、比較的メルヘンで落ち着いた施設が並ぶ筈だった区域。

安全面での申請関係が必要な大型アトラクションが皆無であったことから、最も建設が進んでいた区画である。

ブロックの中心、小高い丘の上に、半球状のドームが設置されている。

先行で建設を終え、結局日の目を見る事なく時を止めてしまったモニュメント。

常ならば鴉や猪、後は物好きなきな走り屋に一部の秘境ハンターぐらいしか訪れる事の無い夢の跡。

そこに今宵、十五人の招かれざる客人たちが足を踏み入っていた。

「へえ……？　こんな所でやるんかい？」

筋骨たくましい大柄の男が、おどけた調子でホールを見渡す。

ちよつとした映画館規模のサイズを持った、円筒状のホールである。

100名程度を収容できる座席はホール中央に向けて段を作る。今日のゲストを迎え入れるだけなら十分な広さを持った建物なのだが、その室内が随分と息苦しく感じられる。

今宵、集結した只者ならぬ男女の人間的な太さによって、室内の空気が何度か上昇しているかのようであった。

「理解不能、李大人の物好きには言葉もないネ」

「あら、そうかい？」

この雰囲気、あたしは結構気に入ったよ」

小男の片言じみた呆れ声に対し、傍らの大柄の女が愛嬌たっぷりに言う。

ハン、と後部座席で踏ん反り返っていたスキンヘッドが愚痴をこぼす。

「He、折角日本まで来たんだ。

俺はどうせならもつと、観光地に近い所が良かったがね！」

「ハハ、そう身も蓋もないことを言わないで下さいよ、Mr. タップ。

我々の方もそれなりに趣向を凝らしているのですから」

新たに入口から聞こえてきた声に、男女の視線が集中する。

カツカツと高級な皮靴の音を響かせ、丸縁サングラスの男がホール中央へと歩を進める。

ガンプラ地下バトル『ガンプラ・ファイト』主催、李潤發（リー・ユンファ）。

来たるべき最大トーナメント開催のため、今日の面々に招待状を送り付けた張本人である。

「Mr. リー、趣向とは？」

いつものようにネットを用いた通信対戦ではいかんと言うのかね」

「ケッ！ シケた事を言うなよ、おっさん。

せっかくライブでやるんだ。

お祭りに相応しいハコが欲しいってこつたる？」

傍らの口髭を嘲るように、金銀のオッドアイがヘラヘラと笑う。

「勿論、それもありますかねえ。」

「敢えてココでやる事にも意味があるんですよ。」

「80年代、高度経済成長期の香りが残るこの場所で、ね？」

「カカ、随分としみつたれた事を云いよるのう？」

「儂が生まれる前の思い出話なんぞ知るかや」

と、一つ茶々を入れて、老婆のように童女が嗤う。

「もうちよつとだけ昔話に付き合っして下さいよ。」

過ぎ去りし熱狂の時代、それはここにいる全員にとって、一つの意味を持つている。

もう一度、この施設の刻を動かす理由、分かる方はいますか？」

「1980年代……、ガン普拉バトル開幕前夜。」

未だガン普拉が、単なるジャリガキどもの玩具でしか無かった時代やな」

『そっか、もうそんなに昔の話になるんだね』

赤鼻の関西弁に対し、着ぐるみがしみじみと応じる。

「そう、プラフスキー粒子の発見に伴い実現したガン普拉バトル——。」

思えばあれが、一つの時代の契機となりました」

古い詩文でも朗読するかのようになり、淡々とリーが語る。

「自ら作り上げたガン普拉を、自分の手で自由自在に動かせる。」

子供たち、いいえ、ガンダムを愛する全人類にとつての夢の実現。

ガン普拉バトルは、競技として、趣味として、興業として、余りにも完璧過ぎた……。

エンターテイメントの転換期が始まり、プロレスは、ボクシングは、総合格闘技は、野蛮な旧世代の競技としてその座を追われ。

そして武術は、武道は、今や古ぼけた概念と化してかろうじて命脈を繋いでいる在り様です」

「……………」

「明日の大会では、あの頃の我々の『夢』の続きを描くのですよ。」

終わりの始まりとなったプラフスキー粒子、今一度その力を借りて、ね！」

ブオン、と言う起動音と共に施設に火が灯り、半球状のドーム中央

に、人工の星々が瞬き出す。

プラネタリウム。

柔らかな光に照らされて、ホール中央に二台の匡体の姿が浮き上がる。

「ここが、我々にとつての聖^{サンクチュアリ}域です。

人工の星空に仮想空間のコロッセウム、そして生身の貴方達。

明日はここで、我々にしか出来ない、我々のためのガン普拉バトルを開催します！」

リーが高らかと指先を掲げる。

広大な天空に描かれた春の大三角を、少年の碧い炎の瞳ががちらちらと見上げる。

「ハイハイ！ それじゃあ開会宣言もオツケーつて事で。

今の内に抽選の方を終わらせちやおうか？」

ガラガラと荷台を押しながら、セーラー服の陣羽織が室内に乱入する。

「……と、アレ？」

旦那、もしかしなくても一名足りないんじゃないかい？」

「ハハ、そこはそれ、いつものお約束と言うヤツですよ。

構いませんキミコくん、15枠を先に埋めちゃいましょう」

「おいおいハム子。

なんだいそのチンケな抽選機はよオ？」

セーラー服が運んできたガチャポン台を前に、大男が呆れたように苦笑を洩らす。

「こう言うのも中々、乙なモンだろ？」

さてこのガチャポン、回すのに硬貨はいらませんが、代わりに一つコメントをもらおうよ」

相変わらずのおどけた口調で、セーラー服がずっとマイクを差し出す。

「ズバリ聞くよッ！」

みんな、何を求めてガンプラ・ファイトの門を叩いたんだい？」

『——ハッ、決まってんだろ？』

世の中のボンクラどもに思い出させてやるのよ。

どれだけ時代が変わろうと、プロレスこそがエンタメの頂点だつてなア！』

(42歳 男性 プロレス 北海道出身)

『——挑戦すると言う行為に限界は無い。

明日の戦いで、それを証明したいと思っている』

(50歳 男性 ボクシング フィラデルフィア出身)

『——ウゴア、ガルオア、オオワ!!』

(23歳 男性 我流 マレー半島出身)

『——ガンプラ・ファイト、へへ、良い時代になったモンさ』

(34歳 女性 レスリング 鹿児島出身)

『——この日の本で、自分たちを差し置いて最強を決められる訳にはいかないっすから』

(32歳 男性 相撲 青森出身)

『——ハッハ！ ギヤラだよギヤラ！ 楽な仕事だぜ』

(28歳 男性 総合格闘技 コロラド出身)

『——この大会でなら、真のムエタイが見せられると思っている』

(21歳 男性 ムエタイ バンコク出身)

『——温故知新、ガンプラとの出会いによって、中国四千年は次の舞台に移るヨ』

(27歳 男性 中国拳法 河南省出身)

『——ボクは何にだってチャレンジしてみたいんだ！
だから明日も真剣^{ガチ}でやっちゃおうよ〜！』

(5さい 男の子 マーシャルアーツ 南の島出身)

『——何だつてええ！ アツガイ最強を証明するチャンスや！』

(30歳 男性 アツガイ拳法 大阪出身)

『——なに、娘の誕生日にMS格闘王のトロフィーをプレゼントした
いと思ってね』

(43歳 男性 アメリカンプロレス メトロシティ出身)

『——インダスの畔で見たものを、この舞台で試してみたい』

(25歳 男性 カラリパヤット ムンバイ出身)

『——カカ、余興よ余興、明日は存分に楽しませてもらうぞえ』

(18歳 女性 琉球舞踊 沖縄出身)

『——ケケケッ！ 教えてやるよオ。

地上最強は、俺たちの側の霸王流だつてなアア——ッ!!』

(19歳 男性 ブラジリアン霸王流 リオデジャネイロ出身)

『——今は、うまい事言えねえや。

けど、明日の戦いが終わった時、答えが出せると思っているよ』

(16歳 男性 空手 東京出身)

——空中に浮かぶオーロラビジョン、十五人目の少年の抱負を最後に、会場のボルテージはいよいよ高まりつつあった。

古代ローマを模した石造りのコロッセオ。

闘技場には白砂が撒かれ、ありったけの篝火が赤々と星座を照らす。

仮想空間。

けれど、この仮初の世界に満ちた興奮までは偽物では無い事を観衆は知っている。

『——会場にお越しの皆さん』

オーロラビジョンが切り替わり、神妙な面持ちの丸眼鏡を映し出す。

『プラフスキー粒子に満ちた時代に生まれ、その恩恵を甘受しながら……。』

それでもとうとう、今日、この場所まで辿りついてしまった、しようがない皆さん』

男の声に耳を傾けるように、会場からノイズが消える。

『今日だけは、この仮初の世界に、あの日の続きを用意致しました。この地上で最もどうしようも無い奴を決める。』

第一回、ガン普拉ファイト・最大地下トーナメントの幕開けです！本日は最後までゆっくりとお楽しみください』

——リー・ユンファの開会宣言と同時にオーロラヴィジョンが消え去り、次々に打ち上がる花火の煌めきが、鮮やかに夜空を焦がす。

再び興奮に沸き返るコロッセウムに、純白の粒子を振り撒きながら、翼を広げたMS少女が鮮やかに舞い降りる。

『地上最強のガン普拉ファイターが見たいかアアア——ツ!!』

『オオオオオオオオ——ツ!!』

『ヤジマ商事は怖くないかアアア——ツツ!?!』

『オオオオオオオオオオオオ——ツ!!!』

『お前らアア——ツ!! 私はあるお前らが大好きだアアアアア——ツツツ!!!』

『ハム姉エエエエエ——ツツツ!!!』

『それじゃあツ アレッ! イックぞオオオ——ツツ!!』

「オオオオオオオオオオオオ——ツ!!!」

『全 選 手 ツ 入 ウ 場 オ オ オ オ——ツツ
!!!!』

ドゴンと一つ爆音上がり、コロツセウムが紅蓮の炎に包まれる。赤々と燃える灼熱のロードに、一機、また一機と、煌めくガンブラ達が足を踏み入れる。

「——さあ！ カランコロンと高下駄鳴らし、空手の神話が今蘇る。

太平の世に迷い出た虎の子は、中天に瞬く獅子となれるのか!?

『Gate of Leo』 永樂莉王（ナガラ・リオ）

使用機体『リーオー虎徹』だア!!」

「国技ムエタイこそが最強の実戦武術ツ!!

立ち技格闘技の頂点が、ガンプラ・ファイトに飛び膝蹴りだア——

——ツ!

『超^{リアル}実戦マツハ!!!!』 サマワツカ・イーヲ!!

使用機体『ハヌマーンフラッグ』ツ!!」

「ビームライフル? 気遣い無用ツツ!!

自分たちのテツポウは地上最強っすから!!

『月面送り出し』 大横綱、月天山（ゲツテンザン）

『SUMOU金時』でござっつぁんですツ!」

「耐える! 吠える! 投げる!」

三拍子だけが揃ったロートルレスラーが、今宵もリングに旋^{センセーション}風を巻き起こすツ!

『人間モビルアーマー』 ビグザム剛田（ゴウダ）!

機体はご存じ『AGE—ONEタイタスNOAH』だアツ!!」

「放浪の月日に終止符を打ちたい。

インダスの流れに見出したのは、アジア格闘技の源流、カラリパヤット!

『三面六臂』 山本明日羅 (ヤマモト・アスラ)!

使用機体『アスラガンダム』刻の涙を見せるか!?!」

「生きる人間賛歌! 伝説のボクサー!

もはやフィルムの中になしか存在しなかった筈の男が、今宵ガンブラ・ファイトの舞台に立つ。

『アメリカン・ドリーム』元ヘビー級王者 ルクス・ランドアだア!!

使用機体『フォーエバーザク』でK. Oだツ!!」

「イツエエくイツ! ガチガチぴよんぴよん! ガチぴよんでえーっす!

今日はボクとガンブラ・ファイトにチャレンジだあっ!

……つて大丈夫!? これ本当に大丈夫ツ!?!?

『ガチぴよんチャレンジ』ガチぴよんだアく!!

使用機体『がちもあ! (ガチぴよん専用グリモアカスタム)』モツプさんもいますぞツ!!」

「あるく日、森のく中、クマさくんに、出会ったツ!?!?

……ツ!? 誰だお前ツツ!?

熊田文吉 (クマダ・ブンキチ) 詳細不明!!

使用機体『モリノーク・マサーン』!?!」

「南海の孤島に悪魔が嗤う!

出るか目潰し! 当てるか金的! お前のような人類の革新がいるかツ!?

『かつてN Tニュータイプと呼ばれた女』安室流舞踊、安室恋 (アムロ・レン)

『リ・ガズイ風月』古流の真髓を見せるか!?!」

「虎が来る！」

マングローブの密林の奥から、最強野生児がその牙を剥く。

『マレーの虎』 ハリマオツツ!!

使用機体『バクバクウ』でバクバクだアツ!!」

「市長の仕事はどうしたアツツ!?

米犯罪組織潰しの英雄が、鉄パイプ片手に殴り込みだア!!

『筋肉爆弾』 ギンザエフ・ターイー!

使用機体『ギギム』なぜそれを選んだツ!?

「中国四千年、バリ・トウッドには欠かせまいツ!!

東洋武術の神秘が、プラフスキーの輝きの下に曝される!!

『婆鎖唾護神拳』 馬凶愛(マー・シオンア)だツ!!

使用機体はもちろん『婆鎖唾護(ヴァサーゴ)』!!」

「トーシロどもが、ホンマモンのビルダーを舐めクサるなやツツ!!

一流格闘家の祭典に、まさかのド素人がやってきたでツ!

『(有) アカハナ土建』 赤井鼻緒(アカイ・ハナオ)社長やアー!!

『アカハナ専用アツガイ』アツガイファイトの再来やツ!

「アマチュア諸君、俺様が本物の格闘技をお見せしよう。

総合格闘技界の絶対王者が、ガンプラ・ファイトの制圧に乗り出したツ!!

『暴君』 オード・イル・タツプ!!

使用機体『ジオ・ザ・ビースト』征服完了ツ!!」

「おお神よ! 何故貴方は斯様なお戯れをなさるのかツ!?

192センチ105キロツ!! アマレス三冠ツ! 女子プロレス

七冠ツツ!!

『女帝』 モーラ鬼灯(ホオズキ)が来てしまったアツ!!

使用機体『ビルドノーベル』この肉体にバーサーカーシステムは不要だア!?」

「ガンプラバトルの表と裏、俺達兄弟で牛耳を執ろうツ!!」

遙か地球の裏側から、もう一つの伝説がやってくる!

『ブラジリアン霸王流』 ジョージ来栖(クルス)だアツツ!!!

使用機体『マスターエルドラド』次元霸王流は黄金郷へと昇る!!」

「——以上16名によるワンデイトーナメントで、地上最強のガンプラ・ザ・ガンプラを決定いたしますツツ!!」

それでは皆さんッ! ご一緒にイツ!!」

「ガンプラファイト オツ!!」

「レ デ イ イ イ イ ……」

「ゴ オ オ オ オ オ オ オ オ オ —— ツツ!!!!」

「」

「アリガトオ〜」「アリガトオ〜」「アイラビユ〜」

MS少女の号令に合わせ、会場の咆哮が一つとなる。

後に伝説となる熱狂の一夜の幕が、ついに切つて落とされようとしていた……。

思春期を殺した少年の翼

ユニオンフラッグ。

機動戦士ガンダム00におけるユニオンの主力MS。

シャープなフォルムと可変機構を活かした演出、加えて搭乗者の強烈なキャラクターにより、劇中序盤から空中戦の花形として視聴者を楽しませてくれた名機。

その空戦の雄が今、緩やかに地上で舞っていた。

ピー・チャワワーのエキゾチックな音色が、古代ローマを模した仮想空間をラジャダムナンの熱帯へと変える。

スタジアム中央、三度の叩頭を終えた漆黒の機体がゆるりと立ち上がり、舞曲に乗せてしなやかに片膝を持ち上げる。

——ワイクルー・ラムムアイ。

ワイクルーは師、父母への礼を指し示し、ラムムアイは戦いの勝利を祈願する儀式となる。

まさしく今、眼前のフラッグは、その鋼の肉体に戦神ムムアイの加護を取り込もうとしている訳だ。

サマワツカ・イーワ。

貧者の競技と揶揄されるムエタイの世界においては珍しい名門出の闘士。

若き漆黒の王者。

細身の長身の繰り出す技のリーチは、リオより10センチは長いだろう。

にも拘らず、体重はリオと同程度か、それよりもさらに軽い。

階級差が絶対の格闘技の世界において、明らかな調整ミスでは無いかとリオは疑っていた。

が、実際にその機体を目の当たりにして、戦前の印象が己の不明であつた事に気付く。

賭博としての側面を持つ競技ムエタイにおいて、ラムムアイは選手の体調を見るパドックであると言うが、その観点で言うならばあの男は鉄板だ。

引き締まった若木のような肉体は、元より尖鋭的なフラッグの外見と相俟って、競技としての枠を超えた『牙』の存在を匂わせる。だが、それ以上に不気味なのは、舞の中に見える男の真摯さだ。単なる儀礼でも、ましてや興業としての見世物でも無い。かつて父は、肉体に神が宿る、と言った。盟友ヒライもまた、プラスチックの機体に神が宿ると嘯いた。あの男のラムムアイは、まさしくそう言った『神域』を知る人間のものだ。

錯覚では無い。

現に儀式を終えたフラッグの華奢なボディが、闘技場の中央でむくむくと大きくなっていくではないか。

(それでも殴れる……、このリーオーの拳なら)

じつ、と鋼の拳に目を落とす。

鈍い光を宿した黒鉄の骨格に、白銀の輝きを放つ外装。

折れず、曲がらず。

製作者の信念を心金にまで浸透させた、日本刀のようなMF。

「セイツー！」

心持ち内股に構え、腰を落として右拳を突き出す。

中段正拳突き。

空気の壁をパシンと叩き、幻影の巨人の姿が淡くも消える。

(やはり……、殴れる！)

確信が溢れる。

神なる機は、間違いなくこの機体にも宿っている。

ヒライの執念とも呼ぶべき調整が、それを直に感じ取れるレベルにまで鍛え上げてくれていた。

『鬼に逢っては鬼を斬る！ 仏に逢っては仏を斬るッ!!』

血に飢えたる宵闇の虎徹は、亜細亜の猿王を斬り伏せる事が叶うのかッ!？」

MS少女の大仰な口上に、仮初のコロッセウムがわっ、と沸き返る。

興奮の中、リー・ユンファがさつ、と右手を掲げる。

『最大トーナメントAブロック第一試合！』

それではみなさんッ ご一緒にイイイ——ツツ!!』

「ガンプラファイト オオ——ッ」

ハヌマーンフラッグが、傍らのドートレスへとモンコンを預ける。

「レ デイ イイイ——ツツ!!」

リーオー虎徹の背中に、少女が二回、切火を切る。

「ゴ オオオオオ——ツツ!!」

観衆の絶叫と同時に銅鑼の反響が大気を震わし、二機の獣が同時に動き出した。

・
・
・

闘技場の中心で、ゆるりと二人が向かい合う。

イーフは後ろ足に体重を乗せた深い構え。

左足を軽く上下させ、足技の匂いをちらつかせる。

一方のリオは背を丸めての前傾。

空手と言うより、ボクシングのインファイターのそれに近い。

打撃を旨とする両者にとって、頭部を差し出す形は無論リスクを伴うものの、遠間での蹴り合いでは勝ち目がない。

互いの体格とファイトスタイルに起因する選択肢の無さが、リオに自然とその構えを取らせたのだ。

(……さすがに遠いな)

しなやかな指の奥に覗くフラッグの頭部を忌々しげに見つめる。
立ち合ってみて初めて分かる、ムエタイと言う盤石なシステム。

立ち技最強と言う攻撃的な謳い文句とは裏腹に、このスタイルの本質はおそらくは守り。

絶対急所たる頭部を前線から遠ざけて全体を俯瞰し、かざした両手は弾避けに徹する。

更に後方に寄った事で自由になる左足、これが攻撃のための牙――

パアン！

「――ッ！」

乾いた鞭のような音が空気を震わす。

左のミドル。

思っている間にもう飛んできた。

リオが想像していたよりも長く、鋭く、何より疾い！

蹴られた後でミドルだと分かった。

蹴られると分かっていたから、かろうじて防げた。

だが無意味だ。

ビリビリと痺れる右腕に、彼からの雄弁なメッセージが籠められている。

腕力の三倍はある脚力で、お前の右腕を蹴り潰す、と。

「オオッ！」

迷わずリーオーが動く。

すでにフラッグは次の動作に移っている。

このままキレイに戦わせる訳にはいかない。

「ジャッ！」

小癩なフラッグの蹴り足。

左の前蹴り。

先のミドルが鞭ならば、これは槍であり盾。

クロスした両腕の上から蹴り飛ばさんとする衝撃。

あわよくば懐に飛び込んで、と言う皮算用を御破算にしてくれる重さだ。

短い舌打ちを加えて蹴り足を逃がし、お返しに軸足を蹴り返す。
パン

「！」

取られた。

よく見ている。

蹴りに行つた左足の返り。

その踵を長い右手で掴まれた。

マズイ体勢。

当然、軸足を思い切り刈り払われるハメになる。

これがキックのルールであつたなら、スリップとしてレフェリー割つて入る場面であるが……。

「シャアッ」

流石。

躊躇いもなく踏み込んできたサッカーボールキックを、片手で跳ね起しかろうじて避ける。

ザシユツと闘技場の砂が思い切り舞い上がり、両者の視界を遮る。

（——好機——）

踏み込む覚悟を決める。

前蹴りか横蹴りか、敵の反撃に思い切つてヤマを張る。

リオの予想は、あくまで左のミド——

（……！）

ぞくりと悪寒が走る。

わざわざガードの上を蹴つてきた、最初のミドルキック。

あれがもし、脇腹を蹴られるヤバさを刷り込む為の布石としたら

？

そんな事を思いながら、何となく右手を畳んで側頭部に添えた。

コンマ何秒か遅れて、重いハイキックが手甲を叩く。

（~~~~ツ　油断も隙もねえっ！）

蹴り足を弾き返し前に出る。

ともかく読みには勝つた。

反撃の時。

渾身の中段突き——が、虚しく殺される。

ガシリとリーオーの両肩を抑える、フラッグの長い腕。

肩を押さえられた打撃など、必殺には程遠い。

そのまま無理やり、距離を潰して組み打ちに引きずり込まれる。リオが己の勘違いに気付く。

接近戦は活路ではない、ここからがムエタイ本当の地獄――。

膝。

そして肘。

(……よくもまあッ！)

密着と言っていていいほどの至近から繰り出された打撃に、思わず息が詰まる。

無理やりに引き剥がそうとした所を、振り回され、さらに肘を浴びる。

額に熱い物が走り、鮮血が舞う。

首相撲。

ムエタイが立ち技最強たるもう一つの理由。

膝。

他の格闘技ならば水入りとなる至近での組み打ち。

それがムエタイでは攻防の一つとして許される。

さらに――、

膝。

肘。

――と言った、他の格闘技の多くで反則となる打撃を、容赦なく浴びせてくる。

崩。

膝。

接近戦クロスレンジでの一撃必殺の攻防、そんな甘えをこの格闘体系は許さない。

投。

耐。

膝。

より有利な距離で、より有利な体勢で、より有利な部位を当てて相手を削り殺す。

ムエタイとはそう言った、情け容赦の無いセメントの世界。

（――これがグローブをつけての試合だったら、成す術も無い所なんだけだよ）

不敵にリオが嗤う。

空手は全方位対応武術。

相手が手の届く所にいるならばどうとでもなる。

ガチリとホールドされた右肘。

構わない、無理やり右手をフラッグの左脇に差しこむ。

「~~~~~ツツ!!」

つねる。

子供のように遠慮なく、脇の下を思い切りつねり上げる。

十円玉を折り曲げる空手家の指力で、情け容赦も無く全力で。

右肘を打ち込もうとしていたフラッグの体が、一瞬、ビクンと硬直する。

敵の右脇腹が開いている。

こちらの片腕は囚われたままだ。

距離は無い。

けれど体は廻る、膝も、腰も、肩も、肘も。

（それなら刺さる、存分に――!）

渾身の左掌底。

くの字に折れたフラッグの体が、力無く後退する。

オオオ、とどよめきが漏れる中、一つの確信が胸を突く。

敵の意図は掴めないが、少なくとも減量のデメリットは防御面に露骨に出ている。

衝撃を支えるべき腹筋の脂質が削ぎ落とされた事により、本来のナックモエのしぶとさが失われているのだ。

（ここで、仕留める）

風を巻いてリーオーが迫る。

同じ小細工は二度は通じまい。

あの綻びが回復する前に決着を付けねばならない。

「シッ」

疾風の如き巻蹴りが唸りを上げる。
差し出した両手で受け損ね、フラッグが白砂に転がる。

『さあー、若き空手の獅子が行く！ 疾風怒濤の攻めで一息に斬って捨てるのかッ!!』

リーオーが砂地を蹴り上げる。

右手でかろうじて受けながら、フラッグが後方に逃れる。

会場が一気に沸騰する。

崩れてしまった均衡が、決着の気配を告げる。

逃げるフラッグ、追うリーオー。

誰もが予感していた。

次の一撃が入った時、勝負は決まる。

次の一撃が決まった時。

次の一撃が、当たれば。

次の一撃が、入りさえ、すれば……？

——30秒、一分、いや、あるいはそれ以上の時間が過ぎただろうか？

状況の変化に、居合わせた誰もが戸惑い始めていた。

「オアッ！」

リーオーが追い突きを放つ。

緩やかに左手を添えながら、フラッグが後方に泳ぐ。

リーオーが前足を蹴り上げる。

フラッグがその足を踏み台に、後方に宙返りする。

直後、弾かれたようにフラッグが動き出していた。

一足跳びで間合を詰め、鋭い前蹴りを繰り出す。

予想外の反撃によるめく獲物を追って、さらにフラッグが飛ぶ。

……そう、フラッグが『飛ん』だ！

空中に散歩にでも出かけるかのような気軽さで大地を踏み、軽々とリーオーの頭上を取った。

「キャオツ!!」

上空から左の飛び蹴り。

片手で捌いたリーオーの肩口に、逆の飛び膝を浴びせながら乱暴に着地。

その上、更に掲げた肘鉄で脳天を撃ち込みに行く。

「くうツ!」

逆の手でかろうじて一撃を受け止める。

直後、がら空きとなった鳩尾を蹴り込みながら、その反動でフラツグが地上へと舞い戻る。

天才ナツクモエが見せた未知なる戦法に、ざわりと観衆が色めきだつ。

「何だありや!?! あのムエタイ野郎は何を仕掛けてやがるんだ?」

「何って……、ラジャダムナンの英雄さんだぜ?」

ムエタイ以外の何者でもねえだろうよ?」

「戯けた事を申すな、あんな軽業がリングの世界にあらうてか?」

舞台を見つめるファイターたちの間にも動揺が走る。

そんな中、格闘技に疎いマイスター、ヒライ・ユイだけは、まったく異なる観点から戦いを見つめていた。

「……違う」

「違うって、譲ちゃん、どういう意味だ?」

「あのデザイン、それに挙動……、あの機体はフラッグじゃない」

ぽつりと呟きをこぼしたユイの視線の先で、漆黒の機体が鮮やかにリーオーを翻弄する。

「あれは……、あれはコルレル、黒塗りのコルレル。」

機動新世紀ガンダムXにおいて、新連邦軍の製作した究極の格闘特化型MS」

かつて、タイ正当王朝時代から連なる軍人の家系に生を受けたイーフは、その尚武の気質で以って、貧困層のスポーツと看做されるムエ

タイの世界へ足を踏み入れた。

才能と情熱と環境に恵まれ、一直線にラジャダムナンのランキングを駆け上ったイーヲであったが、その成功とは裏腹に、彼は一つの壁に躓く事となる。

かつて『黒の王』ナレーズワンを支え、アユタヤ王朝復興の嚆矢となった伝説の武術ムエタイ。

誇り高き先祖たちの技とは、果たしていかなる形であったのだろうか？

確かに競技としてのムエタイは強い。

立ち技においては地上最強と言ってもよいだろう。

だがこの技術で戦場に立てるか？

剣や槍を相手に、真つ向から立ち向かう事ができるのか？

ミッシング・リンクを埋める古流の型の多くも、今では指導者を失い形骸化してしまっている。

鬱屈とした日々が続く中、友人が気晴らしにと誘ってくれたガンブラバトルトーナメント。

その日の観戦が若者の運命を大きく変える事となる。

決勝戦、国内の強豪ルワン・ダラーラのアビゴルバインが放った、すれ違いざまの浴びせ蹴り。

そのセパタクローを髣髴とさせる鮮やかな返しを見た瞬間、彼の中で何かが弾けた。

(そうか……！ 剣であろうと槍であろうと、

当たらなければどうと言う事は無い!!)

たちまちに彼はリングを去り、人の通わぬ密林へと籠った。

失われた古式の再興。

靈感が確信となって全身を駆け巡る。

ムエタイの強さの源たるキック力、これを再び大地を蹴る武器に使う。

5ラウンドを戦い抜くための脂肪、これは不要だ。
元より刃物に対抗できる程の盾とはなりえない。

古式の復興に必要なのは軽さ、見えざる翼だ。

ガルーダのように舞い、ハヌマーンのように仕留める。

そのためには狭いリングを去り、広い大地を生かす闘法を一から研鑽せねばならない。

世俗を離れ、繰り返される修行の日々。

ラジャダムナンから彼の名前が忘れ去られ、自らの技に自負を得たイーワが郷里に戻った頃。

リー・ユンファなる実業家から、一通の招待状が彼の元へと届いた。

『何と言う高さ!? 何と言う鋭さツ!!』

これがツ 失伝せし古式ムエタイの真の姿であるというのかアーツ!』

一転攻勢。

未知なる翼で攻めに転じた漆黒の機体に、会場が再び騒然となる。

「軽身功……」

トーナメント参加者が一人、マー・シオンアがポツリと眩きをこぼす。

「気功の鍛錬によって体を軽くし、その身軽さを武器へと変える」

「ケツ！ いきなり何をほざいてやがる。」

チャイナにやあそんなインチキじみた武術が現存するってえのか？」

「アルわけナイねそんなノ。」

単なる武侠の小説のお約束ヨ、それを……。

あのタイ人、肉体鍛錬だけで仙道にでもなるつもりカ？」

「……さつき譲ちゃんが言ってたコルレルってのは、そんなにヤバイロボットなのか？」

「ああ、そりゃあエゲツないシロモンやで」

ヒライの回答を遮って、赤鼻が額の冷や汗を拭う。

「何せ本編じゃあ、バルカンの掃射でスクラップにされてまう程の紙装甲や。」

たかだか軽さのためだけに、よりによってあの機体を選ぶ。

そのイカレた根性は何よりおつかないわ」

「まあ、何れにせよ大勢は決したヨ。」

あの空手小僧には、この猛攻に対応する余裕は皆無ネ」

マーの断定に対し、ヒライが静かに首を振るう。

「ナガラは、勝つ。」

ナガラの空手は、全局面对応闘争術。

そして私のリーオーは、ナガラの要求、全てに応られえる機体だか

ら……」

・
・
・

「オオツ」

リーオーが渾身のミドルキックを放つ。

フラッグが飛び上がりながら体を捻り、セパタクローさながらのバ
イセクルシユートを放つ。

「クウツ！」

真横から飛んできた延髄切りをかううじて両手で防ぐ。

勢いのままに、リーオーが大きく弾かれる。

(大分、好き勝手やってくれるじゃないか)

頭を一つ振るい愛機の装甲を見つめる。

ヒライが苦心して仕立た白銀の外装は、今やすっかりくたびれ果て
て砂に塗れ、腕部、腹部を中心に大きくひしゃげてしまっている。

だが、これはまだ覚悟の内だ。

外装の柔軟な素材で衝撃を吸収する。

その証座に、これだけ打たれてもリーオーの骨格には一切のブレが
ない。

(となれば後は俺の問題。

俺自身さえ耐えられたなら、リーオーはまだまだ戦える)

『ナガラ!』

「!?!」

後方より聞こえた相方の声に、リオが状況に気づく。

いつの間にかリーオーは闘技場の壁を背に負っていたのだ。

観客の絶叫が頭上より聞こえる中、窮鳥を仕留めるべくコルレルが再び飛ぶ。

右膝、左膝、右肘、左肘。

最初の一つ二つが防がれたとしても、残りの部位で確実に止めを刺す決死の飛躍。

空手はあくまでも対人技術。

空中より迫る怪鳥に抗するように考えられて――

「なッ!?!」

イーヲが驚愕の声を上げる。

消えた。

逃げ場を失った筈のリーオーが、煙のように。

「リャアアッ!!」

ズン、と咆哮と衝撃が頭上から来た。

「ガッ!?!」

激痛。

繊細なコルレルの装甲が悲鳴を上げ、ミシミシと背骨が鳴く。

(何故……)

思うまもなくコルレルのボディが大地に叩き付けられる。

わっ、と一つ歓声が沸く。

(ナガラ・リオ……、どうやって頭上から……?)

『う……、打ち下ろし手刀一閃!』

空手小僧決死の跳躍が、古式の技を唐竹割りに斬り臥せたアアア――

――ッ!』

「……見たかよ?」

「おう」

興奮に包まれるギヤラリーとは裏腹に、ファイターたちは水を打ったように静まり返っていた。

第三者であったからこそ見えた攻防の全容に、驚愕を禁じ得なかったのだ。

「三角飛び、あのリーオー、壁を……」

「そんなレベルじゃねえだろ。」

小僧の奴、外周を駆け上がってムエタイチャンプの上を取りやがった。

だが、どうやってそんなアクションを」

「……そうか! リーオーの順応性の高さ。」

その秘密はあの足先やな」

赤鼻の言葉に、一同の視点がモニターへと集まる。

リーオーの白銀の靴先、その先端には骨格から生やした黒い地金の五指を供えていた。

「成程。」

実物同様の指先を得た事により、あのリーオーは本人さながらの動作を可能にしたと言う事力。

つまり、あの五指によってしっかりと大地を掴み……」

「ワシのディジェのパクリじゃああああ!!」

突如として、試合を観ていたアムロ・レンが素つ頓狂な叫び声を上げる。

一同が呆然とする中、ふるふるとヒライが首を振るう。

「全然違う。」

あなたのは足袋、私達のは五指。

目的も構造も、何から何まで違う」

「やっかましいわい! 表に出んかい泥棒猫め!

うぬとは一度、ガンプラバトルで決着を付けてやろうと思うとった所じゃ」

「……それは無意味。

何故なら私は、操縦が致命的に下手。

イオリ・セイのような天才ビルダーは、そうそうに存在するものではない」

「むつきくくッ！ 何なんじゃこの敗北感はッ!!」

「ウルセエぞ、お前ら！」

ムエタイの兄ちゃんが立ち上がったんだよ」

ゴウダの言葉に促され、二人が再び舞台を見つめる。

確かに、一度は沈黙した筈の漆黒の機体が、今、再び砂を掴んで上体を起こそうとしていた。

悲しげに一つ、ポツリとヒライがこぼす。

「……無理。

ムエタイ戦士の肉体がどうであつたとしても……。

コルレルのボディは空手家の打撃に耐えられるよう作られていない」

・

（やりたい事を、先に……、やられてしまったな）

口元に爽やかな笑いを浮かべつつ、イーヲが痙攣する五体を必死に引き起こす。

勝負の多くが判定へともつれこむ競技ムエタイの世界において、笑いは攻撃が効いていない事のアピールとなる。

捨てた筈の競技選手の癖が出てしまった事に気付き、今度は本心から笑いがこぼれる。

（イーヲ……）

ぐっ、とりオが奥歯を噛み締める。

闘技ムエタイ、確かに恐ろしい相手であつた。

人外の魔技を可能とする脚力、そしてその執念について。

ただ一つ惜しむべきは、ムエタイ四百年の歴史を再生するには、余りにもイーヲの実戦経験が不足していた。

あと一年、いや半年の猶予があれば、勝負の行方はどう転んでいたか分からない。

——そう、ムエタイは恐ろしい敵『だった』
もう大勢は揺るがない。

イーヲの魂にどれだけの熱が残っていたとしても、その器たる機体の芯が失われてしまっている。

「キャラッター」

コルレルが御家芸の左ミドルを放つ。

恐ろしく疾い、しかし見る影も無い渾身の一蹴り。

「ジャツ」

バキヤ、と乾いた音が響く。

今日の試合で、初めてリオがまともに受けた。

蹴り足ハサミ殺し。

右膝と右肘に押し潰されて、しなやかなコルレルの脚が無残にもひしゃげる。

「リイ」

声にならない声を上げ、コルレルが迫る。

崩れだした上体でもたれかかるように首相撲を挑む。

「——カアツッ!!」

左腕を廻し、敵の両腕を払う。

刹那、渾身の上段正拳突き。

武術家の魂を込めた一撃が、コルレルの眼前でピタリと静止する。
寸止め。

同時に自重を支えきれなくなったコルレルが、差し出された拳にすがるかのように崩れ落ちた。

ゴングが鳴る。

観衆が叫ぶ。

サマワツカ・イーオは、最後の最後まで笑っていた……。

ユニバース

——ラビアンローズ跡地『預言者サラサの館』

オリエンタルな妖しさに満ちたその個室は、恋人たちで賑わう西ブロックに定番の占い所として建設されたものである。

本来ならばエキゾチックな黒髪の女主人が迎え入れたであろう天幕に、今、ジャージ姿のぼさぼさ頭がふてぶてしくも上座を陣取っていた。

瞳を隠す瓶底眼鏡が、水晶玉を前にした老婆のような真摯さを以て、テーブルの上のミニチュア骨格に向かい合っている。

そんな少女の姿を、対面のナガラ・リオがしげしげと見つめる。

「……何？」

視線に気付いたジャージの女主人、ヒライ・ユイが首を傾げる。

「ああ……」

サマになつてな。

と、素直に出そうになつた言葉をあやうく引つ込める。

いかに世情に疎いとは言え、年頃の少女、それも愛機の補修に大真面目に取り組んでいる盟友に言うには、余りにも不躰な一言だろう。

そう思い直し、咄嗟に話題を変えた。

「直りそうか、リーオー？」

「問題ない。」

この間話した通り、虎徹にとって外装は消耗品。

内部のフレームが歪んでさえいなければ、予備パーツの差し替えだけで戦える」

言いながら、ヒライが小さな鞆をテーブルの上に広げる。

「もしも、骨格がイカレちゃったら？」

「……素直に棄権するべき。」

この子の骨格は、あなたの体そのもの。

機体がそこまで深刻なダメージを負うようなら、その時はきつと、あなたの肉体の方が悲惨な事になっている」

「ヒイロ・ユイなら気合いで直すぜ」

「……………」

作業の手を止め、じつと、ヒライがリオを見上げる。

相変わらず表情を読ませぬ瓶底眼鏡だが、その沈黙は大きく二つに分けられる。

心地よいものと、耐えがたいもの。

この場合は後者だ。

「……ナガラ、当り前の事だけど、私が直せるのはリーオーだけ、だから」

「分かってるよ、次の試合までゆっくり休むとするよ」

そう言葉を切ってリオが腰を上げる。

駐車場に行けば、キャンピングカーを改造した医療室に工作室が据えられている。

にも拘らず、ヒライがこの出来あいの廃墟に籠ろうと言うのは、一人で集中する時間が欲しいと言う事だ。

ここから先は彼女の領域。

リオはリオで、今の自分に出来る仕事を果たさねばならない。

「任せて」

去りゆくリオの背中に、ヒライが短く言葉を重ねる。

振り向きもせず、リオが右手を軽く振った。

「ふう……………」

高原の夜気を肺腑に取り込み、リオが天幕の柱に背中を預ける。

相方の手前、強がっては見たものの、ムエタイ四百年の打撃は流石に伊達では無かった。

じんわりと痺れるような、心地よい疲労が体を蝕む。

「こんなのを、あと三回も、か」

ワンデイトーナメント。

狂気の沙汰。

今更ながら、こんな行程を考えた奴は頭がおかしい。

天空を見上げれば、広大な夏の大三角が人の子の業を見下ろしている。

次の試合、おそらく相手は横綱のスモーだろう。

そこに勝てたなら、次の相手はビッグザム剛田か、それともあの胡散臭いブラジル野郎か？

ゴウダのおっさんであれば良い、と思う。

そうして、決勝戦。

そこまで勝ち進んで、ようやくあのアムロ・レンとやり合える目が出てくる。

——根平の砂浜、潮の匂い、血の匂い、股間の痛み、膝の温もり、涙、真っ赤なしやぐま。

あの日から二か月、お互いの積み重ねた時間は、どれ程の変化をもたらしたのか。

もう一度やりたい、と思う。

もう一度やれるのか？　と思う。

蜘蛛の糸のように、細い、細い可能性。

わっ、と言う歓声が、丘の上のプラネタリウムから聞こえてきた。

直感する。

第二試合、横綱の土俵入りが始まったのだ。

日の下開山の真贋を見極めねばならない。

大きく深呼吸して体を起こし、ナガラ・リオはプラネタリウムへと向かった。

・
・
・
架空のコロッセウムがどよめいていた。

係員のハイモックを蹴散らしながら飛び出してきた茶色の巨体。

その、余りの異様に。

ポリノーク・サマーン。

索敵・偵察能力に秀でた……、と言う事になっているパプテマス・シロッコ設計開発のMS。

生憎、劇中ではさしたる活躍もないままフェードアウトしてしま
い、『森のクマさん』と言う奇抜なネーミングセンスばかりが一人歩き
している機体である。

成程。

「原形よりも更に強烈なデIFOルメが施された本機には、まさしく
『熊』の名が相応しいだろう。」

熊を彷彿とさせる突き出した耳だ。

熊のように分厚い胸だ。

熊のように太い腹だ。

熊のように短い足だ。

熊のように武骨な両手だ。

熊のように紅いモノアイだ。

熊のように荒削りなクローアームだ。

熊のように大きな口だ。

「グルオオオオオオオオオオオオツツ!!」

——そして、熊のように逞しい声だ。

「!!!」熊じゃねえかツツ「!!!」

会場が、一斉にツツコミの声を上げた。

「何や! 何やこれはツ!?」

そのものズバリ、モリノーク・マサーンやないかツ!!」

「おいしいハム子テメエツ! 運営は何を考えていやがるんだよ!」

「うええ、し、知らないよ私だつてツ!」

……つて言うか中の人つて、フルコン空手のクドウ選手じゃなかつ
たのツ!」

おろおろと狼狽の声を上げるMS少女に代わり、中空のオーロラビ
ジョンに主催者のドヤ顔が浮かび上がる。

『紹介しましょう、ツキノワグマのブンキチ(文吉)くん、七歳です!』

身長180cm！ 体重150kg！

足柄山熊田牧場の経営再建のため、本大会に緊急参戦を果たしました』

「グオオオオオ——ッ!!」

リー・ユンファの紹介に応じるように、ご満悦なブンキチくんが盛んに両手のクローを叩き付ける。

その度にハイモックの装甲が無残に抉れ、砕け、残骸が観客席まで飛んでくる。

『——かつて、源頼光四天王が一人。』

坂田金時は幼少の頃、熊を相手に相撲の稽古をしたと言いますが……。

流星に伝説は伝説……、ですかねえ、横綱?』

ザッ、と塩の雨が降る。

静まり返った会場に、ヒール代わりの高下駄を脱ぎ捨て、威風堂堂たる金色の巨体が姿を現す。

「横綱……、マジで闘る気かよ」

ゴクリ、と誰かの喉を鳴らす音までが聞こえる中、直垂烏帽子のバトラー・ベンスンママが朗々たる呼出を響かせる。

『ひが〜し〜 げ〜てんざ〜ん げ〜てんざ〜ん』

横綱・月天山が金色の脚を天空に振り上げ、勇ましくズン、と大地を踏む。

四股だけで世界を己が物に塗り替えてしまうかのような、英雄の立ち居振る舞いだ。

『に〜し〜 ぶん〜き〜ち〜 ぶん〜き〜』

「グルルル……」

人語を解さぬ獣であっても、張り詰めた空気の変化を肌で感じ取っているのだろう。

ハイモックの頭部を打ち捨て、獣が四足に体を畳む。

時間いっぱい。

腰を落として仕切り直し、横綱が遂に戦闘態勢に入る。

『発気揚々——』

空気が歪む。

二頭の獣の体が、極限まで押さえ付けられた撥條のようにみちみちと緊張する。

『——のこったッ！』

「グオアアアアアア——ッ!!」

急速に加熱した空気に煽られ、本能のままに四足の獣が走りだす。太く、短い前足が大地を蹴り上げ、瞬く間に速度を増していく。横綱は、しかしまるで俄で貼り付けたかのように動かない。

異種格闘技戦、通常の立会とはまるで勝手が異なる。

力士の瞬発力、爆発力を生かすにはこの仮想のコロッセオは広すぎるのだ。

故に横綱は待つ。

まずは先手を取らせ、敵が直径4.55mの『見えざる土俵』に踏み込んでくるタイミングを計る。

鋼鉄の巨熊が暴風となり、獣臭が近づくほどにプレッシャーをかける。

一手誤れば、未熟な人の子など即座に肉塊へ還るであろう。

どくり、と恐怖が心臓を鳴らす。

しかしそれでいい。

横綱・月天山の肉体を以てしても、立合いの時は何時だって恐ろしい。

巡業六場所、年間を通して、おおよそ百試合。

何時だって力士は、そう言った恐怖と付き合い続けている。

虎視眈々と頂点を狙う土俵の鬼。

狭い円を驚くほど優雅に使う小兵。

体重1/4tを超そうかと言う南洋の黒鯨。

同じ人間かと思うほどに懐の深いスラヴの巨人。

戦闘民族の血脈を爆発させる蒼き狼の末裔。

一場所を通して15日、連日そのような人外と闘い続ける。

横綱に敗北は許されない。

巨体同士のぶつかり合いは絶えず故障のリスクが付き纏い、それが

そのまま選手寿命の損耗に繋がる。

それが恐くない筈はない。

そしてやはり、今日も恐い。

いつも通り怖い、それならばいつも通り戦える。

そのような恐怖を克服して角界の綱を獲ったと言う自負が、肉体に神秘めいた冷静さをもたらしてくれるのだ。

モリノーク・マサーンが迫る。

白砂を蹴り上げる毎に頭が上がり、その威容が一段と大きくなる。

熊が迫る。

頭が上がる。

頭が下がる。

頭が上がる。

頭が下がる。

頭が上がる。

頭が下——

——刹那、横綱が弾かれたように飛び出だしていた！

ドゴン、と爆音が砂埃を巻き上げ、大気をビリビリと震わせる。

「グオオッ!」

勝ったのは、横綱。

巨熊の四肢が大地を蹴り、わずかに上がった大顎が下がろうとしていた瞬間。

金色のスモーはその下を更に潜り、対主の巨体を無理矢理カチ上げていたのだ。

『ブ、ブンキチくんの下を取ったア——ツツ!』

横綱、何と言う豪胆!!』

「オオンツ」

クマが頭上からクローを振り下ろす。

スモーが下から払いのけつつ、そのまま突っ張りでクマの胸板を打つ。

「ムーン!」

両腕の回転速度を上げる。

爆裂するテツポウの乱打がクマの勢いを穿ち、その上体を無理矢理に突き起こす。

「うめえな、横綱。」

「やっぱりその手しかないかい」

「その手？」

リオの疑念の声に、冷汗混じりにゴウダが頷く。

「体当たり、前足の爪、噛み付き、それに押し潰し。」

「そいつが熊に出来る攻撃の全てだ。」

「組み合うのは論外、四足の構えを取らせてもならねえ。」

となれば出来る事と言ったらあの形、下からの打ち合いに持ち込む事だけよ」

「けど、突っ張った所で何になる？」

「リングに押し出しはねえ。」

「あのまま連打を続けてたって、いずれ横綱の方が根負けしちゃうぞ？」

「へっ、と嘲るようにゴウダが嘯く。」

「……恐ろしい事が起こるんだよ、坊や。」

「力士が本気で差し合いを捨てると、そういう事になる」

「オウツ」

横綱が怒気を吐き、腰を捻じる。

「それまで真っ直ぐに打ち出されていた左の腕が軌道を変え、大外を回ってクマの頭部に迫る。」

「——ベツチイイイツツ!!」

「たちまちに乾いた音がコロッセオの空気を叩き、クマの頭部が初めて横方向に揺れる。」

『張ったアアアアツツ!!』

「前代未聞ツ！ 横綱！ 熊への闘魂注入くくウツ!？」

クマと真っ向打ち合う力士。

会場がオオオ、どよめく中、ポツリとゴウダが呟く。
「始まるぜ。」

これから横綱が見せるのモノは、相撲であつて相撲じゃねえ」
「何を分かんない事を言つてやがる？」

突つ張りも、張り手も、立派な相撲の技じゃねえか？」

「さつきまではそうだったろうさ。」

突つ張りの役割は土俵の外への突き出しか、あるいは差し合いのため
の布石。

確かに現行の相撲のルールに則した打撃技ではある」

ブン、と逆の右手での張り手。

傾いだ熊の頭部を斜め下からカチ上げ、そのままグツと喉輪を掴
む。

「だがな、アレは違うんだよ。」

体重100kgを超すスプリンターが、側頭部に掌底を全力で叩き
付ける。

張り手はあくまで純然たる打撃なんだよ」

「純粹な、打撃……」

「野見宿禰と当麻蹴速のバーリ・トワードだった時代から、二千年以上
の時を掛けて国技として大成した大相撲。

張り手つて奴は、そんなに抜き損ねたガチンコの牙の名残なのさ」

「……………」

「かつて、雷電爲右工門を伝説の力士たらしめた殺人技。

こめかみに当たれば一発で脳を揺らし、耳に当てれば鼓膜を破る。

あれを本気でやつちまったら、競技としての相撲はもう成立しねえ
よ」

「…………随分と詳しいじゃねえか？」

おつさんがそんなに博識だったとは知らなかったぜ」

と、感心した風に見つめるリオに対し、苦虫を噛み潰したような表
情でゴウダが言う。

「…………いたんだよ、同期に十面上がりが。」

しよっぱい上にガチで強え。

正直、力士とだけは二度とやりたくないわな」

「オフッ！」

横綱が打つ。

右手で起こしたクマの頭部に、渾身の左を思い切り張る。

大きくブレた左の耳元目掛け、さらに返しの右を浴びせる。

左掌。

右掌。

左掌。

右掌。

左掌。

右掌。

スモールの上半体が淀みなく回転する。

一打毎にバチインと言う破裂音が空気を叩き、クマの巨体が左右に

泳ぐ。

会場が沸騰していた。

誰もが思った。

思ってしまった。

このまま打ち続けていれば、人が熊を、倒せるのではないかと。

「グ オ オ オ オ オ オ オ オ ツ ツ !!」

油断。

はつきりとそう呼べるものがあつた訳ではない。

ただ何となく、会場の空気がふつ、と弛緩した気配を汲んで獣が急

襲した。

止めを刺しに向かつていたスモールの左手。

そちら目掛けて、思い切り大口を開けて首を振う。

——がぶり。

「――」
空気が凍る。

最悪。

シンプルなる噛み付き。

各界の宝たる横綱の左の掌が、半ばまで獣の口中に啜え込まれている。

獣の咬合力、脱出は不可能。

反射的に手を引けば、自らの腕力で再起不能なダメージを負う。

だがそれは、どちらにしたって同じ事。

あの巨熊が、このまま顎に万力を込めたならば――。

「嘖ッー」

スモーは既に動き出していた。

捕われた左手を逃すためではなく、開いた右手で敵を仕留めるために。

めきよつ、と言う鈍い音が、静まり返った会場に響く。

天空に掲げた、右の手刀。

それを伸びきった熊の頸椎に、思い切り叩きつけたのだ。

「ガッ……いー」

肉体の反射で、獣の大顎が大きく開く。

かろうじて抜けかけた左手。

だが、横綱は却ってそれを口中へと捻じ込んでいく。

左頬に内側から添えられた、左の掌。

捻じ曲がった頸に添えられた、右の掌。

内と外から拜むように頭部を挟み、金色のスモーがその日、最初で最後の投げを打ちに行った。

「ドウリヤアアア!!」

体を返しながら両手を振るい、クマの頭部を勢い良く引きずり込む。

外掛け。

150kgの巨体が真横に浮く。

……だけでは終わらない!

スモーの手首が返る。

肘が、肩が、上体が合わせて返り、ベクトルが横から下へ。

ドウツ、と砂煙が巻き上がる。

コンクリに叩きつけられるよりはマシ、とは言え150kg

しかも作用点は側頭部。

支えられる獣など、いない。

大地と横綱の掌にサンドイッチにされたモリノーク・マサーンは、その肉体をビクン、ビクンと痙攣させていたが、その内にくたりと動かなくなつた。

『……あ、あ、あ』

ガチガチと歯の根を鳴らし、MS少女の震え声がマイクに漏れる。

『か、勝ちました……、横綱。』

決まり手は徳利、投げ……いや……、イヤイヤッ！』

全身で大きく息を吸い込んで、思いの丈の全てを叩きつける。

『あえて……、敢えて言おうツツ!!』

合ツ掌捻りイツツ！ 炸レツウウ——ツツ!!!』

MS少女の絶叫が沈黙を打ち破り、会場がどつ、と興奮に沸き返る。割れんばかりの歓声の中、横綱はあくまで淡々と手刀を切つて立ち上がり、はるか中空のオーロラビジョンを見上げた。

「李大人、何だってこんな可哀想な事を」

思いもかけぬ横綱の一言に、会場が再び静まり返る。

リー・ユンファが訝しげに首を傾げる。

『可哀想？ ブンキチくんが、ですか?』

「可哀想す」

にべもなく、横綱が視線を落とす。

「野生を失った愛玩動物が、力士に敵う筈が無いすから」

どよっ、と一つ会場が震える。

呆れた様にゴウダが笑う。

「オウオウ、そこまで言っちゃまうかよ、横綱」

大げさに一つ、リーが肩を竦ませる。

『どうやら、あまりこの趣向は好かれなかったようですねえ。けど大丈夫。』

次からの試合は横綱の希望通り、手負いの獣ばかりになるでしょうからねえ』

リーの言葉を受けて、横綱のスモーがじつ、と観客席を見上げる。ぞくり。

ぞくぞくとリオの背筋が震える。

物言わぬ金色のスカーフエイスが言っている。

お前は本当に、自分と立ち会えるような獣なのか、と？

ぶるりと両肩を震わし、くつくつと野良犬が嗤う。

正直、人間と闘うような気すらない。

だが、未だ不明の身とは言え、あの歩く国技の頂点にあそこまで言われては、応えなくなるのが人情ではないか？

ズン、と大地を揺るがしスモーが舞台へ背を向ける。

闘技場の中心には、牙を失った獣だけが横たわっていた……。

F i s t o r T w i s t

(……いい、夜じゃねえか)

プロレスラー・ビッグザム剛田が、ゆつくりと周囲を見渡す。
闘技場が震えていた。

架空の月が見下ろす、石造りのコロッセオ。

その中心で巖を成す黒き鋼の筋肉の表面を、観衆たちの熱狂が容赦なく叩く。

十年、いや、二十年近くも前になろうか。

前世紀。

ビッグザム剛田がまだ一介の前座レスラー、ゴウダ・カオルだった時代には、確かに今日のような熱狂の残滓がリングの上には存在していたものだ。

その後の総合格闘技ブームの台頭と失脚、さらにガン普拉バトルの隆盛。

地上最強の座を失い、エンターテイメントの中心からも弾き出されて久しいプロレス。

そんな時勢になって、まさか自分が大観衆を前にメイン・イベントを張る時が訪れようとは、一体誰が想像できたであろうか？

『F i s t o r t w i s t !』

アメリカは遥か瓦斯灯時代から続く永遠のテーマ

果たして今宵、最後に舞台に立っているのはどちらなのか?!』

(……よくもまあ、フカシやがるぜハム子の奴)

へっ、とゴウダが苦笑する。

F i s t o r t w i s t

本当に強いのは、打撃か？ 投げか？

それはこのコロッセオが現役であった古代ローマから、連綿と受け継がれてきた永遠の物語。

しかし二千年以上に及ぶ長い歴史は、ボクシングとパンクラチオンの進む道を大きく分かった。

限定されたルールの中で高次元のスポーツとして完成された近代

ボクシングと、持てる肉体の全てを使った総合エンターテイメントへと昇華したプロレス。

例えば、サバンナの荒野を駆り場にするライオンと、ナイルの浅瀬に潜むワニ。

地上最強は果たしてどちらか？

そんな事を議論するのはあまりにもナンセンスだ。

二頭はもはや住む世界が違う。

野生の王者達はそんな事を気にしない、両者が対等に戦えるエリアなど、既にこの地上には存在しないのだ。

……と、普通の競技選手であればそう考える。

だが、世界は広い。

どんな時代、どんな場所に置いても『例外』と言う種族が存在するものだ。

今宵、闘技場の中心で向かい合った、二頭の希少種。

一方は超新星たちの壁として、黄金期のプロレス界を屋台骨から支え続けたロートルレスラー。

もう一方は、数々の武勇伝を子供たちに語るだけの余生を迎えていた筈の老兵。

ここが表の舞台であれば、さぞかし格闘ファン達の胸を躍らせるエキシビジョンになっていた事であろう。

だが困った事に、この二人、完全に真剣^{ガチ}。

今、真紅に輝く巨人^{タイタス}の両瞳が、星条旗を描くガウンに包まれた単眼^{ザック}を見下ろす。

ルクス・ランドア。

かつて、未来無きニューシネマの荒野に颯爽と現れた、アメリカの生ける伝説。

ゴウダより10センチ近く低い身長は、ヘビー級においても小柄な部類に属する。

だが、そのハンデすらも目の前の老兵にとっては一つの武器だ。

リーチが無い、スピードも無い、テクニックも無い。

人外の生物が集うヘビー級において、現役時代、男は盤石からは程

遠い王者であった。

その代わり、男にはハートがあった。

ハートに裏打ちされた練習から生み出されたパワーがあった。

絶望的な状況から、何度でも立ち上がれる精神的なタフネスがあった。

幸運の女神を振り向かせるまで、決してあきらめないしぶとさがあった。

数多の偶然から必然的にドラマが生まれ、やがて男は伝説になった。

「なあ、チャンプよオ。

アンタ、何だって今更ガン普拉バトルだったんだい？」

ぽつり、と闘技場の中央でゴウダが呟く。

かつてのアメリカの英雄は十年以上前、数々の死闘のツケが祟ってついに現役を引退。

最愛の妻にも先立たれ、今では故郷フィラデルフィアで、細々と孤児院を経営する日々であった筈だ。

「……ライセンスが下りなかった」

「ああ、そりゃあ——」

ご愁傷様、思わずそう言いかけた口をつぐむ。

ゴウダが返答に窮する。

今年で中老を迎えようと言う元ボクサー。

通常の適正で言えば、彼が現役でやれるのはせいぜい二十年前までだ。

全米ボクシング協会の気持ちも分かる。

いかに本人に情熱があろうと、たとえ医師のゴーサインが出ようとも、アメリカの伝説をリングで死なす事があるてはならない。

(そんなんでも、やろうってのかよ?)

「リングの上に、やり残した事が残っている」

ゴウダの心の声を聞いたかのように、淡々とルクスが語る。

不器用で、舌足らずな男だ。

拳以外で、まともに語る術を持たない男だ。

「もう一度、リングの上で全てをぶつけてみたいと思っている。

子供たちの、いや、自分自身のために」

「……へへ、悪かったなあ、それなのに相手が俺みたいなロートルだよオ」

「いや……」

じつ、と単眼ごしにルクスが見上げる。

「君でいい」

ポン、とザクの右手のグローブが、タイタスの太い胸元を叩く。思わずぶるん、とゴウダの体が震える。

魂のファイター、ルクス・ランドア。

憧憬がある。

ゴウダ・カオルは、まさしくルクスの『洗礼』を受けた直撃世代だ。たとえプロレスを人生の中心に置く彼であっても、目の前の男に認められる事には、それだけで感動があるのだ。

そして、だからこそ倒さねばならない。

歩くプロレスたるゴウダにとって、光速のジャブも必殺のアップパーももの数では無い。

だが一つ、ただそこに掲げるだけで人々の魂を揺さぶるあの男の拳だけは、プロレスラーの価値観を崩壊させかねない危険な敵なのだ。

空手小僧、ナガラ・リオにとって、最強のレスラーが打倒すべき存在であるように。

ビッグザム剛田もまた、あの史上最高のボクサーの前で、プロレスがどれだけ偉大な競技であるかを証明せねばならないのだ。

両者がゆつくりと背を向け、開始位置につく。

ルクスがガウンを脱ぎ捨て、ゴウダが勇ましく肩を張る。

打撃 F i s t 対 投げ T w i s t。

専用機 ガンダム 対 量産機 ザク。

いくつもの因縁に彩られ、会場の熱気は否が応にも高まっていく。

『ガン普拉ファイトオ！ レデイイ——ッ ゴォ————ッツ!!

』

MS少女の絶叫に合わせ、ゴングの音が中空に響き渡る。熱狂の中、両者が同時に中央に向き直る。

スツ、とルクスの駆るザクが歩み出て、おもむろに右のグローブを差し出す。

思わずふっ、とゴウダの頬が緩む。

スポーツマンシップに則って堂々と。

因縁と抗争に彩られたプロレスの台本ではありえない演出。

正直、一度で良いからやってみたいと言う本心はあった。

偉大なボクサーの流儀に合わせ、ゴウダのタイタスもまた右拳を差し出した。

誓って言おう。

ルクスはこの時、何か邪な企てがあつて手を差し伸べた訳では無い。

ただ一瞬の事とは言え、戦いの中でプロレスを忘れてしまったゴウダが未熟だったに過ぎない。

ぱん、と舞台の中央で、両者の拳が軽く音を立てた。

即座にルクスは現役に戻り、その身を深く沈めていた。

地面スレスレから遙かタイタスの顎先目がけ、ザクの拳がたちまち真紅の軌道を描く。

その段になつてもゴウダはまだ、スポーツマン気取りの浮ついた心が切り替わっていなかった。

ボグン！

左のロングアッパー。

凄い音が鳴った。

ゴウダの視界が、一瞬で白色に染まった……。

・
・
・

——拳に酔う、と言う言葉がある。

俗に言う脳震盪の類であるが、血の小便や嘔吐を伴う地獄のボディ

攻めに対し、痛覚を絶たれ即座に意識を失う頭部への一撃を『酔う』と表現した者のセンスはバカにできない。

強力な打撃は、時に灼けるようなウオツカより痛烈に、時に十年物の大吟醸よりも芳醇に戦士を蝕む。

ビグザム剛田も、過去に三度ほどその『豪酒』を体験している。

一度目は超日本プロレス入門三日目。

ハネツ返りの練習生がナマを吐いて、社長から直々に制裁を浴びたのだ。

リングでは許されぬ鉄拳を散々にブチ込まれた上で、かのプロレス王から

「絶対に本気で使用うな」とお墨をもらったと言う唐竹割り。

それを思い切り脳天に叩き付けられた。

素人に毛の生えたような小僧相手に本気を出したとは思わないが、何せあの社長の事だ。

殺す気で打っていたのだとしても別に驚きはしない。

二度目は独立した直後、花巻の和製ルチャドールとやりあつた時。レスラーとして、共に最も脂が乗っていた時期の事だ。

若さがあり、時勢があり、野心があり、つまり無理をし過ぎた。

55分経過後、件の忍者野郎の放つたラ・ケブラーダが盛大に誤爆。共に額をカチ割つて病院に直行、危うく三途の川を渡りかけた。

その後、忍者野郎が自爆レスラーとして一世を風靡した事を思えば、マトモに受けたゴウダの方こそ良い面の皮である。

そして三度目はつい最近。

つまり伝説のボクサー、ルクス・ランドア渾身の左を浴びて――

(――って、オイイッ!!)

ゴウダの聴覚に、ようやく観客たちの絶叫が響いてくる。

我に返った。

その瞬間に真っ赤なグローブが顔面を捉え、勢いそのまま壁面に叩き付けられる。

(ヤラレちまってんじやあねえかッ!? 思い切りッ!!)
ダメージによって飛ばされかけた意識が、ダメージによって回復する。

だが、思考はとにかくとして肉体の方は回復していない。
ガクガクと膝が震え、俄にでも貼り付けられたかのように、背中が壁から離れない。

ズン、と鈍い衝撃が呼吸を奪う。

タイタスの装甲を壁面と挟み撃ちにするボディブロー。

己の拳と相手の頭部を守るために生み出されたボクシンググローブではあるが、その重さは腹筋をすり抜け、直に肉体へと浸透する。
(~~~~ツ さすがにヘビー級。

小僧の前蹴りより効くわなア~~~~ツ)

右拳を壁面へと叩き付け、反動で体を起こす。

このまま串刺しにされ続けるワケにはいかないし、何より世間様への見栄えがある。

「——ととつ くう~~~~」

タイタスの巨体がたたらを踏み、ぐらりとその身が泳ぐ。

腰が自重を支えきれず、上体が前方へと傾げる。

不幸中の幸い。

打点がズレ、タイタスの大きな肩に右ストレートがブチ当たり、ザクの体がわずかに泳ぐ。

「……………ッ！ おおオオオツッ！」

一気呵成にタイタスが飛び込む。

渾身のタツクル、と言うより、倒れるよりはマシのすがるような体当たり。

運命の神は時に、破れかぶれのバクチを愛する。

「——！」

オオオオ、観客がどよめく。

仕掛けたゴウダの方が却って息を呑む。

取れてしまった。

マウントポジション。

総合格闘技が研鑽の果てに辿り着いた、ガキのケンカの究極系。

F i s t o r t w i s t

上から叩く、返す手を取る、打つも捻るもお好み次第。

ゴウダの体重、タイタスのリーチ、これはもう詰みの形。

「……へっ、ひへへへへへ」

乾いた笑いを吐き出して、ゴウダがゆっくりと呼吸を整える。

ルクスの心は尚も折れる事なく、握った両の拳でタイタスのボディを必死に叩く。

「そいつは無理筋だぜえ、チャンプ。」

大地を蹴る格闘技が、大地を失ってどうしようってんだ、なあッ!」
タイタスが攻める。

ガキ大将のように振りかぶり、ガキの喧嘩のように打ち下ろす。

必死に固めた両腕の上から、ザクの頭部を思い切り大地に叩き付ける。
る。

下は砂地、ダメージは少ない。

だがそれは所詮、必殺の一撃が執拗な拷問に変わったまでの事。

叩く。

叩く。

叩く。

叩く。

六度目のパウンド、合わせてザクが動いた。

右手のグローブを開いて掌の形を取り、タイタスの眼前につき出す。
す。

ゴウダにしてみれば大きな目隠しを当てられたに等しい。

「小細工を」

パシン、と空いた右手でグローブを叩く。

刹那、ボグン、と雷鳴のような不意打ちが来た。

ゴウダの意識が上に向いた瞬間、ルクスは再び大地を『蹴って』いた。
た。

ピタリとくつつけた右足の裏で大地を蹴り上げ、僅かに浮いたタイタスの尻の下で腰を捻じる。

サウスポールの強打者が放つロングフック……、と言うより、もはや真横に伸びるストレート。

威力十分、とは言えずとも、奇襲としては覷面。

「およう？ おおおおお!!?!!」

巨体が泳ぐ、単眼が動く。

ガンダムとザクが、さながらアムロとシャアのようにもつれ合い、転げ廻る。

マウントポジション。

先ほどと逆、ザクが上、タイタスが下。

「フーン！」

ザクが打つ。

通常のボクシングではあり得ない、超高角度のチョップングライト。

返しの左、右、さらに左。

ゴウダは防ぎもしない。

叩く。

叩く。

叩く。

「カハッフハハハハハッツ!!!」

ゴウダが嗤う。

打たれながら嗤う、嗤いながら打たれる。

見事にしてやられた。

先のストレート、偶然の一発では無い。

万一馬乗りになられた時にキメてやろうと、とつぷりと練習を積み重ねてきた野心家の拳だ。

おかげで観客も大興奮。

あの素晴らしいパンチに比べたら、今のパウンドなんぞクソだ。常に逆境を武器として戦い続けた偉大な王者が、あまりに優位すぎる状況に委縮してしまっている。

どれ程の高さがあるうとも、大地を蹴れないボクサーの拳など恐れるに足らない。

「似合わねえぜえチャンプ。

アンタが人を見下しながら闘うなんてよオツ!!」

「……ッ」

タイタスの逆襲。

リーチの差は下方の不利すらも乗り越える。

のけ反りかわしたザクの鼻先で、双の張り手がパンツ、と空気を振るわせる。

ねこだまし。

思わず動きを止めたザクが、反射的に身を乗り出した刹那――。

「ドウリヤアツツ」

今度こそ山が動いた。

浮かしかけた上体を思い切り倒し、さらにザクの両腿に差し込んだ両手をフォークリフトのようにハネ上げる。

プロレスラーのブリッジ。

ザクの体が手品のようにゴロンと転がり、圧倒的不利が単純な肉体差で覆される。

再び観客が震える。

近代格闘技においては終わりの筈の死線を二回覆し、勝負は振り出しへ。

気持ち表情を硬くして、ゆつくりとルクスが構え直す。

歓声が収まるのを待って、人間橋が再び人間MAに変形する。

「いやあよオ、悪かったなあチャンピオン」

ゴキリ、ゴキリと首を鳴らし、世間話でもするかのようにゆるりと振り返る。

「いきなりイイのを貰っちゃってよ、ブルっちゃったんだわ。

おかげで、すっかりらしくねえ所ばかり見せちゃまってよオ」

すう、と深呼吸でもするかのように両手を開く。

まるで眩しいものでも見上げるように、ルクスが瞳を細める。

「見せるよ、プロレス。

真っ白になる燃え尽きるまでやろうや」

「フンッ！」

真紅の単眼が瞬き、ザクが大地を蹴る。

小細工抜き、セオリー無視の右ストレート。

一切の警戒が無い、ただひたすらに己の本気を叩き込もうと言わんばかりの鉄槌。

(……光栄だぜえ、チャンプ！)

跳ね上がる視界の先に死兆星を見据える。

いつまでも感動しているワケにはいかない。

ボクサーの本領はコンビネーション、すぐに本命が来る。

左のスイング。

左右で握力が20kgは違うと言うサウスポーが、現役時代にKOの山を築いた伝説のブロー。

アンバランスな男の拳は、ここ一番で面白いほどに当たった。

ヘビー級の世界に、彼より小さな男はいない。

その不利がインパクトの瞬間のみ、下から敵を揺さぶる最大の必殺技に変わるのだ。

(大丈夫、きつと耐えられる)

覚悟する、踏み止まる。

社長のガチ制裁にも耐えた体だ。

トッププロから場外に飛んでくる108kgにも耐えた体だ。

鎖分銅を巻き付けたモノホンの鉄拳にも耐えた体だ。

大丈夫、耐えられる。

そう言った強い記憶を思い起こさねば踏み止まれぬほどに、今のプレッシャーは危うい。

逃げだしたい。

そう言う訳にも行かない。

技術は使わない。

ただ歯を食いしばる事、腹筋を固める事のみを許す。
プロレスラーは天に選ばれた特別な戦士だ。

ガードなど、ましてやエスケープなどと、恥ずかしくて出来ようはずもな――

(~~~~ツ　こ、これかア~~~~！)

衝撃。

脳天の先まで電撃が走り、東の間の思考が一瞬途切れる。

ようやく見えた、左のアツパー。

血泡が噴き出す、膝が震える。

先に一発喰らっていた、だからこそ耐えられた。

だとしたらツイている。

あの油断すらこの瞬間のためのツキと、そう断定して諸手を繰り出す。

ルクスもまた一步も引かない。

スウエーで捌いて足を使う。

ダツキングでかわして懐に……。

そんな戦い方が出来たのは、精々が十年前までだ。

元より不器用な三流ボクサー。

往年のパンチ力を取り戻すための筋力トレーニング。

それ以外は全て捨ててきた。

蝶のようなフットワークも、蜂のようなハンドスピードも。

その割り切りの良さがあつたからこそ、未だ目の前の怪物と渡り合えているのだ。

右のフック。

打たれながら組みつく、組ませながら打ち込む。

首相撲、などと呼んではイーオに失礼であろう。

技巧も駆け引きも無い。

打撃を確実にブチ込むために奥襟を取っただけだ。

「オラアツ!!」

ゴウダの右のエルボー。

同じヘビー、とは言え現実にはゆうに二階級は上の男が体重を乗せた肘鉄。

支えられるワケがない。

ただし、相手がルクス・ランドアで無ければ、だ。

「もうイツペア——」

「ムーン！」

再び右肘を振りかざす、その空いた空間に右拳を捻じ込む。

顔面直撃、だが距離が無い。

肘、構わず打ち込む、額で受ける。

流血。

気にも留めず、ルクスが返しのボディ。

右フック。

膝。

左のショート。

右のボディ。

ナックルパート。

左ストレート。

観客が沸騰する。

共に守りを捨てた男比べ。

左手で首をロックしているとは言え、それはゴウダの有利を意味する所では無い。

密着でもされない限りは十分なパンチを打てるのがプロのボクサー。

片手と両手、回転が違う。

むしろ不利なのは、自らルールを縛っているゴウダの方。

(……ッ　　どんだけタフなんだ、このオツサンは!!)

ゴウダが内心で舌を巻く。

ボクサーの本質はスプリンター。

15ラウンドを戦い抜くと言っても、インターバルを挟まねば全力疾走は続けられない肉体のハズ、それが……。

「どっせええエーいー！」

流れを変える。

鮮やかなアームホイップ。

砂の上、だがその衝撃はマットの比では無い。

(おいおいおいおい！)

投げたゴウダが却って驚愕する。

すぐさま頭を振るい、ザクが体を起こそうとする。

10どころか3カウントもいらぬ。

投げられ慣れていない職業、受け身もまともに取れなかったであろうに……。

(やり残したものの、そんなに大きいのかよ、チャンプ?)

思いながら振りかぶる、諸手のハンマーブロー。

ガツン!

カウンター。

思いもよらぬ一撃。

拳も繰り出せぬような至近で。

バツテイング、反則、下から突き上げるヘッドバット。

(~~~~ツ 味な真似を!?)

よろけながら思い出す。

イタリアの種馬。

世界チャンプになる前はマフィアの用心棒をやっていたと言われる男だ。

増長した現役王者をストリートファイトで叩きのめした、などとい

かれた武勇伝を持つ男だ。

場慣れしている、あるいはゴウダより遙かに。

(……追撃が、こねえ?)

疑念が走る。

ゴウダが内心で舌打ちする。

何をしてやがる、ノロマ。

ここで徹底的に打ちのめしてくれなければ、カツコよく逆転できないではないか?

オオオオ、観客がどよめく。

ゴウダの背に、ぞくりと戦慄が走る。

ボスンと音を立て、大地に落ちたグローブが砂煙を上げる。

素拳。

ベアナツクル。

いつの間にかグローブを外したザクが、タイタスの前で軽くシャドーする。

知っている。

それは二十年前、マディソン・スクウェア・ガーデンにおけるチャリテイマッチでの一場面。

時のM V Wプロレス王者、ジャガ・ノートンの掟破りの猛攻に対し、ルクスがついに激昂。

グローブを投げ捨て散々に拳を浴びせ、とうとう場外に投げ捨てた所でゴングが鳴った。

あの奇跡のエキシビジョンが真剣か台本か、未だにファンの間でも意見の分かれる所である。

けれど今なら言える事が一つだけある。

脚本の有無など関係ない。

グローブを脱ぎ捨てたこの男は、とてつもなく強い。

「オオッ！」

飛んでくる、渾身の左ストレート。

ゴウダの顔面が爆ぜる。

鼻骨が鳴く。

支えきれずに116キロが後退する。

風を巻いてルクスが追う。

グローブを脱ぎ捨てたボクサーは脆い。

他の武術と違いグローブに守護されたボクシングでは、拳を鍛える練習をしないから……。

などと言う楽観は、この際、捨てた方が良い。

この男だけは別格なのだ。

拳の形が真っ平らになるまで、一日中精肉工場で牛肉をぶっ叩き続けたと言う男だ。

まともな技術を持たぬ、その差を埋めるために、ありとあらゆる特訓を積んで来た男だ。

「カハッ!？」

右のボディが腹筋に刺さる。

無敵のハズのレスラーの装甲が横に折れる。

ボクサーの拳では無い。

言うなればこれは、職業、ルクス・ランドア——。

「にやらアッ!」

反撃の右掌底。

だが、見事なカウンター。

タイタスの巨体が壁に叩きつけられる。

そのまま倒れて眠る事を、眼前の古参兵は許してくれない。

即座に真下から突き上げるアツパー。

無理矢理にハネ起こされ、拳圧で右頬が切り裂かれる。

「バツカ野郎、何遊んでんだッ! オツサンよオ!」

ギャラリーの割れんばかりの歓声に混じって、聞き覚えのある小僧

の声がゴウダの耳に届く。

「向こうは本職だぞ! 殴り合いで勝てるモンかよッ!

足を狙え! 転がしちまえ!

何でも出来るのがプロレスだろうがッ!」

へっ、と。

朦朧とする意識の中でゴウダが嘲笑う。

まだ若い坊やの事だ、その無知を責めるつもりはさらさら無い。

だがゴウダは忘れてはいない。

三十年ほど前。

超日本プロレスの社長と、時のボクシングヘビー級統一王者が激突した、伝説の一戦。

3ラウンド、計15分。

最強のレスラーはマットに這いつくばって、ひたすら王者の足元を蹴り続け。

最強のボクサーは何も出来ないまま、ひたすら這いつくばった相手を罵倒し続けた。

二人とも、決して手を抜いていたワケではない。

むしろお互い真剣にやっていたからこそ、そう言うザマになったと言うのは、後の総合格闘技の歴史が証明している。

ともかくあの時、ゴウダ少年をはじめ幾人かの格闘技ファンが気付いてしまったのだ。

バーリ・トワードは、ガチでやるようなモンじゃない、と。

坊やたち武術家の世界ならば、それでも良いのだろう。

武術とは勝つためのもの、生き残るためのもの。

あの拳が面白い、だとか、アレが決まれば観客が沸くだろう、とか、そう言った価値観とは無縁の世界に彼らは居る。

(——けれど、プロレスって奴は、そうじゃねえだろ) 見ろ。

打つ毎に輝きを増していく、目の前の男の姿を。

プロレスラーの肉体を以てしても、手も足も出ない。

プロレスラーの肉体が有ったからこそ、この輝きを引き出す事が出来た。

プロレスラーの特権。

ルクス・ランドアと言う偉大な男の五十年が、今、直にゴウダの肌を叩いている。

こんなにも雄大で、豊潤で、素晴らしい拳。

それを避けてどうする？

——ぐらり。

チカチカと瞬くカメラアイが、広大なる星空を捉える。

夢見心地のゴウダとは裏腹に、タイタスの肉体はついに限界を迎えた。

腰が折れる、体が崩れる。

揺らめく視界の先に、スロー・モーションのようにその姿が映る。

(あ、ああ……)

感嘆が漏れる。

左のロングフック。

建国二百周年のリングで、無名の種馬が王者からダウンを奪った伝説のブロー。

拳が煌めき、凄まじいばかりの光を放つ。

あの頃の勇姿と寸分違わぬ、全盛期の男のパンチ。

「……それだぜえッ！ チャンプッ!!」

ゴウダが跳んだ。

男の拳を顔面で受け止め、そのままパシリと取った。

カニばさみ、いや、飛び付きの腕ひしぎ。

耐える、吠える、投げる。

それしか出来なかった筈の男が見せた、生涯ただ一度の技巧。

若い頃に『洗礼』を受けた。

何度も何度も、擦り切れるほどにビデオを見直した。

あの時の勇姿と寸分違わぬ、全盛期の男のパンチ。

だからこそ見えた。

夢の中で幾度と無くシミュレーションした通り、鮮やかに極める事が出来た。

ポスン、と二人の体が砂の上に落ちる。

うつ伏せに体を畳んだゴウダが、偉大な男の左腕を必死で捻じる。

心が折れた訳では無い。

壊される事が怖かった訳でもない。

ただ、余りにも完璧に極められてしまった。

故にルクスは二回、空いた右手でゴウダの脚を叩いていた。

タップアウト。

観客が叫ぶ。

けたたましくもゴングが打ち鳴らされる。

「……エクセレント」

諦観の溜息と共に、ルクスが端的に讃辞をこぼす。

「なあに、アンタがプロレスに付き合ってくれたおかげさ、チャンプ」

言いながら、ゴウダが拾い上げたグローブをルクスに渡す。

尽きぬ歓声が、死闘を終えた二人の肌を容赦なく叩く。

幻想の夜空に、硬貨の雨が降っていた。

「……ケツ！ くだらねえ、くだらねえ、くだらねえッ!!」

プラネタリウムの静寂を引き裂いて、褐色の獣が咆哮を上げる。
ジョージ・クルス。

南半球に消えた霸王流の裔が、猛る心を隠しもせずには喚き散らす。
「どいつもこいつも、くっくだらねえ茶番を見せやがって。

あのオツサンども、戦いをお遊戯とでも勘違いしてんじやねえのか
?」

「そんなくらいにしとけ。

口を開けば里が知れるぜ、ブラジルの」

「あん、怒ったのかい空手先輩？」

ケケツ、そういやテメエは、あのオツサンのお遊戯にブチのめされ
たんだっただけか？」

ケケケ、と。

むっつりと押し黙ったりオ対し、嘲るように下卑た笑いを浴びせ
る。

ブラジル野郎の言わんとする事、ナガラ・リオにはよく分かる。
分かるからこそ腹立たしい。

事実、先刻までのリオは憤激していた。

何故、足を狙わない。

押し倒して寝技に持ち込まない。

どうしてわざわざ相手のエリアで、紙一重の攻防を続けるのか、と。
だが同時に今のリオは、そう言った不合理がもたらす強さの質と言
うものもうっすらと理解している。

他人から見れば馬鹿げたこだわりを人生の支柱に据える。

故に倒れない。

ビグザム剛田も、あのルクスも、理に囚われたファイターには持ち
得ない牙を備えているのだ。

目の前にいる褐色の男は、かつてのリオを映す鏡だ。

いや、あるいは理合と言う物を信じきれなくなったりオよりも、遥

かに純粹な獣であると言えるのかもしれない。

敗北を知り、ガンプラ・ファイトを知ったりオが、果たして強くな
たのか、弱くなったのか。

次のこの男の一戦が、あるいはその答えを知っているのかも知れな
かった。

「ケケツ、所詮テメエら東洋人に、バーリ・トウードの真似事は無理な
んだよ。」

今日の戦いで世界中のトーシロどもに、そいつを思い出させてやる
よ」

「……話としては聞いてやるがよ、お前の相手は俺じゃねえぜ」

「あん、俺がああイロモノに負けるってか？」

「ずいぶんとイカしたジョークだな」

ケツ、と一つ吐き捨てて、クルスがホール中央に身を躍らせる。

「次の試合は所詮オードブルよ、そんなにあのデカブツ、それにテメエ
だ。」

今日の日を境に、世界は俺の霸王流に屈伏するのさ」

・
・
・

——コロッセウム全体が、奇妙な興奮に包まれていた。

先刻までの血沸き肉踊る熱狂とは趣を異とする。

いや、だからと言ってこの救いがたい格闘技ファン達が、次の試合
に期待していない筈もない。

だが、どちらかと言うとそれは、怖いもの見たさ半分、と言うのが
正解かもしれない。

とにかく彼らは一様に胸をときめかせていた。

果たしてこの先、どのようなドラマが待ち受けているのか、と。

『会場のみんなく！』

そろそろいくよオ、セーのーっ、でッ！』

「ガチ〜びよ〜びよ〜びよ〜ん!!」

『イツエエ〜イツ! ガチガチびよんぴよん! ガチびよんでえーっす!』

澆刺とした入場宣言に合わせスモークが一斉に噴き上がる。

割れんばかりの声援の中、丸っこい何者かが会場を駆け抜ける。

地上最強の五歳児、ガチびよん。

ひらけ! ガチびよん。

中の人などいない、ガチびよん。

歴史と伝統に彩られた風格あるコロッセウムが、たちまち伝説の子供向け番組に変わる。

『キャ〜キャ〜キャ〜! 凄い! この大会スゴイよツ!

マジモンのガチびよんが来てくれちゃったよオ!』

感極まったMS少女が、ガチびよんの丸っこい体にひしりと抱き付く。

ブーイング混じりの歓声が会場に響き渡る。

——そう、確かに『ガチびよん』が居た、ガンプラしか存在し得ぬ筈の聖域に。

スツキリと新緑色にまとめられた、ずんぐりむっくりとしたボディ。
原型よりも太く短く、しっかりと大地を踏み締める丸太のような

足。

ピンクと白のツートンが映える、縞模様のおなか。

恐竜の子供と言う設定を辛うじて残した、小さな背びれにだらしない尻尾。

ポコポコと両手に張り付いた勇気の源、七つのエネルギーボール。

大きくデイフォルメされた丸っこい頭部には、小栗鼠のような出ツ
歯。

元祖キモカワ系のつぶらな瞳に、可動式の重厚な瞼がぱちくりと動く。

ガチぴよん専用グリモアカスタム、通称『がちもあ!』

アメリカの傑作量産機とは名ばかりの御本人が今、ガンプラバトルの中心に堂々降臨していた。

『ねえねえガチぴよん、今日はどうしちゃったのさ?』

お姉さんは嬉しいけど、事務所の方は大丈夫なの?』

『えへへ、どうしてもガンプラバトルがしたくなって、マネージャーには内緒で来ちゃった!』

MS少女のMCも手慣れたもの。

その場の何たるかを忘れたかのように、和気あいあいと時間が進む。

『チャレンジは僕の生きがいだもん。』

今日も頑張つて、ガンプラ・ファイトにチャレンジだア〜!』

「……ケカツ! ケハツハアハハアア——ツ!」

『——!』

けたたましい悪魔の哄笑が、憧憬の時間の終わりを告げる。

戦慄がたちまちゲートを奔り、悪意が虚空に跳躍する。

マスターエルドラド。

総合武術の黄金郷を体現する、霸王流の完成系。

漆黒のボディを支える金色のフレームに、プラフスキーの輝きをあしらったエメラルドのクリアーツ。

月の光を一身に浴びて、武の結晶が悪魔の如き翼を広げる。

「着ぐるみ野郎は夢の国だけで十分なんだよオオオ——ツ!!」

『ガ、ガチぴよん!?!』

漆黒の悪意を振り撒いて、邪悪の武神が頭上より迫る。

ガチぴよんもさしたるもの。

一息にMS少女を突き飛ばし、自らはゆるりと歩を進める。

流水の入り。

鋭い足刀を紙一重でぬるりと避け……即座に震脚!

大地の反動を剛体に伝達し、肩口より中空の敵に叩き込む。

「ケケッ！」

しなやかなる黒豹のように衝撃を殺し、マスターが柔らかく大地に転がる。

空気が凍る。

ほんわかムードが一変し、ただちに一触即発の危うい気配が充満する。

「さすがにリーの野郎のお眼鏡だな、もうちよつとだけ遊んでやるよ」
『オツケイ、勝負しよう勝負！』

ゆらりと開手を添えたマスターに対し、ガチぴよんは半身を取って軽妙に体を揺する。

『そこまで。』

ガンプラ・ファイトは何でもアリが心情だけど、せめて開始の合図くらいは守りな』

「……ケッ！ そうかいそうかい。」

興業つてえヤツはメンドくさいなア」

大袈裟に肩を竦め、マスターがくるりと背を向ける。

十分に距離を取ったのを見て、ガチぴよんも構えを解く。

観客の緊張は、しかし解けてはいない。

高まっていくボルテージが一つの事実を痛烈に印象付ける。

——本当に闘るんだ、ガチぴよん。

ばさりとMS少女が純白の翼を翻し、観衆に時間を告げる。

『それじゃあみんな、気合い入れて行くよ！』

ガンプラファイトオ！』

振る絞るMS少女の声。

闘技場に背を向け、邪悪なる武神がにい、と囁う。

『レデイー——ッ　ゴオ——　ツツ!!』

(始まるぜえ、霸王流の伝説が——)

高らかとゴングが鳴り、ゆるりとマスタートーが振り返る。

その瞬間にガチぴよんは助走を終え、跳躍の態勢に入っていた。不意打ち。

倍返し。

空飛ぶ80kg

格闘技の動きでは無い。

空中で可憐にガチぴよんが舞う。

一回転。

二回転。

フィギュアスケート、ガチぴよんチャレンジ、ダブルアクセル、今

はじまりのG

遡ること一月ほど前。

三雷会での二日に一度の出稽古を終えたりオが、館長のハジメにポツリと尋ねた。

「館長、歴代のお弟子さん達の中で、一番強かったのは誰でしょうか？」

あまりにあけすけな若者の質問に、お人よしの館長が思わず苦笑する。

「何です、藪から棒に……？」

何か悪だくみの企てですか？」

「え？ いえ、別にそんなワケじゃ、単なる個人的な興味です」

「ふふっ、まあ、気持ちは分かります。

しかしそれは、何気に難しい質問だね」

しみじみと、活気に溢れていた時代を懐かしむように、ハジメが無人の道場を見渡す。

「前館長の代には、様々な個性を持った若者たちが、この道場を訪れたものです。

体の大きい者、要領の良い試合巧者、呆れるほどの練習の虫……。

けれどもし、たった一人だけ、と言うならば——」

と、そこまで語った所で、温かなハジメの声がふっ、と陰った。

眉間に深い皺を寄せ、その柔らかな顔に珍しく深刻な表情を浮かべる。

「ナガラくん」

「はい」

しばしの沈黙の後、ハジメは怪訝な瞳を向けるリオに対し、諦観の溜息と共に次の言葉を吐き出した。

「……ガチぴよんとだけは、くれぐれも戦わないように」

永遠の五歳児、ガチぴよん！

南の島からやってきた恐竜の子供。

コケシを縦に潰したような外見と、一説にはポール・マツカートのニーがモデルとも言える気だるげな両目に反し、その性質は奔放で極めてアグレッシヴ。

春夏秋冬、季節を問わず。

スポーツ、武術、ダンスにレースとジャンルを問わず。

山に、川に、海に空、果ては宇宙へと至るまで……。

ガチぴよんのチャレンジに果ては無い。

両手に宿したエネルギーボールをパワーに変えて、お茶の間に夢と希望を届けるのだ。

ガチぴよんの活躍に胸ときめかせ、キラキラと宝石のような瞳を輝かせる子供たち。

しかし、時の流れは無常である。

男の子も女の子も、いつまでも、夢見るピーターパンではいられない。

例えば、プロレスが筋書きの在るドラマだと知った時。

露骨なホームタウンテジションに涙を流すボクサーを知った時。

国技を支える力人が、メールで八百長の打ち合わせをしていると知った時。

キラキラとした瞳を少しづつくすませながら、少年は大人になっていく。

誰もが時を巻き戻す事は出来ない。

本物のガチぴよんなんて、この地球上には存在しないだから。

あの五歳児だって本当は、毎回毎回、中の人が違うだけなのだから……。

『ガチぴよんは保護されているッ！』

そう思っていた時が、私にもありましたッッ!!』

手にしたマイクを力いっぱい握り締め、MS少女が叫ぶ。
閉ざされていた幼年期への扉を、叩き壊さんばかりの勢いで。

『伝説のダブルアクセル、炸裂ウ!!』

ガチぴよんは……!! ガチぴよんは、ここにいましたツツ!!』

大の字になって倒れた南米の雄。

高らかと掲げられたガチぴよんの両手。

MS少女の絶叫が静寂を切り裂いて、大観衆がようやく現実に追い付く。

「~~~~ツッ! ガチじゃねえかツ!?!」

「本気で戦えるのかよ、ガチぴよん!!」

「あのマスターを、たかだかグリモアで!?!」

ギャラリーが一斉に喚く。

彼らは皆、一角の格闘技通である。

ブラジリアン霸王流の何たるかが分からずとも、ジョージ来栖なる青年の技の鋭さ、李大人の眼力の正しさは理解できる。

それをまさか、たったの一撃……、で……?!

「……ケハ! ケケケ、ケカーハツハハハア——ツ!!」

悪魔の哄笑が、観衆の嬌声をたちまちに打ち消す。

嗤っていた。

地球の裏側に消えた霸王流の遺伝子が、小癩な着ぐるみ野郎をブチのめす歓喜に震えていた。

「倒れた相手に追撃はできない、ってか?!

アイドルつてのも楽じゃねえなア〜?」

ガチぴよんが油断なく拳を構える。

直後、闘技場の白砂を高らかと舞上げ、休息を終えたマスターの体がハネ上がる。

「何がマーシャルアーツだッ！ テメエはもうノーチャンスだぜ!!」
ビッ、とマスターの指先がガチびよんに向けられる。

その敵意に呼応するかのようには、アメリカ傑作量産機の器が勇ましく大地を蹴る。

『さあ、ガチびよんが行ったア~~~~ッ！』

溢れる勇気で、手負いの黒豹を仕留められるのか——ッ!!』
風を巻いてガチびよんが迫る。

両腕を畳んで口元を隠し、スタンスを平行に取ってマスターに正対する。

ピーカブースタイル。

重心は前傾。

敵の攻撃を下がって避けるのではなく、かわした勢いのままに前に出る強打者の構え。

(……それしか無えだろうなア)

マスターがアップライトに構え、小刻みに体を揺する。
体重の上下に合わせ視界が揺れる。

正直、寝覚めは最悪だ。

観衆はともかく、眼前の恐竜には自身の負ったダメージが冷静に分析されている事だろう。

だがそれでいい。

手負いなのは自分、故に有利なのも自分。

今、攻め込まなければならぬのは彼奴の方なのだ。

ダメージが残っている内に、回復されない内に。

さりとて奇襲は早々に通じない。

相手を遠間から蹴れるリーチもない。

だとしたら取れる手は一つ。

敵の牙を掻い潜り、自らの間合いに踏み込む事だけだ。

(そこまで分かっただけいりゃあ、切り落とすのは容易い)

ブチ込んでやる。

右のカウンター。

スツと半歩、マスターの右足が後ろに下がる。

明らかな罫。

分かっついていて踏み込む、抗えないガチびよんの性^{サガ}。

「アホウがアツ!!」

叫びながら繰り出す、霸王流渾身の右。

(それでタイソンのつもりか?)

その頭、グレートチャンプの何倍あると思っついていやがる!

短すぎる手、ガードは不可能。

外しようがない、目を瞑っついていたっつて当たる……。

——パアン!

闘技場の中心で、乾いた音が響き渡った。

当たった。

確かに当たった。

……いや、『当てられ』たのだ。

「……ッ!?!」

拳を打ち込んだマスターの方が却っつてバランスを崩す。

想定外の衝撃に、思わずクルスが目を見張る。

通常のウイーピングとは、目で見て、攻撃が来る方向と逆に頭を振る行為を指す。

子供だっつて分かる理屈だ。

だが、ガチびよんのは全くの逆。

目で見て、拳が飛んでくる方向目掛けて思い切り頭を振っつたのだ。

結果、打点は大いにブレ、マスターの華奢な指先は、ガチびよんの分厚い頭骨に弾き返される事となった。

「バカな……!」

呆然と眩く間にもガチびよんが迫る。

体を畳み、懐に潜り込みながら繰り出す右のボディ。

ずん、という重い衝撃が、ガードの上からマスターを押し込む。

ビリビリと痺れ上がる左手の衝撃に、ようやくクルスは自らの悪手を理解した。

(……前提が間違っていた、人外に、人間相手の方法論を使っちゃまった)

苦い後悔。

頭部を狙う、頭部を守る。

確かにそれは人間同士の戦いにおいては重要なファクター。

こめかみに打撃が通れば例外無く人は倒れる。

目、耳、鼻、口、いずれが塞がっても戦闘力は激減する。

狭い顔面にはにぎびのように経穴が密集し、顎先が振れれば梃子の原理で脳が揺れる。

重い頭部を支える細い首には、気道、脊椎、視神経、頸動脈といった繊細なコードが混線する。

だがそれもこれも、あくまで対人戦に限った話だ。

ガチぴよんのどこに頸がある？

目、耳、鼻、口……？ そんな物はタダの飾りだ。

丸く大きな頭部は衝撃を均等に分散し、打撃を芯に打ち込む事を困難とする。

さらに気ぐるみの中でも最も肉厚な頭部の部位。

弱点ではない、ガチぴよんにとって頭部とは最大の盾。

言うなればあれはヘッド・パリングとでも呼ぶべき技術……！

「くうっ！」

頭を振るい、とっさに視線を泳がせる。

灯台下暗し。

サーチライトのように扇状に広がる人間の視野は、上下左右に致命的な死角を持つ。

その至近に踏み込まれてしまった。

右を打ち抜いたガチぴよんが、振り子の原理で逆から迫る。

速度と重量で狭い視野を埋め尽くす頭部。

抗える距離ではない、防御に専念せねばならない。

だが……。

「ぐっ……！」

左のボディ。

巨大な顔面に阻まれ、出所が全く見えなかった。それがガムシヤラなガードをキレイにすり抜け、肋骨をミシミシと軋ませる。

（ジャック……、デンプシー！）

ぎりり、クルスが内心で臍を噛む。

ウィーピングを使つての体重移動、それに伴う左右のフック。

成程。

インファイターにとって基本と言えるその技術は、殊更背が低く、頭部の磐石なガチびよんに取つては有効な戦法であろう。

だが、そんな限定的な殴りつこの遣り方で、総合武術たる霸王流に挑もうと言うのか？

（上等！）

右、左、そして右。

来る方向は分かっているのだ。

三度目は無い。

次の交錯で確実に仕留め……。

——驚愕！

振り向いた視線の先、ガチびよんが跳躍に移っている。

飛び技、ありえない距離。

だがここはガチびよんのレンジ。

極端に短い足、頭部に寄つた重心。

それが導き出すものは、超至近からの高速回転——。

「~~~~~ッ」

頭上から降り注ぐ、飯盒のように巨大な踵。

胴廻し回転蹴り。

加速する80kgの衝撃が、ガードの上から無理やりマスターを大地に叩き付ける。

「……ぐッ 野郎オー！」

痺れる背骨に鞭打つて、マスターが必死に体を起こす。

ガチびよんは真正面、既に膝を畳んで次の動きに入っている。

ブチかまし、渾身の頭突き。

捌き様がない、体勢が崩れる。

マスターが下がる、ガチぴよんが追う。

グリモアのボディにジーラツハのエンジン。

止まらない、引き剥がせない。

ラツシユ。

ラツシユ。

ラツシユ。

だが……。

「何故だッ!? 何故オレがこうも遅れを取るッ!?」

クルスの悲痛な叫び。

それもすぐ観客の嬌声に掻き消された。

・
・
・

——同時刻、プラネタリウム。

ギヤラリーの興奮が仮想空間を揺らす中、現実の世界では、居合わせた闘技者たちが一様に真剣な面持ちで眼前のオーロラビジョンに臨んでいた。

「……さすがに強えわなア、ガチぴよん」

「あ、次の対戦相手だったけ？」

「そいつはご愁傷様だねえ、ゴウダの旦那」

「しかし、最初にリストを見た時は驚いたものだが、まさか本物がここまでとは、な」

「ウガ」

「身長さえ何とか出来たら、ウチの部屋に欲しいっす、ガチぴよん」

「~~~~つて、オイ！」

「おかしいじゃろ！ こんなッ!?」

「なんで皆して、さもガチぴよんが強豪のように語っておるのじゃ!?」

室内の玄人じみた会話に耐えかね、アムロ・レンがとうとう素っ頓狂な叫び声を上げる。

シンと室内が静まり返り、たちまち白眼が赤髪の少女に向けられる。

「おいおい嬢ちゃん、ガチぴよんチャレンジは見てへんのか？」

「お前さん本当に日本人かいや？」

「ヒノ・イズルが手ずから黒帯を託した空手家……、弱えハズが無え」

「天地争覇、あの男の功夫は本物ヨ」

「あらゆる格闘技を齧った技術。

体操六種をソツなくこなすバランス。

断崖絶壁をよじ登る握力。

マッターホルンを制するタフネス。

さらには宇宙飛行士試験をパスする戦術^{タクティクス}まで――。

何もかもがハイレベル。

ガチぴよんは俺らとはちよつとばかり次元の違う怪物よ」

「ウガ」

「揃いも揃って何じゃお主ら!!」

ワシか!?! ワシの反応の方が可笑しいのかツ!?

あんなたわけたガンブラで大暴れって、どう考えても突っ込む所じやろうツ!?!」

真っ赤なしやぐまを振り乱し、アムロが持論を訴える。

その必死な姿に対し、じつ、とヒライが憐憫の視線を向ける。

「……たわけはあなた。

あの機体、ガチぴよん専用グリモアカスタムは、まさに『魔導』の名に相応しい機体」

「うぬもかヒライ!

うぬまでワシを虐めるのかツ!?

あんなモン、単に本物の着ぐるみを模しただけのネタ機体ではないか!?!」

「そう、あの機体は本物のガチぴよんそのもの。

だからこそ恐ろしい。

「単純な完成度で言うならば、間違い無く今大会ナンバーワンの機体……」

『いやいや、流石はリーオーマイスターの異名を誇るユイちゃん！
何とも冷静で的確な分析眼でありますな』

「!?!」

突如、少女たちの会話を遮った太い声に、一同の視線が集中する。
知っている。

居合わせた一堂、その殆どがこの声の主を知っている。

赤い男であった。

腕も、足も、腹も、胸も、そして顔も。

立派な体躯に反し繊細な指先。

宇宙人のように飛び出した瞳。

大きな頭部を飾るオシヤレなヘリトンボ。

それ以外の全てがモコモコとした毛に覆われた、モツプの怪物のよう
な赤い男であった。

『ですが、そんな面と向かって褒められては、ワタクシも調子に乗って
しまいますぞ!』

一説にはジョン・レノンがモデルとも言いうモジャモジャ顔を紅潮さ
せ、赤い男が捲し立てる。

永遠の五歳児。

ガチぴよん最強のパートナー、モツプさん。

たまらぬ雪男であった。

・
・
・

ハ~~~~~イ! モツプモツプのモツプでありますぞ。

ガチぴよんがガン普拉ファイトにチャレンジしている最中ではあり
ますが、釈然としないレンちゃんのために、僭越ながらワタクシが
解説させて頂きますぞ。

え、なぜ素人のガチぴよんが本物の武術家相手に善戦出来るのか？

その秘密を紐解くには、まずはガンプラ・ファイト独自のレギュレーションを理解しなければなりませんぞ。

ポイントは今大会の根幹を成すガンプラ・トレース・システム。

ファイターの生身の動きを機体にトレースすると言う驚愕のシステムなんですが、これは裏を返すなら、本人に出来ない事をガンプラにさせるのは不可能、と言う事なんでありますよね。

これによつて何が起こるか？

そう、プラフスキー粒子の大暴落ですぞ。

例えば、あのクルス選手のマスターエルドラド。

胸元に備えたクリアーパーツは粒子貯蔵のための装備と見られるのですが、これがなんと全くの無意味！

生身で月光蝶やトランザムが出来るなら話は別ですが、そんな人間はGガンダムの世界にしか存在しませんぞ。

加えて言うならば、本大会は武器使用、ブースター使用が一切の禁止。

プラフスキー粒子を用いた本選さながらの高速戦闘は不可能となり、必然的に至近距離での格闘戦を行うハメになるんですぞ。

と、なれば、本大会用のガンプラには特別なギミックなど不要。

むしろ重要なのは、ファイターと機体とのシンクロ率、と言う事になるんですぞ！

本人の肉体よりもヤワなボディ、硬い関節では真価を發揮できないのは勿論の事。

能力を超えた過剰装甲や柔軟すぎる関節も、それはそれでバランスの悪い機体と言わざるを得ないですぞ。

……とは言うものの、ガンプラの元デザインを生かしつつ生身の体に合わせると言うのは、プロのビルダーであつても生半可な仕事ではありませんぞ。

僭越ながら皆さんのガンプラを拝見させてもらった所、そのシンクロ率はせいぜいが80〜90%

ユイちゃんのリーオー虎徹で95%と言った所でしようかねえ。

本大会最大の理解者であるユイちゃんの作った機体でさえ、4%強はリオ君の方でガンプラに合わせてあげなきゃいけないですね。

その点、ガチびよんの駆るがちもあ！は、三十年来のパートナーであるワタクシが夜なべして作った、世界にただ一つのガンプラ。

そのシンクロ率は脅威の98.8%！

ガチびよんが普段のチャレンジで見せているパフォーマンスを、実に99%近くまで再現可能と言う素晴らしい機体に仕上がっていますぞ！

言うなれば、本大会の参加者が慣れない着ぐるみを着て戦わねばならない中、ガチびよんだけは普段どおりにのびのびと戦える。

格闘技のプロが集まる大会とは言え、この条件ならガチびよんにだって勝機は十分、ですぞ！

『——と、まあそんなワケで、ガチびよんが無謀なチャレンジに挑む事が出来るのは、縁の下の力持ちたるワタクシがいればこそなんですぞ！』

いや、偉いなあワタクシ、納得のザフトレッドですぞ！』

延々と、モツプさんの自画自賛が延々と続く。

その間にも試合は進む。

止まる気配を見せないガチびよんのがちもあ！

猛追を必死に捌きながら、少しずつ損耗を広げていくクルスのマスタ。

決着は近い。

誰の目にも明らかであった。

「……一っだけ、擁護させてほしい」

淡々と、普段どおりの淡白な口調でヒライが語る。

「クルスの使うマスターエルドラド、あれの作り込み自体は本物。

通常のガンプラバトルのルールであったなら、それが例えオープントーナメントであったとしても、存分に戦っていた筈」

『ワタクシも、その点についてはユイちゃんと同じ意見ですぞ。

あの独創的な漆黒の翼が本来どう動くものであったのか、非常に興味深い所ですなあ』

「クルスの失敗は、ガンプラ・ファイトの何たるかを理解していなかった事。

徹底した機体改造が災いして、今では却って彼本来の霸王流を殺してしまっている」

あくまで淡々とヒライが語る。

どこまでも表情を読ませぬ瓶底眼鏡。

だが、付き合いの長いリオには分かっってしまう。

(泣いている……、ヒライが泣いている)

思わず言葉に詰まる。

あるいはヒライは、量産機にしか興味の無い女なのではないかと思っていた。

だが違った。

あらゆる意味において、彼女はガンプラに対し平等だ。

平等、それ故に分かってしまうのだろう。

傍若無人で高慢チキなブラジル野郎が、その実どれほど丹念に自らの愛機を仕上げて来たのか、が……。

(……俺だって見たかったさ。

強すぎるほどに強いマスターガンダムが)

「調子コイてんじゃねえぞオツ!!」

クルスが吼える。

たちまち飛んでくる右フック。

吹き飛ばされる、めろめろ、しかし踏み止まる。

「ヤラアツ 霸王流をナメるんじゃねえ着ぐるみイツ!!」

それでも尚喚く。

スクラップのようにスタボロにされたマスターの装甲。

それがどうした。

手も足も出ずとも、無様とも、惨めとすら思わない。

要は最後まで立ってりやいい。

懲りず、めげず、省みず。

アマゾンの狩人の血脈。

ネグロイドのしなやかな筋肉。

カステイリーリヤの熱情。

ヤマトダマシイ。

流浪の霸王流が地球の果てで辿り着いた究極の悪童。

負けず嫌いの完成型。

「オアアッ！」

返しの左。

すんでの所で避ける。

ここに来て、ようやくタイミングがあつて来ている。

古流のハードパンチャーの攻略法は、本場ボクシングでは四半世紀も前に完成している。

振り子のような重心移動によって両サイドの死角に潜り込む。

逆に言うならば、たとえ見えずともそこ必ずに敵はいる。

半歩引いて視野を確保する。

それだけで丸裸、カウンターの的――。

ドン。

「――」

背中を叩く壁の感触。

減らず口が止まる。

戦術的敗北の積み重ねによって、いつしか大局は詰みの段階へ入っていた。

ざつ、と。

淀みないガチぴよんの動きがはじめて止まる。

鼻先も触れようかという至近距離。

勇ましく両脇に添えた左右の拳骨。

ぞくりとクルスの背が震える。

(まさか……、アレをやるうってのか?)
直感。

反射的にマスターが横に逃れようとする。
その先をどん、とガチぴよん左腕が塞ぐ。

そのまままっすぐに体を浴びせ、巨大な頭部でマスターの体を壁面に押し込んでいく。

「オッ！ オオオオオオオオオ——ツ!!!」

左右の乱打！

クルスが叫ぶ！

身動きの取れないマスター目掛け、ありつたけの拳が飛ぶ。
壁を叩き、ガードを叩き、ガードの上から体を叩く。

『まっ、まさかこれは——ツ?!』

忘れられないッ！ 忘れられないグリモア爆裂拳かア——ツツ
!!』

右拳

左拳右拳左拳右拳左拳

右拳左拳右拳左拳右拳左拳

左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳

右拳左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳

左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳

右拳左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳

拳左拳

右拳左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳右拳左拳右拳
拳左拳

MS少女の絶叫が、鋼鉄の爆音に遮られる。

壁が碎ける。

プラスチックの欠片が舞う。

無呼吸連打。

ひしゃげ、碎けるマスターの五体を、そのまま壁の一部に埋めかねないほどの豪腕。

「……………が……………っ！」

膝が折れる。

体が沈む。

どうしようもない詰みの形。

大会屈指のインファイターにこの形を許しては、もはや、抗える者など——

「……………ッ フザけるなア!! 俺は天才ッ、ジョージ来栖だアアアアアアア——ッッッ!!」

獣が吼える。

守りを捨て、叫びながら押し返す。

「ブラジリアン霸王流ウ! 骨破ッ無塵拳!!」

打ち返す。

高速の連打。

目には目、歯には歯。

角突合せ腰を据え、ひたすらに相手を打ち倒す事のみを願う。

会場が震える。

無呼吸連撃によるドツキ合い。

相打ち。

相打ち。

相打ち相打ち相打ち相打ち相打ち相打ち相打ち相打ち相打ち相打ち

ち相打ち相打ち相打ち相打ち

やけくそ。

男同士の根性比べならば勝負は五分……………ではない。

腕の短いガチぴよんのみが、一方的に肘の伸びた拳を当てられる距離。

離。

滅茶苦茶な乱打の大半は、先述の巨大な頭部に阻まれる。

打てば打つほどに強烈な反撃をもらい、死期が早まる。

だがそれでいい。

武術家が理を捨てる。

そこにジョージ来栖と言う男の本質が現れる。

(呼吸……………、酸素が欲しいッ!)

無呼吸連撃。

しかし生物は呼吸をせずに動けるようには出来ていない。
無謀な全力疾走には当然のペナルティを負う。

チアノーゼ、意識の乱れ。

しかし、いや、だからこそ止めない。

(こんな状況で、テメエは後どんだけ動けるってんだ?)

意識の弦が危ういほどの運動量。

だからこそ分かる。

先に限界が来るのは、開幕から動きつ放しのガチぴよん。

あの分厚い気ぐるみを着込んで十代の自分より動けるなど、そんな生物がいる筈が無い。

だから堪える。

呼吸なら、コイツをブチのめした後、存分にすればいい。

「——ッ!?!」

……そう心に誓っていた筈のクルスの動きが、止まった。
限界が来た。

ガチぴよんにでも、ましてやクルスにでもない。

マスターエルドラド。

ガチぴよんの猛攻に文句も言わず耐え続けた武神の右腕が、ひび割れ砕けた。

「何でだッ！ 何でだマスターッ!?!」

クルスが叫ぶ、叫びながらも返す。

左対右。

拳同士が中空でカチ合い、だが、やはりマスターの拳が砕け、細いフレームが剥き出しとなる。

「まだ役目は終わっちゃいねえぞオ！」

クルスが哭く。

だがどうしようもない。

戦士の魂にどれほどの力が残っていようとも、それを形にする剣と楯が失われてしまった。

浴びる。

遮る物の無いガチぴよんの乱打。

荒削りな削岩機のようなラツシユが、若き獣の心と体を容赦無く削り取っていく。

「……流派・東方不敗の本質は『拳』ではなく『掌』」

凄惨なる光景から目を逸らす事無く、どこまでも淡々とヒライが語る。

「その指先の造型は、意外なほどに繊細でしなやか。

劇中での拳の強さを再現するには、相応の強化が必要になる」

『ハイハイ！』

その点ワタクシのがちもあ！は、同じ量産機である アーモードトルーパー A T を参考にしておりますからね。

シンプルな拳の構造ゆえ、握り締めればたちまちに鈍器と化しますぞ』

ちらり、とリオが横目でヒライの姿を追う。

一見淡泊さを装ってはいるが、その横顔はやはりどこか精彩を欠いている。

あるいは今のマスターの無残な姿に、過去に犯した己の過ちを重ねているのかもしれない。

(泣くなよヒライ、ガンプラバトルはすぐにまた始まるさ)

その時はきつと、本当に強いマスターの勇姿を見られる事だろう。

ひよっとしたら、生電影弾だって拝めるかもしれない。

(それにしたって、誰がコイツらを止められるって言うんだ……?)

じわり、と額に浮かぶ汗を拭う。

ガチぴよんとモツプ。

愛嬌溢れる外見に反し、この二人は本物の『プロ』だ。

格闘技のプロではない。

言ってしまうば、チャレンジのプロフェッショナル。

例えば、山を登ると決める。

そのためにまず情報を集める。

過去の気象データを拾い、様々な角度から登山ルートを検討する。必要な機材を集め、装備を整える。

条件の似た近場の山から徐々に攻略し、体を慣れさせる。万が一に備え、入念な連絡体制を作り上げる。そう言った、本番に挑む前の当たり前の準備。それを恐ろしく高い次元でこなす。

失敗の許されぬ子供番組で、彼らは三十年、そうやって生き残ってきた。

現に彼らはガンブラ・ファイトのまったくの初心者でありながら、この場にいる誰よりもその特性を知悉している。理解する。

ガチぴよんチャレンジ、それは決して無謀ではない。深い知性に裏打ちされた勇気の結晶である、と。

「ブラ、ジ、りあ……おう、リユ……」

ブツブツと念仏のように呟きながら、マスターが骨だけになった左手をかざす。

その姿を見たガチぴよんが、初めて一歩、自分から後退する。武士の情け、ではない。

手負いの黒豹の尽きぬ闘争心に恐れを成した、ワケでもない。

敵の不滅の闘志を完全に絶つために、相応の重さと速さが必要だと判断しただけだ。

「ゼツ、トウ……、せい、けん……」

前のめりに倒れ込むように、マスターが最後の正拳を繰り出す。

合わせてガチぴよんが踏み込む。

左腕の内側を滑るように交錯した右腕が、マスターの顎を強かに打ち抜く。

クロスカウンター。

ガチぴよんの右脇をすり抜けたマスターの体は、勢いそのままに二、三步泳ぎ……、

やがて、映画のスロー・モーションでも見るかのように、緩やかに砂の上に倒れた。

いけー！いけー！ぼくらのアツガイさん

ワイの名はアカイ！

アカイ・ハナオ（赤井 鼻緒）30歳や。

花の通天閣の真下で『（有）アカハナ土建』ちう会社をやらせてもらうとる。

業務は通常の土方の他に、上下水配管工事、湾岸工事と何でも手広くやつとるで。

社屋こそちんまいが、社員はみんな腕は確かで働き者ばかりや。

関西で仕事をする時は鼻真にしたってや。

まっ、堅苦しい話ほんくらいにしとこか。

ワイには土建屋の親父以外にもう一つ、ガンプリビルダーとしての顔がある。

『ミナミのアカハナ』と言やあ、ちよつとは鼻の、もとい顔の知れたファイターとして昔はブイブイ言わしとったもんや。

機体は勿論、MSM-04『アツガイ』や！

まあ、こんな名前をもらつちやあ、他の機体を選べへんちゆう事情もあるわな。

加えて、オカンの腹ん中でどう間違うて生まれてきたのか、この赤鼻や。

今でこそデザインと性能が再評価されとるとは言え、当時のアツガイは完全にその他大勢のモブ機体。

ジャブロー潜入ごっこをやれば、いつだってワイはシャアがトンスラこいてる間にブツ倒されとる役回りと来た。

まったく、悲惨なジャリガキ時代やったで。

けど、不思議なモンやな。

こும்長く腐れ縁が続くと、知らず愛着つちゆうモンが沸いてきよる。

公式で愛らしさを前面に押し出されるナリでありながら、ガンダムと並ぶと異様に威圧感溢れる図体。

それでいて水際の不意打ちが得意技で、陸に上がったもサモハン並

みに良く動きよる。

チビツ子のような短い腕は、ジオン脅威のメカニズムにより驚くほどに伸びる。

ちよこんと頭を下げたかと思えば、たちまちザクマシンガン四門分の砲筒が火を噴くときた。

ことアツガイの持つ奇抜な個性は、ワイの喧嘩ゴンタとガツチリ噛み合うとるようやった。

……と、景氣の良い話ばかり吹いて難やが、実の所、最近のワイはスランプ気味やねん。

一般にアツガイが優れた機体つちゆうのは、あくまで生産性、整備性に優れた偵察機としての評価や。

いかに陸戦に強い言うても、そいつは水泳部内での比較に過ぎひん。

汎用性でズゴッグに、装甲と火力でゴッグに劣るコイツは、水の無いステージでは弾幕を避けられへんだけのデカイ的。

運悪く宙域戦闘に巻き込まれた日にや、MSの性能を生かせないまま即お陀仏や。

カイザー全盛期の大型MA時代から、こっちはなんとか騙し騙し戦ってきたモンやったが、特に近年、プラフスキー粒子の応用でMSの火力と機動力を賄う時勢になってからは完全にお手上げや。

とは言えそこはガン普拉バトル。

アツガイの性能と弱点さえ分かっていたら作り込みでどうとでもなる。

元よりアツガイは魔改造に定評のある愛され機体やからな。

公式による大胆なアレンジを提示したベアツガイ。

それをかのコウサカ・チナ嬢が更に斬新なアイディアで改修した伝説の機体、ベアツガイⅢ。

アツガイの、もといガン普拉持つの可能性はまさに無限大や！

例えば、両腕に溶断破碎マニピュレーターを装備したシャイニングアツガイ。

二基の核融合炉の代わりにGNドライヴを搭載したOOアツガイ。

オーキスの中の人をアツガイに変えたデンドロアツガイ。

口元の白ヒゲがダンディな^{ターンアツガイ}▽…………etc etc

難波は心形流が魔改造の総本山や。

ワイのアツガイへの愛情をもってすれば出来ん事など何一つあらへん！

——とまあ、ひとしきり妄想しきった所で、ふっ、と情熱が冷めるのを感じたわ。

ワイにとつてのアツガイってのは、一体何なんやろな。

宙域戦闘に特化していたり、核バズーカを背負っていたり、オールレンジ攻撃を仕掛けたり……。

そんなモンをアツガイと呼んで、果たしてワイはワイでいられるんやろか？

ガンプラは自由。

その言葉は麻薬や。

安易にその言葉を受け入れてしまえば、ビルダーはたちまち骨子を失うてもう。

こだわりの無いビルダーは弱い。

現に、その名言を残した三代目名人カワグチ自身が、今は己の肩書を体現する機体『三代目パーフェクトガンダム』レッドウオーリアにとことんこだわりまくつとる。

安きに流れてはアカン。

何を以ってアツガイと成すのか。

千差万別のガンプラの中にあつて、何故にアツガイでなくてはアカンかつたのか。

ガンプラは人生。

ガンプラバトルとは即ち、各々の人生哲学のシバキ合いなんや。

そんな、珍しくもおセンチな気分浸っていたワイの下に転機が訪れた。

そう、ガンプラファイト地下トーナメントとの出会いや。

武器使用、ブースター使用一切禁止、しかも操縦はGガンよろしく生身でやれときた。

ド派手な射撃戦や空中戦は不可能。

お互い大地に足踏ん張ってドツキ合うしかない、格闘技バカの考えた地獄のレギュレーションちゅうワケやな。

無論、これらのルールが必ずしもアツガイ有利に働くわけでもあらへん。

アツガイのボディバランスは現行の地球人類とあまりにもかけ離れ過ぎとる。

デカイ図体はそのまま重量の負荷となつてファイターを蝕みよる。平べったい偏平足は、まるで鉛のかんじきでも履くかのようにうけ動かへん。

頭部に寄つた重心は片足上げる度に容易く後ろにひっくり返り、短い両手では再び起き上がる事すら至難の業や。

アツガイファイト……、全アツガイ乗りが一度は夢見る祭典やが、所詮生身の肉体ではコミックの再現なんざ夢のまた夢や……。

それでも、それでもワイはこの大会に参加しようと決めた。機体から一切の幻想を取り払つたこのルールでならば、ワイの思い描く真のアツガイ像に近づける思うたからや。

確かに人の子の肉体に、アツガイの奔放な動きは望めへん。ならどうすりゃあエエ？

簡単や。

—— なつちまえばエエんや、アツガイに！

ズブの素人がファイティングスーツを着こなすまでに一か月。

まともに歩けるようになるまでに二週間。

ランニングやシャドーを一通りこなせるようになるまで、更に一か月。

そこからは社員、もとい水泳部の仲間とスパリングに明け暮れる日々や。

理想のアツガイの姿を思い描き、独自考案したギブスを纏つて日常を過ごし、アツガイのアツガイによるアツガイのために必要な肉体を

鍛え上げる。

アツガイをワイのカラーに染めるんやあらへん。

ワイ自身がアツガイを理解し、アツガイと一体化するんや。

……ワイもこう見えて一角の格闘技通。

斜陽の格闘技で食って行こう言う奴らがどれほどの執念をその身に宿しておるのか、十分に理解しとるつもりや。

せやからこそ都合がエエ。

名にしおう世界中のプロ格闘家たち。

ワイのアツガイに対する愛を試すには、相手にとって不足なしや！

「——のう、アンタも今ならそう思うやろ？」

全米MMA絶対王者、オード・イル・タップはんよオツ!!」

アカハナが叫ぶ。

同時に大きくのけ反ったアツガイが、水飲み鳥のように上体を返し、禪身のパチキを敵へと見舞う。

「アウツ!」

アツガイ乗りを悩ませる過大な頭部重量。

それがそのまま巨大なハンマーと化してジ・Oを襲う。

めきより、と鈍い音を立てて面長な頭部がひしゃげ、たまらずタツプがよろよろと後退する。

「もろうたツ」

空いた間隙にすかさずアツガイが跳ねる。

重すぎる頭部がたちまちグルンと回転し、自然、ジ・Oの眼前に分厚い両足が出現する。

「ドツセエエイツ!!」

鮮やかな320文口ケット砲。

強大な筈のジ・Oの体躯が容易く吹っ飛ばされる。

全米で最強の名を欲しいままにしてきた男が、素人の放つドロップキックに……。

『なんと……、何と言う光景だア!』

これぞアツガイファイト! 2250マイル一人旅イ~~~~ツ
!?

我々は夢でも見ていると言うのかア!!??』

MS少女困惑の叫びに、わっ、と会場が共鳴する。

たちまち騒音を掻き鳴らし、オーデイエンスの水泳部が喝采の声を上げる。

「さすが社長! ワイら大阪もんの希望の星や!!」

「チャンスやで社長! このままいてもうたれ!」

「会場の皆はん、(有)アカハナ土建、(有)アカハナ土建をよろしゅう頼んまつせ!」

壁面に叩きつけられた絶対王者。

グツとガツポーズを決めながら起き上がるシャアピンクの機影。

縦ジマのハツピとメガホンを身を纏い、やかましい盛り上がりを見せる水泳部の面々。

常ならぬ異様な気配に押され、モニターを臨む兵たちが絶句する。

「……あのアカハナっておっさんは何者なんだ?」

何かの格闘技の経験者、なのか?」

「——アカイ・ハナオ、通称『ミナミのアカハナ』

ガン普拉バトルがPPSE社の主催だった頃に一世を風靡したビルダーの一人」

呆然とこぼしたりオの眩きに対し、淡々とヒライが答える。

「近年は成績を残せないでいるけれど、それでも一たび型にハマった時の強さは圧巻。

突如として水際から襲いかかってくるシャアピンクの機体は、『赤い水棲』の異名で恐れられて……。

……恐れられて、いたのだ、けれど……」

ヒライの解説が途切れる。

そこから先は聞くまでも無い。

いかにアツガイなる機体を知悉しているとは言え、生身の人間が、

ああも異形を自在に動かす事が出来るものなのか？

「カカ、下らぬ。」

未だレギュレーションも出来て日の浅いガンプライフアイト。

総合だの実戦だのと吠えた所で、ここにいる全員が、言わば素人の集まりに過ぎん」

どこか興醒めしたした風に、アムロが呆れた嗤いを漏らす。

「——そもジ・〇と言う機体は、木星帰りが腐心したスラストターの拵えによって重装甲と高機動を賄っている一品モノよ。」

重力下では過剰なブースターは死過重となり、ホバー走行前提の両足ではマトモに走る事すら適わん。

その辺りを理解出来ん輩が安易に持ち出せば、今日のような『事故』が起こるのは必然じゃ」

「Shit!」

舞台裏の冷めた空気を知る由もなく、短く怒気を吐いて絶対王者が走る。

たちまちに砂煙が爆ぜる。

アメフト上がりの肉ダルマを地上最強の男にまで押し上げた肉食獣のタツクル。

だが……。

「——ジ・〇のアンコは自分たち力士にも似た、下半身に重心を据えた体型すから」

現役横綱・月天山が、かつて『宇宙の横綱』とも揶揄されたジュピトリスの傑作を語る。

「タツプ氏の逆三角形の肉体とは、まるで真逆。」

バランスの悪さゆえ、本来の爆発力、加速力を生かし切れていない。

むしろあ言った体格の選手こそ、本来はスモーのような機体を使うべきっす」

横綱の分析を肯定するかのようには、アツガイが緩やかに諸手を広げる。

本来ならば腰を落として迎え撃つべき所を、却って爪先立ちを取

り、あたかも敵に倒れ込むような体勢で衝撃に備える。

「……ッ!？」

タツクルが標的を捉えた刹那、不意にズン、とタツプの背が圧迫された。

低く潜ったジ・Oの上から、更にアツガイの巨体が覆い被さる。

凄まじいばかり圧力を背面に受け、名門パワーバックの突進力が大いに削られる。

やがて均衡が釣り合い、もうもうと砂煙を上げながらMFの山が静止する。

素人の喧嘩屋がプロのタツクルを切る。

言葉にすればあまりにも荒唐無稽な光景だが、それを成したのは膂力でも技量でも無い。

カタログスペックでザクⅡの倍近いアツガイの異常重量。

その中でもとりわけ重い頭部が、足を取られた勢いで勝手に倒れ込んだだけだ。

アカハナは知っている、アツガイの巨体で無暗に動き回れば、それだけで窮地に追い込まれてしまう事を。

そしてアカハナは知っている、アツガイの巨体を活かせば、わずかな動きだけで十分だと言う事も。

(さて、本来ならフロントチョークでも狙いたい場面なんやが……)

優位なポジションを取りながら、胸中でアカイが逡巡する。

未だ研鑽中のアツガイ拳法は、フレキシブル・ベロウズ・リムの再現に至っていない。

ジ・Oの首を締め上げるには、アツガイの腕はあまりに短く太すぎるのだ。

「——だが、ジオン脅威のメカニズムが仕込まれとんのは、何も腕だけやないでッ!!」

叫びながら、開幕より握り締めていた右拳をパッと開く。

たちまちアツガイが連動し、丸っこい拳先に五本のアイアンネイルがジャキリと展開する。

「オオッ」

アツガイが突く！

空いた左腕を首筋に回し、きゅつ、とすぼめた五本の爪先で、ジ・
Oのこめかみを思い切り穿つ。

「オオオオオウ!?」

絶対王者が哭く。

ヘルメットに守られた鎧球にも、オープンフィンガーグローブに守られたMMAにも存在しなかったタイプの打撃。

初体験の痛み。

砂箱一年、その指先がチタン・セラミックの爪と化すまでに鍛え続けたアツガイの基本技。

どこぞの空手小僧ではないが、いかな大男であっても、中々に強がれる攻撃では無い。

「アンタはようやったで、チャンプ。

さあ！ 早々にギブアップしてまえや！」

アツガイが突く、突く、突く。

ガズン、ガズン、と金属音が跳ね、絡み合う巨体が軋みを上げる。

アカイはアカイで必死である。

ザクニ基分のジェネレーターを、己が心肺で賄わねばならないガン
ブラ・ファイト。

他のプロ勢より、アツガイの活動限界は遥かに早い。

故にこのまま、一息に相手を封殺したい。

そう事を急いでしまった。

ジャンルを問わず、一たび世界を制すると言う事が、果たしてどれ
ほどの意味を持つのか。

万年中堅ビルダーのアカハナには分からない。

「ヌガアアアアアアアアア——ツツ!!」

「オオツ!? な、なんや!?!」

タップが哭く！ 哭きながら担ぐ。

上体を抑え付けられた不自然な体勢からザクニ体分の重量を押し返し、その巨体が徐々に浮いて行く。

「は、離さんかいワレエツ!!」

「ヒイツ ヒー！」

アツガイがバタバタと両足をバタつかせ、必死にクローの雨霰を打ち付ける。

その度にタツプは悲鳴を上げ、だがそれでも置物と化したジ・Oの下半身は、まるで大地に根を張ったかのようにビクともしない。

打撃あり、寝技ありの総合格闘技の世界を、恵まれた体格と膂力のみで制した男。

そこらの土建屋の親父とは、そもそもの人間強度が違う。

「ウオアアアアアアアアアアアア——ツツ!!!」

野獣が叫ぶ。

体内の全エネルギーが爆発し、刹那、アツガイの巨体が一息にブツコ抜かれる。

そのまま後方にアーチを描く、ノーザンライトスープレ……いや、

「~~~~~ツツ!!!」

故意か、偶然か。

脇のフックが甘い、ゆえにスツポ抜ける。

アツガイが飛ぶ。

水陸両用機の雄が見せる、本邦初公開の空戦。

しかも、飛んだ先には——

「壁……！」

・
・
・

ゴズン、と言う鈍い音。

次いで悲鳴にも似たギャラリーの絶叫が、水泳部の観客席を中心に巻き起こる。

『アワワ……！ 何と言う、何と言う事でありましょう!』

アツガイが、我らがアイドルアツガイが、壁に……』

「……He」

ぜえぜえと、荒げる吐息を整えながら、大の字になった絶対王者が虚空を仰ぐ。

全身全霊、肉体の持てるエネルギーを搾り尽くして投げを撃つた。受け身も取れないような素人、惨劇の結果は確認するまでも無い。

『——アツガイが壁に、壁に張り付いております!!』

何と言う愛らしい……、もとい、雄々しい姿でありましょうか!』
「フアツツ!」

実況の盛り上がりを目にして、ジ・Oが必死で頭を動かす。

かろうじて捉えた視界の先には、星空を遮って壁面にへばりつくアツガイの勇姿。

巨大な両足で衝突のダメージを殺し、両手のクローを突き立て落下を防ぎ、未だアツガイは戦場に踏み止まっていた。

「……へ、へへ、どうって事あらへん。」

元よりアツガイはジャブロー攻防戦に投入された主力の一翼。

こう言う使い方も想定の内や……そしてえ!」

モノアイが煌めき、アツガイが再び動く。

戦場に降りるのではなく、そのクローを振るい、更なる高みへ。

観客席への逃亡?

いや、仮想空間たるこの舞台で逃げて何になる。

アツガイが動くならば、それはあくまで次なる攻撃のための布石。

「しゃ、社長お……」

「なんやあ? そないシケたツラすんなや」

とうとう客席にまで登り詰めたアツガイが、不安げに見つめるカプルの頭をポンと撫でる。

戦場に背を向け、壁面に佇立する水陸の雄。

その姿を目にしたタツプの背に、ぞくりと悪寒が走る。

だが、精根尽きはてたジ・Oの肉体は、まるでアツガイの体を通して出る力に縛られてしまったかのようにウンともスンとも言わない。

「よう見とけやトーシロどもオ!」

これがホンマモンのガンプラバトルやアーツ

アカハナが叫ぶ。

刹那、アツガイが飛ぶ。

「ゼーゴック! 技を借りるでえ!!」

観客も叫ぶ。

鮮やかなる月夜に身を翻し、水中戦の鬼が可憐なる月面宙返りを放つ。

「あの人は、夢を叶えたんだ……」

ぽつり、とヒライが感嘆を漏らす。

共に同じ山の頂を目指しながら、真逆のアプローチで一步先んじたアカハナとアツガイ。

偉大な先達を見上げる瓶底眼鏡に宿るのは、果たして嫉妬か、羨望か……？

「見さらせええエエ！　これがワイの、プラモスピリットやアア――

――ツツ!!」

空戦、再び。

諸手を広げ、アツガイが一直線の烈風となる。

はるか上空より迫る129tのシャアピンクは、さながら燃え尽きる前の彗星にも似て……

「……ッ」

―― ドワオ!!

爆音。

衝撃。

激震。

ドウ、と土塊が舞い上がり、立ち込める白砂が勝負の行方を遮る。ごくり、と誰もが固唾を呑む中、徐々に視界が明瞭になっていく。

闘技場の片隅に、折り重なるように倒れ込んだ二機の巨体。

ひび割れ、砕け、ひしゃげ、ピクリとも動かぬ産廃の山。

相打ち？

最悪の予感を前に、シン、とコロセウムが静寂に包まれる。

――と。

ピクン、と不意にアツガイの左手が動いた。

五体を投げ打ったうつ伏せのまま、ピコピコと片手を振るって健在

をアピールする。

たちどころにどつ、と観客が沸騰し、けたたましいほどにゴングが打ち鳴らされる。

『死闘……ッ 決ツちや……ッ……ッく!!』

フィニッシュは、高高度ダイビングゼーゴックボディプレスだア……ッ!!』

割れんばかりの大歓声が響く中、ゴックが、ゾックが、アックが、ゾックが、ズゴックが、ジュアックが、アックガイが……。

とうとう辛抱たまらなくなつた水泳部員たちが道頓堀よろしくフェンスを乗り越え、次々と闘技場にダイブしていく。

やがて熱狂の中、アックガイのボロボロの体が、三度、宙に舞つた……。

・
・
・
——ぽん、ぽん、ぽん、と。

狂乱のモニターへ向けて、太い手が賞賛の拍手を鳴らす。

「まったく、これはどうやら、とんでもない大会に来てしまったようだな。

特殊なリングとは言え、まさかあの絶対王者が真つ向勝負で敗れるとは……」

「デッハハ、こう言った番狂わせがガンプラ・ファイトのおつかねえ所よ。

アンタだつて例外じゃないんだぜ、ギンザよう」

「この年齢になつて挑戦者か？」

ハハ、白髪が増える暇もないな」

傍らのゴウダの当てこすりに対し、太い手の男、ギンザエフ・ターイーが含みのある笑みを口髭に浮かべて応じる。

「まあ、せっかくの忠告をもらったことだ。

準備だけは入念にしておくでしょう」

言いながら、いかにも窮屈な座席から腰を上げ、フォーマルなジャ

ケットを脱ぎ捨てる。

ネクタイを緩めると、たちまちにワイシャツの下からはち切れんばかりの大胸筋が主張を始める。

服を脱ぐ。

たったそれだけの行為で、男の存在感が一回りも二回りも膨れ上がったかのように感じられるほどの圧倒的筋肉。

アメリカンレスラーにありがちな、ステロイドによる養殖モノではない。

投げナイフ、火炎瓶、パイナップル、拳銃、日本刀――。

米犯罪組織の魔の手から、文字通り体を張って市民を守り抜いてきた政治家の筋肉だ。

スパン、とトレードマークの片サスペンダーをマツシヴな肉体に掛け、意気揚々と戦う市長が行く。

「お前さんと相見えるのは決勝かな。」

まあ、運が良ければまた会おうじゃないか」

「おう！」

まつ、お互いダメだった時は打ち上げで会おうや」

豪放なアメプロの雄の言葉に対し、ゴウダはいかにもこの男らしい軽さで応じたが、馴染みが筐体の奥に消えたのを見届けると、微妙に表情を曇らせた。

入れ替わるように、空手小僧、ナガラ・リオがゴウダに声を掛ける。

「おっさん、あのアメリカのレスラーと知り合いなのか？」

「まつ、昔CWAでの武者修行時代に世話になった事があってな。」

真つ当にプロレスをやらせたら、俺なんかじゃあ手も足も出ねえ化けモンよ」

「どっちが勝つ？」

あけすけに過ぎる若造の言葉に、ゴウダは辟易とした瞳を向けたが、その内について視線を逸らしてボヤいた。

「あく、俺ア次の試合に関しちやあ中立だからよお。」

ハム子の奴にでも聞いてみたらどうだ、一発で答えてくれるぜ？」

「くちゅんー！」

一方その頃。

西ブロックに程近い駐車場では、噂の主、エイカ・キミコが人知れず小休止を取っていた。

「むむむ、こいつはきつと、どこぞのスパッツ少年が私の命を狙っているに違いない。

まったく、美人薄命とは言ったもんだ」

「……相変わらず、おかしな独り言が多いね、キミちゃんは」
「へっ?。」

後方からの呆れ声に、どきりとキミコの心音が跳ねる。

思わず振り向いた視線の先に居たのは、黒豹のようにしなやかな、背の高い女であった。

ホットパンツにタンクトップと言うラフな服装から、スラリと伸びた長い手足。

額に括ったバンダナの後ろから、ボリユームのある黒のクセツ毛が歩く度に揺れる。

34と言う実年齢を思えば過激な格好ではあるが、その出立ちが彼女にはピタリと嵌っている。

一見スマートでありながら、その実、高密度のダイヤモンドのように引き締まったアスリートの四肢。

南洋の血を思わせる褐色の肌が、月光の下、生命の輝きを持って照らし出される。

モーラ鬼灯。

192センチ105キロ。

アマレス三冠、女子プロレス七冠。

キリマンジエロ生まれの母と薩摩隼人の父の間に生まれた、炎の国サラブレッドの純血種。

「お疲れさん、中々堂に入ったMCぶりじゃないのさ」

「……へ、えへへ、褒められたってガンプラの仕上がりは変わらない

よ」

十ほどもある年齢差を感じさせない快活さで、大柄の女がずんずんと迫る。

一方、海千山千の筈のエイカ・キミコは、どこかぎこちない。

まるで纏った制服が現役だった頃のように、時折どぎまぎと初々しさを見せる。

だが、それも無理からぬ事である。

いかに恋多き乙女であっても、初恋だけは特別であると人は言う。

ガンプラ・ビルダー、ハム姉の初恋の少年がヒイロ・ユイであるならば、

格闘技オタク、エイカ・キミコの始まりは、まさしく目の前の女帝、モーラ鬼灯なのだから。

「その物言い、仕上がりの方は上等と見たけど、どうだい？」

モーラの言葉を向け、キミコが無言で傍らの鞆を開ける。

その中をまじまじと覗き込んだモーラの瞳が、まるで無垢な少女のように輝きを見せる。

「……うん、いいじゃないか？」

これだったら思う存分、遊べそうだ」

「あ、あの！ モーラさん」

満面の笑みを浮かべた1.9メートルの乙女に対し、意を決し、キミコが切り出す。

「ん？ どしたいキミちゃん」

「こいつで良かったら期待して良いんだよね？」

女帝・モーラ鬼灯の仕掛ける、本気の戦そ——」

「……ていー！」

「あうっ!？」

ベチイ、と言う鈍い音を立て、女帝のデコピンが炸裂する。

思わずうずくまったキミコに対し、大げさに肩を竦めてモーラが応じる。

「ダメだよキミちゃん、大人になんなきゃ。

今のアンタの仕事はMC、中立公平にやんなきゃ、さ」

「うう……、だ、だつてえ〜」

「……まっ、せつかくキミちゃんか丹精込めて作ってくれたガンブラだ。」

今夜はせいぜい楽しんでくるとするよ。

やるからには何だつて勝たなきゃね」

「……あ」

年甲斐もなくなつたと笑つた乙女の瞳。

そこに一瞬混じつた本気の色に、ぞくりとキミコの背筋が震える。

来た時と同じ大股で、ずんずんと女が去つて行く。

だが、キミコの中の予感消えない。

一回戦第六試合、ギンザエフ・ターイー対モーラ鬼灯。

共にプロレス史にその名を刻んだ伝説同士。レジェンド

とは言え男と女、戦う前から結果なんぞ分かり切っていると人は言うだろう。

それでもキミコは知っている。

かつて、世界を制した――。

その一事が、どれほどの重みをもたらすのかと言う事を。

そして長い人類史の中には、時折、今日のような特異点とでも呼ぶべき夜がある事を……。

The Winner

「市長ガ『テツパイプ』ヲ担イダラ用心セイ!」

——とある米犯罪組織の元幹部が残した至言である。

実際、路上のプロレスラーは危うい。

常日頃から凶器攻撃、毒霧、飛び道具、火炎放射、忍法、猿などが飛び交うCWAのリング。

普段はクリーンファイトが信条のギンザエフ・ターイーであつても、得物に頼らざるを得ない時がある。

そんな折、たまたま落ちていた角材、たまたま転がっていた鉄パイプが、ただでさえ超人的なタフガイを悪魔へと変えるのだ。

そして今、仮想のコロセウムの中心には、かつて悪魔シャイターンの名で謳われたザンスカール系MFの姿があつた。

ギンザエフ・ターイーが愛機『ギギム』

太い機体である。

かつては拠点防衛用の移動砲台として、その太い肩に、胸に、腿に、爪先に至るまでビーム兵器を内蔵した、文字通りの歩くキャノン砲であつた。

だが今、ギンザエフの愛娘、ゼシカ・ターイーが父の為にあつらえたと言う機体にその名残はない。

無粋な飛び道具の類はすべて取り払われ、更に宇宙世紀の歴史に反逆するかのように、その全身を徹底的に太く、厳つく、重厚にリビルドされているではないか。

ゼシカなる女性が、いかなる酔狂でこの脇役の量産機に入れ込んだのかは定かではない。

だが、見下ろす観客たちの胸は一樣に期待感で満ち溢れていた。

全身の砲門の代わりに手にした得物は、かつて巨大組織を単身で壊滅に追い込んだと言う伝説の兵器『鉄パイプ』

そして今、闘士漲るギギムの前にたまたま鎮座しているは、伝説の尻で椅子を磨くだけの男の機体『ビルケナウ』

ごくり。

残酷な興奮が静かに高まっていく。

始まるうとしているのだ。

男のウォーミングアップ。

伝説のボーンラスステージが……。

「デヤアアアオオツ!!」

野太い雄叫びを皮切りに、ギンザエフが振りかざした鉄パイプを勢い良く叩きつける。

バツキヤアと金属音を響かせ機体がへこみ、千切れ飛んだ大型クローが中空に舞う。

「ドウリヤアアアアツ!!」

真横からのフルスイング!

蝶の軽やかさを思わせる四枚羽がベキョオと潰れ無残に擦れる。

「オオウリヤアアア——ツ!!」

ギンザエフが叫ぶ、吠える、振り被る!

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

まるで体の一部のようにぴったりと吸い付いた、見事なまでのパイプ捌き。

鋼鉄の先端が打ち降ろされるたびに、マシンキャノンがひしゃげ、メガ粒子砲が砕け、振り切れた触覚型ビームカッターが客席にまで

スツ飛んで行く。

時間にすれば、おおよそ二、三分。

瞬く間に廃車と化したコックピット目掛け、気合一閃、担いだガリクソンをえいやとばかりに投げつける。

原作を再現する悲惨な衝突事故が展開し、とうとうバイク乗りの魂が引火。

ドウツとばかりに大型MAが爆風で舞い上がり、やがてズン、と大地を揺らしてひっくり返った。

『オ、マイガ……』

変わり果てた愛車を前に、駆け付けたモヒカン頭のバーザムがボロボロと大粒のオイルを零す。

満足げに鉄パイプを捨てた市長の姿に、たちまち客席から歓声が飛ぶ。

『ハ……イ！ 以上、CWA名物デモンストレーション、鉄パイプチャレンジでした。』

みんな！ 市長の粋な計らいに、もう一度拍手〜！』

弾んだ声を響かせて、MS少女のMCが会場を盛り上げる。

事実、オーデイエンスはご満悦であった。

シャイターンなどと言うコアな名前が出て来た時には誰もが首を傾げたものであったが、実際に得物を振るう元砲戦機の雄姿を目の当たりにして、その心配が杞憂であったと理解できた。

この市長、相当に機体を使い込んで来ている。

父へのプレゼントにこの機体を選んだ娘のセンスは理解不能だが、少なくともギンザエフの娘への溺愛ぶりは本物である。

「——さて、見ての通り、こちらはいつでも始められるのだが……。」

肝心のミス・ホーズキの準備はまだかな？」

『ふふつ、慌てなくなつて彼女は逃げないよ、市長。』

なんたつて、いつの世でも女子の準備には時間が——』

——オオオ、と。

二人の会話を遮って、彼方の観客席より歓声が上がる。

どよめきは次第に伝播し、やがて会場の空気がざわりと一変する。ザツ、と白砂を踏みしめ、長身のMFが悠然と花道を歩いてくる。大股のストライドに合わせ、鬚のように結い上げられたブロンドのポニーテールが柔らかに揺れる。

ビルドノーベル。

かつて機動武闘伝Gガンダムにおいて、可憐なるアレンビーの舞った高貴なるガンダム。

だが今、エイカ・キミコが渾身の創意を施したる戦場の女神は、もはや高貴と言うより剛毅とも言うべき気を宿して^{オーラ}いた。

ビキニアーマーを模した真紅の甲冑は、逆三角形に逞しく輝きを放ち。

大きく盛り上がった銀の肩当てからは、引き締まった両腕がしなやかに生える。

パンパンに膨らんだ両腿から伸びるスラリと長い脚が、生命の力強さを以て勇ましく大地を踏み締める。

鋼鉄の全身に漲る野生の芸術。

アマゾネス、いや、あるいは女ヘラクレスとでも例える方が正解か。元のノーベルの女性的なフォルムを思えば、冒瀆とも魔改造ともとれぬ挑戦的なカスタム。

だが観衆は戸惑っていた。

高貴と剛毅とは、果たして相容れぬ概念なのであるうか、と――。

「……ビューリホウ」

知らず、ギンザエフの口から感嘆が零れる。

その一言こそが真実を端的に物語っていた。

ヴェクトリア、ワルキューレ、パラス・アテネ――。

戦場に権現する女神の美しさとは、あるいは本来、このようなモノなのではなかったのだろうか？

作り手の『神』に対する解釈が指先一つにまで顕れた、まるで大理石のようなMF。

192cm、105kg

それは数々の伝説に包まれた『女帝』モーラ鬼灯が纏うのに、まさ

しくこれ以上にならない聖鎧であった。

歩くだけで戦場の色を塗り替える、圧倒的デモンストレーション。
ギンザエフの瞳から、先程までの柔らかさが消える。

男と女、さりとてこの戦場に垣根はない。

まして今日の相手は名実ともに世界の頂点。

一切の気負いを感じぬ澄んだ瞳は、まさしく王者の貫禄か。

闘技場の中央で、静かに二人が向かい合う。

空気が変わるのを感じたMS少女がゆるりと距離を取る。

無言、これ以上のパフォーマンズは必要ない。

ほどなく、どちらからともなく二人が退いた。

高らかと掲げられたノーベルの金色のマントが、仮初の風に乗って
月光に舞う。

それが開始の合図となった。

『――Bブロック一回戦第二試合。

ガンプラファイト、レディー、ゴォ――ツ!!』

・

ゴングの残響が大気を震わし、二体の兵が改めて面と向かい合う。

ギギムは両腕を前方に広げた自然体。

ノーベルは中腰で心持ち低く構える。

距離はおよそ3、4メートル。

二機の動きが静止し、ただ呼吸に合わせて、互いの胸元だけがわずかに上下する。

これまでの戦いにはなかった静かな出だし。

ギンザエフにとっては動きたい間合い。

ノーベルの低いスタンスは、十中八九、得意の低空タックルへの布
石。

正面に相對せず、左右どちらかにでも動いた方が良い。

モーラにとってもまた、動きたい間合い。

元よりパワーファイターでならしたギンザエフ・ターイー。

砲戦機のカスタムと言うギギムもまた、見るからに鈍重なパワー型に寄っている。

単純な力比べではあまり不利。

逆に自らのスピードを活かしたならば、それがそのまま有利となるだろう。

だが、それでも両者は動こうとしない。

ただ淡々と短針のみが、現実世界の時を刻み続ける。

「……へっ、意地っ張りどもめ」

ジツ、とモニターを睨み付けながらゴウダが呟く。

プロレスから街頭での喧嘩に至るまで、闘争の世界には、ある共通するジンクスがある。

即ち「格上の周りを格下が回るのだ」と。

無論、ジンクスはあくまでジンクスである。

格の上下が実際にあったとして、それが闘争の結果を左右するものでもない。

しかし、それでも……。

やがて、モーラが先に動いた。

左右にはなく、上下に。

徐々にはあるがゆつくりと、元より低い姿勢が更に深く大地に沈んでいく。

(クラウチングスタート……?)

ザンスカール特有の猫目が大きく開く。

四足に畳んだノーベルの体は、いわば弾かれる直前のバネ。

すぐにでも試合が動く。

対主の一挙手一投足を睨み据え、迎え打つタイミングを――。

刹那、ノーベルが大地を蹴った。

合わせてギギムも動く。

プロレスの重鎮たちが選択したのは、以外にも打撃。

しなやかに上弦を描いて伸びるノーベルのフック。

真っ直ぐに差し出されたギギムの膝。

ガギンと鈍い音を立て、両者が中央で交錯する。

ファーストコンタクト。

勝者はギンザエフ。

下半身を突き出した分だけギギムの頭部が後方に寄り、空いたスペースで強欲な拳が空を切った。

一方でタツクルを警戒していたギギムの膝は、ノーベルの額を強かに捉えたのだ。

だが、それでも尚、勝負は五分。

「ムオ!？」

強烈な圧を半身に受け、慌ててギギムが腰を落とす。

ガツチリと対主の腰部を捕らえ、体を預ける形となったノーベルがふへつと笑う。

「ふ、ふふ、危ない危ない。」

あやうくこれ一発で終わっちゃう所だったよ」

「ブム」

打撃が未遂に終わるや否や、即座に本職タツフルへのシフト。

強かなる女帝の片鱗。

ギンザエフも思わず目を見張る。

こちらも打撃屋では無いとは言え、十分に体重の乗った膝。

彼女の言葉ではないが、一撃で決まっただけでもおかしくは無かったはずだ。

(女子プロレス……、そこまでのものか)

内心で舌を巻く。

キャットファイト。

女性同士の拳の応酬は、時に歯止めが効かなくなり、男の試合よりも凄惨な血を見る事がしばしばある。

そんな世界で絶対の王者として君臨してきた女傑。

流血慣れしている、その経験が生きたのだろうか。

そして、一見苦し紛れでありながら、どうして中々に厄介なのが今の体勢。

これがCWAのリングならば、力尽くでパイルドライバーに持ち込む所であるが、さすがにアマレスの頂点に仕掛けるには欲目が過ぎ

る。

重心を落とし、ギギムの圧をいなしながら踏み止まるノーベル。敵は完全に守勢に徹し、ダメージの回復を凶っている。

「フーン！」

覚悟を決めてギンザエフが動く。

両腕を組んで高らかと振りかぶるハンマーブロー。

このまま勢いでモーラも動くか、それとも……。

「――！」

意外。

モーラの選択は、体勢の有利を捨てての「退」

クラッチを解いて両手で押し返し、そのまま真っ直ぐに起き上がる。

ブン、と鉄槌が空を切り、見上げるギギムの先でアップライトに構え直す。

（豪胆な……、打ち合いに付き合おうと言うのか）

それならば、と。

煩わしい駆け引きを捨て、ギギムもまた攻勢に出る。

ともに投げ・組みを本職とするレスラー同士。

とはいえ市長には、本業に匹敵するほどのストリート・ファイトでの経験がある。

その自信が起爆剤となり、旋風を描いてモーラへと迫る。

「ダアア――！」

渾身の右フック。

と言うよりも、そのまま半回転しかねないほどの勢いで繰り出されたラリアット。

圧倒的豪腕、ガードは悪手。

両手を広げスウエーで下がったノーベルの鼻先を、ぶううん、と太い拳が通過する。

（この……、戻り！）

合わせてモーラが動く。

真っ直ぐに踏み込む、右ストレート。

打ったギギムの体が泳ぐほどの大仰な空振り。
自分の拳の方が、確実に先に届くタイミング。

「がッ!?」

間合いに入った瞬間、無警戒の左即頭部に衝撃が来た。

左での裏拳。

半回転しかねないほどの勢い、どころでは無い。

勢いのままに市長の体は一回転し、加速を重ねた第二撃をブチ込んできたのだ。

たたらを踏み、その身を傾げたノーベルの前に、さらに速度を増した大三撃が迫る。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

ガードを固めたノーベルの左腕を、ギギムの鉄拳がひたすらに叩く、叩く、叩く!

本邦初公開、これが市長の組織犯罪対策。

両手を広げてブン回すだけ。

ただそれだけで十分な脅威。

半径85インチは、市長の手の届く距離——ッ!

「オオア!」

ノーベルが潜る。

再び深く身を沈め、加速のついた左腕を避ける。

(軸足……!)

打撃を捨て、再びタツクルに移行する。

今のギギムはさながら高速回転する独楽。

軸足を傾けさえすれば、勢いのままに押し倒す事が可能であろう。

「……ッ!」

至近に踏み込んだ刹那、ふっ、とギギムの回転が変わった。

直線的なタツクルを円の動きで避け、むなしく空を切った両腕を背後から捕らえる。

(罨……！ 市長の狙いは、はじめからこの体勢?)

フルネルソン。

豪腕に囚われたモーラの両肩がミリミリと鳴く。

ぞくぞくと背筋が震える。

ギンザエフ・ターイーのレパトリーの中で、この体勢から入る技は一つしかない。

『ああッ!? まさか、まさか市長！』

禁断のセメント・クラッシュに行く気かなのア——ッ!?』

MS少女の悲痛な叫びがこだまする。

セメント・クラッシュ。

豪快なパイルドライバーを得意とするギンザエフには珍しい、関節フエイバレットの必殺技。

フルネルソンからリバーズ・パロスペシャルに移行し、そのまま全体重を預けてマットに叩き付け、相手の肩、肘を破壊する。

長いギンザエフの経歴の中でも、かの悪名高いBWAとの団体抗争の時にしか使った事の無いと言う、文字通りの真剣勝負セメント・クラッシュでの破壊技である。

「さて、どうするかねミス？」

今なら紳士的に技を解く事も可能だが……」

「ふっ、ふふ……、光栄だね市長。

こうまで高い評価をされたんじゃあ、私も抗ってみたくなるじゃあないか？」

「そうか……、ならば行くー！」

短く言葉を切って、ついにギギムが動く。

両肩をロックしたままノーベルの背に飛びついて、一息に地面へと……。

「……なっ!?!」

ギンザエフが驚愕する。

刹那、ノーベルも動き始めていた。

ただでさえガシリと固められていた両肩を、通常の稼動域を超えて思い切り反らす。

関節が壊れる！

そう思った瞬間、ノーベルの両腕は手品のように、するりとギギムのフックをすり抜けていた。

男性の逞しさに上乘せした、女性特有のしなやかさ。

両方の資質を備えた筋肉のみが可能とした、プロレスの外の脱出法。

しかも、それだけでは終わらない。

ノーベルの手首が鮮やかに返り、ギギムの両手をガシリと捕らえる。

押し付けられた体重の加速を利用して、勢いのままに投げに行く。

十字に交差した両腕を右肩に預けての、変形での一本背負い。

関節と投げの複合。

モーラに試そうとしていた必殺技の脅威に、今度はギンザエフ自身が晒される番となる。

「……ッ！ オオッッ!!」

市長が叫び、必死に脱出にかかる。

体重を後方に逸らして減速し、腰を落として必死に大地に踏み止まる。

規格外の筋肉を持つからこそ可能となった、土壇場でのブレーキング。

だがそれにより、モーラ鬼灯の仕掛けた最後の罠が完成する。

「ハイイツ」

ノーベルの背が再び沈む。

あくまでギギムの両腕をクロスさせたまま、その両脚が、両肩が、大きく広げた市長の股下を通過する。

「イヤアア——ッ!!」

そして、女偉丈夫の気合によつて、120kgを超すギンザエフの肉体が真上に持ち上がる。

「~~~~ッッ!?!」

192cmのモーラが202cmのギンザエフを肩車する時、その視線の高さはコーナーポスト最上段を超える。

そこからさらに、レスラー二人分の体重を乗せて、後頭部を地面に叩き付けると言う。

しかも両手は自分の股下。

受身は不可能。

それは、女子プロレスの世界だからこそかろうじて許される必殺技。

身長があり、馬力があり、体重がそのまま凶器に変わる男同士の世界では、絶対に仕掛けてはいけない技。

嗚呼、今それを。

よりによって男以上の肉体を持った女傑が仕掛けると言う。

頭部が最頂点を通過して、ギギムの肉体がいよいよ加速を始める。

鮮やかなるブリツジ。

視界が後方に泳ぎ、急速に大地に近づく。

前述の通り、受身は不可能。

ゆえにただ覚悟する。

絶対に起き上がる、最後の最後まで意識を残す、と――。

ゴズン、と言う鈍い音。

闘技場の白砂が、さながら厳寒の日本海の波飛沫のように舞い上がる。

『……ハッ!?’

ジャ、ジャパニーズ・オーシャン・サイクロン・スープレックスウ

ツツ!!!

何と言う、ナンと言う女帝ツ!

アメリカン・プロレスの英雄に、よりによってソイツを仕掛けるのかアツ!?’

「グツ、オ、オオ」

しかし、なお恐ろしきは市長の超人的ハートである。

三度にも及ぶ犯罪組織との抗争を潜り抜けた肉体と魂は、この一撃にすら良く耐えた。

だがその先を取り、しなやかにして強かなる女帝の肉体は動き始めていた。

「ムオ」

差し出した両腕が虚しく空を切り、その巨体が後方に翻る。

抗おうとする屈強の体躯が良い様に翻弄され、絡み合う二つの肉体がぐるんぐるんと大地を巡る。

アマレスにおけるグラウンドの攻防、では無い。

この動きは、まるで……。

(ローリング、クレイドル……?)

ガシリ、と。

絡み合う両脚が巧みにロックされ、それでようやく回転が止まる。

天を仰いだ男の顎元に逞しい左腕が絡み付き、同時に右腕を捕えられる。

「セイー」

下を取ったノーベルが体を倒し、その全身に万力を込める。

たちまちギギムの腰骨が釣り上がり、その背がアーチ上に反り返る。

両脚と片腕を固め、頭部を締め上げながら腰骨、背骨を極めるカベルナリア。

鍵^{ジャベ}。

太陽の国メヒコにおいて、華麗なる空中殺法と並ぶルチャ・リブレの花形。

相手の五体を完全にコントロールし、複数の箇所を同時に極める複合関節の総称。

この形になっても、まだギンザエフには勝機があった。

複数の関節を同時に攻めると言う行為は、その分だけ一つの技に対する締めが散漫になる難点を孕む。

腕の一本、脚の一本を犠牲にする覚悟で技を抜ければ、まだ反撃の余地はある。

だが……。

「……ギブ、アップだ」

諦観の吐息と共に、全米最強の男が降伏を宣言した。

たちまち観衆が沸きかえり、高らかとゴングが打ち鳴らされる。

ギンザエフの心が折れた訳ではない。

だが、男はプロレスで敗れてしまった。

戦いの中、女帝にはグラウンドにて腕なり脚なりを極めるチャンスが幾度かあった筈である。

それでも彼女はアマレスの三冠ではなく、プロレスの七冠にこだわってきた。

J. O. S.

ローリングクレイドル。

そして、変形カベルナリア。

相手の最大の技を打ち破り、己の最大の大技で以って勝負を決める。

プロレスたる矜持を見せ付けた『女帝』の気高さに、男は花道を譲ったのだ。

「……感謝するよ、市長。

アンタとガチで殺し合うのだけは勘弁して欲しかったからね」

年齢に似合わぬ屈託の無い笑みを向け、モーラが右手を差し伸べる。

女性のしなやかさと男性の強かさを併せ持った、暖かく力強い掌だ。

彼女の持つ底知れぬポテンシャルに、あらためてギンザエフがため息を付く。

瞬発力、持久力、耐久力、柔軟さ、それに戦術と機体の作り込みもありとあらゆる要素において、彼女は満点とは言わずとも、少なくとも90点以上の資質を有している。

こと総合力で言うならば、彼女は間違いなく今大会ナンバーワンのトータルファイターであろう。

愛娘が手塩に掛けて磨き上げてくれた機体を、誰よりも徹底的に使い込んできた。

そう自負を持つギンザエフであったが、彼女達の執念と比べれば、

そもそもこのスタートラインで敗北していたのだと、今では認めざるを得なかった。

「一つだけ聞かせてくれないかね、ミス・ホーズキ」

「うん？」

「それだけの実力があいながら、どうして現役を退いた？」

今の君の肉体ならば、日本のマット界に敵う相手などいないだろうに」

「あゝ……」

ギンザエフの素朴な疑問に対し、モーラはしばし視線を逸らし、やがてどこか困ったように呟いた。

「まあ、日本ってのは世間体を大事にするお国柄さ。

どうしても叶え難い夢、つてのもあるモンだよ」

「フム？」

「ガン普拉バトル。

たかだか玩具遊びの世界でなら、女の子が地上最強だって構わない

……、だろ？」

私の愛馬は凶暴です

十年ほど前。

とあるNPO団体に勤める老夫婦が、マレー半島で一人の少年と出会いました。

浅黒い肌に、獣のような大きな犬歯、それに伸びるに任せたボサボサの髪の毛の少年でした。

環境保全調査のため、密林にベースキャンプを組んでいた最中の出来事です。

「あつー」と二人が驚く間もなく、少年はスコールに煙るマングローブの向うへと消えてしまいました。

「ああ、そりゃあきつとハリマオの奴ですわ」

夫婦の話聞いた地元出身の職員はそう答えました。

彼の話によれば、いつの頃からか、この密林地帯を縄張りにする野性児の姿が見受けられるようになったと言うのです。

衣服をまとわず、言葉を介さず、人と交わる事を好まず……、

鬱蒼と生い茂るマングローブのジャングルを庭に、まるで獣のように四足で徘徊する少年。

その素性を知る者はおらず、ゆえに人々は少年を『虎の子』ハリマオと呼ぶのだと職員は言いました。

夫婦は少年の出自に大層驚き、また、夭折した自分たちの息子の事を思い出して涙しました。

二人は少年に人間らしい暮らしを与えたいと考えるようになり、仕事の合間を縫って足繁く密林を訪れるようになりました。

一年が過ぎ、二年が過ぎ、三年が過ぎ……。

最初は頑なであった少年も、いつしか夫婦の心情に理解を示すようになり、やがて二人に手を曳かれ、生まれ育った密林を後にしました。

夫婦の正式な養子となった少年は、その愛情を一身に受け、慣れぬ大都会の喧騒に戸惑いながらも成長を重ねました。

服を着る事を覚えました。

言葉を理解するようになりました。

わずかながらにテーブルマナーも覚えました。

人の子がひしめき合って暮らす社会の中で、他人と付き合う生き方を学びながら、虎の子はやがて青年へと成長していききました。

けれど、物語は順風満帆とは行きませんでした。

ある夜、夫人が言いました。

「――最近、息子の様子がおかしい」

「どこかうつろで、ぼんやりとしている」

「あれだけ元気な子だったのに、近頃は何だか溜息ばかり」

「つまらない風邪などにもかかるようになった」

「時折、吐き気や頭痛を訴えてくる」

「ああ、何と言う事でしょう！　とうとう病に伏せてしまったわ」

病床の青年を看た医師は言いました。

「精神的な要因からくる病です」と。

時間に縛られ、ルールに縛られ、常に他者の目を気にして生きねばならない人間社会は、精神的な負荷の多い世界です。

生まれながらに密林を駆け回る生活を続けていた少年に、文明社会のストレスは大きすぎました。

本人すら自覚せぬ内に、その心身を大きく消耗してしまうほどに……。

ああ、と。

自分たちのエゴがもたらした悲劇に、夫妻はひどく落胆しました。

あの息子は、自然に返さなければならぬ。

そう理解した後も、夫妻はそれを実行に移す事が出来ませんでした。

仕事柄、二人は大自然の厳しさを誰よりも理解しています。

二、三日獲物に出会えなかつただけで命を落とす過酷な世界。

くだらぬ病、理不尽な天災、あるいはちっぽけな毒虫すらが致命傷となる密林の世界。

幾年も故郷を離れていた青年が、今更野生の地で暮らしていけるとは、とても思えませんでした。

狭い匡体に押し込められ、その肉体をファイティング・スーツで拘束される事によって、皮肉にも青年の中の野生が解放されていく。

鋼鉄の四足に獣の魂が注がれて、衝動のままに猛り、吠える。

機動戦士ガンダムSEEDにおける量産機、バクウ。

重力戦線における特殊な環境下に適応すべく開発された局地戦用の……、

などと言う建前はもう十分だろう。

人三化七。

かろうじて設定面での『言い訳』を担っていた、無限軌道も背翼も無い。

大地を蹴る前足の役目を兼ねた、猛禽のような両の五指。

獲物に飛びかかるバネを確保するため、猫のように窮屈に畳まれた背骨。

拳一つがゆうに収まると言う大顎には、青年の野性を証明する鋭い犬歯。

過酷な環境で生き残るべく、四足歩行向けに先祖返りを起こしたハリマオの関節。

彼の纏う装甲もまた、野性児向けにオーダーメイドされた一品モノである。

そんな異色のMSをプラフスキー粒子で動かそうとしたならば、どこかで帳尻を合わせねばならない。

あくまで既存のカスタム機として、そのデザインをいずれかに寄せる必要がある。

そして、たまたまコズミック・イラに、獣のような四足の機体が存在した。

『バクバクウ』と言う機体名もまた、規格外の野性児がガンプラファイトに参戦するための手続きに過ぎないのだ。

『~~~~ツ!?!』

何だ！ なんなんだコレはツツ!?

こんなの、こんなのMSじゃないツ！ ただのZOIDSだよツ

!!

「それ以上はいけない」

驚愕のあまりタブー中のタブーに触れてしまったMS少女に、届くはずの無いツツコミをヒライが漏らす。

呆気に取られた一同がモニターを注視する中、赤髪の少女がぼそりとリオに耳打ちする。

「のうナガラよ、聞いてるかや?」

「……なんだよ?」

「あのハリマオとか言う野性児も『虎の子』なんだそうじゃ。

お主と違って本物の、な」

「……………」

そう言つて、カカカ、と三日月を描く真つ赤な唇。

呆れたように一つ、ため息がこぼれる。

なんてイヤな女だ。

二か月前の死闘より、久方ぶりに真つ当な会話を持とうかと言う二人。

その第一声がこれなのか?

他人の嫌がる事を進んでしようがモットーの女。

彼女はまさに、失われつつある古武道の正道を継ぐに相応しい畜生であつた。

「まさかよ……………」

言いかけた一言が途切れる。

白砂の闘技場を我が物顔で睥睨する鋼鉄の獣。

虎に育てられたなどと言う噂は兎に角としても、その存在感、モニター越しに立ち込める獣臭までも、一概に否定する事は出来まい。

——ジャーン、ジャーン、ジャーン

束の間の思索を遮つて、仮初の闘技場に銅鑼の音が響く。

ムクリとバクウが首をもたげた先に、新たな異形が影を成す。

婆鎖^{ヴァアサーゴ}唾護^ゴ。

稀代の拳法家・馬凶愛が、ガンダムヴァサゴをベースに製作した中国拳法専用のMFと言う。

ただしそれも、本人の自己申告を信じるならば、の話だ。

金糸による艶やかな刺繍の施された、極彩色の天鷲絨^{ビロード}。

角兜に見立てたV字アンテナの中心より伸びるしなやかな尾羽。

そして何より見る者を怯ませるのは、渴と両眼を押し開いた、鬼の形相のような仮面。

原型機の判別などつこう筈もない。

拳法着でも、ましてや古の鎧武者でもあり得ない。

これではまるで……。

『まるで……、まるで京劇イ〜〜!!』

一体なんなんだよお前らツツ!』

こ、これは尋常のガンプファイトに非ず!!』

違う。

大仰なるMS少女の前口上が、この時ばかりはピタリとハマる。

まるでサーカス、あるいは何かの舞台劇。

この傾いた出で立ちの両者が、本当に今宵、真剣で闘おうと言うのか？

「カカ、あの小男め、蘭稜王を気取ろうてか？」

「……らん、りようおう？」

「近代の京劇に好んで使われるお題目よ。」

北斉末期の皇族で、己が美貌が指揮の妨げにならぬようにと、常に仮面を着けて戦場に臨んだというイケメン將軍よな。

じゃが、それにしても……」

カラカラと、リオの無知を嘲るように少女が笑う。

少女の本質は芸能。

コロッセウムを見つめるその瞳に、少なからぬ真剣な色が宿る。

「……よもやゲテモノの代表たるヴァサゴでそれを演ろうとはな。

チャイナのジョークは偉くパンチが利いておるのう」

のそりとバクウが前傾をとり、低い唸りで大地を揺さぶる。

ピンと張り詰めたような圧力に対し、ヴァサーゴは飄々と首を傾げ

「ルガアアアアアア———— ツ ツ ツ」

瞬間、ハリマオが仕掛けた。

弾かれた矢のように一瞬で中空に跳び、渾身の前脚を振るう。

マーが挟られた！

そう思った瞬間、バクウの右爪は虚しく空を斬っていた。

一拍遅れ、ヴァサーゴが天鷲絨の外套を翻し、羽毛のような軽やかさでふわりと大地に降り立つ。

静と動。

剛と柔。

対照的な二人の肉体の働きに、オオオオ、と仮想空間が震える。

「チッ、あんのインチキ野郎……」

ようやく観客席に戻ってきたクルスが、忌々しげに舌打ちをする。

「武俠小説のお約束だと……?」

出来てるじゃあねえかよ、軽身功」

『ワワツ!』

待て！ ステイ、ステイだよハリマオツツ!!』

「馬耳東風、言うだけ無駄よ。」

小姐、離れとくネ」

静止の声を遮って、さしたる動揺も見せずマーが言う。

両者の戦意を確認し、MS少女がゆるりと舞台から飛び立つ。

「……大した役者振りじやのう、自分から粉を撒いておいて」

呆れたようにアムロが呟く。

事実、先に動いていたのはマーの方であった。

先の瞬間、ヴァサーゴはまるで散歩にでも行くかのような足取りで三十八度線を越え、ハリマオが攻めざるを得ないように仕掛けていたのだ。

たちまちに緊張が漲る。

ガンプライフアイト史上、最もファンタスティックな一幕が、今――

「オオアアアアアッ!!」

開始の銅鑼が鳴るか否か、再びハリマオが仕掛けた。

先よりも更に一段疾い。

初太刀を外した相手が降り立った所に、尚喰らい付く。

対主の次の動きまで視野に入れた高速の猪突――

パン!

「ギャッ!」

中空で、突如として乾いた破裂音が響いた。

まるで見えざる空気の壁にでも弾かれたかのように、バクウの巨体が派手にひっくり返る。

見えざる一撃。

動作を終え、身を屈めたヴァサーゴの上に、一拍遅れて外套が落ちる。

観衆は皆、言葉を失い、食い入るように舞台を見つめるしかない。ヴァサーゴが何らかの早技を繰り出した。

それだけは間違いない。

だが、対空砲火の着弾点は間合いの遥か外である。

中国四千年の歴史の中には、石破天驚拳が実在するとも言うのか?

「オッ!? オオワ!?!」

打たれたハリマオもまた驚愕していた。

咄嗟に体を跳ね起こしたのは、まさしく野性のタフネスの証明であろう。

だがその瞳は未だ、狩るべき獲物の真の姿を見定められてはいない。

「……暗器、かの?」

「なに?」

「何を面喰った顔をしとるか？」

「侠客の嗜み……、それくらいの悪戯は平気でする奴らであろうに」
さも当然のように不穏な言葉を放つアムロを、リオが訝しげに見つめ返す。

まさか……、そう出かけた言葉を咄嗟に呑み込む。

一切の武器の使用禁止。

確かにルール上は平等な素手ゴロを強いられるのがガンプラ・ファイト。

だが、そこに胡座をかいて想像力を断つ事は、武術家にとっての敗北を意味する。

成程。

しげしげとモニターの先の芸者を見つめ直し、心の中で頷く。

その全身をすつぽりと覆い隠す薄手の天鷲絨。

悪役と言う役割を殊更強調する悪鬼の仮面。

あれら大仰な衣装に何らかの狙いがあるとすれば、アムロの推測も一概に的外れとは言えないのだろう。

あの胡散臭さ、野性児の嗅覚は果たして、どのように嗅ぎ分けているのであろうか？

バルルル……、と低く唸りを上げ、バクウがゆつくりとヴァサーゴの周りを回る。

剥き出しの闘志に反し、その身は間合いの遙かに外。

何時の時代も繰り広げられて来た、強者の周りを弱者が廻る光景。

だが、生き延びる事こそが絶対正義たる野性児に、そのルールは適用されない。

「……どしたネ虎兎、牛酪バターになるまで続ける力？」

振り向きもせず、嘲るようなママーの声。

すかさず呼応するかのように虎が動いた。

攻め手はシンプル、後背からの足首狙い。

直立する人類にとって最も返し辛く、視界に収めるのも困難なほどの低い体勢。

——スパアン！

「ンギヤイツツ!!?」

振り向きざまの一撃。

再び空気が爆ぜた。

相も変わらず間合いの外、バクウの体が斜めに潰れる。

「射ッー」

短く氣勢を吐き、初めて一步、マーの方から踏み込んだ。

地に伏す虎の鼻先を捉え、そのまま天空まで立ち上がる半月蹴り。

めきよりと鼻先が潰れ、バクウの巨体が垂直にハネ上が——

「ムー」

巧い。

必死に伸ばした虎の前脚。

その切っ先が、かろうじて天鷲絨の端にかかった。

指先一つで、カ一杯に獲物を手繰り寄せる。

種明かしなど不要、組みついて噛めばそれで終わる。

「彪——」

迷わずヴァサーゴも飛んだ。

力に逆らわず身を翻し、鮮やかに舞うように外套を脱ぎ捨てる。

引き裂かれた天鷲絨の先、遂にヴェールを脱いだ婆鎖唾護の真の姿

に、一斉にざわめきが走る。

「……!」

「ありやあ……」

「そ、その手があつたンかいッ!!」

「カカ、そう来たか! そう言う魔改造は嫌いじゃないわい」

ギャラリーの反応もまた十人十色である。

さもあろう、荒鷹に構えた異形の両腕、それを即座に評せる者などいない。

一言で例えるならば——、さながらエピオンのヒートロッド!

細い骨格を幾重ものブロックに分断し、それを何層にも重ねて腕と見做す。

疾く、しなり、よく伸びる。

蛇のように柔軟で、鞭のように峻烈な悪鬼の両腕。

秘訣は肩口から手首までの間に備えた、二十三もの多重関節。

「——ってオイッ?! 反則だろう、そりゃあ!」

フレキシブルアームなんてレベルじゃねえぞッ!」

突如激昂の声をあげたクルスに対し、呆れ顔の主催者がモニター顔を出す。

『どうしましたジョージ? まったく騒々しい』

「どうしました、じゃねえ!」

あの腕はどうみてもレギュレーション違反、内臓兵器の類だろ!? 武器使用禁止なんてけつたいなルールのせいで、どれだけ俺が苦戦させられたと思ってるやがる」

「……マスターベースの機体が素手ゴロで遅れをとるようじゃ、どんなルールでも勝てると思うがのう」

「ウルせえッ!」

ブラジリアン霸王流は武芸百般なんだよオ!!」

「……話を戻すで。」

中国拳法の兄ちゃんが使うとる腕、ありやあ武器やない。

あくまで『技』、武術のカテゴリやとワイは思うとる」

話が脱線しかけた若者たちに代わり、傍らのアカハナがずいつ、と一歩前に出る。

「確かに兄ちゃんの技の冴えは、人ならざる両腕があればこそ。

だが、いや、だからこそ、それを生身の両腕で動かす言うのは、生半な努力やあらへん。

考えてもみイ。

もしも自分らの肩から先に背骨がついていたとして、あない自由に動かせるヤツはおるか?」

「……………」

「自由な発想と、それを支え得るだけのいじましいまでの努力。」

あれこそまさにガン普拉バトルの理念っちゅうヤツや。

思えばワイも、最初にアツガイを身に纏うた時は一苦労やったで……」

『フフ、アカイ選手の言う通りです。』

各々の創意が生かしてこそそのガン普拉ファイト。

その祭典で、単に本人の肉体を模した機体が強いなんて結論が出てしまうのは、少しばかり寂しいですからねえ』

「……って、もうちよいワイの苦労話も聞いてーなー!」

アカハナ必死の懇願を一蹴して、主催者渾身のドヤ顔がオーロラビジョンを席卷する。

『え〜、婆鎖唾護に施された改造について、会場にお越しの皆さん方にも思う所があるでしょう。』

あるでしょう……が、私の一存で通してしちゃいました。だって、見たいじゃないですか。

稀代の拳法家・馬凶愛とガン普拉バトルの邂逅によって生み出された、中国拳法の四千と一年目が……ねえ?』

主催者の寛容な一言に、たちまちわっ、と観衆が沸く。

慮外の盛り上がりによりマーは一つため息を吐き、然る後、ギラリとハリマオを睨み返した。

「……虎兇、やってくれたネ?」

一張羅の衣装代は高くつくヨ」

繰り手の静かな怒りに合わせ、かざした両腕が毒蛇のように鎌首をもたげる。

思わず気圧されたハリマオが、じりっ、と半歩後ずさった、瞬間――

「疾ッ!」

短い呼気を吐いて、ヴァサーゴの左腕が走った。

地を這う大蛇のように奔放な一撃。

狙いはバクウ本体ではなく、その足元。

――パアン!

音速の壁を突き抜けた衝撃で白砂が爆ぜ、思わずバクウが棹立ちと

なる。

数瞬と間を置かず、逆方向より本命の右。

ベツチイイイイン!!

「ギニャアアアアアアアアア——ツツツ??」

虎が哭いた。

遠心力に乗せて大きく加速し、スナツプを十二分に利かせた音速の掌が、身動きの取れぬ脇腹を強かに叩いたのだ。

たちまち大顎より白泡を噴き出し、もんどりうって砂地を転がる。

「兇ッ」

大地に転げ廻る獲物を追って、身を屈めたヴァサーゴが膝だけで跳躍する。

天空より明けの明星モーニングスターの如き鉄槌の左掌。

かろうじて転がり避けた顎先をぶつ叩く右掌のスウイング。

左鞭

右鞭

左鞭

右鞭

左鞭

右鞭

左鞭

右鞭

間断無き破裂音が爆竹のように空気を震わす。

獐猛なる虎の血脈が、まるで卑小な猫のように哭き、喚き、砂を浴びて這い蹲る。

それも無理からぬ、誰もがそう思える程の圧倒的戦力差。

双鞭振るい迫るヴァサーゴの異様は、さながら常山の蛇。

双頭の大蛇の結界が、亜細亜最強の肉食獣を封じ、決着へと追い込んでいる。

「凄エな……、中国拳法、ここまでのモンかよ?」

「鞭打、とは元々そう言ったモノよ。」

生物の急所を責めるのではなく、その皮膚の表面を走る痛覚を叩

く。

ゆえに受ける術も無く、十も叩けば老若男女等しく死ぬるわ」

と、しばし仏頂面で真面目な解説を披露したアムロであったが、最後に一つ、カカ、と嗤って付け加えた。

「——尤も、ワシなら両腕とも魔改造するようなリスクは犯さんかう……」

・
・
・

(……む、ち)

知っている。

青年ハリマオの中の人間として身に付けた知識が、そのキーワードを引きずり出す。

ヒュンと風を切ってパシンと叩く。

爪も牙も持たぬ人の子の作った小癩なる武器。

だが実際問題、その小癩な兵器に手も足も出ない。

なぜなら生物の肉体と言うものは、痛みに耐えられる仕組みになっていないから。

痛みとは、当人に生命の危機が迫っている事を知らせる重要なサイン。

立ち向かう事などできない。

痛みから身を離せと本能が叫ぶのだ。

痛覚を責める鞭という物は、まさしく生存本能の盲点を突いた武器である。

(にくい……)

ぞわり。

ハリマオの背に、無理やり火の輪を潜らされる百獣の王の怒りが乗る。

(にくいにくい……)

ぞわり。

ハリマオの背に、滑稽な玉乗りを仕込まれる巨象の悲しみが乗る。

(にくいにくいにくいにくい……)

ぞわりぞわりぞわり。

人の知識と虎の矜持、両方を有したハリマオの胸に殺意が溢れる。だからとて何が出来よう。

虎の子たるハリマオもまた、あのヴァサーゴの腕の前には全くの無力。

散々に打たれ、転がされ、砂を浴び、とうとうこうして壁際まで追い詰められてしまった。

だがそれがいい。

敵の猛攻を前に成す術も無く窮地に追い込まれた。

そう見えるような今の状況こそがベスト。

優秀な虎と、そうでない虎を分けるただ一つの要因。

それは、最後まで己の爪を隠し通す事が出来るかどうか。

この胸の殺意、溢れる闘争心を悟らせてはならない。

八方塞がり、遂には獣の魂が折れ、こうして無様に這い蹲って震えているのだと、全身全霊を込めて誤解させなければならぬ。

恐る恐る、と言った風を装い改めて見つめる。

大蛇のような敵の両腕。

確かに疾い。

鋭く、しなり、よく伸びる。

その指先の冴えについては、とうとう虎の動体視力を持ってすら見定める事が出来なかった。

だが、末端の疾さに比べれば、根本の動きはてんで鈍重。

肩口から発せられたしなりが、肘、手首を通過する過程で徐々に加速する事により、末端の『見えざる一撃』を実現する。

ゆえに目視は不可能、だが、出所が分かっていたら見定める必要はない。

(……おれのほうが、はやい)

駆け巡る確信。

漲る自信を必死に押し隠し、怯え竦んだフリをして体を畳む。弾かれる直前のバネのように、その身に応力を蓄える。

『——あら、何を見ているの?』
母さんの声がする。

ハリマオが未だ、人間の少年であった時の記憶。

『——陸上競技?』

ええ、そうね……かけっこって言えば分かるかしら?』

母さんの言葉。

ヨーイ、ドン、それが合図。

ドン、までは走ってはいけない、不公平だから。

でも、走り出す準備はしてもいい。

だから皆、自分のように体を畳む。

凄くよく分かる。

走り出す時は四つ足の方が具合が良い。

ただ一つだけ気になるのは、皆の後ろ足に据えられた三角のアレ。

『——アレ?』

スターティングブロック……、ううん、滑り止めとでも言えばいいのかしら?』

走り出す時に足が後ろに滑ってしまったら、本来の力が出せないでしょ?』

ああ!

分かる。

目から鱗。

四つ足を取る、体を畳む。

それだけでは不完全。

最速の第一歩を踏むためには、更にもう一つ、後ろ足の踵にストツパーがいる。

そう、今、背にしている壁のような……。

どきどき。

怯える仔猫のように貞淑を装い、その時を待つ。

観客たちの熱狂の匂い。

敵の仮面の裏からこぼれる失望の匂い。

野生の嗅覚が、逆襲のタイミングを鋭敏に嗅ぎ分ける。

(ヨーイ)

くつ、と一段気取られる事無く、更に深く体を沈める。
もはや見る影も無くなった窮虎を仕留めるべく、ヴァサーゴがさつと右腕を掲げ……

「ル オ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
—— ツツ!!!」

瞬間、雄叫びを轟かせバクウが跳んだ。

弾かれた矢のような、荒ぶる雷獣の如き心魂を抉る呐喊。

「……い」

マーもまた比類なき武術家である。

突如として息を吹き返した猛虎に対し、後方に跳び退りながら、右腕を畳んで打ち降ろす。

鞭打、着弾、だが不完全。

本来ならば、肩口より加速した末端を正確に叩き付けてこそ、真の威力が発揮される鞭打。

だが今回は、十分な加速を乗せるだけの間合いが殺されていた。

止まらない、この程度の激痛では、本物の虎は殺せない。

二ノ脚、三ノ脚、四ノ脚——。

瞬く間に距離が潰れる。

決死、逆襲の左手……。

ばくう。

「啞ウツ!」

戦慄。

とうとう炸裂してしまった野性の禁じ手……、

『ああッ!? 痛ったア! ハリマオがとうとう行つたア……ッ!?

天才、馬凶愛の左肘に、バクバクウがばくうッと行つたアア

アアアツ!!』

歓声と悲鳴が混ざり合い、たちまちにコロッセウムが絶叫に支配される。

この状況になっても、まだマーはかろうじて平静を保っていた。

左肘を襲う激痛、だがいかに虎の子を称した所で、ハリマオの骨格はあくまで人の物。

一息に肘先を喰い破る程の咬合力は無い。

そんな事より問題なのは……。

「薙ィー！」

引き摺られる。

拳士たる婆鎖唾護の肉体が、純然たるバクウの野性に振り回される。

元よりマーは武術家としては致命的な小男。

敵を打倒できる程の膂力を持たない。

それ故の鞭打。

今のように片腕を封じられ、距離と軸足を殺されているような状況下で、まともに打てる攻撃は無い。

ただペシペシと、開いた右手で敵の頭を撫ぜるのみである。

「……アムロ、さっきお前が懸念してやがったのは、つまりはこう言う事態ってワケだな」

「然り。」

いかに峻烈な鞭であっても、まとわりつく蠅まで撃ち落とす事は叶わぬ。

近寄られずに勝つ、などと、技に溺れた武術家の傲慢よ。

ワシであれば片腕は弄らずに、常に槍として傍らに備えておくわい」

「なら、これで終いか?」

ナガラ・リオの問い掛けに、加虐主義者の少女がにい、と嗤う。

「カカ、そうとも言い切れぬのが死合いの面白さよ。」

後はまあ、中国四千年の引き出し次第、と言った所かの?」

「穿ッ」

気合一閃、マーが動く。

打撃で十分な威力が望めぬのならば、狙いを急所に絞るのみ。

開いた右手がたちまちVの字を作り、真上から虎の両目を抉りにかかる。

……と、見せかけて、本命は下。

「蹴ッ！」

即座に身を屈め打ち放つ、足元を刈り取る水面蹴り。

「ヌヌギユォー！」

だが、虎の動体視力は、繰り出す技の真贋までをも即座に見分けた。

首をよじって指先を避け、同時に足蹴りを外しながら、噛み付いた肘元を視点に中空で一回転！

ドラゴンスクリュー、ならぬタイガースクリュー。

敵の攻撃をかわしながらその腕を破壊しようと言う、業欲なる野性児流の関節技。

拳法家・馬凶愛の天性は、その瞬間、如何なく発揮された。

絡め捕られた左肘より上の、十一の関節を同時に稼働！

加えられた応力に逆らわず、螺旋を描いて中空に舞う。

ちやうど噛みつかれた左腕を軸に倒立するような形となり、マーが眼下にバクウを見下ろす。

四足の獣にとって、その頭上は絶対の死角。

すかさず右手で貫手を形作る。

起死回生の一太刀。

その狙いは、頸椎――。

パシッ

「……！」

止められた。

あまりにも容易く、あつさりと……。

相変わらず左肘を啜え込んだままのバクウの大顎。

右手首を握り潰さんばかりに圧迫する左の前足。
そして今、鬼面ごと頭部に爪を立てる、肉食獣の右の前足。
本来ならば絶対にあり得ぬこの体勢、その意味する所は一つ……。

『ええええッッ!』

『そ、そんな、バ、バクウが……、バクウが立ったッ
!?!』

衝撃と戦慄。

会場が震える。

前足を大地に備えた四足獣では、頭部への攻撃を防げない。
ならばどうする?

簡単だ、立つちまえばいい。

そんな主張が聞こえんばかりの突然の進化。

驚愕、だが当然の帰結。

バクバクウはバクウのカスタム機などではない。

バクウのガワを被せただけのハリマオなのだ。

必要があれば屈む、必要があれば立ち上がる。

婆鎖唾護が中国拳法の四千一年目であるならば、バクバクウはネコ
科大型肉食獣の二百五十万と一年目。

「~~~~~ッッ!!」

ミリミリと頭部を締め上げるアイアンクローの激痛に、マーがよう
やく我に返る。

吊り下げられた肉体に反動をつけ、必死に放つは金的蹴――。

「ヌギイイイイイイイ!!」

無理。

どうしようもない。

反撃に移る暇も無く、単純な獣の膂力でブン回される。

こうなってしまうては拳法など無力。

武術とは、拳術とは、そもそもこういった形に陥らない為に存在す
るのだ。

あまりにも不器用で滅茶苦茶な獣の投げ。
だが防げない、受身も不可能。
咬み付きまでも門に数えた斬新な体術。
しかも、狙いは壁！

——バギヤツ

壁面に強かに打ちつけられ、砕けた鬼面が顔面ごと陥没する。
蘭稜王気取りのガンダムフェイスが美形であったかどうか、もはやそれを判断する術も無い。

同時に関節が砕け、噛み千切られた左腕がどさりと白砂の上に落ちる。

「ギヤアアアアア——!?!」

たちまち観客席より絹を裂いたような叫び声上がり、それが決着の合図となる。

けたたましく打ち鳴らされるゴング。

だが、その姦しさが却って獣の癩の強さを引き出してしまふ。

「ギヤアアアアアアッ!!」

虎が吠え、ヴァサーゴを思い切り大地に叩きつける。

激情のままに前脚を振り上げ、思い切り叩き、叩き、叩きつける！

『わわわッ!』

やめろハリマオツ、決着！ 決着だよオ!!』

『落ち着きなさいキミコ君、マー氏のシステムはとづくに遮断されていますよ。』

……とは言え、これ以上は流石に無粋』

リー・ユンファが手元の扇子をパシンと鳴らす。

たちまちおっとり刀で駆け付けたハイモックの群れがハリマオを包囲する。

バルル、と短く呻いて鋼鉄の野獣が首をもたげる。

今のハリマオにとっては、虎の檻に餌を放り込むが愚行。

『ウルギヤアッ!!』

短く吠え、糸の切れたヴァサーゴの残骸を力一杯に投げつける。
鋼鉄が砕け飛び、包囲の輪の途切れた一角目がけ、暴風を負って獣
が駆ける。

『バララアッ！』

ハリマオが吠える。

バクウが抉る。

削いだ。

叩いた。

砕いた。

千切った。

投げた。

咬み付いた。

振るう、振るう、振るう。

人三化七。

獣と人のハイブリッドが辿り着いた新境地。

野卑で、無骨で、教養の欠片も無い二足獣の連撃。

「カカツ、これぞ新生黒虎拳。」

いや、リアル・シラット・ハリマオとでも呼ぶべきかろう？」

「……適当な事ばかり言うなよ？」

あれのどこが武術だ？ 拳法だ？」

「なればこそ、よ。」

拳法なんぞ、下らぬ様式美さえ取り払ってしまえばあんなもの。

模倣はしよせん模倣。

中国四千年、随分と無駄な歩みを重ねてきたものよのう」

カラカラと、他人事のように古武術家の少女が嗤う。

情念も信念も介さず、ただ技術を技術として解する女。

それゆえにその辛辣な舌に、事実の一端が乗る。

「ルガアアアアアアア——ツツ」

電影の世界にしか生きられぬ虎が啼く。

今やその檻は限界にまで押し広げられてしまった。

この暴虐、この野生、一体誰に止める事が出来ると言え……。

——パン！

「……アウ？」

突如、一発の銃声が響き渡り、獣の体が大きくよろめいた。

驚き振り向くハリマオの頭上に、バサリと投網が覆い被さる。

それを合図に、客席に伏せていたザクとジムの狙撃兵がスナイパー一斉に立ち上がり銃口を向けた。

「ギニャアアアア——ツ!？」

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

狙い撃った。

麻酔弾、合わせて十三発。

バクウはしばし、さながら窮鼠の如くもんどりうって暴れ回っていたが、その内に動きが緩慢になり、遂にくてんと白砂に横たわった。

シン、と静まり勝った闘技場に、再びリーのオーロラビジョンが浮かぶ。

『——ご安心ください、皆さま。』

ハリマオ選手は二回戦を戦う大事な身体ですから、少しだけお休みして頂きました。

それにしても、ブンキチくん用に備えたスタッフがこんな形で役に立とうとは。

いやあ、本当に良かった良かった』

あまりにも白々しい主催者の声。

ズルズルと引き摺られていくバクウを見つめながら、ポツリとリオがこぼす。

「……アレとやるのか、レン?」

「カカカ。」

なあと、横綱と闘るよりはなんぼかマシよ、もつとも……」

と、真つ赤なしやぐまをポニーに結び上げながら、ちろりとレンが舌舐めずりする。

「……もつとも、次のアスノだかアスハだかが無事に通してくれたら
の話、じゃがの」

——同時刻。

プラネタリウムから少し離れた広場のベンチに、一人端末を片手に微笑する男の姿があった。

奇妙な男であった。

身長はおおよそ170前後と、アムロ・レンと同程度。

やや細身の体は、見る者が見れば、相応に鍛錬が進んでいるのが分かる。

とは言え、ゴウダのような太さがあるわけでもなければ、イーワのように、見る者をハツとさせるほどに引き締まった肉体、と言う訳でもない。

奇妙と言ったのは、その男の印象の薄さである。

目元まで覆い隠すほどの長い前髪。

強いて言うならば、その程度しか特徴らしき特徴が残らない。

夜の廃墟にあつてすらその程度の印象の男である。

一たび雑踏に紛れてしまったら、この男の存在など、どこかに掻き

消えてしまうのではないか？

『たまたま画面に映りこんでしまった、恋愛AVGの主人公』

男の印象を一言で例えるならば、それであった。

「……なるほど、確かに良かったですね、李大人。」

せっかく用意した趣向が、無駄にならずに済んで」

長い前髪の奥で、端末を見つめる細い瞳が更になっ、と細くなる。

『気に入らん。』

あの山師めが、いずれ地獄に落ちようぞ』

男の右の耳許で、憤怒の仁王が如き太い声が響く。

『諸行無常、畜生の末路など、所詮はこの程度のもの』

逆の耳許で、金属でも擦り合わせたかのようなカン高い声が響く。

「——行こうか。」

まずは、篤人とか言うニュータイプ気取りの武術家だ」

そう言っつて男がすつくと立ち上がり、丘の上のプラネタリウムを見

つめる。

誰あろう、この男こそが、一回戦最終試合出場選手。

ヤマモト・アスラ（山本明日羅）、その人であった。

アムロ再び

——武術。

それは闘争を愛する者ならば、誰もが胸に憧憬を抱く崇高なる理念。

修練に捧げられた尊い時間と、理合に裏打ちされた確かな戦術。

そして何より、常在戦場すらを由とする、揺るぎなき鋼鉄の精神。

全ての要因が咬み合った時、弱肉強食の摂理を超え、弱者の手に理不尽を覆す刃が握られる事となる。

武の境地、しかし理念はあくまでも理念。

この21世紀の時代に、人類の好奇心が暴ききれなかった神秘など何処にも無い。

ボクシングは事実を事実と認め、弱者と強者をハッキリと分かたず近代スポーツの道を歩んだ。

日本武道の集大成たる柔道ですらが、明確なる事実を前に理想を押し通す事は叶わなかった。

同じ流派、同じ才能、同じ技術、同じ努力。

もしも戦士を取り巻く全ての条件が同一であったならば、体格に秀で膂力のある者が必ず勝つのだ。

事実、現代における拳聖・馬凶愛の技の冴えを以てしても、理想で現実を覆す事は叶わなかった。

だがしかし、現実が冷酷であればこそ、世の救い難い格闘ロマンストたちは甘美なる夢を抱いてしまう。

——曰く、戦国の世より五百年続く古武術の宗家と言う。

——曰く、琉球舞踊に巧妙に秘匿された宮廷武術の真髄を知ると言う。

——曰く、修羅の集うガンプラバトルの世界を、天性の操縦センスと勝負勘だけで勝ち上がったビギナーだと言う。

——曰く、「あの」空手少年、ナガラ・リオと互角に渡り合った烈女と言う。

『——かつて、先人は言いました。
武術とは弱者に残された最後の牙。
極めたならば女、子供でも大の大人を打倒できるのだ、と』

MS少女の謳い文句に、観客達も息を呑む。

ありえない、ガンプラ・バトルと言えどもやってる事は生身の代理戦争。

闘争はメルヘンやファンタジーの世界では無いのだ。

だが……。

『そうまで言うなら、見せて頂きましょうッ

おあつらえ向きに女子供！

篤人流古武術、及び安室流舞踊、弱冠18歳、アムロ・レン!!』
ザッ、と白砂を掻き分け、武術界最後のファンタジーが闘技場に姿を見せる。

リアルニュータイプが選んだ相棒は、意外にもガンダムになり損なったMS、リ・ガズィ。

純白の胴衣と藍染めの袴を意識した鮮やかなツートン。

濃淡はつきりと分かれたコントラストが、見る者にガンダムの系統機である事を改めて思い起こさせる。

BWSを取り払ったそのシルエットは、いかにも連邦謹製らしくシンプルでオーソドックス。

強いて個性らしい個性を上げるならば、本来強化すべき指先を却つて細くしなやかに磨き上げてきた事と、胴衣姿を意識して、腕部、脚部を『袖付き』に改造している事くらいか。

「……たく、ヒッドいなく、キミちゃんは。」

私は女の子じゃないってのかい？」

「デッハハ、諦めろやモーラよオ。」

アイツにとっっちゃあ、お前はヒーロー以外の何者でも無いだろうよ」

「……………」

傍の他愛ないやり取りを聞き流して、ヒライ・ユイの瓶底眼鏡がモ

ニターをまじまじと凝視する。

しばし置いて、傍らのリオがぼつりと尋ねる。

「どうだ、ヒライ?」

「……正直、拍子抜けしている。」

あのリ・ガズイ、彼女が作ったにしてはあまりにも堅実で王道的。

外見を見ただけでは分からないけれど、少なくとも、この前のディ
ジェのような不気味さは無い」

「お前のリーオーを意識してるんだよ。」

天狗の鼻をへし折られたちまつたんだから当然だ」

「……?」

リオの慮外の言葉に対し、ヒライはきよとんと小首を傾げ、言葉の
意味を反芻するように考え込んだ後、やがて合点がいったのか「ああ」
と一つ頷いた。

「それは無い。」

彼女にとつての私とは、ナガラ・リオのおまけ」

「……………」

一切の謙遜も自虐も無く、ただ淡々と少女が語る。

思わずリオの口よりため息がこぼれる。

ヒライの悪癖、自己の評価がヒイロ・ユイの命並みに安い。

「まあ、いいや。」

アイツの手管さえ見りやあ、それでハッキリするからな」

短く言葉を切って、意識を眼前のモニターへと戻す。

好奇と不安に僅かばかりの期待がないまぜになった群衆の視線が、
舞台上のリ・ガズイに容赦なく纏わりつく。

だが、そんな粘っこさをを意にも介さず、アムロ・レンはただ飄々
とその時を待つ。

(……カラリパヤット、のう)

そつと、胡散臭げにその武術の名を呟く。

現代の古流武術家がググってみた結果、得られた情報は『アジア格
闘技の源流』と言う一事のみ。

即ち、かの達磨大師が天竺にて会得した体術こそが崇山少林寺の興

りであり、一方、インドの伝説的英雄・ラーマの叙事詩が東南アジア
一帯に伝搬する過程で、ムエタイ、シラット、ポツカタオと言った数
多の闘技を生み出す土壌が形成された言うのである。

篤人流四百年など目では無い、圧倒的仰天的ファンタジー。

唐手——、かつて中国文化圏の柵封体制に与した琉球武術の末裔も
また、決して無関係ではいられない。

ブウン、と通信回線が開き、束の間の思考が遮断される。

見据えた砂嵐の先に浮かび上がったのは、大会主催者、リー・ユン
ファの満足げな笑顔であった。

「なんじやいプラモ屋？」

勝負の前じやぞ、後にせい」

『ハツハツハ、今さらこんな事でナーバスになるような貴方でもない
でしょう。』

時にアムロさん、今日の一戦、巷ではどのように謳われているか
知っていますか？」

「……なに？」

『ズバリ、^{ニュータイプ}人類の革新対決』

「……………」

李大人の太上段の物言いに、アムロはしばし呆れたように目を瞬か
せていたが、その内に力カ、と鼻で笑って言い放った。

「勝手に言つとれ。」

プロモーターがどんなアングルを組んだのかは知ったこっちゃな
いが、生憎とワシはアムロ・レイでもD・O・M・E.でも無いでな
『まっ、貴方の自己評価ではそんな認識なのかも知れませんが。

ささて、あちらさんはどうでしょうかねえ？』

「そいつはどう言う——」

——不意にコロッセウムにおおつ、と言うどよめきが溢れ、レンの
二の句が遮られる。

意識を改め通信を切り、ゲートの先を不機嫌に見据える。

リー・ユンファの含みの意味、それも立ち会って見ればすぐに分か

る。

これ以上の詮索は必要ない。

困惑交じりの歓声の中、篝火に炙り出されたライトブルーの機影が姿を見せる。

アスラガンダム。

有体に言うなれば、それは一種の神体であった。

インド土着の古き神々のような蒼き肌に、さながら腕輪、首飾りを模して直に刻まれたメッキの彫金。

腰部にはアーマーの代わりに朱色の布地、更にその上から豹柄の毛皮を巻き付ける。

どのような意図があるのか、大仰なるバックパックは後光のように四つ又に広がり。

極めつけにその頭部には、古の王ラトジャの如き金色の冠を被る。

魔改造、いや。

格調高き主神の如きその面立ちに「魔」と言う文字を当てて良いのかすら分からない。

プラモと言うよりも、フィギュアと言うよりもそれは、さながらプラスチックで象られた偶像であった。

(RX-78? いや……)

場違いなオーパーツの登場に会場が混乱する中、レンの中のアムロセンサーは尚冷静に分析を続けていた。

眼前の機体の悪趣味な装飾を取り払ったならば、おそらくそこには馴染みの深いファーストの地肌が現れる事だろう。

だが、どこかしら違和感が拭えない。

ガンダムベースにしては、全体のフォルムがスマートに洗練され過ぎている。

外観の傾向としては、その特徴は明らかにゼロ年代以降の……。

「——ああ、何かと思えばあの大型新人、蒼月クンの神MS。」

Oガンダムがベースの機体であったのか。

謙虚なのか傲慢なのかハッキリせいや、ヤマモトとやら」

開口一番、アムロ・レンの喧嘩腰の物言いに、神体の中のヤマモトが、元より線のような目をさらににいつ、と細くする。

「その言葉、そっくりそのまま返しておこうか？」

アムロを名乗る女が、わざわざ情けない方のMSを持ち出してくるかね」

「うっさい阿呆、名前の文句はご先祖様に言え」

「ふふ、違うない、失礼」

叩頭するかのように、アスラがゆつくりと体を畳み、しかるのち徐々に持ち上げていく。

緩やかに片足を持ち上げ、舞うようにしゆるりと両の指を備える。闘技と言うよりもそれはまるで、神々に捧げられし戯曲のような――

（インド舞踊……、何もかもがワシへの当て擦りつちゅうワケかい）

唐突に主催者のドヤ顔が脳裏をよぎり、チィ、と舌打ちが漏れる。

『インダス河の畔より始まったアジア格闘技の源流か？』

戦国の世に秘匿された古流武術の末裔か？

現代に残る格闘史最後のフアンタジー、本物はたった一つのみ！』

勝負の気を感じ取り、MS少女がその声を張る。

『一回戦最終試合、気合い入れて行きまッしよ〜〜うツツ!!』

ガンプライフアイトオ、レディー……、ゴオオオ——ウツツ!!!』

MS少女の叫びと共に、高らかとゴングが打ち鳴らされた。

観客の大歓声の中、二つの機体がゆらりと動く。

アスラは相変わらず舞曲の動き。

命のやり取りなどさしたる風もなく、飄々と左右に体を揺らす。

一方のリ・ガズイは珍しくも開手。背筋をピンと張って肘を軽く畳み、開いた両の掌を眼前に備える。空手で言う所の前羽の構え。

性質としては『見』であり『守』。

相手の全身を見るともなく見定め、上下左右、何が飛んできてでも二つの盾ではたき落とす。

本質が読めぬ手合いに対しては、確かに堅実と呼べる選択。

今一つ疑問を呈するならば、それがアムロ・レンと言う狂犬の本質に合致するのか、と言う一点だが。

じりりっ、とり・ガズイが爪先で距離を縮める。

両者のリーチは同程度。

あと50cmも距離を詰めれば、たちまち戯曲は静から動へと転ずる事になる。

じりりっ

あと30cm

じり

あと20cm

じり

あと10——

「……はあ」

間合いの外一杯、不意にリ・ガズイがだらりと構えを解いてうなだれた。

何事かと目を見張るアスラに対し、リ・ガズイは呆れたように虚空を見上げ——

「ケキヤアアアア——ツツ!!」

つられたアスラが何とは無しに顔を上げた瞬間、リ・ガズイは大地を蹴っていた。

ババツと二つ間合いを踏み越え、Vの字に備えた右手を顔面目がけて突き出していく。

戦場技術ゆえ、奇襲も已む無し。

いかなヤマモトとて、それは警戒していた一手であつたが……。

「ちよっせいー!」

「ウヌツ!」

両者の指先が交錯するかに見えた刹那、リ・ガズイが消えた。

間をおかずバサリと覆い被さってきた麻の布地が、アスラの視界を塞ぐ。

不意打ちも目突きも囿。

古流武術家、アムロ・レンの本命はこれ、スカートめくり。

露わになった神の股間を、まじまじと少女が凝視する。

スカートアーマー、無し。

隠し腕、無し。

フォトンボム、無し。

ロラン・セアツク、無し。

——結論、躊躇なく蹴れる!

「カカーツ!」

「オギヤツ!」

ゆえにアムロは、躊躇なく蹴った。

ゴギヤツと一つ、金属のひしやげる音が鳴る。

神体は潰れた蟻蛙のような声を上げ、もんどりうって大地に倒れ込んだ。

・
・
・

『うわあああああああああああああああああああああああああああああ!!!?』

や、ヤ、や、やりやがツたこのアマアツ!!

うえっ!?! え? ええっ!?! け、決着ウ!?!?』

割れんばかりの歓声と悲鳴が響き渡る。

MS少女のテンションも通常の三倍だ。

瞬殺、戦場技術、容赦無し。

事態の急変に、居合わせた誰も彼もが驚愕していた。

オーデイエンスも、MCも、主催者も、歴戦の兵たちも。

「な、なんじゃとオ!？」

そして、蹴ったアムロ・レン本人も。

「これがカリリパヤットじゃと？」

バカな、こいつ、これでは……」

——ただの素人じゃあないか？

足元で這いつくばって痙攣する神の前に、はっきりと結論がでる。

不意打ちへの拙劣な対応、鈍い挙動、蹴った此方が罪悪感を覚えるほどに無防備な下半身。

いずれも本大会の一端のファイターならばあり得る失態では無い。

「なに呆けてやがる、レン！」

とつと決めちまえッ！」

「やつかましいわい！ 黙つとれや空手小僧!!」

ギヤラリーからの罵声を一喝する。

まったくもって冗談では無い。

空手と言うメジャーなカテゴリーに属するナガラ・リオならそれでいいだろう。

このまま頭部を踏み付けて決着。

それだけで観衆には実戦の怖さを十分に伝える事が出来る。

だが生憎、こちらは古流武術と琉球舞踊を組み合わせたまったく新しい格闘技。

これでは安室流舞踊とは、不意を突いてキンタマを蹴る流派と勘違いされてしまうではないか!？」

全然カッコ良くない。

ばあちゃんに対してもあまりに申し訳が立たない。

「……た、ただ太刀筋は見切らせてもらったよ」

「あん？」

トントンと腰元を叩き、ヒツヒツフーとラマーズ呼吸法を繰り返しながら神が立ち上がる。

「どうする？……、ここらで止めにしておくのも、貞女の潔さってモンだ」

「……………」

プルプルと生まれたての子鹿のような内股で降参を促す神の雄姿に、アムロがぱちくりと目を瞬かせる。

何と言うか、凄いな、コイツ。

幾度と無く蹴り続けた半生から得た経験。

強がりも、意地も、矜持も、何もかもを残せぬ筈の、立ち向かう事を許さぬ激痛。

ダメージ自体を技術で軽減できた者もないではない。

だが、強がりでもなんでもなく立ち上がり、こうまで空気を読めぬ発言のできる男がいようとは。

「ああ、まあ、ええわい。

そのお茶目さに免じて、もうちよつとだけ遊んでやるわい」

言いながらリ・ガズイが半身を取り、タン、タンと上下にリズムを刻む。

だらりとぶら下げた袖付きの左腕が、振り子のように左右に揺れる。

「愚かな、何をやろうとこら」

「ちよいや」

スパン、と乾いた音を立て、たちまちアスラの顔面がハネ上がる。

「…………ツ！」

「ド阿呆、ベラベラ喋っていりゃあ舌ア噛むわい。

ほれ、サービス問題じゃ、外してみいニュータイプ」

言うが早いのか、左腕を放り投げるかのように打ち放つ。前に出ようとした出鼻に一発。

のけぞり避けようと振った鼻先にさらに一発。

ぶらりと振った指先が、次の瞬間、さながら水銀の鞭のようにしななって獲物を狙い撃つ。

古流のはずの武術家が見せた魔技に、たちまちざわりとどよめきが起る。

「な、なんだ、あの嬢ちゃん、急に……？」

おい小僧、そのナントカって古武術には、中国拳法まで含まれてんのかよ!？」

「あ……？」

何言ってるんだ、オッサン。

よく見ろよ、鞭打じゃねえよ、ありやあ……」

「デトロイトスタイル……」

それも、恐ろしく的確な」

リオの言葉を引き継ぐ形で、傍らのルクスがポツリと呟く。

フリッカージャブ。

最短距離を直線的に走る通常のジャブに対し、腕のスナップを最大限に活かし、鞭のようにしなせながら打ち込む変幻自在の刃。

左を制する者が世界を制すると謳われた近代ボクシングにおいて、ひたすらジャブを打ち込む事に特化した速射砲のスタイル。

「だ、だがよ、なんだって古武術の嬢ちゃんにそれができる?」

そもそもあんなモン、実戦が売りの武術家じゃあ必要ないだろ」

「あいつは武術の達人とか、そう言うんじゃねえんだ。

何でも出来る天才が、たまたま古武術に縁があつたっただけ。

空手も、ボクシングも、柔道も、資料さえありや何だっただけならにこなせちまう。

真似できないのはおっさんのプロレスくらいのモンさ」

そこまで言い切った所で、忌々しげにリオが舌打ちをする。

蹴り技にリーチで劣り、所詮は体重が乗らない手打ちのジャブ。

それに固執したがるのは勝利のためではない。

ナガラ・リオが唯一看過できないレンの悪癖。

遊びたがり。

眩いばかりの自身の才気を、完全に持て余してしまっているのだ。

「ほうれ、ほうれ、どしたい?」

そんなリオの感情を知る由もなく、余裕綽綽に少女が左腕を放り込

む。

元より合気道に精通し、ニュータイプとも揶揄されるほど動物の直観に秀でた女。

どう見ても適当にブン回したようにしか見えない指先が、恐ろしいほどの確に相手を捉える。

「愚かな——」

パン！

狙い撃った。

「これ以上の——」

パン！

狙い撃った。

「不毛、な——」

パン！

狙い撃った。

「~~~~ツッ！ いい加減に……」

「ほい来たア!!」

逆上したアスラが被弾覚悟の特攻に移ろうとした刹那、先を取ったリ・ガズイがスタンスを変えた。

軽く腰を沈め開手に備えた両の手を前方にかざす。

あまりの反応の良さに、観衆にはアスラの右腕がり・ガズイの両手の間に吸い込まれていくように見えた。

先を取り、誘い、その反撃を絡め捕る。

まるで合気道の教科書、一点の抜かりも無い完璧な試合運び——。

「ガッ!？」

——それが今、アスラの剛腕の前に打ち崩された。

被弾した。

右の拳を浴びたのだ。

確かに手中に収めた筈の右腕の上から、更にこめかみ目掛け右拳が飛んできた。

「!?!？」

「調子こいてンじゃねえッ コンガキヤアアアアア——ツッ

!!!」

どよめく闘技場にドスの利いた怒声が響き渡る。

同時にアスラの頭部が120度ぐるりと回転し、金色の冠に隠された真紅のガンダムフェイスが姿を現す。

「な、なんじゃあ!?!」

「死ねよアアアアアア——ツツ」

敵の豹変に驚く間もなく、返しの左が飛んでくる。

事態の変化に戸惑いながらも、アムロの天性は次の攻撃にしっかりと対応していた。

大振りのフック。

よく見えている、当たらなければどうと言う事は無い……、のだが。

「無駄」

「——ぐっ!」

アスラの頭部が今度は逆方向に240度回転し、白色の能面が呪詛をこぼす。

間を置かずに第二撃。

やはり浴びてしまう。

大仰な左フックを捌きにかかった両腕。

その下を掻い潜り、コンパクトな左のボディが深々と鳩尾にめり込んだ。

ダメージを殺しかね、リ・ガズイがどっかと大地に両膝を突く。

痙攣する横隔膜を抑え、逆流する胃酸を飲み干しながら、アムロ・

レンが狂ったように笑いをこぼす。

「……カッ、カカ。」

名前を聞いた時からもしやとは思っておったが……。

その機体、やはり本性はあの、アシユラガンダム、かや?」

少女の眩きを肯定するかのようアスラの頭部が正位置に戻り、同時に備えた四本のサブアームがガギャンと正面に展開する。

「お察しの通りさ。」

警告だけはしたよ。

こうなっちゃったら、もう僕自身にも止められやしない」

飄々とした微笑を崩さず、蜘蛛のような六本腕をしゅるりと備える。

三面六臂。

本性を露わとした闘神の姿に会場が震える。

「オイッ!? なんだありやあッ

フザケた仕事してんじゃねえぞ! プラモ屋ア!!」

プラネタリウムにナガラ・リオの怒声が響く。

間を置かず、オーロラヴィジョンにどこか困ったような主催者の顔が浮かび上がる。

『……あく、ナガラ君。』

キミの言いたい事は、我々も百も承知なんですがねえ……。

けど、アレ、システム上は間違い無く本人の『腕』なんですわ。

何度判定しても、ガンプラ・トレース・システムは『問題なし』と

結論付けてしまふんです』

「バカな事を言っつてんじゃねえッ!

本人の肉体と繋がってない偽物の腕が、どうやって生身で動かせるってんだッ!」

「ナガラ」

激昂する少年の腕を引き、おずおすとヒライが声をかける。

「肉体とリンクしていない四本の腕を動かす方法。

もしかしたら、あるのかもしれない」

「何だど?」

ヒライ、お前まで何を……」

「……ネオフランス代表、ジョルジュ・ド・サンド。

その得意武器はローゼスビット。

本家モビル・トレース・システムは、脳波コントロールによるオー
ルレンジ攻撃の存在を許容している」

「——ッ!

バ、馬鹿な……、それは……!」

ヒライ・ユイの大胆な推測に、リオ、いや、居合わせたファイター

たちがみな絶句する。

ヒライの推論が正しいならば、あのヤマモトは……。

「……カラリパヤット、か。」

ラファ・スンにクエス・パラヤ。

「……いやあ原作でも、ニュータイプとインドは切り離せない因縁の地、やったな」

『——ヒライさんの仮説が正しいかどうか、現代に生きる我々には確認する術はありません。』

ですが、最も信頼のおける審判、ガンプラ・トレース・システムが是とする以上、我々は認めざるを得ないのですよ』

リー・ユンファが顔を上げ、ざわめく観衆を片手で制し、その指先を舞台の中心へと向ける。

『改めて歓迎させてもらいましょう。』

彼……、リアル・ニュータイプ、ヤマモト・アスラの今大会参戦をツ
！』

解離性同一症。

ヤマモト・イチロウが小学校五年生の時に精神科の医師から告げられた診断結果がそれであった。

名前など、症状などはどうでもいい。

重要なのは、その時ヤマモト少年が、自身の内に宿る異常性を意識するようになったと言う事である。

言われれば確かに自覚はあった。

日常のちよつとした時間に、ふっ、と訪れる空白の記憶。

見知らぬ同居人とでもルーム・シェアしているかのように景色を変え
える部屋。

どこか怯えたように瞳を逸らす、昨日までのいじめっ子の顔。

その日以後、少年は人前では極力己を殺し、他者と関わり合いを持たぬ生活を心がけるようになった。

自身を雑草の一つと意識して過ごす灰色の日々。

それ自体は慣れてしまえばさしたる苦痛では無かった。

だが、日常が空虚であればある程に、妄想が欲求となって胸を突く。まだ見ぬもう一人の自分たち。

自分が目覚めている限り、決して出会う事の叶わぬ兄弟たちは、どのような姿形をしているのか？

不毛なる世界の中で、ただ欲求のみが強い衝動となって魂を焦がす。

科学と数式しかサーチライトを持たぬ西洋医学ばかりに頼っているのは、決して辿り着けない遠き願い。

高校卒業と同時にヤマモトは家を飛び出し、遙かな大陸へと渡った。

齢18にしてバツクパツカーとなった異邦人。

その半生に培われた『己を殺す』と言う奇異な才能は、異郷の地で思わぬ糧となった。

何処に居ても、何をしていても気にも止められぬモブの少年。

血の気の多い九龍の裏街も、銃弾と隣り合わせの紛争地帯も、場違いな極東の子羊の存在に気付く事は無かった。

上海から中国本土に渡り、道教の足跡を追いかけ老荘の思想を諳んじる。

アジアの史跡を巡っては、兵たちの歴史に思いを馳せる。

過酷なヒマラヤを踏破して、古の高僧たちの言葉を探す。

流浪の少年の脚は、やがて必然として、愛の国ガンダーラへと向かう事になる。

有史以来、あらゆる人の営みを見守り、受け入れ続けたガンジスの流れ。

それを目にした青年の中で、全てのわだかまりが氷解していくかのようだった。

己を殺し続けた故国では得られなかった、何とは無しの充足感。

青年は当初の目的も忘れ、ただぼんやりと大河の行く末を眺め続ける日々が続いた。

ある日、青年は水面に映る自分の姿を見出した。

そこには確かに、かつて自分の探し求め続けた『彼ら』の姿があった。

反射的に手を伸ばすと、たちまちに水面は乱れ、彼らの姿は乱れて消えてしまう。

ようやく出会えた兄弟たちの影。

何とかして形にして、直に触れてみたい。

そう考えた青年の脳裏に閃くものがあった。

かつてヤマモト少年は、己を殺す以外にもう一つだけ特技を持っていた。

それは、ガンプラ作り。

内向的な少年の繊細な指先は、自分でも驚くほどに丁寧に機体を組み上げる事が出来た。

没個人的な生活を心がけながらも、何故だか捨て切れなかったささやかな趣味。

それすらも今は運命の一部と理解出来た。

青年が素体を選んだのは、西暦ガンダムにおける原初の神・Oガンダム。

日がな一日水面を眺め、安宿に戻っては機体に手を入れる研鑽の日々。

仏師のような毎日の果て、いつしか青年の手には、三面六臂の機体が握られていた。

神代の悪神アスラのような禍々しき鋼鉄の化身。

それが自身の内にある姿であるとは、にわかには理解できなかった。

だが、指先は告げていた。

これ以上は、何一つ加える事も削る事も出来はしない、と。

そう納得してしまえば、捨てた筈カルマの業がふつつつと沸いてくる。動かしたい。

この三神一体の機体と交わり、存分に暴れ回ってみたい。

その段になって青年はようやく、この神体が何故にガンプラでなけ

ればならなかったのかを知った。

日本に舞い戻り、町角で繰り返される青年の武者修行。

ヤマモト・イチロウがアスラを名乗り、非合法のガンプラ・ファイトに辿り着いたのもまた必然であった。

「カ……、カカ、酷い話もあつたもんよ。

三面六臂、こんな深刻なレギュレーション違反が、ニュータイプの一言でまかり通ろうとはな」

くつくつと自嘲をこぼしながら、アムロ・レンがかろうじて体を起こす。

ややためらいがちに一つ頷き、ヤマモトが訥々と語る。

「今日この日のために研鑽を積んできたアンタら格闘家には、本当に申し訳ないと思っっているよ。

だが僕も、どうしてもこの姿で心おきなく遊べるだけの舞台が欲しくてね」

そう一つ寂しげに笑い、六本の腕を舞うように構える。

「もう一度だけ聞くんが、ここらで幕にしないか？

武術とは対人を想定して生み出されたもの。

人ならざるこの神体を前としては——」

「たわけ」

パンパンとスカートの砂を払いながら、アムロが一言で斬って捨てる。

「つまらぬ玩具を出し惜しみしおってからに。

ここまですぬを殺さずに来た自分を、思い切りブン殴ってやりたいわい」

「……………」

「今日は遊びに来たのじゃろう、ヤマモトよ。

存分に試してみれば良いではないか？

うぬのお遊戯が、本物の武術相手に通じるかどうか、な」

ガンダムもどき、這いつくばって許しをこ——」

「くどいぞヤマモト！」

そんなにキンタマを潰して欲しいか？」

「——ッ 阿呆がア!!」

ぐるりと憤怒のガンダムフェイスが顔をもたげ、ファンタジーの終焉を告げる。

グツ、と握られた四つの拳骨が、今、古流武術の結晶目掛け——

「おすわり」

「……ッ!?!」

——放たれるかに見えた瞬間、唐突にアスラがどつかと尻餅を突いた。

『えっ? え……、え、ええ? 何、なに、えええ!?!』

シン、と静まり返ったコロッセウムに、MS少女の戸惑いの声が虚しく響く。

苦悶の表情を浮かべその場にへたり込んだ神の化身。

余裕綽綽で壁面に持たれる情けないMS。

唐突に観衆たちは、アムロ・レンかつてNTと呼ばれる少女であった事を思い出していた。

だとしたらこの怪現象もまた、少女の体を通して出る力に当てられた結果なのか。

あるいは何か、それこそ脳波コントロール的な……。

「……んなワケねえだろ、おっさん?」

ニュータイプだのバイオセンサーだの、宇宙世紀じゃねえんだからよ」

「だ、だったらあの光景は、一体なんだってんだよ?」

「点穴突き、あいつの得意技さ。」

もつとも、俺の時は足先だったがな」

言いながらリオがモニターを指し示す。

成程。

確かに手品のように動きを静止した両機は、その実、組み合った両の掌で繋がっていたのだ。

フン、といかにも忌々しげに空手少年が吐き捨てる。

「玩具を見せびらかしたかったのはアイツの方さ。」

アムロ・レンは最初から、ずっと一人でプロレスをやっていたやがったんだよ」

ワケが分からない。

突如、指先から背骨にかけて、煮え滾った鉛を流し込まれたかのような激痛に襲われた。

バランスを保てずたちまちに腰が砕け、あれほどにハッキリと感じられていた相棒たちも雲散してしまった。

「どうじやいやマトくん。」

オールドタイプ
古流の型もなかなか捨てたモンじゃあないじゃろ？」

頭上より、勝ち誇ったような少女の声が響く。

「しっかし本当に面白い奴じやのう。」

現実には存在しない偽物の腕にまで、こうして頸脈が繋がっておるとはな」

「け、けい……、みやく……?」

「篤人流捕術『紋殺』あやとり」

骨子術とも言うかのう。

本来は鏢競合いから組打ちに移る一瞬を穿つ技なんじゃが、初見殺しにはうってつけよ」

「~~~~~ツツツ!!?」

少女の指先に、くっ、と一段力が入る。

たちまち激痛が圧力を増し、傾いだ頭部より大粒の汗がこぼれ落ちる。

「……のう、ヤマモトよ。」

二度、少なくとも二度、今日のワシには致命的な油断があったわい。例えばうぬが、あのナガラ・リオのようなヤバイヤツであったなら、今頃ワシはとつくに三途の川を渡っておったわ」

「ぐぬ……、う？、が……！」

「武術を舐めんなよファンタジー。」

篤人の技は戦場技術。

三人がかりの素人程度、どうとでもなるわい」

「……っ があああッ!!」

ぞくり、と殺気が走り、全身全霊を込めてアスラが動いた。

身を灼くような激痛すらも乗り越える恐怖が、本能的にヤマモトを動かしたのだ。

瞬間、ふっ、と拘束が緩み、勢いのままにアスラが宙に舞った。

スロー・モーションのように回る世界の中で、ヤマモトは真紅になびく炎が踊るのを見た。

「ぐが……ッ」

バン、と顔面から石壁に叩きつけられる。

その瞬間、炎が明確な敵意をもつてヤマモトの首筋に絡みついてきた。

グツとアスラの肉体が反り上がり、その自重で頸動脈が締め上げられる。

(バカな……！)

ワイヤー、鋼糸の類か？

ありえない。

レギュレーションがどうこう以前に明確な反則。

(なぜ……、なんで誰も止めない……ッ!?)

「カ……、キャバ……ッ」

ささやかな抗議の声の代わりに、ヤマモトの口元よりあぶくがこぼれる。

その必死さが、しかし観衆にはてんで届かない。

何故か？

それは無論、アムロの攻撃が反則では無いからだ。

鍛えた己の肉体以外に得物を持つ事を許さぬガンブラ・ファイト。逆に言うならば、己の肉体に連なる全ての部位を、武器として使う事が許されている。

拳も、掌も、手首も、腕も、肘も、肩も、爪先も、踵も、膝も、脚も、指も、頭も、腹も、尻も、爪も、牙も――。

そして勿論、幼き頃より伸ばすに任せた真つ赤なしゃぐまも……。『カーツカツカツカツ!!』

『うええっ、なッ、ナッ、ナドレだアア――ツツツ?』

何と言うリ・ガズイ!? なんと言う悪魔超人ツ!!

メツトの下に、ヘルメツトの下にツ、信玄へアアを仕込んでいやがったアツツ!』

アムロ・レンが高らかと嗤う!

嗤いながら体を丸め、クロスした両腕を力一杯に絞り上げる。

たちまち連獅子のような赤しやぐまがぎゅるりと締め、背中合わせになったアスラの首が高らかと吊り上がる。

前代未聞。

相手の首をカツコ良く絞めるためだけに、HGリ・ガズイに植毛する女!

「……すまん、ヒライ。

どうやら俺の方が見当違いだったみたいだ。

アイツはやっぱり、どこかおかしい」

呆気にとられる観客席の片隅で、空手少年がぼつりと相方に語る。見立てが間違っていた。

あの天上天下唯我独尊少女が、反省したり尊敬したり、ましてや他人の機体を参考にするなど有り得ぬ話だったのだ。

敢えて機体をシンプルに仕立ててきた理由はただ一つ、今この瞬間のインパクトのため。

だが、当のヒライはふるふると首を振るい、リオとは真逆の見解を述べた。

「全然おかしくなんか無い。

ナガラ、あの首締めは、本当はあなたのために用意されたギミック」
「えっ?」

「間隙の少ないリーオーの首周りは、通常の裸締めでは攻めきれない。
けれど今度の勝負は観客の前。

あの時のように襷を使うワケにはいかない」

「ああ……」

言われてリオもようやく思い出す。

根平の野試合での一場面。

確かにリオは、愛機の襟元の構造のおかげで命拾いした事があった。
た。

「彼女の本心、気付いてあげなきゃダメ」

「……? あ、ああ」

ヒライのおかしな言い回しに戸惑いつつも、澁々ながらリオが頷く。

確かに普段のアムロは、人を人とも思わぬ傲慢さを見せる一方、自らの矜持に対しては燃え盛るような執念を見せる女であった。

ヒライの言う通り、あの女と相對しようと言うのならば、寸毫たりとも油断してはなるまい。

彼女の思惑を読み違えた時、その時は間違いなく自分が吊るされる番であろう。

「——ガンプラは確かに自由じゃ。

設定を無視して思うがままに改造して構わん。

ボディに綿を仕込んだって構わん。

ナンパの小道具にしたって構わん。

白スク水のファルシアをアツグガイに触手攻めさせたって一向に構わん」

「……ツツ!!」

既に虫の息となった背中越しの相手に、淡々と諭すようにアムロが語る。

「じゃがのうヤマモト。

残念じゃが、ここはワシらの遊び場じゃ。

自分探しならヨソでやってくれや」

ガクリ、と背面の抵抗が途絶えたのを確認し、アムロ・レンが両手を開く。

たちまち中空に燃えるような赤髪が踊り、糸の切れた人形がズシヤリと大地に落下する。

けたたましくもゴングが打ち鳴らされる中、鼻持ちならぬ少女は自慢のしゃぐまを掻き上げ、嗤った。

「カカカ、お約束じゃが、敢えて言わせてもらおうかのう？」

今宵のワシは阿修羅をも凌駕するヒロインよ」

敗者たちの栄光

——ガンプラ謝肉祭、2nd stage

八試合、全十六選手の死闘を終え、狂乱の宴もようやく折返し地点に差し掛かろうとしていた。

が、長きにわたる日々を飢えと乾きに耐え続けた、この救い難き格闘技オタクたちの熱情が、たかだか小一時間で萎えようはずも無い。

「よいしょー!」「よいしょ!」と——。

今また、仮初のコロッセオが一体感に包まれていく。

歓喜の輪の中心にいるのは、威風堂々たる金色のMFであった。

MRC—F20「スモー」

太い機体である。

かの工業デザイナー、シド・ミードがデザインした最初の「ガンダム」と言う、いわくつきの機体でもある。

そのあまりにガンダム離れた太さゆえ当然のようにボツを食らいつつも、やがて月の女王の守護者と言う大任を与えられて蘇り、動乱の時代を終戦まで戦い抜いた花も実もある機体である。

大前提として自由であり、作り手によって無限の可能性を与えられるべきガンプラ・バトル。

それでも今日、この場において、その黄金の機体を纏う事が許される戦士は、この日本に一人しかいない。

日の下開山、月天山。

現在の幕内における唯一の横綱であり、すなわち日ノ本最強の男である。

太古より、爾来、相撲とは強者のための闘技である。

かつては新弟子検査において身長175cmが規定とされ、それ以下の者は「見込み無し」「危険」として、部屋の敷居を跨ぐ事すら許されなかった。

そうして選り優られた土台の上に、十分な食事と休養、そして鬼のような猛稽古を重ね、角力に必要な巨岩の如き肉体を作り上げていく。

巡業は通年六場所、実に一年の内に百近い日々を闘争に明け暮れる事となる。

立ち合いは土俵を割るか、相手を土に付ける事を以って決着となる。

鍛えこまれた力士の体にそこから先を求めたならば、確実に相手を壊す結果となるからだ。

平均体重150kgを超す肉体のぶつかり合いは、確実に力士の寿命を縮め、一たび休場すれば容赦なく番付が落ちる。

戦い、敗れ、そして去り、やがて残った僅かばかりの上澄みの一滴に『神』が宿る。

——今、傍らに白銀の露払い、太刀持ちを従えた金色の機体が、天高らかと片足を持ち上げ、落とす。

ズン、と大地が揺れ、観衆たちが熱狂に沸き、コロツセオがたちまち国技館へと変わる。

(……………)

対面の入口。

会場の熱狂から取り残されたナガラ・リオが、スモーの一挙手一投足を醒めた瞳で見つめる。

相撲が強者の闘技と言うのなら、相対的に空手は弱者の牙と言う事になるのだろう。

身長160半ばに過ぎぬ発展途上の肉体。

もし少年の夢が角界の頂点だったならば、彼はその入口で頓挫する事となっていた筈だ。

だが、少年の行く先には空手道があった。

空手は、言い換えれば武術とは戈^{ほこ}を止む^す術、生存の為の技術。

建前上は老若男女の別を問わず、あらゆる理不尽な暴力を打ち払う刃であらねばならない。

そして、その建前を実戦の域でまで求めたのが亡父の空手である。

打撃の威力を個人差のある筋力では無く、骨の強かさに求める

巻藁、青竹、鉄砂掌——。

華奢で繊細な指先を、人間をぶつ叩くための鈍器に変えるため、幾

度と無く潰し、潰して骨格から叩き直す。

まさしくその修練は老若男女に平等、等しく地獄。

肝要なのは躊躇わぬ事。

凶器と化するまでに叩き上げたその五体で、立ちほだかる敵を容赦なく破壊する事。

死ぬ事を恐れず、殺す事を厭わず、死中に活路を求める。

人でなし、なれどそこまでの卑劣な覚悟を持つて、ようやく弱者は強者と互角。

窮鼠は初めて猫と立ち会う舞台に臨む事が出来るのだ。

「に〜し〜、り〜お〜、り〜お〜」

ベンスンナムの朗々たる呼出に浅く一礼し、白銀のリーオーが闘技場に足を踏み入れる。

相撲のしきたりなど知る由もないが、やる事はしよせん殴りっこ。

過度の儀礼は不要であろう。

強者の闘技、一たびぶつかれば当然のように横綱が勝つ。

だからこそ負けられない戦い。

未だ模索中の新生永楽流とは言え、その理念まで捨てるつもりは無い。

「……！」

そう確固たる信念を宿した足が、不意にピタリと止まる。

山があった。

少年の視線の先、闘技場の中心に不動の泰山があった。

腰を落として左手を突きだし、臨戦態勢に入った金色のスモー。

その距離、およそ6、7メートルと言った所か。

公式発表で185cm、138kg

角界においては意外にも瘦身ソツプに数えられる横綱であるが、巨体とのぶつかり合いに耐えるべく隆起した鋼の上体はスモーの体格と合致して、見上げるような威圧感を以ってリオの視界を圧迫する。

身長にして20cm、体重にして60kg超と言う絶望的戦力差。

勝利を欲するならば、進んで間合いに踏み込まねばならぬ小兵であ

るが、しかしリオの本能は、その定石を拒絶する。

ここから先は横綱の土俵、決して自ら分け入ってはならぬ、と。

(……自惚れも張合いもしねえ。

それでも最後に立っているのは俺だ)

ザッ、ザッ、と左足で砂を掻き、何度も何度も足元を踏み固めて半身をとる。

間合いの遙か外、果敢なる空手少年の見せた臆病とも取れる行為に、観衆がわずかにざわめく。

だが、これこそが現実の姿である。

かたや当代随一の名機として、黒歴史に封じられた兄弟たちを相手に真つ向戦い抜いたスモー。

かたや凡庸な量産機である事のみを唯一の個性に、混沌のACに幾多もの歴史を刻んだリーオー。

両機のルーツにまつわるドラマが、そのまま現在の男たちの立場を象徴する。

時間一杯。

両者の闘志を確認し、直垂烏帽子のベンズナムがゆるりと軍配を差し出す。

「発気揚々……、のこったッ！」

さつと軍配が翻り、瞬間、空気が爆ぜた！

一回戦とは逆、横綱が自ら動いた。

「……………」

リオが瞠目する。

元より短期決戦の相撲、その巨体に反した瞬発力の高さは重々承知している。

だがそれも、直径6、7mの狭い円に限定した話だと思っていた。

それがどうだ。

敵はその重戦車の如き巨軀を暴風に変え、恐るべき猪突で迫ってくるではないか。

力士とは皆、こう言う怪物なのか？

あるいはこの横綱だけが特別なのか？

兎に角、決断しなければならぬ。

迫りくるデカイ顔。

半身に取った構え、左右への回避は至難。

さりとて後方に退けば、たちまち二ノ足、三ノ足に押し切られる。前に進むしかない。

ファースト・コンタクト、問題は何を――

「シャッ！」

「ツッ!？」

解答は用意していた。

足元のキメ細やかな砂粒を掻き分け、あらかじめコテコテに踏み固めていた土団子。

そいつをヒライ謹製の爪先で、スモアの顔面目掛けてハネ上げた。

たかだか目潰し、怯むような横綱ではない。

だが、寸傲であつても心は乱れ、その攻意には見逃し難い雑身が混ざる。

小細工。

たかだか男二人の命運を一瞬にして分かつ程度の小細工。

「ウヌツ」

今、まっすぐに差し出された太く逞しいスモアの諸手が、虚しく空を切り――

――バツキヤアツツ

刹那、重厚な金属同士の衝突音が、闘技場の中心で炸裂した!

渾身のハイキック。

スモアの、横綱のブ厚い顔面を真横、至近から思い切りぶつ叩いた。

一呼吸遅れて、わっ、と観衆が声を上げる。

上体を目一杯に反り返し、弾かれたバネの如く叩きつけられた鋼鉄の足。

完璧な一撃だった。

戦術、実践、タイミング……、初めての対戦、ファーストコンタクト、この一瞬でしか極められない会心の一太刀であった。

もう一度やれと言われても二度とは出来ない。

これをやられては、体格、タフネスの差など何の意味も成さない、それほどの完全な立ち合い。

「――！」

……ただし、それも相手が横綱でなければ、の話だ。

たったの一つだけ、状況が月天山に利した。

立ち合い、前に出て、押し合い圧し合うのが仕事の相撲取り。

先の瞬間、空手家の殺気を浴びた横綱の肉体は、本能的に前に出る事を選択した。

結果、打点は僅かにズレ、鼻骨を砕き、あるいは人中を穿って浸透するはずだった空手屋の打撃は、力士の分厚い額の鉢に受け止められる形となったのだ。

奇跡、とも呼べぬほどの、ほんのちよつとの利。

日々のテツポウとぶつかり稽古に支えられた太い頸は、その奇跡に良く応えた。

ギリリ、とリーオーの足の下でスカーフフェイスが煌めき、直後、山が再び動いた。

グラリとよろめくりーオーを追って、金色の巨体がその暴威を増す。

「ヌンッ！」

「オォー！」

豪腕、横綱の攻め手は右の張り手。

対するリーオーは空手家の定石、廻し受け。

真横から呻りを上げて飛んでくる右掌を、内側から精一杯に払い上げる。

重圧がかろうじて逸れ、通過した掌風がリオの両頬をビリビリと叩く。

（これが、土俵の鬼……！）

ぞくぞくと全身の皮膚が泡立つ。

捌き切った筈の左腕が痺れるほどの重腕。

（あの蹴りが、効いていないっていいのか？）

湧き上がる弱気を必死に打ち消す。

そんな筈は無い。

自惚れるつもりはさらさら無いが、鍛えに鍛えた空手の技が、ただか体格程度に覆されては堪らない。

ダメージは、間違い無くある。

だからこそ相手は前に出て来るのだ。

角力の生命線は、脚。

一たび前に出る脚が止まってしまえば、筋肉ダルマも百貫デブもさしたる違いは無い。

距離さえ取れば、空手屋の打撃は巨漢の肉体を容易く破壊する。力士にとつての安全圏は、相手の懐の内側のみ。

(だったら……、追撃だろー！)

後ろ足を踏ん張って、リーオーが必死に大地に踏み止まる。たちまちスモーの上体が廻る。

左の張り手。

対するリーオーは右のクロス、狙いは再び頭部――

――ゴッ

(……ッ!?)

と、前に出ようとしたリーオーの体が、不意にガクリと沈んだ。

一瞬、何をされたのか分からぬままに、下半身から力が抜けた。

ブレる視界の先に横綱を捕らえ、それでようやくリオは事態を把握できた。

想定外。

横綱が蹴った!!!

正確には、左膝を外側から思い切り払われたのだ。

蹴手繰り。

完全に決まれば100kgの巨体が尻餅を突くほどの不意打ち。

咄嗟に腰を落としてリーオーが踏み止まる。

残ってしまったて臍を噛む。

倒れちまえば良かった。

そうすれば少なくとも、今の危険なスモウ・ルールからは脱出できた。

見ろ。

リーオーの顔を叩きに来ていた筈の太い手が、いつの間にか下から迫って来ている。

左の下手。

身動きの取れないリーオーに組付いて、一息にブン投げちまう腹だ。

どうする？

どうする!?

どうするッ!?

「チィィッ」

パン!

乾いた音を立て、二つの機体が初めて静止する。

オオオ、とコロツセウムに動揺が走る。

空手家の右手。

力士の大きな左手を、更になら掴み取っている。

体重70kgそこそこの少年が、横綱の巖のような肉体を、片腕一本で制している。

『と……ッ とツたアアアア——ッツツ!!』

空手少年の十八番、指取りッ!

横綱の太い掌を、上から潰しにかかったア!!』

ざわりと観衆がどよめいて、観戦中のファイターたちの間でも驚愕の声が上がる。

「バカな! 相手は四分の一トンを押しきつちまう関取だぞ!?

たかだか握力が凄エ程度で、横綱の電車道を止められるモンかよ!」

「そりゃあ無理じゃろうの。

殴りっこ以外に取り柄の無いナガラ・リオ。

普通なら質量で押し切られるわい」

ふう、と呆れたようにアムロ・レンが首を振るう。

「——横綱の左手が、ヤマさえ行つて無けりゃあ、じゃがの」

(……やっぱり、左手をやつていやがったか)

ある種の確信を込めて、リオが右手を一杯に握り締める。間近に迫ったスモアのデカイ顔。

だが、その威圧感の裏側に、苦悶の表情が宿っているのが機体越しにも感じ取れる。

(そりゃあそうだろうよ。

熊に噛まれたんだ、アレで無事なら人間じゃねえ)

「ヌウン！」

激痛を押し切り、月天山が空いた右手を振り被る。

応じたりオが右手を返し、たちまち左手を捻じられたスモアの体が反り上がる。

「このまま休場してもらうぜ、横づ——」

ガラ空きとなった顔面に拳をブチ込もうとした瞬間、不意にリーオー右手が爆ぜた。

手の内でみちみちと膨らんだ何かが飛び出し、同時に渾身の体を浴びた。

息が詰まる。

意識の不意を突かれた隙に、ぐっとスモアに腰元を引き寄せられる。

(馬鹿な……)

一瞬、思考が真っ白になる。

取られてしまった、左の上手。

完全に相手を制していた筈の右腕が、いつの間にか門に極められている。

(……いや、だからか)

横綱は、左手をまともに動かせないほどの重傷を負っていた。

それだけは間違いない。

だからこそ、本命に使えた。

激痛を乗り越える信念すらも計算に入れた戦術で、ナガラ・リオの油断を誘う事が出来た。

「ウオオオッ!!」

引き寄せられた勢いのまま、かざした左肘をスモアの顔面に叩き込む。

手応え十分、だが、半身を抑えられている以上、横綱相手には心許ない一撃。

たちまち太い腕がリーオーの左脇を潜り抜け、その上体を抱え上げられる。

わっ、と再び観衆が沸く。

がっぷり四つ。

万事休す。

こうなってしまうえば大人と子供、逆転の目など、無い。

(けどよオ、ここを乗り切らなきゃあ話にもならねえ)

ぎりりと奥歯を噛み締めて、金色の頭部を眼下に見下ろす。

想定範囲内、とは言わない。

だが、少なくとも覚悟はしていた。

相手は日の下開山。

簡単に土を付ける事など出来はしない。

最悪、組み付かれて一投げされるのも止むを得まい、と。

(……だが、ブン投げたその後で、俺がまだ生きていたらどうなる?)

これまで、バリー・トワードと言うルールの中で、あくまでも相撲縛りで戦い抜いてきた横綱。

投げ飛ばしたその後で、もしもまだ相手が戦意を失っていないなかったなら、その時こそ初めて月天山は、未知の戦場を知る事となるだろう。

次の一撃、何が何でも耐えきってみせる。

腹を括ってその瞬間を待つ。

問題は受身、対応できるか?

読みきらねばならない。

横綱の選択。

横に払うか、叩き付けるか、それとも体ごと浴びせてくるのか――

?

「……ッ!」

不意に、その時は来た。

晴天の霹靂。

横綱、望外の選択。

払わ……、ない、叩き付け……、ない、動か……、ない。

「~~~~~ツツツ!!?!」

腰元に廻ったスモールの太い両腕が、力一杯にリーオーを締める。

たちまち胃袋が喉元から飛び出しかねないほどの圧迫感がリオを襲う。

横綱が選んだ最善手、それは鯖折り。

歴戦の月天山は知っている。

いかな怪力があるうとも、不動の相手を投げる事は容易では無い。相手を投げ飛ばそうと思ったならば、まずはその前に崩さねばならない。

力で相手を動かすか、あるいは逆、その崩しにかかる敵の動きに乗るか。

小兵、ナガラ・リオの一縷の望みは、まさしくその横綱が動く瞬間にあるのだ、と。

今、敵を仕留めに動く事は、十中八九、手中に収めた勝利にひびを入れる行為に他ならない。

これ以上の勝機は、万に一つも相手に与えない。

この小癩な小僧は、このまま腕の中で圧殺する。

冷徹な程に貪欲。

これが角界の頂点、本物の横綱相撲。

(……と、アンタは思いたいかもしれないが、苦し紛れが見え見えだぜ、横綱ア！)

食いしばった口元にい、と歪め、ナガラ・リオが力尽くで啜う。

上手を取ったスモールの左手。

下手を取ったスモールの右手。

そのちぐはぐさに、横綱の必死さが顕れている。

もしも今、スモールの両手が下手を取っていたならば、リオは抗う時間も無く腰骨を折られていた。

逆に両腕を門に極められていたならば、リオは抗う術も無く両腕を折られていただろう。

なぜそれをしなかったか。

答えは簡単、出来なかったから。

完全無欠に見える横綱もまた、空手家、ナガラ・リオの殺気を前に、この体勢に持ち込むのが精一杯だった、と見るべきであろう。

左腕一本。

いずれにせよその一本分だけ、リーオーはまだ反撃の余地を残している。

とはいえそれは、大地を失った手打ちのパンチ。

拳骨より遥かにブ厚い頭骨を砕く事など叶うまい。

(……だが、やってみる価値はありますぜ、ってヤツだな)

天高く振り上げた左の拳。

中指の第二関節を折り曲げ凶器に変える。

狙いは半球状の頭部の中心――。

「シィアッ」

「――ッ!？」

ビギン、と鈍い音を立て、スモ―の体がビクリと硬直する。

ナガラ・リオの狙い。

それは泉門、すなわち脳天。

重大なる脳機能を守るべく、人体でも一際頑丈に作られている頭蓋骨だが、その構造は実は一体物ではない。

狭い産道を潜り抜ける際に、どうしても大きすぎる頭部を歪めて出てこなければならぬ。

頭骨上部にはその時の名残、消し難い関節縫合の痕がある。

空手家の鍛え抜かれた指先ならば、存分に穿つ事が出来る。

(どうせなら、大銀杏も作り込んでおくべきだったな、横綱)

再び拳骨を振り上げた瞬間、不意に圧迫が増し、胃液と鼻血が同時に噴き出した。

「ギャガッ!!」

横綱の逆襲。

抱え込み、吊り上げ、後方に落とす。

超重量同士がぶつかり合う現代大相撲では見られなくなった大技。

とは言え、両者の階級差はおおよそ二倍。

ナガラ・リオは、このような変化も当然考慮に入れて置くべきだったのだ。

迂闊。

相撲四十八手、こう言う可能性がある事を全く想定していなかった。

後悔が間に合う筈も無く、垂直に持ち上がったリーオーの体が後方に傾く。

だが、刹那の世界の中で、ただ一つだけ幸運がリオに味方した。

リオの意識は、確かにこう言った事態を想定していなかった。

だが、それでもリーオーの肉体は、この状況に見事に対応して見せた。

四月の戦い以来、ナガラ・リオはずっと、ある一事を胸に特訓を重ねてきた。

すなわち、プロレスへの復讐^{リベンジ}

プロレスラーに勝つ事。

プロレスラーの投げに耐える事。

その想いが胸から消えた事など片時たりとも無かった。

たった一つの執念。

たった一つの幸運。

積み重ねた修練に肉体は良く応え、かろうじて受身が間に合った。

「ガハッツツ!!」

とは言え下は砂地、マットのようにはいかない。

全身に虫が這うように痺れ、五体の自由が効かない。

煌めき揺らめく幻想的な星空の下で、ぬうつ、と一つ死の影が差す。分かつている。

このままでは138kgに顔面を踏まれる。

(脱出——！)

ごろんごろんと必死に転げ回り、かろうじて体を跳ね上げさせる。

同時にズン、と一つ大地が揺れる。

(反撃！)

そう思い、攻勢に出ようとしたリオの肉体がビクン、と固まる。脊椎に直接氷柱をブチ込まれたかのような本能的な恐怖。

父の教えも空手の技も忘れ、咄嗟にリーオーが大きく飛び退く。

3メートル、5メートル、7メートル――。

狂犬が見せた無様な退却に観衆がざわめく、が、誰もがすぐにその理由を理解した。

仕切り直し。

大横綱・月天山が四股を踏み、再び臨戦態勢に入っていた。

――状況は、振り出しへと戻っていた。

仕切り直し、再び深く腰を落とした金色のスモ―。

今度は真の意味での『山』だ。

再びこの体勢に入った以上、自分から動く事は無い。

リーオーが必殺の間合いに踏み込んで来るまで、いつまでだって待つつもりだろう。

一方のリーオーはだらりと両手を下ろした無形の位。

策がある訳では無い。

わずか一分に満たぬ死闘の中で、使える技は全て使い尽くしてしまった。

何をどう構えて良いのか分からない。

全く同じ状況、なれどその天秤は一方へと大きく傾いていた。

「あく……、こうなつちまつちやあ、小僧には分が悪いはなア」

ボリボリと後退の進んだ頭を搔いて、ビッグザム剛田が溜息を吐く。

「へっ、何をホザいてやがる。」

対策なんざア、立てるまでも無いだろうがよ」

「ほぅ、その心は何じゃ、ブラジルの？」

からかうようなアムロの言葉に、クルスの瞳が快活に煌めく。

「別にこっちからは何もする必要はねえつ、て話さ。」

横綱が諦めてくれるまで、何時間でも寝て待ちやアいい。

オーデイエンスは非難轟々だろうが、なあに、ダメージがデカイのは守る物の多い方さ」

「ご明察じゃのお、ジョージよ。」

何だってそれが自分の試合じゃ出来んのじゃ?」

アムロは呆れたように溜息を吐いて、その視線をモニターを見つめるヒライへと向ける。

「ヒライ、うぬはどう思う?」

リオは待つかの? 待てるかのう?」

「……………」

「……………まあ、待てぬ、じやろうのう?」

アレは空手家として純情すぎる。

武術家としては失格よ」

・
・
・

(……………光栄だよ、横綱)

ふう、と大きく深呼吸して、虎の子が虎穴に踏み入る覚悟を決める。

先の立会いでは、横綱自ら危険を承知で、リーオーの間合いに入つて来てくれた。

対等の戦士として、今度はこちらから返礼しない訳にはいかないだろう。

第一、目の前に立ちはだかる者は片っ端からブチのめすのが亡父の教えてくれた空手。

その基本事項の前には、武術家の禁忌など些事に過ぎる。

腹を括って男らしく攻める。

問題は、どの構えを選ぶべきか。

真っ先に考えついたのは、真っ向勝負の正拳突き。

シンプルにして至高。

迫りくる横綱の全体重にタイミングを合わせ顔面を打ち抜けたならば、その衝撃は十分。

今度こそ確実に一撃必殺を見込める筈だ。

だが、あのブ厚い頭部に繊細な指先を叩き込んだならば、カウンターは成否を問わず、リオの右手は確実に反動で粉碎する。

良くて、相打ち。

ハイリスクノーリターン。

鋭い一撃がいる。

重い鉄槌のような拳では無く、一息に相手の意識を刈り取れるような……。

『リーオーの骨格を作る。

強固なフレーム同士を連結させて、骨の頑丈さと関節のしなやかさを両立させる。

折れず、曲がらず、日本刀のようなMF——』

ふっ、と脳裏に興奮気味のヒライの姿が浮かび、思わず体の力が抜ける。

さすがはヒライだ。

この大一番で肉体の固さをすっかり取り払ってくれた。

(日本刀……、なってみるか、俺も)

ゆるりと上体を捻じって半身を取り、後ろ手に備えた右を高らかに掲げる。

あきららかに実戦離れた不適な構えに、ざわざわと周囲がどよめく。

ナガラ・リオの選択は、右の手刀。

スモールの突進を正面から打ち返すのではなく、斜め上方から一息に斬って捨てる。

その狙いは脳天か、さもなれば鎖骨。じりり。

右手を掲げた体勢のまま、爪先だけでゆっくりと距離を縮める。

シン、と張りつめた空気が会場を支配する。
甚常の立ち合いではない。

縮み行く世界の先にあるものは、一撃必殺同士のぶつかり合いのみ。

これはさながら、古の剣豪同士の真剣仕合のような――。
じりり。

リオを包む空気が変わった。

殺意が一層の重さを増して、ずしりと少年の両肩を苛む。

横綱の土俵に踏み込んだのだ。

ここから先は、いつ横綱が突っ込んできても不思議では無い。

じりり。

気押されてはいけない。

意識し過ぎてはいけない。

過度の肉体の緊張は、次の一撃に必要な疾さを容赦なく奪う。

指先の震えを悟られた刹那、たちまち横綱渾身のぶちかましを浴びる結果となるであろう。

じりり。

自然体。

重要なのは、横綱の思考を読み切る洞察力。

どのタイミングで踏み切ってくるか。

両者の距離が遠ければ遠いほど、横綱は十分に加速を付けた体を浴びせる事が出来る。

だがそれは同時に、リオに対してもカウンターの猶予を与える事となる。

じりり。

カウンターを警戒するならば、リーオーがギリギリまで近付くのを待った方が良い。

リーオーの一足一刀の間合い、その僅かに外が横綱にとってのベスト。

だが、その決め打ちを読まれてしまつては、リオに新たな手札を与える事となる。

ファースト・コンタクトの際の奇襲、横綱は忘れてはいない。
距離を必要以上に潰す事は、月天山にとっても危険な行為であるの
だ。

じりり。

大分、横綱の顔が大きくなってきた。

既に、通常の相撲の立ち合いに近い。

ここから先は思考を捨てる。

ただ、ゆつくりと上下するスモアの胸元に、己の呼吸を合わせる事
に専念する。

じりり。

胸元が膨らむ。

胸元が縮む。

胸元が膨らむ。

胸元が縮む。

胸元が膨らむ。

胸元が縮む。

胸元が膨らむ。

胸元が縮む。

胸元が膨——

——ダン、と砂地が爆ぜてスモアが動く。

——放たれた矢の如く、リーオーの右手が疾る。

交錯する二つの機体、月光の下に閃光が煌めいて——

「ガアツツ!!」

爆音と同時に、リーオーの体が中空に舞った。

格闘技と言うよりも、それは悲惨な交通事故。

土俵際をも飛び越えて砂が踊り、その五体が不自然にバウンドす

る。

決着！

誰が見ても明白、勝ったのは横綱。

『~~~~ツ！ 勝負あ——』

MS少女がゴングを打ち鳴らそうとした瞬間、ガクン、とスモーが片膝を突いた。

あつ、と観衆が叫ぶ。

スモー自体が、信じ難いと言った様相でパンパンと右脚を叩く。

だが、角力を支え続けた太い足は、まるで別種の生物のように痙攣してビクともしない。

斬っていた。

リーオーの一閃は袈裟掛けにスモーの顎先を薙いで、月天山の脳を存分に揺らしていたのだ。

同時に別方向から歓声上がる。

動いている。

胸甲の潰れたリーオーが、その全身を震わしながら、必死に上体を起こそうとしている。

高らかとハンマーを掲げたまま、MS少女がおろおろと両者を見返す。

膝を突いたスモー、壁際へと這いずるリーオー。

両者の闘士はまだ消えていない。

こんな状況でゴングを鳴らす訳にはいかない。

(手応え……、アリだツ！)

両肩を目一杯に震わしながら、リオが会心の笑みを浮かべる。

十分に脱力したリーオーの右手は、その役割を良く果たしてくれた。

先に当たったリーオーの手刀。

一瞬のインパクトの時間差が、横綱のぶちかましの威力をちよつぴりだけ削いでくれた。

そして力の抜け切ったリーオーの五体は、横綱の圧力に抗う事無く、思い切り飛ばされる事でダメージを更にちよつぷりだけ殺してくれた。

僅かの差。

そのほんのちよつぷりの積み重ねに支えられ、リオは未だ戦場に留まる事が出来ているのだ。

(とは言え、急がなきゃならねえ……)

両肩を外壁に押し当て、支えにしながらずりずりと体を起こす。

横綱はおそらく軽度の脳震盪、脳の揺れが収まれば直ちに逆襲が来る。

一方、リオとリーオーのダメージは深刻である。

これ以上の戦闘続行はどう考えても不可能。

だからこそ、一刻も早く立ち上がらねばならない。

一秒でも、コンマ一秒でも横綱より早く立ち上がらねばならない。

先に立って止めを刺す。

それが出来なければ、もはやリオに勝機は無い。

『強固なフレームの上から、比較的柔らかな外装を重ねる。』

国産車のフロントと理屈は同じ』

ぶつ、と思い出し笑いが吹き出し、折角下半身に込めた力がガクガクと抜けていく。

国産車。

ヒライ・ユイは現在の事故現場すらも想定していたのだろうか？

あるいは奴の家には、ゼロシステムでも存在していると言うのか？

(……俺も、トラックに轢かれる訓練をしておくべきだった)

下らぬ思考を振り払い、死ぬ物狂いでリーオーが体を起こす。

兎にも角にも、今のリオはツイている。

壁際まで吹っ飛ばされた。

そのおかげで今、リーオーは壁を背に立ち上がる事が出来る。

「ぐうっ！」

ダン、と壁を叩いて体を引き剥がす。

たちまち視界が揺れ、足元が泳ぐ。

腰を落とし両手を膝頭に突いて上体を折る。
ぜえぜえと、まるで自分のものとは思えない荒い吐息がリオの口からこぼれる。

立った。

何はともあれ立ち上がる事が出来た。

(横綱は……、どうした?)

敵の姿を探し、顔を上げる。

その視界が、ぬうつ、と黒い影に塞がれる。

「あ……」

山があつた。

金色の山が、今、リオの視界の先に悠々と立ちはだかっていた。

くしゃやくしゃになったリーオーとは対照的に、まるで死線を潜り抜けたとは思えない雄大な体。

視界を遮る185cm、138kg

背後は壁、逃げる場所など、無い。

決着。

どうしようもない詰みの形。

(……死ぬには、良い日だ)

ふう、と一息を吐いて拳の形を作る。

拳を握り、戦いの意志を捨てない限りは、最後の最後まで勝利の可能性が残されている。

父の教え。

死を覚悟するのは諦めでは無い。

たとえ命尽きるとも、その最期の瞬間まで闘い抜くと言う、不退転の決意。

策は、無い、余力も。

後はもう、鍛え続けた肉体に全てを――。

「……………」

妙だ。

土俵の鬼の鬨気。

近寄るもの全てを叩き伏せんばかりの裂帛の気合が、眼前のスモ―

からはすつぽりと抜け落ちている。

目の前のMFは、もはや戦士とは、力士とは呼べない。

ゆつくりとスモーが太い手を差し出し、リーオーの歪んだ胸甲の上を撫でる。

されるがままに、リオが体を預ける。

今さら小細工をするような男ではない。

力士の肉体には、武術家のような配慮は必要ないのだ。

「凄いな」

ポツリ、と月天山がこぼす。

「外装こそ大きく歪んでいるが、それでも骨格の方は良く堪えている」

「……相方が、そういう風にしてくれたんだ」

「それと、丈夫に生んでくれたご両親も」

「そう、ですね」

スモーの掌が、やがてリーオーの拳を撫でる。

しみじみと月天山が溜息を吐く。

「この分厚い手が、自分に膝を突かせたんすか……」

嗚呼――。

その一言でようやく分かった。

戦いの決着は、とうの昔に着いていたのだ。

スモーがリーオーの右手を掴み、高らかと観衆に掲げる。

それではやく事態を把握した観客達から、ちらほらと拍手が上がり始める。

ナガラ・リオは空手家、言い換えれば武術家だ。

武術とは闘う事、生き延びる事。

どれほどに倒されようとも、立ち上がり、戦う意思を捨てない限りは敗北では無い。

だが、月天山は横綱、相撲取り。

相撲とは、格闘技であり、神事であり、興業である前に、どうしようもなく相撲なのだ。

角界の頂点が素人よかたに膝を突かされたならば、それはもう敗北以外の何物でも無い。

「あ——！」

ザツ、と踵を返し、横綱の背が遠くなる。

咄嗟に手を伸ばしかけ、しかし何も出来ないままに虚しく下ろす。

勝敗は明白なのだ。

どれ程に無様で、惨めで、不本意な勝利であったとしても、勝者が敗者にかける言葉が在る筈がない。

ずんずんと大地を揺らし、泰山が去っていく。

ただ、夜空に輝く柔らかな月光だけが、勝者と敗者を平等に照ら出していた……。

ガチぴよん大勝利！ 希望の未来へレディ・ゴーツ！！

ビッグザム剛田。

タフな男である。

とあるプロレスファン曰く『日本のパウンド・フォー・パウンド』
パフォーマン스에秀でたレスラーがいた。

空中殺法を得意とするレスラーがいた。

グラウンドに長けたレスラーがいた。

何でもできるレスラーがいた。

にも拘らず、自称プロレス通たちが日本一強い男として名を上げるのは、ひたすらに耐えて、吠えて、投げる事しか出来ないゴウダなのだ。

そんな北海道の生んだ究極のタフガイではあったが、今大会での前評判は著しく低い。

理由は簡単、受け過ぎるから。

ひたすらに耐えて耐えて耐えて、相手の輝きが最高潮に達したその瞬間を叩き伏せる。

それ以外の闘い方を知らぬ42歳。

いかに強くとも、ワンデイトーナメントとの相性は最悪であろう。そして概ね、ここまでの展開は周囲の予想通りである。

ビッグザム剛田は例の如く、アメリカの生ける伝説を相手に精も根も尽き果てるような一戦を演じてしまった。

一方、次なる対戦相手はと言えば……。

『やつほくつ 二回戦もガンガンいっちゃうよー！』

タイヤで来た！

史上最強の5歳児、ガチぴよんがインラッドでやって来た。

かつてのモトクロスチャレンジを思い出させる見事なタイヤさばき。

たちまちコロッセウムに歓声上がる。

強者揃いのトーナメントを勝ち上がってきたとは思えない澆刺とした姿。

体を傾け鮮やかなマックスターンを決めるグリモアの雄姿に、歴戦のバイク乗り達からも溜息が洩れる。

日本着ぐるみ界のトップ・アイドル、ガチびよん。

お茶の間に夢と希望を届ける子供たちのヒーロー。

その冒険に、カメラの前では何一つ失敗は許されない。

何事も盤石に、完璧に、綿密なる下準備を重ねて事に臨むチャレンジャー。

台本もセメントも、アドリブも裏切りも反則も偶然をも呑み込んでドラマを刻むプロレスラーとは、真逆のエンターテイナー。

『ハイハイ！』

副音声ではワタクシことモツプが、メトロシティ現役市長のギンザエフ氏をお招きして、ガシガシ解説しちやいますぞ〜』

「ウム、宜しく」

特設の実況席では、ガチびよん永遠のパートナー、モツプの舌が冴え渡る。

彼もまた紛れも無くプロである。

単にガチびよんを応援するのみならず、ゴウダの旧知を抜け目なく解説に引き込むバランス感覚が光る。

『はてさて、それぞれに持ち味を活かして初戦を勝ち上がってきた両者。

いよいよ二回戦屈指の人気カードを迎えようとしているワケであります、

今後の展開、どういった所に注目していけば良いんでしょうかねえ？』

「やはりポイントは、ガチびよんの攻めをゴウダがどこまで凌げるか、と言う点に尽きるだろう。

一回戦をほとんど無傷で突破したガチびよんに対し、ゴウダの方は既に満身創痍。

まあ、それだけにヤツにとっては、おいしい状況とも言えるんだろ

うが」

『プロレスラーの修羅場が見れるぞ、と言う事ですな。

アワワ、ガ、ガチぴょくん!? 無茶だけはいけませんぞ〜!』

グリーングリーンと両目を回し、おどけた仕草でモップが叫ぶ。

ギンザエフは口元を思わず緩め、しばし、ガチぴょんとMS少女の遣り取りを見つめていたが、その内にふっ、と思い出したように口を開いた。

「しかし、意外と言うか……。

日本でのゴウダの評価には、少々戸惑いを感じているよ」

『ムムム、それは一体どういう事なのでしょう?』

「天性のタフネスに任せた大雑把なファイト。

今ならそれがゴウダの本領である事も理解はできる……、できるのだが。

我々、古いプロレスファンの間での認識は少し違う。

少なくとも二十年前のCWAにおいて、プロレスラー、ゴウダ・カオルとは——」

ざわり、と客席の空気が変わるのを感じ取り、ギンザエフの口が止まる。

果たして対面のゲートには、渦中の人物が姿を現した所であった。

AGE—ONEタイタス・NOAH

太い機体である。

ただの魔法少女の強化パーツにしておくには、あまりにも惜しい機体である。

観客たちは、ようやく理解しつつあった。

理屈では無い。

このガンダムは、プロレスラーがガンプラバトルを行うために地上に遣わされた機体なのだ。

だが今や、そんな太い頸も、肩も、胸も、紺色のフードにすっぽりと覆われているではないか!

ズン、と太い足が大地を踏みしめる。

その度に右肩に負った鈍色の鎖がギヤラギヤラと音を立てる。

後背の重厚な棺桶が引き摺られ、ずるり、ずるりと砂地に深い溝を刻む。

その後ろ姿は、さながらゴルゴダの丘に登る咎人の如く。

『ゲエ——ッ!』

な、なんなんですか？ あの不気味な格好は!』

『あ、あの姿はまさかッ!』

ゴウダ幻のアメリカ遠征時代、伝説の棺桶マッチの再現なのかア——ッ!』

突如オーガニック的な力が働き、主音声、副音声の間で会話が成立する。

普段の飄々としたゴウダの姿からは考えられない不吉な足取り。

ざわざわと会場にも動揺が伝搬する。

知っているようで誰も知らない、ビッグザム剛田のアメリカ遠征時代。

舞台中央、ばざりとフードを脱ぎ捨てたタイタスの姿に、あつ、と会場が戦慄する。

歪んだ顔があった。

ひび割れたフェイスマスク、くたびれ砂に塗れた胸甲、無残に折れたアンテナ。

第一回戦、伝説のボクサーとの死闘の爪痕を、何一つ隠さずにやって来た。

悲愴極まりないタイタスの巨体が、ゴウダのらしからぬ寡黙な演技と相俟って、コロッセオに異様な雰囲気醸し出す。

「……ケツ、昭和プロレスのおっさんもよくやる」

緊張する観客席を尻目に、呆れたようにクルスが呟く。

「あの野郎、少し前までピンピンで空手小僧とダべってたじゃねえかよ?」

いくら何でも芝居がクサすぎるぜ」

「それも、今となってはどうだかね。」

ゴウダの旦那は、受ける事に關してだけは一級品だから」

言いながら、後背のモーラがやや真剣な面持ちでモニターに臨む。

「効いているフリ、効いていないフリ、どっちだってできる。」

とは言え、あのビッグザムがそこまで今大会に勝ちたかつたとは、少しばかり意外だよ」

「……？ 何だよ、そりゃ？」

「同業者にしか分からない機微があるって事さ、超実践武術のぼうや」

バン！ と、タイタスが勢い良く棺桶を蹴る。

反動でばかりと開いた蓋の上に、グツ、と太い親指を落とす。

ガチぴよんは、無言。

無形無謬にだらりと弛緩し、茫漠とした瞳でタイタスを見ている。ぐにやり。

両者の間合いが縮むかのように空気が歪む。

『ガ、ががガガチぴよくん、クールに、クールですぞおく……』

モツプ決死の声援が、儚く宙に消えていく。

濃密な空気に耐えかねたように、MS少女が高らかとハンマーを掲げる。

世界一シビアなアマチュア、世界一鷹揚なプロ。

観客の前で本当に強いのはどちらか。

それもすぐに分かる。

『ガンプラファイトオツ、レデイ——ツ、ゴオ——ツ!!』

カン！ と、高らかとゴングがなった。

瞬間、空気が爆ぜた。

・
・
・

ゴングの音が響くかどうか。

そのタイミングで、二人は同時に前に出ていた。共に観客を大切にするエンターテイナー同士。思考法が似ている。

オーデイエンスを待たせない。

一秒たりとも。

ゴウダの選択は大振りの右掌底。

豪放な男らしく、何一つ迷いの無い全力のスウィング。

その内側を、一直線に緑の拳が伸びてくる。

「ウヌッ！」

ガギン、と鈍い音を立て、タイタスの頭が後ろに跳ねる。

選択、スピード、狙い。

開幕早々、申し分ないクロスカウンター。

ただ一つ惜しまれるのは、大人と子供ほどに違う両者のリーチ。

ストレートに体重が乗っていない。

ガチびよんの拳の先端が、かろうじてタイタスの鼻先を捉えただけ。

本物のプロレスラーを打倒し得るほどの一撃では無い。

その事を、当のガチびよん自身が良く理解している。

ありとあらゆるプロの指導を受けた最強のアマチュア。

プロの恐ろしさを知りすぎている。

だからこそ、ためらいもせず前に出る。

ゴウダが体勢を立て直すより、一瞬でも早く。

(下段……！)

ぬるりと深く沈んだガチびよんの体。

ゴウダの口から舌打ちが漏れる。

ブラジリアン霸王流のジレンマ、今なら分かる。

この距離、この至近においてのみ、体格と言う両者のレシオが逆転する。

「ちィー！」

咄嗟に蹴りに行ってしまった。

分かっていた筈なのに。

ガチぴよんは、この距離から飛んでくると――。

意識が下に行つた瞬間、ゴズン！ と、頭部に衝撃が来た。

超至近、前宙からの回転蹴り。

肉厚のハンマーでぶつ叩かれたような強烈な踵。

「……ッ にゃらア!!」

ゴウダの強靱な肉体は、その一撃にすら良く耐えた。

ヤケクソ気味に豪快なフックをブン回す。

だが、ガチぴよんの戦術は、ゴウダの超人的なタフネスまでも織り込み済み。

慌てず腰を落としたグリモアの頭上を、ブウン、と拳圧が通過する。

「……ッッ!?!」

ベチン！ という乾いた音と共に今度こそ来た。

巨漢攻めのセオリー、ローキック。

筋肉では守護しきれぬ膝回りの関節。

灼けるような痛みが爆ぜ、ガクガクとタイタスの下半身が傾ぐ。

ようやく射程圏まで下りてきた顎先。

全体重を乗せてガチぴよんが跳ぶ。

――ゴッ！

鈍い音を立て、縮みかけたタイタスの巨体が縦に跳ね上がる。

天空まで突き抜けるような、ガチぴよんのカエル跳びアツパー。

先ず末端を攻め、体勢を崩した所に体ごと浴びせる本命の一発。

それはまるで教本でも見るかのような鮮やかな連係であり――、

「ンゴアア!!」

『・!』

だからこそ、ゴウダの方も根性で合わせる事が出来た。

明後日の方角を拝みながら、なおも逆襲のビツグ・ブーツ。

相打ち。

遮二無二繰り出された前蹴りがドテツ腹を捉え、中空のガチぴよんがたちまち後方に吹っ飛ぶ。

オオ、と観衆がどよめく。

ゴロンと綺麗に受身を取り、砂塵を払ってガチぴよんが立つ。

体を返して腰を落とし、タイタスからろうじてが大地に踏み止まる。五分と五分。

両雄、一步も譲らず。

……と、言いたい所ではあったが、見巧者の観客たちは薄々気付いていた。

プロレス的な見地からすれば、今はゴウダが攻めるべき場面である。

ガチびよんの猛攻に耐え、ようやく掴んだ反撃の時。

地に伏すガチびよんに覆い被さり、溜まりに溜まったフラストレーションを開放する。

そうでなくては帳尻が合わない。

だが、ゴウダは行かなかった。

いや、行けなかった、と見るべきだろう。

先ほどの膝か。

あるいは、第一試合からのダメージが蓄積した結果か。

ともあれかろうじて均衡を保っているように見える天秤は、その実、致命的に狂い始めていた。

決着の気配。

グルングルンと両腕を回し、瞬間、ガチびよんがまつしぐらに砂塵を蹴る。

意を決し、タイタスも迎え撃つ。

真つ向勝負、タイタス最大の武器、シヨルダータックル。

対するガチびよんは、全身を浴びせるようなダイビングヘッド。

ガン、と闘技場の中央で空気が震える。

「……！」

グラリ、と思ってもよらずタイタスが揺らぐ。

両者の体重差を思えばあり得ぬ状況。

だが、やはりネックはタイタスの膝。

踏ん張りが効かなかった。

そこまで見越した上でのハンマーヘッド。

淀みなくガチびよんは動いていた。

下半身は気持ち内股。
ボクシングにおけるピーカブーのような、年季の入った型落ちの防
御法。

スウエーもダツキングも知らぬゴウダではあるが、このスタイルは
どうして中々に有効。

タイタス特有の巨大な両肩は、側面から頭部への打撃を許さない。
人間に比して大きなガンプラの拳は、顎先への攻撃を大いに阻む。
頭部への一発を避ける。

そこ以外は、好きなだけ打たせて構わない。
腕も、腹も、脚も。

ダメージと引き換えに相手の酸素を奪えるならば、悪い取引では無
い。

金的は……、出来る限りもらわないようにしよう。
崩れそうで崩れない。

これは穴熊。

打たれる度に、却ってむくむくと存在感を増していく。

打ち疲れて拳を止めたなら、痺れを切らして大振りに来たなら、あ
るいは膝狙い、などと欲目に走ったならば。

その瞬間前に出て、ぐつ、と掴んで一投げする。

それがゴウダの必勝パターン。

(……に、したって、何なんだよコイツはッ!?)

亀のように首を窄めて、必至に奥歯を食い縛る。

暴風が止まない。

一打毎にその威力を増していく。

圧力を加える事が出来ない。

これが本当に、30kg以上軽い男の拳か？

(だが、それでも所詮、連打は連打、だ)

ゴウダ・カオルは信奉する。

男の拳とは、信念だ。

この一撃で倒せずとも、次の攻撃で倒せれば良い。

そんなコンビネーションは結局の所、瞬間に賭ける情熱が足りな

ぐらり。

思わず一步、下がってしまった。

下がりながらは戦えぬ男が。

格好の間合い。

ガチぴよんが跳ぶのに、十分な間合い。

案の定、ガチぴよんが跳んできた。

先程は縦に回転した緑の体が、今度は横に。

ぐるん、ぐるんと中空で回る。

ガチぴよんチャレンジ。

ダブルアクセル。

十分に遠心力を乗せた太く短い足が、真っ直ぐに伸びてくる。

必死に伸ばした、タイトスの両指をすり抜けて。

「ガアッッ!!」

今度こそ、ゴウダがぶっ飛んだ。

勢いに流されるまま、タイトスの体が後方に泳ぐ。

三步、四歩、五——

ガッ

不意に、何かに足を取られた。

(!)

誰だ、こんな所に物を置いたのは？

などと、会場の不備を責める事は出来ない。

何故なら、置いたのは他ならぬゴウダ自身。

重厚な木製の棺桶。

仕掛けたのはゴウダ自身。

自業自得。

因果、応——

・
・
・

『や、やりましたぞ〜!!』

ガチびよんの十八番、ダブルアクセル！

あのタイタスの、ゴウダ選手の巨体を見事棺桶に放り込みましたぞ！

凄いやガチびよん！ やった〜イエイエイエ！！』

ジョン・レノン由来のモジヤモジヤ顔を目一杯に紅潮させ、モツプさんが歓喜の声を上げる。

割れんばかりの歓声が会場を包み込む。

ファースト・コンタクトで相手を押し量り、躊躇いもせず一点攻勢。

一瞬の駆け引きから勝機を掴み、相手の望み通りの形で決着。完璧な戦術であった。

互いの能力、思考、周囲の状況を的確に利した、否の打ち所の無い戦術であった。

——だが、どうした事であろうか？

決着のゴングが鳴らない。

十秒待っても、三十秒、一分待っても。

ざわざわと、会場に戸惑いの声が零れる。

決着の時を告げるべきMS少女は、ハンマーを掲げたまま、じつと舞台を凝視している。

いや、勝者となったガチびよん自身が、なぜか構えを崩さぬまま、今なお目前の棺桶に向かい合っているではないか？

無表情の筈のガチびよんの顔が、どこか固い。

——ぎいいいいいいいい

不意に、黒板に爪でも立てたかのような不協和音が響き渡った。ざわり、と会場がざわめく。

棺桶のへりに投げ出された、タイタスの太い足。

ノイズの出所は、その中心。

得体の知れない焦燥感が、やがて、罵声へと変わり始める。

「バカヤロー!」

「真面目にやれエ、ゴウダア!!」

——ぎい　いい　いい　いい

会場にこだまするブーイング。

それを打ち消すかのように、なお、なお一層、不協和音が力を増していく。

客席中に罵声が広がる中、ようやく一部のプロレスファンが気付き始めていた。

これこそが、この状況こそがゴウダの罠。

ガチぴよんは、ビグザム剛田の仕掛けたアングルにハマられたのだ、と。

ゴウダを棺桶に叩き落とすまでのガチぴよんの戦術。

そこに間違いは何一つ無かった。

だが、相手を棺桶に封じてしまった以上、ガチぴよんはその蓋を閉めて、決着を付けなければならぬ。

それこそが棺桶マツチ。

ビグザム剛田は今や、その時を待ち侘びている。

棺桶の奥に仕込んでいたであろう、卑劣な罠を忍ばせて——。

大本の戦略が間違っていた。

あの棺桶は始めから、ゴウダ自身が入るために用意された物だったのだ。

やがて、ついにガチぴよんが動いた。

じりじりと間合いを測り、意を決し、一足飛びに棺桶の縁に足を駆ける。

「ぶしやあつー!」

瞬間、タイトスの上体が跳ね、中空に霧が舞った!

「ああッ!」

観客の悲鳴が響く。

ゴウダが仕掛けたのはヒールの花形、毒霧攻撃。

視界を奪われ、体勢を崩したガチぴよんが、どつ、と砂の上に尻餅を突く。

卑劣、だが少し違う。

口中より噴き出された物質の主成分は、闘技場の砂。確かに汚い。

汚い……、が！ 反則では無い。

そんな事より問題なのは――。

「毒霧……、毒霧やと!？」

アホな、タイタスのどこに『口』があるつちゆうんヤツ!？」

「カカ、アンタまでそこいらのモブと一緒にかいや?？」

ガンプラビルダーのおっちゃんよ」

狼狽するアカハナを尻目に、カラカラと悪魔のように少女が嗤う。

「無いモンは作りやあよい。

それが本来のプラモスピリッツつてもんじやろ?？」

「H A H A H A H A H A H A H A――!!」

埒外のやり取りを知ってか知らずか。

喜色满面、爛々とツインアイを滾らせて、タイタスがその巨軀を起こす。

ベリベリと剥ぎ取ったマスクの下から、真っ赤に裂けた口がにいと笑みを作る。

右の頬には『タ』、左の頬には『ヒ』。

傷痕のようにひび割れたフェイスペイントが真紅に輝き血涙を刻む。

『ゲエ――ッ!？」

な、なんなんですか？ あの不気味なペイントは!？」

『あ、あの姿はまさかッ!？」

二十年前、CWAの強者たちを震撼たらしめた最凶のヒーロー。

デスペラード・ゴードなのかア――ッ!？」

デスペラード・ゴード。

永遠の中堅レスラー、ゴウダ・カオルの、誰も知らない黒歴史。再びオーガニック的な力が働き、主音声、副音声の恐怖がたちまち会場に伝搬する。

ガチンコ格闘大会で突如始まってしまったプロレスに、大会主催者、リー・ユンファも思わず苦笑する。

「まったく、よくやりますねえキミコくんも。」

自分で仕込んだギミックのクセに……」

「ぐつもーにん！ えぶりわん!!」

陽気に中学英語を謡いながら、ジャンプ一番、タイトスの巨体が宙に踊る。

「ぷりーず、ちよつぷ！ すていつくす!!」

脳天唐竹割り。

かつて、超日本プロレスの社長に三途の河を見せられたと言う禁じ手を、情け容赦なくガチびよんの頭部に叩き込む。

「ごーいんぐ、とうー、べーつど!!」

よろめくガチびよんの体を捕え、悠々と担ぎあげる。

シンプルにして至高、プロレスラーのボディスラム。

ただし、叩き付ける先は棺桶の上。

棺桶でガチびよんを殴るのは、反則では？

無論反則、だからこそガチびよんで棺桶を殴った。

けれど、さすがに自分で持ち込んだオブジェを使うのは……。

勿論卑怯、だからこそ、先にガチびよんに使わせた。

「あいー・らーびゅう」

思い切り背中をのけぞらせたガチびよんの上。

ためらいもせずタイトスが跳んだ。

フライングボディプレス。

116kgの筋肉が全身にのしかかる。

ボギョオツ、と音を立てて棺桶が潰れ、二人の体が大地に沈む。

プロの犯行。

完全なるプロレスラーの犯行。

棺桶の使い方、ルールの使い方、颯の買い方。

全てがダイナミックで、かつ、合理的。

もうもうと立ち込める砂煙の中、ぬつ、と太い腕が後方からガチびよんを捕えた。

たちまち高笑いでもするかのように、タイタスの大口ががぼりと開く。

「あーいむ、はんぐりー、なーう!!」

——がぶり!

一声吠えるや否や、たちまちタイタスの大きな口が、ガチびよんの後頭部に牙を突き立てた。

噛み付き。

大の大人が仕掛ける本気の噛み付き。

「……ッ!!」

男の太い腕の中で、ガチびよんがギリギリと体を軋ませる。

子供番組では見せない、絶対に見せられない凄惨なる光景。

会場に、一際甲高い悲鳴が響き渡った。

・
・
・

「……あのオヤジは、一体何を考えてやがるんだ」

阿鼻叫喚の混乱が会場を埋め尽くす中、呆気に取られたクルスがぼつりとこぼす。

「覗き穴を狙った毒霧、そこまではまあ、分かる。

だが、着ぐるみ野郎の頭部は綿だぞ! 噛み付いてどうする?」

「分かっちゃないねえ」

嘲るように、傍らのモーラが言い放つ。

「……んだよ?」

「素人だって言ってるのさ。」

アンタだけじゃない。

路上最強を謳う武術家たちの多くが、何故か、万を超す群衆の前で

戦うと言う異常な状況に対してあまりに無頓着だ」

隆々とした上腕を組み、褐色の乙女がモニターを見据える。

「戦いはいいよ佳境。」

観衆の罵倒の中、タイタスがガチぴよんの大きな頭部を、ガシリと左脇に捕えた所であった。

「脳内に筋書きを組み、アドリブの中で修正を加えながら結末に誘導する。」

アタシらプロとアンタらじゃあ、大本の構成力が違うんだ。

客の相手で戦うんなら、正直、負ける気がしないね」

「……ケツ！ フカシやがるなオバハンよオ。」

だが、客の前で戦うプロってんなら、あの着ぐるみ野郎だって大差ねえんじゃないのか？」

「さっきまでだね。」

だが、流れが変わっちゃった。

観客の喝采を勇気に変えてきたヒーローが、今は聞き慣れない悲鳴と罵声に振り回されている。

「ここから先はガチぴよんの知らないロードさ」

「――！」

「線が切れちゃった。」

ガチぴよんは仕掛け所を間違えたんだ。

この試合はもう、逆立ちしたって旦那には勝てないね」

「……よう、生放送ってえのは、お互いツレえよな」

「~~~~ツ」

ギリギリとフェイスロックで締め上げながら、素のゴウダ・カオルが、ぼそぼそとガチぴよんの耳許に囁きかける。

「プロレスラーは小ズルいぜえ。」

試合のドコで手を抜けばいいか、あらかじめ考えとくのよ。

何ならこのまま、一時間でも二時間でもやってみようか？」

「……ッ！」

ゴウダが小喃に意識を割いた一瞬。
ガチびよんの大きく丸っこい頭部が、タイタスの脇からズボリと抜けた。

千載一遇。

視界にはタイタスの背中、飛び技を叩き込むのに十分な距離。

狙いは、高高度のローリング・ソバット——

「!?」

ガチびよんが跳び上がり、背を向け、右足を弾き出す。

その瞬間には、もう、標的が視界から煙のように消えていた。

驚く間もなく、ガシリ、と後背から太い腕に抱きかかえられ、ガチびよんの体が宙吊りとなる。

スピード、でも、反応速度、でもない。

まるで初めから互いに示し合わせていたかのような、ゴウダの一瞬の神業。

「冗談だよ。」

こつちももう限界なんでな、次で終いにするよ」

ぼそり、とゴウダの小声。

それで理解できた。

ゴウダが序盤から膝を痛めたフリをしていたのは、この瞬間のため

「ダシヤアアアアアアア—— ツツツ!!!」

咆哮、爆裂。

不明を恥じる暇も無く、ガチびよんの視界が高速回転する。

客席、夜天、月、逆さまの客席、篝火——！

凄まじいばかりの体感速度。

さながらジェットコースター。

ただし、安全装置は無い。

バックドロップ。

ゴッ、と耳元で大地が揺れ、瞬間、視界が暗転した。

——思えば、数奇な半生であつた。

『彼』が上京したのは十八の時。

将来の夢は銀幕のアクションスター。

セリフ覚えが悪く、カメラ映えのしない小柄な体。

演技もイモな垢抜けないお上りさん。

取り得と言えば、幼少より山野を駆け巡つた頑丈な肉体のみ。

先輩たちの付き人をしながら、二流のスタントで糊口を凌ぐ日々。

そんな毎日はしかし、半年もたたぬ内に終焉を迎える事となる。

とある殺陣の最中に起きてしまった、真剣によるアクション。

映画界がたちまち自粛ムードとなり、体のみが資本の彼も生活に窮する事なつた。

ほうぼうに知り合いのツテを辿り、ようやく得た次の仕事は、子供向けTV番組のマスケット。

深い失望が胸を突いた。

顔も出せない、名前も出せない裏方稼業。

しかも当時、銀幕よりも数段格下と見られていたTV業界。

彼が足踏みしている間にも、夢はどんどん遠くの世界へ飛び去ってしまう。

だが諦観は、わずか一週間の内に塗り替えられる事となつた。

ディレクターも、スタッフも、声優も。

誰も彼もが若さだけが取り柄の二線級。

野心。

野心と情熱が彼らの日々を支えていた。

体当たりで、命懸けで、真つ向勝負で、世界中の大人の度肝を抜く、前代未聞の子供番組を作つてやろう、と。

それから三十年、脇目も振らずに彼は駆け抜けた。

人並に恋も経験したし、家庭と呼べるものを持った事もあったが、結局は長続きしなかつた。

子供の夢を崩さぬため、口外の許されぬ彼の職務。

峻厳で不器用な彼は、恋人にも、家族にさえも自らの仕事を語る事をしなかった。

彼の日常が色褪せて行く毎に、却ってアイドルとしての仮の姿が輝きを増していく。

主従は完全に逆転していた。

三十年。

カードケースは得体の知れない免許で一杯になった。

欧州、中東、亜細亜、アメリカ、ありとあらゆる国を巡った。

マッターホルンを制し、三雷会の黒帯を貰い、ついには宇宙にまでも進出した。

かつて彼が敬愛した銀幕のスタアたちとも肩を並べられるヒーローになった。

だが、夢のような日々にも、いつかは終わりが来る。

オフレコではあるが、来春、声優が変わる。

どれほど一流のプロであつても、三十年もたてば声帯は衰え、かつての演技は出来なくなる。

彼らの勇退に合わせ、中の人、つまり彼も現役を退く事になっていった。

悔いが無い、と、言えば嘘になる。

正直、彼の中にはまだまだ現役でやれると言う思いがある。

だが、今は良くとも、遅かれ早かれ、着ぐるみを脱ぐ時は来るのだ。引退して、それで人生は終わりでは無い。

現役を退いた後は、局に留まり後任の指導を続ける事となっている。

アイドルの影であり続けた毎日は終わり、ようやく彼自身の本当の人生が始まるのだ。

そう、一度は納得した筈の胸に、ちくり、と小さな穴が空いた。理由は分かっていた。

長年過酷な試練に耐え続けた、彼自身の肉体の事だ。

本来ならば、体を動かす際のハンデにしかならない鈍重な着ぐる

み。

だが、長年その身を共にして来た彼の体捌きは、却って窮屈な着ぐるみの中でこそ真価を発揮する域に至っていた。

いびつな環境の中で三十年賭けて完成した、彼だけのガチぴよん流拳法。

この着ぐるみの中ならば、どんな一流のアクションスターにも遅れは取らない。

彼自身、そんな自負があった。

だが、このまま着ぐるみを脱げば、後はただ、年齢に比べて健康なだけの中年になってしまう。

無念であった。

一度でいい、この世界の本物のプロと呼べるような連中を相手に、本気の自分を試してみたい。

子供たちのためでは無く、己一人の我侷のために。

それはこの世界の表舞台では、絶対に許されない夢だ。

シリアスなハード・アクションに挑むには、着ぐるみに向けられる色眼鏡が邪魔となる。

まして、カメラの前で当代のプロ格闘家たちに真剣シユートを挑むなど、許されよう筈も無い。

ちくり、ちくりと、胸の穴は日増しに大きくなっていく。

そんなある日の事。

撮影の合間に、ぽん、と肩を叩かれた。

ジョン・レノンをモデルにデザインされた、モ ज्याモ ज्याの大きなモツプ顔。

三十年来の付き合いとなる、彼のパートナーである。

その手には、今の彼の外見と瓜二つの、新緑色のガンプラが握られていた。

——会場に満ちた悪意と罵声が、不意に途切れた。
コロッセオが静寂に包まれる。

何事かと振り返ったゴウダが、思わず「おう」と瞠目する。
闘技場の中央、逆さまに大地に突き立ったガチびよんの体。

それが今、必死に立ち上がろうと、懸命に体を揺すっていた。

『……ハッ！』

な、何と言う執念でしょうか!?

ガチびよんが、プロレスラーの本気のパックドロップを受けたガ
……!!』

懸命に実況を続けようとしたMS少女の声が、思わず止まる。

静寂の闘技場に、「ひっ!?!」と言う小さな悲鳴が漏れる。

かろうじて立ち上がり、震える手でファイティング・ポーズを取っ
たガチびよん。

だが今や、その頭部は無残にも潰れ、ひしゃげ果てていた。

大きく歪んだ顔面、その眼は泣いているようにも怒っているように
も見えた。

ぞくり。

百戦錬磨の観衆が震える。

ここから先は誰も知らない、本当のガチびよん・チャレンジ。

『……やめとけよ、ダンナ。

どうやったって、ガキンチョどもに見せられる画にはならねえぜ』
『……………』

ゴウダの忠告に対し、ガチびよんは無言。

ただ小刻みに痙攣する両腕を必死に前方に構える。

『……おーけい』

しばしの沈黙の後、ゴウダは小さく頷いて、ゆっくりと後退を始めた。

三步、四歩、五歩。

六歩目で不意に足を止め、ザ、ザツ、と砂を掻き。

「オオオオオオ!!」

次の瞬間、勇ましく大地を蹴って呐喊した。

プロレスラーの最終兵器、片手を伸ばして走るだけ。肉体そのものが反則である彼らにとってはそれだけで十分、必殺足り得る。

ガチぴよんもまた、一步も引かない。

下がる足すら残していないのか。

ともあれ。

ズン、とタイタスの右腕に全威力が宿る。

ガチぴよんも、ぐっ、と腰を落とし、引いた右手を――

交錯

刹那

――バッキヤアツ!!

「――!」

「んだアツ!」

両者の口から、同時に吐息が漏れた。

闘技場の中心で、一瞬、大気が震える。

「な、なんだってんだアツ!!」

勢い良く右腕を打ち抜きながら、ゴウダが狼狽の声を上げる。

その脇で、必殺の一撃を胸元に浴びた機影が宙に舞う。

だが、その犠牲者は、ガチぴよんでは無かった。

MSN-06S『シナンジュ』

突如として通常の三倍つばい速度で割り込んできた乱入者。

袖付きの中でも最も流麗たる真紅の機体が、今、胸甲を無残にも抉られ、後背のガチぴよんの上にドサリと沈んだ。

たちまち会場が、わっ、と混乱に包まれる。

『アワ、アワワ!!』

これは一体どうした事でありましょうかツ!?

会場に乱入した謎のシナンジュが、ノンビームラリアートの直撃を浴びてしまったア!

コイツは、一体何者なんだアツツ!?!』

『わ……、わワワわわ、ワタクシでありますぞオ……』

「二二」モ ッ プ さ ん !? 「二二」

ビクン、ビクン、と痙攣するシナンジュから聞こえてきた声に、会場中の驚愕がシンクロする。

太く、しかしか細い、息も絶え絶えなその声の主は、間違いなくガチびよんのパートナー、モップであった。

「バ、バカナッ!?

彼なら確かにさつきまで、ここで私と解説を……」

「ええい、何と言う無茶を！」

碌に鍛えてもいない素人がファイティング・スーツを着用するなど、正気の沙汰ではない！」

狼狽の色を隠しもせず、リーがサツ、とその手をかざす。

ただちにけたたましくもゴングが打ち鳴らされ、修理装置を搭載したメタスが現場に急行する。

試合終了。

記録上は、ガチびよんの反則負け。

だが、そんな事よりも……。

『なんでさきモップ、何だつてこんな無茶な事を……?』

『ガ、ガガガ、ガチびよん……』

ぐるんぐるんと両目を廻しながら、モップのシナンジュが、ガチびよんの手をそつと握る。

『ガン普拉バトルは、遊びだからこそ熱くなれるんですぞ。』

大人も子供もお姉さんも、みーんなで楽しめなきゃダメですぞ』

『……』

三十年来のパートナーの言葉が、ゴウダの拳よりも強く、ガチびよんの中の『彼』を叩く。

何と言う事であろうか。

アングラな地下闘技場の舞台でもなお、彼はガチびよんとしての宿命から逃れる事は出来なかったのだ。

そして、それはきつと幸福な事なのだ。

己の半生を捧げて一つのキャラクターを演じ切れた俳優が、この世に果たして何人居た事であろうか？

『うん……、うん！』

ゴメンよモツプ、せっかく作ってもらったガンπρα。

こんなにボロボロにしちやっただんだ』

『何度だって作り直せば良いんですぞ。』

それもまた、ビルダーにとつてのチャレンジ！ なんですぞ』

ガチぴよんたちのオーバリアクションに、ベテラン声優陣のアドリブが乗る。

まさしく阿吽の呼吸。

三十年賭けて完成された、ガチぴよんチャレンジの集大成。

「ガチぴよん！」

「カツコ良かったぞオ！ ガチぴよん」

「モツプさんも素敵ですぞ〜」

拍手がたちまち喝采となり、歓声が二人の頭上に惜しみなく降り注ぐ。

『ありがとう……、ありがとうみんな！』

これからもボク、頑張つてチャレンジするよオ！』

ガチぴよんの叫びに、わっ、と一際歓声が沸く。

偉大なる敗者の輝きの元、会場が一つになっていた……。

「ふう……」

仮想空間の大喝采から逃げ出すように、よろよろとゴウダがシユミレーターから這い出した。

たちまちガクリ、と膝が抜け、成す術も無く壁に背を預ける。

「まったく……、とんでもねえ化け物だったぜ」

ぜえぜえと、肩で荒い息を吐く。

効いているフリ、効いていないフリ、どちらでも出来る男ではあつ

だが、流石に今はそんな余裕も無い。

「ふふっ、ずいぶんと酷いザマだなあ、デスペラード」

「……へっ、お互い様だろうが、ギンザエフよお」

馴染み深い口髭市長の登場に、ほう、と一つ、ゴウダの口からため息が漏れる。

「参ったもんだな。」

そのナリ、試合に勝って勝負に負けたって所かな？」

口元に苦笑を浮かべ、ギンザエフが上等そうな葉巻を一本差し出す。

「おいおい、なに言ってるんだよ、市長さん……。」

政治家業が板に付き過ぎて、俺らの本分を忘れちゃったか？」

「ウン？」

ぽっかと煙の輪を吐き出して、ゴウダが満足気な笑みをギンザエフへと向ける。

「聞けよ、あの観客どもの大喝采……。」

アレが『プロレス』の勝ちじゃなくて何だってるんだ？」

「……ふっ、成程、違くない」

につか、と大の大人がどちらからともなく笑いあう。

会場の興奮は今や最高潮を迎えようとしていた……。

嵐の中で輝いて

ワイの名はアカイ！

アカイ・ハナオ（赤井 鼻緒）30歳、通称『ミナミのアカハナ』や。
……って、んな悠長な事言うてる場合やないで!?

大ピンチや！

血で血を洗うガンブラ・ファイト地下トーナメントも二回戦。

次なるワイの相手は、192cm、105kg、女子プロレス界の
重鎮・モーラ鬼灯や。

相手が女やからうちゅうて、ワイとてナメてかかかったワケやない。
い。

タツパでも目方でもワイの遙かに上に行く規格外の肉体。

アメリカンプロレスの雄、ギンザエフ・ターイーを手玉に取る戦術
眼。

そして何より、トロフィーや賞状を並べれば、ワイのチンケな社屋
なんぞ埋まっちゃうとまで言う伝説的経歴^{キャリア}。

アマレス三冠、女子プロ七冠。

ワイが最強のアツガイ乗りを目指してゲーセンに入り浸った
時分には、既に女帝の名を欲しい俣にしていた女。

十度。

ワイが腹ん底より欲してならない『世界』を、十度手にした女。

そもそもワイ如きそこの土建屋に、驕りや油断が許される相手や
あらへん。

とは言うても、勝負の土俵はあくまでガンブラ・バトル。

ワイかて一昔前は『ミナミのアカハナ』言うてブイブイ言わしとつ
たビルダーの端くれ。

大会唯一のプロとして、ガタイばかりが取り柄の素人どもに遅れを
取るわけには行かへん。

どうしようもない実力の壁は、ワイのガンブラへの知識と情熱でカ
バーする。

相手が誰であろうとも、ワイの魂のアツガイ・ファイトを見せつけ

るだけや。

……そう本気で思うとった。

思えばそれこそが驕りの始まりや。

「シヤツ」

パン、と耳元で爆竹が跳ねよる。

糞！

思うとる間にもう飛んできよった。

右、たぶん掌底。

骨法、つちゆうヤツやったか？

一昔前にプロレスで流行りよったな。

八百長のパフォーマンスとばかり決め付けとったが、こいつはシヤレになつとらん。

アツガイの丸っこい頭部に対して、密着性の高い掌は確かに有効。エライタツパから振り下ろされた重爆が、脳みそに直に浸透しよる。

頭が重い。

視界がまるでストロボでも焚いたようで……

（——や、ないで!? 反撃やろ!!）

アカン、アカンわ。

腕が折れるのは構わん、足が折れても構わん。

だが、心が折れるのだけはアカン！

何のためにここまで来たんや？

ワイのアツガイ道はまだ完成しちやあおらんのやで。

「にやがア!!」

おかしな声が漏れよる。

足もともようけ覚束へんわ。

やが、構わん。

素人がカツコばかり拘った所で、本職に通用するワケあらへん。

へぼ将棋はへぼ将棋のまま、持てる創意の全てを叩き込むんや。

（やったら、これならどうや！）

左腕をブン回しながら、パツと指先を開く。

たちまちアツガイの拳先に、ジャキリと肉厚のネイルが展開する。アツガイの短い手先を補う奥の手や。

破れかぶれに見せかけた搦め手。

左のスウイング。

これやったら、リーチであの化け物女にも対抗できる。

届く、ハズや。

——ブオン。

(……！)

左の指先が、虚しく空を切りよる。

信じられん、スカを喰らうた。

伸びた指先の分だけ遠心力が増して、アツガイの体が思い切り泳ぐ。

「……ととっ！」

力一杯に右足を踏みしめ、かろうじてブレーキをかける。

たちまちおおつ、と会場が揺れる。

『危なアーいッ!』

アツガイ左の大砲、渾身のフルスイング!

紙一重、一瞬の差で回避が間に合ったア。

これがアツガイファイター、赤い水棲。

底が見えない、この素人だけは油断ならないぞお!』

姦しいアナウンスが、耳許でガンガンに響きよる。

クソつたれ。

ようやりおるでMS少女の姉ちゃんも。

ホンマはようワカつとるクセに。

紙一重で避けよつたんやない。

『見切られ』たわ。

純正のアツガイのリーチにプラス、前試合で見せた爪先の長さ。

そこから逆算して、必要な分だけキツチ下がってかわしよつた。

スカを喰らう。

それが一番、アツガイの重厚な肉体には応えよる。

あの捌き、この立ち回りがホンマに関節屋の動きやつちゆうんか？
完全に計算外や。

敵の本命が、組み付き押し倒してからの寝技である事は明白。

やが、前試合のタツプのザマを見ていれば、おいそれとタツクルにはこれんハズ。

十中八九、まずは打撃で主導権を奪いにくる。

そこをアツガイのトリツキーな動きで翻弄し、散々にバテさせ消耗させる……、ハズやった。

それがどうや？

密かに研鑽を重ねてきたアツガイ拳法、そのことごとくを丁寧に対策してきよる。

これじゃあこつちが一人で勝手に、飛んだり跳ねたりしとるだけや。

エゲつないで、アマレス三冠。

プロの闘技者が、たかだかガンプラの動きをこうまでよう研究しよるんか？

……いや、あるいはここまで徹底するからこそ『女帝』なんか。

高らかと両手を広げたノーベルの雄姿。

底知れぬ威圧感。

膝が震えよるわ。

原型の可憐さが微塵も見当たらん世紀末的なボディやが、この懐の深さ、タチが悪い。

まったくもって忌々しい。

悔しいが、この機体の仕上がりや、製作者の眼力の確かさを認めざるをあらへん。

……こん大会が始まるまで、ワイはずっと、エイカ・キミコと言うビルダーを軽蔑しとった。

奇抜な魔改造ばかりが先行して、スラストアの並べ方一つ知らん女。

『ガンプラは自由』と言う言葉を盾に取り、機体の由来や個性すらも顧みる事無く、好き勝手にガンプラを冒流しよる連中の仲間や、と。

それがこの特異なレギュレーション、光の当て方一つで、ここまで価値観を変えよるとは。

直に立ち合うてようやく理解出来る。

恐らくあの女はパイロット……『中の人』の存在を想定した上で機体を強化しとるんや。

魔改造、なんかやあらへん。

彼女は彼女なりに、自身の中の『神』、侵されざる独自のルールに従うて闘うとる。

例えば、スタン・ハンセンがゴッグを使うたならばどうや？

ジエット・リーがナタクを使うたならば？

若山富三郎がイフリート・ナハトを使うたならば——？

そう言うた、生粋のガノタならば鼻で笑うようないしょうもないこだわり。

その理想をGPベース上で現実のモノにできるまで機体を詰めて来よる。

正直、まっとうな趣味とは呼べへん。

歪んだ愛。

歪んでいる。

歪んではおる、が、そこには確かに彼女なりの愛がある。

そして、その愛の集大成こそが目の前の女傑、ビルドノーベル……。

(……ああ、そうか。

『ガンプラは自由』とは、つまりはこう言う事やったんか……)

唐突に、ふっ、と頭の上に乗った重しが消えよった。

畜生。

何や知らへんが、じわりと目頭が熱うなりよる。

阿呆。

そうや無いやろ？

相手の偉大さを知ったならば、ビルダーとして出来る事はただ一つ
のハズや。

(攻撃や。

このアツガイかて、ワイの魂を注ぎ込んだ戦友や！

世界最強の女帝と張り合えるだけの根性を持つとるハズや）
腹を括る。

もう作戦も何もあらへん。

ただ真つ直ぐに、今の自分に出せるモン全てをぶつけ……。

（……！）

しもうた。

ワイの下らん迷いを読まれてもうた。

そびえ立つようなノーベルの体が、いつの間にか深く沈み始めとる。

突っ込んでくる、奴さんの十八番、低空タツクル――

（――いや）

あからさますぎる。

罨や。

気付いたが、遅い。

その身に刻んだアツガイの技が、思う前に反応してしまいよる。
低く地を這うタツクルを、頭部の重さで上空から潰す。

その為の爪先立ち。

前の試合で見せた体捌きを、目の前の女に看破されとる。

――ゴツ

フラツシュ。

衝撃。

視界、瞬き。

ドロップキック。

192cm 105kg

頭部。

高すぎる重心。

支えきれへん。

倒れてもう。

いや。

そうやない。

逆ろうてはアカンのや。

(———そうや、手足が短く頭の重すぎるアツガイ。

下手にふんばってズッコケてもうたら、立ち上がる前に極められて
まうで)

思い出す、アツガイ拳法のイロハ。

こう言う時は踏み止まろうとしてはアカン。

吹っ飛ばされた勢いのままに距離をとるんや。

何度も何度も練習した、ガン普拉バトルにおけるアツガイ操縦法の
再現。

空中で思い切り体を畳む。

そうすれば、球になったアツガイの体は、着地の時にキレイに一回
転しよる。

受け身がそのままエスケープになり、最小限のロスで立ち上が……

「な……い！」

嘘やろ。

1. 9メートルの女傑が、勇ましく駆けだして来るやんか。

まるでこちらの受けを、この逃げを予測していたかのような全力疾
走。

瞬く間に巨体が迫り、貴重な距離が縮まる。

起き上がる暇なんぞあらへん。

どうしようもない。

完全に詰んでしまった。

これは、終いや。

(……と、言うのに。

ワイの体は何で動いとるんや?)

分からへん。

分からんままに体が動きよる。

まるで、天啓。

コイツはまさかアツガイの導きか?

ジャキリと展開した両手のクロー。

そいつをケツの後ろで思い切り砂地に突き立てる。

そうしてグツ、と腰を浮かせ、自由になった両足を跳ね上げる。

ああ、そうか。

それがあつたんか。

逆襲のカンガルーキック。

こん体勢から狙える唯一のカウンター。

頭ん中がワヤになっとなつても、肉体は体に刻んだ技を覚えておつた。

起死回生の一撃。

なのに、それなのに……、

(なんでやー！ なんだってこん女は跳んできよるんや!?)

信じられへん。

女帝が飛んできよる。

ルチャドローを思わせる軽やかさで。

まるで初めから、こちらの攻撃を読み切っていたような鮮やかさで。

(ワイの、アツガイの脚を踏み台に……!)

跳んでくる。

女丈夫の右膝。

それが今、月光を浴びて輝いて――

閃光。

魔術。

まさしくは、女、帝……。

・
・
・

『……シャイ……グ……ザード……炸れ……!
信じ……せ……、実戦………のか………!』
何や?

耳元でガンガン叫びよってからに。

こんなにキレイな月夜やってえ、のに。

分からへん。

さっきのアレ、一体、なんやったんやろうか？

クローのリーチやタックル対策、そいつが読み切られたのは、まあ、分かる。

どちらも直前の試合で見せた技。

世界史上最強とも揶揄されるあの女傑ならば、即座に対応されたとしても別に驚かへん。

だが、その後の後転も最後のカンガルークックも、彼女の前では一度たりとも見せとらへんハズや。

それを何で、アイツはああも迷いなく飛んで来よったんやろうか？

……。

……。

………いや。

………少しだけ思い出したで。

あの連携は過去に、一度だけ使った事があつたんや。十年前。

ガン普拉バトルトーナメント関西ブロック決勝戦。

ジャブローを模した密林フィールドでの泥仕合の最中、ワイも相手の陸ガンも、持てる弾薬の全てを使い果たし……。

凄絶な格闘戦の果て、追い詰められたワイは『アレ』を使った。

………そう言う事なんやろか？

つまりあの女は、ワイの動きを過去の試合から研究して……。

やからこそ、今日のワイの動きを、全て読み切る事が出来た、そう言うんかい？

(……………)

………アマレス三冠の女帝が、ワイの試合を見ておった。

世界最強の女がガン普拉バトルで勝つためだけに、過去のワイの試合を、ワイ自身が忘れとった技まで研究し尽くしておった。

………そうやとしたら、

だとしたら、なんて、なんて………！

なんて、恐ろしい女なんや（／＼／＼）

「——じゃ、ないやろボケエ!!」

ようやく我に返った。

恥ずい。

一人でノリツツコミしてもうた。

今はそんな事はエエ。

何分、いや、何秒ワイは寝ておった。

試合はまだ終わつとらへんのやろか？

分からん。

分からへんが、とにかく——。

（とにかく、とにかく攻撃やろ!!）

「おおおおおおお!!!!」

廻る。

よう分らんが、体がよう廻りよる。

ヤツはどこや？

とにかく今は足掻くしかあらへん。

——ガッ

「オワッ！」

悲鳴？

爪先に衝撃。

当たったんか？

ワイの攻撃が、初めて……。

（そうか、ワイはアレをやつとるんか……!!）

ようやくと状況が呑み込めてきたわ。

今、ワイが繰り出しとるんは、アツガイの丸っこい腰部を軸にした

スピッキク。

至近距離、どうしても立ち上がれない時のために残しておいた、最後の最後の悪足掻き。

(だが、これだけじゃあ終わらへんで)

と言うより、終わらせてもうてはワイが負ける。

回転を止めれば、即座にマウントを取られて関節を極められる。やからこそ加速する。

肉体の加速に合わせ、回転の中心軸を立ち上がらせる。

腰部から背部へ、背部から肩口、片口から首、そしてやがては頭部へ。

『な、ななな何だアア——ッ!?』

カポエイラ? ブレイクダンス?

アツガイが丸っこい頭部を軸に、さながらシユピーゲルのように回転したア——!』

「死にさらせやア!!」

疾風怒濤!

蹴った!

蹴った!

蹴った!

蹴った!

蹴った!

蹴った!

蹴り抜いた!

「オオー!」

ザマア見さらせ!

全身全霊、ダメ押し of 320文ロケット砲。

防御の上から無理やりにノーベルを吹き飛ばし、ついでに反動で体を起こして距離をとる。

おお!

たちまち割れんばかりの歓声が、アツガイの肌を容赦なく叩きよる。

ごっついのう。

表彰台に立つちゅうのは、きつとこんな気分なんやろな。

とは言え、浮かれてばかりもおられへん。

ガンガンに頭が痺れ、足元はもうフラフラや。

さっきのシャイニングウイザード、ダメージが抜けん、息も続かへんねん。

会場は押せ押せやが、ここであのグラウンドのスペシャリストに寝技を挑む言うんはあまりに無謀や。

(やったら、これしか無いやろ！)

最後ん一呼吸。

腹を決めて、走る、跳ぶ。

前にはなく、後ろに。

狙いは壁。

鍛えに鍛えたアイアンネイルを、ガギン、と目一杯突きたてる。

仮想空間とは思えぬほどの確かな手ごたえ。

指先の痺れを頼りに、更に高みへよじ登ったる。

『あアーつとオツ!』

ここでアカハナ選手、再びフリークライミングを開始!

まさか再び、高高度ダイビングゼーゴツグボディプレスを敢行する

気かア——ツ!』

おうよ、そのまさかや!

立ち回りで敵わへん。

グラウンドで勝とうなんざ、夢のまた夢。

せやけど、負けとうない。

やったらもう、特攻、しかないやろ?

「何やつとんのやつ!?! 社長!!!」

「アカン、無茶やで社長ウ!」

……?

頭ん上から山ほどの罵声が響きよる。

なんや、あのアホタレども。

社長が体張つとんのや、辛気臭い事言うたらんで応援せんかい!

「後ろや! 逃げエなア、社長ツ!!」

——!

……なん、やて?

じゅっ。

おお、背中が灼けとるわ……。

アカン、アカンで。

絶対に振り向いたらアカンと本能が告げよる。

けど、そう言う訳にもアカンやろ。

ええい、ままよ……。

「オオオオオオオオ!!」

ッ!

モーラ、鬼灯ツツ!?

ノーベルが吼える。

アホなっ

ヘビー級の女傑が跳んできよる。

何でや?

空手小僧より30kgくらいも重い肉体で。

バーサーカーシステムかいや?

……いや、違う。

ワイのアツガイが刻んだ壁の爪跡。

そいつを取っ掛かりに跳びよったんや。

「ゲボツ」

グッ、と腰元を締め上げる女帝の腕。

息が詰まる。

この万力に、モーラ鬼灯からの回答が籠められとる。

迂闊やった。

おそらく先の試合を観戦しとる内から、彼女の脳内にはこのフィ

ニツシュの形があったんや。

ワイがギリギリ逃げ切れると思うた距離。

モーラがギリギリ届くと思うた距離。

そのギリギリの読み違いの差に、コイツは勝負を賭けてきよった。

「リヤアアアアアア——ッ」

おぞましいばかりの雄叫びを上げて、ノーベルが思い切り壁面を蹴り上げる。

たちまち後方に凄まじいGがかかり、突き立てた爪が壁ごとボゴ
ン、と引つpegがされてまう。

ああ。

浮遊感。

即座に落下が始まるんやろう、無重力の一瞬。

投げ出された視線の先に、まん丸なお月さんが輝きよる。

キレイや。

思わずそつと両手を伸ばす。

フレキシ・ベロウズ・リムはあらへん。

指先が虚しく空を掴み、夜空が、月が、星がどんどん遠くなる。

届かへん。

アツガイの短い腕では、どこにも……。

・
・
・

『鮮やか！ 妖刀一閃ッ!!』

モーラ鬼灯、最後は伝家の宝刀・不知火を抜いたアーツ』

………なんや、うるさいのう。

せつかく気持ちちよう寝てた言うんに、けたたましくゴングを鳴らし
よつてからに。

……ゴング。

そうや、負けたわ。

基礎の能力で負けた。

技術の深遠さで負けた。

勝負に対する心構えで負けた。

ガンブラに対する愛、その解釈の広大さで負けた。

悔しいのう。

単に異種格闘技で負けた言うんならともかく、自分のビルダーとし
ての未熟さを認めざるをえん、ちゅうのは。

ここまで完膚なきまでに叩きのめされたっちゆうんは、いつ以来の
事やろうか。

公式大会で何度、敗退しても、自分にはまだやれるつちゆう思いがあつた。

フィールドに恵まれてさえいれば。

前試合のダメージを引きずってさえいなければ。

今のメタに馴染めさえすれば。

そんな風にもっともらしい分析を繰り返しながら、ズルズルと敗北を重ね続けた十年やった。

ドン底。

まん丸のお月さんが、遠い。

おドレの弱さが身に染みるほどの惨敗。

何かもう、いつそ清清しいわ。

「お〜い、生きてるか、アツガイの」

褐色の手の平がヒラヒラと、大きな蝶のように頭ん上を飛びよる。

何や、邪魔や。

折角のお月さんが見えへんやろ。

「頭、ちよつとばかり打ちすぎたかい」

ぬつ、とブロンドのツインアイが、思い切り視界を塞ぎよつた。

ビルドノーベル。

思わずドクンと心臓が跳ねる。

臍の所がカツ、と熱くなつて、急に喉元が息苦しくなりよる。

なんや、パニック障害か？

モーラ鬼灯がトラウマなつてもうたんやろか、ワイ？

「大丈夫？ 肩、貸そうか？」

「……のう、モーラの姉ちゃんよお」

「ん？」

ワヤになつたオツムの方とは裏腹に、思わぬ言葉が口を突いて出る。

ワイは一体、何が言いたいんやろか？

「姉ちゃん、その……、ア、アツガイは……、好きか？」

「……はっ？」

ガンダムフェイスごしにも分かる、ポカンと口を開けたモーラの呆

れ顔。

そりやあまあ、そうやろ。

質問の意味が分からへんわ。

「ええから答えてえな、ワイにとってはごつつ重要な話なんや」

……？

なんや、キモイな、この男。

自分でなかったらブン殴りたいわ。

「む〜……」

しなやかな人指し指を唇に重ね、ノーベルが小首を傾げる。

192cmを感じさせへん、妙に愛らしい乙女チックな仕草。

めつちやシバキたいわ。

——やがて考えがまとまったのか、ノーベルは妙に神妙な面持ちで、こう言いよった。

「……十年前、大型MAの制圧が進むガンプラバトル世界大会の舞台に、若さと野心に溢れた一人のアツガイ乗りが名乗りを上げた」

「……！」

「結果は第一ピリオド敗退。」

運悪く砂漠に降り立ちまったそいつは、カルロス・カイザーの駆るグランザム相手に真つ向から立ち向かい、そして成す術も無く敗れ去った」

「…………」

「アツガイは昔からキライじゃないよ。」

もしもアイツが世界一強いガンプラになったなら、アタシはきつと、イカレちまうかもね」

「…………」

…。

……。

……そう、言いたいことだけ言って、いつの間にかノーベルは姿を消しよった。

なんや。

色々と、懐かしい事ばかり思い出す夜や。

十年。

この十年、どうやってアツガイで勝つかを考え続けてきた毎日やった。

けど、どうしてアツガイで勝ちたいんか？

気がつけば、目的の方をすっかり忘れちゃってたような気がするで。

十年前のワイは負ける事なんぞこれっぽっちも考えてへんかった。自分と無敵の相棒が組めば、敵なんぞ勝手に弾けて消える。

そいで世界最強のビルダーになって、世界一かわいい嫁さん貰うて、ワイの人生ハッピーエンドやと。

……ああ、なんや。

振り出しに戻ったんか、ワイは。

「……世界最強のアツガイやと？」

あのアマ、大根でも買うように言いよってからに……」

「しゃ、社長、大丈夫でつか？」

「アカン、酸素欠乏症や、何やらブツブツ言うてるで」

「うっさいのう、聞こえとるワイ、ボケ！」

傍らのグリーンをはたきながら体を起こす。

「なんやワカらんが、今は妙にアツガイが軽いで。」

「引き上げるで、野郎ども。」

明日っからはまた忙しくなるで」

「おお、その粋でっせ、社長。」

何せここしばらく、本業の方がほったらかしでしたさかい」

「阿呆、ガン普拉バトルや。」

オープントーナメントの予選に向けて、おドレらにも協力してもらうで」

「マ、マジでつか、社長!？」

ちっとは会社の経営も考えてくれへんと」

「大の男が泣き言いうなや！」

こっつから先が正念場や、(有)アカハナ土建、気合入れていくで!!」
ええやろ。

女に夢を見せてやるんが、男の甲斐性やさかいな。

モーラ鬼灯。

首を洗ってよう待つとれや。

「やったるで！　ワイのガン普拉バトルはこれからやッ!!」

「ン……」

歓声に溢れる仮想空間から抜け出して、モーラ鬼灯がゆつくりと体を伸ばす。

宵闇に包まれたアミューズメント・パーク。

チカチカと灯る白色灯の寂寥感が、今の乙女には妙に心地良い。

——と、

「……やあ、これからぐう出陣とは気が早いね」

闇の彼方からの来訪者に気づき、モーラが気さくに片手を挙げる。炎が揺れた。

ライトの下、白色の輝きを浴びてたなびく炎のような髪があった。

ガン普拉ファイター二回戦・第四試合出場者、アムロ・レン。

若き十代の古武術家が、白の胴衣、藍染の袴に身を包み、褐色の乙女の前に立っていた。

その紅い瞳には、視線だけで見る者を灼くような強い敵意が宿る。

これが普通のファイターであるならば、試合に向けて闘志十分、と見るべきなのだろう。

だが、目の前の人を喰った老婆のような少女にしては、あまりにも不自然。

「どうしたい？」

「ちよつとばかし気合が入りすぎなんじゃないのさ？」

「赴月」

取り付く島も無くポツリ、とアムロが呟く。

ピクン、とモーラの眉がわずかに上る。

「室町後期より伝わる歩法の一つよの。」

上体、とりわけ頭部を上下させず、あたかも地面を滑るかのよう
下がるでもなく下がる。

結果、対主の拳は妖にでもあったかのようにすり抜け、その距離感
は大いに乱れる所となる」

「……………」

「赴月だけではないの。」

一回戦でギンザエフ・ターイー相手に用いた『外し』

あれも近代レスリングの技でもプロレスの技でもない。

……無論、骨法でもな」

ギリリ、と一層鋭さを増した瞳を前に、モーラが呆れたように肩を
竦める。

「別に。」

巷じゃあ近代格闘技を片っ端から臆面も無くパクリまくる古武術
家がいるって聞くね？

プロレスラーが武術を嗜んでいたって、ちっとも可笑しくなんか
ない」

「ああ、そうじゃろうのう。」

そいつが安室流……、舞踊の足運びでさえなけりやのう」

「へえ、そいつは初耳だ」

「とぼけまいぞ。」

アマレス三冠、プロレス七冠、じゃと？

うぬは一体、何者じゃ！」

「……事と、次第によっちゃ、ただでは済まさないって？」

スツ、とモーラの体が緩やかに沈む。

低空タツクルの気配。

現実空間、下はコンクリート。

両者の間に、たちまち死臭が充満する。

「チィッ」

迷わずアムロが動いた。

危険域、故に一刻も早く、自分の手の届く間合いへ。

（！）

ふっ、と一瞬にして殺気が掻き消えた。
ぬるり、とモーラの巨体がアムロの脇をすり抜ける。
シンプル、かつ巧妙なフェイント。
海を見れば山。

これもまた安室流の初伝。

「……やはり、かい」

「汗臭いのは勘弁だよ。」

なにせアタシは、これから虎退治の作戦を練らなきゃならないんで
ね」

「ワシじゃ相手にもならんてか？」

くっ、とわずかにモーラが振り返る。

その横顔に少なからぬ憐憫の色が混じる。

「――ナガラ・リオ。」

今時いじましいまでの空手家だが、惜しむらくはトーナメントを勝
ち上げられる肉体じゃない。

三年後なら、ちよつとばかり洒落になつてなかつたかもね」

「――ぬ！」

「ビッグザム剛田。」

ガチンコじゃあ絶対にやり合いたくない化け物だが、受ける事しか
知らない。

あのオッサンと反対のブロックに入れた事は、今大会での最大の幸
運さ」

「……………」

「アムロ・レン。」

論外。

ちやらちやらした才気ばかり先走って、本物と呼べる物が何一つ無
い。

何でも出来るが、アタシに言わせりゃ空手しか出来ないナガラ君の
方がよっぽど恐ろしい」

「随分と言うてくれる、眼が腐つとるんじゃないか？」

「ただ一頭、アタシに読み切れないのは、あの人三化七のハリマオ青年

だけさ。

今の五人の中で最も優勝に近いのは、もしかしたら彼なのかもね」
アムロの反駁を省みる事も無く、モーラが再び大きな背を向ける。
舞踊の気品をかけらも感じさせない大股で。

「……………ええわい。」

そんなら宗家として特別に見せてやるわい。

本物の虎殺しのやり方をのう」

暗闇の中、紅蓮の瞳が炯炯と輝きを増していく。

モーラは振り返る事も無く、ただ無言で片手を挙げた。

可能性の獣

——武。

嘗ては『戈を止む』と書いた概念である。

その手に携えた戈にて己が往く道を切り開き、或いは戈と化すまでに鍛え抜いた魔拳を以って、立ち塞がる全ての敵を打ち斃す。

正しく乱世の処方。

血河を渡る戦士たちが唯一つ頼りとする骨子であった。

一方、今日では往々に『戈を止む』と読む。

理不尽に振りかざされんとする暴力の戈、それを抑え、制するため
の術である。

侵略、ではなく、専守防衛。

成熟する文明社会のニーズに合わせ、武術もまた窮屈ながら真つ当
な形に在り方を変えた訳だ。

戈を止む。

なれど生まれついた獣の性はどうにも捨て難い。

かつてキャスバル・レム・ダイクンが嘯いたように、全ての人間に
英知を授ける事など不可能なのだ。

『最上大業物十二工・長曾根虎徹の作は、当代に比類なき名刀と言う』

『証は?』

『四ツ胴を斬ったそうなの』

『三雷会こそ地上最強の空手、その事実を広く世に知らしめん』

『……で、誰を殴る?』

『そうだ、牛だ、牛を殴ろう!』

『護身術、とは力無き弱者の為の技、非力な女子供が修めてこそ初めて
価値を持つものよ』

『けれど、その……、相手が虎、と言うのは……?』

「——カカ、面白そうじゃのう、絶滅危惧種をブン殴れるんか?」

護身。

長年を費やしその身に修めた理合にて、地上のあらゆる災厄を凌ぐ
と言う武の神秘。

嗚呼、なれど今。

その神秘の証明の為だけに、少女は敢えて、その身を窮地に置こう
と言う。

本末転倒。

度し難き莫迦。

救い難き畜生。

なればこそ、ガンブラ・ファイトが蜘蛛の糸。

『——かつて風狂の体現者、一休宗純は幼少のみぎりに言いました。

將軍様、こちらは準備万端整いましてございます。

さあ、早い所あの虎を屏風から追い出して下さいませ』

奇妙なアナウンスが仮想空間に響く。

それは日本人なら誰もが知る、有名な頓知話の一説。

ただし、語り部はあの格闘脳、エイカ・キミコ。

『時の征夷大將軍・足利義満応えて曰く。

よくぞ申した一休！

誰かある、GPベースを持ってイ!!』

どっ、と一際歓声が沸き、二回戦最後を飾る両者が仮初のコロッセ

ウムに降り立つ。

美女(?)と野獣(??)

例えばこれが小説の類ならば、リアリティが足りない、と一蹴され
かねない珍妙なるカード。

今、しやなり、しやなりと貞淑なる足使いで、藍染のリ・ガズイが

篝火のロードを進む。

ほう、と誰かの溜息が洩れる。

風雅なる佇まい、淀みなき足捌き。

一流の擬態。

なれど隠しきれない。

その性、この少女、凶暴につき。

一方、相対する野獣はどうかと言えば、こちらはこちらで様子がおかしい。

浮ついている。

と言うか、足元が妙にふわふわとしてぎこちない。

一回戦で見せたような、触れる者全てを傷つけるようなギラついた気配が消え失せている。

満員の観衆に慣れたのか。

あるいは、先刻の麻酔が効きすぎたのか……？

舞台の中央、4、5メートルの距離を挟んで両者が向かい合う。

この段になっても虎は余裕綽々であった。

「くあくくく」とばかりに大顎を開き、背中を伸ばして欠伸を一つ。

まるで人畜無害、戦いに向かう気配の欠片もない。

「よう、どしたえトラちゃん、おねむかいや？」

呆れ果てたアムロの声。

ピクン、とバクウの顔が動き、値踏みでもするかのようにスンスンと鼻を鳴らす。

が、その内に興味を失ったのか、ついとそっぽを向いてごろりと丸くなってしまった。

「成程、のう」

アムロは理解した。

擬態でもなければ気まぐれでも無い。

怠惰こそが野生の証明。

野生は無駄を嫌う。

無駄なエネルギーの浪費を嫌う。

故に満腹の時は戦わない。

その身に脅威の無い時は梃子でも動かない。

「……そうかい、うぬもあのデカブツと同じ見解かい。

ワシン事はあのマーくんほどにも気にかからぬ、と」

くつくつと、珍しいタイプの嗤いがアムロの口よりこぼれる。

傍らのMS少女が、思わずぎよつ、と目を見張る。

あの空手少年がたまにやる類の噛いだ。
湿っぽく、陰鬱で攻撃的な自嘲めいた噛いだ。

己が内から湧き出した黒い衝動を、腹の底でぐっと押し潰した際に
嘔き出す噛いだ。

『ちよ、ちよちよちよタンマ……』

「別に暴れやせんわい、犬畜生じゃあるまいに」

色めき立つMS少女を片手で制し、すつくとリ・ガズイが居住まい
を正す。

人形のようにピンと背を張り、MS少女を遮っていた左手を、ゆる
りと前方にかざす。

差し出された左手、しなやかなるプラスチックの手甲がクルリと返
る。

その所作に、居合わせた者たちの幾人かがはっ、と気付いた。

リ・ガズイが、見えざる『扇』を開いたのだ。

アムロは今、何らかの表演に興じている。

武術、ではなく、おそらくは舞踊の。

宇宙の蜉蝣のように、ゆらり、とり・ガズイが歩を進める。

上体のブレない摺り足の運び。

それでいて、足元の砂を無粋に舞上げる事も無く、ゆるゆると滑る
ように間合いを詰める。

小癩な蠅め。

ギロリ、とバクウの片目が動くも、殺気はぬるりとアムロの五体を
すり抜けていく。

掴みどころが無い。

まるで、鶴。

撃尺の間境。

越えるでもなく、ぬらり、と――

「ヌガアアアアアッ!!」

カツ、とハリマオの両目が開いた。

野生の眼力。

謀られる事無く虎が動いた。

「!??」
「ガッ」

そして、飛び出した勢いのままに、バクウが中空に投げ出された。その顎先が、見えざる『扇』を捕えるかに見えた刹那、鮮やかにリ・ガズイの左手が返り、勢いのままにバクウの巨軀がすり抜けたのだ。

「ニヤガッ」

ネコ科動物特有のしなやかな肢体が中空で翻り、バクウがズン、と大地に突っ伏す。

後背の騒乱を振り向きもせず、ゆるゆるとリ・ガズイが距離をとる。ぴたり、と両雄が静止し、一拍遅れて、わっ、と静寂が弾ける。

「んだア!? あの嬢ちゃん、何を仕掛けたんだ!」

「……分かんねえ、けど」

モニターを臨むゴウダの驚きのに対し、傍らのナガラ・リオが呟く。その脳裏に、かつての少女の動きがまざまざと蘇る。

今、アムロがハリマオ相手に仕掛けた投げ。

それ自体は前試合にヤマモト相手に使ったものだ。

隅落とし、或いは空気投げの類に近い。

まるで相手が一人でに浮き上がったかに見えるほどの練度を除けば、体捌き自体はオーソドックスなものである。

だが、読み切れなかったのはその前の歩法。

沖縄で少女と初めて出会った時に垣間見た、あの怪しげな足運びだ。

当るとも当らぬとも分からぬ、鶴のような足捌き。

攻めるための技では無い。

間合いを詰め、相手に攻めさせ、後の先を取るための技術。

最後の投げはその答え合わせに過ぎない。

「……よく分からんが、つまり、今のはさっきのフリツカージヤブと同じ。」

天才少女特有の見せびらかしをやったってワケかい?」

「それも、どうだかな?」

「なんだよ、さっきから、歯切れが悪いな?」

「……………」

ゴウダの非難を聞き流し、むつつりとリオが押し黙る。

先の交錯の刹那、少女の背から『鬼』が噴き出したのを少年は確かに見た。

腕を極める、あるいは中空の相手を蹴り倒す。

投げに移るその瞬間まで、アムロはゴング前の『瞬殺』を意識していたに違いない。

だが、殺気は一瞬の内に雲散してしまった。

いつもの天才特有の気まぐれなのか。

技のかかり、間合い、仕掛け所を誤ったのか。

——あるいは『虎』の反応が、アムロの予想を凌駕したのか？

「ふうん……………」

わきわきと結んで開いてを繰り返して、得心が行ったようにリ・ガズイが踵を返す。

視線の先でバクウが鎌首をもたげ、グルル——、と低く呻く。

「ほれ、呆けてんなや姉ちゃん。

屏風から出してやったんじゃ、早いとこゴングを鳴らしてくれや」

『あ、ああ……………』

アムロに促され、我に返ったMS少女が慌てて距離を取る。

弛緩していた空気がたちまち張り詰め、ようやく会場に勝負の気が満ち始める。

「カカ、気に入ったわい、トラ公。

もうちつとだけ遊んでやろうかの？」

「ウガガ」

異文化コミュニケーション。

静寂に満ちた闘技場で、両者は奇しくも同じ言葉を吐いた。

——カン、と高らかとゴングが鳴った。

先に動いたのは、やはりハリマオ。

バクウの四足がしなやかに砂を掴み、風を巻いて獲物へと迫る。

一方のアムロは両手をぶらりとさせたいつもの無形。

無形の位。

大元を辿れば剣術、柳生新陰流の極意に由来する動きである。

『構え』では無く『位』を用いるのは開祖の剣術理念によると言う。

型、構え、と言う言葉では硬すぎるのだ。

本来、臨機応変であるべき肉体の働きを定型化し、自ずからその選択肢を狭めてしまう。

故に、位。

状態としては一見、静止しているように見えたとしても、その実無限の選択肢を孕んだ動作の只中にある。

今のリ・ガズイもそうだ。

何が飛んできて、何を仕掛けてこようとも、どうとでも動ける、どうにでもなる。

……と。

(……?)

思いもよらず、ハリマオの行動が変じた。

止まった。

間合いの外一杯。

なんじゃ、と疑問の洩れる間もなく、ゆるりとバクウが立ち上る。

四足の位から二足の位へ。

鮮やかな変化。

ぬつ、とバクウの巨体がり・ガズイの上に影を成す。

ぎくり、

思わずアムロが『構え』てしまった。

傍目には、体勢は何一つ変わっていない。

だが、攻める、と言う選択肢の半分を自ら殺してしまった。

迷わず野生が動いた。

「にゃがアー！」

「オウワ!？」

凄まじきハンド……、もといフットスピード。

思い切りのけぞりかろうじて避ける。

オオオオ、と観衆よりどよめきが上がる。

ハリマオの選択。

意外、それはミツキー・ローク。

猫パンチ。

野生の虎が放つ本格派の猫パンチ。

「なっ、なんじゃアッ!？」

「にゃん!」

驚く間もなく虎が迫る。

にゃん。

にゃん、ツー。

ボクシングと野性を組み合わせた、全く新しいコンビネーション。

ドタドタとした素人極まりない足捌き。

人間離れたアンバランスな重心移動。

そして常人を遥かに超越する身体能力。

「チィ!」

結果、予測不能。

読み切れない、看破出来ない。

篤人流四百年の眼力が、生後間もないタイガー流拳闘術に良いよう

に翻弄されてしまう。

「クツソ、こやつ……!」

返しの右を捌きながら、アムロがぎりりと奥歯を噛み締める。

軌道の読めない前脚と異なり、ハリマオの心情だけは手に取るよう

に分かる。

これは、座興だ。

ハリマオにとってアムロ・レンは、恐れるほどの手合いではない。

だから遊びたくなったのだ。

今やっているのは、さながらルクス・ランドアごっこ。

「ニヤガオ!」

「なアめるにやアアあアアッ!!」

チャンピオン気取りの大振りのスウィング。
流星にこれは見切れた。

少女が蛮勇で以って虎穴へと潜り込む。

差し出された右前脚を両手で捕え、腰を返して思い切り巻き上げる。

鮮やか。

仕掛けた瞬間に思わず旗が上がるほどの一本背負い。

(――↓)

すぐにアムロは違和感に気付いた。

背中が軽い。

予期していた獣の抵抗が無い。

それどころか、思いもよらぬ速度でバクウが廻る。

アムロの技量がバクウの重量を完全に殺し切った、ワケでは無論ない。

今、仕掛けているのはハリマオ。

投げられる瞬間に後ろ足で大地を蹴り、流れに逆らう事無く自ら跳んだのだ。

要は反射神経。

獣の直感と瞬発力があればこそ成せる技。

頭から大地に落ちる筈だったバクウの体が高速で一回転し、何事も無かったかのように二足で砂地を踏む。

(ありがたい！ そんなの)

驚愕。

だが、言っている場合ではない。

気が付いたら攻守が交代していた。

バクウの五体が弓なりにギリギリとしなる。

投げられた勢いに更なる回転力を自ら加え、絡め取られた筈の前脚が加速する。

凄まじいまでの臂力。

このままではリ・ガズイは、両腕ごと一本釣りに思い切りブン投げられる。

さりとしてこの膂力。

今、この前脚の拘束を解放するのも、それはそれでヤバイ。

「ヒイツー！」

意を決し、パツ、と両手を離す。

瞬間、矢の如く放たれた右前脚が体ごとグルンと弧を描き、再びアムロの眼前に迫って来た。

咄嗟に屈めたり・ガズイの頭の上。

ビュオン！ と剛爪が後頭部を掠め、弾けたメットから真っ赤なしゃぐまがばさりと舞う。

ぞくぞくとアムロの背筋が震える。

頭を下げたのは読みでは無く、ただの山勘。

もしも打撃が脇腹に来ていたら、今ごろ口から胃袋をブチ撒けていた所だ。

「……カカー！」

恐怖。

思わず噛いが零れる。

頭がいつものように回らない。

だが、体が滅法動く。

生存本能。

アムロの動物的直観が理合を超えて、肉体を前へ前へとプツシュする。

「ムギヤ……い！」

「カアツ!!」

先。

返しの左を見舞おうと体を返したバクウ。

その眼前目掛け、リ・ガズイの右指がVの字を描く。

ハリマオの野性と瞬発力は、この時、如何なく発揮された。

前に出ようと動いていた肉体に無理やりブレーキをかけ、後ろ足で砂地を蹴り上げながら後方に逃れる。

「ング」

砂礫がり・ガズイ手甲を叩き、むわつと周囲に拡散する。

さながら砂塵の煙幕。

リ・ガズイの追い足が思わず止まる。

見事なる逃走劇。

しかもそれが、そのまま逆襲の兆しに繋がっている。

アムロにとっては絶対の窮地。

この状況でもハリマオは、磨き抜かれた嗅覚と聴覚で容赦なく襲いかかってくる事だろう。

対してアムロが頼れるのは、己が第六感の一点張り。

「……ヒョオオ!？」

キュピピーン、とアムロの脳裏に閃光が走り、本能的にリ・ガズイが半身を取る。

刹那、斬撃が煙幕を切り裂いて、足元から天空へと駆け上がる。

「~~~~ツツ」

息が詰まる。

一步でも反応が遅れていれば、正中線を股倉から縦一文字に抉られていた。

恐るべしは野生のハンター。

氣勢どころか呼吸までも殺し切り、強欲に必殺を狙ってきた。

「又ギャアアアアツ」

息付く間もなく左が飛んでくる。

下がりたい、だがそれでは虎の思う壺。

調子に乗せては勢いのままに削り殺される。

「チヨイナア！」

気合いで呼吸を合わせる。

必殺の爪を紙一重でかわしながら、虎の前足首を両手で捕え、勢い良く捻じり返す。

これまた鮮やかな小手投……。

「……ガッ」

先ほどの二の舞。

ベクトルに逆らう事無くバクウの巨体がグルリと回り、すかさず側頭部に蹴りが飛んできた。

左の受けが間に合ったのは、まさしくアムロの天才の証明である。
う。

だが、美女と野獣の体格差。

衝撃を殺しきれない、後方に体が泳ぐ。

まさしく思う壺。

虎が迫る。

一気呵成。

「ガウア!!」

爪。

爪。

牙。

「チイアアッ！」

掌。

肘。

爪爪。

躰。

脚爪。

爪爪牙。

蹴。

爪。

跳。

爪。

拳。

爪爪爪。

砂。

爪爪牙膝牙爪転牙牙砂砂砂爪牙牙牙――

歓声が沸く。

仮初のコロッセウムが鳴動していた。

打ち合っている。

虎と少女が。

バクウとり・ガズイが。

今までのような男比べの類ではない。
技量比べ、組手、あるいは散打。

それは本来、二足歩行の人間同士が互いの技を試し合う光景。
利は無論、篤人流四百年の宗家にある。

実際、荒削りなバクウの連打は、悉くを払われ、いなされ、的確に
反撃を打ち込まれている。

まるで大人と子供。

四百歳もの年齢差が、一朝一夕に覆る筈も無い。

——にも関わらず、流れは徐々にハリマオの側に傾きつつあった。
「チィッ！」

アムロの口から舌打ちが洩れる。

例えば、打撃を殺す懐の深さ。

例えば、奇怪な重心から繰り出されるアンバランスな一撃。

例えば、ダメージの蓄積を阻む柔軟な筋肉。

例えば、常人より遙かに御し難い骨格。

例えば、野生の瞬発力が成す超反応。

読みきれない。

攻めきれない。

極めきれない。

理はアムロにある。

攻撃は当ってはいる。

だが、致命傷には程遠い。

どころか、却って打込むごとに野獣のアドレナリンを分泌してしま
う。

確かにハリマオの攻撃は当たらない。

だが、その打撃の全てが奔放、かつ必殺。

いつものような余裕綽々の見切りが出来ない。

予測困難な猛獣の連打を前に、思い切りの良い返しを放つ事が出来
ない。

一撃避ける毎にその心身を損耗して行く。

(…………ツ マークんの仕業かい！)

あんの小男、余計な置き土産を……)
ぎりり、と奥歯を食い縛り、現代の拳聖に謂れなき八つ当たりをす
る。

一回戦開始前、あの時のハリマオは、確かに単なる虎であった。
馬凶愛が油断なく勝負を決めてさえいれば、何の問題も無かったで
あろう。

だが、虎は生き延びてしまった、
死線を潜り、武の恐ろしさを知り、そして学んでしまった。

ハリマオは『進化』したのだ。

いや、今なお進化し続けていると言つてよい。

——軽身功、浮術、仙道、消力。

歴史に名立たる拳法家達が理想と目指した躰術の理想形を、野生の
肉体と瞬発力が蹂躪する。

新生黒虎拳。

リアル・シラット・ハリマオ。

中国四千年へ面白半分の当て擦りが今、アムロに戻る刃となる。

(……アホくさい、やってられるかい、こんなの)

はあ、と一つ溜息を吐き、リ・ガズイがだらりと両手を下げる。

両手ぶらり、得意の無形。

篤人流古武術において、この位の要は二つ。

視界を遮るものを取り払い、『見』に注力する事。

攻撃、防御のセオリーを敢えて外す事により、相手に次の動きを気

取らせぬ事。

組手を捨てる。

このまま粘った所で、命賭けで虎を拳士に教導するようなものだ。

己が引き出しは古武術家にとつての生命線。

これ以上は見せぬ、これ以上は与えぬ。

(天才は、初太刀で殺せ、じゃったの)

ビュオン！ と唸りを上げる豪爪をゆらりと避ける。

反撃のための最小の見切り、などと、みみっちい事はもう考えない。
次に動く時は、一撃で虎を仕留める時。

間を置かず、返しの左。

これも難なく外す。

さすがにハリマオも気付いたか。

「ルガアツ!!」

咆哮と共に更に馬力の乗ったスウィングが来た。

アムロは更に深く息を吐き、十分な脱力によってこれを外す。

所謂こんにやく戦法。

けれど人の肉体は蒟蒻ではない。

当たれば死ぬ。

顔にこそ出さぬが、アムロにとっても我慢比べの時間。

(……違う)

虎の連撃。

心中で舌打ちしつつ避ける。

ハリマオの攻撃、確かに荒くなってはいる。

打てば当たる、だが殺し切れるほどではない。

問題なのは、今のハリマオの憤りが本物か否か。

そう言う小賢しい搦め手をやりかねないのが眼前の畜生だ。

「ガルウオアー!」

(!)

痺れを切らし、バクウがバツ、と諸手を広げた。

刹那、弾かれたようにリ・ガズイが動いた。

明らかな誘い、罠の公算、大。

だとしても、アムロにとっては千載一遇の好機。

両側面から挟み込むように、虎の両腕が迫る。

その必殺の爪の内側へと全身を滑り込ませる。

両のこめかみに添えた拳で外からの圧をいなしながら、更に相手の

眼前へと肉薄する。

ここまでは読み切れた。

諸手の爪は囷、敵の本命はそこからの噛みつき。

必ず自ら頭部を前へと差し出してくる。

その両眼目がけ……、親指を突っ込む!

「ッ！」

突如、痛烈な力に両腕を持っていかれた。

バツと諸手を広げ、何故か再び胸元を開いたバクウ。

隙だらけ、最大のチャンス。

にも拘らず、まるで鏡写しになったかのように、リ・ガズイの両手が十字を描く。

「なん……じゃと？」

そこでようやく気付いた。

己が胴衣姿に合わせ、せめてもの洒落つ気にと改造したり・ガズイの『袖付き』の腕部。

その両の袖口に、小癩なる爪先が引っ掛かっている。

これは、磔刑。

絶対絶命。

一見、同じ状況なれど、ハリマオは文字通り最後の牙を使える。

「ギャラアッ！」

「カッ」

処刑の一瞬。

思いもよらずリ・ガズイが前に出た。

ガパリと開いた大顎の前に、己が頭部を差し出す暴挙。

自殺、惨劇。

ひっ、と気の弱い観衆が視線をそむける。

間を置かず、ゴギャ、と言う鈍い音。

「ギャガ!？」

よろり、舞台の中央で二つの機影がもつれあう。

相打ち。

だが、哭いたのは意外にもハリマオ。

「——カ、カカ！ カカカカ!!」

かろうじて体を引き起こし、アムロ・レンが不敵に嗤う。

ぶるりと一つ頭を振るうと、たちまち額より溢れた鮮血が視界を染める。

やった。

読み勝った。

ブチ込んでやった。

渾身の頭突き。

分厚い頭骨を下顎に。

ぐらり。

バクウの巨体が仰向けに泳ぐ。

チャンス到来。

問題は何を選ぶか。

蔓……ではワンテンポ遅い。

掴む、極める。

その間に猛虎の逆襲も覚悟せねばならない。

やはり、狙うべきは打撃。

それも即効性の求められる急所への一撃。

答えは最初から出ていた。

「タマア!!」

ピン、と尖ったり・ガズイの爪先。

迷いも躊躇いもなく右脚が疾る。

愉悦の瞬間。

その貴重な遺伝子を蹴り潰してや——

「——ッ」

思いもよらず、ぐつ、と両腕を引っ張られ、浮きかけた右足が大地に沈む。

何たる事。

何という執念深い爪。

引っかけた袖口を離していない。

バクウの倒れ込む重量そのままに、リ・ガズイの上体が引き摺り込まれる。

加速する肉体。

跳ね上がる後ろ足。

巴投げ？

いや、この速度はむしろ打撃。

バク宙……、ちゅうかサマソツ!?

「キイイイイイ!!」

アムロが叫ぶ。

必死。

もう武術もクソも無い。

とにかく逃げる、腰を落として思い切り体を倒す。

不幸中の幸い。

バキヤリと袖口が損壊し、勢いのままり・ガズイが後方に尻もちをつく。

同時にひゅん、とトンボを切って、バクウの五体が鮮やかに翻る。オオオ、と。

死線を繰り返すシーソーゲームに、観衆の溜息が洩れる。

「ヒイ、ヒイ……」

パンパンと尻の砂を落としながら、ようやくリ・ガズイが体を起こす。

誰だ、こんなロクでもないマッチメイクを仕組んだのは?

一回戦はアシユラマン、二回戦はまんまハリマオ。

どうやらとんでもないイロモノブロックに放り込まれてしまったようではある。

とは言えども護身術。

嘆いてばかりもられない。

守^{まも}護り切らねばならない。

相手が何者であろうとも。

己が身を、己自身で。

そうでなくては估券に関わる。

「……なんじやいトラちゃん、待っててくれたんかい?」

エエ子じやのう」

「ウガ」

からかうような甘い声に「その手は食うか」と虎が応じる。

地に伏すように低い、這いつくばった四足の位。

ぷん、と卵でも腐ったかのような匂いが、アムロの鼻孔を仄かにくす

ぐる。

死臭である。

戦国期、矢尽き刀折れた極限下でなお生き延びる事を目指した篤人流なればこそ、そう言った気配を鋭敏に嗅ぎ取る聡さが宿る。

ようやく向うも本身を抜く気になった、という事なのだろう。

今のハリマオが放つ殺気、状況は先ほどより一段、死に近い。

(……ようやく、かい?)

まあいいわい、これ以上お遊戯に付き合わされるのは、こちらも御免じゃ)

対するアムロは三度、だらりと無形の位。

いや、先刻よりもくつ、と前足に重心を乗せた姿は、少女の如何ともし難い性の顕れか。

アムロ・レンは度し難いほどの天才。

故に、日常を持って余す。

窮地を嗜む。

綱渡りでもするかのように、軽やかに死線を歩く。

今日もまたゆるゆると、自ら虎の尾を踏みに行く。

つ

リ・ガズイが半歩、間合いを詰める。

つ

合わせて半端、バクウの後ろ脚が下がる。

つつ

リ・ガズイが更に大きく歩を進める。

つつ

一定の間合いを保ちながら、ハリマオが更に後退する。

張り詰めた緊張感の中、駆け引きが進む。

傍目には、少女の並々ならぬ気迫が虎を圧しているようにも見えるかもしれない。

だが、見えている者には見えている。

全ては予定調和。

つ、つつ、と肉薄すること、アムロの周囲を取り巻く死臭が、く

らくらくと眩暈を覚えるまでに濃くなっていく。

やがて、虎の後退がぴたりと止まった。

壁際一杯。

ハリマオ、背水の陣。

とは言え、窮虎の狙いは精神的高揚でも無ければ孫子の応用でも無い。

理由はもつとシンプル。

踵の後ろに、スターティングブロックが欲しかった。

理合すら吹き飛ばす初速を得られるほどの。

「ギャルルルル……」

殊更に頭を低く、腰を高く上げたバクウの姿勢。

力漲る五体が、これ以上は退かぬ、と如実に告げている。

(……まるで、リオの試合の再現じゃの)

緩やかな歩みを止める事無く、アムロ・レンがクスリと嗤う。

まったく、あの小僧の不器用さは度を越している。

幾つもの手札の中から相手の対応を予測し最善手を選び、最新の注意を払って間合いを詰める。

そんな悠長な準備をしている間に、敵は盤石な布陣を終えてしまうだろう。

故に迷わぬ、歩みを止めてはならぬのだ。

天才には準備など必要無い。

どうせ条件としては五分と五分。

だがもしも、寸微でも対主の動揺を誘う事が出来たなら、それだけで勝敗は確定する。

いずれにせよ分の悪い賭けでは無い。

そう言う世界で、アムロ・レンは今日まで生き延びて来た。

(よう見とけよナガラ・リオ、切り落としちゅうのはも——)

斬ッ!!

突如、少女の脳裏に鮮血が咲いた!

人類の革新ッ!!

迷わずリ・ガズイが飛んだ!

「ルガアアアアアアア——ツツ!!」

合わせて一直線にバクウが壁面を蹴った。

その瞬間には少女はもう、ハリマオの視界から消え失せていた。

「カカー！」

「ギャウツ」

ズン、とハリマオの腰骨に衝撃が来た。

たちまち獣の太い頸に、しなやかな指先がしゅるりと纏わり付いていく。

四足獣にとって最大の死角、頭上からの攻撃。

立ち上がる暇すら与えず、天才があっさりと上を取った。

いつかのリーオーのように、頸動脈を遮る爪襟も無い。

決着。

誰が見ても分かる投了の形。

恐るべきは篤人流。

恐るべしアムロ・レ——。

「カヒヤツ!?!」

ゴツ、と頭上からアムロの首に衝撃が来た!

頸椎であった。

「!?!?!?!」

不意打ち。

威力自体は大した打撃では無い。

とは言え人体急所、じんわりと脳みそが痺れ、思考の余地が奪われる。

驚く間もなく圧力が加わり、リ・ガズイの顔面がバクウの背骨に縫い付けられる。

(そうか、こ、こヤツ……!)

ようやく状況が理解できた。

逆襲のハリマオ、秘訣は健康な肩甲骨。

規格外の柔軟性を誇るハリマオの両肩。

それが高らかと上空に立上がり、肘先でクロスしてリ・ガズイの頸部を抑え付けていたのだ。

まるで人間断頭台。

しかもこの台、加速している。

四足から二足へ。

進化する虎。

進化するバクウは—— 猛る！ 滾る！ 爆ぜる！ 駆ける！

「……ギャー！ ガ……！！ ンゲ!!!」

「~~~~ツツツ」

凄まじい衝撃と圧迫。

これが本当に人一人背負った酸欠の人間の走りか？

アムロの脳裏に、根平海岸での苦いトラウマが甦る。

そう、確かにあの夜もこんな場面があった。

不器用な負けず嫌いの空手小僧は、こんな敗北を認めるしかない状況でも必死にもがいた。

あの時と違う要素が二つある。

一つは頸部を上から固定する太い両手……、もとい両足首。

断頭台のように頭部をロックされ、脱出が出来ない。

今一つは、バクウの行く先。

ここは海岸線では無い。

全力疾走のバクウが行き付く先は、必然——

(……壁——)

・
・
・

——ズン。

衝撃。

仮初の観客席が僅かに揺れた。

凄惨なる自爆。

リ・ガズイを背負ったバクウが、全力疾走で己が身を壁面へと叩き付けたのだ。

ざわざわと、そこかしこから恐怖が溢れだす。

ガンプラファイト最大トーナメント。

世界一どうしようもない負けず嫌いを決める大会。
なれど人とは、ここまでして勝利を求めて止まぬ生物なのか？

「ギャル……ルルワ」

先に動き出したのは、やはりハリマオ。
痙攣する五体を無理矢理に引き起こし、しっかりと四足で大地を踏み締める。

獣の柔軟な体軀も去る事ながら、衝突の瞬間、リ・ガズイの体を挟みこんでクッションとしたのだから、そもそも根底のダメージが違う。

決着。

両者の被害状況は明白。

獣の全力を全身で浴びた少女に、もはや、反撃の余力などは。

「……カ、キャハ、カヒヤ……」

会場にぼつり、虫の息のような嗤い声がこぼれた。

ゆらり、と思いきもよらずリ・ガズイの体が立ち上がる。

いや、正しくは立ち上がれてはいない。

やはり肉体のダメージは深刻。

上体だけ、女の子座り。

文字通り、腰が入っていないのだ。

震える両膝は大地に投げ出されたままである。

ただ笑声だけがケタケタと、幽鬼のようにほつれた赤髪を揺らしている。

頭を打ったか？

ぞくり、観衆が戦慄する。

だが、戦場は待つてはくれない。

物言わぬバクウの瞳に、たちまち野生の闘争心が宿る。

「何やってんだ馬鹿！ 黙って寝てろ!!」

空手少年の必死な叫びが空気を震わす。

茫漠とした深紅の瞳に、その意味が果たしてどれだけ伝わった事か。

至近に迫るバクウのデカイ顔。

がぱり、と死の大顎が広がる。
くつくつと嗤って、少女が右手を差し出す。
見る影も無い緩やかな右突き。
蠅螂の、斧。

——ばくう。

「キヤアアアアア——ツツ!？」

絹を裂いたような悲鳴が観客席から響き、たちまち会場に混沌が溢れだした。

リ・ガズイの、アムロ・レンのしなやかな右手が、肘の根元からばかりと啞え込まれている。

無残なる天才。

凄惨なる姿。

いかにガンブラ・ファイトが最低保証付きの闘争とは言え、その光景は正視に耐えうるものではない。

「バッカ野郎、決着は付いてんだよ！

とつとと試合を止めろオ!!」

仮初の闘技場にナガラ・リオの振り絞るような叫びが轟く。

傍らのゴウダが見かねたようにその肩を叩く。

「落ちつけよ坊や、ナントカシステムって奴があるだろ？」

嬢ちゃんは死にやあしねえよ」

だが、激昂するリオはゴウダの制止も振り切って、なお叫んだ。

「馬鹿言ってるじゃねえッ！死ぬのはハリマオの方だ!!」

「……カカ☆」

闘技場の中心で、奇怪な笑声が再びこぼれた。

無邪気さゆえに残酷な、子供のように奔放なイントロネション。

その音色に会場のざわめきが、はたと止まる。

奇妙な状況であった。

衝撃的な光景に紛れて気付かなかったが、今や向かい合った両機の動きが完全に静止していた。

バクウがひと思いに一噛みすれば、あるいは押し倒して踏みつけてしまえば、たちまちに勝敗が決すると言うのに……。

いや、静止している、と言うのも少し違う。

止まっているワケではない。

振り絞った両者の力が拮抗して、そう見えているだけなのだ。

瀕死の少女の片腕と、大会屈指の膂力を持った野獣の全力が釣り合っている。

常識的に考えればあり得ない話。

つまりそれは、アムロ・レンが理合を使っていると言う証座。

「カカ、カカ！ カアーツカツカツカツカツカア——ツツ！！」

少女の笑い声に邪悪な快活さが戻る。

ぐつ、と右足に力を込め、突き出した右手を捻じ込みながら体を起こす。

「ゴア」と潰れた蟊蛙のような嗚咽を漏らし、バクウの体が大地に突っ伏す。

「ようやく……、ようやつとかかってくれたのうハリマオオ！

この瞬間を待ち焦がれておったんじゃア!!」

あつ、とたちまち観衆の悲鳴が上がる。

禁じ手の正体は至ってシンプル。

噛み付かれたのでは無い、咥え込まれたワケでも無い。

ガラ空きになったハリマオの喉奥に、アムロが右拳を思い切り押し込んだのだ。

「根止め……、そいつを実戦で、人間相手に使うのかよ」

ぎりっ、と奥歯を噛み締め、ナガラ・リオがモニターを喰い入るように見つめる。

かつて高野の修験者が、襲いかかる熊を相手に必死で編み出したとされるその魔拳は、その実、運動力学においても理に叶った攻撃と言える。

単に気道を塞ぐのみでは無い。

この体勢になると、対主は口を閉ざす事が不可能となる。

咬合力を殺されてしまうのだ。

歯を食い縛る、と言う行動は、力を振り絞る全ての行為に突き纏う重大な因子である。

それが封じられたと言う事は、即ち、戦士として無力化されたと言っても過言では無い。

本来、対人戦に用いるべき技では無い。

そもそも、拳が丸ごと呑み込めるほど大口を開けられる人間自体が世間には稀である。

倫理的にはなく物理的に、狙って極められるような技では無いのだ。

だが、実戦では不可能でも、ガンプ・ファイトでならば可能であろう。

まるで現実の虎さながらに巨大なバクバクウの大顎。

あくまで現実の人間サイズに過ぎないハリマオの喉。

そのギャップ、篤人流四百年の禁じ手を試すのに、これ以上の適材はあるまい。

己が生命の危機にそんな博打を思いつき、迷いもせずに実行に移す。

まさしく鬼畜、天魔の所業。

「カカカ、ツイておったのう。」

「ここが故郷のマンングローブでなくて、のう？」

「オ……ア……ガ……」

嘲るように嗤いながら、ぐっ、と右手に力を込める。

それだけで強靱であった虎の五体が一方的に蹂躪される。

「哭けや、ハリマオ。」

最期はカッチョよく極めさせて貰うでな」

「……ッ ガア!!」

油断。

ハツキリとした兆候があったでワケではないが、ハリマオはアムロの胸中の、何とは無しの弛緩を敏感に感じ取っていた。

それが本物の油断なのかは分からない、が、とにかく虎は動いた。野生の瞬発力を総動員した、高速で体を倒しながらのバク宙回転蹴り。

先ほどは空振りに終わった攻撃であるが、今回は口中の右腕をそのまま引きずり込んでいる。

確実に当たる。

目を瞑っていたって当たる。

当たる……はず。

「ほい」

瞬間、アムロが文字通り、ふわりと宙に舞った。

重力の枷を感じさせぬ軽やかさで。

そうしてまるで華に惹かれる胡蝶のように、中空で仰向けになったバクウの腹の上に緩やかに降り立った。

どきり。

天空を仰ぐハリマオの視線と、大地を覗き込む少女の視線が交錯する。

その時ハリマオは見た。

目に映るもの全てを焼き尽くす、煉獄のような赤――。

まるで、走馬灯のようにハリマオはあの日の事を思い出していた。怖い物知らずだった幼少の自分。

光届かぬマングローブの密林を我が物顔で練り歩き、いつしかとつぶりは暮れて、そして虎の子は『アレ』と出会った。

――まもの

世界の深淵に潜む怪異。

人里の大人たちに話しても信じはすまい。

だが、人跡未踏の暗闇の世界には、確かにそう言ったモノが鎌首を

もたげている事をハリマオは知っている。

あの日、どこをどう逃げたのかは自分でも覚えていない。

戦おうなどと思いつきさえしなかった。

とにかく宵闇を駆けて、駆けて、駆け抜けて。

全身に擦り傷と打撲の痕を創りながら、それでもハリマオは生き延びた。

ああ、それではやはり、自分は衰えてしまったのだ、とハリマオは思った。

文明社会と交わる事で、虎の子の野生が失われてしまったのだ、と。人の世界に、人の皮を被ったまものが何食わぬ顔で徘徊しているなど気付きもしなかった。

時すでに遅し。

此処は既に逢魔ヶ辻。

今こそが最早、逢魔ヶ刻。

「カアッ！」

リ・ガズイが腰を返す。

右拳が虎の口中よりガバリと抜け、入れ違うように左拳が打ち下ろされる。

バクウの眉間を突き抜け、そのまま大地まで叩き付けんばかりの左。

「……南海の孤島に、ド畜生が潜んでいやがったかい」

どこか憐れむ様に、モニターを臨むモーラがぼつりと呟く。

直後、少女の全体重を乗せた鉄槌が、ゴツ、と虎の頭部を砂地へのめり込ませた。

「……いや、悪くない、堪能させて貰ったわい、ハリマオよ」

静寂に満ちた仮初の闘技場に、少女の独白が零れる。

パンパンとスカートアーマーの砂を払い、ほつれた後ろ髪を整えながら、アムロ・レンはゆつくりと立ち上がり、再び嗤った。

「うぬはなーんも悪くないんじや、ハリマオ。

カカ、それでも強いて過ちを挙げるならよ……。

ワシと同じ時代に生を受けた、己の迂闊さを呪うがよい」

何も考えずに走れ！

——カツン、カツン。

年季の入った黴臭い石畳を、乾いた金属の靴音が叩く。ほの暗く細長い、アーチ構造の回廊。

仮想空間なればこそその懐古趣味であるが、ナガラ・リオは存外、このひと時が嫌いでは無い。

背後より異形の吐息が頬を撫ぜるような生々しい闇。

とても電子の匠とは思えぬ魔性の気配は、しかし、彼が幼少より慣れ親しんだ山中の夜に良く似ていた。

点々と灯る松明の先に、パツクリと空間を四角に断ち切ったかのような眩い白が見える。

ふわりとほのかな風に乗って、歓声が少年の耳にまで届く。

この熱狂、恐らくあの男、ビッグザム剛田は既にあそこに居るのである。

ふるり、と知らず指先が震える。

武者震いなどと強がるつもりは毛頭ない。

恐怖に疎いと言う事は、武術家としては致命的である。

野生の時代に培われた生存本能のフアクターが、どこか欠落しているのだ。

肝要なのは恐怖を捨て去る事では無く、それを御する事。

(……今日は、死ぬには良い日だ)

瞳を閉じ、おまじないのようにそつと呟く。

亡父の口癖。

生き延びたい、と言う生物の大前提を覆す事によって、死人の世界から現し世を覗く。

事象があるがままに捉える事が出来たならば、その時心は波立たず、拳のブレは無くなるのだ。

静かに息を吐き出し、ゆっくりと瞳を開ける。

……指先の震えは、収まらないままであった。

どうやら今日ばかりは、おまじないも効きそうに無い。

肉体が覚えてしまっているのだ。
信じていた空手が砕かれた夜の記憶を。

どくり、と沸き立つ血液が心臓より噴き上がる。

それが歓喜なのか、恐怖なのか、あるいは発作的な衝動なのか定かではない。

様々な感情がないまぜになり、僅かばかりの理性までをも押し流そうとする。

(本当に闘るのか？ こんなグチャグチャな状態で……)

かたかた、と、ついには膝にまで震えが伝搬する。

何とかしなければならぬ、が、暴走する感情を御する術を少年は知らない。

滾る血潮に押されるままに歩は進み、さまざまな記憶が脳内を駆け巡る。

眩いスポットライト。

はちきれんばかりの肉体。

固く張りつめたロープ。

揺れるキャンパス。

熱狂に燃えるリング。

強い。

プロレスラー。

それはもう、兵器。

てんで届かなかった、空手家の刃――

『最後の貫手……』

リーオーの指先がこんな状態じゃなかったら、きつと完全に決まっていた』

――ヒライ・ユイの声。

(……………)

『ナガラ拳は、どこも壊れてはいない。

ただ、私のリーオーの指先が、空手の威力に耐えられなかっただけ』
みちみちと膨らんだ手の甲をなぞる、ほっそりとした白い指。

感情を押し殺して、淡々と少女が語る。

感情をひた隠しにした眼鏡の奥で、少女が静かに泣いている。ずきり。

一際大きな痛みが胸中を刺し貫く。

確かにあの日、自分はプロレスに敗れた。

だがそれは空手の敗北を意味する所では無い。

単純に、自分の修行が、実力が足りなかったと言うだけの話だ。

空手への信仰は、未だ揺るがず少年の胸の内にある。

敗北の屈辱など、あの日の少女の心の痛みに比べれば些事に過ぎない。

純白のリーオー。

それがどれほど尊い代物であった事か、ガンプラを知った今なら分かる。

どれほどに少女の想いを、その信仰を乗せた機体であったかを。

そこいらのガンダムに遅れを取るような生半な機体では決して無かった。

それを自分は、知ろうともせずダメにした。

『私にはもう、あなたと組む資格が無い』

(……違う、違うんだ！ ヒライ)

必死に心の中で叫ぶ。

ヒライは何も悪くない。

自分が未熟だったのだ。

力も、技も、心構えも、何もかも。

そう少女に告げたかった。

だが言わなかった。

くだらない泣き言など、スティックなヒライの耳には届かない。

ただ、謝罪を口にした分だけ自分の気持ちが軽くなると言うだけの欺瞞だ。

あの時の少年は、少女の魂を救う術を持たなかった。

だから代わりに別の話をした。

亡父に学んだ野良犬の生き方の話をした。

力が足りない、言葉も持たない。

だから少女を巻き込んだ。

自分にとって最も都合のよいやり方で。

あの日以来、リオはヒライの作ったリーオーを何度も何度も潰し続け……、

そして今日、ようやくこの舞台にまで辿り着いた。

(許してくれ、ヒライ、必ず埋め合わせはする)

証明する。

ヒライの作るリーオーが、ガンダムを倒し得る可能性の牙である事。

今日、この時、この場所で。

あの、黒く太く強大なガンダムを相手に。

リーオーの足は、いつしか回廊の出口まで辿りついていった。

たちまち広大な天地が視界一杯に広がり、わっ、と言う大歓声が少年の肌を叩く。

『さあ、空手少年がやってきた——ッ!!』

準決勝第一ラウンドは異例のリベンジマッチだア!

鍛えに鍛えた空手の拳は、今度こそプロレスラーの装甲を貫けるのかッ!』

MS少女の大仰な物言いに会場が沸き立ち、熱狂が仮初の大気を焦がす。

ガンプファイト地下トーナメント、準決勝第一試合。

格闘バカの一限りの夢の祭典も、いよいよ佳境に差し掛かろうとしていた。

割れんばかりの歓声の中、少年が悠然と歩を進める。

視線の先、舞台中央では件の男が観衆に片手を振るっている。

元超日本プロレス所属『ビッグザム剛田』

そしてプロレスラーのために生み出されたガンプラ『AGE—ONE
EタイタスNOAH』

むわっ、と、たゆたうような熱波が少年の頬にまで届く。

ただ、そこに在るだけで、会場の空気が2、3度は滾るかのような圧倒的存在感。

男と言う生き物を丸ごと鑄型に閉じ込め熱したかのような、黒く、太く、逞しいMF……。

「つたくよう、ロクでもねえ夜じゃねえか」

「……………?」

飄々と声援に応えながら、まるで飲み屋にでも繰り出そうかと言う気軽さでゴウダがぼやく。

「ぼうやがいけないんだぜ。」

そんなチンケなナリで頑張りすぎるからよオ……。

おかげでこっちはもう、奥歯の奥までガタガタだよ」

「ああ……………」

言われ、リオもまた自然体で応じる。

指先の震えはいっししか収まっていた。

「悪いな、アンタに気を使わせちまったか?」

「まっ、ともあれ、こんなトコまで来ちまったんだ。」

この間の試合よりは気張ってくれや」

「…………やるだけの事はやってみるよ」

短く応え、背を向ける。

因縁だの雪辱だの、プロレス的な諸々を取り払った軽さ。

こんな他愛ない雰囲気から、息を吐くように死闘が始まる。

この微妙な緊張感も悪くない。

「ああ、それとよ……………」

小間事でも思い出したかのようなゴウダの眩きに、ふっ、とリオが振り向いた——次の瞬間

ガスン!!

「——ガッ!?
?!?!?」

不意に頭上から衝撃が来た。

ハンマーブロー。

天空から容赦なく打ち降ろされた、ゴツイ、手。
後頭部。

火花。

フラッシュ。

虫が……痺れ、視界が傾ぐ。

不意打ち、奇襲、困惑。

バカな。

189cm 116kgの偉丈夫が？

自分の方から仕掛けるならともかく。

思う間もなく、第二打！

背面、否応なく地面に叩きつけられる。

じやらり、と鉛の擦れ合う音。

いや、違う。

凶器攻撃。

バカか、俺は。

ゴウダ・カオルは徹胴徹尾プロレスラー。

オーデイエンスを盛り上げるためだったら、悪魔にだって魂を売る男。

「……へっ、一足お先に、カリだきやあ返さしてもらったぜ」

タイタス、喜色満面。

重厚な鎖をじやらじやらと弄びながら、開いた左手で卸したてのマスクをベリベリと剥がす。

たちまち、あっ、と観客が叫ぶ。

「ゴウダが突っかけた！」

「因縁の鎖分銅ウ!!」

「まだ根に持っていやがったのかッ！」

『ちよちよっ!! おっさ、アンタ何やっど——』

「しゃーらっぷぶ」

『ぶぎや!?!』

と、このタイミングで最悪のアクシデントが重なった。

振りかざしたタイタスの拳がぶち当り、傍らのMS少女が思い切りはしたなく引っくり返る。

何という偶然！

伝統芸能。

阿吽の呼吸。

完成された茶番。

ともあれ、これで審判じやまものはいなくなった。

「……リオ君が一言でも抗議をしたら、即座にゴウダ選手を反則負けにしなさい」

諦観の溜息と共に、リー・ユンファが力なく扇子をかざす。

やや遅れ、ゴングの音が架空の空に響いた。

「H A H A H A！ あー ゆー ですとろーい？（あなたはテスト

ロイですか？）」

「ぐガ……ッ」

無理矢理引きずり起こされたリーオーの首筋に、後背よりじやらりと太い鎖が絡み付く。

抵抗する間もなくピン、と鎖が張られ、そのまま高らかと宙吊りにされる。

呼吸が出来ない、どころでは無い。

厚い襟首の上から頸椎まで押し折ろうかと言う圧倒的膂力。

しかも今度は学習している。

空手家の手の届く所に指が無い。

「……っの……っ！」

必死。

リーオーが首筋の鎖を両手で掴み、ブラブラと必死で体を揺する。

吊られた頸椎を支点にブランコのように高らかと両足が上がり――

「――じゃらあッッ!!」

「んお!? げぎゃッ!!?」

瞬間、反動をつけた渾身の後ろ踵蹴り。

左の撃鉄が、金色に輝くタイタスの股間を強かに叩いた。

辜丸は、内臓である。

肋骨も胸骨もなく、薄皮一枚隔てて外界に曝された絶対急所。

生殖活動に必要な適温を保つべく配された、人体の苦肉の策。

鍛えようがない、抗いようが無い、いかなタフガイであっても。

「がはっ」

じやらん、と鎖が太い手を滑り落ち、たちまち二人の体が大地に沈む。

「げばッ んっぐう……ッ！」

むせつ返る肉体に鞭打って、リーオーが力強く体を起こす。

ぜえ、ぜえ、と荒い息を吐き出し、ようやく一息ついて足元を見下ろす。

——黒く、太く、逞しいタイタスは股間を抑え、未だ蟊蛙のように大地に這い蹲っていた。

「ぜえ、ぜア……、ふっ、ふへっ、へひや……」

湧き上がる黒い衝動を押し殺し、くつくつとリオが嗤いをこぼす。

「……へ、ではっ、でははは……」

少年につられゴウダも嗤う。

嗤う、それしか出来ない。

「ジャアアッッ!!」

直後、禪身のサッカーボールキック!

決して人間相手に使うべきでは無い蹴撃を、タイタスの顔面目がけて思い切り叩きつけた。

バギャツと派手に音を立て、タイタスの上体が跳ね上がる。

「……! でえっ」

振り抜いた瞬間、不意にリオの爪先に痛みが走った。

出所は蹴り足の先端。

ヒライが丹精込めて作ってくれた右の親指に、タイタスが文字通り喰らい付いていたのだ。

「~~~~~っ やめねエかバカ!」

「ンゴ! ンガ! んっヌゴガ!」

リーオーが必死で右足を振るい、タイタスを振り落とそうとする。だが、喰らい付くタイタスもまた、必死。

ここで振り払われては、股間の激痛が引く前に滅多蹴りにされる。ともかく十秒、あと数秒か?

それまでは恥も外聞も捨てて凌がなければならない。

必至、双方ともに必死。

大の大人が。

おそらくはガンプラバトル史上、最も必死、かつ低レベルな男たちの攻防――。

「フンガアアア――ッ!!」

「!」

やがて、時は来た。

突如として蘇った人間MAが、強烈な体をリーオーに浴びせてきた。

思わず踏み止まろうと前傾になった肉体を、アーチを描いて逆方向にぶっこ抜く。

鮮やかな返し、リーオーの体があっさりと浮き上がる。

見事なフロントスープレックス。

だが完璧では無い。

空手家の両手が空いている。

迷いもせず、リーオーが親指をタイトスの両目に突っ込みに行く。

「ウヌー」

頸を捻って両の親指を交わし、バランスを崩した二人がもつれるように大地に転がる。

双方、砂地に塗れ、歓声が、興奮が混じり合う。

「でははッ、汚エー!

えげつねえなあ、ぼうや。

モノホンの空手家と闘りあってるんだって、ようやく実感が沸いてきたぜ」

「……くっ」

どの口が言うか?

くつくつと、どちらからともなく噛み合う。

大気が沸騰する。

どくり、どくりと心臓が鳴り、煮え滾る血液がオイルとなってリーオーの全身を駆け巡る。

「ゴウダ……、ゴウダアアアアア——ツツ!!」

魂の木星エンジンに火が点いた。

それは地獄への片道切符。

衝動に身を任せ、今、野良犬が勇ましく大地を蹴った。

・
・
・
そこから先は滅茶苦茶だった。

熱狂、狂乱、乱打。

歯止めも効かぬまま、しっちゃかめっちゃかに拳を振るっていた。作戦も、理性も、野良犬を繋ぎ止める鎖の全てが弾け飛んでいた。

体が熱い。

拳も。

幻想と現実の狭間で、熱にでも浮かされたように体が動く。

打ち込んだ指先から灼けるような炎が広がり、ぶわっ、と会場全体に熱病が伝染する。

湧き立つような歓声、それで気付く。

自分が今、ゴウダの仕掛けたアングルの中にいるのだ、と。

気が付いて、だから何だと右脚を浴びせる。

確かに自分は浮かれている。

ゴウダの流れに乗せられている。

ゴウダの生み出した流れの中で、滅法肉体が動いている。

それならばもう、それで良い。

向うはプロレス二十余年。

海千山千、立ち止まり、心理戦で渡り合えるような手合いではない。

無策、無謀——、若さゆえの過ち。

ビグザム剛田には無い、ナガラ・リオの重要な牙だ。

ゴウダが流れを生み出すならば、その潮流に乗り切って押し込むのみだ。

「シィヤッ」

相手の足元目掛け上体を沈めながら、背中からブン投げるように右

拳を飛ばす。

ロシアンフックに近い右のスウィング。

大振りでありながら軌道が読まれにくく、しかも丁度良い位置にデカブツの顔が来る。

ナガラ・セイイチロウの空手では無い。

大格差を克服せんとするリオの鍛練が、自然にそのフォームを生み出したのだ。

(これなら——！)

ガギン、と言う鈍い手応え。

まるで、壁。

衝撃は十分、だが、上体が止まる、てんで打ち抜けない。

知っている、この感触は件の肩止め。

ゴウダ特有の顔面を打たせていく防御法。

(これなら、じゃねえっ！)

たちまち飛んでくるビッグ・ブーツ。

半身を取ったリーオーの脇を、ビュオンと太い脚が通過する。

驚く間もなく、至近からの掌底。

逃げれば打ち抜く、受ければ掴む。

欲望に満ちたブ厚い手。

「シッ」

下がりながら、左のショートアップ。

顔面に迫る強欲を、下からパアン、と跳ね上げる。

ビリビリとした左手の痺れが、たちまち背筋に伝搬する。

(下がっている、場合かッ)

迷いもせずに再び踏み込む。

厄介なのは体格の圧力。

根負けして退がれば、たちまち世界の果てまで追い詰められる。

恐怖を忘れてはならない。

恐怖に呑まれてもならない。

リーオーの拳が届く間合い。

タイタスにとって、殴り合うには窮屈な間合い。

積極的に掴み合うには、微妙に遠い間合い。

そんな、あるかないかのギリギリの位置だけが、リオがゴウダと張り合える唯一の世界線。

(それにしたって……)

一体、どう言う事なのか？

何と言う肉体である事か。

大雑把なタイトスの金型に、超圧縮したゴムを極限まで充填したかのような規格外の肉体。

重厚にして、芳醇。

少年の十年を凝縮した空手家の拳。

確かに当ってはいる、間違いなく効いてはいる。

しかし、芯の芯まで響かない。

これでは斃れない、斃せない。

かつて、ビッグザム剛田は酒の席で嘯いた。

プロレスラーは天に愛されし特別な職業だと。

種族が、立っているステージが違う、と、つまりはそう言う事なのか？

(いや、違う)

下らぬ世迷を打ち消す。

ナガラ・リオはこれまで散々目の当たりにしてきた。

地上最強のプロレスラーが、成す術も無く打ちのめされる所。

日本のパウンド・フォー・パウンドが追い詰められる所を。

ビッグザム剛田も所詮、人の子。

ルクス・ランドアが、ガチぴよんがそれを成した。

(だとしたらやはり、足りないのは俺……)

ぎりり、と噛み締めながら拳を叩きつける。

空手に捧げた青春、その十年、この正拳が不足だと言うのか？

パンチの質が——？

いや、着ぐるみの重さを取り払った『彼』の拳に、自分の拳骨が劣るとは思わない。

で、なければ、技量が——？

いや、老境にかかったルクスの剛腕は、既にボクシングテクとは無縁の境地にあった。

自惚れでなければだが、自信の体力技量が二人に劣るとは思えない。

だとしたら残すは……『心』の部分。

あまりにもオカルトめいた、他愛のない妄想。

……しかし、思い当たる、フシがある。

存在そのものが米国ステイツである男、ルクス・ランドアの左フック。

子供たちの夢を演じきる事に半生を費やした、ガチぴよんのマッシュアルアイツ武術。

そして、未だに亡父の敷いたレールを踏み越えようと足掻き続けている、半端者の拳。

馬鹿な事を、と思う。

しかし、そう言ったモノがあるのではないか、とも思う。

歴史的説得力。

拳に乗った人生の重さ。

その、器械では計れない何グラムかの重量こそが、ゴウダの二十余年に及ぶスクワットを打ち破る鍵なのではないのか？

……下らない事を考えている。

自身の力量が及ばないのを棚上げして、無い物ねだりの言い訳をしている。

そう割り切ろうとしつつも、思考は尚も未練を引き摺る。

例えば、今、ゴウダの腕を叩いた左拳。

これが亡父の物であったなら、果たしてゴウダはどうなっていただろうか？

（――！・何と言う事を!?!）

ぞくり、と、少年の背に悪寒が走る。

男は一匹。

初めて立ち会った時も、今際の際の病床にあっても、父は何ら揺らぐ事無く、そう言った言葉を少年に教えた。

武術家にとっては、否、あらゆる世界において男は一匹。

師も、実父すらも、男にとっては乗り越えるべき壁であり、突き詰めれば敵であると。

禁を破った。

自分の拳が、未だ過去の人間の技に及ばぬのだと、心の中で認めてしまった。

そして眼前のプロレスラーは、ナガラ・セイイチロウの空手に比肩しうる戦士である、とも。

「オアアアアッ!!」

弱い心を振り絞るように叫ぶ。

叫びながら振り抜く、渾身の前蹴り。

フォーム、スピード、申し分の無い一撃であった。

ヒライの作ってくれた右足の親指が、タイタスの鳩尾に深々と喰い込んだ。

しかし、足りない。

蹴った瞬間にそう思った。

純度が低い。

折れず、曲がらず——、日本刀のようなMFになりきれていない、と。

「ヌグ……ッ、つかまえたぜい」

にい、とゴウダが囁く。

蹴り込んだ右脚を、ガツチリと太い両腕に抱え込まれた。

ついに山が動く。

どうくる、まさか、ドラゴンスクリユ……。

「ドウリヤアアアア——ッ!!」

「!?」

タイタスが思い切り背筋を伸ばす。

プロレスラーのブリッジ。

信じ難い、抱え込まれた前足一本で、リーオーの体が宙に浮く。

あり得ない、フロントスープレックス。

人間技じゃない、圧倒的膂力。

荒唐無稽。

しかし同時に、あまりにも雄大、あまりにもゴウダ的。

「シャアー！」

開いた左の踵。

ブリッジの頂点で、思い切りタイタスの顔面に叩きつける。ぐちより、と鼻骨の哭く音がする。

しかし、その程度で崩れるようなヤワなフォームではない。

「……ツァー！」

叩きつけられてしまった。

硬い砂の上。

とうとう浴びたプロレスラーの投げ。

全身がビリビリと痺れる。

とんでもない衝撃。

とにかく、逃げなければならぬ。

そうは思えど、右足をガツチリと抑えられている。

たちまち少年の腰骨に、ズン、と116kgが乗る。

「セイヨツ」

タイタスが思い切り両腕を絞る。

リーオーの右足が高らかと反り返る。

単純、シンプル古典的オールドファッションな片足逆エビ固め。

しかし同時に、40kg以上もの体重差がリオの心肺にのしかかる。

ロープブレイクもない。

極まれば必殺、当然の理屈。

(けどよオ、おっさん。

空手家の手の届く所にケツを置いとくってエのは……)

もぞもぞと、凶器の指先をタイタスの尻の下に捻り込む。

「……ッ!!」

つねる。

ウェイトトレーニングなど重ねようも無い臀部を両の手で。

肉よ筆れよ、千切れ潰れると呪詛を込めて。

「~~~~~ッッ」

「ウオアッ」

一瞬、反射的にタイタスの尻が浮いた。

一息に右脚をブッコ抜き、逃げる。

大きく息を吐き出しながら、両雄が再び舞台中央に向き直る。

「ガキの……ッ、ケンカかよ?」

「空手に……ハッ! 兇戯は……、ねえ」

「そうかい」

短く言葉を切ってタイタスが動く。

フルスイング、逆水平チョップ。

咄嗟に下がろうとしたリーオーの右脚に激痛が走る。

(片エビ……、この展開が狙いか)

腹を括って踏み止まる。

ビグザム剛田が打撃戦を所望している。

そのためにリオの逃げ足を潰して来た。

それならば手間が省けた。

願ったり叶ったりではないか。

——ベツチイイッ!

「……ッグー」

相変わらずとんでもない打撃。

受けに回った両手が爆ぜる。

やはり右脚、踏ん張りが効かない。

体が浮く、どうしようもなく後た——

「……のオオオオ!!」

ヤケクソ。

フォームも何も知ったこっちゃ無い。

全身を浴びせるように、右の正拳を打ち返す。

「ツシャア——ッ!」

ただちに返ってくる豪腕、第二爆。

体勢が崩れるほどの右ストレートの後、受けるしかない。

「~~~~~ッ」

息が詰まる。

爆裂する両腕の痺れが全身に拡散する。
緑でもない体格の暴力。

無慈悲なる打撃。

少年の十年を足蹴にする天鬢の差。

それでも、それでもかろうじてリーオーが体を残す。

知っている、勢いに流されればあの時の二の舞。

昭和プロレスのフルコースを全身で浴びるハメになる。

「シヤラアッ!!」

少年が喚く！ 木星エンジンが灼ける！

打ち込んだ！

打ち返された！

打ち込んだ！

打ち返された！

打ち込んだ！

打ち返された！

打ち込んだ！

打ち返された！

打ち込んだ！

打ち返された！

リーオーが燃えていた、タイタスが燃えていた、仮初のコロッセオ

が燃えていた。

リーオーとタイタスが打ち合っている。

中量級にも満たぬ少年が、掛け値なしのパウンド・フォー・パウン

ドと。

灼熱の刻、奇跡の刻。

しかし、観客たちは薄々気が付いている。

打撃も出来るレスラーと、打撃しか出来ない空手家が互角に打ち

合っているという事実。

夢の終わりは、近い。

(何て、なんつてエ肉体だ……！)

ナガラ・リオが震えていた。

渾身の拳を振るうと言う行為に、細胞の欠片に至るまでが打ち震えていた。

人間をぶっ叩くための拳だ。

確実に人間を叩き殺す事が出来る拳だ。

それゆえに本気で打ち込んだではいけない拳だ。

それを何発、何十発打ち込んだ事か。

それでも斃れないのか？

それでも逃げないのか？

プロレスラーとは、人間とは、これほどまでの肉体を作り上げる事が出来るのか。

「オオッ」

全身全霊を込め拳を打ち込む。

ただちに倍返しが飛んできて、思い上がりを叩き殺される。

これはまるで、あれだ。

キャッチボール。

フォームもクソも無く、ただただ全力でボールを投げる子供。

悠々と片手で受け止め、的確に放ってくる大人。

互いの肉体を用いたコミュニケーション。

――？

なぜ、こんな下らぬ事を考えてしまったのか？

キャッチボールなどしてくれる父ではなかった。

空手しか知らない父だった。

厳格な生き方しか知らない父だった。

立ち塞がる敵をぶっ叩く事以外に、息子に託す矜持を知らない父だった。

そんな父の不器用な生き方を、ナガラ・リオは畏れながら愛していた。

……

……

………けれど、どうだろうか？

本当は自分は、父と、キャッチボールをしてほしかったのではない

か？

たまの休日に、他愛の無い会話をしながら。

全力でボールを放る自分。

やすやすと受け止め、軽々と投げ返してくる父。

世間一般の、よくある理想的な親子像。

自分は今、あの最強のプロレスラーに、それを望んでいる。

(……勝てる、ワケがねえ)

ハッキリと気付いてしまった。

相手の強さに感動している。

亡父の姿を、似ても似つかぬ目の前の男に重ねている。

ビグザム剛田が、自分の技など通用しない本物のプロレスラーである事を、心のどこかで望んでいる。

殺されてしまった。

殺されてしまった。

武術の厳粛を、残酷さを、苛烈さを。

プロレスラーの甘さに。

(まだ……、届かねえ、今の俺の空手じゃ……)

ガギン、と肘先が恐ろしく固い何かに食い止められた。

たちまちリーオーの体が大地を失う。

「ドッセイヤアアツツ!!」

来た！

とうとうその時が来た。

背中から大地に叩きつけられる。

呼吸が出来ない。

シンプルにして至高、ボディスラム。

始まるのだ、ビグザム剛田のフィニッシュ・ムーヴが。

決着が付いた、と誰もが思った。

観客も、審判も、主催者も、選手たちも。

ブン投げたゴウダも、投げられたリオすらも、そう思った。

だが、素直に敗北を受け入れたその時、不意に少年の胸に天啓が降

りた。

氷解した。

長らく胸中を惑わしていた複雑な方程式が、実にあっさりと解けてしまった。

分かってしまった。

プロレスラー、ビッグザム剛田の倒し方。

(……? 何やってやがるんだ)

ほう、と息をついて薄目を開ける。

観客たちの声援と、少年を照らす月の輝き。

ゴウダの奴は、決着を放つぽってドコに行ったのか。

「オオオオオオオオ!!」

と、思ったら来た!

名月が隠れ、デカブツがたちまち視界を塞ぐ。

ゴウダの選択。

壁を蹴つてのフライングボディプレス。

(……アンタって男は、本ツ当にツ)

思いながら体を跳ね上げる。

ピン、と天空に向けた両足を、タイタスの鳩尾目掛け全力で叩き込む。

「グオツオオオツツ」

剣山、所では無い。

流石に効いたか。

リーオー、最長の槍。

ビッグザム剛田。

本当に、甘く、優しい、一途なまでのプロレスラー。

ゆらり、とかろうじてリーオーが体を起こす。

とにかくこれで、もう少しだけ悪足掻きが出来そうだ。

(許せ……、親父……)

ヒョウ、と長く息を吐き、タイタスの巨体と正対する。

両手は畳んで腰の脇に、下半身は、気持ち内股。

「オツシャアア!」

たちまち飛んでくる逆水平チョップ。

リーオは、リーオーは動かない。
覚悟を決めた。

もう逃げない。

ヤケクソな反撃に、そして防御に逃げたりしない。

——ベッチイイツ、と言う乾いた音が、会場に再び鳴り響いた。

「おっ!？」

最初に違和感が付いたのは、打ち込んだゴウダ本人であった。
ややあつて、会場からもざわめきがこぼれ始める。

リーオーは、倒れて、いない、避けても、いない、防御でも、いな
い。

受け止めていた。

さして厚くもない少年の胸板が、プロレスラーの全力を。

——コヒョオオオオ……

静寂のコロツセオに、奇妙な呼吸音が響く。

ハッ、と我に返ったMS少女が勢い勇んでマイクを掴む。

『ま、まさかッ!? サンチン三戦ツ!?!』

信じられない……、古来那覇手の時代より伝わる空手道伝統の型ツ
!!

その真価は独自の呼吸法との組み合わせによる肉体のコントロール
ルにあり!

制御が成った時、ありとあらゆる打撃は……打撃はツツ!!』

MS少女が叫ぶ。

空手家を実戦で三戦を使っているのだ。

気絶している場合じゃねえ!

「虚仮脅しを……するンじゃねえッ」

ゴウダが叫び、奮う。

本気のナツクルパート。

ゴギヤツと鈍い音がして、しかし尚も、リーオーは微動だにしない。

「ヒョオオオウ……」

「くっ、っ、コンのオ……」

ここに来てリーオー、尚も息吹。

国内最強の男に相手に試す御伽噺。ファンタジー

激昂。

震える肉体の力みをそのままにタイタスが動く。

叩く。

叩く。

叩く。

叩く。

叩く。

観客が沸く。

何がどうなっているのかは分からないが、とにかく――

『――開かんと欲するならば、まずは閉ざすべし』

『――取り込まんと欲するならば、まずは吐き出すべし』

『――そう、肺腑の淀んだ空気を全て吐き出すのです。』

そうすれば肉体は自ずから新たな酸素を欲する。

そしてイメージする、血中を巡り、肉体の隅々にまで力が戻る、と』

三雷会館長・ハジメの声が脳裏に響く。

三戦も息吹も、亡父に学んだ技ではない。

そんなまどろっこしい技術に修練を費やすなら、まず殴った方が早

い、と言うのが永樂流の実戦空手である。

『――えっ？ 効果の程……ですか？』

少年の素朴な疑問に、お人よしの館長が困ったように顔を背ける。

『うん、まあ……、気休め程度、かなア？』

琉球の古老たちが使うならともかく、セイイチロウさんも見切りを

付けた型、ですし……』

(ツ！ ですよねえ〜ツ!!)

必死。

とにかく必死でポーカーフェイスを気取る。

ナガラ・リオ。

十六年の人生に於いて最大の痩せ我慢の時。

すごい、マジですごいよプロレスラー！

(——けど、そう悲観したものでないっすよ、館長)
チョップの乱打を浴びながら、尚も必死で苦笑する。

三戦立ち、思いのほか具合が良い。

重量級の爆撃を受け、尚も踏み止まっていられる理由は、やはりヒライの拵えてくれた親指。

ハの字に固めた足先に、キュツと力を入れる事で、自然に肛門が閉まる、下半身が固まるのだ。

かつては船戦で用いられたと言うバランスの型、効果の程は伊達ではない。

(——そして、何より)

観客が沸く。

ただ痩せ我慢をしているだけで、周りが勝手に興奮する。

空手家がプロレスを仕掛けるのに、これ以上最適な構えは無い。

「オオツ」

ゴウダが吠える。

痺れを切らした大振りのスウィング。

どこまでも大甘で優しい男。

「シャアー」

ようやくリーオーが動いた。

指先の形は、貫手——。

「ガッ!？」

相打ち。

打撃音が交錯し、しかし、打ち負けたのはタイタス。

それもそのはず、狙いは喉仏。

『ブツチャア~~~~~ツ 地獄突きイ!!』

肉弾魔人が彼のシンガポールの拳聖ガマ・オテナより伝授されたと言

言う禁じ手がッ!

今、実戦で炸裂したア~~~~ツ!』

MS少女の実況が冴え渡る。

ニイ、と少年の口元に笑みがこぼれる。

流星はハム姉、欲しい所であつらえたようなコメントをくれる。

笑いながら駆ける、跳ぶ。

狙いはタイタスの、首筋――

「グア!？」

『こ、今度は延髄斬りイ〜〜〜ッ!？」

ま、まさか、これは……………!』

観衆の絶叫が、少しづつ戸惑いへと変わっていく。

ようやく周囲が気づき始めた。

この試合で初めて、ナガラ・リオがアングルを仕掛けているのだと

……………。

「……………何のつもりよ、ぼうや?」

「気取ってんじゃねえ、パクリ野郎が!」

俺様が本当の空手を教えてやるってんだよ!」

「野郎!」

短く吐き捨て、ゴウダが走る。

打てば響くような見事な反応。

「オッス!」

「ンガッ!？」

そして飛んで来た、意外過ぎる逆襲。

ゴウダ・カオルの全力。

中段正拳突き。

倍返し、すばらしい解答。

てんで素人丸出しのフォーム。

だが重い。

改めて思い知らされる。

体重100kgを超す肉体が、弱者の為の空手などやってはいけな

い。

吹き飛ばされながら、嗤う。

鼻歌でも歌いたい気分だ。

どこまで優しいんだ、このレスラーは。

自分からリオの土俵に乗ってきた。

「オッス!!」

「ド阿呆ッ!!」

追撃の左の正拳。

両腕を廻し、捌く。

体勢が崩れたタイタス目掛け、本当の正拳突きを叩き込む。

「……………」

いや、当て、ない。

寸止め。

眼前でピタリと止め、極める。

思わずギョ、とタイタスが静止する。

やはり、甘い。

激痛にならいくらでも耐えられる男が、手心を加えられた、と言う

シヨックに耐えられない。

思考の空白。

迷わず打ち込む。

寸打、ワン・インチ・パンチ。

「クア」

「歯ア喰い縛れエツ!!」

よろめくタイタスを追い、リーオーが仕掛ける。

高らかと掲げた右手、スナップを効かせ、ブチ込む、張り倒す。

——パン!

「あ……………」

一瞬、シン、と会場が静まり返る。

リーオー右の平手、つまりビンタ。

ナガラ・リオ、まさかの本職への闘魂注入。

「くだらねえ三味線弾いてンじゃエ!!」

ビグザム、てめエのプロレスLOVEはそんなもんかア!」

「……………」

『え……………? あ……………、お……………』

()() お前がそれを言うのかよッ! ()() ()()

(……とにかく、とにかくこれも耐えた！)

頭を振るって体を起こす。

たちまち真上から、豪快なエルボーパットが降ってくる。

「グア」

成す術が無い。

浴びる、浴びる、浴びる。

タイタスの全力に、リーオーが追い詰められていく。

しかし今、どれだけの人間が気付いているだろうか？

ナガラ・リオは追い詰められながら、同時にゴウダを追い詰めてもいるのだ。

ゴウダ・カオルは、間違いなく日本のパウンド・フォー・パウンドである。

この男とガチンコでやり合える人間など、リオにはちよつと想像が追い付かない。

だからこそ、同時に疑問にも思っていた。

これ程の怪物が、なぜ本家のプロレスでは、一介の中堅レスラーに留まっているのか、と。

華が無いから——？ 否！

パフオーマンズが下手だから——？ 否！

派閥抗争に敗れたから——？ 否！

今日の試合で、はっきりとリオには理解できた。

ビッグザム剛田は、プロレスを愛しすぎている。

プロレスラーとして純粹すぎるのだ。

相手の繰り出す全ての技に、耐えて、耐えて、耐え抜いて……。

その輝きが最高潮クライマックスに達した瞬間、己の全力で叩き潰す。

ゴウダ・カオルの美学、プロレスラーの矜持。

活人剣のような男の生き様。

だがしかし、もしも本当に相手の輝きを全て引き出す事が出来たらば。

実はその時点で既に、プロレスの目的は達成されている。

勝たずとも強さを証明できるのがプロレスラー。

輝き放つリングの先に立っているのは、別に自分でも構わな
いのだ。

ゴウダ・カオルに足りない物。

それは欲。

次代を導くカリスマが備えるべき資質が、決定的に欠落している。
ナガラ・リオは違う。

欲望に塗れている。

勝ちたい。

たとえこの先、一生敗北を続ける人生を歩むハメになったとして
も。

この勝負だけはどうしても勝ちたい。

どんな手を使っても勝ちたい。

空手を封印してでも勝ちたい。

……プロレスを使っても、勝ちたい。

打たれながら、それでもリオは気付いている。

ビッグザム剛田は今、攻めあぐねている。

フィニッシュホールド
必殺技を探しているのだ。

死闘の幕切れに相応しい、一世一代の必殺技を。

耐える、吠える、投げる。

それしか知らない42歳。

あとどれほどの引き出しが残っている事であろうか？

ラリアート……、それは使った。

バックドロップ……、未遂に終わった、そもそも前試合で使ってい
る。

フライングボディプレス……、それも。

関節技……、あり得ない、格上のルクス相手にしか許されないムー
ヴだ。

(知ってるよおっさん……、もう、アレしか残ってねえ……)

パアン、と。

思った直後にとうとう来た。

顔を挟み撃ちにするブ厚い掌。

モンゴリアンチョップ、に見せかけた鼓膜打ち。
ぐらり。

三半規管が乱され、視界が揺らぐ、聴覚が奪われる。
同時にぐつ、と体を畳まれ、ぐるん、ぐるんと視界が回転する。
最初に仕掛けられた時は、何をされていたのかまったく分からな
かった。

打倒ゴウダを目指しプロレス研究を重ねてきた今なら、かろうじて
分かる。

タイタスバーストボム。

相手の腰骨を捕らえ、掲げ、叩きつける。

要するにパワーボム。

不器用なゴウダにとっては唯一無二の必殺技。

(やはり、高い……)

感嘆が漏れる。

観客席が一望できる。

ここだけが下界から隔たれたような、美しい世界。

キーン、と言う耳鳴りの音。

それ以外には何も無い、静寂と、虚空――

(いや……)

とくん、とくんと言う心臓の音。

まだ、生きている。

あの世界と繋がっている。

『彼女』がくれた肉体も。

ヒライのくれたリーオーも。

(――取り込まんと、欲する、ならば)

まずは、吐き出す。

空になった肺腑が、自然、新鮮な酸素を取り込もうとする。

そしてイメージする。

とくん、とくんと言う心音に乗って染み渡る。

新たな生命の息吹が。

全身の細胞の、奥の、奥の、その根源に至るまで。

「——オオッ！」

やがて、落下が始まった。

合わせてリーオーが動いた。

全身のバネを連動させ、思い切り上体を反らす。

踏み止まるのではなく、逆、加速させる。

ガチリとタイタスの頸を捕らえた両足。

これだけは死んでも離さない。

「ウオッ!?!」

ゴウダが喚く。

ようやく気付いたか、バカ。

もう遅い。

投げ捨てた勢いのまま、両機が数珠繋ぎに回転する。

廻る、廻る、視界が廻る。

そして着地。

リーオーは固めた両膝から。

つまりタイタスは、頭から。

フランケンシュタイナー。

いや、形としてはむしろ、ウラカン・ラナ・インベルティダ。

リバース・スープレックス、毒霧、三角締め……。

パワーボムを巡る駆け引きの中でも、際立って鮮やかで芸術的な必

殺技。

「——ワン！」

エイカ・キミコが叫ぶ。

知っている。

これはそう言う大会ではない。

「ツ——」

リー・ユンファが叫ぶ。

だからどうした。

空手家がプロレスラーをフォールしているのだ。

これが叫ばずにいられるものか。

「……スリー」

観衆の大号令に紛れ、ヒライ・ユイがポツリ、と呟く。
空手しか知らない少年だった。
信じた空手が通じぬ時は、潔く笑って死ぬような少年だった。
その少年が、プロレスを仕掛けた。
惨めに打たれ、這いずり回り、それでも生き延び勝とうとした。
その意味に、心が波立つ。

——カン！　カン！　カン！　カン！

架空の空が、震えていた。

歓声が、少年の全身を叩いていた。

肉体が震えていた。

感動に震えているのか、歓喜に震えているのか、失った物の大きさに震えているのか？

それすらも分からなかった。

とにかく、勝った。

空手がプロレスに、ではない。

少年がプロレスラーに、でもない。

リーオーが、ガンダムに、勝った……。

「おっとー」

ゆらり、とバランスを失った肉体が、ガシリと太い手に支えられる。
抗議する間もなく、その丸く大きな肩に、ひよい、と担ぎ上げられる。

何と言う大きな背中である事か。

まるで幼少の頃に肩車してくれた父のような――。

「へっへ、してやられたなア、ぼうや。

まさか本当にプロレスをやってくれるとは。

あくあ、おかげでこっちは、エライ赤っ恥を掻いたぜ」

「空手がよオ、通じやしねえんだ。

それしか無かった、それしか……」

「相変わらず陰気だなア、武術家って奴は……」

飄々と声援に応えながら、最強のプロレスラーが笑う。

「簡単なこつたよ、ぼうや。」

永樂流空手のお品書きに、ウラカン・ラナも加えちまいな」

「……おっさんは、単純でいいな」

「オウさー！ 言ってなかつたか？」

プロレスラーって職業は、神に愛された天才にしか勤まらねえんだよ」

「……………」

はあ、と大きく息を吐いて、リオが両目を瞑る。

今はただ、歓声と熱狂が少年の子守唄になるのみであった……。

オルフェンズの涙

——ハマーン・カーン

——カテジナ・ルース

——シーマ・ガラハウ

ガンダムとは、女傑の物語である。

過酷な戦場の現実に触れ、悩み、苦しみと共に成長する少年たちを嘲笑うかのように、凄惨なる過去を踏み台に宇宙へと羽ばたく。

混迷に満ちた世界に新たな潮流を生み出し、次代への血河を往く。

……良きにつけても、悪しきにつけても。

いかに女性の社会進出が目覚ましい現代とは言え、流石に虚構フィクション、などと見下す事は出来ない。

なぜならガノタにとって、ガンダムとは教典ガンダムであり人生ガンダムであり戦争ガンダムであり、即ち真実ガンダムなのだ。

クリエイターの歪んだ妄想が、映像の世界に現実の息遣いを生み出すように。

液晶を通じて人の情念をモロに浴びた少年少女が、新たなイノベーターへの変革を促される可能性も、決してゼロではないのだ。

こと映像の世界と密接に結びついたガンプラ・バトルに於いては、その傾向が顕著である。

アイラ・ユルキアイネン。

レディ・カワグチ。

時代の転換期にあつて彗星の如く現れ、ガンプラバトルに新たな息吹を吹き込んでいく少女達。

歴史に例外はない。

表の世界にあつても、そして、『裏』の世界にあつても……。

『親愛なるパプテマスよ、照覧あれ！』

今宵、貴方の先見の明に、ようやく時代が追い付こうとしているのです！』

歴史の立会人気取りでMS少女が叫ぶ。

酔い痴れている。

状況に、自分の言葉に、今日、この時、この場所に巡り合えた幸運に。

彼女もまた訓練されたガノタ、救い難き格闘オタク。

かつて少女と呼ばれた女。

ガラスの靴を探し求めるシンデレラ。

歓声の中、二つの機体が真つ直ぐに向かい合う。

しなやかにして強かなる肉体を備えたブロンドのツインテール。

藍染のスカートアーマーにたなびく真紅のしゃぐま。

ガンブラ・ファイト準決勝。

Bブロックを勝ち残って来たのは、奇しくも共に女性同士。

何事につけても、例外、と言う事象はある。

いかに男性絶対的優位たる格闘技の世界においても、なにせ人類は70億。

46億年物語の果て、今宵は偶然同士が交錯する必然たる一夜。

「ふふ、そのナリ、随分とサマになってきたようじゃないか？」

192cm 105kg

神の悪戯によって産み落とされた大理石のような女が、にい、と人懐っこい笑みを作る。

「うっさい阿呆、フルヌードにしてやろうか？」

かつてニュータイプと呼ばれた女が、むっつりと頬を膨らませる。

モーラの言葉を嫌味と捉えたのだ。

成程、確かに今のリ・ガズイ風月の風貌を見れば、言外の当て擦りと思えなくもない。

ハリマオとの鬪いで破損した小袖や、メット後部の可動部は、今やバックリと断ち切られ、いつそシンプルなシルエツトとなって、真つ赤なしやぐまを夜風に孕ませている。

ナドレが本気になったとも解釈できる鮮やかな現地改修であるが、当のアムロ本人には、眼前の女帝の文字通りの「上から目線」が癩に障るらしかった。

その女帝、ビルドノーベルはと言えば、こちらはまったくの無傷。卸したて同然の真紅の鎧を金糸の外套で包み、世界の半分の支配者

たる貫禄を万人に立ち示す。

製作者、エイカ・キミコの補修技術の確かさもあるが、何より特筆するべきはここまでの試合展開であろう。

一回戦 Bブロック優勝候補：ギンザエフ・ターイー

二回戦 今大会のトリック・スター：アカイ・ハナオ

一癖も二癖あるパワーファイター達を、モーラは月天山のお株を奪う横綱相撲で制して来た。

他の準決勝進出者の中から無傷の機体を探しても、闘う度に外装を全取換しているリーオーくらいのものである。

まさしくは、女帝。

栄えあるガンプラ・ファイト初代王者の栄冠を、一息に掻っ攫わんばかりの闘志が漲っていた。

しかし、だからこそ、と言う事もあるだろう。

六本腕のニュータイプを倒した、凄い。

マレー半島に潜む猛虎を倒した、確かに凄い。

しかし、戦国期の組打ちにまで縁を遡ると言う、篤人流四百年の真髓は、このような近代格闘史の要石相手にこそ、発揮されるべきではあるまいか？

体格、経歴、戦法、実績——。

どれ一つ取っても、アムロ・レンに勝ち目は無い。

勝負の行方は明白。

だからこそ今宵、現代最後の武ファンタジー術が見られるのではないか？

そう思わずにはいられない。

格闘ファンは誰もが、武術に恋するロマンチストである。

「異種格闘技……」

この業界、私も長いが、思えば今日みたいな趣向は初めてさ。

ふふ、名に聞く篤人流宗家の業前がどれ程のものか——」

「勘違いするなやチャンピオン。」

うぬではない、このわしが、れすりんぐ、とやらの実力を試してやろうと言うのよ」

「——と、こいつはまた、とことん嫌われたもんだね」

アム口の発するビリビリとした視線を受け流し、ノーベルが悠然と踵を返す。

その大きな背を、じつ、と尚も少女が睨み据える。

(瞬殺、じゃ)

短く心に刻み、リ・ガズイもまた背を向ける。

少女の胸に、むくむくと敵愾心が満ち満ちていく。

何故だかは自分でも良く分からないが、あの女はいちいち癩に障る。

それは丁度、あの空手小僧、ナガラ・リオと出会った時の感覚に似ている。

才能が無く、要領も悪く、ただ男と言う恵まれた境遇だけを頼りに、必死にアム口と張り合おうとしていた少年。

気に入らない、ブチのめしてやる。

あの時も確かにそう思った。

だが、あ奴はバカだ。

親から学んだ空手以外に物を知らない癖に、それで自分と対等だと勝手に思い込んでいる。

あまつさえ、二人がまるで同類であるかのように誤解し、気安く好意を寄せてくる節さえある。

まるで盛りのついた犬だ。

犬だと思えば、まあ可愛げもある。

野良犬相手なら人間様の代表として、それなりにあしらえる余裕がアム口にはある。

あの女、モーラ鬼灯は違う。

上背がある、恵まれた肉体がある、天性の才能がある、頭も良い。才能に裏打ちされた戦術があり、才能にもたらされた栄光がある。

歴史と栄光に裏打ちされた大人の余裕があり、それゆえに性格も人当たりも抜群に良い。

まるで完璧超人。

それが気に入らない。

1. 92メートルの高みに立って、無自覚に他人を見下そうとする

女だ。

噛み付かれるのは構わない、じゃれつかれるのも構わない。
だが、見下されるのだけは我慢ならない。

(瞬殺、じゃ)

念入りに殺意を込め直し、アムロが胸中で呟く。

見下してやる、勝者の頂から――

『準決勝第二試合！ 勝つのは古刀か、近代兵器かッ!？』

凄惨なるは女の闘い！

いざ！ ガンプラファイトオ、レディー、ゴオオオ――ッ!!』

高らかとゴングが打ち鳴らされ、真っ赤なしゃぐまを振り乱して
リ・ガズイが振り返る。

その瞬間にはもう、ノーベルは視界から消え失せていた。

(――下!)

あつ、と観客席から驚きの声上がる。

先に仕掛けたのは、意外にも女帝。

192cmの巨体を恐ろしく低く使い、長距離から地面スレスレを
疾る超弾丸タツクル。

人体構造上、腰から下の標的に、咄嗟に致命打を与え得る選択肢は
少ない。

ましてや体重差は40kg

一発二発被弾しようとも、意識さえ飛ばされなければ構わない。

テイクダウンさえ取ればそれで決着、十分に釣りは来る。

慎重にして剛胆、野心に満ちた闘士ケンツファアの呐喊。

「カカ」

に、と少女の口元が邪悪な三日月を描く。

その間にもリ・ガズイの五体は淀みなく動いていた。

下から迫る相手の姿を確認するでもなく大地を蹴る。

右の跳び膝。

反応が良い、などと言うレベルでは無い。

両者の体が間合いに入る前に、既にリ・ガズイは跳んでいた。

腰元に向うノーベルの顔面が、あらかじめ空中に置かれていた、リ・

ガズイの膝に吸い込まれて行くようにすら観衆は感じた。

『海を見れば山』

安室流舞踊における初伝。

手品、大道芸で言う所の所謂、ミスディレクションに該当する。

何でも無い仕草を大仰に見せて観衆の注意を惹き、その意識の死角を突いて本命^{タネ}を仕込む。

それは単に、その場凌ぎのフェイントに限った話では無い。

一指し舞うまでの仕手の一挙手一投足、それらの仕草、全てが初伝であり『山』なのだ。

今回の駆け引きで言うならば、二回戦直後から再三に渡り見せつけていたモーラの余裕、その飄々たる態度こそが『山』

ならば、その裏に隠されている『海』は逆。

奇襲、急戦、必殺こそがモーラの真意。

そして『山』の段階で安室流を見せている以上、『海』に仕込むのは別の戦法。

即ち女帝の十八番。

ニュータイプでもXラウンダーでもない。

深い人間観察によってのみ辿り着く事の出来る、言わばスーパーパイロットの境地。

ゆえにアムロ・レンは、悠々と膝を置いておく事が出来たのだ。

——ぐしゃあ

持ち札の公開が終わり、結末だけが残る。

接触、交錯。

突き刺さる膝、少女の全体重が乗る。

瞬殺、崩れ落ちる、決着、邪悪な笑み——

「……！」

ぐつ、と崩壊が止まり、不意に腰骨を抱きかかえられた。

顔面に刺さった右の膝ごと。

信じ難い。

会心の一撃だった筈だ。

生半可な意識で踏み止まれるような衝撃では……、

いや、違う。

ようやく気付いた。

読み切ったのではない。

海を見れば、山。

誘い込まれたのだ、女帝の戦略に。

アムロの洞察力が膝でのカウンターを選ぶ事まで、モーラ鬼灯は看破していた……の、だろう。

読み切ったその上で、避けるでも防ぐでも無く、ただ歯を喰いしばって受け止めたのだ。

女子プロ七冠、モーラが本気で覚悟を固めたならば、その程度の受けは出来る。

たとえ一発二発被弾しようとも、意識さえ飛ばされなければ構わない。

テイクダウンさえ取ればそれで決着、十分に釣りは来る。

さすがモーラだ何ともないぜ！

「イイリヤア！」

「……ッ」

束の間の均衡が終わり、落下が始まる。

振り返る背筋。

裏投げ。

高速で沈む視界。

迫りくる大地。

死臭。

危険領域、瞬殺――

「クヌッ」

「……ギ！」

今度こそ咄嗟に手が出た。

落下の瞬間、ふわりと浮いたブロンドのポニーテール。

はっしと両手で掴み、思い切り倒した。

女帝の首が反り、金城鉄壁のブリッジが崩れ、死が加速する。そして、着弾。

衝撃が走り、土煙が舞い、砂に塗れて両機が転がる。

「カハッ」

溜まった緊張感を二酸化炭素と共に一気に吐き出す。

たちまち背筋が反りかえるほどの痙攣がアムロを襲う。

ダメージは、おそらく五分。

女帝の本気の裏投げを、五割まで浴びた。

出来る事なら、このまましばらく大の字で寝ていたい。

(……いくかや！)

必死に鞭打って肉体を蠢かせる。

レスリング三冠。

敵はどこぞのビグザムのような、お優しいプロレスラーではない。

「チー！」

来た。

大地を這う192cmの大蛇。

あの巨体でかくぞ、と思わせる驚異的な速さで。

逃れようと仰向けにもがく右足首が、たちまちぐつ、と長い左手に引きずり込まれる。

何と言う凄まじい握力。

「カッ」

意識を尖らせる。

空いた左脚。

ディージェより引き継いだ鋭利な爪先に殺意を乗せて、ノーベルの眉間を思い切り、穿つ！

ビギン、と音を立て、たまらずノーベルの頭部が跳ねる。

握力が僅かに緩み、右足を引き抜いた勢いのまま、リ・ガズイが後方に廻り、跳ね起きる。

ふっ、と女帝の重圧が遠のく。

死線を越えたのだ。

生き延びた、とにかくは瞬殺を免れた。

浅く息を吐いて呼吸を整える。

モーラは3メートルほど前方。

もつともらしく片膝を突いて頭を振るっていたが、その内につかと少女に戻り、いつもの気さくな笑みを浮かべた。

「ツ痛う〜っ。」

効いたよ嬢ちゃん、エリカのドロップキックの次くらいにはね」

「……そうやってえ、ひけらかすなやー!」

短く吐き捨て、リ・ガズイが再び大地を蹴った。

モーラ鬼灯の余裕、真実か演技か。

いずれにせよダメージはある、間違いなく。

アムロにとっては攻めるべき場面であった。

「シッ」

下方から、大きな掌が一直線に伸びてくる。

長身のリーチと馬力、決して侮る事の出来ぬ掌底。

迷わず内側からはたき落とし、なお立ち上がるうとするノーベルの右膝を、左足でぐつ、と踏み付ける。

思いもよらぬ圧力に体が傾ぎ、真紅の巨体が大地に釘付けとなる。

いかな世界チャンプとは言え、この間合い、この体勢、この駆け引きにおいてのみは古武術の手管に及ばない。

「シァアッ」

見上げるノーベルの両の眼目掛け、リ・ガズイがV字に備えた右手を突き出す。

パン、と一瞬、空気が震え、強欲なる右指がノーベルの太い手に食い止められる。

……アムロにとっては、喜ばしい事に。

(かかったー!)

リ・ガズイが手首を返し、絡めた相手の左手を捻じり上げる。

ビクン、とノーベルの両肩が跳ねる。

不用意に空いた敵の右手。

迷わずリ・ガズイが残った左手を絡ませていく。

「おっ! おっ、おっ!?!」

女帝が困惑の悲鳴を上げる。

ああ！ と観客がざわめく。

手四つ。

華奢な少女の方から仕掛けていった。

繊細なるリ・ガズイのしなやかな肢体が、屈強なノーベルを上から押え付けている。

膂力ではなく、理合。

指絡め。

一回戦でヤマモト相手に極めて見せた、篤人流の裏技。

しかし、そうと分かつてはいても観衆は驚きを隠せない。

これほどの技であったのか？

古武術の理合とは、関節格闘技の頂点をも封じるほどの……。

「うぬ？」

不意に、アムロの口から疑念がこぼれた。

先ほどとは逆。

リ・ガズイの体が、まるで電気でも走ったかのように一つ、ビクンと震えた。

手四つ、一方に傾いていた天秤が、徐々に徐々に盛り返し始める。

「ぐっ……、ぬぬ……！」

天才少女の眉間に苦悶の皺が寄る。

ぐっ、ぐっ、と、ジャツキでも差し込んだかのように、ノーベルの体が膨らんでいく。

必然的に、作用点たるリ・ガズイが震え、その下半身が大地に屈する。

『……あ、ああっ！ ああああ~~~~っ!?!』

面妖なる状況。

異常な事態にいち早く気づいたのは、やはり、エイカ・キミコであった。

MS少女の叫びに導かれるように、観衆の視点が一点へと集束されて行く。

舞台中央、対峙する二人の女、絡み合う四つの手。

ノーベルの大きな掌が、いつの間にか拳骨の形に組み直されている。

その隙間から伸びる、リ・ガズイのしなやかな中指が、人差し指側に不自然に折れ曲がり、つまり……、極められている？

『~~~~~ツッ！』

フィギュアツ・フォー・フィンガー・ロオーツク!!

指4の字だア——なあつかCい~~~~ツッ!!』

MS少女が吠える、たちまちわっ、と観衆が沸く。

プロレスの古典にして王道的関節技、4の字固め。

ショープロレスの天才が、古武術の理合に対して指関節を仕掛けた。

しかも、効いている。

何と言う豪壮な反撃である事か。

「……くっ、のオー！」

ガツン、と突った爪先でノーベルの弁慶を蹴り上げる。

「ガツ」とノーベルが動きを止めた間隙を縫って、指先を外して後方に跳ぶ。

再び、間合いの外。

共に攻めきれず、極め切れず、いまだ勝負は五分と五分。

アムロはしばし、己が指先を確かめるように、わきわきと結んで開いてを繰り返していたが。

その内に地の底からでも呻くかのように吐き出した。

「……また『外し』よつたのう？」

決して生半には外せぬ筈の、篤人流の徑脈攻めを」

ギロリ、と鋭い眼光を投げつける。

アムロの中にあつた疑惑が確信に変わり、腹の底よりふつつつと殺意がこみ上げてくる。

そんな少女の在り様を憐れむように、モーラは軽く首を振って、ぽつりと呟いた。

「……他人をそんな、盗人でも見るように睨みつけるもんじゃないよ。マリさん譲りの美人が台無しだ」

「……ッ なっ、なんじゃとオ!?!」

突如、アムロが素っ頓狂な声を上げた。

観衆の視線がたちまち少女に集まる。

ざわめきの中、アムロはか細い両肩を小刻みに震わし、酸欠の金魚のようにパクパクと口を動かしていたが、やがてブンブンと首を振り、肺腑を絞るように叫んだ。

「なんで……、なんでうぬが、ママの名前を知っておるッ!?!」

「ママ?!?!」

少女の叫びが、そのまま観衆の驚愕となつて会場にこだまする。

両者の間でどのような会話が交わされているのか、第三者には容易には把握できない。

できない、が、ある程度推測する事くらいは可能だ。

先の攻防に置いて、モーラ鬼灯はアムロの攻めを『外し』た。

おそらくは、レスリングでもプロレスでもない技術を使って……。

その謎の鍵となるのが、アムロ・レンの口にした、ママ。

つまり、モーラは過去にアムロの母親と接点を持っており、安室流、篤人流の技を知っていた?

謎が謎を呼び、ざわめきが会場に溢れる中、渦中のモーラは肩を竦めて、ぬけぬけと言った。

「だって私、小学生の時に通ってたもん。」

篤人真理（アット・マリ）先生の舞踊教室」

・
・
・

炎が舞っていた。

炎のような、鮮やかな紅の髪の毛だった。

（凄……）

目の前で繰り広げられる幻想的な光景を、食い入るように少女が見

つめていた。

清楚な白の胴衣に生える藍染の袴。

身長170cmそこそこと言う、スラリと背の高い女性。

その彼女がまるで、重力から解き放たれたかのような軽やかさで緩やかに踊る。

ひらり、ひらりと胡蝶のように体が廻り、腰まで伸びた真紅の髪が、風を孕んで宙に広がる。

(凄い)

呼吸をするのも忘れていた。

板間に突いた褐色の両手が、かたかたと震えていた。

生まれて初めて『美』に触れた。

芸術などという言葉でしか知らなかった概念が、人ひとりの人生を揺るがすほどの確かな価値である事を、初めて知った。

凄い。

人の肉体と言う物は、ここまで奔放に軽やかに動くものなのか。

人はこうまで可憐な存在に成り得るものなのか？

成れるのか？ 彼女に？

彼女のように。

(私も……?)

「なれるよ」

いともあっさり、彼女が言った。

「ちゃんと真面目に練習したらね」

そう言つて、少女のくしゃくしゃな髪の毛を撫でた。

なれる。

なれるのだ。

少女の人生が決まった。

ホオズキ・モーラ。

八歳の夏の日であった。

生まれついでのにじゃじゃ馬であった。

薩摩隼人の父とキリマンジェロ生まれの母の間に生まれた、炎の国

のサラブレット。

子宝母さんの四兄弟の下に生まれた待望の一姫。

しかしてその実態は、血液の代わりにマグマでもが流れているのではないかと思うほどの暴れん坊であった。

南国の潮風を浴びたくしやくしやとした髪の毛に、赤道直下の太陽が焦げ付いた褐色の肌。

幼稚園の頃はよく指さされ、その特異な外見を笑われた。

そして、その嘲笑すべてに彼女は拳骨で応えた。

男の子であろうと、年上であろうと、小学校に上がった後も……。

そんな手のつけられない問題児が、ある日を境に変わった。

せめてもう少し、大和撫子の嗜みを、と、無理やりに連れて行かれた舞踊教室。

そこで彼女の運命が変わった。

ほんのちよつぱり齧っただけの、基礎中の基礎の足捌き。

ぼんやりと母に手を引かれ、家に帰ったその後も、寝食すら忘れ、一心不乱に少女は取り込んでいた。

彼女の豹変に、親兄弟驚き呆れもしたが、それらの雑音は少女の耳には届かなかった。

(なれるよ、ちゃんと真面目に練習したらね)

なれる。

そう、なれるのだ。

人は、芸術に成れる。

限りなく、美、と言う物の本質に近付ける。

自分もまた、彼女のように、なれる。

憧れ。

憧れが、憤懣に満ちた少女の日々を、くすんだ過去の光に変えた。

篤人夫妻が、根平から鹿児島にやってくる、半月に一度の舞踊教室。必ずしも恵まれた環境ではない。

しかし、彼女は天才だった。

頭の回転が速く、物分かりが良い。

こと肉体を動かすと言う行為に対し、天性の資質があった。

要領の良さと執念深さ、相反する性が彼女の中に両存していた。そして何より、彼女には夢があった。

情熱があり、目指すべき理想像が手を伸ばせば届く場所にいた。

無駄に発散されていた熱量が丹田に凝縮し、未来へと駆け上がる脚力に変わっていた。

(なれる！)

何一つてらいもなく、真っ直ぐに少女は信じていた……。

——結論から言うと、彼女は安室流の仕手には成れなかった。

小学五年生からの一年間で、身長が20cm伸びた。

憧れの女性に目線が並び、尚も肉体は成長を止めぬようであった。

安室流舞踊の奔放な振る舞いは、繊細なる所作の連動に裏打ちされている。

五尺六、七寸の身の丈が、最も観衆の視線に映えるよう計算し尽くされた流派なのだ。

規格を大きく外れた肉体がその動きを真似るには、どうしてもどこかしらの無理を伴う。

趣味として、あるいはインスタクターとして続ける程度の理想ならば、さしたる誤差にはならないであろう。

長年学んだ体捌きが、まったく別の分野で花開く可能性もあるかもしれない。

けれど自分の舞が、あの至高の頂に届く事だけは、絶対に無い。

天才少女の業前は、その現実を子供ながらに理解できてしまうレベルにまで達していた。

厳しい稽古の合間に手ほどきを受けていた護身術も、結局は無駄になつた。

中学校一年生当時で、身長182cm。

無名のバレー部を全国大会三位にまで押し上げた、弾丸アタッカー。

火の国生まれの若き女帝に手を出そう、などとと言う不埒な勇者は、早々に居るものではない。

ロマンスの代わりに少女の下を訪れたのは、名門レスリングジムのスカウトである。

膂力と執念と判断力が試される闘争の世界は、彼女の本来の性に良く馴染んだ。

まるで失った物の大きさを埋めるように、彼女は練習にのめり込んだ。

高校一年で国体制覇。

翌年、若干十六歳にして五輪レスリング女子無差別級の金メダリスト。

国内最高峰の肉体に、小さじ一杯分の武術。

女帝・モーラ鬼灯の躍進が始まる。

レスリングの練習は、嫌いではなかった。

生きがい、そう呼べるものも確かに感じていた。

だが、強いて難癖を付けるなら、ライバルと呼べる出会いが無かった。

世界中の何処を探しても。

大会連覇を目指す十九の冬、かつての恩師の訃報を聞いた。

取る者も取らず駆け付けた根平の旧家で、若き夫妻の忘れ形見は、しやんと背筋を伸ばした祖母の膝に抱かれ、どこかむくれていた。

成功と賞賛の嵐に包まれながら、モーラの魂の放浪が始まる。

五輪三連覇後、二十四の最盛期に突然の女子プロレス転向。

黒船襲来。

因縁、抗争、激闘、栄冠、怒号、歓声。

駆け抜けた七年。

笑いがあり、涙があり、人間模様があった。

客観的に見れば、自分ほどに充実した半生を遅れた人間はそうあるまい、とモーラは思う。

けれど、それでも心は何処かで渴していた。

いつだって次のステージを求めている。

他愛も無い子供のように夢ばかりが膨らむ。

人類最強。

年齢も人種も性別すらも関係無い、真の意味でのパウンド・フォー・パウンド。

それが、行ける所まで行ってみたいと言う、肉体のもたらしたシンブルな欲求なのか。

それとも、前人未到の頂に、かつてのような鮮烈な出会いを求めているのか。

女帝の中の焦れつく感情の正体は、当のモーラ本人にも、とつくに分からなくなっていた。

・
・
・

『衝撃の事実！』

ガンプラファイト開闢の女性対決は、まさかまさかの同門対決だったのだア!!』

MS少女の盛大なアナウンスに、会場に再び歓声が沸き起こる。皆、事情は今イチ呑み込めていない。

が、一生に一度、有るか無いかの格闘バカの祭典。

誰も彼もが騒ぎたいのだ。

世界最強の女帝のバックホーンを支えていたのは、意外にも幼き日に学んだ琉球舞踊。

騒ぎの種としては申し分ない。

周囲の喧騒に一つ溜息を吐いて、話題の中心たる女帝がぼやく。

「良いプロモーターになれるよ、キミちゃん。

全部知ってたクセに」

「……このアングルも、うぬの計算の内かや?」

平静を取り戻したアムロが、抜き身のようなギラリとした視線を疑念と共に投げかける。

一方のモーラは相も変わらず、飄々とした態度で少女の殺気に応えた。

「まさか。

出来れば私は、アンタとの対決だけは避けたかったのさ。

私の舞踊が人様に見せられるような代物じゃ無いってのは、自分自身で良く分かってるからね」

「……………」

「先生の舞。」

安室流の頂点から見下ろしたら、私のダンスなんざ、精々が50点？ 60点？

いずれにせよ初伝止まりの代物に過ぎない…………、けど、ね？」

「——ぬ」

すつく、とノーベルが元より高い背筋をピンと伸ばして居を正した。

遅しい上腕をリ・ガズイ目掛けて一直線に伸ばし、強かな指先でばさり『扇』を広げる。

ざわつ、と会場に動揺が走る。

モーラ鬼灯が『型』に入った。

仕掛けるつもりなのだ。

アムロ・レンがハリマオ相手に見せた、あの鶴の歩法を。

よりよって安室流の宗家に対して…………。

ゆらり。

動くでもなくノーベルが動いた。

0.1tを超す体重を感じさせぬ、蜚蜚の軽やかさ。

つらつらと砂地を滑るように間合いを詰める。

中々どうして堂に入った足運び。

…………、思う観者はおそらく三流であろう。

192cmの筋骨隆々たる体軀が艶やかに舞う事は、やはりどこかに無理がある。

確かに美しい、美しい振る舞いではある。

が、美しくあろうと意識するあまり、肉体が型に嵌ってしまったている。

指先の柔らかさが足りない。

本物の舞術家相手に通用し得る足取りでは無い。

だが、それならば何故、モーラはわざわざそんな未熟な技を敢えて

衆目に晒すのか？

国内最高のアスリートは、同時に国内最高のリアリストでもある。現在の自分の立ち位置、その力量について誰よりもシビアに分析できる女だ。

現に彼女自身が言っていたでは無いか。

自分の舞踊の業前は、精々が初伝止まり――。

（――海を見れば――）
山。

明察と同時に192cmが跳んできた。

舞踊の衣を鮮やかに脱ぎ捨てて、褐色の弾丸が大地を疾った。

至近からの高速タツクル。

間一髪、アムロの読みが間に合った。

八双跳びにノーベルの体をかわし、刹那、足元を強かに蹴り上げた。痛烈な蹴手繰り。

勢いのままに女帝の体が半回転する。

（――！・そんなワキヤ）

無いだろ。

レスリングとは、倒す競技、倒されぬ競技。

体幹の強さが胆の105kgが、おいそれと崩れよう筈も無い。

と、思った瞬間にリ・ガズイの右足が浮いた。

やはり。

前試合のハリマオと同じ体捌き。

蹴られた流れに逆らわず、ノーベルは自ら体を回転させたのだ。

回転させ、そして、眼前にあるリ・ガズイの踵を、天地上下に取りに来たのだ。

常ならば、外せたであろう搦め手である。

だが、モーラが亡き母の安室流を使うと言う事実には、ほんの僅かばかり、有るか無いかの動揺が生まれた。

動揺が反応を鈍らせ、結果、安直な回避に、安直な反撃に動いてしまった。

全てが女帝の掌の上の出来事である。

神技の正体は、アムロのような靈感でも、ハリマオのような反射神経でも無い。

ニュータイプとも超兵とも違う。

弛まぬ努力と経験に裏打ちされた、正しくスーパーパイロットの境地。

「くっ」

重厚な掌を振り払って、リ・ガズイが大きく腰を落とす。

その間にもノーベルは大地に四肢を突いて、追撃の体勢に入っていた。

クラウチング。

まずい。

零距离。

回避不能。

（――逸らすー！）

かかりの呼吸に合わせ、すつ、と右足を引く。

一直線に突っ込んで来るであろうノーベルの巨軀を、左の前足を軸に捌き切り、勢いのまま右方向に逃がす。

捌いて、みせる。

読まれた。

モーラ鬼灯の選択は、変化。

突撃の直前、くっ、と一瞬タメを作り、アムロの呼吸を外してきた。すつ、と下がるリ・ガズイの右脚を見定めた上で、軸足側に回り込

んできた。

サイド取り。

世界を制した上腕二頭筋が、リ・ガズイの左腿を抱え、崩しにかかる。

「くっの……」

小癩な敵の頸椎を叩き伏せるべく、リ・ガズイが手刀をかぎす。

その間合いから逃れるように、ノーベルは外へ外へと旋回し、円の動きを刻む。

両者の間に立ちはだかる、圧倒的なまでの身体スベックの壁。

「否応も無く振り回され、リ・ガズイの体が廻る。同じ武術家が相手であれば、こうも無様に後れは取るまい。単純なアスリートが相手なら、もつと優雅に翻弄も出来よう。だが……。」

「及第点の武術で十分。」

そこにアマレスプロレスを乗せれば、千点でも一万点でも付けられるのがモーラ鬼灯なのさ」

ぼそりとモーラが嘯く、その間にも体は傾く。

とさり、と背中が白砂を叩く。

テイクダウン。

会場が、熱狂に震えた。

立ち技格闘技の世界は、残酷である。

構えを見、思惑を見、幾つもの可能性をちらつかせながら間合いを詰め、そして、仕掛ける。

その駆け引きは時に、平将棋の指し合いにも似る。

へぼ将棋のヤケクソが、時に実力者の牙城をも脅かしうる。

そこに一切の弁解の余地はない。

一方、ならば寝技の攻防は、冷徹な世界とも言うべきであろうか？ 局面としては双方の展開、攻防が終わり、既に詰み筋に入っている。体勢が有利な方、体格に秀でた方、キャリアの長い方、ダメージの少ない方、スタミナの残っている方――。

総合力に勝る方がまず主導権を握り、そして、手損を犯さない限りは確実にそのまま詰む。

ルール上のブレイクでも無い限りは。

どれほどに時間がかかろうとも、いずれ、必ず。

天才の閃きが割り込む余地があるとすれば、それは先方が悪手を打った直後のみである。

「ちやアー！」

ゆえに迷わず、アムロが動いた。

テイクダウンを奪ったモーラが、足元から這い上がってくるこの瞬

間。

脱出のチャンスは、この時にしか無い。

例によって選択肢は、空いた右足のみ。

左側に体を捻じりながら、横方向目掛けて思い切り振り抜く。

尖鋭化した爪先が、鎌首をもたげたノーベルのこめかみを強かに打ち抜いた。

会心の一撃。

今、地に伏したこの状況で出来る、最善かつ最大限の一撃。

しかし蹴りながら思う。

あの女帝が、この程度の会心の一撃に怯むのか、と。

「——ひゅうつ」

やはり。

今度は逃れられない。

ノーベルは加えられたベクトルに抗う事無く体をよじらせ、たちまちぐるん、とり・ガズイがうつ伏せに捻じり返される。

(後ろ蹴り)

そう思った、が、駄目。

いかなる体捌きによるものか、ノーベルはその胸元をり・ガズイの足元にピタリと寄せ、体圧を加えながら下半身をぐいぐいと這い上がってくる。

打撃のための間隙が無い。

長年培ってきた理合を、完全に殺されてしまっている。

「ちィー！」

左肘。

そいつを鼻筋に叩きこもうとした瞬間、ぐるん、と更に体が右に返され、視界が星空を向いた。

り・ガズイが上、ノーベルが下。

そうか。

60kg強のウェイトを跳ねのけるフィジカルがあれば、そう言う選択肢もあり、なのか？

思う間にぐつと肘元を抑え付けられ、さらにモーラが這い上がる。

背中に腹隣でも生えているのかと言う力強い動きで。

肘に、そしてついに肩口に手がかかる。

太く、しなやかで逞しい両の腕。

常山の蛇。

192cm、105kgの大蛇。

するりと柔らかく絡み付き、次の瞬間には骨まで折れんばかりに締め上げる。

「——さつき、ちよつとばかり話したがね。

ナガラくんの拳、アレはやっぱり、こわい」

「……ッ」

粛々と締め作業にかかりながら、耳元でモーラが呟く。

「才能が無い、要領が悪い、だから巻藁を突くのをやめない。

拳が破れ、砕け、変形して、空手が血肉に宿るまでやめない、死ぬまでやめない。

そう言う狂気が、狂信が、節目節目で顔を出す」

「……がッ！　ぐぬ……」

「アンタは違うね、天才だ。

一を聞いて百が出来ちまって、そこから先の情念が足りない。

舞踊も、武術も、ボクシングも、キックも、柔道も——。

なんでも等しく満点で、ここ一番での投げ所が無い」

「~~~~~ッ」

どこか憐れむようなモーラの声。

否定したい、だが、出来ない。

何か叫ぼうものなら、その瞬間、太い腕が喉仏に回る事になろう。

「汗の量が足りてないんだ。

腹の底に絶対的な物がない。

もう一度、基礎の基礎からやり直すんだね」

モーラの声。

利いた風な口を聞くな。

そう思う間にも、首が締まる。

——月

あの夜もそう。

仮想空間の望月の柔らかな光は、無様な自分の姿を照らし出していた。

熱い。

体が軋む、頸も。

架空の空が、滲む。

月光が、柔らかな白を増していく。

行き場を失った熱がのたうち、足掻き。

白く、尚も白く。

輝き、全てが、やがて。

.....

霧の中にいた。

自分の指先までも見えないような、真っ白な靄の只中であつた。道を失った迷い子のように、当所なく歩を進める。

踝が、ざぶり、と水音を立てる。

静寂の中、ただ滾滾と川音だけが耳に届く。

身を切るような冷気が、足先から背を抜け、つむじにまで抜ける。

寒い。

先ほどまでの熱は、体のどこにも残っていない。

心が震える。

ぼろぼろと大粒の涙がこぼれる。

独りだった。

ただ独り、震える童女に戻り、泣きながら川面を歩いていた。

『汗の量が足りてないんだ、腹の底に絶対的な物がない』

うるさい、黙れ。

いやいやと、ぐずるように首を振るう。

奴に一体、何が分かると言うのだ。

何もかもが恵まれている人間に。

顔も知らぬママと蜜月を持ち、まっすぐに自分の夢を駆け抜けて来たあいつに。

独りだった。

大好きだったおばあちゃんは、七つの時に死んだ。

それからは、ずっと独りでやって来た。

祖母の残した、僅かばかりの覚書。

倉の奥に眠っていた、古ぼけブレたビデオテープ。

天賦の才。

頼れるものはその程度しかなかった。

断片的な情報を掻き集め、何度も何度も組み合わせ、試し、誤り、求め、繰り返し続けた。

記憶の底に残る、鮮やかな祖母の姿に近づかんと、もがき続けた。

『やめとけえ、レン、お前にや向かん』

ぽっかど煙を吐き出して、呆れたように老人が言った。

『お前は確かに天才よ。』

人を殺せる篤人の技を、単に安室の秘奥に近づく手段としか見とらんのだからな』

『そこらの玄人相手だったら、お前の敵にもなるまいよ。』

闘い、斃して、調子に乗って……、そんでいつかは何かに躓く。

まあ、武術つてのは命の遣り取りだからよ、躓いて、そこで終いよ』

古い先短い身内の忠告、鼻でせせら笑った。

技術は技術、良く切れる短刀を刺身に使って何が悪い。

そして天才とは、躓いたり転んだりしないからこそ天才なのだ。

古ぼけた『武』の概念を嘲笑うかのように試した。

武術も、ボクシングも、柔道も、キックも、少女にとっては全てが餌だ。

近代格闘技を覚え、それを制する古流の理合を覚え、そこから遡るように安室流の真髄へと手を伸ばそうとした。

一足跳びに駆け抜け、踏切り……、そして、躓き倒れた。

不器用な少年だった。

古ぼけ色褪せた空手しか知らない少年だった。

殺せる、と思った。

最初に道場で会った時も、二度目の海岸線でもそう思った。

事実、殺せた。

だが、前提が間違っていた。

空手の為に死ぬる少年だった。

少年にとつての闘争とは、命の遣り取りとは別の次元にあるもの
ようであった。

死して尚、少年は己の信念を曲げず、リーオーの拳が自分を叩いた。

祖父の言った通りであった。

自分はある日、あの砂浜で死んだのだ。

取り返しなど付こう筈も無い。

躓かぬからこそ、天才。

器が砕け、未来が、潰えた……。

ざぶりと、ざぶりと、いつしか水流は膝の高さにまで達していた。

全身が氷のようだった。

もう、これでいい。

天才に成り切れなかった。

せめて独りで来て、独りで去りたい。

そう思っても、何故かぼろぼろと嗚咽は零れ続けた。

どれほど歩き続けていたのか……？

唐突に、とくん、と一つ、心音が震えた。

錯覚かと思った。

アムロ・レンただ一人しかいない白色の世界。

濃密な霧のカーテンの先に、ゆらりと黒い影が一瞬揺れた。

心臓が早鐘のように高鳴り、指先が震える。

思わず駆けだそうとした途端、足が嵌り、水面に沈んだ。

全身の感覚が消え、それでも尚、足掻き、這い上がり叫んだ。

「ばあちゃんッー！」

祖母であった。

記憶に残るあの頃の姿で、しゃん、と綺麗に背筋を伸ばし、最愛の

人がその対岸に立っていた。

アムロ・レンの全てがほどけ、ただ必死で駆けた。

駆けようとした。

その脚が、対岸の手前でふっ、と止まった。

いや、止められた。

ビクン、と体に電流が走り、そこから一步も動けなくなった。

知っている。

その感覚は、祖母が舞に入る際に、いつもその身に感じていたものだ。

気を、当てられたのだ。

すつくと居住まいを正した、祖母の立ち姿。

凜とした安室流宗家の仕手の振る舞い。

例え天魔外道と謳われる霸王であっても、天下無双の剣豪であっても、今、自分の舞うこの一間半には、決して踏み入らせぬ。

堂々たる演者の世界がそこにあった。

「なんでじゃ!?.. なんでじゃ、ばあちゃんツ!!」

魂を引き千切るように、少女が叫んだ。

悲痛な野良犬のような喚き声を上げ、哭いた。

少女を人間たらしめていた尊厳の籬が、全て弾け飛んでしまったようであった。

ゆつくりと、祖母が右腕を上げた。

皺枯れた、ほっそりとした指先が持ち上がり、導かれるように、少女が後背に目を向けた。

「……………」

——無限の宇宙そらが、広がっていた。

「…………どおりで、寒い、わけじゃの」

ぼつり、と、感嘆が漏れた。

奇妙な光景であった。

相変わず祖母の立つ彼岸は濃密な霧に覆われていたが、川半ばか

ら臨むあちら側は、驚くほどに澄んで見えた。

大小の真珠をばら撒いたような星空の中に、際立って大きく浮かぶ青い星が見えた。

赤茶けた大陸の極東に、ちっぽけな島国が見えた。

緑に満ちた関東平野が見えた。

その山際に、閑散としたアミューズメントパークが見えた。

真っ暗なプラネタリウムを照らす、オーロラビジョンの光が見えた。

その電影の世界の中で、絡み合う二体のモバイルスーツの姿が見えた。

アムロ・レンは川半ばにあつて、今、世界を睥睨していた。

ノーベルの太い腕が、リ・ガズイの首をスリーパーに捕えている。だらりと弛緩した少女の肢体。

決着。

万人の観衆がそう思っている事が、今の少女にはつぶさに感じ取れた。

「……阿呆か、お前は」

まるで他人事のように、ぶっきらぼうにアムロが言う。

「両手が空いておるではないか？

はよう殺れ、ゴングが鳴ってしまふぞ。

ほれ、まずは右手じゃ」

アムロの声に促されるように、地上のリ・ガズイの右腕が柔らかく動き、そのしなやかな指先が、背面、ノーベルの胸部との隙間にもぞもぞと割り入る。

「もうちよい右……、そう、それ、筆り取れ」

「……」

リ・ガズイが指先をぎゅつ、とすぼめる。

たちまちビクリとノーベルの肩が竦み、その両腕が小刻みに震え始めた。

死に体のリ・ガズイが仕掛けた。

ざわざわと困惑する観衆を、天上のアムロが鼻で笑う。

理合、ではない、経穴、でもない。

無論、空手バカ二代目のようなピンチ力でもない。

悪魔の選択はもつとシンプル。

篤人流宗家、渾身の、右乳首攻め。

笑い事では無い。

乳頭は鋭敏なる痛覚が集中する超危険ポイント。

こと女性にあつては、如何ともし難い母性本能が受け手を襲い、闘争心が削ぎ落されてしまう。

例え女帝であつても、いや、女帝であるがゆえに避けられぬダメー
ジ。

それでも必死で奥歯を喰いしぼり、ブンブンと首を揺すつて凌ぐ。

「それ」

ふわりと泳いだブロンドのポニーテール。

左手で迷わず掴み取り、ぐつ、と肩口に引き寄せながら、乳房を弄つていた右手を放し、即座に叩き込む。

「がッ!？」

今度こそ、女帝が哭いた。

中指をわずかに浮かせ、鉄菱に固めた右の拳骨。

そいつで思い切り人中を打ち抜いた。

絶対急所。

これに耐えられる者のがいるならば、それはそもそも人間では無い。
い。

のけぞり緩んだノーベルの両腕を潜り抜け、リ・ガズイがあっさりと立ち上がる。

後背の敵を気にする風も無く、悠然と仮初の大地を闊歩する。

その様をアムロは川半ばから見ていた。

ざわめく観衆をリ・ガズイの目で見渡しながら、同時に頭を振るうノーベルを見下ろしていた。

唇の上に痺れる、焼印のような熱を見ていた。

紅くほてった右の乳房を見ていた。

大きな背を走る冷たい汗を見ていた。

屈辱に震える蔽つい肩を見ていた。

逞しい大腿筋に蓄えられる、豊んだバネのような応力を見ていた。

リ・ガズイの背中に向けられた敵意を見ていた。

(タツクル！)

「うん、タツクルじゃな」

短い打ち合わせを終え、少女が、振り向きもせずにもリ・ガズイが跳んだ。

その下を、ノーベルの大きな体が高速で通過していく。

迷わず肩口に乗り、崩した。

ノーベルは頭から大地に突っ込んだ。

篤人流甲冑術『鶯崩し』

プロレスで言うならば、カーフ・ブランディングに近い技である。

後背から敵の背に飛び乗り、二人分の具足の重さを頸椎に叩き込み、或いは脇差で首を落とす。

本来ならば、戦場で太刀を失った際に、不意打ちとして仕掛けるべき技なのだが、それをアムロは正面から、しかも相手に背を向けた状態で極めた。

「成程、のう」

相手のダメージを確かめる事もなく、ゆるり、と歩を進める。

シン、と水を打ったように静まり返ってしまった舞台の中央で、ぴたり、と足を止める。

間

やがて、少女がすつ、と右腕を前方に差し出した。

ぴくん、と軟い電流が万人の頬を撫でた。

ふわり、と少女が、リ・ガズイ廻った。

真紅のしやぐまが柔らかく浮き上がり、まるで別個の生命のように燃え上がった。

炎が舞っていた。

炎のような、鮮やかな紅の髪の毛だった。

「ちい、と、軸足が固いかのう」

少女がぼやくと、たちまちリ・ガズイの膝が柔らかく曲がる。

「何じゃその手は？ だらしない」

リ・ガズイの人差し指に、ピン、と力が入る。

廻る、廻る、少女が廻る。

炎が躍る。

廻りながら近づいて行く。

芸術に。

美、その概念の根源に。

顔も覚えていない母親の姿に。

少女の始まり、透き通るような祖母の姿に――

『ばーちゃんは、どおしてそんなに、きれいにおどれるの？』

少女の声が聞こえる。

『心をの、飛ばすのよ、ちょうちよのように、ひらひらとな』

在りし日の、祖母の声が聞こえる。

『とばすの？』

『三途の川……、うぬのママがいる所によ。

向こうからは此方側が、何もかんもが、妙によう見えよる。

うぬの顔も、自分の無様な姿も、の』

『うそだ』

『カカ、わしの言葉が信じられぬならば、うぬは所詮、そこまでの器よ。

もつとも、こいつを続けていりやあ、その内に知るじやろうよ。

安室の舞が好きなら、その内にのう』

『しゅき』

「なんだ」

ぼつり、と溜息がこぼれた。

答えは初めから自分の中にあつた。

謎かけのような祖母の言葉。

その裏にある安室流舞踊の真髓を求め、十数年、独りで這いずり足

搔いてきた。

だが、蓋を開けてみれば何と言う事も無い。

謎でも何でもなく、それは本当に言葉通りの意味だったのだ。

例えば、自転車に乗れる世界がある。

廻り続ける車輪は、ジャイロ効果により倒れる事無く前に進む。

理屈の上ではそうなっている。

だが現実には、自転車に乗れる世界と、乗れない世界が確かに存在している。

三輪車に乗る。

補助輪を付けて、自転車に乗る。

荷台を支えてもらって、走る。

何度も何度も、転ぶ。

その内に、ある日、ふつ、と出来るようになる。

意識せずとも倒れる事無く、自転車は前に進む。

世界が変わる。

別の世界にシフトしたのだ。

逆上がりの出来る世界がある。

跳び箱の跳べる世界がある。

クロールの出来る世界がある。

幾つもの世界がある。

乗り越えられる世界もある。

乗り越えられない世界もある。

乗り越える度に世界が変わり、別の風景へと変わっていく。

今宵、アムロ・レンは、新たな世界に入門した。

観法『彼岸ノ見』

篤人流古武術における、無我の境地。

そして、安室流舞踊の頂である。

どれほどの間、舞っていた事であろうか？

いつの間にか、アムロは一人の少女が舞台に立っている事に気が付いた。

くしゃくしゃの黒い髪の毛に、褐色の肌の、痩せっぽちの女の子。呆然と、アム口の舞を見つめていた。

小さな指先が、微かに震えていた。

サファイアのような大粒の瞳に、きらきらと輝く物を堪えていた。

「……わしのママの事、そんなに好きだったんかい」

呆れたように、アム口が溜息を吐いた。

何故舞踊をやめた、そう思う。

自分だったら、身長が2メートルになろうと3メートルになろうとやめない。

きつと彼女は、見誤ってしまったのだ。

自分が本当に求めていたもの。

かけがえの無い、つながり。

無我の境地。

篤人流古武術における、ひとつの到達点。

自我……、自己と他者との境界を取り払い、その思考と交わる。

敵の思惑を明確に理解出来たならば、どのようになでも対応が出来る。

ありとあらゆる攻撃を無力化出来る。

だが、そんなのは所詮、些事だ。

真の意味で他者と一つに成れたならば、もう、敵などと言う者は何処にも存在しない。

その心の痛みを、悲しみを、欲するものを違わず知る事が出来たならば、そこには諍いも争いも生じず、拳を握る必要が無くなる。

武を捨てる。

それこそが武術の究極の境地。

今やアム口は、舞いながらかつての祖母となり、また、キラキラとした女の子の瞳で顔も知らぬ母親を見上げていた。

倒すべき敵など、居ない。

けれど、それならば自分は、一体どうするべきなのだろうか？

この氷のような宇宙の果てに、独りで……。

そこまで思った所で、じつ、と背中に熱を感じた。

知っている。

少女が天空から見下ろす。

リ・ガズイが振り向きざまに見上げる。

ナガラ・リオ。

いつ死んでも良い少年だった。

あの場に居る誰よりも未熟な少年であったが、今のアムロの心境に誰よりも近づけるのは、あるいは彼なのかもしれない。

その少年の、生まれつき色素の薄い瞳が、さながら青い炎のように、少女の体を灼いていた。

それだけが、絶対零度の世界で唯一の体温だった。たちまち世界が、根平の砂浜へと変わる。

出会った時から、気に食わない小僧だった。

才能の欠片も無い癖に、男と言う境遇一つで、自分の前に立ちはだかる馬鹿者だった。

自分が求めて止まなかったものを、全て持って生まれてきた男だった。

ブチのめしてやろうと思った。

その少年が、泣いていた。

腫れ上がった瞼と眼窩の隙間から、清らかな涙を流していた。

それを見た時、思った。

ああ、こいつも、かけがえの無い人を亡くしてしまったのか、と。

『アムロよオ……、やろうぜ、ガンプラ・ファイト』

野良犬が、哭いた。

どうしようもなく憐れだった。

アムロ・レンは、万事において天才だ。

独りで来て独りで去る。

何処へだって行ける、何にだってなれる。

この男は違う。

空手しか知らない。

それ以外のまっとうな生き方を知らない。

それなのに、繋がり合える相手を無くしてしまった。
じゃれつく相手を、今はアムロに求めている。

「いいじゃないか」

あの時はそう思った。

今だってそう思う。

今や世界は、アムロ・レンの手の内にある。

野良犬のささやかな願い、叶えてやって何が悪い？

ゆらり、と、アムロが褐色の女の子の下へと歩みを変えた。

何かを求めるように、女の子が両腕を広げた。

その手をすり抜け、アムロの白い指先が、女の子の頸にかかった。

両手の親指と人差し指。

ちよこんと頸動脈を押さえられ、褐色の女の子は、まどろむように
倒れ、眠った。

・
・
・

しん、と仮初の夜が静まり返っていた。

熱狂に飢えていた筈の格闘バカたちが、完全に言葉を失っていた。
地に伏した女帝、ビルドノーベル。

茫漠とした瞳で月を見上げる、リ・ガズイ風月。

ぎゅっ、と胸の前で組んだ両手に力が入る。

ぶるぶると、知らず少年の両肩が震えていた。

恐怖に、ではない。

怒りに、でもない。

強いて言うならば、悲しい、ような気がした。

いたたまれない。

月明かりに独り佇む少女の姿に、何故だかり才はそう思った……。

ココロオドル

【只今戦闘準備中！】

第一回ガン普拉ファイト最大トーナメント 決勝戦は21:30開始の予定だよくん(≡▽≡)

液晶の画面に、可愛いフアントで書かれたアナウンスが踊っていた。

闘技者が去り、無人となったはずのコロッセウムの上で、小さな影がちよこまかと踊っていた。

MS少女であった。

今やすっかり、SDサイズと化したBB少女であった。

具足の上からいつちよまえに陣羽織を纏ったBB少女が、鳴り続ける音楽のままにココロオドリEnjoy! していた。

「ハム姉きやわきやわ」「今北産業」「あくんモーラ様が死んだ。(ノロ)」。。

「この番組は、(有)アカハナ土建の提供でお送りしております」「うくとイレトレ」

「READY GO!」「READY GO」「Ready Go!」「LEDDY GO!」

「READY GO!!」「※Gガンの意味で」「READY GO!!」「弾幕薄いぞー!何やってんの!」「wktk」「副音声の方がオススメですぞ」

「薄くねえよハゲ」「ビグザムだけはガチ」「また髪の毛の話してる……」
三十分の小休止にも関わらず、一向に減る気配を見せないアバター達のコメントが飛び交う。

ヴァーチャル・リアリティ
仮想空間。

ともすれば忘れがちになるが、今宵、繰り広げられている闘いは、現実であって現実では無い。

このガンプラバトル全盛期の時代にあって、各地に雌伏した救い難き格闘技オタクたち。

彼らの熱情によって、この電子空間は支えられているのだ。

ときめき。

高鳴り。

きらめき。

待ち焦がれていた。

モニターの中のコロッセオを通して、格闘技を愛するマイノリティー達が一つになっていた。

世界中の、誰も彼もが昂っていた。

稚内でも、フィラデルフィアでも、バリでも、鹿児島でも、弘前でも、モンテズマでも、バンコクでも、泉州でも、南の島でも、大阪でも、メトロシテイでも、ムンバイでも、根平島でも、リオデジャネイロでも――、

——そして極東のコンクリート・ジャングル、東京の片隅、うらぶれた木造の旧家でも……。

「おーい、風呂、空いたぞ」

わしわしと、茹で上がった赤髪をタオルで拭いながら、カミキ・セカイが襖を開ける。

たちまちがやがやとした雑談が、少年の耳に届いた。

普段ならば、姉一人、弟一人の閑静な住居である。

だが、今は暦の上では夏休み。

しかも、ただの夏では無い。

今春、ガン普拉バトル選手権・西東京地区予選において見事優勝を果たした、聖鳳学園中等部

「トライ・ファイターズ」

夏休みが明ければ、すぐにでもアツイ全国大会の幕が切つて落とされる事になる。

今は正に、各々の機体を仕上げる追い込み時期。

カミキ家を舞台にした、プチ合宿の真っ只中と言う訳だ。

言う訳……、なのだが。

「——もう、分からない人ね！　今はそんなのにうつつを抜かしてる状況じゃないでしょ？」

「そんなの、って……、違うんだよ、これは——」
「……って、ありゃ？」

室内に入った途端、セカイは異変に気が付いた。

今頃は皆、黙々とパーツの調整を進めているだろうと思っていたのだが、何か様子がおかしい。

二人の少年少女が、部屋の中央で何やら揉めているようだ。

「シモンにギャン子、何やってんだ、お前ら？」
ぽつり、と疑念が洩れる。

呟いてみて、改めておかしな組み合わせだ、と思った。

二人は元々、聖鳳のバトル部では無く、東京大会を通じて知り合った、言わば好敵手^{ライバル}である。

セカイ達の様子を気にして駆けつけてくれた助っ人と言う訳で、ほとんど初対面同士の組み合わせだった筈なのだが？

「あら、セカイくん！」

セカイに呼び止められ『ギャン子』と呼ばれた少女の顔が、ぱつ、と華やぐ。

聖オデッサ女子学園三年、サザキ・カオルコ。

その愛称は容姿や性格に由る所では無く、日本有数のガン普拉ビルダーである兄から受け継いだ、過剰なまでのギャン愛に由来する。

実力相応の自信家であり、実際、腐れ縁の関係であると言うホシノ先輩と、度々角突き合わせている所を目撃しているセカイではあったが、少なくとも初対面の男子に喧嘩を売るような女ではない……ハズだ。

そのギャン子が、栗色のツインテールを揺らしてセカイに訴える。
「ねっ、セカイくんからも言っただけよ。」

今の私たちには、ガン普拉製作以外の回り道をしてる暇はないんだ、って」

「うん？　ああ、まあ……」

どう答えて良いかも分からぬまま、困ったように向かいの少年に目

を向ける。

イズナ・シモン。

常冬中学のエースであり、ガンプラを始める前はボクシングの中学生チャンプだったと言う異色のファイターである。

その経歴通り、絵に描いたようなネアカのスポーツ少年であり、セカイとも何かとウマの合う相手であった。

また、難病の弟がいる事情もあってか周囲の面倒見が良く、同年代の友人たちよりも、幾分、落ち着いた雰囲気を持った少年でもある……、常ならば。

「いや、だから、そんな事は分かってるんだよ！ 俺だって……」

そのシモンが、柄にも無く狼狽していた。

ひどくうろたえ、取り乱していた。

と、言うよりも必死だった。

その姿はまるで、

「ジオンが核ミサイルでガンダムをコロニーごと吹き飛ばそうとしているのを知った男の子」

のように切実であった。

「けど、だからこそ次の決勝だけでも見ておくべきなんだ！

特にカミキ！ お前は……」

「え！ 俺!？」

唐突に話を振られ、思わずセカイが鼻白む。

キョロキョロと、助け舟を求めるように室内に視線を泳がせる。

「なあ、ユウマ、決勝って何だ？」

「……………」

咄嗟に視界に収めた、チームメイトのコウサカ・ユウマに疑問を振る。

だが、そのコウサカ少年は、無言。

姿勢を正して正座を組んで、長机の上のノートパソコンの液晶を、眼鏡の奥から睨みつけるように見つめ続けている。

傍らにいたポニーテールの少女、ホシノ・フミナが、取り繕うに口を開いた。

「ええつとね、イズナくんが、どうしても『これ』を見ておけつて言うのよ。

ビルドバーニングの組み立てに入る前に、つて」
「これ？」

ホシノ先輩に促されるままに、モニターをユウマの上から覗き込む。

「……これ、つて」

ガンプラバトルであった。

ノートパソコンの液晶の奥に広がっては、この新学期以来すっかり馴染みとなった戦いの光景であった。

絡み合う二つの鋼鉄の巨体。

だが同時に、どこかしら、言い表し難い違和感があった。

何かが足りない、何かが異なる。

宇宙を駆ける機影が無かった。

ビームライフルの閃光が無かった。

ミサイルポッドの爆音が無かった。

弾幕に揺れる廃墟が無かった。

ぶつかり合うビームサーベルの輝きが無かった。

代わりにあったもの。

年季の入った、重厚な円形闘技場^{コロッセオ}。

赤々と夜空を焦がす、篝火。

ぶつかり合う拳と、軋む金属の音。

そして、ヴァーチャルにはどこか憑かれたような、観客の熱狂。
「……非公式の、ガンプラバトル大会の映像なんですつて。

ブースターも武装も、一切使用禁止の……」

ホシノ先輩の説明が、右から左へと抜けていく。

軽やかに大地を蹴る、細身のフラッグ。

高らかと天を突く、太い黄金の脚。

手四つ。

月光に震えるアツガイ。

ガチぴよんチャレンジ。

漢のボーナスステージ。

真紅の軌跡を描く、ザクⅡのグローブ。

牙、牙、牙、爪、爪、爪。

ノンビームラリアート。

なぐりあい、宇宙——

なんだろう？

これは一体、いかなる光景であるものか？

わからない、分からないが、しかし……。

「……なんか、スッゲーな、これ」

率直に感想が零れた。

そう、理解できずとも、ふつつつと胸に湧き上がるものがある。

これはきつと、そういう光景である。

真つ当に、どうしようもない男の子であるならば、必ず。

「そう、そうなんだよ！ 分かるだろう？」

傍らで、感際まったシモンが叫ぶ。

「闘ってるんだよッ！

ルクス・ランドアが！ 月天山が！ ビグザム剛田が！

ギンザエフ・ターイーが！ モーラ鬼灯が！ オード・イル・タツ

プが！

サマワツカ・イーヲが！ ガチぴよんが！ ガンプラで！

こんな、こんなの……、見逃すワケにいかないじゃないか!!」

「だくかくらく、そんなワケ無いって言ってるでしょ。

ガチぴよんがプロの格闘家と闘えるハズ無いじゃない。

あとビグザムって誰よ？」

「へえ……」

口元は無邪気な笑いを浮かべ、ぽつり、とセカイが言った。

「で、ドアンだかザンギだかつて、誰？ 強いのか？」

「え……？ な、なんだってお前が知らないんだよ!」

「いや、だって、ギアナにはテレビとか無かったし」

「くうっ！」

シモン少年が、哭いた。

残酷な世界があった。

齢五十にもなるボクサーが全盛期のパンチを放つ。

それが、どれだけ凄い事であるか？

その伝説の拳を真つ向から受け止める、プロレスラーの大きさが。

そのレスラーをも圧倒する、ガチぴよんの恐ろしさが。

CWA最強の男をリフトする偉業が。

ラジャダムナンの英雄が競技を捨てると言う意味が。

絶対王者に立ち向かうアツガイ乗りの勇気が。

それが、何一つ伝わらない。

哀しみに満ちた世界があった。

「けど、ギャン子の肩を持つわけでは無いけれど。

この映像も多分、エキシビジョン……、実在の選手のスタイルを真似た『ごっこ』なんでしょ？

今さらビルドバーニングの動きの参考になんてなるのかしら？」

「いや……、あながちそうとも言い切れない、みたいです」

ためらいがちなフミナの言葉を遮って、それまでずっとだんまりを決め込んでいたユウマが、唸るように口を開いた。

「武装もブースターも一切使用禁止で、さながら生身のようにぶつかりあうレギュレーション。」

正直そんなの、ガンプラでやる意味が無いじゃないか、なんて思っています。

少なくとも、彼らはそうは思っていない、本気です」

「本気？」

「機体の作り込みが違います。」

どの機体も、不要なパーツを削り、関節の稼働域を確保し、機体の強度と重量バランスを見ながら、慎重に調整を重ねている。

僕は生憎、格闘技には詳しくありませんが、それでも彼らが、元ネタのファイターの動きを再現しようとして腐心しているのが伝わってきます。

そこいらの、よくある同好会のレベルじゃない」

ユウマの解説に、セカイが心の中で頷く。

ガンプラの改造について造詣が深い少年ではないが、それでも伝わってくるものがある。

本場タイのナックモエが放つ、鞭のようになるミドルキック。

銀盤の上を跳ねるような、鮮やかなダブルアクセル。

地面スレスレを疾る、弾丸タツクル。

バックドロップ。

中国拳法、散打、その神秘。

猛り狂う野生の牙。

軽やかに舞う、炎の髪の乙女。

ここまでであったのか、と、思う。

自分とビルドバーニングのコンビだって、そう捨てたもんじやないだろう、と言うくらいに自負はある。

だが、無限の可能性に自らの夢を重ねた愛機と、彼らの目指す理想の機体とは、そもその解法が異なるようであった。

ガンプラとは、ここまで削ぎ落せる物であったのか。

武装を捨て、バックパックを捨て、シールドを、装甲を捨てて。

一切の虚飾を捨て去り、こうまでも肉体の本質に近付ける代物であったのか……。

「——特に、この決勝まで上がって来た銀色のリーオー。」

これの製作者は、おかしい。

外見こそぱっとしない機体ですが、機体強度と稼働域の両立のために、おそらくはフレームを一から自作しています。

何と言うか、ファイターの癖の一つ、息遣いの一つまで見逃すまいとする、執念が伝わってくるような……。」

「ん？ リー、おー？」

「つて、おい!? 無理やり割って入って来るなよ」

ユウマの抗議を聞き流し、セカイがまじまじとモニターを凝視する。

「……………」

鈍色の機体であった。

液晶のモニターの中にもう一つ、TVモニターのような頭部を持つ

た機体が存在していた。

渋い黒鉄の骨格を覆う、白銀の外装。

足先に、まるで生身のように生やした五本の指。

それ以外にはさしたる特徴を見出せぬ、まるで量産機と言う概念を、そのまま形にしたような変哲も無いMSであった。

そのテレビ顔が、天地上下に構えていた。

空手家の構えである。

空手道が三雷会を経て体系化し、一つの競技として成立する前の、古風な武術家の構えである。

それでいてテレビ顔は、次の瞬間には、まるで瑞々しい若木のようにその身を揺らした。

壁を蹴り上げ、頭上より迫るフラッグの、更に上を取って大上段に斬り伏せる。

白砂を巻き上げ、スモアの顔面を強かに蹴り上げる。

両腕を廻してタイトスのナックルパートを捌き、返しの正拳を寸で極める。

「……………」

見覚えが、ある。

カミキ・セカイは一週間ほど前に、こう言った古流の空手を使う若者と、拳を交えていた。

「おい、いい加減離れろ、暑っ苦しいだろ！」

「この、テレビみたいな顔した奴、リーオー、って言うのか？」

「…………… ああ、そうだ。」

OZ-06MS『リーオー』

新機動戦記ガンダムWに登場した、ACで最もスタンダードなMSの名前だ」

「空手家で、ナガラって言えばさ、三雷会の元九段が有名だけど。」

でも、こいつの動きは、何かイメージと違うんだよな」

「……………」

二人の言葉を意識に入れつつ、改めてセカイが画面の中のリーオーと向かい合う。

確かにシモンの言う通り、リーオーの繰り出す技は、伝統的でありながら、決して正当では無かった。

競技ではお目にかかれぬ息吹をやった次の瞬間には、総合格闘技顔負けのロシアン・フックが飛び出し、また、プロレスさながらの投げを打つたりもする。

若さに裏打ちされた猥雑な連携。

そして、それはセカイの知る少年の体捌きとも、微妙に異なるものに感じられた。

画面を所狭しと動き回るリーオーの姿は、セカイの知る正当な空手よりも、奔放で節操がなく、また容赦の無い戦士であった。

『武術家が、手の内を全て見せる時はよ……』

唐突にセカイは、あの時の彼の言葉を思い出した。

そう、自分か相手、そのどちらかが死ぬ時だ。

その一方で確か、こうも言っていた筈だ。

限られたルールの中で、出来る事を全てやって、だから安心して遊べるんだ、と――。

・
・
・

——同時刻、アミューズメントパーク・ラビアンローズ内『預言者サラサの館』

ペルシア調のシックな平織の上に、今、カミキ家で話題沸騰中のリーオーが、上を向いて寝かされていた。

そのテーブルを挟んで、狭い室内で少年少女が向かい合っていた。

「……………」

上座に座る瓶底眼鏡の少女、ヒライ・ユイは無言であった。

くしよくしよになった銀色の外装にニツパーを入れ、パーツの一つ一つを、ピンセットで丁寧に取り外しにかかっていた。

「……………」

下座の少年、ナガラ・リオもまた、無言であった。

視線を外し、ただ、無言で頭を下げていた。

「……………」

「……………」

双方、共に無言であった。

沈黙の室内に、パチン、パチンと言う、小気味よいニツパーの音だけが響いていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………すまん、ヒライ」

「……………謝られるような事は、何もない」

外装のバラシを終え、ふうっ、と軽く一息ついて、ヒライがようやく顔を上げた。

「ナガラ・リオは誤解している。

リーオーは兵器で、消耗品。

シヨーケースに飾られるための機体では無い」

「それくらいの事は、俺にだって分かっちゃいるが……………」

「トールギスのような、どうしても戦える機体ではない。

地べたに這い蹲り、装甲の厚い部分でかろうじて受け、凌ぎ、有るか無いかのチャンスを待つ。

戦いの度に損耗するのは、リーオーの宿命。

……………特にこの子は、そうなるように私が作った」

「だったら虎徹は、まだ戦えるのか？」

「外装の柔らかさで攻撃を受け止め、フレームへのダメージを最小限に抑える。

骨格さえ無事ならば、外装の差し替えだけで戦えるのが、リーオー虎徹。

折れず、曲がらず、日本刀のようなMF」

——けれど、と。

一つ前置きして、骨格だけになったリーオーを手に取りながら、ヒライが言葉を重ねる。

「けれど、物質は疲労する。

外見にさしたる支障が無くても、繰り返し負荷を受け続ければ、内部に亀裂が生じ、強度は低下し、やがて、破断する」

「……………」

「形あるものは、いつかは壊れる。

日本刀も、本当は曲がるし、いつかは折れる」

それからしばらく、ヒライは両手でリーオーを廻し、剥き出しの骨格の一つ一つに、真剣な眼差しを向けていたが、その内にふっ、と手を止め、思い出したように言った。

「……ナガラ、手を、出して」

「ん、俺の、か？」

「そう、空手家の手」

言われるがままに、みっちり膨れ上がった厚い右拳を差し出す。ヒライ・ユイの細くしなやかな指先が、その、拳タコで膨れ上がった甲の上を――。

すり抜け。

伸びて。

「……………えっ」

――ほすん、と、リオの胸板を叩いた。

「……………」

一瞬、何をされたのか分からなかった。

リオの右手の甲に重ねられる筈だった白い指が、今、胸の上で正拳の形をとっている。

どう言う事か？

フェイント、不意打ち、騙し打ち。

信じられない。

ヒライが殴った！

酷いッ!?

いや、そうじゃない。

形ある物はいつかは壊れる。

成程、そう言う話であったか。

さすがはヒライ、良く見ている。

一回戦、首相撲からの膝。

二回戦、横綱渾身のブチかまし。

準決勝、プロレスラーからの情け容赦の無い重爆。

わずか一夜の内に、嵐のような乱撃に曝され続けた未熟な胸骨。

その骨の上に、今、少女の華奢が拳が乗った。

つまり。

痛い。

痛いッ!?

痛えええええエエツツ!!!!

堪えろ、馬鹿。

思い切りヒライが見ている。

さっきの試合で、やった通りにすればいい。

これは、罰だ。

戦いの中で戦いを忘れた。

ランバ・ラルなら即死だった。

なんでこう、覚悟の伴わない痛みと言うのは耐え難いものか。

トレーズの乗ったりオーナーならば、耐えるのだろう。

だったら自分も、平気だ。

凌いでみせる。

エレガントに、エレガントに、そう、あくまでもエレガントに……。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………助かったよ、ヒライ」

長い沈黙の後、ポケットの中の戦争を乗り越えたりオが、死んだ魚のような目をして、言った。

「殺されたんだな、俺は。

完全に油断していた。

今のがアイツの拳だったら、本当に危ない所だった」

「……………」

じつ、とヒライが無言の視線を向ける。

底知れぬ瓶底眼鏡の奥の瞳が、「そう言うこっちゃ無いだろ」としきりに訴え続けているが、今のリオには誤魔化す事しか出来ない。

やがて、ふう、と一つ溜息がこぼれ、再びヒライが、呟くようにポツリと言った。

「ナガラ」

「うん」

「……大丈夫、だから」

「えっ」

言葉の意味を掴みかねて、少女の瓶底眼鏡を真正面からまじまじと覗きこむ。

少なくともそこに、リオの行為を咎めるような濁りは見出せなかった。

「私が直すから。」

リーオーの拳は、もう、あなたを残して壊れたりはしない。

あなたの足手まといには、ならない」

「そんな事は……………」

分かっている。

信頼している。

心配した事など、ない。

けれど、ヒライ・ユイがここに立つ意味を思えば、重要な事だ。

「リーオー虎徹は、ナガラ・リオの為のガンブラ。」

私もリーオーのパーツの一部。

余計な気を回してもらおう謂れは無い」

「ああ」

その通りだ。

ガツン、と己の拳を額に当てる。

自分の方から誘ったのだ。

戦場で、己が背中を預けるパートナーに。

下らぬ強がりや、無意味な隠し事をするべきでは無い。

「ヒライ」

顔を上げ、改めてヒライ・ユイト、己が心情と向かい合う。

「アムロ・レンが上がって来た。」

俺の方からこの大会に誘った、あの女が、だ」

真つ直ぐなりオの言葉に、こくり、とヒライが頷く。

「すまねえ、ここから先は俺の私闘だ。」

お前には迷惑ばかりかけちまうが、どうしたって、やりたい。

余計な心配ばかりかけちまうが、もう一戦だけ付き合ってくれ」

「……私闘、なんかじゃない。」

あの日の根平での戦いは、この子にとっても始まりの場所」

淡々と、しかし強い意志の籠った声で、ヒライが応じる。

「あなたが戦いたいと望む事には、私には私なりに、ちゃんとやってみる価値がある。」

リーオーは必ず、最後まで持ち堪えさせてみせる、だから」

「……頼む」

どう返答するべきか一瞬悩み、しかし結局、いつも通りの声をヒライにかける。

ナガラ・リオの戦いに付き合う事を、ヒライ自身が望んでいる。

そこから先は彼女の領分。

決戦を前にしたリオが余計な心を割く事は、ヒライの意志に対する不実である。

「ナガラ」

そう、腰を浮かしかけた所で、再びヒライに呼び止められた。

「私の事なんて、忘れてしまっただけ構わない。」

今のナガラが考えるべきは、自分の事と、アムロの事、それだけ」

「アムロの……？」

『——準決勝の最後で見せた、彼女の立ち振る舞い。』

あれは、何て言うか、普通では無かった』

『——あれが単なる、達人の境地と、私の杞憂だと言うなら構わない、けれど……』

『——それは違う、チャンスがあるとすれば、ナガラだけ。

ナガラ・リオのおまけに過ぎない私には、出来ない事。

『——ナガラがそうであるように、アムロもあなたとの戦いを望んでいる。』

彼女がガン普拉・ファイトの舞台に立つ理由は、あなた、だから……』

——カラン、コロソ。

下駄が鳴る。

無人のアミューズ・メントパークに、時代遅れの下駄履きの音が響く。

ナガラ・リオ、一人であった。

大規模な広場の跡地に、月明かりと少年だけが佇んでいた。

ヒライ・ユイの言葉が、気になっていた。

アムロ・レンの立ち振る舞い、それが普通では無かった、とヒライが言う。

当然であろう。

あの『女帝』モーラ鬼灯が、何ら反応も出来ずに真正面から落とされたのだ。

普通である筈が無い。

あの瞬間、スリーパーに捕われ、意識を失いかけていたアムロの身に、何が起こったのか？

正確に窺い知る事の出来る人間などおるまい。

事によつては、当のアムロ本人にすら理解できていないのではあるまいか？

一つだけ確かな事。

アムロ・レンは、あの試合で化けた。

闘技者として、別の舞台へ移行したのだ。

リオにだって、戦士として経験が無いでもない。

幼い頃に亡父によって導き出された、細胞の一片に至るまで雷鳴を浴びたかのような目覚め。

自身の内に、別の宇宙の存在を垣間見たかのような、異質の感覚。アムロはそれを、万を超す観衆がはつきりと理解できるレベルでやったのではあるまいか？

だとするならば、先ず心配するべきは、アムロの心境では無い。己の命の方だ。

近代格闘技の頂点を以てして、てんで太刀打ち出来なかつた『達人』の境地。

次にあれを受けるのは、他ならぬ自分自身なのだ。

だが……。

『あの時のアムロ……、何だか寂しそうに見えた』

ヒライ・ユイの言葉、正鵠を得ていた。

彼女の言葉によって、欠けていたピースが埋まったような感覚があつた。

あるいは素人のヒライだからこそ、却って色眼鏡を外した感想が持てたのかもしれない。

あの時、訳も分からぬままに震えた己の両肩。

あれは正しく、武の頂に立つアムロの姿に、どうしようもない孤独を感じたからではないのか？

「……下らねえ事を」

考えている。

武の頂点に立った者の境地などと、自分には手の施しようも無い事象について考えている。

もうわずかに十数分もすれば、己の身を削り、心魂を燃やし尽くすような死闘が始まる。

それなのに自分は、アムロの事を考えている。

アムロの事を心配する、ヒライの気持ちを考えている。

女々しい話である。

魂が何だが、すどん、と底深い泥土に嵌ってしまっている。

こんな心境で、果たしてどこまで闘えるものか？

闘いの前と言うのは、もつと昂り、奮え、張り詰めているべきではあるまいか。

静寂の夜会に、ドン、ドン、と言う彼方からの太い音が、微かに大気を震わせる。

夏の終わり。

麓辺りで打ち上げられている花火の音が、この廃墟の空にまで届いているのかもしれない。

人里離れた夜の侘しさが、あるいはこんな、柄にもなくセンチな気分を引き出すのであろうか。

「……わからん」

結論を確認するように、ぽつりと一つ呟く。

思考の放棄、それもまた回答の一つである。

元よりナガラ・リオにとって、脳髄は物を考える処に非ず。

いつだって物を考えるのは、義務教育もまともに終えて無い脳みその方では無い。

己が標、骨肉に至るまで空手の宿った肉体の方だ。

「わからん」

さつきよりも、はつきりと声に出して言う。

これで良い。

考えた所で分からない物は分からない。

わからないものは丸ごと押入れにでも放り込んで、まっさらな気持ちで事に臨むのが良い。

アムロ・レンともう一度やりたい。

根平で伝えた素直な気持ち。

その一つだけを持って行けば良い。

必要があれば、その時自分の肉体は、リーオーの拳は自然に動く所であろう。

つまりは出たトコ勝負。

ヒライには悪いが、結局はいつも通りにやるしかない。

「……まるで、次元霸王流、みたいだな」

ふへっ、と自嘲がこぼれる。

唐突に、己が全身で歓びを放つように闘う、赤髪の少年の屈託の無い笑顔が脳裏をよぎった。

拳を通して思いを伝える、拳を重ねて相手を理解する。

それは本来ならば、武術、ではなく武道の領域だ。

新生永樂流とやらも、随分と毒されてしまったものだ。

「……………」

ふ、と笑みが消え、幾分軽妙になりかけていた下駄履きの音が、止まった。

開けた広間の中央。

ポツ、と一つだけ灯った街灯の下に、思わぬ人影を見出したためである。

暗闇の中、ライトの光を浴びて煌めく深紅の長髪。

サンダル履きに、珍しくも清楚な白のワンピースが、僅かばかりの風を孕んで長身に映える。

アムロ・レンである。

格式ばった胴衣を脱ぎ捨てたアムロが、どこか超然とした色の瞳で、彼方の闇を、じつ、と見つめていた。

「……………」

足を止め、しばし遠目に好敵手の姿を見る。

口惜しいが、美人である。

ああして一人、スポットライトの下で佇んでいる分には、本当に絵になる女である。

これで、隙あらば金玉を蹴り上げるような女でさえなければ、申し分無いのだが。

(……………さて)

アムロの人となりはさておき、問題はこの後だ。

行くか、戻るか？

今ここで、罪人でもないリオがアムロに対して気を遣う理由など無い。

だが時は決戦前。

それもスポーツやガンプラバトルでは無く、果たし合いにも等しい殴りっこの直前である。

集中力を高めるべき、大切な時間。

ましてや、今のリオには持ち合わせが無い。

アムロに問おうと試みていたアレやコレやは、苦勞して押入れに詰め込んだ直後であった。

(やっぱ、戻るか……)

それがいい。

どうせさしたる用件も無く、表をぶらついていただけの身分である。

これから真剣勝負をやるうと言う時に、敵と駄弁る剣豪がどこにいる？

そう考えて退こうとした。

しかし、肝心の足の方が、中々に動いてはくれない。

逃げる、と言う行為自体に引け目を感じているのだ。

目の前に立ち塞がるもの全てを蹴散らして己が道をいくのが永樂流の空手。

その継承者が、女と顔を合わせるのが億劫で腰砕けになるなど、とんだ笑い草だ。

ヒライに対しても合わせる顔が無い。

そんな僅かばかりの精神的な負い目が、最後の最後のせめぎ合いで明暗を分けかねないのが、実戦と言う場所だ。

余計な荷を背負いたくない。

何一つ非を持たない真っ白なナガラ・リオで、真正面からアムロと闘いたかった。

「よう出歯亀、いつまでそうしとるつもりじゃ？」

「……そんなんじゃねえや」

思案に暮れている内に、とうとうニュータイプの方からお声がかかってしまった。

一つ溜息を吐いて、少女の下へおずおずと近づく。

「カカ、どうせ下らぬうぬの事よ。」

ワシの艶姿に言葉を失い、にっちもさっちもいかずに立ち竦んでおったんじやろう?」

「気を使ってやったんだよ、これでも」

「救い難い自惚れ屋じやのう、ナガラ・リオ。」

うぬ如きとやり合うのに、何か特別な心構えが必要なワシかよ?」

カラカラと、嘲るように少女が嗤う。

ちえっ、と舌打ちが漏れる。

癪に障る。

常と変わらぬ綺麗な顔で、息をするように毒を吐く。

そんな普段通りのアムロの姿に、ひどく安心している自分がいる事に、無性に腹が立った。

「さて、まずは褒めてやろうかのう。

偉い、偉いぞ、リオよ」

「何の話だ?」

「うぬがよ、ワシとやりたい一心で、ようこそまで勝ち上がってきた事よ。」

途中でマジに、おっ死ぬかとも思うとつたんじやがの」

「よく言うぜ、お前こそ何度か死にかけていやがったクセによ」

「……? あつたけ、そんな事……?」

ぱちくりと、目を瞬かせるアムロの顔をまじまじと覗き見る。

マジで言っているんだとしたら、やはりアムロは天才だ。

都合の悪い記憶を、軽々と忘れ去ってしまう、悪魔のような天才。

「それで一体、今宵はなんじや?」

「なに?」

「なんぞワシに、言いたい事でもあるようなツラに見えたんじやがの?」

「……………」

満面の笑顔のアムロを前にして、リオが途方に暮れる。

今宵、このタイミングで出会ったのはただの偶然だが、話す事が無い訳では無い。

さりとて一体、どこから話を切り出すべきか?

「ああ、その、ヒライが、よう……」

「そんな話は聞きたくないの!」

たちまちアムロが眉をしかめ、口にしたリオも、内心しまったと顔を歪ませる。

ヒライ・ユイは関係ない。

そんな女々しい逃げがあるものか。

聞くべきは全て、自分の口から、自分の言葉で聞くものだ。

無言で金的を蹴り上げられなかった分だけ、アムロにしては優しい対応であつたかもしれない。

「……いや、あいつの修理が、時間がかかりそうなんだな。

時間を持って余してぶらついてただけだよ」

「ほくう?」

「ほれ、今日はヤケに、月がきれいだから、よ……」

会話に困ったりリオが、とりあえず話題をそこいらの月へと振る。

言つた瞬間、「なんじゃそりゃ?」と、自ら心の中で突つ込む。

元より話術に乏しい男であつたが、こうまで物を考えられぬ脳髓であるとは、自分でも思つていなかった。

「……カツ」

たちまち傍らで、悪魔の笑みが咲いた。

「カカカツ! カーカカ! カーツカツカツカツカツカツ!!」

アムロ・レンが嗤う。

嗤う。

嗤う。

嗤う。

いつかの因縁の死闘の前のように、腹筋が崩壊して死にかねない勢いで身をよじらせる。

「……俺がこんな事を言うのが、そんなにおかしいかよ?」

「カカ! いや、すまぬのう、リオよ。

ちいっつとも、おかしくなんぞないわい。

ただのう、そこまでうぬに想われるとは知らなかったでの、ちいと動揺してしもうたんじゃ」

「想われる……う？」

怪訝な表情を浮かべるリオの前で、にい、と悪魔のような女が邪悪な嗤いを作る。

「先のうぬの台詞はよ、ナガラ・リオよう。」

古来よりこの国では愛の告白を意味すると相場が決まっとなるんじゃない」

「なッ!? ンだとオ!!」

なんだって、そんな事になっていやがるんだ!？」

「カカツ カーカカ、こやつめカカカ！」

だくからうぬは、阿呆なのじゃくカカカ！」

「くくくッッ 知るかッ! ンな事!!」

無人の中央広場に、鬼の首でも取ったかのような悪魔の嗤い声がかまします。

「糞ー」と短く呻き、リオがそっぽを向く。

やはり、話しかけるべきでは無かった、と心の中で思う。

決戦に臨むための真つ白な心を、あつさりと塗りつぶされてしまった。

しばしの哄笑の後、やがてアムロがふっ、と呟いた。

「で、どうじゃ? リオよ」

「……なんの話だ」

ちらりと疑念と向けるリオの視線から逃れるように、けん、けん、けん、とアムロが跳んで、闇夜を背負ってくるりと振り返った。

「さっきの言葉よ。」

その本当の意味を知った所で。

もう一度、ワシに言ってみる勇氣はあるか、と問うておるのよ」

「……………」

まじまじと、邪悪な嗤いを浮かべた少女の顔を覗き込む。

外面は、これまでと差して変わらない。

リオが真面目に同じ台詞を言えば、たちまち大喜びで腹筋を振じらせる事であろう。

だが、以前よりも、ほんのちよつぴりではあるが、気持が昂り過ぎ

ているのではないか、と取れるきらいもある。

最初に根平でやり合った時も、少女は飄々とした態度をとっていたが、その裏で一步、踏み込めないような、神妙な間合いを常に保ってはいた。

あの時と比して、今はやはり、浮かれ過ぎて見えるように見える。

『あの時のアムロ……、何だか寂しそうに見えた』

ヒライの声。

肯定する。

今のアムロの姿が寂しさの裏返しであると言うならば、信じ難い話ではあるが、目の前の少女は、無理をして取り繕っている、と言う事なのだろうか？

「……下らねえ事言うなよ、レン」

逡巡の後、ナガラ・リオは馬鹿正直に素直な心魂を吐いた。

「……………」

「俺の気持ちは、あの時と同じだ。

あの日の続きを、もう一度、お前とやりたい。

細胞の一欠けらまでまで燃やし尽くしちまうような、物凄えヤツを、だ」

「……………」

「認めるよ。

お前とやり合うために、ここまで無理して勝ち上がってきた。

一体、何度負けた事か……、血のシヨンベンまで出し尽くしてよ」

「……………」

「ようやくよ、舞台が整ったんだ、もう茶番はいらねえ。

全身全霊、持っているもん全部を、あそこでぶつようじゃねえか」

「……カッ！ 暑ッ苦しいんじゃ、たわけ。

童貞拗らせてくたばれ阿呆」

「——レン！」

「時間、じゃ」

リオの二の句を遮って、くるりとアムロが背を向ける。

熱しかけた少年の心金が、一瞬にして冷める。

鶴のように飄々とした、掴み所の無い少女の足取り。

深追いすれば、返す刃で致命傷を受けよう。

少年の望み通りに、茶番は終わった。

アムロ・レンが戦闘モードに入ったのだ。

「わしも生憎と忙しい身よ。

うぬと遊んでやれるのも、今日で最後ぞ」

「レン……」

闇夜に消えていく少女の背に伸ばしかけた指を、未練と共に振り払う。

全ての答えは、向こうで直接聞けば良い。

そちらの方が少年は得意だ。

ふるりと、知らず少年の両肩が震えた。

夏の夜に似つかわしくもない底冷えするような冷気が、少年の体を震わしていた。

サイレント・ヴォイス

総合アミューズメントパーク『ラビアンローズ』中央ブロック跡地。広大な敷地の中心に、キャピタル・タワー、と名の付く筈であった施設の名残がある。

テーマパーク全体のシステムを統括するターミナルとして。

また、東に関東平野、西に奥秩父連塊を望む、21世紀のシンボルタワーとして計画された、ラビアンローズの目玉であった。

天まで届け、未来への夢。

結局、バブル経済の崩壊と共に、タワーは当初予定の三分の一の高さで建設を中断。

そこから先へと伸びる事も取り壊される事も無く、届かなかった未来の象徴として、眠りについた施設を俯瞰している。

——八月某日 PM 9:20

キャピタルタワー6階、地上40メートル。

本来の塔全体からみれば臍下にあたる部分に、一人の男がいた。

剥き出しのコンクリートスラブに、無数の支柱、間仕切りも外壁も無い殺風景なスペース。

そこに、小高い丘のプラネタリウムを背景にして、大きなモニターが設置されていた。

モニターには、いくつもの戦いの光景が映し出されていた。

古の円形闘技場を背景に、絡み合い、軋み合う鋼鉄の機体を映し出していた。

鉄の拳がぶつかる度に、客席が震え、観衆の絶叫が夜空を焦がす。

鎮魂歌であった。

成長を止めてしまった、キャピタル・タワーへの。

届かなかった、あの日の夢への。

それを男は、じつ、と見ていた。

どこからか持ち込んだ大型のソファアートを特等席に、黒眼鏡の奥か

ら、切実な眼差しをモニターへと向けていた。

——カン、カン、カン。

スチール製の仮設階段を叩く足音が、階下より響いてきた。視線を外し、男が後方の闇を見据える。

その内に足音は止まり、闇の中より、ちらり、と懐中電灯の明かりが煌めくのが見えた。

「やあ、探しましたよ！ ミスター・リー。

こんな所でバカンス中とは、さすがに盲点だったなあ」

「……これはこれは、随分と、お早いお着きで」

闇の中より響いてきた気さくな声に、男、リー・ユンファの口元が緩む。

モニターからの照り返しが、来客の姿を徐々に照らし出していく。赤色のワイシャツを腕まくりしたラフな姿に、寝癖を手櫛で押さえただけの短い黒髪。

ひよろりと一見、頼りなさげな長身だが、袖から伸びる日に焼けた肌が、男の遍歴を匂わせる。

痩せ形のすつきりした顔立ちに、少年のような輝きを持った瞳を宿しており、それが男の風貌に、二十代後半とも四十代ともつかぬ、不思議な印象を与えていた。

リー・ユンファはしばし、来客の姿を黒眼鏡越し見つめ、やがて呆れたように声を上げた。

「まさか、わざわざあなたが出張ってくるとは、思ってもいませんでしたよ。

国際ガン普拉バトル公式審判員、イオリ・タケシさん」

思いもよらず名前を呼ばれ、赤シャツの男、イオリ・タケシは気恥ずかしげに頬を掻いた。

「いやあ、同僚たちなら今頃、台湾行きの飛行機の上ですよ。

李大人、あなたのデコイを追っかけて、ね。

おかげでこっちは、折角のリンちゃんとの休暇がパーだ」

「それは……、ふふ、とんだご足労をおかけしまして」

口元に苦笑を浮かべ、リーがモニターへ向き直る。

その後、きよろきよろと辺りを見回しながら、イオリが歩み寄る。

「初めて来ましたが、いいトコですね、ここ。」

子供の頃に作った秘密基地を思い出します」

「日本の秘境マニアの間では、結構な人気スポットらしいですよ。」

もともと、彼らは決してその事を口外しません、秘境マニアですから」

「成程」

軽く相槌を打って、イオリが後背よりモニターへと目を向ける。

その瞳に、少なからぬ真剣な色が宿る。

ポツリ、と思い出したように、リーが口を開く。

「……あなたがここまでいらしたと言う事は、私も年貢の納め時、なんですかねえ？」

「いいや、全然。」

恥ずかしい話ですが今回の件は、ウチで扱うべきなのかも判別がついてない有様でして。

だからいつそ、もう本人に聞いちゃおうかな、と思ひましてね」

そこでイオリはシャツの襟を正すと、改めてリーと向かい合った。

「リー・ユンファ。」

あなたに今、ニールセン・ラボからのデータ盗用、及び無断使用の疑惑が上がっています。

宜しければ、その辺の事情を伺いたいのですが……」

一瞬、会話が途切れる。

無言の室内に、『ETERNAL』WINDはほほ笑みは光る風の中を合唱するMS少女の声が響き渡る。

「それは、任意同行……、という事で宜しいのですかね？」

「そ、任意。」

って言うか、ウチは警察じゃないんで、逮捕状とかあり得ませんか」

ほうう、と長く息を吐いて、リーがソファアに背中を預ける。

「そいつは重畳。」

「どうやら無事に、決勝戦を拝む時間くらいはありそうですね」

「決勝戦？」

「私達が何をやっているのか。」

「知っているからこそ、ここまで来たのでしょうか、イオリさん？」

「リーに促され、イオリが再び真剣な面持ちでモニターを臨む。」

「ガンプラ・トレース・システム……。」

「そう、名前を付けたんですね」

「元々は子供向けの導入機材として、開発されていたシステムでしたか？」

「結局、肉体へのフィードバックと言う問題を解決出来ずに、お蔵入りとなったようですが」

「あなたにとっては、その方が却って都合が良かった。」

「ガンプラバトルを隠れ蓑に、全世界へ向けた、真剣の格闘試合を目論んでいたあなたにはね」

「電腦世界が、戦いのハイライトをモニターに刻む。」

「熱狂に沸く観衆に、守りを捨て、真っ向から打ち合う鋼鉄の戦士達。タイタスの太い手に、打たれ穿たれ捻じられながら、尚狂ったようにテレビ顔が拳をかざす。」

「ガンプラを生身の肉体に見立てた、ワンデイトーナメント。」

「正気の沙汰じゃない。」

「100パーセントの安全を保証できないシステムで……。」

「しかも、これから決勝戦を戦う二人は、まだ子供じゃないですか？」

「踵を返し、イオリが再びリー・ユンファと正対する。」

「すぐにも試合を取りやめてください、ミスター・リー。」

「こんな大会で、あたら若い少年少女の未来を奪うような資格は、あなたには無い筈です」

「イオリ・タケシの真剣な声が、室内の闇に籠る。」

「リー・ユンファはゆっくりと立ち上がると、黒眼鏡を外し、再びイオリと向かい合った。」

「——あの子らが、命を賭けているものは、そんなにも下らない事ですか？」

「何……？」

「答えて下さいよ。」

第二回ガン普拉バトル選手権優勝者、イオリ・タケシさん。

卓越した技量を持つあなたの目から見れば、彼らの命を張っている場所など、取るにも足らない児戯だと仰るのですか？」

「そう言う話をしているんじゃない！」

イオリ・タケシが叫ぶ。

怒声を吐き出し、そして一つ、声のトーンを落とす。

「……率直な感想を言うならね、感動しましたよ。」

鋼の拳に生の肉体が宿り、相手を打つ。

それだけの行為が、これほどまでに観衆を湧き立たせるものなのか、と。

現実では実現し得ない死闘が、ガンプラと言う安全装置を介する事によって、奇跡的に興業として成立する。

競技として成熟し、ある意味では行き詰まりの見え始めていたガン普拉バトルの世界に、まだこんな解釈の余地があったか、と興奮もしました」

「……………」

「けれど、ガン普拉バトルは所詮、遊びです。」

老若男女、誰もが気軽に手に取って、和気藹藹と遊べる、そういうもんです。

身の安全を保障できないようなシステムを積んだり、自分の肉体を虐め抜いてまでやるようなもんじゃない。

そう言う世界と繋がっていちやあいけないんですよ、ガンプラは」

「……道理です、さすがはイオリさんだ」

長い嘆息を吐いて、リー・ユンファが力無く笑う。

「ですがねイオリさん、単に、五体満足なだけではダメなんです。そう言う、どうしようもない野良犬のような人種がいる。

魂が満たされなければ、あの子らに未来なんてありませんよ」

「……………どう言う意味ですか？」

「世界最強。」

かつて、格闘技が未だ世界の中心であった時代に、誰もが見ていた夢を実現するため……。

私は持てる資金と人脈を総動員して、考えうる最強の戦士を世界中から掻き集めました。

現役の格闘王者から野に伏せた拳聖、はたまた畑違いのガン普拉ビルダーまで、ね」

「そうしようね。」

今日、これほどの錚々たる顔ぶれが集結していなければ、あなたの行方を追う事なんて叶いませんでしたよ」

「ええ、事実、メンバーは完璧でした。」

多くの実力は伯仲し、ここに至る十四試合の中には、冗長な場面など一切ありませんでした。

……そして、その中から彼らは生き残った。

召集した十六人の中でも、とくに若く、体格においても経験においても未熟であった彼らが」

「……………」

「何故なんでしょうか？」

彼らがここまで勝ち進んでくれた理由、ただの偶然でしょうか？」
リー・ユンファの言わんとする意味を、イオリが頭の中で反芻する。

彼らの少年少女の戦いを、道すがらいオリも追いかけてはいた。

確かにリーの言うように、彼らは決して盤石な戦士などでは無く、明らかに格上の猛者から、紙一重の差で勝利をもぎ取る場面も、多々見られた。

で、あるならば、結局は運。

勝利の女神の放り投げた賽の目次第で、物語は変わっていたのであるだろうか？

それも、違う気がした。

かつて、第二回ガン普拉バトル選手権において、イオリ・タケシと勝者を分かったもの。

分野は違えど、一種神がかり的な領域で、鎬を削り続けた者にだけ分かる、特有の空気が

勝ち負けの究極において、紙一重の差は確実に存在する。
テレフォンパンチなど、ありはしない。

傍目に偶然に見える拳は、それまでに両者が積み重ねて来た歴史の必然、その帰結である。

天佑、と言うものが存在するならば、人が天に愛される理由も確かに存在するのだ。

「彼らを勝利者たらしめたもの、それは『餓え』であつたと私は思います。」

今大会、彼らは誰よりも貪欲に勝利を欲していました」

リーの口にした意外な言葉に、イオリが思わず、目を丸くする。

「……餓え、ですか？」

今日のような舞台を待ち望んでいた筈のベテラン達より、あの子たちの方がより強い執念を持っていた、と？」

「私ら、救い難い格闘技オタクにとって、今大会は、この『塔』のような物です。」

かつて格闘技が、武術が黄金の輝きを放っていた時代を知っている、あの頃、辿り着けなかった未来を見ている。

正しく、夢心地と言うヤツでしたよ。

……だが、彼らは、私たち大人とは違う、黄金も光も知りません。
ただ愛した者との繋がりを探すように、我武者羅に拳を振るってきた野良犬です。

ガン普拉バトル全盛の世の中で、自分たちが捧げて来た物の価値を求め、彷徨い歩いている。

今日の闘争に対し、誰よりも切実で誠実でした。

彼らには、今、現在、この場面、この瞬間しか無いのです」

「……………」

「あと、もう少し、ものの数分で、答えは出せると思うのです。」

私には、彼らの青春が報われようとしているように見えるのです。

ガン普拉バトルの誕生によって失われた未来が、プラフスキー粒子の輝きの中で、取り戻せると思うのです。

どうか、見逃してやっちゃあ、くれませんか？

これから起こる事の責任は、全て、私が執ります」
じつ、とリーがイオリを見上げる。

いつしか合唱は終わり、モニターが薄闇に包まれ、室内が一段と暗くなる。

短い沈黙の後、イオリ・タケシはおもむろに口を開いた。

「……ガンプラ・トレース・システムは、絶対？」

「無論、その確信が無くては、今日のような大会は開けませんよ」

「客家の大物華僑、李潤發が、彼らの将来を守ると？」

「身命を賭して」

イオリの問いかけに対し、淀みなくリーの答えが返る。

イオリはしばし、両腕を組んで、うろうろとせわしなく周囲を徘徊していた。

が、その内に「ええクソ！」と一声叫んで、傍らのソファアードどつかと腰を下ろした。

「……イオリさん、宜しいので？」

「良いも悪いも無いですよ。」

言ったでしょ、僕は元々、この大会をどうこうするような権限を持ち合わせていないですよ。

あなたに対しても、あの子たちに対しても」

「謝謝」

短い謝意に対し、イオリが無言で片手を振るう。

リー・ユンファが、ちらりと手元の懐中時計を月明かりにかざす。

PM9:30

時間であった。

ほどなく、仮初のコロッセオに、ぽつ、と一つ篝火が灯った。

『——さて、みなさん、いよいよお別れの時がやって参りました』
赤々とした篝火に照らし出され、MS少女の横顔が、ゆったりと語る。

居合わせた格闘オタクたちが、固唾を飲んで次の言葉を待つ。
時が来た。

「パクリやがった……、臆面も無く」

ポツリ、とモーラがこぼす。

その声もすぐに熱狂に消える。

ぶわっ、と熱風を孕んで真紅のしゃぐまが踊る。

打撃の距離など、既に無い。

「ちい」

たまらずリーオーが跳んだ。

後方は壁、逃げ場はない……、水平方向には。

だからリーオーは、高さを使った。

ヒライ謹製の黒い地金の足先で、壁面を垂直に蹴ってり・ガズイの上を取った。

「ジャアッ！」

真上からの足刀。

アムロは止まらなかった。

振り向きもせずに前方に跳び、必殺の間合いから逃れる。

息つく間もなく体が入れ替わり、今度はアムロが壁を背負う。

迷わず打ち込む、リーオー左の正拳。

刹那、ふわり、とアムロが動いた。

ブリッジでもするかのような大仰なスウエーで、リーオーの拳をかいくぐり、そのまま真下から突き出された左腕へと飛び付いた。

腕拉ぎ？ 三角絞め？

否。

奥襟に絡み付いて来たり・ガズイの右脚に、ぐっ、とリーオーの頭部が引き摺り込まれる。

成程。

このまま空いた左膝を顔面にブチ込む。

それで意識を飛ばして、そのまま、肩、肘を……。

何と言う——！

「オオッ！」

リーオーは退かなかった。

踏み込んだ勢いのままに前に出て、り・ガズイを左腕ごと壁面に叩

き付けた。

「カハッ」

呼吸が洩れ、壁に押し付けられたリ・ガズイの上半体が、必然的に折れる。

間合いが潰れる。

左膝を顔面に放り込む為の間合いが。

体を倒し、リーオーの肘を伸び切らせる為の間合いが。

それでも尚、リーオーはじりつ、と足を寄せ、リ・ガズイの背を畳んで間合いを詰める。

射程に捉えた。

左より2センチ長いリーオーの右腕が、リ・ガズイの顔面をぶつ叩くのに丁度良い距離――。

「カアッ！」

「グア」

アムロが蔓を捨てた。

両手で壁を支え、窮屈な体を極限まで畳んで、弾かれたバネのごとくリーオーをハネ上げた。

奇しくも、根平の時の攻防の再現であった。

「チイア」

よろめく左足で砂を掴み、高らかと蹴り上げながら後方に転がる。

「ザシユ、と舞い上がった砂塵が、リ・ガズイの機影をすつぱりと覆い隠す。

体勢はリ・ガズイ有利。

来る。

来るのか？

いや……。

砂が地に落ちる。

アムロ・レンの選択も、待ち。

くつ、と柔らかく膝を落とし、爪先立ちでリーオーの強襲に備えていた。

間合いの外。

ほお、とようやく観衆から吐息が漏れる。

「——この間よりは、ちいとはマシになったんかいの？」

「寝てたワケじゃあねえからな」

短く言葉を交わす。

思いのほか、アムロの機嫌が良い。

そうだろうとも。

俺達はそう言う生物だ。

そう思うと、知らず、平静であるべき心臓が弾む。

「せいなら、これはよ——？」

「——！」

ピン、と姿勢を正し、リ・ガズイが正面のリーオーに向け、ばさりと『扇』を広げた。

ぴくん、とリオの背筋に電流が走る。

あれだ。

ぬるりと掴み所の無い、鶴のような歩調。

野生の虎をブン投げた幻影の捌きで、空手家、ナガラ・リオを試そうと言うのだ。

(試験官きどりかよ……、どこまでも)

舌打ちが漏れる。

だが、この状況は危険。

攻めるともつかぬ足取りで間合いを詰め、敵の反撃を誘い、後の先を取る。

安室流の神秘、その唐練りを未だ見切れずにいる。

と言って、委縮すれば容易く先手を取られるのみである。

(それでも、そいつは流石にひけらかしすぎた)

武術家が、手の内の全てを曝す時は——。

亡父が言った。

そう、相手か自分の、どちらかが死ぬ時だ。

その鶴の足取りは、幾度と無く目にしたものだ。

一度目は根平の道場で。

二度目はハリマオとの戦いの最中。

あまつさえ、直前の試合で他流のモーラが仕掛けるのを許してすらいる。

(俺だったら、最初の時に終わらせてるよ)

そうだ。

初太刀で殺す。

わけも分らぬ内に。

いかな無欠の奥義であっても、衆目に曝せば、いずれは欠ける。対策されてしまう、どうしようもなく。

リーオーが動いた。

すつ、と気持ち右脚を引いて重心を乗せ、背筋を伸ばして両の掌を柔らかくかざす。

ぴくり、とアムロの片眉が吊り上がる。

前羽の構え。

頭部を引いて相手を俯瞰し、備えた両手で捌き、落とし、あるいは迫る相手を前脚で撃墜する。

絶対防衛の姿勢。

それを今、リーオーがリ・ガズィに對し示した。

(……空手に先手無し、じゃったかのう?)

出典の怪しい言葉を思い出しながら、つらつらとアムロが歩を進める。

おぼろげな知識によれば、それは、空手の型が全て受けから始まる事を意味していた筈だ。

攻めるための技術では無く、不当な暴力から身を守るための手段、と言う訳だ。

アムロの使う鶴の歩調は、奔放な安室の女の足取りを、篤人流が立ち合いに加えた物である。

攻めの枕でありながら、本質としては囷であり、陽動。

一方、リオの前羽の構えは、専守防衛の型。

双方の性質上、先に動いた方が、絶対の不利を背負う局面となる。

だが、アムロが間合いを詰め続けなければならぬ以上、千日手には陥らない。

いずれどちらかの受けが間に合わなくなり、拳を繰り出す所となる。

打つか、打たざるか。

そのギリギリのせめぎ合いの中に、リオは勝機を見出そう、と言う訳だ。

(じゃがのうリオよ、そいつは、うぬの性ではあるまいに)

アムロが内心でほくそ笑みつつ、ゆるゆると間合いを詰める。

空手に先手無し。

なれど永樂流空手は、古流の否定から始まっている。

奇襲、陽動、攪乱、力攻め。

攻めるにせよ守るにせよ、先ず積極的に戈を止める流派である。

剣質で言えば、殺人刀。

今のリーオーの構えは、急場凌ぎが見え透いている。

虎徹とは名ばかりの付け焼刃に過ぎない。

ゆらり、と一足一刀の間合いに爪先がかかる。

空気の密度が一段上がる。

ここで思わず脚が固まれば、たちまち渾身の前蹴りが跳んでくる事であろう。

そんな危うい綱渡りが、アムロは好きだ。

くつ、と更にテレビ顔が近付く。

何を打つても当りそうな距離。

ここで突如、こちらから打って出たなら、どうじゃ？

ちらり、と瞳で合図する。

リーオーは、不動。

忌々しい。

いい加減、双方の指先が触れ合わんばかりの間合いである。

よくもまあ堪えたものだ、心中で呆れる。

おい、リオ、分かつとるんぞ。

お前、もう何をやっても凌ぎきれんじやろ？

手を出せば当たる間合い。

ただ、リーオーより先に動くのが癪なだけだ。

とは言え、そう強がってもいられない。
ここから先はアム口にとつても、死線。
先に打たねば、死ぬ。
行くしかない。

それをおくびにも出してはならない。
かかりの呼吸を読まれば、やはり、死――
クソ！

なんでこいつは微動だにせんのだじゃ？

不気味。

危険。

愚鈍。

しかし。

ままよ――

「ちえイア！」

リ・ガズイが動いた。

左の鉄菱。

狙いは正中線、胸骨の中心。

そこを傷めている事は先刻承知だ。

当れば、必殺。

目を瞑っていても当る距離。

リーオーは、それでも動かなかった。

絶対防衛圏たる両掌をすり抜け、しなやかな拳が胸元に突き刺さる。

ドン、と。

当たった。

拍子抜けするほどに、あっさりと。

……拍子が、抜けた。

攻防の拍子リズムが。

刹那、ぞくりと、戦慄がアム口の尻穴から脳天まで一息に

駆け抜けた。

クソッ!?

こんなわけ！
何と言う事を！

残心。
無理。

この間合い。

脱出。

もう遅い。

兎に角。

しかし。

「がアツツツ！」

リ・ガズイの両足が地を離れた刹那、リーオーの右掌底が脇腹を強かにブツ叩いた。

みしり、と肋骨が鳴いて、ベクトルが横方向へと変わる。

くの字に折れたり・ガズイのボディが、ゴロンゴロンと砂地に塗れる。

体勢を立て直そうと片膝をついた刹那……

「ギャガツ」「ンツゴびゃツ」

ナガラ・リオが血泡を吐いた。

アムロ・レンが晩飯を撒き散らかした。

絶叫が闘技場全体を包み込む。

空気が再び動いた時、戦士たちは死線に突入していた。

(畜生！畜生！畜生！畜生！畜生！)

脳味噌が沸騰する。

空になった胃袋が痙攣し、酸っぱいものが鼻孔を焼いて両穴から噴き出す。

如何ともしがたい激痛。

もう二度と、死んでも浴びたくなかった激痛。

どうしようもない。

ただ、視界の隅に、同じように這い蹲ったリーオーの姿が見えたのは幸いだった。

後頭部を踏まれる心配だけはしなくて済む。

(あんガキ……、何と言う事を)

考えやがる。

胃酸に塗れた唇が、屈辱に震える。

結局、アムロの見立ては正しかった。

前羽の構えは、所詮、ハリボテ。

リ・ガズイの攻撃を捌くつもりなど、毛頭無かったのだ。

かと言ってモーラ鬼灯のような、肉体に物を言わせたハードバンプとも、また違う。

……死ぬつもりだった。

アムロ・レンが自分を殺した次の瞬間にだけ、必殺の呼吸がある事をリオは知っていた。

死んで尚、自分の肉体は動くと言信していた。

肉体への絶対的な信仰。

悪くても、相打ち。

事と次第によっては、浮かぶ瀬もあるかもしれない。

アムロ・レンを強敵と認めた上で構築された、狂気の中の最善の理論——。

(冗談じゃない!!)

アムロ・レンの、何とは無しの直感が、二人を救った。

必殺の間合いに踏み込んで尚、アムロの本能は疑念を抱いていた。最後の最後でアクセルを踏み切れなかった。

結果、リ・ガズイの左拳は僅かに浅く、リーオーを仕留めきれなかった。

結果、跳躍が間に合い、右の直撃を浴びずに済んだ。

「……あい、変わらず、いいガン……じで、ンな……」

「~~~~ツツ

ぎけ、な、たわけッ！ 誰がうぬと、心中、なんぞ、よ……！」

「残念だバ」

短く血泡を吐き捨て、リーオーが動く。

動く？

阿呆か。

今すぐにも死にそうなの、あのツラで……。
いや。

やはりアイツは、手を上げたのか。
期を見るようになった。

ナガラ・リオは一度死んだ身。

先ず死んで、それからリ・ガズイの拳によって甦った。
ツイている。

捨てて拾った儲けもんの命を、惜しみもなくブツけてくる。

アムロは違う。

当らぬ筈の拳が、当ってしまった。

戦慄している。

動揺している。

肉体が、魂が急速に死に近づいている。

泣きたい。

とにかく守護まもらねばならない。

痙攣する上体を、むりやり引き起こす。

その時点で、リーオーは既に眼前まで来ていた。

腹。

分かってしまう。

子供にだって分かる。

とにかく、今、腹パンはまずい。

胃袋が口から飛び出してしまう。

防御。

左腕を差し込み、防ぐ。

——ゴッ

「~~~~ツツツ」

畳んだ左腕の上を、意図的に右拳でブツ叩かれた。

鈍器のような空手家の右拳で。

肘口を走る電撃が、激痛と化して脳髄を焼く。

リ・ガズイ自身の左肘を上から押し込まれ、アムロの肋骨が、内臓が窮屈に哭く。

痛い！

痛い！

痛い！

そりやあそうだろう。

人間凶器。

華奢で指先で人間を叩く事を前提として、鈍器と化すまでに叩いて鍛えた空手家の拳。

ハンマーで骨をブツ叩かれれば、どんな場所でも痛いに決まっている。

防御など、何の意味も為さない。

むしろ、こんな打撃に耐え続けるプロレスラーがどうかしているのだ。

「ジャツ」

空いた間合いに、下からリーオーの右脚が跳ねあがって来た。

女陰狙い？

反射的に腰を引く。

瞬間、黒い地金の爪先が刺突に変わる。

やはり狙いは、腹。

しつこい。

防ぐしかない。

両腕をクロスして、受ける。

モウヤメヨウヨと、嘆く左腕を盾にして。

「……ガッ！」

否応なく吹っ飛び、リ・ガズイの装甲が壁面に叩きつけられる。

背筋の痺れが、全身の激痛に共鳴する。

体を畳み、這うようにして袋小路から逃れる。

その先に廻り込む様に、リーオーの左足が、なお迫る。

左手を差し込み、かろうじて凌ぐ。

勢いのままに大地を転がり、砂に塗れる。

とにもかくにも、護身術。

形は問わない、生き延びぬ事には話にもならない。

それにしたって、マズイ。

リーオーの肉体が、回転を増している。

蹴り足に力が漲りつつある。

虎の子が、蘇りつつあった。

モーラ鬼灯の言葉、今なら良く理解できる。

ナガラ・リオの拳、確かにこわい。

死ぬまで止めぬ、死んでも止まらぬ空手家の狂気。

死中に活。

己が命を的に賭け、ナガラ・リオは流れを掴んだ。

同じ死にかけの肉体でありながら、今や二人の均衡には、日出と日没くらいの隔たりがある。

アムロ・レンは、沈みゆく太陽……。

(……じゃがのう、リオよ。

うぬは本当に知つとるのかや?)

リーオーの拳に、成す術も無く打たれながら、思う。

(あちら側はよ、ヤバイくらいに寒いんで?)

アムロ・レンは知っている。

身を切るほどの水の冷たさ。

吐く息までもが凍えるような、清澄な世界――。

死。

夢か、現か?

風を斬って、リーオーの巻き蹴りが迫る。

受けに回ったり・ガズイの両手が、パン、と爆ぜる。

灼けるような痛みと熱が、次の瞬間には、しばれる大気に、指先の

感覚ごと奪い取られて行く。

ちらちらと舞い散る雪が、視界を染める。

観衆の絶叫を吸い込んで、なお、白く。

血液が熱を失い、感情が徐々に凍りつく。

リーオーの拳が、遠い。

左よりも2センチ長い筈の右腕が、遙か虚空を隔てて、どこまでも遠ざかって行く。

「のう？ リオよ、それでも、お主は……」
ぽつりとアムロが呟く。

その声も、もはや、届く筈もなく……。

リーオーの肉体が、躍動していた。

鋼鉄の筋肉に力が宿り、弾かれたバネのように一直線に飛びかかる。

観衆の熱狂が、ビリビリと少年の全身を叩く。

だれもが予感しているのだ。

決着の、気配。

けれど今、ナガラ・リオは追い詰められていた。

「シャツ」

渾身の巻蹴り。

受け手ごと体勢が崩れ、リ・ガズイが横に転がる。

更に右の前蹴り。

パン、と両手を弾かれ、リ・ガズイが力無く体を泳がせる。

アムロ・レンは、今や完全に死に体である。

かろうじて受け、かろうじて逃げている。

あと一息、この一太刀を打ち込めたならば決着が付く、それは分かる。

その一太刀が、遠い。

限り無く近付けはすれど、到達しない。

あるいは、永遠に。

さながらアキレウスと亀のように。

蹴り込んだ爪先から、情熱が奪い取られていく。

叩き込んだ指先から、情熱が奪い取られていく。

背中を流れる汗が、別人の物のように冷たい。

魂の炎が、消えかかっている。

ほんの十秒か、そこら前まで、自分は肉体は炎であった。

アムロ・レンに対して、激昂していた。

なぜ使わない。

女帝、モーラ鬼灯を一方的に蹂躪した、アレを。

このまま何も試さずに死ぬのか？

それは、あの根平の夜に対する、重大な裏切りではないか、と。それが今は、己の勘違いであった事に気付いている。

足りないのはいつだって自分の方だ。

単純に、自分の力量が達していなかったのだ。

アムロ・レンの、ニュータイプの修羅場が見れる領域にまで。

今は、少しずつ近づきつつある。

生と死の狭間。

おそらくはそこに、アムロ・レンの世界がある。

肉体が震えている。

長年培った武が、警鐘を鳴らしている。

これ以上は危険だ、踏み込むべきでは無い、と。

(馬鹿か！)

一喝する。

あと一撃。

手でも、脚でも、頭でも、どれか一つが当たりさえすれば、それで

勝負は決する。

それが全てだ。

リーオーにバスターライフルはない。

ドーバーガンも、生憎と今は持ち合わせていない。

頼れる物は、空手だけ。

ならば、なっちまえばいい。

空手に、日本刀に、リーオーになってしまえばいい。

下らぬ思考は、全てが邪念だ。

ただ、無念無想に、遮二無二打ち込む。

最速で。

最善で。

最短で。

最高の、拳。

それが、今、アムロ・レンを――、すり抜けた。

(……！)

ふあき、と、根平の潮を孕んだしやぐまが、ナガラ・リオの頬を撫ぜた。

少年に感じ取れたものは、それが全てであった。

気が付いた時、アムロ・レンは背後にあった。

背中合わせに、リーオーの背後に立っていた。

人は、霞では無い。

拳がすり抜ける事など、ありはしない。

ならば単純に、レベルが違うのだ。

すり抜けた、と例える事しか出来ない次元で、正拳を外された。

「キャラア」

思う間もなく動いた。

左の裏拳、それも虚しく空を切る。

だが、今のは分かる。

向こうも踵を返し、体を屈めてこちらの拳を避けたのだ。

まだ、そこにいる。

リーオーの射程圏内に。

振り向きざま、故に打ち込む、渾身の――

――次の瞬間、ナガラ・リオは空を見ていた。

大小様々なビーズを散りばめたような、架空の夜空。

視界の端が、篝火の光で橙にそまっている。

きらり、と一つ、星が流れる。

アムロ・レンの鎖骨に打ち下ろされる筈だった、右の下段突き。

それが今、真っ直ぐに満月を打っていた。

なんだ？

何をされた。

ふっ、と重力を失っていた。

中空を漂っていた。

観客の声が、全身を容赦なく叩いていた。

「ガアツツ!」

不意に大地が来た。

強い衝撃が背中を叩いた。

息が詰まり、全身に痙攣が走った。

それでようやく分かった。

リ・ガズイに……、吹っ飛ばされたのだ。

受け身など取れようはずも無い。

痺れる全身に鞭打って上体を起こす。

半身を取って静止したり・ガズイの姿。

遠い。

ゆうに4、5メートルはあろうか。

あそこから、吹っ飛ばされたというのか。

酷いダメージを負うわけだ。

だが、どうやって？

力士でもあるまいに……？

前面にかざされた、リ・ガズイのしなやかな手。

痛みも忘れ、ぞくぞくと背筋が震える。

(まさか……、アレをやられた、って言うのかよ?)

アレ。

合気。

危害を加えようと打ちかかる敵。

その、攻めの枕を押さえる。

打ち込まれた十の力、それに加えられた返し之力。

敵は、十プラスアルファの威力をまともに受け、吹っ飛ばす所となる。

理論上存在しうる、武術の神秘。

理論の中にしか存在しえぬ技。

ゆえに、神業。

それをアム口は、実践でやった。

ふわり、と炎のようなしやぐまが浮いた。

リ・ガズイが、アムロ・レンが動き始めた。
悠然と、平然と、超然と。

場所も、時間も、リオの存在も忘れたかのように、ゆるり、ゆるりとアムロが廻る。

痺れる体に活を入れ、リーオーが体を起こす。

深く息を吐いて呼吸を整え、ぐつ、と上体を持ち上げ、そして……。

そして、しかし、構え、られない。

肉体が、構えを取ってくれない。

両腕を、円を描くように廻した、天地上下……、違う。

膝を落とし、スタンスを水平に取つての、脇……、違う。

重心を後ろに乗せつつ、踵を浮かせての、猫足……、違う。

両掌を前方にかざし、金城鉄壁に備えた、前羽……、違う。

かつて見た、掴み所のない安室流の歩法。

当たるとも、当たらぬとも分からぬ鶴のような動き。

今のアムロの舞は、更にその上を行っている。

分かっってしまう。

何を打つても、何をやっても返されてしまうと、絶対の事実が。

(……)いつが、本物の武、ってわけかい)

じわり、と額に汗が滲む。

敵の攻撃を読み切る、受け、捌き、そして返す。

それだけではまだ、武は五十点。

分からせる。

打つ前に利かぬと、当たらぬと、返される、と。

そうすれば争いは生まれず、敵は敵では無くなり、己が足で家路を

踏める。

(モーラ鬼灯は、これをやられたってワケだ)

だらりと両腕を下ろし、困ったように夜空を見上げる。

戦いの中で戦いを忘れてしまった両雄に、ざわざわと戸惑いの声が

漏れる。

(月……)

幼い日、父の背を追い、一心不乱に修行を続けた、幼き日々。

月はいつでもそこにあった。

架空の空でも、月は月だ。

今一度、虚空の父に問う。

自分はどうするべきであろうか？

敗北を知ったのであれば、素直に降参し、相手の技の素晴らしさを称える潔さを持つべきなのであるか。

……何かを、忘れていたような気がした。

空手は全局面闘争術。

ありとあらゆる状況に対応できる技術を、血の一滴、骨の二欠け、細胞の一片に至るまで叩き込まれてきた。

今日のような場面に最も有効な一手が、何か一つ、残されていた筈だ。

振り返る。

思い返す、父の言葉。

そう。

「……死ねば良い」

ぽつり、と口を突いて言葉が漏れた。

自然、リーオーが動いた。

呼応するように、リ・ガズイの舞が止まった。

ざわり、と観客が震える。

ナガラ・リオの選択は正拳。

左足を前に半身をとって、大きくスタンスを開ける。

左手は柔らかく前方に添えて露払いに。

右手は拳を作り、捻りを加えた腰元に備える。

右の拳を真っ直ぐに叩き込む、それ以外の選択肢が無い構えである。

(……今日は、死ぬには良い日だ)

口中で呟き、じわり、じわりと、爪先でにじり寄る。

呟いた分だけ、体がふわりと軽くなった。

随分と、下らない思い違いをしていたものだ、と思う。

何をやっても通用しないと言うのなら、もう悩む必要など何も無

い。

空手家、ナガラ・リオの人生の最後に、一番試してみたい技を一つだけやれば良い。

そして、何か一つ、と言うならば、これしかない。

右の正拳。

幼き日、勢い盛んな三来会の道場で、初めて拳の握り方を習った技。魔物の潜む闇の中で、倒れる筈も無い檜の木に、泣きじやくりながら打ちつけた技。

空手道にとっては、技術と言うより、象徴。

分厚く異形と化すまでに鍛え抜いた、みちみちと膨らんだ掌。

左腕より2センチ長い、ナガラ・リオの牙。

ヒライのリーオーは、それらの歴史を、余す所無く形にしてくれている。

この拳に、全て捧げれば良い。

己の青春を、人生を、思いの丈を――。

「……ちィとばかり、遅かったぞ、リオよ」

物皆動かぬ絶対零度の領域で、アムロ・レンがぼつりと呟く。

右の正拳突き。

上段、中段、下段……。

何が来てもカウンターが取れる。

一撃必殺。

永樂流空手の理想形。

けれど、理想は理想。

小回りを殺したあのスタンスでは、容赦なくフットワークに翻弄され、左のジャブを浴びよう。

指先よりも遥かに長い足先に対し、正確に合わせ、前に出る事など叶うのか？

地を這うように迫るタックルに対し、拳の制空圏が触れ合う刻など、寸毫もあるまい。

理想の中にしか在り得ぬ理想形。
ナガラ・リオはそれを選んだ。
盲信であろうか？

いや、永樂の空手は実戦主義。
現実に見合わぬ夢など見るまい。
ならば、狂信であろうか？

それも違う。

アムロ・レンはリーオーを通し、ナガラ・リオを見ていた。
地を這うようににじり寄る爪先を見ていた。

適度に緩んだ、柔らかな構えを見ていた。

わずかに微笑を携えた、色素の薄い蒼い瞳を見ていた。

とくん、とくんと、淀みなくリズムを刻む心臓を見ていた。

その肉体の奥に広がる、無限に澄んだ蒼穹を見ていた。

強いて言うならば、殉教、であろう。

この拳が、森羅万象の理に寄り添うならば、東から昇った太陽が西の空に沈むように、淀みなく相手の胸を打つ事であろう。

もしも、当たらぬならば？

その時リオは、空手を抱いて死んでいる。

いずれに転んでも、先の事を心配する必要は無い。

「……今更、じゃの」

リ・ガズイは、だらりと無形。

ただ淡々と、リーオーの迫る刻を待つ。

潔くも全てを投げ出し、たった一つだけ残った、リーオーの構え。

あの構えを、もう少し前にやられていたら、どれほど怖かった事であろうか。

どれほど心が震えた事であろうか。

どれほどに胸が昂ぶった事であろうか。

今はもう、心に波風は立たない。

あと、十秒かそこらか。

頃合を見て前に出て、打つ。

それで戦いは終わる。

予測でも予知でもなく、今のアムロには、刻が見えている。ただ、あの拳を向けられた恐怖を、感動を、興奮を分かち合えぬ事が、悲しかった。

リーオーのテレビ顔が、至近にまで迫っていた。時間であった。

今更に、気付く。

空手家、ナガラ・リオの、愚直なまでの潔さ。

それを、どれほどに憎らしく想っていた事か。

どれほどに妬ましく想っていた事か。

どれほどに好ましく想っていた事か。

「さよならじゃ、ナガラ・リオ」

おもむろにリ・ガズイが前に出た。

そこ以外にはないタイミングだった。

リ・ガズイの仕掛けが刹那でも早ければ、たちまちリーオーは身を翻し、返しの正拳を叩き込んでいた事であろう。

刹那でも遅ければ、リ・ガズイは間に合わず、リーオーの拳に打ち抜かれていた事であろう。

リオの意識が、守りから攻めへと傾く、在るか無いかの意識の間隙。そのタイミングでリ・ガズイは動いた。

しなやかな指先が拳を作り、ポン、とリーオーの胸元に重なった。瞬間、そこにリーオーの全重量が乗った。

ナガラ・リオの青春が乗った。

リ・ガズイの関節の連動が乗った。

ゴツ、と一つ、鈍い音が鳴った。

合気、左の寸打。

リーオーは再び中空に投げ出され、やがて、ずしやり、と大地に沈んだ。

獅子の門

——門があった。

気が付いた時、目の前には、分厚い鉄扉が立ちはだかっていた。くすんだ鈍色の、いかにも年季の入った鉄の門が、視界を遮り影を成していた。

縦拳一つ分くらいの間隙が、すつ、と見上げる上空まで、一直線に走っていた。

覗いた隙間から見える、深い闇と一筋の光が、この鉄扉の途方も無い重厚さを知らしめていた。

鉄扉を縁取り打ちつけられたりペットが、拳骨ほどの大きさもあった。

とてつもない大門であった。

どうするんだったか、これを？

……そう、抉じ開けるのだ。

ぶつ叩くのだ、拳で。

ガツン！

「イギャツ」

思った瞬間、右手を思い切り叩きつけていた。

後悔はすぐに来た。

グチャリと指先が鳴いて、ビリビリと脳漿を掻き乱す様な衝撃が、拳から頭部に走った。

右手に生じた激痛で、関係の無い膝までがガクガクと震えた。

だがこれで良い。

おかげで目が覚めた。

さあ、次だ。

取り戻した意識が沈まぬ内に、次の拳を叩き付けるのだ。

ガツン！

「~~~~ツツツ」

激痛が、脳天にまで突き刺さる。

今度は声も出ない。

電撃でも浴びたかのように、全身が震える。

泣くな、馬鹿。

『彼女』がくれた肉体だ。

世界一強い男の子になれと、祝福してくれた肉体だ。

痛みごときで、涙を流したりはしない。

テンポ良く行こう。

意識の途切れぬ内に。

ガッン。

ガッン。

ガッン。

ガッン。

ガッンいつから、こんな事を続けているんだったか？

ガッン。

下らぬ事を、考えている。

余計な事を変えた分だけ、肉体が雑になる。

ガッ

ほれみろ。

ガッン。

この扉を開ける。

そのために打つ。

邪念はいらない。

ガン。

しかし、どうだろう？

考えるな、と行ってしまった時点で、人は雑念に捕われている。

そんなに簡単に悟りが開けるならば、地上はNTだらけになってし

まうではないか？

それならばもう、同じ事だ。

脳髓が物を思う間は、少なくとも意識は途切れず、次に繋がる。

ガッン。

何だったか？

そう、いつから、だったか。

ほんの十分も前か？

あるいは、一時間？ 一日？ 一週間？

それとも本当は、もつとずっと前。

例えば、あの日。

父に手を引かれ、初めて訪れた三雷会館。

熱気に満ちた男たちの世界の中で、初めて拳の握り方を学んだ、あの日――。

あれ以来、ずっと自分は、この門を叩き続けて来たのではないか？
ガツン。

今日のような、夜があつた。

異形の潜む逢魔ヶ辻で、泣きじやくりながら拳を振るい続けた、八歳の月夜。

あの日の頑丈な檜の木は、本当は、この門だったのではあるまいか？

あるいは今も、自分は八歳の夢の中にいて、目を覚ませば檜の木を叩き続けるのかもしれない。

ガツン。

いつまで、叩き続けるのであろうか？

無論、この門が開くまで。

あるいは、死ぬまで、なのだろう。

だが、そのいつか、とは、果たして何時になるのだろうか？
ガツン。

気が付いた時には、この門を叩き続けていた。

何回も、何十回も、何百回も、何千、何万……、数え切れぬほどに。

それでも門は、あの日の檜のようにビクともしない。

このまま、何年、何十年、これを叩き続けていくのか。

年齢が父を追い越し、それでも尚、道を曲げなければ、この門は開くのであろうか？

……父は、あの人は、この門の先を見たのであろうか？

ガツン。

お人好しの館長が言った。

もう、そう言う時代では無い、と。

日常的な斬った張ったが罷り通る時代など、遠い過去の記憶にしか無い。

武も又、その求められる価値が変わる時代に来ているのだ。

空手道・三雷会は変わろうとしている。

健全な少年少女の育成に努める、精神修養の場として。

一角の武術家らしからぬ、あの人の甘さが、自分は大好きだ。

ガツン。

プラモ屋が言った。

人の一生は短く、最強の武は時間と共に容易く衰える、と。

ならば、今、自分がこれを叩き続けている意味は、何なのだろうか？

貴重な青春を浪費し、痛く、惨めで、汗臭い思いをして。

そうして老いさらばえた先に門が開いたとして、捧げた生涯に見合うほどの価値があるのか。

ガツン！

女々しい言い訳をするな。

葡萄が本当に酸っぱいかどうかは、その手に取って食ってみりやあ分かる。

本当は自分は怖いだけだ。

このまま門が開かないまま年を取り、結局は自分の才の無さを確認するのが怖い。

だが、思い出せ。

本当に怖い事は、もっと別にある。

ガツン。

目の前に立ち塞がる敵を、片っ端からブチのめして進むのが、永樂誠一郎の空手だ。

武の道が、いかにその時々で形を変えようとも、男の道は一つしかない。

闘って闘って闘い抜いて、それで力及ばず死ぬのなら、それはそれで一向に構わない。

戦いから逃げ、あの父の背を、二度とまともに見る事も叶わずに生きていく。

真に恐れるべきは、それだ。

ガツン。

それに自分は、本当はもう知っている。

この門の先に、全く新たな別天地が広がっている事を。

——アムロ・レン。

あの炎のような赤髪の娘は、今、この門の先にいる。

先の闘いで、その武の境地の一端を垣間見た。

凄まじいものだった。

己が十年を捧げた筈の拳が、てんで歯牙にもかからなかった。

人間の可能性と言うものに戦慄し、また、素直に感動もした。

屈辱も、嫉妬も、挫折も無かった。

そう言う感情が湧き上がるほどのステージにまで、自分の力は達し

てすらもいなかった。

いっそ清々しいほどに、負けた。

完敗であった。

ガツン。

ああ言う世界が、この門の先にあると言うのなら、もう悩む事は何も無い。

見てみたい、自分の足で到達してみたい。

ただ真っ直ぐに、ひたすらコイツを叩き続けて行けばよい。

ガツン。

いつかアイツに、もう一度追いついて見せる。

ガツン。

どれほどに時間がかかろうとも、必ず……。

ガツン。

ガツン。

ガツン。

ガツン。

ガツン。

ガツン。

……何か、まだ、自分は何かから逃げている気がした。

ガツン。

アイツ。

世界最強となったアムロ・レンは、これから一体、どうするのだろうか？

生粋の格闘技オタク、リー・ユンファが世界中から選りすぐった十
五名。

その悉くを蹂躪して、彼女は頂点に立った。

先代宗家、アット・フスノリは、既に第一線を退いている。

彼女をこの道に導いた祖母も、この世の人ではない。

ならばアイツは、この先もずっと独りなのだろうか？

マリナ・イスマイルのように、誰からも愛されるような女性ではない。

誰かがもう一度、この門を開けるまで、彼女は独りで、しわくちや
の婆さんになるまで、じっと待ち続けるのだろうか？

ガツン！

女々しい言い訳をするなど言った！

そうじゃないだろ？

おい、本当の事を言え。

ガツン。

寂しいのは、俺だ。

哀しいのも、俺だ。

あの日の根平の砂浜での死闘。

何か、確かに心の震えるものがあつた。

野良犬同士、繋がり合うものがあつたと感じた。

陰惨な青春の中で見えた、微かな光だ。

あの死闘が、月夜が、アイツにとっては路傍の小石に過ぎなかつた

と、そう考えるのが辛い。

心臓が張り裂けんばかりに痛い。

我も無く喚き散らさんばかりに、気が狂いそうになる。
なら、狂ってしまえばいい。

ガツン。

ヒロ・ユイが、言った。

「感情で行動するのは、正しい人間の生き方だ」と。
肯定する。

このどうしようもなく惨めで、女々しく、情けない感情も、全てア
イツに伝えるべきだ。

ここで両者の人生が分かたれてしまうと云うのなら、尚更。

ガツン。

ようやく分かった。

この門が今、このタイミングで、再び自分の前に現れたワケ。

ガツン。

いつか、ではない。

今だ。

今日、この場でこいつを抉じ開ける。

頭一つ分がいい。

無理やりにでも押し広げて、叫ぶ。

ガツン。

だがどうやって？

全てを出し尽くし、自分は負けた。

ガツン。

あと一体、何が自分に残っていたか。

ガツン。

何が……。

ガツン。

『この体が、お前の標だ』

父の言葉。

知っている。

物を思うのは、義務教育もまともに終えていない頭脳ではない。この十年、弱音も吐かずに付いて来てくれた肉体の方だ。委ねるべき可能性があるとすれば、それだ。

『——やがてガンプラに、神が宿る。』

プラフスキー粒子が、あなたの空手を理解しようとする』

ヒライ・ユイの声。

ああ、知っているとも。

神は、細部に宿る。

ガンプラ・トレース・システムを通じ、自分は幾度も、リーオーに宿った神秘に触れている。

思いもよらず、体が動く。

自分以上に、自分の肉体を知っている機体だ。

この分身に、幾度となく助けられた事か。

ヒライのリーオーがあつたからこそ、今日、ここまで辿り着く事が出来た。

ヒライ。

……ヒライ！

……ああ、それなのに。

おい！

ふざけるな。

お前、その事を彼女の前で、一度でも言葉にしようとしたか？
ありがとう、と、少しでも形にしようとなつたと努力をしたか？

母親の次に世話になつた、あの女性ひとに。

いいや、全然。

何で!?

ヒライ・ユイは、自分に取って対等のパートナーだったからだ。

住む世界が違えど、共に失つた誇りを取り戻そうと抗っている相棒だから。

彼女の作つたリーオーで、戦いに勝利する。

あくまでも自分の為に。

それが結果的には、彼女のプライドに繋がる。

「勝利の為に、最善を尽くす。

それ以外の思考は、全てが邪念だ。

下らない馴れ合いや傷の舐め合いは、自分の為にも、彼女の為にも
なりはしないじゃないか？

「バカかッ テメエはツツツ」

ガツンッ!!!

今日、死んだらどうする？

武術家ならば、事と次第によつては、今日、明日にでも、ひよっこ
り死ぬだろう。

いや、武術家だから、ではない。

人は時に、呆気なく死ぬ。

病で、事故で、事件で——、とるに足らぬささやかな不注意で、人
は容易に死に得る。

今日だって実は、何度か死んでいた。

他ならぬヒライ・ユイに、胸を抉られ殺されていた。

ガンブラに臨むヒライの真摯な背中を。敬愛している。

自分の肉体を体現するリーオーの動きに、一々感動している。

ヒライの作るリーオーが、どうしようもなく好きだ。

ヒライのリーオーでここまで共に闘えた事を、心から誇りに思っ
ている。

自分が死んだら、この感動は、興奮は、感謝の想いは何処に行く？

誰に伝わる事もなく、言霊だけが虚しく宙を漂い続けるのか？

バカな？

バカか！

そんなのってあるか？

クソッ！

ガツン！

……今日はどうやら、死ぬには日が良くないらしい。
今さら分かった。

亡父の言葉の意味を、完全に履き違えていた。

何一つ惜しみなく、その時、その場で死ぬると言う事。

即ち、何一つ悔い無く、生きると言う事。

一分一秒、あらゆる時間、あらゆる場面を、懸命に、丁寧に、真剣に切実に生きると言う事。

今の自分は、死ねない。

未練が多すぎる。

あるいは人生において、死ぬのに良い日など、本当はどこにも存在しないのかもしれない。

あの父も、結局は畳の上で死んだ。

やつれ、衰え……、倅が一人立ちできるギリギリまで見極めてから、逝った。

ガツン。

とりあえず、分かった。

どうすれば良いかはとにかく、何をしなければならぬのかは、馬鹿なりに考えがまとまった。

①アムロ・レンに、気持ちを伝える。

②ヒライ・ユイにも、気持ちを伝える。

③だから、俺は死なない。

……そうか！

つまり『宇宙の心』だ。

ヒイロ・ユイになれば良いのだ。

ヒイロ・ユイの駆る、不死身のリーオーになれば良かったのだ。
宇宙の心に寄り添う。

それ以外の事は、全て忘れてしまつて構わない。

方法は、手段は、全てこの肉体に委ねる。

プラフスキー粒子の神が宿る、ヒライの拵えたりーオーに、全て任

せる。

……あとは、きつかけが欲しい。

下らない迷いや、打算や、思い煩いから、この肉体を解き放つための、きつかけ、が。

『限られたルールの中でよ、お互いに出来る事を全部やって……、だから安心して遊べる。』

そう言うのって、なんて言うか……、良いよな?』

……?

あれは、誰の言葉だったか……。

『ああー、それ、俺もスツゲー分かります!』

思わずこちらの心まで弾むような、澆刺とした少年の声。そちらは良く覚えている。

突き出した掌の先から、己の中の情熱を、歓びを打ち放つように闘う少年だった。

時間を忘れ、ひとしきり、二人で遊んだ。

自分はそう言うのがからつきしで、少年を落胆させてしまったようだったが。

……アレをやれば、良いんだろうか?

役に立ちもしない口の代わりに、自分の気持ちを、拳から伝える。

そんな生つちヨロイやり方が通じるタマだったか、アイツは?

けれど、立ち止まってしまふよりかは、なんぼかマシだ。

やってみる価値はありますぜ、と言うヤツなのだろう。

あの少年の流儀を、模倣する。

まずは……、どうすれば良いんだったか?

確か……。

想い、描く。

拳の先に。

闘いたい、相手の姿を……。

仮初のコロッセオに、ざわり、と言う戸惑いの声が漏れた。立ち去りかけていた、リ・ガズイの足が、不意に止まった。その段になって、アムロはようやく異変に気付いた。あらためて世界を睥睨する。

仮初の世界をざわめかせる群衆を、上空から見下ろす。間の抜けたようにポカンと開いた口。震えるまつ毛。

立ち合い人、ひとりひとりの表情を見ていた。固まってしまった視点、その集中する先に目を向けてみた。その一点に向けて、同時にリ・ガズイが振り返った。

——リーオーがそこに、屹立していた。

「なんで……、じゃ」

吐息すらも凍える氷の世界に、ポツリ、と眩きが零れる。なぜ？

なぜ、あの不垢の一撃を喰らって立ち上がれる。

奴自身の十年の重みが、そのまま彼奴自身に返り、その不屈の魂までも弾き飛ばした筈だ。

いや、そんな事より……。

なぜ、立ち上がる奴の姿が見えなかった？

リーオーに驚く観衆の姿を見て、それでようやく、リーオーが立ち上がっていると言う状況に気が付いた。

佇立するリーオーの姿が見える。

それでかろうじて、同じように立ち上がっているであろう奴の肉体も、見える。

だが、リーオーを立ち上がらせたであろう、ナガラ・リオの魂が、どこにも見えない。

幽鬼のように儂い、粒子のような幻。

ゆらり、と幽鬼が動いた。

リ・ガズイに対し真横を向いて、あらぬ方向へ構えをとった。右手は柔らかく額の前に、左手は柔らかく丹田の脇に。

堂に入った天地上下の構え。

だが、リーオーは今、果たして何に対して備えているのか。分からない、先が読めない。

ナガラ・リオの、心が見えない。

「シャ」

短く吠え、再びぬるりとリーオーが動き始めた。

太極拳のようなゆったりとした動き。

左脚で半歩踏み出し、腰の捻じりと共に打ち出された右拳が、スロー・モーシヨンのように中段の軌道を滑る。

——ガギン、と。

伸びきったリーオーの拳が、空気の壁を叩いた。

空気の、壁？

あるいは、そこに潜む何かを、打った。

呆気にとられる観客を置き去りにして、なおリーオーが淀みなく動く。

左足を引いて半身を取り、重心を後ろに乗せて微かに右脚を浮かせる。

ほどなく、やはり、ガギン、と、リーオーの足が何かに触れた。

浮いた前脚が、側面、外側から軽く叩かれた。

……『蹴られた』と、見るべきであろう。

やはり、何かが、居る。

リーオーの手前1メートル。

空間が時折、錯覚のようにぐにやりと歪み、そこに何らかの幻影を映し出す。

ミラージュコロイドで、あろうか？

ハイパー ज्याマーで、あろうか？

量子化現象で、あろうか？

あるいは、何やらシュピーゲルめいた忍びの業前で、あろうか？
とにもかくにも『居る』

仮初の闘技場に武力介入した何者かが、今、リーオーと拳を交えている。

一人、幻とでも戯れるように、リーオーが動く。

柔らかな蹴りだした前脚が、何者かの腕を叩く。

何者かの臃な拳が、リーオーの掛け受けの上を滑る。

同時に突き出した左の拳が、中空でガツ、とカチ合う(!?)

『……………え？ え、え、なに……………、コレ……………?』

実況の仕事も忘れ、MS少女が素の感想を漏らす。

無理もない。

アムロ・レンに続いて、とうとうあの空手少年までもが、おかしな世界に突入してしまった。

一瞬、悪戯好きの主催者のサプライズ、と言う線が頭をよぎったが、それも違うらしい。

未だアナウンスが無い以上、今頃は李大人も、タワーの特等席で啞然としている事だろう。

「シヤラー！」

そんな周囲の目などお構いも無く、リーオーの動きがいよいよ波に乗る。

ギアが一段上がり、二人(?)が真剣の領域に踏み込んで行く。

ガギン、とぶつかった肘口が硬質化する。

ゴギン、と叩き付けた足先が立体的な厚みを持つ。

打ち込んだ拳が、打たれた胸が、ぶつかり合う度に存在感を増していく。

あたかもリーオーの打岩によって、虚空に戦士の彫像が削りだされていくかのようであった。

MFであった。

ナガラ・リオと同じ打撃屋であった。

ナガラ・リオよりもなお若く、軽く、疾く、そして積極的であった。

空手家の必殺の間合いに、果敢にも一直線に踏み込んでいく。

勇敢な拳で先手を取る。

リーオーはそれを、古流の受けで凌いでいた。

かろうじて凌ぎながらも、虎視眈々と反撃の一撃を見舞おうとしていた。

紙一重であった。

気持ちの良いくらいに噛みあっていた。

無表情の筈のテレビ顔が、はつきりと目に見えて笑っていた。

おぼろげな何者かのツインアイも、おそらくは笑っているように見えた。

ワケが分からなかった。

世界中の格闘オタクの、誰も彼もが混乱していた。

——西東京の外れにある、年季の入った趣のある家屋。

今宵、ここに集った少年少女たちもまた、同様に呆然とモニターを見つめ続けていた。

ただし、彼らが驚愕した理由については、他と少々、事情が異なっていたのだが。

「ど、どうし、て……？」

ポニーテールのホシノ先輩が、唇を震わして呟いた。

その問いに答えられるものなど、いない。

「なんで、このリーオー、ビルドバーニングと闘っているの……？」

「……ビルド、バーニングガンダム」

驚愕を瓶底眼鏡の奥に押し込んで、ヒライ・ユイが、そのガンプラの名前をポツリと呼んだ。

ビルドバーニングガンダム。

本年度のガンプラバトル選手権・西東京予選において、廃部寸前の聖鳳学園ガンプラバトル部を、大会制覇に導いた原動力である。

使用ファイターはカミキ・セカイ。

ブラジリアン霸王流とか言うマイナー拳法の同門だと言う噂があったり無かったりするドマイナー拳法の使い手で、流派・東方不敗

を彷彿とさせる、格闘能力全振りのアタッカーである。

さすがにヒライはよくチェックしていた。

何せ、同じガンプリビルダー、同じ中学生、同じ西東京ブロックの大会の話だ。

更に言うなら、聖鳳はヒライの通う（通っていないが）三区王堤学園から目と鼻の先である。

と、そこまで思い至った所で、ヒライの脳裏に閃光が走った。

現在の、この状況に対して、思い当たる可能性を見出したのだ。

ほんの一週間ほど前、

ナガラ・リオは、ロールアウトした虎徹の試運転を終え、一人、日課の稽古をしていた。

型稽古、と言うよりも、対人戦を想定した、シャドーボクシングのようなものだ。

型稽古さながらに一瞬で終わる事もあれば、時に一分、三分と長丁場に及ぶ事もあった。

それを少年は、納得の行くまで何本も続けた。

シユミレーターによる模擬戦の後でも、三雷会の出稽古の帰りでも、その練習を少年は欠かさなかった。

狭い道場の隅に正座して、その練習の終わりを見届けるのが、ヒライ・ユイの常でもあった。

元々ヒライは、武道、武術に疎い少女である。

最初の数日は、何も無い空間に払われた所作の意味を、把握できなかった。

だが、リーオーと重なるファイターの動きを見逃すまいと目を凝らす内に、少しずつ分かる所も出て来るようになった。

踏み込む一步の距離が変わる。

蹴り足の高さが変わる。

受け手の廻す位置が変わる。

たとえ同じ型であったとしても、一つとして同じ動作は無い。

想定している相手が違うのだ、と、ある日、ふっ、と気が付いた。

敵の顎の高さが変わる、懐の深さが変わる、相手の構えが変わる。自然、ナガラ・リオの動きも変わる。

その頃にはヒライにも、少年の世界が徐々に見えるようになっていた。

リオの拳の先にいる敵。

それは時に、屈強の肉体を持った大男であり、時にしなやかな古武術の使い手であり、時に彼とよく似た同門の空手家のようであった。

けれど、その日の少年の戦い方は、明らかに普段と比べて異質であった。

「セイー」と言う氣勢と共に吐き出された右の正拳が、空中でピタリと止まった。

その瞬間、相手の姿が、ヒライ・ユイにもはっきりと見えた。

リオの拳は懐にまで届いていない、かと言って、相手に外されたワケでもない。

寸止め。

眼前の見えざる敵に対して、打撃を当てず、寸で「止め」たのだ。

「……なんで？」

素朴な疑問が、口を突いて出た。

それまで少年のやる事に、一切の口を出さなかったヒライが、思わず疑問を口にした。

ナガラ・リオは、はっ、とした表情でヒライの方を振り返り、ついで、悪戯がばれた時のように、恥ずかしげに苦笑した。

(あの時、だ)

ようやく、ヒライ・ユイにも事情が呑み込め始めていた。

あの日、あの時点でおそらく、ナガラ・リオは、カミキ・セカイと出会っていたのだ。

彼と出会い、あるいは拳を交え、そして、彼の姿を想定して稽古をした。

おそらくは、今も。

理屈は分からない。

ナガラ・リオな高度な一人稽古が、観衆に存在しない『敵』の存在を知覚させる域にまで達したのか。

あるいは、奔放なプラフスキー粒子の神が見せる戯れか。

とにかく今、リーオー虎徹はあの日のように闘っている。

カミキ・セカイの駆る、ビルドバーニングを想定して。

(けれど……)

と、ヒライは思う。

理屈を超え、何とは無しに納得が出来ても、感情にはどうしようもないしこりが残る。

何で？

どうして？

何で、よりによってビルドバーニングなのか……？

・
・
・

——ガン普拉バトル選手権。

男の子が、誰もが一度は地上最強を夢見るように、ガンダムを愛する少年少女たちは皆、ガンプラビルダーの頂点を目指す。

けれど齢を重ね、様々な事件と出会う内に、多くの人間が挫折し、真つ直ぐに夢を見る事が出来なくなる。

例えば、自分の操縦レベルの低さに気が付いた時。

例えば、馴染みのプラモ屋で、男の子達に混じって遊ぶ勇気が持て

なくなった時。

例えば、理想とするガンプラが現行のメタとかけ離れている事を実感した時。

例えば、自分の通う中学校に、模型部が無い事を知った時。

つまり、ヒライ・ユイである。

彼女の夢は、その麓すら踏む前に、自らの手で閉ざされてしまったワケだ。

まともに学校に通う事も出来ないひきこもりの少女。

ネットで知り合ったハム姉に、半ば強いられる形で参加した地下

ファイトの世界のみが、少女の唯一の居場所であった。

全ては身から出た錆。

現常にか不満がある訳でもない。

けれど、この季節だけはどうしても駄目だ。

今年度、西東京大会を制し、全国への切符を手に入れた、聖鳳学園ガン普拉バトル部。

世界的ビルダー、イオリ・セイの母校として知られるバトル部だが、今春までは廃部の危機に瀕していたと言う。

それでもバトル部部长、ホシノ・フミナは諦めなかった。

必死に駆けずり回って部員を集め、模型部との試合を制して部の存続に成功する。

その後はアーティスティック・ガン普拉・コンテストの覇者、コウサカ・ユウマまでも巻き込んで、チーム「トライ・ファイターズ」を結成。

文字通り破竹の快進撃で、地区予選の頂点に立つてしまったのだ。その台風の目が、元はガンプラとは無縁の世界に居た拳法少年、カミキ・セカイと言う訳だ。

まさに、現代のシンデレラ・ストーリー。

どうしても意識してしまう。

もしも、星の巡り合わせが変わっていたなら……。

あるいは自分に、ホシノ・フミナのような勇気があったなら……。

そう言った未来の可能性が、存在していたのではないのか？

自分と、ナガラ・リオの間にも……。

嫉妬、などと言う大それた思いでは無い。

けれど妄想は進む。

次元霸王流拳法、カミキ・セカイの駆る、ビルドバーニングガンダム。

同じ格闘機として、自分のリーオーならば、どう挑む？

操縦体系の違いは、この際、置いておこう。

単純な相手、肉体でのぶつかりあいならば、ナガラ・リオに分があ

るとヒライは見る。

体格と経験の差に加え、ナガラを使う空手は実戦、戦争技術だ。

ガンプラバトルと言う、持てる技の全てを気兼ね無く解放出来る舞台ならば、ナガラに軍配が上がる筈である。

だが、問題があるのはむしろ、自分とリーオーの方だ。

往年の名機、スタービルドストライクを彷彿とさせる、粒子変容技術の結晶、ビルドバーニングガンダム。

「ガンプラは自由」の言葉を体現する奔放な格闘機に、あの底知れぬ格闘少年が乗り込んだ時、自分は果して、ナガラにどれだけの力を託す事が出来るであろうか？

ヒライが追憶に耽る内に、舞台上での闘いも、均衡が崩れ始めていた。

リーオーの受けが、徐々に的確になってきている。

防御に廻した肘がそのまま打撃となり、崩れた相手のガードの上から、更に重い拳を見舞う。

よろめく相手を追って、ナガラ・リオが攻勢に転じる。

それはそうだ。

足を止めての地上でのドツキ合い。

ビルドバーニングが『必殺技』を使わず、ガンプラ・ファイトのルールに付き合ってくれるならば、当然こう言う展開になる。

だが……。

「セイツー！」

鋭く踏み込んだリーオーの前脚が、ビルドバーニングを捉える。

いや、かろうじてビルドバーニングが受け、後方に「跳ん」だ。

足裏より放出した粒子を蹴り込み、大きく距離を取った。

荒々しく大地を踏んで腰を落とし、高らかと両腕を広げる。

その指先に、煌めく粒子が炎の尾を引く。

「……ナガラー！」

ぞくりと戦慄が走り、反射的にヒライは叫んでいた。

予感があった。

乗り手の心を反映するかのような、変幻自在の粒子変容技術。シャイニング系列機を思わせるフォルムのモビルファイター。次元霸王流拳法。

それらの化学反応が紡ぎ出すもの。

『超必殺技』の存在。

例えば、石破天驚拳のような。

——瞬間、コロッセオが、紅蓮の炎に包まれた。

『わっちゃあつ?! なつ、何じゃアこりゃア——ッ!?!?』

熱風がMS少女を吹き飛ばす。

炎の名を冠する機体より生み出された灼熱の意志が、さながら一個の生命のように翼を広げ、一直線にリーオーへと迫る。

これだ。

ビルドストライクより連なる、何者にも縛られない魂の系譜。

粒子変容技術を持たない虎徹では、抗いようが無い。

いや、例え通常のガンプラバトル向けの仕様であったとしても、結果は同じ事であろう。

今のヒライの技術では、到底——。

「カアッ!!」

ナガラ・リオが一喝した。

ゆるりと天地上下に構えた両の掌を、大きな円を描くように廻した。

掌より生じた蒼い粒子の渦が、空間に波紋を作り出す。

ビルドバーニングの赤と、リーオー虎徹の蒼が混じり合う。

波紋の渦が、灼熱の炎を捌き、巻き込み、廻し、ついには逸らし、リーオーをすり抜け、虚空へと無散していく。

「あ……、あ、あ……!」

ぞくぞくと、ヒライの背が震えた。

両脚が力を失い、後背の壁に、どつ、と背中を預ける。

「ま……、廻し、受け……」

呻くように呟く。

同じだった。

ナガラ・リオの選択は、かつてのヒライ・ユイの妄想と、完全に一致していた。

確かに自分には、一流のビルダー達に追従出来るような粒子変容技術は無い。

だが、そもそもが粒子貯蔵能力まかせの火力戦自体が、ヒライ・ユイの本分では無いのだ。

基幹に据えるべきは、あくまでも永樂流の実戦空手、全局面対応闘争術であるべきだ。

廻し受け。

空手の掛け受けを防御に応用する。

指先より放出した微量の粒子を大気中に共鳴させ、波紋の渦を、障壁を作る。

極大のエネルギーに対し正面から対抗するのでは無く、円の動きでベクトルを逸らし、捌く。

矢でも、鉄砲でも、火炎放射器でもビームライフルでも弾き返す、古流の空手の真骨頂。

そこまで妄想に及んだ所で、当時のヒライは、ふうつ、と一つ溜息を吐いた。

随分と、下らない事を考えている。

思い出せ、自分にはそんな夢を見る資格は無いのだ、と。

『——私のプロトリーオーは、そこいらのガンダムに遅れを取るような機体じゃない』

今でもよく覚えている。

ナガラ・リオと初めて顔を合わせた日に、他ならぬ自分が言った言葉だ。

あの言葉を取り消したいと、心の底から思っていた。

けれどガンプラについた傷は消せても、言葉についた傷は消せない。

プロトリーオーのバラシの最中に気が付いた。
試合のダメージで負った傷とは違う、拳の亀裂。

自分のリーオーが、空手の威力に耐えられなかったのだと、やがて
気付いた。

結果、最後の貫手は未遂に終わり、ナガラ・リオは敗北した。

武術家にとつての敗北の重み、それはその内に知った。

リーオーは兵器で、消耗品だ。

壊れたら直せばいい、そのために自分がいる。

ナガラ・リオは違う。

空手家にとつて、敗北は死だ。

たとえ生き永らえても、どれ程に努力を積み重ねても、自分が死ん
だ事實は消えない。

あの少年は、敗北の痛みを一生抱えて生きていく。

そう思うと、ぼろぼろと涙がこぼれた。

ナガラ・リオは、ヒライのミスを責めなかった。

優しく慰めるような事もしなかった。

その代わり、野良犬のプライドの話をした。

『俺はリーオーが好きだ、それが答えだよ』

少年が言った。

それが少女の全てだ。

ナガラ・リオの為のリーオーを作る。

ナガラ・リオの望みを、全て叶えられるリーオーを作る。

それがヒライのプライドだ。

それ以外は何もいらない。

ナガラの夢が、自分の夢だ。

ナガラの望みが、自分の望みだ。

自分もまた、リーオーのパーツの一部となるのだ。

だから捨てた、断ち切った。

下らない妄想も、未練も、全部全部全部――。

それなのに。

それなのに……。

(ナガラに、見られて、いた……)

とくん、とくん、と鼓動が高鳴る。

ヒライ・ユイが、リーオーを通してナガラ・リオを見てたように……。

ナガラ・リオもまた、リーオーを通してヒライ・ユイを見ていた。捨てた筈の、ささやかな少女の、夢――。

それを一つ一つ丁寧に拾い集めて、ここまで形にされたしまった。熱風を掻き分け、一直線にリーオーが疾る。

膝を畳んで、ビルドバーニングも前に出る。

両者の拳が、再び舞台の中央で交錯する。

踏み込む背中が問い掛けてくる。

あるんだろ、ヒライ？

このリーオーには、先が。

こう言う未来が。

そう、確かに、ある。

今はまだ、ナガラ・リオの妄想に過ぎない。

けれどそれは、ヒライが心から望むならば、きっと現実に手の届く未来である筈だ。

つ、と少女の頬を、一筋の涙が伝った。

ヒライ・ユイの前で、巨大な門が、音を立てて開き始めていた。

・
・
・
――無の境地

篤人流古武術の秘奥に、武の極致として記される概念である。

大別すると『無我』『無心』と言う、二つの境地に分けられる、と言う。

無我、とは我、即ち自分と他者を区別している、心の境界を取り払う術である。

無我が成ったならば、自己と他者は既に一個の存在となり、その心

境を正確に知る所となる。

敵が敵で無くなる。

正しく無敵、と言う訳だ。

寛永期。

根平の地に流れ着いた当代の篤人は、安室流の女の中に、その秘奥を見た。

やがて二人は結ばれる所となり、篤人流古武術と安室流舞踊は、表裏一体の看板として、今日まで受け継がれて来たのだ。

……と、アムロ・レンは推測している。

では『無心』とは、果たして如何なる境地なのであろうか？

篤人流の秘伝には、己の肉体を、人の世の思い煩いから解き放つ術、と書かれている。

思考の枷が外れ、思いもよらず肉体が動く。

肉体が本能のままに、森羅万象の理に則って動く。

魂が思考から解放されるのだ、と。

「——つまりは、極め付けのバカ、と言うことじゃな」

呆れたように、ポツリ、とアムロが呟く。

遙か虚空から見下ろす仮初のコロッセオ。

全てを手中に収めた筈の世界で、ただ二つ、あのリーオーと謎のM Fの未来だけが見通せない。

捉えるべき心が、何処にも無い。

あれこそが、つまり、無心の境地、と言う事では無いのか？

改めて思い返せば、あの空手小僧には、昔からそういう所があった。

思いもよらずに体が動く。

思いもよらず拳が飛んで来る。

まっとうに闘っている時よりも、ある意味では意識の跳んでいる時の方が恐ろしい。

安室流の頂に立って、世界の全てを極めた気でいた。

だがどうだ？

たった一人の馬鹿げた存在によって、アムロの完全な世界は、完全に破壊されてしまった。

見る。

全ての思い煩いから解放された、あのリーオーの奔放な動きを。踏み込んだ足から、喜びが溢れる。

打ち込んだ拳から、悦びが溢れる。

ブン殴られたテレビ顔から、満面の歡びが溢れる。

ただ魂の求るままに、無我夢中で動き、無心になって闘っている。ざわざわと、心がざわめく。

一つの山の頂に立って、改めて世界の広さを知る。

ああ言う頂点もあるのだ。

ああ言う闘いの仕方も、あるのだ。

この世界は、まだまだ捨てたもんでも無いではないか？

「……………」

ぷっん、と何かの切れる音がした。

「あんの……！ クッソたわけがあアアアア

ア——ツツ!!」

アムロがトランザムした。

少女が見た流星

第一回ガンブラファイト・地下最大トーナメント

一回戦、アスラガンダム。

パイロットはヤマモト・アスラ。

意味が分からなかった。

素手ゴロの格闘大会だと聞いていたのに、気が付いたら六本腕の超人と闘わされていた。

油断してたら思い切り脇腹をぶっ叩かれて、危うく死ぬ所だった。

どう見てもレギュレーション違反の奴を、ニュータイプの一言で通すなど言いたかった。

二回戦、バクバクウ。

パイロットはハリマオ。

だから、人間様の大会に人外を混ぜるなど言いたかった。

たまたま根止めの形になって勝ちを拾ったものの、あのままだったら普通に死んでいた。

正直、野生のマンガグローブじゃなくてマジ命拾いした。

つか、武器使用禁止だつってのに、爪とか牙とか、なんなんじゃ？

準決勝、ビルドノーベル。

パイロットはモーラ鬼灯。

あれか、運営は阿呆なのか？

ボクシングならゆうに7〜9階級差がついてしまうワンサイド・マッチだ。

勝ち負け以前に試合として成立しない、危険だ。

守護り切れるワケがない。

事実、思い切り三途の河を渡りかけた。

まったく、思い返すに碌でもない遊戯であった。

余興。

そう、最初のインタビューで他ならぬ自分が口にした言葉だ。所詮はガン普拉バトルなんぞ、人生を持って余した天才の暇つぶしに過ぎない。

それをなんぞ、こんなにもムキになって勝ち上がったって来たんだっただか？

光も当らぬアングラな大会で。

痛く、苦しく、惨めな思いをして。

肋にヒビまで入れて、ゲロ塗れになって。

なんでだ？　なんでだ？　なんでか……。

『アムロよオ……、やろうぜ、ガン普拉・ファイト』

ああ。

そう、思い起こせば、あれだ。

薄汚れた気安い野良犬の、摺るような情けない声。

あんな犬畜生相手に見せた気紛れが、そもそも全ての始まりであった。

自分が「やる」と口にした時の野良犬のはしやぎようは、そりゃあ閉口もんだった。

たわけめ、と心の中で悪態を吐いた。

客家系華僑の首魁にして、稀代の格闘技オタク、李潤發が招集する、世界最強の十六名。

才が無く、体格も無く、経験も実力も無い野良犬に何が出来る。

せいぜい電腦世界の片隅で、犬死にするのが関の山だ。

事実、野良犬はほとんど死にかけていた。

立ち技最強のムエタイを前に、成す術も無く滅多蹴りにされていた。

国技・大相撲の頂点のぶちかましをくらい、ギャグ漫画のように吹っ飛ばされていた。

国内最強レスラーのガチンコに、ボロ雑巾のように転がされていた。

そして、それでもアイツは立ち上がって来た。

まさしく狂犬のように、痙攣する肉体の痛みすら忘れたように、奴は立ち上がった。

あと三つ勝てば、二つ勝てば、もう一つ勝てば。

それでもう一度、自分と遊べるのだと勝手に信じ切って、無邪気に尻尾を振っていた。

あんな、他愛も無い口約束が、奴にとつてはそんなにも重いものであったのか、と。

そう思うほどに憐れで、居た堪れなくなり、それでつい、深情けをかけた。

天才らしからぬ、みつともない姿を晒しながら、それでも辛うじて勝ち上がった。

奴は嬉しそうに尻尾を振っていた。

……自分も、その、少し、本当にほんのちよっぴりだけ、ドキドキした。

してしまった。

……それなのに。

嗚呼、それなのに……。

(うぬは一体、誰と闘つとる?)

どくり、と心臓がうねる。

アムロ・レンを置き去りにして闘い続ける、謎のガンダムタイプとリーオー虎徹。

どう言うまやかした、などとは今さら問うまい。

安室流の秘伝「彼岸ノ見」を打ち破った時点で、奴はもう存在自体がちよつとした神秘だ。

ゴッドシャドーだろうが質量のある残像だろうが、今さら一々うろたえたりはしない。

そんな事より……。

(なんでソレ、わしじゃないんじや……?)

「クツソたわけがああアアアアアアア——
ツツツ!!」

アムロが吠える、疾る！ 疾る！ 疾る！

(ア〜アア〜 ア〜アア〜 ア〜アア〜 ア〜アア〜……)

刹那的なコーラスが流れる中、アムロ・レンが三途の川をひた走る。問題ない、1500メートルまでなら、とばかりに、水面の上を一気に加速する。

えいやと叫んで虚空に飛び出し、広大な宇宙をすっぽんぽんで泳ぐ。

青く眠る水の星の静寂を打ち破り、ピンクの肉体に真つ赤な衝撃波を纏って大気圏突入する。

周回軌道？ 知らんわ！ とでも言いたげに、一気呵成に迫るは日本の埼玉県S市。

ラビアンローズ跡地プラネタリウムに呐喊し、オーロラビジョンから電腦世界に武力介入する。

架空の闘技場に怒れる少女がログインし、リ・ガズイの瞳にバーサーカーモードの炎が宿る。

全てが0.01秒にも満たない光陰の世界の出来事であった。

「りい いい イいイい おお おお うおウ
オアア——」

アムロ・レンが、リ・ガズイが絶叫した。

誇りであるとか、理性であるとか、世間体であるとか、羞恥心であるとか、勞わりであるとか。

そう言った、人を考える葦たらしめている籬の全てを吹っ飛ばした果てに残る獣の旋律だった。

衝撃の余りカミキくんが一瞬でプラススキー芥に還ってしまっほどの凄まじい咆哮であった。

丹念に植毛された真紅の怒髪が、ぶわっ、と熱風を孕んで一斉に天を衝いた。

次の瞬間、未だ寝ぼけ眼のリーオー目がけ、瀑布の如く駆けだして
いた。

「おきやああああ!!」

走り幅跳びでもするつもりかと言う、禪身のライダーキック!!

ビギン! と、無防備なこめかみを捉え、もんどりうってリーオー
が大地に転がる。

(黒歴史、じゃ)

むんず、と、痙攣するテレビ顔をアイアンクローで引き起こしながら
思う。

そうとも。

何だってこんな野良犬に心を許した。

武術家が簡単に心を許すから、こんな無様を晒す事になる。

(埋葬してやる)

思いながら、後頭部を力一杯壁面に叩き付ける。(ガズン!)

消してやる。(ガズン!)

ナガラ・リオも (ガズン!)

リーオー虎徹も (ガズン!)

根平での出会いも (ガズン!)

純白のリーオーも (ガズン!)

月夜の死闘も (ガズン!)

骨掛けも (ガズン!) 寸打も (ガズン!)

嫉妬も (ガズン!) 逆恨みも (ガズン!) 羨望も (ガズン!)

思いもよらぬ正拳も (ガズン!)

必死の三角締めも (ガズン!)

肋骨も (ガズン!) 死の恐怖も (ガズン)

あの美しい残心も (ガズン!)

涙に濡れた寝顔も (ガズン!)

そっ、としゃぐまを掬う指先も (ガズン!)

弾けるような笑い声も (ガズン!)

独りで良い。

天才は一人で来て一人で去るもの。

こんな惨めで、痛い想いをするのなら。
こんな気持ちには。

全部！（ガズン！） 全部！（ガズン！） 全部全部全部全部全部
……。

「うぬなんぞ……、ここからいなくなれいッツツ!!」

泣き叫ぶような少女の声。

同時に、リ・ガズイの全体重を乗せた膝が、リーオーの顔面に突き刺さった。

・
・
・

顔面への痛烈な衝撃によって、ナガラ・リオはようやく我に返った。

「ガハー！」

喉に詰まりかけた歯を、血だまりと共に吐き捨てる。

顔の中心が灼けるように熱い。

どくどくと、止めどない鼻血。

呼吸を塞がれてしまった。

（また……、歯医者か）

他愛も無い事を考えなら頭を振るう。

一体、何がどうなったと言うのか？

ワケが分からなかった。

確か、アムロ・レンと闘っていて、それで……。

いや。

真っ赤なしやぐまを山姥のように振り乱し迫る、リ・ガズイ。

やはり相手はレンだ。

おかしな事など何一つ無い。

だが、妙に熱い。

先刻まで氷の世界にでも居るようだったリ・ガズイの体が、今はまるで憤怒の……。

（……あれ？）

違和感に気付いた。

そのせいで思い切り左フックを浴びた。

「なんだよ……、レン、誰に泣かされたんだよ……？」

戦場も、頬の痛みも忘れ、ポツリ、と疑念がこぼれた。

返答は金的であった。

「オゲツ」

股間で激痛が爆ぜ、こみ上げる胃酸が溢れる。

骨掛け。

亡父の教えがかるうじて少年を救った。

とは言え人体急所。

引つ込めていようと何だろうと、痛いもんは痛い。

前かがみとなったテレビ顔目がけ、天空まで突き上げるような前蹴りが来た。

グチャリと顔面が天空に跳ね上がる、痛い。

間を置かず右脇腹へのソバット、痛い。

思わず背を向けてしまった所に、全力のカーフ・ブランディング、痛い。

滅多打ちであった。

打たれる為に、立ち上がるようなものであった。

打たれても打たれても、何故かりーオーは立ち上がるのを止めなかった。

打たれた顔から、腹から、背中から、傷ついた少女の心が少年の内腑を抉った。

打ち込まれるリ・ガズイの拳から、脚から、頭から、アムロ・レンの涙が伝って来た。

痛い。

倍痛かった。

何故だか知らないが、自分はアムロ・レンの涙に弱い。

出会いの時に、「こいつは同類だ」と、刷り込まれてしまったのがないのだろうか？

この世界に唯一人の同類の泣きじゃくる姿が、胸を搔き毟られるよ

うに、辛い。

アムロ・レン。

傍若無人で、傲慢で、気まぐれで、痾癩持ちで、ガキで、凶暴で、偏屈で、天の邪鬼で――。

こんなにも魅力的な女の子を、自分は他に知らない。

死にかけながら、下らない事に思いを馳せていた。

この痾の強い少女を幸せに出来る男は、果たしてこの世界に存在するのだろうか？

身長は、最低でも170以上、レンより高い方が良さだろう。

年齢は、レンよりもずっと上、大人の男が良い。

武術の心得は無くても良いが、何か一つ、アムロ・レンを感服させられる魅力を持つ人。

そして何より、あの少女一人に、海のような広大な愛を、惜しみなく注げる人。

例えば、トレーズ・クシュリナーダのような完璧超人か？

あるいは、パトリック・コーラサワーのような不死身の優男か？

いるのだろうか？

そんなタフガイ。

この世界に。

居て、ほしい。

どうか。

お願いします、神様。

どうか、どうか、どうか――。

(――とにかく、今は俺が、何とかするしかねえ！)

腹を括って踏み止まる。

今、少女の悲しみを何とかしたいと思っている人間は、この場に自分しかない。

嫌だと言っても、リーオーが戦えとせがむのだ。

アムロ・レンの好みのタイプとか離れているらしい自分ではある

が、幸いな事に、武術の心得だけはあった。

父母のくれた、レンの我俣に付き合えるだけの肉体があった。

(ああ、そうか……！)

あの血の滲むような十年は、この瞬間のためにあったのか
ふっ、と視界が晴れた。

理解した。

いや、理解はしていた。

俺達は、初めから救われていたんだと、根平の夜に、確かにそう思っ
た。

(だからよ、涙拭けよ、レン)

半身をとって腰を落とし、自慢の右拳を思い切り振り被る。

(今は、今は俺が遊んでやる！)

ガギン、と言う鈍い音が、コロッセオの空を震わせた。

仮初の舞台の中央で、装甲を歪めた二つの機体が交錯していた。

リ・ガズイ風月の左拳が、リーオーのテレビ顔を打ち抜いていた。

リーオー虎徹の右拳が、リ・ガズイの側頭部を捕えていた。

シン、と架空の世界に、痛いくらいの静寂が戻る。

「くぬっ」「ウヌ」

ぐらり、と、両機が緩やかに崩れる。

直後、これまでの戸惑いを取り戻すかのように、わっ！ と、大歓
声が沸き上がった。

『カウンターツ クロスカウンターツ!!』

再びまみえた両機の拳か、一直線に交錯したア!』

本業を思い出し、ようやくMS少女が叫ぶ。

クロスカウンター。

梶原理論によれば、一直線に伸びてくる相手の腕の外側を滑らせる
事によって、加速した己が拳を叩き込む拳闘術である。

この場合は、リ・ガズイの外を廻ったリーオーの右腕が正。

だが、両機のリーチを比べれば、リ・ガズイの方が長い

周り道した分、左より2センチ長いリーオーの右拳は、相手の顔を

浅く捉えたに過ぎない。

いや、それでも男と女、ましてや空手家の拳。

つまり……、ただの相打ちである。

「くううくうッッ」

ざっ、と白砂を踏みしめ、リーオーがかろうじて体を残す。

いける。

エンドルフィンが脳みそに分泌され、死にかけていた肉体に再び火が入る。

いける。

これだけ外装をくしゃくしゃにされて、それでも尚、リーオーの骨格は持ち堪えている。

いける。

さすがはヒライだ。

彼女の献身に支えられ、かろうじて自分はまだ、踏み止まっていた。れる。

少女との出会いに、その直向きさに、心から深く感謝する。

いける。

ちらりと客席に目を向けた後、ゆるりと両手を天地上下に備える。

いける。

来いよ、アムロ。

もうちよつとだけ付き合っただけ。

自分は今、宇宙の心に身を委ねている。

篤人流四百年がナンボのモンか知らんが、絶対に死なないと誓った人間をどうやって殺そうと言うのか？

それを見せてもらおうじゃないか。

なあ！

「ヌギギッ」

ぎりり、と奥歯を噛み締め、リ・ガズイが体勢を立て直す。
ぶっ殺してやる。

ぼろぼろと大粒の涙がこぼれ落ちる。
ぶっ殺してやる。

畜生！

アイツ、またわしの顔をぶちよった。

酷い。

ばあちゃんにもぶたれたこと無いのに！

ぶっ殺してやる。

何だってアイツは、こうもズカズカと土足で踏み込んで来る？

人が大事にしておるモンを、容易く踏みにじる？

ぶっ殺してやる。

死ぬ想いしてようやく辿り着いた安室流の境地まで、彼奴のせいで

すっかり忘れてしまった。

ぶっ殺してやる。

犬の分際で。

ぶっ殺してやる。

リオのクセに、リオのクセに、リオのクセに！！

ぶっ殺……。

怒れる瞳が、ちらり、と憎きリーオーを捉えた。

リーオーは、なぜか客席へ向けてよそ見をしていた。

アムロ・レンはニュータイプ。

見えてしまった。

無表情のテレビ顔の奥で、アイツが笑っていた。

穏やかな笑顔であった。

戦場のど真ん中で、実の母親にでも接するかのような親愛の情を、

客席へと向けていた。

「おきやあああああああああ!!!」

爆熱した。

少女の五臓六腑を満たす、粘っこい、ドロドロとしたコールタールが一斉に引火し、高らかと白色の炎を巻き上げ、全てを白く灼き尽くした。

真紅のしゃぐまをバーサーカーモードのように逆立て、一直線にリ・ガズイが走った。

拳「ぐ！」拳「アギ！」

拳、拳拳拳拳拳捌肘ぎ膝避頭突

ぬぐオ

目突弾金「オゲア」

担投させるか潰転踏転踏転踏足払崩蔓犬犬犬

指一本拳げマウントと金的テメまた股回天髪ぬふう絞絞絞殺殺殺

殺

死死苦し落墮終こうだダツダダダ！畜生パク模倣りよ虎

ドゴン！（壁）

：

……

………さすがヒ「おのれヒライ！」

蹴ッ！

打、打打

打打防打守打搦打打打打離打鞭打ベツチイ「ぎやあああッ！」

死打ね死ぬか打死ね打死打なん死ぬ頭ぎぬおれあは死なない！

首相撲イーヲ肘膝膝肘肘肘抓抓全力抓「ぎにやく」しやあ掌ッ「ガ

キか!？」

拳抜極落めきよつ外「ぎいつ」構うかゴツ「んごツ」肋折畜生また

腹パンおのれ畜生拳拳拳

心拳宇宙拳心恋死ね打畜生肘恋恋レン

犬打死打犬死隙犬犬恋殺殺殺隙犬大しゆき「黙れ！」殺殺殺恋恋レン

れん犬恋犬犬犬――

滅茶苦茶だった。

動かせるものは全て動かしていた。
使えるものは全て使っていた。

積み重ねた十年の鍛練であるとか、信じた肉体であるとか、咄嗟の閃きであるとか。

戦術であるとか、意地であるとか、執念であるとか、情熱であるとか、夢であるとか。

遣り所の無い怒りであるとか、嫉妬であるとか、激情であるとか、好意であるとか。

ともかくにも、己が肉体の内に残っていた全てをミキサーにかけてブチ撒けるかのように、二人は動き続けていた。

野良犬の喧嘩であった。

外された左腕を鈍器のように振り回し、潰れた顔面を頭部に叩き込み、鼻血と汗と涙と吐瀉物を撒き散らしながら、それでも二人は止まらなかった。

仮初の闘技場が、満員の観客達が絶叫していた。

単に技術的な話をするならば、今、目の前で繰り広げられている光景は、決勝と呼ぶに相応しいレベルの闘いでは無い。

だが、そんな事はどうだっていい。

この闘技場が、現役であった時代。

あるいはさらに昔か。

人間がようやく二足で歩きだし、意地だの矜持だの、生存本能の打算に背いた感情を持てるようになった時代。

その頃から連綿と続く殴りっこの歴史。

この地上で最もどうしようも無いヤツを決める、今、その祭りの総決算に立ち会っているのだ。

「……は、ははっ、あははは」

——西東京の外れ。

闘いの行く末をモニター越しに見つめながら、カミキ・セカイが破

顔した。

そう言う事だったのか。

一週間前の出来事以来、妙に気になっていた胸のつかえが、不意にこもりと落ちた。

もう一本、真剣勝負をやってほしいと申し込んだ時の、ナガラ・リオの困ったような表情。

今なら良く理解できる。

何やら立派な講釈をして誤魔化そうとしていたが、あの時の彼は、これをやりたかったのだ。

子供の喧嘩。

全力で、全身全霊を込めて駆け抜ける、大きな子供の喧嘩。

成程。

あの河川敷で、これは出来ない。

ほとんど初対面のような自分を相手に、こんな喧嘩を仕掛ける事は出来ない。

ガン普拉バトル、だからこそ出来る。

ルールがあつて、その中で出来る事を全部やって、だから今、彼は安心して遊べているのだ。

それに、彼女。

分かる。

憎いから殴っているのでは無い、むしろ、逆。

本当に好きな相手だからこそ、あそこまでとことんやり合っているのだ。

敵よりも甘く、恋よりも熱い。

好敵手。

自分にも、いる。

もつともアイツは、彼女のような子供っぽい奴ではない。

自分の時は、きつと、この光景とはまた違った闘いとなるのである。

「それにしても……、ひどいわ、こんなの」

ぽつり、と、傍らのホシノ先輩が肩を震わして呟く。

ひどい？

うん、確かにそうなのであろう。

リ・ガズイもリーオーも、今やマトモなパーツなど何一つ残っていない。

ホビーであるガンプラで、こんな肉体を苛め抜くように戦わずとも良いではないか、と普通の感性の女の子なら、そう思うだろう。

「いや、そんな事ないですよ、先輩」

「え？」

「見て下さい、笑ってますよ、コイツ」

セカイ少年がモニターを指し示す。

その先には、すっかりくたびれ果てたリーオーのテレビ顔。

口元に当たる部分に、横一戦、湾曲するような亀裂が入っていた。

笑っていた。

無表情のリーオーが、確かに笑っていた。

・

「デツハハハ！ もったいねえなア、こりや。

コイツを地上波で流せねえなんてよオ」

ビグザム剛田が、太い体を揺すって大笑する。

「ふっ、それは無理だな。

この場に居合わせた我々だけの役得だ」

言いながら、ギンザエフ・ターイーが上等な葉巻に火を点ける。

「He、ボーナスも出ねえってえのにクレイジーなガキどもだぜ」

オード・イル・タツプが、大袈裟に肩をすくめる。

「だから言ってるんだろ？」

ジャパニーズにバーリ・トウードの真似事なんざ出来ねえって」
前席に両足を投げ出して、ぶつきらばうにジョージ来栖が言う。

「夫婦喧嘩、犬も喰わない、ネ」

左手を吊った馬凶愛が、呆れたようにそっぽを向く。

「ウガ」

ハリマオが相槌を打つ。

「……………」

ブンキチくんが、興味なさげに隅っこで丸くなる。

「けど、正直羨ましいよ、私は」

モーラ鬼灯が、物欲しげな瞳をオーロラビジョンに向ける。

「……勝てなかった、ワケっすね」

得心が行ったように、月天山が苦笑する。

『友達って、やっぱり良いもんだね』『ですぞ』

ガチぴよんが眠たげな瞳を瞬かせる。

「良い笑顔するな、ナガラ・リオ」

サマワツカ・イーワが白い歯を見せる。

「エクセレント」

ルクス・ランドアの瞳に、遠い時代の熱狂の残滓が宿る。

「彼女たちの、遊び場、か……」

錚々たる顔ぶれに紛れ、ヤマモト・アスラが溜息を吐く。

「これが、ガンプラ・ファイト……」

関西弁も忘れ、シャツフル同盟風にアカハナが呟く。

(リーオー虎徹が、燃え尽きていく……)

ヒライ・ユイが、分厚い瓶底眼鏡越しに、オーロラビジョンを見つめる。

丹精込めて作り上げた白銀の外装が、歪み、捻じれ、ついには弾け、千切れ飛ぶ。

ナガラ・リオは、それでも止まらない。

剥き出しになった黒い地金の骨格を、なお必死に叩き付けていく。その光景は、さながら燃え尽きる前の流星にも似ていた。

悲しむべき事では無い。

リーオーは兵器、消耗品。

今、その従順な兵士の役目が果たされつつあるのだ。

あと何十秒、あるいは何秒か？

この刹那の攻防の中に、ナガラ・リオの青春があるのだ。

空手に捧げた少年の十年が、今、急速に報われつつあった。

(リーオーは、間に合ったんだ)

ふっ、と安堵の吐息がこぼれる。

よくぞ堪えた。

役目を、全う出来た。

ナガラ・リオの、力になれたのだ。

(……それなのに、私は)

ぐっ、と、組んだ指先に力が入る。

思う。

思ってしまう。

ナガラ・リオに勝って欲しい、と。

リーオーで、アムロのリ・ガズイを倒して、勝利してほしい、と。

彼らにとつて、この闘いの帰結など、もはや何の意味を成す所でも

無いと言うのに。

(私は、嫌な女だ……)

暗い気持ちを振り払うように、両手を胸元に寄せ、祈る。

何の為なのか、自分でも分からない。

ただ、ナガラ・リオの事だけを思う。

リーオーの可能性を見せてくれた男の子の事だけを、ただ、ひたすらに思う。

・
・
・

『——レン』

……なんじゃ？

『レン』

うっさいぞ、ばあちゃん。

『おい、レンよ』

あと一歩なんじゃ。

もう一手で、この死にかけの犬つころを、アンタの所に送る事ができると。

だからチヨイと黙つといてくれ。

こいつで、この一太刀で。

『カカ、男女の睦言なんっちゆうモンは、惚れた方の負けぞ』

「――」

気が付いた。

その瞬間には、骨格が剥き出しとなったリーオーの右腕が添えられていた。

黒い地金の拳が、リ・ガズイの胸元に、ぽん、と触れた。

「あ……」

拳から伝わる柔らかな温もりに、アムロの胸が、とくん、と弾んだ。
刹那。

――ブツピガン!!

「~~~~~ツツツ」

凄い音が鳴った!

リーオーの地金の爪先が、足首が、膝が、股関節が、腰が、背骨が、首が、肩が、手首が一気に連動した。

右の寸打。

ナガラ・リオの十年が、アムロのハートを一直線に打ち抜いた。

凄い一撃であった。

打撃の威力が、ではない。

直前の右腕の動き。

悪意があれば、捌けたであろう。

敵意があれば、返せたであろう。

殺意があれば、凌げたであろう。

好意しか無かった。

(つまり……、まさしく、愛、じゃ)

成す術も無く吹っ飛ばされながら、思う。

愛しい友人にでも手を差し伸べるかのように、ナガラ・リオは拳を差し出してきた。

敵では無い人間の拳、護身術で捌けよう筈も無い。

(……じゃったらよう、ばあちゃん。

負けるのはやっぱり、奴の方じゃ!)

「——カカ！ カーカッカッカッカカ!!」

信じられない事が起こった。

アムロ・レンが還って来た。

誰の目に見ても、致命的な一撃であった。

肉体的にも、精神的にも、アムロ・レンは全てを搾り尽くしてしまっていた筈であった。

その少女が、土俵際いっぱい踏み止まった。

両足を危うく痙攣させながら、何だか良く分からない自信のみを頼りに生き残っていた。

「きいやッ！ リオ！」

アムロが叫んだ。

叫びながら、嗤った。

そうだ。

そもそも自分の方から奴を殺しに行こう、などと言う発想自体が血迷っていたのだ。

奴だ。

奴の方から、わしに殺されに来るべきなのだ。

わしの事を愛していると言うのなら、おとなしく傳いて恩寵を賜るべきだ。

「きいやアッ！」

アムロが再び叫んだ。

禪身の寸打を打ち込んだ瞬間、ナガラ・リオの魔法が解けた。

みきつ、と言う鈍い音が鳴った。

叩きこんだ拳の反動でバランスを崩し、慌てて肉体がたたらを踏ん

だ。

左脚が体重を支えきれず、糸が切れたように全身が沈んだ。踏み止まろうとした膝が小刻みに震え、絶え間ない激痛が襲う。肉離れであろうか？

左の肘からも激痛が走った。

腕が上がらない。

折れたか、外されたか。

いずれにしても同じ事だ。

それに、何より。

(右の拳)

ずきん、ずきん、と。

右手の拳から間断ない激痛が、絶えずリオを蝕んでいた。

思わず右腕を上げると、黒い地金のフレームがそこにあった。

(成し遂げたな、ヒライ)

一瞬、痛みを忘れ、笑みがこぼれた。

リーオーの拳は無事であった。

だとしたら壊れたのは、生身の右手の方だ。

耐えがたい激痛も、ふがない気持ちも、ある。

だが、今はリーオーが耐え抜いた事の方が、嬉しい。

ヒライ・ユイは仕事を全うしたのだ。

ここはもう、少女が泣かなくて済む世界なのだ。

良かった。

本当に良かった。

全身が、汚泥の詰まったズタ袋のように重い。

このまま全てを投げ出して、大の字で眠ってしまいたい。

だが、まだだ。

もう一手だけ付き合ってくれ、リーオー。

「きいやッ！ リオー！」

彼方より、アムロ・レンの声がする。

早く私を殺しにいらっしやいと、完全平和主義の欠片も無い少女が叫ぶ。

(ああ、安心しろよ、レン。)

おれはヒイロ・ユイみたいに待たせたりしねえ)

一発で仕留めてやる。

顔を上げ、ずるり、ずるりと左脚を引き摺る。

左腕は上がらない。

使えるものは、やはり、右拳のみ。

リーオーの拳は壊れていない。

だったら自分さえ激痛に耐える事ができれば、何発だって打てる。

だとしたら、狙いは……。

(……！)

ナガラ・リオが来る。

ずるり、と左脚を引き摺りながら、リーオーのテレビ顔が間近に迫る。

奴の狙いは分かる。

右手を振り上げ、打ち込む。

それ以外の余地が残ってはいない。

一方のり・ガズイは、だらり、といつもの無形。

返し技狙い、ではない。

左腕が上がらないのだ。

ガードの上から強かに叩かれ続けた左の肘が、じんじんと悲鳴を上げている。

こちらも使えるのは、右手一本のみだ。

投げは使えない、蔓も。

ゆえに右の打撃。

後の先。

カウンター狙い、一択。

それを奴に悟られてはならない。

(そうじゃ、来い、リオ、あと一歩……)

じりり、とスローモーションのようにリーオーが迫る。

かつての鋭さが見る影も無い、大振りの右。
今――。

「カアアツ！」

リ・ガズイが体を振るった。

足先を捻じり、足首を捻じり、膝を、股間を、腰を、背中を、肩を、肘を、手首を、指先を捻じり、ブン投げるように全身を加速させる。ぐしより、と。

最高速に達した右指が、リーオーの顎を正確に打ち抜いた。

ガクン、と、糸の切れた人形のように機体が沈む。

気を抜かず、踵を返した残し――。

パン！

「――ツ！」

爆ぜるような乾いた音と共に、衝撃がアム口の右脚を叩いた。

残心を取る暇も無かった。

左のローキック。

信じ難い。

ナガラ・リオの左脚は使えなかった筈だ。

いや、そうだ。

左脚は使わなかった、のか？

右の軸足から、足首、膝、腰に捻じりを伝え、使い物にならなくなった

た左脚を、ヌンチャクでもブン回すように叩き付けて来た。

右拳は囷。

初めから狙っていたのか、それとも……。

アムロ・レンの天性は、この不慮の一撃にすらよく応じた。

反射的に右足を微かに浮かせ、衝撃を逸らす。

それで耐えた。

アムロの右脚は耐えきった、ハズだった。

だが。

「なっ!？」

不意に右足が大地を失った。
グラリ、と視界が傾く。

何故、と思った瞬間に気付いた。

リ・ガズイ風月の、右膝から下が弾け飛んでしまっている。

(畜生！)

どくり、と心臓がうねる。

ナガラ・リオはこれに気が付いたのか。

リ・ガズイの右脚の損傷が、限界に来ていると。

だが何故だ！

何故蹴り込んだリーオーの左脚は壊れない。

本人の方はとつくに限界に来ていると言うのに。

——唐突に脳裏をよぎる、ジャージ姿の瓶底眼鏡。

(また、アイツか！)

じわり、と景色が涙で滲む。

このガンプラ・ファイトと言うレギュレーションは、余りにも卑怯だ。

これが現実の路上ならば、決して凡人の空手に遅れをとったりはすまい。

通常のガンプラバトルであれば、芋臭い小娘の機体など、鼻にもかけない。

だが、このルールだけは駄目だ。

二体一。

ヒライ・ユイの深愛の宿ったリーオーが、ナガラ・リオを不死身の戦士に変えてしまう。

畜生。

畜生。

畜生。

(いっそ、こっちの脚もぶっ飛びまえば良かったんじゃ)

どうしようもなく傾く視界の中、碌でもない事を思う。

それならばきつと、機体とのシンクロを崩される事無く、片足立ちで踏み止まれていた筈だ。

見ろ。

精根尽きはてたりーオーが、とうとう崩れ落ちてくる。

今度は残心を取る余裕すら残っていない。

このまま踏み止まり、高らかと諸手をあげてVサイン。

「勝っちゃったもんね〜」

それで勝ちだ。

勝ちだと、言うのに。

「くうッ！」

崩れ落ちるリーオーの体を、ガシリ、と膝立ちで抱きとめる。

と言うより、必死でしがみ付く。

そうしなければ、体勢を保つ事が出来ない。

唐突に思い出した。

生徒数僅かに67名。

村立根平小学校での、校長先生のありがたいお言葉。

『人と言う文字は、お互いが支え合って成り立っているのです』

後列のマセた上級生たちは、クスクスと笑い合っていた。

そんなのはウソっぱちだ、どう見ても長い方が楽をしているじゃないか、と。

いかに。

ハン、と自分は鼻で笑った。

たわけ共め。

そこまで分かっているならば、黙って長い方の側に回れば良いのだ。

(そのわしが、よりによってコイツを支えるのかよ……!)

畜生。

ぎりりと奥歯を喰い縛る。

リ・ガズイの肩、ずしり、とリーオーの重みが乗っている。

アムロの体に、ナガラ・リオの温もりが乗っている。

そうして気付く。

あの話は、正しい。

理不尽であっても不平等であっても、とにかく今、こうして抱き合
い、支え合わぬ事には機体を維持出来ない。

——カン！ カン！ カン！ カン！

けたたましいゴングの音が、架空の空に響き渡る。

『因縁の死闘ッ！ ついに決着、いや、決着……つかずッ!!』

何と言うッ何と言う幕切れでありましょうかッ!?

こんなにも美しく、これが、これがガンプラファイト——』

感極まったMS少女の支離滅裂なアナウンスが、大観衆の絶叫の中に消えていく。

「あ、ああ……」

キャピタル・タワーの最上階にあって、リー・ユンファも一人、吐息をこぼしていた。

舞台中央でもつれ合う二つの機体。

「素晴らしい、しかし、何と言う……」

リーは震える指先を黒眼鏡に差しかけ、しかし、やがて大きく嘆息を吐いて俯き、ゆつくりとソファから立ち上がった。

「お手数おかけしました。」

それでは行くのでしょうか、イオリさん」

突然の言葉に、傍らで試合を観戦していたイオリ・タケシが、思わず目を丸くする。

「行く……、って、宜しいんですか、ミスター?」

主催者がこんな状態でほっぴり出したんじや、閉会式どころじゃないでしょう」

「ええ、もう十分。」

優秀な助手を抱えておりますので、後は彼女がうまくやってくれますよ」

それに、と。

リー・ユンファは黒眼鏡ごしに寂しげな笑いを見せ、付け加えた。「だって、寂しいじゃないですか。」

祭りの終わりを見届けるって言うのは、ね」

「……のう、リオ。」

「いつぞやの話、覚えとるかや？」

「観衆の大歓声に紛れるように、ぽつり、とアムロが耳打ちした。」

「戦いの決着は、敗者が地面に這い蹲るもの。」

「確かうぬとは、そう言う事を話したよな？」

「……………」

「じゃったら、じゃったらこれは、引き分け、じゃ。」

「忌々しい話じゃが、わしはもう、お主を抜きに体を支える事が叶わん。」

「折角うぬのために用意したしやぐまも、巻き付けてやる余裕が無いわい」

「……………」

「のう、リオよ。」

「うぬには話しても分からんじやろうが、天才の世界つちゅうのは、思いの外、ヒマじゃ」

「……………」

「うぬがよ、どくつしても決着を付けたいつて泣いて頼むんならよ。」

「その、考えてもやらんほど狭量なわしでもないんじやぞ」

「……………」

「……………わしはの、大事な話をしとるんじやぞ、リオ。」

「寝たふりをする莫迦があるかよ？」

「……………」

「たわけ、阿呆、死んでしまえ、バーカバーカバーカ」

「……………」

「……………ホントは起き取るんじやろ、リオ？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

」

折よく高らかと打ち上げられた花火の轟音が、少女の本心を掻き消し続けてくれた。

救い難い格闘オタクたちの大絶叫が、いつまでも仮初の夜空を焦がし続けていた。

祭りの打ち上げは、いよいよこれからが本番であるようだった。

黄金の秋

——九月。

活気に満ちた商店街を、鞆を二人の少女が歩いていた。落ち着いた色合いの青地のブレザーと、昔ながらの半袖のセーラー服。

対照的な少女たちの姿が、季節の変わり目を感じさせた。傍らを、威勢の良い小僧どもが、ガンプラ片手に駆け抜けていく。前カゴにレジ袋を、後ろに幼子を乗せた主婦の自転車が通り過ぎる。

夏の終わり、休暇の終わり。

世間に、いつもの日常が戻りつつあった。

そんなありふれた日常の光景を、少年の蒼い瞳が、病院の一室から見下ろしていた。

ナガラ・リオであった。

最後のガンプラ・ファイトより、二週間近くも経過しようとしていた。

若さゆえの過ち、その代償。

決勝戦を終えたりオが、再び意識を取り戻したのは、二日後の病室のベッドの上であった。

胸骨、亀裂骨折。

右手、中指骨亀裂骨折。

鼻骨、骨折。

左肘関節、脱臼。

左太腿、肉離れ。

青春を燃やし尽くした割に奇跡的な軽傷で済んだのは、やはり、ガンプラ・トレース・システムの加護に依る所だったのであろう。

とにかく、それからの一週間は、てんやわんやで通り過ぎて行った。

サマワツカ・イーヲ、月天山、ビグザム剛田、ギンザエフ・ターイー、アカイ・ハナオ……。

戦いを終え日常に戻るファイターたちが、入れ替わり立ち替わり、療養中のリオを訪ねて来た。

死闘を交えた相手もいれば、ほとんど言葉を交わさなかった相手もいた。

それでも彼らと分け隔てなく笑い合う事が出来たのは、あの熱狂の一夜の証明なのだろう。

ガチびよんが相方を連れてお忍びで現れた時は、さすがに全然お忍びになっていなかったが。

祭りの跡。

裏路地の野良犬たちの狂騒と入れ替わるように、世相はガン普拉バトル一色となっていた。

第十三回・全日本ガン普拉バトル選手権、中高生の部の開幕である。明日のオープントーナメント……、世界最強の夢を目指す少年たちの表舞台。

夢と、情熱と、野心と、友情と、ぶつかりあう拳と拳と、ヨーロツパチャンピオンと、巨大ロボと、ガン普拉学園と、恋と、ライバルと、感動と――。

色素の薄い野良犬の目には眩しすぎる、少年少女の一週間の物語。セカイ少年とチームトライファイターズが、激闘を制し全国の頂点に立ったその瞬間を、リオは病院のロビーで見っていた。

その場の何たるかも忘れたのような乱痴気騒ぎの中、リオは一人、いつかのように、醒めた視線をテレビへと向けていた。

友の勝利を素直に祝福する気持ちはある。

羨望だの嫉妬だのと言った、おこがましい感情を持っている訳では無い。

ただ、馴染みの少年の笑顔が、妙に遠い所へ行つたように感じられたのが寂しかった……。

かくて、宴は終わる。

世は全て事もなし。

ストーンとエアポケットにでも落ちてしまったかのように、不意にリ

オの下に日常が戻って来た。

——いや、日常、と言うのとは、また少し違うのだろう。

亡父より、一日たりとも欠かすな、と学んだ、日々の鍛練。

それをもう、十日以上も空けにしている。

無論、両手をギプスで固定されているとあつては、修行どころではない。

日常生活にも支障が出る。

それ故の入院だ。

だが、かつての山籠りの折には、こんな怪我など日常茶飯事であつたはずだ。

ギラついた狂犬であつた頃のリオならば、今頃、窮屈なギプスなど叩き割つて病院を飛び出していた事であろう。

大人になつた訳ではない。

分別が付いた訳でもない。

……腑抜けになつた。

左肘を固定していたギプスは、今日、外された。

右拳の方は時間がかかるとはいえ、概ね完治はしている。

指先はある程度、自由に動かせる状態である。

明日にはもう、退院と言う運びになるだろう。

だと言うのに、青春を燃やし尽くした心の方は、肉体の回復に追い付いていないようであつた。

「良いんだよ、サボりたい時はいくらでもサボれば。

体と同じように、心にも休息は必要なんだ。

それだけの闘いをしたんだよ、少年は」

burnout syndrome
燃え尽き症候群。

見舞いに訪れたエイカ・キミコは、剥きかけの梨を片手にそう嘯いた。

大会の後始末で忙しい時期であろうに、キミコは暇を見つけてはリオの病室を訪れ、さしたる重症でも無いと言うのに甲斐甲斐しく世話を焼いた。

その好意にすっかり甘え、今日までリオは自堕落な日々を過ごして来た訳である。

「まっ、それも今の内だけの話だろうさ。」

少年の事だ、どうせその内、体を動かさずには居られなくなるよ。良い機会だから、たまには体以外も働かしてみたらどうだい？」

そう言つて、キミコは何冊かの文庫本を残していった。

長編スーパー・バイオレンス小説と銘打たれた、厚めのシリーズ単行本であった。

細やかな字が、二段に並ぶ。

それが、八冊。

三十年にも渡る大長編と謳われていた。

こんな代物、義務教育も終えていない男が二週間で読み切れるものか、と卑屈になった。

杞憂であった。

すると脳みそに入つて来た。

時にそれは、陰惨なドキュメンタリーのように鼻腔を突いた。

時にそれは、純文学的な散文のように肺腑を満たした。

時にそれは、活きの良いパーカッションのように胸を弾ませた。

時にそれは、極上のエンターテイメントのように血液を沸騰させた。

時にそれは、筆者のメッセージそのものとなって心臓を叩いた。

格闘小説であった。

五人の若者たちが、一人の拳士との出会いを通じ、己が行く道を模索する青春群像劇であった。

青春群像劇……と、なる筈であった。

連載中断に伴う長期化の中で、現実の潮流の速さに追い抜かれ、あるいは抜き返し、更なる答えを求める格闘浪漫であった。

人気漫画家の躍動感溢れる挿絵が、新たなパワーを上乘せしていた。

貪るように読んだ。

エイカ・キミコの見立ては正しかった。

復調には程遠くとも、確かに少年の中に新たな力の一雫を加える小説であった。

でも犬は可哀そうだった。

窓の外の光景から視線を戻し、改めて、脇机に置いた表紙のタイトルに目を向けた。

獅子の門であった。

コンコン、と扉を叩く音に、ナガラ・リオは文庫を置いて顔を上げた。

「ハム姉、か?」

「——カカ」

「げ」

哄笑が一つ、廊下でこぼれた。

鼻白む間もなく扉が開かれた。

「カーツカカカ! すまぬのうナガラ・リオ。」

うぬのお待ちかねの『ハム姉』じゃなかったわい」

「ぐっ」

満面の笑みを浮かべた悪魔が室内に乱入する。

思わずカツ、と頬が熱くなる。

アムロ・レンであった。

「……レン、何しに来た?」

「いきなりご挨拶じやのう。」

なに、わしがブチのめした奴が、どんなツラになっとなるのか確かめたくての?」

「そのザマで、か?」

リオが顎をしゃくり、改めて少女の全身を見つめる。

夏の香りが残る純白のワンピースの上に、薄桃色のカーディガンと

言う、らしからぬ出立ち。

だが、その足元はサンダルではなく、スニーカー。

更に右手には、死闘の記憶を示すように松葉杖が握られていた。

「おう、こんなんよ。」

おかげでここしばらくは退屈で死にそうでの。

その辺のフヌケでもからかいに行こうかと思うてな」

「……そうかよ」

少年の険しい瞳を受け流すように、ひよこたん、ひよこたん、悪魔が室内を徘徊する。

「しっかし、どこぞのモグリにでもかかっと思おうとったが……。」

個室とは随分とVIPじやのう」

「目が覚めた時にはもう、ここさ。」

確かに、あん人には世話になりっぱなしだ」

「……ぬ、おうおう、いっちよまえにスイーツ付きかや」

「うん、それか？」

言われ、レンの抱え上げた果物籠に目を向ける。

旬の果実が色とりどりに詰まったそのバスケットもまた、キミコが

見舞いの品であった。

「好きに食っていいぞ。」

下手に傷ましたら、もったいないからな」

「ほれ」

「……つとー」

何の気も無しに、リオに向けてアムロが軽く林檎を放った。

緩やかな放物線を描く真っ赤な果実に、リオが左手を伸ばし――

（――！）

いや。

油断していた。

果実と一緒に、何故か果物ナイフまで、緩やかな放物線を描いて飛んで来ているではないか？

「ちィッ」

たまらず身を起こした。

左手で林檎を受け止め、右手の人差指と中指で、ナイフの柄をはつしと掴み取った。

「おー」

「じゃねえよッ!? 人様に刃物を投げんじゃねえ!」

「いいからよ、剥け」

「……は?」

「その林檎をよ、わしのために剥け、ちゆうとるんじゃ」

まじまじと、思わずアムロの顔を見つめる。

この上なく傲慢なこの女らしい台詞と言えば台詞だが、それでも意味が分からない。

ゆつくりと、ギプスの巻かれた痛々しい右手をかざす。

「利き手、こんななんのにか?」

「うん、左手が空いとるじゃろ?」

ええからはよう剥けよ」

「……」

怒りを通り越して、まず、呆れる。

ナガラ・リオが慣れないナイフを扱う無様を、この女はそんなに見たいのだろうか?

農家の方が丹精込めて作った、旬の林檎を台無しにしてまで。

「……相変わらず阿呆じゃのう、お主は」

少年の愚鈍を憐れむ様に、アムロ・レンが悲しげな瞳を向ける。

「わしは別に、そんな一山いくらの林檎が食いたい卑しんぼではないわい」

「だったら、何を……」

「うぬの誠意が見たいと言うておるんじゃ。」

ナガラ・リオがわしの為に、慣れぬ左手で必死こいて剥いた林檎を
所望しておるのじゃ」

「……」

ますます、ワケが分からなくなった。

右指にナイフを挟んだまま、音も無くリオがベッドから降りる。

室内にたちまち剣呑な空気が満ちる。

ゆらり、と、そのままアム口の脇をすり抜け、備え付けの洗面台の蛇口を捻る。

パシャパシャと、まずは左手を水で濯ぐ。

右手は……、いや、石膏を水に付けるのはまずい。

指先にアルコールを吹き付け、軽く水に晒すに留める。

次はナイフ、刃先を良く流し、左手を振って水気を払う。

最後に林檎。

どうせこれから皮を剥くワケではあるが、そこは食物への感謝を込めて、丹念に洗う。

蛇口を捻り、果物籠の脇の皿を手にしてベッドに戻る。

配膳用の受け台を展開し、新聞の折り込み広告を広げる。

さて。

胡坐を組んで、目の前に置いた林檎と向かい合う。

如何に剥くべきか？

アム口の鼻を明かす、と言う意味では、エイカ・キミコがやったように、丸のまま一本剥きにするのがベストだ。

しかし、リスクは高い。

林檎は完全な球ではない。

ハート型に近い立体であり、更に個体ごとに、でこぼこ歪んでいる。

しかもリオは慣れない左手。

そもそも剥いている間中、林檎は碌に洗ってもいない右手のギプスと触れ合っている事となる。

論外である。

やはり、いくつかに小さく割ってから剥くべきであろう。

そうプランを決め、まずは真上からナイフを当てる。

右指で林檎の脇を抑えつつ、ぐっ、と左手に力を入れる。

刃先が果実に侵入し、簡素な受け台が応力にたわむ。

この林檎。

叩き割るだけなら、容易い。

握り潰すのも、容易い。

しかし、綺麗に割る、と言うのは存外に難い。

林檎の芯は、硬い。

慣れぬ左手、力の加減が難しい。

配膳用のチャチな架台が、軋み、たわんで拍車を掛ける。

——ダン！

「……ッ」

割れた。

果実が縦にすつぱと分断され、勢い余って受け台をナイフで強かに叩いた。

ほうっ、と一つ溜息を吐く。

広告を敷いておいて正解であった。

黄金の蜜がたつぷりと詰まった断面が露わとなる。

瑞々しい果実の酸味が鼻腔をくすぐる。

一息吐いている場合ではない。

二つ切りが終わったならば、次は四つ切りである。

安定感を採るのであれば、断面を下にするべきであるが……。

……いや。

アムロが思い切りこちらを見ている。

「切断面を広告に重ねるのは、いかにもまずい。」

腹を括り、林檎の芯に重ねるように、断面に刃を合わせる。

力が逸れ、半球状の林檎が傾ぎ、慌てて右の指に力を込める。

慎重に行かねばならない。

こんな事で怪我が増えては良い面の皮である。

トン。

割れた。

芯を外し、大きさが不揃いになってしまったが、どうせ一人の胃袋に収まるのだから問題ない。

テンプよく、二つ目の半球に取りかかる。

トン。

こちらはすんなり割れた。

ヘタが無かった分だけ、刃が綺麗に中心に入った。

とは言え、喜んでばかりもいられない。

ここからの作業は、若干テクニクを要する。

芯を、外す。

林檎の一切れを取り、刃を斜めに入れる。

硬く、酸っぱい部分が残らぬよう、きりとて蜜を切り過ぎぬように。

刃が半ばまで達したのを確認し、ナイフを引き抜く。

右手を返して、果実を反対に。

ここで慌てて取りこぼしたり、断面がギプスに触れたりしては大惨事である。

刃物が絡まぬ場面でも、油断は出来ない。

改めて、刃を逆から入れる。

半ばまで達したあたりで、くつ、くつ、と刃を起こす。

ペきり、と音を立て、三角形に抜けた芯がナイフの峰に乗る。

林檎を剥く、と言う行為にあつて、最も胸のすく瞬間であろう。

すつ、すつ、くつ、ペきり。

すつ、すつ、くつ、ペきり。

すつ、すつ、くつ、ペきり。

気を良くして、残り三つの芯も切り分けにかかる。

最後の芯を外し、ふつ、と自分が調子に乗っている事に気が付いた。

危うい。

気を引き締めてかからねばならない。

ここからは今回の作業における最難関が待ち受けているのだ。

皮を、剥く。

空手家、ナガラ・リオにとっては、全く初体験の領域である。

しかも、使うのは左手。

中空で、丹念にシャドー皮剥きを繰り返し、意を決して一切れを手に取る。

ざり、と、気持ち皮を厚めに取って刃を入れる。

無言の室内に、ざり、ざり、と果実の擦れる音が響く。

イメージする。

左手は添えるだけ、動かすのはあくまでも右手。

刃だけでは無い、林檎とギプスの距離の方にも気を使うのだ。指先に十分な力を込め、ざりとて蝸牛のような慎重な歩みで。往路が終わり、林檎を返して復路に取りかかる。

やはり、皮が厚い。

皮幅も断面厚も均等ではない。

もう少し、薄めに狙っても良いのではないかと、欲目が出る。いけない。

もつたいない、だがその一言は、危うい。

自分が素人なのだと言う事を忘れてはならない。

アムロ・レンが見たいのは技術では無く、誠意だ。改めて肝に銘じる。

ざり。

復路が終わった。

後は中央に残ったラインを剥き終えるだけ……。

いやいや、油断は禁物である。

ざり。

剥き終えた林檎の一切れを皿に落とし、大きく息を吐く。

ここまでのトータルで、五分か、十分経ったか。

その間、アムロ・レンはずっと無言で、飽くる事無くじつ、とこちらを見つめ続けていた。

時々、アイツの事が本当に分からなくなる。

ともかく、こんな事を考えていた所でノルマは減らない。

さつさと次にかかってしまうでしょう。

ざり。

残りは三つ。

その道のりの遠さに溜息が出る。

こんなのはそもそも、男の仕事ではない。

今さらながら、この場にハム姉もヒライも居合わせなかった不遇が悔やまれる。

ざり。

……いや。

キミコの方はともかくとして、ヒライは果たしてどうであろうか？
あの少女は、本質的に自分と似ている。

対等に歪んでいる。
最高のガンブラを生み出す事は出来るが、最高のガンブラを動かす事は出来ない少女だ。

ニッパーやデザインナイフの扱いには慣れていても、包丁は握った事すらないかもしれない。

はじめて食事に行った時は、自分がもんじやの焼き方を教えた。

次に会うときは、林檎の剥き方を教えてやるのもよ――

ざり！

危ねえ!?

油断していた。

皮を抜けた刃先が飛び出し、危うく落としかけた林檎を掴み直す。

危機一髪であった。

思い切り雑念に気を取られていた。

とにかく、これで残りは二つ。

ここからは最後まで集中して行く。

ざり。

機械だ。

機械になるのだ。

ナイフを構えた左手を空中に固定し、ただ黙々と右手を動かす。

それ以外の事は、全て忘れる。

ただ目の前の林檎を剥くだけの機械と化せばいい。

ざり。

ざり。

ざり。

……何をやっているんだろうか、俺は？

林檎の皮を剥く。

その辺の主婦だって出来る事だ。

それが何だって今さら、女の機嫌一つを取る為だけに、自分が躍起にならねばならないのだ？

十円玉を折り畳める指だ。

土管に風穴を開ける拳だ。

角材を切り裂く手刀だ。

いびつで結構、そう胸を張って言える、太い男の生き様を志していたのでは無かったのか？

——洒落臭いッ!!

タン、と勢い良く林檎を皿に置いて、最後の一切れに手をかける。ざり。

ああ、まったく洒落臭い限りではないか。

太い生き様だと？

二週間も抜け殻のように寝過していた男が、今さら林檎を剥く十数分を惜しむのか？

少なくとも、今、自分は目の前の林檎に対し真剣に向き合っている。

それならばもう、それで良い。

理由や動機は、何だつて良い。

カミキ・セカイの活躍でも良い。

芥菊千代 対 志村礼二の、血沸き肉踊る打撃戦でも良い。

アムロ・レンの理不尽な要求でも良い。

今は、この林檎だ。

こいつと真摯に向かい合う事が、もう一度、自分が動き出す事のきっかけに成り得るならば。

アムロのためにとと思うのが癪ならば、農家の気持ちさえ思えば良い。

これほどに大きく、瑞々しく育った見事な姫ふじである。

単に商売と、生活の為に割り切って作れる代物ではない。

おいしく食べてもらいたいはずだ。

今はその全責任を、自分の指先が背負っている。

使命と、感謝と、大袈裟かもしれないが、その二つを胸に皮を剥くのである。

ざり。

ざり。

ざり。

ざり。

ざり。

……そして、とうとうに皿の上には、不揃いながらも綺麗に剥けた林檎が、四切れ並んだ。

ささやかな達成感が、心地よい疲労を生む。

後は、食してもらっただけだ。

アムロ・レンに、この自分の誠意、を……。

そう思い、持ち上げた皿が、ふっ、と止まる。

——皿の上に、林檎が、四つ。

四。

縁起が、悪い……。

考え過ぎであろうか？

この林檎。

もしも自分が喰うのならば、こんな事は気にも留めない。

アムロ・レンも、普段ならば気にするような女ではあるまい。

しかし、天の邪鬼な奴の事だ。

「貴様ア！……このわしに四つの中から選べと言うんかいっ!？」

などと、理不尽な因縁を付けてくる可能性は、ある。

だとしたら、どうすればいい？

すでに皮は剥いてしまった。

ここから更に切り分けるのか？

この小さな皿の上で？

四つ切りを、八切りに……。

無意味だ！

悪辣なああの女の事、八切れの内、四つまでを食べ終えた後で、

「貴様ア！……これでは残り半分が食べえぬではないかッ!!」

などと、理不尽極まりないクレームを付けてくるに違いあるまい。

ならばどうする？

どうする？

どうする——？

「——こうだ！」

「!?」

がつ、と林檎の一切れを力強く鷲掴みにする。

アムロが思わず瞠目するも、お構いなしに己が口中へと放り込む。

しやり、と言う気持ちの良い食感と共に、たちまち豊潤な甘酸っぱい果汁が、じゅわつ、と口の中いっぱい広がる。

うん、うまい。

林檎特有の淡い酸味が、口の中から鼻先へと抜ける。

瑞々しい爽やかな喉ごし、感動と満足が胃の腑へ落ちる。

素晴らしい林檎であった。

ガンプラにおいても見舞の品においても、ハム姉の見立てには何一つ間違いが無い。

そしてどうやら、毒の類も含まれてはいないようだ。

図らずもアムロの為に、毒見の役を果たした形である。

これで皿の上の林檎は、残り三切れ。

ラッキーセブンから四を引いた、理論上、最も縁起の良い数字である。

完璧な差配であった。

「剥けたぞ」

ことり、と林檎の乗った皿をアムロの前に置く。

アムロはじつ、と眉間に皺を寄せ、ゆつくりと皿を廻し、様々な角度からねぶるように林檎を睨みつけていたが、やがて、おもむろに皿を置いて顔を上げ、曇りのない瞳をリオに向け、言った。

「うさぎさんは?」

「剥く前に言えッ!!」

たまらぬ女であった。

・
・
・

「がんひゆらふあいふおの、はなひじやぎやによ」

「食ってから話せ」

「——んぐ、聞いたかよ、ガン普拉ファイトの話な」

「……ああ、エイカさんから、大体の所は」

「ちらり、とりオが窓の外に瞳を向ける。」

いつしか西の空へと傾き始めた夕日が、商店街の日常を赤く染め上げ始めていた。

熱狂の夜が、また一日、遠ざかって行く。

あの夜。

トーマナント終結の後、大会主催者であったリー・ユンファは、国際ガン普拉バトル審判員の事情聴取に応じる形で、会場から姿を消したと言う。

容疑はニールセン・ラボから技術のデータ盗用、及び、無断使用。

二つの疑惑が法律に抵触するものであるのか？　と言う一事が問題の争点となったが、結局、リーは嫌疑不十分として解放され、そのまま何処かへと雲隠れしてしまったと言う。

状況としては白では無く、幾分黒ずんだ灰色の決着である。

おかげで自分、ガン普拉・ファイトは自粛、各地に設置したガン普拉・トレース・システムの筐体も、ひとまずは撤去する運びになると言う。

「後始末ばっか押し付けて、旦那にも困ったモンさ」などとキミコはぼやいていた。

「カカ、残念じゃのう、リオよ。」

「当分の間、うぬとは遊んでやる事も出来んわい」

「……へっ、しばらくはガン普拉・ファイトはごりごりだね」

「ふん、なんじやい、いくじの無い。」

「若者ならもつとガッツをもたんかい、ガッツを」

「ヒラヒラとギプスの巻かれた右手を振るうリオに対し、アムロが一つ溜息をついて、肉厚な林檎の皮へと手を伸ばす。」

「いや、それも食うのかよ!?!」

「ひよんなことよりのう」

「ぐくり、と一つ間を置いて、アムロが再び口を開く。

「ヒライの奴はどうした？」

「うん、ヒライ、か？」

アムロからの意外な言葉に、リオが一つ、首を傾げる。

「あいつなら、こつちには来てねえぞ。

何だかよ、色々やる事があるんだとよ」

そう、ハム姉からの言伝をそのまま伝える。

もつとも、西東京のアパートに埼玉の外れの病院である。

忙しかろうとなかろうと、女子中学生が早々に見舞いに来れるような距離ではない。

「たわけ」

ぴしり、とアムロが一言で斬って捨てる。

「奴が見舞いに来たかどうかではない。

うぬがヒライの所に会いに行ったか、と、聞いておるんじや」

「む……」

「そうであろうがよ。

あの眼鏡の助力無くして、うぬ如き未熟者がどこまで戦えたもんかい？

うぬが自らアイツの所に行つて礼を言うのが筋じやないんか？」

「……んな事は、お前に言われるまでもねえ」

痛い所を突かれ、ぶつきらぼうにリオが突き離す。

そう、そんなのは他人に言われるまでも無い話だ。

ヒライ・ユイへの感謝。

あの大会の最中から、彼女に対して、ちゃんとした形で礼をしなければと思つてはいた。

それがとうとう機会を持てぬまま、無為に二週間近くも過ごしてしまつたのである。

「だがよ、アイツは色々と用事があつて来れないって言つてんだぜ。

退院許可も下りてない、こんなナリで押しかけた所で、いい迷惑だろうがよ」

「ああ、そうじゃろうとも。」

真面目くさった奴の事よ。

困惑して、そいで滅茶苦茶怒るのが目に見えるようじゃわい」

「だったら……」

「じゃがの……。」

そうまでせねば、伝わらんモンもあるじゃろうが？

ナガラ・リオが、まともに傷も癒えん内から会いに来た……。

それ以上に、今のうぬの真意を正しく伝えられる行為があるかよ？

拳以外じゃまともに口も利けんガキンちよが」

「……………」

アムロの鋭い舌鋒に、思わず規制が削がれる。

相も変わらず自己本位で滅茶苦茶な台詞でありながら、そこに一抹の真理が混じっているように感じてしまうのは、抜け殻のように虚無に日々を過ごしてきた後ろめたさゆえであろうか。

「……でよ、そこでぐっ、と抱き寄せるんじゃ！

力尽くじゃ！ 男らしく一息に押し倒せ！」

「ワケの分からん事を言ってんじゃねえ」

「構わん、わしが許す！ チューしろチュー」

「お前にそんな資格は無えッ!!」

激昂した。

アムロ・レンの魂を、一瞬見直したただけ損をした。

目の前の女は、只の下種であった。

「ハン、阿呆め、だからうぬは童貞なんじゃ」

「……………」

がりがりと林檎の芯を頬張る少女の横顔を、無言で睨み付ける。

時折、アムロ・レンと言う少女の事が本当に分からなくなる。

こんな下世話な口を利くためだけに、この少女は病室を訪れたのであろうか？

『——彼女の本心、気付いてあげなきゃダメ』

ヒライ・ユイの、声が聞こえた。

いつだったか、確かそんな風に窘められた事があった。

ヒライ・ユイであれば、目の前の奔放な少女の本心を推し量る事が出来るのであろうか。

「……ん、なんじゃ？　なにガンくれとんのじゃ？」

今は、ヒライはいない。

愚鈍なりに、自分で答えを見つけなければならぬ。

怪我を押して、わざわざ会いに行くからこそ、伝わる真意もある。

そう嘯いた、アムロ・レン。

その言葉の意味する所と、より真摯に向き合うのならば……。

わざわざ松葉杖を突いてまで、彼女が自分の許に来た。

その行為そのものを、もう少し、自分は重く考えるべきではあるまいか。

「おう、なんか言いたい事でもあるんかい」

「ああ、その……」

「なんじゃ、はつきりせん、気色悪い奴じゃの」

「いや……」

くりくりと動く緋色の瞳がリオを捉える。

それが気恥ずかしく、しかし、意を決して素直に顔を上げた。

「今日は、その……、わざわざ見舞いに来てくれて……、どうも、ありがと」

「なッ!?　んなッ!？」

「ええつと、なんか、困ってる事があれば、遠慮なく相談しろよ。

俺なんかでよければ、いくらで——」

「カアア——ッ!!!」

「うおおッ!？」

ナガラ・リオの精一杯の誠意を込めた感謝の一言。

返答は松葉杖であった。

風を切って飛来する高速の無垢。

本能的に腕を廻して左手で捌いた。
廻し、捌き、弾く。

上方にぶっ飛んだ杖先が強かに天井を叩き、リノリウムの床の上で乾いた音を立てる。

「な、何しやがるこの野郎ツ!」

また外れたらどうする気だ!」

「う、うううっさいわツ!」

こんたわけ! たわけ! たわけ! たわけ! たわけ!

何様じゃ貴様は、何様じゃ貴様はツ! 犬畜生の分際でわしの事を気遣おうってか!?

百万年早いんじやこの阿呆ツ!!」

アムロ・レンが激怒していた。

顔を耳まで真っ赤に上気させ、瞳をうるませあらん限りの罵倒を並べて来た。

「な、なんだよ、それ、俺だって……」

「やつかましいわい! うぬとはもう口利いてやらんツ!!」

「おい! 杖」

「いらんわ!」

ずんずんと、止める間もなく少女が背を向け、バダムと勢い良く扉を閉める。

嵐が去った。

夕暮れの室内に、少年と、ヘタだけになった林檎の皿と、床に転がった松葉杖だけが残された。

「……っか、歩いてんじやねえか」

諦観と共に溜息を吐き出し、ごろりとベッドに仰向けになる。

何がいけなかったのであろうか?

えらい剣幕であった。

何だかよく分からないが、アムロ・レンのとんでもない地雷を踏み抜いてしまったらしい。

「……ま、いいか」

中空にぼつりと眩く。

アムロ・レンの事は、あれで良い。

どうせ、猫のような気まぐれな女の事である。

自分とレンは、同じ道の途上にある。

奴はあんな捨て台詞を吐いてはいつたが、どうせその内、嫌でも顔を合わせる事になるだろう。

とりあえず、松葉杖一本分くらいには、奴に会いに行く用事も出来た。

だから、レンとの事はあれで良い。

……アイツとは。

ヒライ・ユイとは、どうであろうか？

「ユイちゃんはさ、残念ながら来れないんだ、やる事が多すぎてね。

ま、ユイちゃんの分もハム姉さんが面倒見上げるから安心しなよ、少年」

最初に見舞いに訪れた時、エイカ・キミコはそう言っただけで胸を叩いた。

ヒライの分、その言葉を忠実に実行しているのだから、あの女性の深情けも相当な物だ。

「ユイちゃんがやる気になったのも、全ては少年のおかげだよ。

少年の鬨いが、彼女に現実と向かい合う勇気をくれたんだ。

エライぞ、凄いぞ、ありがとう！ 抱きしめたいなあ少年！」

ハム姉はそう言って、身動きの取れぬリオを全力でハグして来た。

面倒見の良い女性である。

実の妹のようにも思っているヒライの社会復帰が、心底嬉しいのであろう。

チツ、と舌打ちが一つこぼれる。

ハム姉は何も分かっていない。

ヒライに救われたのはリオの方だ。

ヒライが立ち上がったと言うのなら、それは間違いなく彼女自身の意志によるものだ。

そこに、ナガラ・リオの私闘が介在する余地など、ありはしない。

ヒライ・ユイ。

何故だか先刻から、ヒライの事ばかり考えていた。

あるいは……、自分は、寂しいのだろうか？

四月、桜の舞い散る河川敷。

あの日から五カ月ばかり、彼女と多くの時間を共有してきた。

会って何かするワケでもない。

リーオーの改造プランを話す時以外、彼女とは殆ど言葉を交わす事も無かった。

ナガラ・リオが稽古に励む間、ヒライは道場の隅で壁のしみのように張り付いて、ただ瓶底眼鏡の奥から自分の姿を見ていた。

ヒライがリーオーを改修する時、自分は無言で、少女の良く動く白い指先を見つめていた。

あの時間は、これからはもう、無い。

ガンプラ・ファイトで勝利して、野良犬のプライドを取り戻すため。

その為に二人は、ずっと一緒に居た。

そのガンプラ・ファイトも終わった。

ヒライのいない、いつもの日常が戻って来たのだ。

傷は癒えた。

退院して、そしてヒライに会いに行く。

ヒライに会って、これまでの礼をする。

ヒライの作るリーオーに、どれだけ助けられたか、どれほど救われたか。

それを正しく言葉にして、彼女に伝える。

そして。

そして……、どうするのであろうか？

ヒライのしようとしている事、ヒライの夢を、聞いても良いのだろうか？

ガンバレ、と、声をかけるのか……？

(馬鹿な)

ブン！ と、天井目がけて右の正拳を放つ。

知っている。

ヒライ・ユイが、頑張っていないかった日など、無い。

その、ヒライに対して、まるで他人事のように、月並みな激励を送るのか？

何一つ努力していない、抜け殻のような自分が。

……せめて、お互い頑張ろう、と、そう伝えるべきではあるまいか。ガンプラ・ファイトは、終わった。

二人の往く道は、隔たれた。

それでも、いや、それだからこそ、これまで二人三脚で続けて来た延長上にある言葉を、彼女に贈るべきでは無いだろうか？

下らない見栄だと、笑われるかもしれない。

けれども、彼女に対してだけは、常に対等の関係でありたかった。

ナガラ・リオは、ヒライ・ユイからリーオーを託された男だ。

OZ-06MS『リーオー』は、ACで最もありふれたモビルスーツだ。

決して特別な機体ではない。

扱いやすく、戦場を問わず、それ故に高いポテンシャルを秘めた機体だ。

砲列を並べたビルゴの大軍でも、一騎当千のツールギスでも、例え『ガンダム』が相手でも、戦況次第では屠れる牙を持った機体だ。

少なくとも、歴戦の兵達に、そう言う可能性を信じさせるだけの確かさを持った機体だ。

だからこそ、特別な機体だ。

ガンダムになれなかった少女、ヒライ・ユイにとっての『神』だ。リーオーに、なりたかった。

ありふれた、しかし、揺るぎない価値を胸に宿して生きる男になりたかった。

『いつの頃からか、私は自分がガンダムではない事に気が付いた』

瞳を閉じると、ヒライ・ユイの声が聞こえた。

『だから、だから私は、リーオーになりたい』

暗闇の中、一人モニターを見つめ、自分の姿をありふれた量産機に重ねる少女の背中が見えた。

少女の孤独を、その気高さを、ナガラ・リオは心から尊く思う。

ちりり、と、胸の奥に灼けるような痛みを感じた。

細胞の一片が、ぶすぶすと燻るように熱を持っていた。

精根果て、すっかり燃え尽き冷たくなってしまったと思っていた灰の中。

そこに一粒ばかりの火種が残っていた。

ヒライ・ユイの事を想う。

肉体の奥底から、少しずつ、新たな火が燃え広がっていく予感があつた。

自分は、何になれるのか。

何になりたいのか。

その夜。

ナガラ・リオは夢を見た。

トランザムしたアムロにタコ殴りにされる夢だった。

ワケが分からなかった。

・
・
・
——二日後。

病院を出たナガラ・リオは、西東京の実家へと戻っていた。

AM6:30

常ならばロードワークの途上と言う時間帯であるが、その日の彼は道場にあつた。

ようやく日の光も差し込んで来ようかと言う、薄暗い場内。

馴染みの胴着を来て、使い古した雑巾を手に、少年は一人、道場の

掃除をしていた。

元より手狭な道場である。

大会前にも掃除はしていたし、入院中もハム姉がちよくちよくと世話を焼いてくれている。

汚れと言うほどの汚れも無い。

それでもリオは丹念に、床板の一枚一枚を丁寧に磨いていた。

親一人、子一人。

思えば、初めて道場を踏んだ幼子に、亡父が最初に教えたのも、道場の掃除であった。

厳格な父は、掃除一つとっても手を抜く事を許さなかった。

道場の神聖さであるとか、まつすぐな心であるとか、そう言ったメンタル上の理由では無い。

道場破りが来る。

立ち会って、床板が腐っているのに気付かず、あるいは壁から釘が飛び出しているのに気付かず、不覚を取る。

死に恥である。

常に最善を臨めぬ戦場なれど、せめて自分の道場くらいは知悉しておけ、と言うワケだ。

おもわず顔が綻ぶ。

今、リオが丹念に床板を磨く理由は、あの頃よりは幾分、精神的な理由であった。

——と、

ふと、気配に気が付き、手が止まった。

まさか、と思い、顔を上げた。

ようやく白み始めた空。

庭とも呼べぬ、ちっぽけな中庭。

そこに佇む、瓶底眼鏡の女の子。

「……おはよう」

「……ああ、おはよう、ヒライ」

ヒライであった。

ヒライ・ユイがそこにいた。

「どうした？ ずいぶんと早いな」

「ナガラが、退院したって聞いたから……」

「迷惑かとも、思った、けど」

「いや、いいよ。」

もう少ししたら、こつちから会いに行こうと思ってた」

「掃除？」

「ああ」

「手伝う」

「……いや、丁度、終わった所だ。」

先が上がっててくれ」

短く断わり、入れ違うように下駄を履いて、リオが庭へと降りる。

バケツの水を捨て、それから井戸の水を汲み、丁寧に左手と右の指先を濯いだ。

とつぷりと時間をかけて掌を拭い、道場に戻る。

場内に目をやると、案の定、ヒライ・ユイは定位置にいた。

道場の隅、座敷童のように膝を畳んで、ちよこんとそこに座っていた。

無言で敷居をくぐり、道場の中央に進んで、正面の神棚と向き合う。合わせてヒライが立ち上がり、リオの右後方に寄り添う。

二礼

二拍

一礼

朝の静けさに満ちた場内に、二人、無言で佇む。

一日の稽古を始める前の、暗黙の取り決め。

たったの二週間、空けただけなのに、なんだか、何もかもが懐かしかった。

「……(トク)」

「うん？」

「この道場、こんなに広がったんだ」

「ああ……」

ヒライに言われ、何とは無しに室内を見渡す。

年季の入った、お世辞にしても広い道場では無い。

だが、ただでさえ手狭なスペースを占拠していた『ガン普拉・トレース・システム』は、既にキミコの手によって撤去されている。

ガランとした室内を、ヒライが「広い」と感じるのも、無理のない所である。

ひとしきり室内をぐるりと見渡し、リオの視線がヒライへと戻る。

「珍しい服、着てるな」

「え」

リオの言葉に、ヒライは一瞬、自らの装束に視線を泳がせた。

「……学校の制服、三区王堤の」

ヒライの言葉に、リオが一つ頷く。

鮮やかなワインレッドのブレザーに、柔らかな白のロングスカート。

首元には淡いピンクのタイ。

今日びの日本では珍しいタイプの制服である。

普段のジャージ姿とのギャップにどぎまぎするが、ヒライの奴は、随分とお嬢様な学校に通っていたらしい。

微妙な沈黙が、流れる。

何か、自分から言うべき場面だと思った。

「似合ってるぞ」

「……嘘」

「嘘なもんかよ」

「そんな筈が無い」

「おい！」

思わず声を荒げてしまった。

ナガラ・リオは、自分に自信の無いヒライ・ユイが大嫌いだった。

「自分を卑下するような言い方は止めるよ。」

もっと自信を持って！ ヒライ、お前は……」

しかし。

真っ直ぐに顔を上げたヒライの前に、思わず氣勢が削がれる。

少女の視線を阻む、分厚い瓶底眼鏡。

その奥から、ヒライがこちらを見ていると意識すると、妙に気恥ずかしくなり、堪らずリオは話題を変えた。

「……お前は立派だよ、ヒライ。」

自分が何をしたいのか、ちゃんと自分で見つけて、行動してるんだ」

「え……？」

「行くんだろ、学校？」

自分のやりたい事が、見つかったんだ」

リオの言葉に、こくり、と小さく、ヒラが頷く。

「学校を卒業して、プロの……、ガンプラビルダーに、なりたい」

「プロ？」

「職業としての、プロ。」

ガンプラの製作と、改造で、口に糊する生き方」

今にも消え入りそうな小さな声で、ヒライが言う。

プロ、職業、リオの耳には、いずれも望外の言葉であった。

「ガンプラバトルの、プロって、食えるモンなのか？」

その……、操縦が出来なくても、改造の腕、だけで？」

「ガンプラバトルは、世界的に見て、最もメジャーな競技だから、市場の規模も大きい。」

公式大会の賞金額だって相当なものだし、人気のあるトッププロにはスポンサーだって付く」

「へえ……」

「そこに、製作専門の人間が入り込む余地がある。」

イオリ・セイのように、製作からバトルまで一人でこなすプロもいれば、かつてのメイジン・カワグチのように、専属のワークスチームを組むケースもある。

私になりたいのは、後者。

ファイターに相応しい機体を作り出す、製作のプロ」

「……そうか、そう言う世界があるのか」

ヒライの言葉の壮大さに、ほうっ、とリオが一つ溜息を吐きだす。

「すごいな、ヒライは」

「凄くない」

ぶんぶんと首を振るって、ヒライが否定する。

「本当に、プロのビルダーを目指す人間は、子供の頃から熾烈な戦いを始めている。」

アマチュアの大会で腕を磨いて、国内最難関のガンプラ学園を受験して……。

その狭き門の中で、こうしている今も、きつと、鎬を削る戦いを続けていく」

「大変な世界だ」

「私は、私は周回遅れ。」

自分の才能を試そうともせず、世間に背を向け、

それで今更になってこんな事を言い出す、身の程知らず」

「ヒライは立派だ」

ヒライ・ユイの自虐を、今度こそリオが力強く打ち消す。

「自分の夢を自分で見つけて、それをちゃんと人に言えるってのは、凄い事なんだよ。」

それが、どれだけ困難な道なのか、自分で分かっているなら、尚更だ」

「……………」

「今の置かれた状況だとか、夢が叶うかどうか、とかじゃない。」

立派だよ、ヒライは」

もう一度、強く、言葉を重ねた。

語彙の足らなさを、今更ながらに恥じる。

ただ、今の自分の気持ちだが、目の前の少女に正しく伝わっている事を、切に願う。

「……ナガラ、は」

「えっ?」

「あるの?」

なりたいもの、自分の、夢」

「それを……、探しに行きたいと、思ってる」

ナガラ・リオの言葉に、ヒライがちらりと壁際に目を向ける。

そこにあつたのは、丁寧に折り畳まれた学生服と、肩に担げるよう

にした荷物袋。

それと何故か松葉杖。

「……行っちゃやう、の？」

静かに一つ、リオが頷く。

「ヒライ、お前と違って、俺はまだ、何にも見つけちゃいねえ。

この時代に、親父のような生き方を、一人、死ぬまですつと続けるのか。

それとも三雷会の館長みたいに、どっかで世間様に伝えられるものを探すのか……。

そんな事すら決めかねてるんだ、俺は」

「……」

「世界は広えよ、ヒライ、この間、痛感した。

強くなりてえ。

今は、世界中、色んな物を見て、学んで来たいと思ってる」

「……」

しばし、沈黙が流れる。

やがて、こくり、とヒライが頷き、鞆の隣の、小さなトランクケースを持ってきた。

「そいつは……？」

「なんだか、こうなるような気が、してたから」

そう言ってトランクを胸の前に抱え、かぱり、とリオに向けて蓋を開いた。

「……こいつは」

うわ言のように呟いて、リオが呆然とケースの中を覗き込む。

白い、ガンプラであった。

四角形のテレビモニターのような、無表情の頭部。

右隣に並べられた、外付けの追加ブースター。

それ以外にはさして、特徴といった特徴を見出せない。

その潔さゆえ、却って量産型のスタンダードと言った雰囲気醸し出している機体であった。

その機体が今、丁寧にくり抜かれたウレタンマットの上に鎮座して

いた。

「これ、プロト・リーオーだ」

「そう、リーオー虎徹は、まだ時間がかかりそうだから。だから先に、この子を作り直した」

「ヒライ……」

「悲しまないで、ほしい」

ふるふると、瓶底眼鏡の少女が、小さく首を横に振るう。

「リーオーは兵器で、消耗品。」

戦いの度に損耗するのは、リーオーの宿命」

「……………」

「…………でも、この子だったら、もう少しだけ遊べる」

「遊べる？」

「普通の、ガンプラバトル。」

ちゃんと、まともに戦えるように、作り直した」

はっ、とリオが顔を上げる。

ここ二週間ばかりヒライが何をやっていたのか、今更ながらに気付いた。

「ナガラ」

小さくリオの名を呼び、トランクを畳んでヒライが顔を上げた。

無表情の瓶底眼鏡が、ナガラ・リオを真っ直ぐに見ていた。

「この、プロトリーオー、あなたに持っていてほしい」

「俺に…………？」

「遊んでくれなくても、構わない。」

本当は、荷物になるだけだって、分かってる。

けど…………、だけど…………」

少女の声が、次第に小さく、静寂に掻き消えていく。

トランクケースを抱えた両手が、かわいそうなくらい、震えていた。導かれるように、リオの体が動いた。

大きく開いた両の手が、ヒライの抱えたトランクケースを——
すり抜け——

そして――

「あ……」

抱いた。

ヒライ・ユイを抱きしめていた。

トランクを抱えた少女の背中に手を廻し、そつと胸元に引き寄せていた。

「……………」

「ありがとう、ヒライ」

耳元で、少女の名を呼んだ。

「ずつと、お前に支えられていた。」

お前がいたから、あそこまで、戦う事が出来た」

「……………」

「お前の……、お前の作るリーオーが、好きだ」

「……………」

「言うの、遅くなった、ごめん」

「……………」

ヒライ・ユイは、ずつと無言だった。

明朝の静寂が、道場の空気を支配していた。

少女の震えは、いつの間にか収まっていた。

制服ごしに、ヒライの温もりが少しずつ伝わって来た。

薄い背中をそつと擦った。

とくん、とくん、と、ヒライの鼓動が伝わって来た。

ほつれた髪の毛が、リオの頬を僅かに撫でた。

洗いたての制服の匂いの中に、微かに別の匂いが混ざっていた。

甘く、ほのかに痺れるような。

有機溶剤、ラッカー、塗料の匂いだ。

今日までずつと、プロトリーオーの改修を続けていた少女の匂いだ。
だ。

絶対に消す事の出来ない、ヒライ・ユイの匂いだった。
愛おしかった。

愛おしくて、少女の背に廻した両手に、わずかに力が入った。

「ん……」

「――！」

静寂の室内に、少女の吐息が、微かにこぼれた。

とてもヒライのものとは思えない、切ない吐息だった。

瞬間、我に返った。

「う、うおああ――ッ!？」

ナガラ・リオが叫んだ。

叫びながら飛退き、もつれ、道場の床に仰向けに倒れ込んだ。

強かに頭をぶつけた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

静寂の室内で、二人、ただ、見つめ合っていた。

言葉も無かった。

どつどつどつど、と、バカにでかい心臓の音だけが、アイドリング

を刻んでいた。

(何を、何をやってんだ、俺は!?)

沸騰した血液に、ぐつぐつと脳みそを掻き回されていた。

とんでも無い事をした。

取り返しのつかない事をしてしまった。

バーストモードであった。

『いや、デカした! そのまま一気に押し倒せ! チューじゃチュー

!』

うるせえ馬鹿ツ!!

心の中の悪魔をブン殴りながら、思い切り頭を振るった。とにかく、ヒライに対して何か言わなければならなかった。

「すッ スマねえッ！ ヒライ!!」
叫んだ。

叫びながら立ち上がった。

思い切り声が裏返った。

最早、謝る事しか出来なかった。

「その……、大丈夫、だったか？」

おかしな事を聞いた。

「大丈夫……」

ヒライの返事もおかしかった。

眼鏡。

少女の表情を気取らせぬ瓶底眼鏡だけが、かろうじて二人の均衡を支えてくれていた。

眼鏡が無ければ即死だった。

「大丈夫、だから……」

一呼吸おいて、ヒライがまた、おかしな事を口走った。

「……ナガラなら、大丈夫、だから……」

「——ッ!？」

爆熱した。

脳みそがラストシューティングするかと思った。

すごい言葉であった。

武に捧げた少年の十年を、完全に殺されてしまった。

バクバクと重篤患者のように心臓が鳴いた。

かたかたと、情けなくも膝が震えた。

（——息吹だ）

そう思った。

コヒョオオオオ……とばかりに肺腑の空気を吐き出し、最後に呼ツ
！と酸素を取り込んだ。

気休めの空手に頼らなければ、体を支える事すら叶わなかった。

「ナガラ」

「おう」

かろうじて、応えた。

まだ少し、声が上がっていた。

「ナガラ、私は、リーオーが好き」

「……ああ、よく、知ってるよ」

「そうじゃない」

ふるふると、ヒライが首を横に振る。

「ずっと前に、ナガラから、リーオーが好きだって言われた時……」

私も好きだって、本当は言いたかった。

でも、何だか恥ずかしくなって、別の話をした」

「そう、だったのか……」

「今は、あの頃よりも、ずっと、好き。」

あなたが、可能性を見せてくれた機体だから」

「……………」

「リーオーが好き、大好き。」

ナガラ・リオが、私に、強い気持ちをくれるから」

……胸の動悸は、いつしか収まっていた。

鉄壁の瓶底眼鏡が、ヒライ・ユイを辛うじて支えてくれていた。

柔らかなロング・スカートの上からも、少女の膝が震えている事に気が付いた。

ヒライ・ユイは、やっぱり、強い。

胸の奥で燻っていた火種は、今やリオの全身に燃え広がっていた。

「リーオーは特別な機体だ、って……」

あの時、教えてくれたよな」

リオの言葉に、こくり、とヒライが頷く。

強く握った指先から、次の言葉を待っているのが伝わってくる。

「だったらよ、俺も、俺も、リーオーになりたい。」

ありふれてて、けれど、確かで、可能性を持った人間になりたい」

「……………」

「お前と、お前の夢の一部を共有できたら、どんなに良いかって、思う」

「……………」

「……悪い、何だか回りくどい事を言った」

「ううん」

ふるふると首を横に振るって、リオの言葉を、ヒライが口中で反芻する。

「すぐく、ナガラらしいなって、思う」

「そうか……？ いや、やっぱりちゃんと言うよ」

そう言って、姿勢を正した。

真っ直ぐに、瓶底眼鏡に阻まれた、ヒライの瞳を見つめる。

ヒライと出会った、桜並木の河川敷。

壊れた手。

根平での鬪い。

虎徹。

最大トーナメント。

ヒライと過ごした、一場面、一場面を、丁寧に振り替える。

言葉を探す。

今、岐路に差し掛かった、彼女に伝えるべき言葉を。

相応しい言葉を。

言葉。

言葉。

言葉。

「すぎだ」

言った。

三文字だった。

まともな教育を受けていない少年の頭では、それが精いっぱいだった。

「……たしも」

「——と！」

不意に、ぽすん、とヒライが体を預けて来た。

抱きしめる事も叶わぬまま、結局ヒライの額を、胸で受け止めた。

戸惑うリオの右手の甲に、そつと少女の指先が触れた。嚴重に固められたギプスの上をそつとなぞる、ほつそりとした白い指。

それで、気付いた。

とうとう鉄壁の瓶底眼鏡ですら、ヒライの気持ちを支え切れなくなったのだ、と。

ヒライが今、どんな表情をしているのか。

それを思うと、また、ばくばくと心臓が高鳴った。

自分の動揺が、胸板を通して直にヒライの額に伝わっている。

どうしようも無く恥ずかしかった。

だからと言って、引き離すワケにも行かない。

学が無く、拳以外にまともに気持ちを伝える手段を持たないナガラ・リオ。

今、この心臓の音以上に、自分の気持ちを正しく伝える術など考え付かなかった。

朝の光に包まれた室内に、額の温もりと、心臓の音だけがあった。どれほどの時間が経ったのだろうか。

満たされていた。

ずつと、こうしていたかった。

「……ずつと」

「うん？」

「こうして、いられたら、いいのに……」

「うん、ああ、いや、そりやダメだ」

思わず肯定しかけた言葉を慌てて打ち消し、そつと少女の両肩を抱いた。

「学校に遅刻しちまう。」

「ちゃんと真面目に勉強しなきゃ、立派な大人になれねえ」

「ん……」

小さく頷き、ゆつくりと、ヒライが離れた。

半歩引いて、改めて二人が向かい合う。

「行くか」

「行く」

そういう事になった。

玄関を抜けると、町並みには既に、朝の活気が溢れ始めていた。変わらぬ日常が、動き始めていた。

ヒライ・ユイはこのまま東へ。

三区王堤学園の学び舎へ、少女のありふれた日々が、今日から始まるのだ。

ナガラ・リオは――

「どうするの？　これから……」

「ああ」

少女の素朴な疑問に、ぼんやりとリオが応じる。

「特にこれと言って、決めてはいないんだけどよ。」

とりあえず、西、いや、南、かな……？

季節柄、ちょうど良いだろう」

「……………」

「ん、どうかしたか、ヒライ？」

ヒライ・ユイの瓶底眼鏡が、リオの旅装を舐めるように見つめる。

相変わらず、年季の入った空手胴着に、学生服を肩で羽織っただけの時代錯誤な出で立ち。

足元には馴染みの下駄。

そして右肩には、何故か荷物袋を吊るした松葉杖を担いでいる。

「その、松葉杖」

「うん？」

「……アムロ・レンに返しに行くの？」

「うえっ!？」

「だってナガラ、何だか嬉しそうだから」

どきり、と心臓が飛び出す。

バカな。

どう言う洞察力だ？

本当はヒライもニュータイプだったのか？

それともやはりコイツの家には、本物のゼロ・システムがあるのか。いや、そんな事より、自分はそんなにも締まりのない面をしていたのか。

あの狂犬を相手に。

ヒライ・ユイの事を、世界一愛らしく想っている自分が……。

バカな！

「た、旅の道中でよ、篤人先生の所には、寄ろうと思っっているからよ……。

そんな時、物のついでに、置いて来ようと思ってる、だけ、だ」

「別に、いいのに」

「良くねえッ!!」

ナガラ・リオがムキになって叫ぶ。

それを見たヒライが、珍しくも柔らかくはにかむ。

たまらなく可愛らしい笑顔だった。

自分が情けなかった。

「ナガラ」

そつ、とヒライが名前を呼んで、再び小さなトランクを、胸の前に差し出す。

「この、プロトリーオー、本当は、あんまり長く遊べない」

「……？　そう、なのか？」

「このリーオーは、今のナガラに合わせて、タイトな調整を施した機体だから。

ナガラの背が伸びて、体重が増えて……、

それで新しい技を加える度に、どんどんあなたの肉体からかけ離れていく。

どれだけ大事に機体を使い込んでいっても、いずれ、ナガラの空手には合わなくなる」

「ああ、そうか、そうだよな」

「うん、でも、だからこそ私がいる。」

ナガラのリーオーを直すのは、私」

「……………」

「もしも、機体が壊れたら……。」

あるいは、今の性能に物足りないと感じたら、その時は……。」

「帰ってくるよ、必ず」

短い答えと共に、ヒライの小さな手の上に、みちみちと膨らんだ空手屋の左手を重ねる。

「リーオーと、一緒に」

「うん」

二人、リーオーの入ったトランクを挟んで、じつ、と向かい合っていた。

重ね合った掌のぬくもりを離すのが惜しくて、それで……。」

「おはようございます！」

「ひゅ〜ひゅ〜」

「おねーちゃんたちなにしてるの？」

「うおわ!？」

——ガキどもの集団登校に出くわし、慌ててトランクをひったくった。

「そ、それじゃ！俺、もう行くからよ」

「ん……」

「お前も、その、元気でやれよ」

「——ナガラ！」

「えっ?」

ガツガツ、と言う切火の音が、背後から聞こえた。

驚き振り向いた視線の先で、小さめの火打ち石を手にしたヒライが、恥ずかしそうに笑った。

「何だか、こうなる気がしてたから……」

そう呟いて、いかにも上等なブレザーのポケットに、火打ち石を二つ、しまった。

「行って、らっしやい」

「……ああ、行って来ます」

ナガラ・リオも笑って、今度こそくると背を向けた。

——カラン、コロロン。

下駄が鳴る。

大都会、西東京の外れに、時代遅れの乾いた下駄の音が響く。

カラン、コロロンと。

遠ざかっていく下駄の行く先を、少女はいつまでも見つめ続けていた。

風が吹いていた。

季節の変わりを告げる、涼やかな秋の風だった。

薄の香を孕んだ、乾いた風だった。

——カラン、コロロン。

まだ、下駄の音は聞こえていた。

少女の耳に。

カラン、コロロン。

風が吹いていた。

風が吹いていた。

風が吹いていた。

カラン、コロロン。

カラン……。

エピローグ

俺たちのガンブラ

鐘が鳴る。

西東京の空に、まるで荘厳なチャペルのように、場違いにクラシックな鐘の音が響き渡る。

例えば、結婚式のような催しが行われている、と言うではない。

周辺の住民にとっては、それは既に日常の一部となった音色であった。

今日の授業が終わるのだ。

東京都立三区王堤女学院。

明治期の文明開化と女性の社会進出と言うニーズの中、知性と教養を兼ね備えた真の大和撫子の育成を理念に、北欧から一流の教育者たちを招いて発足した、中高一貫教育の伝統校である。

自然、大企業の令嬢や名家の子女と言った、やんごとなき婦女子の集う場となり、周囲の学校とは毛色の異なる、独自の校風を形成している。

とは言え、世は既に二十一世紀。

壮麗な淑女たちの世界にも、少しずつ変革の輪が広がり始めていた。

授業の終わりを告げる鐘が鳴る。

明日の社交界のヒロイン、とは言え今は、年頃の中学生に過ぎない少女たちの事。

広い教室の空気が、ふつ、と緩み、たちまちそこかしこに雑談の華が咲き始める。

華やかなる世界の片隅で、少女が一人、とんとん、と教科書の整頓にかかる。

最上級生のピンクのタイを付けているにしては、やや背の低い、黒髪のおさげの少女。

地味な外見の中、表情を気取らせぬ瓶底眼鏡だけが、少女を彩る唯一のアクセサリーであった。

ヒライ・ユイであった。

時が巡り、少女も十五歳、中等部の最上級生となっていた。

——と、

「ヒイロ先輩！」

不意に声をかけられ、鞆を開きかけていた左手が止まる。

澆刺とした明るい声に、雑談が止み、教室中の視線がヒライたちへと向けられた。

顔を上げ、正面の声の主と向き合う

目の前に居たのは、亜麻色のセミロングの髪の少女であった。

明るい色合いのおかつぱ頭から、漫画のようなアホ毛が一筋、ぴよんと跳ねていた。

くりんとした丸い瞳に、ヒライと同程度のちんまりとした背丈が、どこか小動物を思わせる。

タイの色はライトブルー、ヒライたち三年生の一つ下に当たる。

その少女が、淡いピンクの封筒片手に、にひっ、と笑った。

まるでやんちゃな少年のような、無邪気な笑顔であった。

「ヒイロせんぱいっ」

もう一度、少女がその名を呼んで、手にした封筒を差し出してきた。ヒライが無言で受け取る。

じっ、と見つめた封筒の上には「しよたいじょう」と、今時の女の子らしい丸っこい文字が躍っていた。

「バトル部の部室への招待状っす。

放課後の部活動、当然、来て下さるっすよね？」

「……………」

にひっ、と、もう一度少女が白い歯を見せる。

パチパチパチ、と。

期せずして周囲から巻き起こった温かい拍手が、二人を包み込む。

ふう、と小さくため息を吐くと、ヒライは手にした招待状を目の前にかざし……。

「……………え？」

——ビリイツ、とばかりに、勢い良く引き裂いた。

ビュオオオ……

何処からともなく室内に吹き込んできた風が、千切れた紙片を彼方へと運んで行く。

しん、と教室に静寂が満ちる。

亜麻色の髪の少女は、飛び去って行く招待状の欠片を、呆然と見詰めて続けていた。

その眼尻に、じわり、と涙が溢れる。

「ひ、ひどいつす……」

「酷くない。」

三区王堤にガン普拉バトル部は無い。

あるのは同好会だけ、部室なんて、あるワケない」

「そりゃあそうすけど、それを言っちゃ身も蓋も無いっす。

先輩、早いとこ超級堂に行くっす。

タニアもめいちゃんも、今頃向こうで待ってるっすよ」

ヒライの的確な突っ込みに、振り返った少女がケロリと応じる。

それを合図に教室の空気が溶け、室内に和気藹藹とした放課後が戻ってきた。

後背にいたクラスメートの一人が、鞆片手に声をかけて来る。

「それではごきげんよう、ヒイロ先輩」

「ごきげんよう」

「同好会、頑張つて下さいましね、ヒイロ先輩」

「頑張る」

「ふふ、マコトちゃんのおもり、ヒイロ先輩も大変ですわね」

「大変」

「大会が決まったら、みんなで応援に行きますわ、ヒイロ先輩」

「ありがとう」

「たまにはお前を殺して差し上げれば宜しいのに」

「ダメ、マコが調子に乗る」

級友たちの挨拶に応じながら、『ヒーロ先輩』ことヒライが、帰りの支度を進める。

一足先に壇上に降りた少女が、背に負った大きめの鞆を急かすようにピコピコと振るう。

「せんばあい！早く行くつす」

こくり、と小さく頷いて、ヒライも鞆を手にして立ち上がった。

少女たちの、変わらぬ日常の光景であった。

「ヒーロ先輩！自分にガンプラの作り方を教えてほしいつす!!」

三区王堤2年C組、エビナ・マコト（海老名真実）が、そうやってヒライたちの教室に殴り込んで来たのは、冬休みも明けたばかりの一月半ばの事であった。

珍しい来客に、たちまち級友の視線がヒライへと注がれた。

なかなかクラスに馴染めず、壁のしみのように存在を殺して授業を受けていた時期の話である。

「人違い、私はヒライ」

「だって、だって……！これッ!!」

居心地の悪さを眼鏡の奥に隠し、嫌々ながら答えたヒライに対し、亜麻色のアホ毛の少女は、鞆の中から一冊の雑誌を取り出して叫んだ。

『月刊アストナージグレート』二月号。

机の上に広げられたのは、ガンプラの紹介や改造テクニクの記事が掲載された、何の変哲も無いホビー誌であった。

パラパラとページをめくるマコトの指が、誌面の中ほどで不意に止まった。

そこに書かれていたのは、年末年始に各地で行われた、ガンプラバ

トル大会の特集であった。

瞬間、ピクリ、と、瓶底眼鏡の上からでも分かるくらい、ヒライの眉が露骨に歪んだ。

「――はぐれ悪魔女子コンビ結成!? アムロ&ヒロが横須賀ガンブラフェスに殴り込み!!」

見開きの誌面には、いかにも大袈裟な見出しがデカデカと踊っていた。

それを目にしたヒライの脳裏には、昨年末の忌まわしき記憶がありありと甦っていた。

『――メリークリスマス、召集じゃヒライ』

冬休み初日。

ハイツ『ビッグ・ラング』603号室に突如現れた赤い悪魔は、「ポケ戦↓エンドレスワルツ」のリレー明けで寝ぼけ眼のヒライをサイドカーに押し込み、そのまま粉雪の舞う街並みに消えた。

『プロのガンプリビルダーになりたいのであろう?』

感謝せいヒライ。

このアムロ・レンが、うぬのクライアント第一号になってやろうと言おうのじゃ』

人気の無いサービスエリアで年越し蕎麦をすすりながら、そう言つて、赤い悪魔が嗤った。

結局、ヒライは冬休みの間中、日本全国津々浦々を巡り、アムロ・レンの大会荒らしの片棒を担ぐ羽目になったのであった……。

成程。

改めてまじまじと誌面を凝視する。

見開きの2/3を占拠するのは「勝ちちゃったもんね〜」と言わんばかりのドヤ顔ダブルピースを披露する悪魔のアホ面。

そしてその片隅には、NTTアレックスの補修を粛々と続ける少

女の姿。

表情の読めぬ瓶底眼鏡に、二本線の入った小豆色のジャージ。その胸元にはでかでかと『三区王堤 2—B ヒイロ』の刺繍――。

「……………」

溜息が、漏れた。

バツチリ撮られていた。

しかも、絶妙に面白おかしくフォトショップ加工されていた。たまたぬ黒歴史であった。

「――『ヒイロ先輩』、ガン普拉バトルをなさるんですの？」

「えっ？」

不意に頭上から声をかけられ、驚いたヒライが顔を上げた。

見ると、見覚えのあるクラスメイトの一人が、興味深げにこちらを覗き込んでいた。

退屈を持て余したお嬢様学校の一コマである。

本当は誰もが、自分たちとは毛色の異なる瓶底眼鏡の少女に興味津津であったのだ。

その行動を皮切りに、たちまち、やんごとなき令嬢の群れがヒライの机に群がって来た。

「あら本当、はつきり写ってますわ、ヒイロ先輩」

「大会優勝ですの？ ヒイロ先輩ってお強いんですね」

「まあ！ ヒイロ先輩ったら、アムロお姉さまとお知り合いですの？」

「本当！ ああ、お姉さまのサデイスティックな瞳、堪りませんわ――！」

「ヒイロ先輩、やつぱり材料は現地調達なさるの？」

「素敵ですわ、私も殺していただきたくいですわ」

「せんぱい、そんな事より、自分とバトルしてほしいっすー！」

突如人生で初めて訪れたモチ期。

圧倒的女子力を前に、成す術も無く、ヒライはもみくちやにされた。そうして思った。

今日から自分は、このキャラになるのだ、と。

『ヒイロ先輩』

ヒライ・ユイが、生まれて初めてもらったあだ名であった。

ちらちらと、桜吹雪が舞っていた。

満開の桜が舞い散る河川敷を、後輩のマコトと二人、並んで歩いていた。

彼方の陸橋を叩いて、貨物列車が通り過ぎて行く。

キラキラと太陽の光を反射して、いつかのスポットライトのように水面が煌めく。

四月。

気が付いたら、季節は一巡していた。

一年前のヒライは、こんな上等な制服は身に着けていなかった。

カーデイガンを羽織っただけのジャージ姿で、口下手な下駄履きの少年の後ろ姿を、俯きながら付いて回った。

今は、同じ制服を着た友人と一緒に。

たったそれだけの違いなのに、何だか自分が、えらく遠い場所に来たように感じられた。

「ん、たつたつたつたつたつたつた♪

たかたんつ！ たーつた たーたた——←

たかたんつた たーつた たーつた——→

たーたか たーたか たーたか たつた たーたか たーたか

たーたか たつた

たかたんつ！ たーたたかたんつ！ たーた

たんたかたんたかた~~~~~

~~~~~つ!!」

そのマコトはと言えば、何故か勝利者たちの挽歌を、伴奏から全力で口ずさんでいた。

ブレザーの前ボタンを全開にし、真っ赤なスニーカーでロングスカートを蹴飛ばして。

後ろ唾に被った野球帽の隙間から、トレードマークのアホ毛がぴよ

こんと揺れる。

愛嬌ある恰好に、思わず苦笑がこぼれる。

ヒライ自身、人の事を言えたキャラでは無いが、それでもよくぞ、あの  
上流階級の令嬢が集う学院に、こんな変な奴が紛れ込んでいたもの  
だと思う。

おかげで通過点に過ぎなかった筈のヒライの学生生活は、おかしな  
方向へと転がり始めていた。

「そっういや先輩、顧問の方はどうっすか？」

引き受けてくれる先生、いそっすか？」

「ん」

マコトからの唐突な話題振りに、ヒライが短く相槌を打つ。

先刻の教室でのやりとりの通り、現在の三区王堤女学院にガンプラ  
バトル部は無い。

あるのは同好会だけ。

部室も部費も無ければ、当然、顧問もおらず、放課後は校外のGP  
ベースを使って自主トレに励んでいるのが現状である。

会員数は、現時点で四名。

学生の公式戦が三対三のチーム戦であるから、バトル音痴のヒライ  
が外れたとしても、ギリギリ戦えるだけの頭数は揃っているワケだ。

そのガンプラ女子たちの夢の舞台。

第十四回全日本ガンプラバトル選手権・西東京予選は、GW明けの  
開幕が予定されている。

当然、正式な部ではない同好会員たちには縁の無い世界である。

そこで、誰か適当な教師に形式だけでも顧問をお願いして、申請上、  
部活動としての体裁を整えようと言うのが二人の目論見であった。

「……アンザイ女史に、お願いしようかと思ってる」

「んげげ!? 『淑女アン』っすか? そりゃ無謀っす、先輩!」

ヒライの呟きに、たちまちマコトが狼狽の色を露わにする。

さもありません。

三区王堤女学院の名物教師、アンザイ女史。

キツチリしたスーツ姿にトレードマークの三角眼鏡が冴える、泣く

子も黙る学年主任である。

五ヶ国語を流暢に話すと言う学院きつてのインテリでありながら、アラサーで伝統校の要職を任される教育手腕は只事では無い。

規律に厳しく、絶峰鋭く切り込んでくる姿は、まさしく現在の生けるレディ・アン。

学院において、彼女に逆らえる人間などいない。

マコトの動揺も無理は無い。

ガン普拉同好会などと言うちやちな団体は、いつか彼女の眼鏡に止まって、旧連邦軍のように無残に解体されてしまうのでは無いかと、少女は内心、戦々恐々とした日々を過ごしていたのだ。

捕食者を前にした小動物のようにふるふるすると震え始めたマコトに、ヒライが一つ溜息を吐く。

「心配し過ぎ。」

アンザイ女史は、あれで理解力のある人」

「むむむ、なんすかソレ？」

眼鏡っ娘どうしにしか分からないシンパシーっすか？」

ある種の確信を持って、ヒライが断言する。

確かにアンザイ女史は厳格な教育者であったが、一方で、復学を目指すヒライ・ユイを親身になって世話してくれたのもまた、彼女であった。

ガン普拉バトルと言う世界は理解出来ずとも、教え子の自主性と情熱には、必ず耳を傾けてくれるハズである。

今一つ、説得に行くのは、彼女が三角眼鏡を外すアフター5であれば、尚更良い。

その辺もレディ・アンらしい、とヒライは思っているのだが、彼女の持つ二面性は、生徒にはあまり知られていない。

「——それよりも今は、バトルの腕を磨く方が大事。」

今の私たちの実力では、大会に参加する意味なんて、無い」

先輩の真剣な一言を受け、エビナ・マコトはにひっと白い歯を見せ、自信満々で胸を叩いた。

「先輩！ どーんとリーンホースにでも乗ったつもりでいてほしいっ

す。

大会まで残り一か月。

自分、『師匠』の下でみっちり修行を積むっすよ」

「……………」

「あゝっ!? 何なんすかその微妙な表情!?

前々から思っていたけど、先輩は師匠に敵し過ぎるっす!」

「そんな事は無い。

私は私なりに、あの人の事をちゃんと認めている。

ただ、納得行かないだけ」

「なんすか、それ?」

「…………急ごう、超級堂に」

質問への回答を切り上げて歩調を早める。

とくん、とヒライの奥で、心臓が小さく震えた。

第十四回、全日本ガン普拉バトル選手権。

かつて、戦う前から完全に捨ててしまった筈の夢の途上に、ヒライ・

ユイはいた。

「…………へんなの」

先に行く先輩の姿を見つめながら、カツン、とマコトが小石を蹴つた。

・

・

駅前のスクランブル交差点より、徒歩十分。

空手道・三雷会館のビルを臨む、くすんだアーケード街の一角に、その店はある。

ホビーショップ『超級堂』

かつては客家系の大物華僑、リー・ユンファが趣味で経営する個人店であり、非公式なガン普拉地下バトルの情報発信源でもあった。

その名物経営者は、昨年、店舗から姿を消した。

今は雇われの店長が一人で切り盛りする、何処にでもある、ありふれた町のプラモ屋であった。

——カラン。

「ハイらっしゃ——、ケツ、何だ、嬢ちゃんたちかい」

「……どうも」

入口のベルが鳴り、一瞬上がりかけた挨拶が虚しく消える。

店内に入ったヒライも、必要最低限の社交辞令でそれに応える。

「うっす！ 師匠、本日もよろしくお願いしまっす！」

「あくあく、分かったからよ、早いトコ下に行ってやれ。

一年コどもはとづくに始めてんぞ」

「っす！」

威勢良く両腕をクロスさせるマコトに対し、『師匠』と呼ばれた褐色のエプロンが、面倒臭げに手をヒラヒラさせる。

ちらりと横目に瞬く金眼、銀眼。

「……ケツ」

ブラジリアン霸王流皆伝、ジョージ・クルス（来栖）

現在のホビーショップ超級堂の、代理店長代理であった。

「……っと、ちよつと待ちな、嬢ちゃん」

クルスに呼び止められ、階下に下りようとしていたヒライの足が、ふと止まる。

「代理店長からだ」

そう言って差し出された封筒を、無言で開ける。

出て来たのは二枚組の入場券であった。

印刷には『二十年来の因縁爆発ツ!! デスペラード vs 愚零斗悔死導

4. 17 花巻市民会館』

と、真つ赤な文字が躍っていた。

「今度の興業、岩手だどよ。

週末、北の方に行くって言ってただろ？

帰りにでも寄ってやったらどうだ？」

「……アムロに相談してみる」

そう言ってペこりと一礼し、ヒライもすぐにマコトの後を追った。



——半年ほど前。

どこぞに雲隠れしてしまったり・ユンファに代わり、超級堂の経営を引き継いだのは、彼の片腕、エイカ・キミコであった。

が、やはりと言うべきか、彼女の真面目な勤務態度は、半月も続かなかった。

元々、三度の飯より格闘技が好きで、移り気で情熱的な25歳の話である。

商才はあっても、ひと所に腰を据えていられるタマではない。

結局キミコは、静養明けのゴウダの道場で意気投合し、そのまま彼のマネージャーとして全国巡業に出ってしまった。

で、そのキミコが後任、代理店長の代理として連れて来たのが、観光ビザが切れてあわや強制送還の憂き目に遭っていたジョージ来栖、と言うワケだ。

実際に超級堂のエプロンを着け、レジに立つクルスの姿を見た時、どんな判断だ、と首を傾げたヒライであったが、それも杞憂であった。

このジョージ来栖と言う男。

口は悪いが、思いの他、子供たちの面倒見が良い。

彼が手がけるガンプラ同様、勤務態度も神経質なほどにマメだ。

ガンプラに対する造詣も深く、ビルダーとしてもファイターとしても抜群の腕と来た。

適材適所であった。

何でそれが、本職の格闘技ではままたまらないのか、と切に思う。

本人は日本で道場を開く野心を抱いているようだが、現在、内弟子はわずかに一名。

正直、このままプラモ屋を続ける方が、彼の性分には合っているとヒライは思っていた……。

・  
・  
・

超級堂の階段を下りると、そこは戦場であった。

ドワオズワオと、仮初の空が爆音に震えていた。

ありつたけのミサイルが廃墟の街に降り注ぎ、GPベースが赤く燃えていた。

爆風を裂いて、一つの機影が前線へと飛び出した。

一切の感情を映さぬ、テレビモニターのような頭部が、かつてのリーオーを思わせる。

だが、そのリーオーに比して、黒く、太く、厳ついシルエットを有した機体であった。

OZ-03MD『ビルゴII』

リーオーを遥かに凌ぐ基本性能。

最強の矛たるメガビーム砲と、最強の盾たるプラネイトディフェンサー。

そしてACの功罪、モビルドールシステムを積んだ、ガンダムにおける量産機の完成型である。

そのビルゴが、虎の子のビーム砲を打ち捨て唖喊していた。

トールギスの同型と言われる、大型ブラスターを全開に燃やしていた。

金城鉄壁たるPDを、何故か自分の背後に展開していた。

敵機の突出を見て取ったハイモックが、マシンガンを構えて迎え撃つ。

その姿を見てもビルゴは軌道を変えず、なお極端な前傾をとって機体を加速させていく。

弾幕の雨が、ビルゴの肩を、胸甲を穿って突き刺さる。

それでも彼女は止まらなかった。

回避行動では無く、防御姿勢の堅持によって、装甲の厚い部分で攻撃を受け止める。

ACにおける、最もポピュラーでエレガントな防御方法であった。

「Si」

地面から擦り挙げるように伸びたビームサーベルの一闪が、マシンガンを縦に切り裂いた。

痛烈な斬撃に、たまらずハイモックが機銃を投げ捨て、上空に逃れ

ようとバーニアを噴かした。

瞬間、一直線に走る光弾が、そのドテツ腹に風穴を開けた！

中空で、一際大きな光球が爆裂する。

正確無比な支援砲撃、ではない。

現に、流星群のようにしつちやかめつちやかに撃ち込まれるビームの乱れ撃ちは、僚機の筈のビルゴまでも脅かしているではないか。

一条の光弾が、バシユウ、と音を立て、見えざる障壁にでも阻まれたかのように雲散する。

そのためのプラネイトディフェンサーであった。

後衛のハイモックが、ビーム砲の乱射から逃られるように、ビルゴの正面へと飛び出してきた。

大上段に構えたヒートサーベルが、獲物目がけて赤熱化する。

慌てず騒がず、ビルゴは左半身を取ってピタリと構え、かざしたビームサーベルを、敵機の鼻先で指揮棒のように緩やかに振るう。

「un」

両機が同時に動いた。

真上から真紅の軌跡を描くサーベルに対し、ビルゴの選択は、薙ぎ。

大業物に真っ向から切り結ぶ愚を避け、刃の峰を光刃で横一閃に叩いた。

「deux」

肘が返る、合わせて、ビルゴの手首が回る。

光刃が蛇のようにならぬりながらサーベルに絡み付き、必殺の軌道が捻じれて逸れる。

さっ、とビルゴが左腕を返すと、まるで手品のように、肉厚の刃が上空へと跳ね上がった。

全てが肘口から先だけの動作であった。

「trois」

一步、全身を躍動させるように、鋭く深くビルゴが踏み込んだ。

禪身の刺突は丸腰の敵機を違わず貫き、痙攣するハイモックの目から輝きが消えていく。

一拍遅れ、ズン、と真紅の刃が大地を揺らした。

『Battle End』

機械的なアナウンスと共に空間が解け、超級堂に平穏な午後が戻ってくる。

ふっ、と緊張が抜け、地下室に歓声が上がった。

「か、かてた……いっ、やったよニアちゃん！」

ダボダボの制服を翻し、ちっぽけなオレンジ髪の少女が、犬耳のよくなツインテールをぴよこん、ぴよこんと揺すって笑った。

「はい、勝てました〜」

『ニアちゃん』と呼ばれたブロンド髪の乙女が、間伸びした口調でそれに応えた。

「うおお！ やったつすか!？」

めいちゃんもタニアもすんごいつす!」

「あ！ 先輩だあ!」

「うふふ、やりましたわ」

興奮したマコトが辛抱堪らず二人に飛びつく。

女三人寄れば何とやら。

たちまちGPベースを囲んで、その場に黄色い花が咲く。

歓声から取り残され、ヒライが一人、呆然と少女たちの輪を見つめる。

エライモノを見た。

これほどの才能であつたか、と思う。

基本的な武装とは言え、それでも幼少のヒライに一生消えぬトラウマを植え付けてくれたハイモック先生である。

それを、バトルを始めて一週間かそこらの少女たちが撃破してしまふとは、正直、先輩として立つ瀬が無かった。

「ヒイロ先輩も、見て下さいました?」

「うん、見た……」

のほほんとした『ニアちゃん』の口調に、思わずオウム返しにヒライが応える。

「へへへへ、これなら公式戦でも勝てるかな？」

「漫心しては、ダメ。」

AIの操作と対人戦では、纏う空気が何もかも違う」

じゃれつく子犬のような『めいちゃん』の仕草を、敢えてヒライが厳しく諫める。

「ええ、だつてえ！ ヒイロ先輩も倒せない相手だつて言つてたのに……」

「めいちゃん！ 先輩は製作専門つす、バトルの腕なんて必要ないんす」

「ふふふ、ヒイロ先輩なら、素敵なハツパさんになれますわ〜」  
「……………」

——立つ瀬が、無かった。

クシナダ・メイ（櫛灘めい）とタニア・ドロレスヘイズ。

黄色のタイも目に眩しい、ピツカピカの三区王堤女学院新生である。

犬耳のようなオレンジのツインテールが特徴的なのが、めいちゃんこと、クシナダ・メイ。

先ほどのバトルにおいてサーペントを駆り、後方からビーム砲を滅多撃ちにしていた子である。

櫛灘財閥の令嬢の母と、スウェーデン旧貴族出身の父の間に生まれたハーフで、ヒライやマコトとは血統の違う、真正正銘のお嬢様である。

父親は北欧政財界の若きカリスマとして、将来を嘱望されるほどの英才であったが、歯周病に苦しむ叔父の姿を見て「歯医者になりたい」と日本への留学を決意。

今日では治療に当たった99822人の全ての名前とカルテを記憶しているとまで言われる、歯科医学会の一大権威である。

生憎と本人は、小学生と間違えられるちんちくりんな女の子で、そ

の為かバトルの腕も、ヒライに毛の生えた程度でしかない。

だが、チーム戦の後衛に本当に必要なのは、操縦技術ではない。

彼我の戦力差と戦局を見極め、最善の指揮を執れるコマンドーとしての才能である。

そう言う意味で彼女は、父親の資質を良く継いでいた。

僚機を巻き添えにしかねない実弾を開幕で撃ち尽くし、相方のビーム砲を抜け目なく拾い直す。

自身の役目とPDの特性を知悉していなければ、到底できない作戦である。

前衛に偏った三女ガンプラ同好会においては、実に貴重な人材であった。

その相方、タニア・ドロレスヘイズとは言えば、こちらはスウェーデンからの留学生。

本来は砲撃戦が持ち味のビルゴで、鮮やかなサーベル捌きを披露していた方の少女である。

現在は従兄妹であるめいちゃんの邸宅から、揃って学院に通っている。

スレンダーなモデル体型とブロンドのロングヘアが自慢で、本当にコイツは去年まで小学生だったのかと疑いたくもなるのだが、二人はこれで大の中良しなのだ。

フェンシング女子北欧ジュニアチャンピオン、などと言う物騒な肩書とは裏腹に、本人はいたってマイペースで、お茶とお琴と生け花が趣味の、逆輸入大和撫子である。

そんな、普段はおっとりとした彼女であるが、バトルになると突然、変わる。

癒しポイントの太眉が、皇帝ペンギンのように鋭く跳ね上がり、強気の虫がたちまち顔を出す。

強引でも愚直でもなく、果断。

北風によって作られた、気骨溢れる強かなヴァイキングの血脈なのだ。

本来ならヒライの人生と交わる筈も無い令嬢二人。  
だが、流石は物怖じと遠慮の無さに定評のある、エビナ・マコトである。

新入生歓迎会の席で、戸惑う二人を強引にガンプラ同好会まで掻つ攫つてきてしまった。

箸とフルーレより重たい物を持った事も無さそうな少女たち。

入会当時、当然のように二人とも、ガンプラバトルは初体験であった。

その時、とりあえずの入門用機体と言う事で、ヒライが自作のコレクションから貸し与えたのが、ACを代表する高級量産機、ビルゴIIとサーペントであった。

単なるヒライの趣味、と言う訳では無い。

格闘戦や変形と言った難しい操作を必要とせず、相互に近い距離で連携が取れ、しかもそれぞれに異なる役目を持った機体を選び抜いた結果、自然とその組み合わせになったのだ。

断じてヒライの趣味では無い。

だが、結果はご覧の有様である。

少女達はヒライのお節介を容易く飛び越え、互いの個性を活かした戦術すら構築しつつあった。

そのタニアであるが、彼女の白兵戦のセンスには、ヒライも早い段階で気が付いていた。

彼女については、実はメリクリウスをベースにした専用機を、目下製作中である。

使いもしないメガビーム砲など必要無い。

この乗り換えがうまく嵌れば、彼女は同好会を支える最強の盾となつてくれるに違いあるまい。

一方、めいちゃんのポテンシャルについては、未だにヒライも計りかねていた。

強いて言うなら、多彩な火器管制が必要なサーペントは、彼女向きでは無いかもしれない。

状況判断の確かさに期待するならば、もつと操作がシンプルな機体。

それこそ砲戦一択のヴァイエイト辺りを薦めてみるのも良いだろう。

そして、もう一人。

三女ガンプラ同好会におけるエース？ エビナ・マコトはと言えば――。

「ケツ、やってるか、ガキンちよども」

「ああ、師匠！ お待ち申していたっす！」

階上から響いてきた声に、奔放なマコトの瞳が、ぱっ、と華やぐ。

恋する乙女、と言うより、新宿でマスター・アジアと再会した時のドモンの瞳。

圧倒的リスペクト。

色々と複雑な気持ちたちがヒライの胸中に溢れる。

「ケケ、軽く遊んでやるよ。」

ちよいとばかり、店番、変わってくれや」

「うふふ、それじゃあ、上の方はお任せくださいね」

そう言つて、タニアが壁に掛かっていたフリル付きのエプロンを手取る。

高校級のスタイルを持ったタニアならば、もしもの時に言い訳が立つと言うので、専ら彼女が店番に立つのが超級堂の日常となっていた。

業務に支障が出るだろう、と思いきや、素人ながら懇切丁寧な彼女の接客は概ね好評で、最近はこの時間帯のみ狙ってくる常連も多いと言う。

「よくっし！ 行くっすよボクのスカイラブヴィクトリーシャツコー！」

「……シャツコー小鳥丸」

アナウンスに促され、マコトが手にした機体をベースに据える。

ヒライがぼそりと訂正するも、もちろん聞いていない。



「ブラジリアン霸王流初段、マコト、行っきまゝす、つす！」  
「ケツ、やんぜ、マスター」

霸王流の師弟が並び、口上が終わる。

たちまちバトルフィールドに新たな世界が展開し、二つの機体が風を巻いて飛び出した。

トンネルを抜けると、そこは一面の花吹雪であった。

アーティジブラルタルの空に、艶やかな薄桃色の花卉が舞っていた。

雲一つない青空に、ブウウウン、と言うビームローターの旋回音が響き渡る。

吹き抜けるような蒼穹に溶け込み、ライトブルーの機体がどこまでも飛んで行く。

シャッコー小鳥丸（こがらすまる）、通称『スカイラブヴィクトリーシャッコー』

宇宙戦国時代影の主人公機、ZMT-S12G・シャッコーをベースとした機体である。

「たのも——う、どこっすか——つ、師匠！」  
「イキナリ目立ってんじゃねえ!?!」

鋭いツツコミと同時に、樹木の死角よりビーム小柄が跳んで来た。

土偶器のような猫目を大きく開き、シャッコーが機体を傾け回避に移る。

「うひっ」  
罨であった。

高度を下げた先に、鋼鉄の円盤が旋回しつつ迫っていた。  
輪である。

直撃すれば巨木をも砕くと言う大鋸が、鼠花火のように炸薬を噴出して必殺の牙を剥く。

「ひゃあああ〜」

笑うようにマコトが叫び、左手より、もう一本のビームローターを展開する。

ブウウン、と新たな旋回音が加わって、慣性が止まる。右手に生じていた揚力に、今、水平方向からの新たな応力。たちまち華奢なシャツコーのボディが跳ねる。

空中で一段跳ね上がって、必殺の軌道が空を切る。

「……！」

観戦するヒライの背に、ぞくぞくと戦慄が走る。

これだ！

秘策、ビームローター二刀流。

「ケツ、ちよつとはマシになったのかよ」

マスターエルドラドが、ばさり、と漆黒の両翼を広げる。

じやらり、と鎖が擦れ、小柄が、苦無が、輪が、飛虎が、分銅が、忍びの暗器が顔を出す。

武芸百般。

大会中、苦し紛れにクルスの放った言い訳は、決してブラフでは無かったのだ。

小柄が飛び、輪が廻り、ヒート苦無が爆裂し、銀網が動きを絡め獲る。

「うっひゃ〜」

そして、それらの全てをシャツコーが避ける、避ける、避ける。

細やかな網目を引き裂き、悶えるように身を翻し、二本のローターで大空を自在に跳ね回る。

常人に出来る技ではない。

普通なら目まぐるしく廻る景色に翻弄され、あえなく失速するか、制御不能になる所である。

生まれつきの動体視力と空間認識能力。

それに加えた天性の勘が、あの宙に舞うような奔放な姿勢制御を可能とするのだ。

正しく天衣無縫、スペシヤルの世界。

未だ発展途上の少女、エビナ・マコトにとっての、唯一無二の武器であった。

しかし、それでもなお、戦いはクルスとマスターエルドラドが支配

していた。

確かにマスターの攻撃は一発たりとも当たってはいない。

だが、当のマコトにしても、今はかろうじて避けていると言うだけに過ぎない。

攻勢に転じる事が出来ない。

「くのっ！　くのー！」

苦し紛れに脚部のビームガンを撃ち放つ。

だが、放たれたビームは虚しく地面を抉るに留まる。

さすがにクルスはよく見ている。

シャツコーの体勢を見極め、巧みに樹木に紛れ、常に射角の外へと身を置いている。

そして、追い詰めつつある。

俊敏な若いボクサーが、その実、ベテランの戦略によってコーナーに誘導されるかのように。

出力を大幅に強化した、二本のハイパービームローター。

稼働時間と言う代償は、シャツコーを確実に蝕んでいく。

何とか懐に飛び込みたい。

そんな胸中を焦りを、ブラジリアン霸王流の宗家に読み切られている。

「マコト、上」

「んい!？」

時間差攻撃。

多彩な飛び道具に紛れるように、緩やかに放たれた焙烙玉が、シャツコーの上方で爆裂する。

小柄な機体がたちまち煽られ、地面スレスレでかろうじてバランスをとる。

その眼前に、のたうつ大蛇のように七節棍が伸びる。

「んっ！　お、おお、ほおくくっ!？」

マコトが叫ぶ。

両の踵で踏ん張りながら急制動を駆け、同時に両手を後方に思い切り伸ばす。

双のローターが交錯し、当然、バジン、と爆ぜる。  
すかさずブースターを全開、斜め前方に機体が弾け飛ぶ。  
きりもみながら必殺の棍を避け、マスターとの距離を一息に詰める。

「殺ったア——つす!!」

「殺っちゃいねえッ!」

マスターが思い切り体を畳む。

背翼が切り離され、制御不能となったシャツコー目がけて旋風の刃を刻む。

「んげっ」

ズン、と漆黒の翼が両肩に突き刺さり、機体が止まる、シャツコーが空転する。

クロークを丸ごとパージして、身軽となったマスターが、一直線に体を浴びせる。

上手い。

マウントポジション。

この上なおもマスターは、両脚のビームガンの外に身を置いている。

シャツコーの肩口から先は、既に封じられている。

詰んだ。

「ブラジリアン霸王流を……、ナメてんじゃあねえッ!!」

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

叩いた。

『Battle End』

「んつきゆう〜……」

「……ケツ」

フィールドが消える。

クルスが両手をぷらぷらと振るい、未だ目を回しているマコトの許へ向かう。

ふう、とヒライが溜息を吐きだす。

何度見ても見事な手管であった。

マコトとて、何か大きな過ちを犯したワケでは無い。

単純にクルスの経験が凌駕していただけだ。

しかも、マスターエルドラド最大の武器であろう、粒子変容技術を封印しての完勝である。

「近付きたいのが見え見えなんだよ、チビすけ。」

それに、常に出力全開で戦ってんじゃねえ」

「うす……」

「そのシャッコーの持ち味が活きるのは中間距離だ。」

つかず、離れず、もつと飛び回る蠅みたいに嫌がらせに徹してみる」

「うす、承知したつす、師匠！」

自分、これからは蠅の事を師匠だと思って精進するつす」

「ふざけんじゃねえ！ 蠅か俺はツ!？」

そしてこのアドバイスである。

くだらない漫才はとにかくとして、機体の特性を見る目も確かだ。

つくづく、惜しい。

何でこの男は、武術などに身を置いているのだろうか、と、時々思う。

ガンプラバトルの頂点を志していれば、確実に南米のガンプラ史を塗り替える男になっていただろうに……。

・  
・  
・  
しなびたアーケード街が、薄闇に包まれ始めていた。

PM18:30

練習と打ち合わせを終え、三女ガンプラ同好会も、そろそろ帰路に

着こうかと言う時間である。

常ならば。

「……あれ？ 先輩はまだ帰らないんすか」

「もう少し。」

「ここで、待ち合わせしてる」

「待ち人？ 超級堂でっすか？」

マコトが重ねて問おうとしたその時、コンコン、という足音が階上より響いて来た。

「——カカ、ようヒライ、青春しとるかや」

「三十分、遅刻」

言いながら、ヒライが顔を上げ、来訪者の姿を改めて見つめた。

洗いざらしの黒のTシャツにジーンズと言う、化粧つ気の無い素朴な出で立ち。

170はあるかと言う背丈と、燃えるような鮮やかな赤髪が、見る者を思わず惹き付ける。

髪の毛と同じ色の瞳がくりくり動き、新しい玩具でも見つけたかのように笑みを浮かべる。

アムロ・レンであった。

一年を経ても、変わらぬ悪魔の姿がそこにあった。

「わわわっ!! 待ち人ってアムロさんだったんすか!」

「すごい、すごいよニアちゃん! 本物のアムロお姉さまだよ!」

私、初めて見た!」

「はい、私も、すごくびっくりしました」

超級堂の地下室が、たちまち蜂の巣をつついたような騒ぎとなる。アムロは大変満足そうに眼を細め、傍らにいたマコトの野球帽を、ぼんぽんと叩いた。

「カカ、久しぶりじゃのう、スペシャル。

うぬらの『ヒイロ先輩』悪いが少し借りて行くぞ」

「遠征っすか! また遠征なんすか?」

「さて、それは先輩の仕事ぶりを見せてもらってからの話、じゃの」  
ちらりとアムロが横眼を光らせる。

ヒライは一つ頷いて、GPベース上に小さなトランクケースを開けた。

ガンプラであった。

トランクの中に入っていたのは、白と藍のツートンに仕上げた、戦闘機のようなフォルムを持った機体であった。

ほう、と溜息をついて、マコトが顔を上げる。

「これ……、リ・ガズイツすか、先輩？」

「少し違う。」

本体の方のベースは、NT-1アレックス。

機動力を補うために、チョコバムアーマーの代わりにBWSを用意した」

ヒライの説明を聞きながら、アムロが機体を手に取って、つぶさに見つめる。

「随分と強付く張りな武装じゃのう」

「メガビーム・キャノン、4連装のサブキャノン、それにミサイル・ランチャー。」

加速性能を落とさないレベルで、ギリギリ積んだ。

けれど、それも所詮、行きがけの駄賃」

「ほくう、その心は？」

試すように問いかけるアムロに対し、ヒライの解説が一段と熱を帯びていく。

「この機体の本領は、あくまでも格闘戦。」

BWSの火力、機動力、装甲は、全てそこに至るまでの手段。

強引に相手の懐に飛び込んで外装を脱ぎ捨てる。

このNT-1『スケヒロ』は、あくまで——」

「……おい、ちよつと待て。」

ヒライ、今お前なんちゆうた？」

「……？ NT-1、助広。」

名前の由来は江戸時代の刀工、津田越前守助広で、虎徹と並び称された西方の——」

「却下じゃ却下！ フザけんなよヒライ・ユイ！」

もうちよつとマシな名前を考えんかい」

「……NT1、国広？」

「刀から離れんかい!？」

「先輩、大丈夫つす、自分がかつちよいい名前を考えてあげるつす!」

「お前もやめい! いちいちスペシャルとかVとかつけんなや!」

突然剣幕を露わにしたアムロに対し、きよとん、とヒライが首を傾げる。

ワケが分からなかった。

『彼』だったならきつと、少年のような瞳で興奮してくれる場面だろうに……。

「やつかましいぞー!」

アムロでめえ、表のデコトラ何とかしろツ!

「ご近所様に迷惑だろうが!!」

ずんずんと足音を鳴らし、クルスが再び階下へと降りてくる。

アムロはしばし、はあはあと大きく息を荒げていたが、その内、瞳に邪悪な色を宿して、にい、と嗤った。

「……よう、良い所に来たのう、ジョージさんよう。

ちいっとばかし、試し斬り、させてくれんかの」

「なんだ、バトルか？」

ケツ、生憎と俺は、お前と違ってヒマじゃねえんだ。

そこいらのガキンちよ共にでも遊んでもらえや」

「あ、うん、まあその方がええかものう。

ガチぴよんと違って、わしはあんまり優しくないからの」  
「……………」

ぷつん、と、何かの切れる音がした。

クルスはつかつかと対面に進むと、愛用のマスターを無言でベースにおいた。

「いいぜ、殺ってやんよ、このアマ。

店番代わってくれや、嬢ちゃん」

「カカ! ええのう、ええのう。

リアルで戦つとる時のうぬよりも、百万倍はプレッシャーを感じる



わい」

「やかましい！ 早えトコ準備しやがれ。

その卸したてのり・ガズイ、三十秒でスクラップにしてやんよ！」

「うっひょく、師匠とアムロさんがやるんすか!？」

「すごいよニアちゃん！ アムロお姉さまの生バトルだよ！」

「うふふ、お二人とも、頑張つて下さいねく」

「……スクラップは困る、C設定」

超級堂の地下室が、今、時ならぬ熱狂に燃えていた。

ヒライは一つ溜息を吐いて、いそいそとエプロンの支度にかかった。

・

水平線の彼方が、僅かに赤く燃えていた。

薄闇の空が、少しずつ、朝の光に染まりつつあった。

海岸線の闇を裂いて、トラックのヘッドライトが駆け抜けて行った。

『女一代夢幻舞』

色取り取りの電飾に彩られ、艶やかな天女が笑っていた。

「……………」

背中を伝う振動とマフラーの音に、ヒライ・ユイはゆっくりと瞳を明けた。

車上より臨む海と空。

群青色の世界の中で、赤く染まった水平線が、堪らなく美しく感じられた。

「起きたんかい、ヒライ」

真横からの声に、ちらりとヒライが首を向けた。

声の主であるアムロは、ハンドルを片手に、ただ視線を真っ直ぐ国道へと向けていた。

「今、どの辺？」

「ようやくと函館を抜けた所じゃ。」

うぬに活躍してもらおうんは昼過ぎよ、まだ寝とけ」

「……眠れない」

「そうかい」

言葉少なにアムロが応える。

それっきり、二人はしばらく無言であった。

朝焼けの海岸線の中、ただ、エンジンの音だけが聞こえていた。

ヒライはただ、移りゆく海の色と、アムロの横顔を呆然と見ていた。

この悪魔のような女でも、言葉を失う時がある。

アムロの長旅に付き合うようになって、初めて知った一面であった。

この沈黙が、ヒライは嫌いでは無かった。

何をするでも無く、傍らに居る。

それだけで、一年前の日々が戻ってきたかのように感じられて、ひどく安心した。

「——時にヒライ、コンテストの方はどうじゃ？」

どれほどの時間、走り続けていたのであるうか？

ぽつり、とアムロが口を開いた。

今一つ、意味の分からない言葉であった。

「アーティスティック・ガンプラ・コンテスト……」

ガンプラビルダーにとつての、プロへの登竜門よ。

部活ごっこにうつつを抜かしとる場合では無いぞ」

「ああ……」

改めて補足を受け、しかし、どう答えて良いかも分からぬまま曖昧に返す。

新学期以来、ヒライは後輩の特訓と選手権への手続きに奔走し、コンテストのコの字も覚えてはいなかった。

「ヒライ、うぬの作るガンプラにや、はつきり言つて華が無い」

「——！」

淡々と、しかしおそろしく抜け抜けとアムロが言う。

「プロのビルダーって言うのは、言ってみればアイドルよ。」

機体自体に見る者を羨ましがらせるようなステータスが無きや、手

に取ってもくれんわい。

折角の女流だつちゆうののに、とんと化粧もした事も無いようなそのツラ。

その上、機体にまで華が無いんじや、一体誰が使ってみたいって思うかよ」

「化粧については、アムロだって……」

「話の腰を折るなや。」

天才が道楽でやつとるだけのわしと、真剣にプロで食っていきたいうぬが比較になるかよ？」

アムロの剣幕に、おもわずぐつ、と反論が止まる。

彼女の言う通りであった。

相変わらずの傲岸不遜な物言いであるが、珍しくも彼女が正論を口にしていた。

同時にヒライは、アムロ・レンの苛立ちにも気が付いた。

そして、それはきつと、ヒライに対しての苛立ちではないのだろう。

「コウサカ・ユウマを倒せ、サカイ・ミナトを倒せ。」

それで世界は変わるわい。

中身なんぞ、世間は気にも留めん。

蝶よ花よと、さぞやうぬを持って囃してくれる事じやろうよ」

「……………」

アムロ・レンと言う女。

ともすれば傲慢で攻撃的な面ばかりが目に残るが、既にヒライは気が付いている。

この女の本質は、ツンデレである。

本物のツンデレと付き合おうと思うならば、その言葉の裏に、常に思考を回さねばならない。

どれほど罵倒を並べようとも、現実として、アムロ・レンは使い続けている。

ヒライ・ユイの機体を。

華が無いと言うだけで、誰も手に取ろうとしてくれないヒライの機体を。

その事実に対して苛立っている。

そこに気が付いていなければ、こうして北海道までついて来たりはしない。

だが……。

「……両方やる、選手権もコンテストも。」

私になりたいのは、芸術家じゃなくて職人だから。

「実戦に耐え得る性能を見せつける事が出来なければ、何も意味は無い」

「言いよるのう、同好会風情が。」

聖鳳、宮里、聖オデツサ、常冬、成練……。

強豪揃いの西東京ブロックの大会で、素人集団に何が出来るよ」  
「勝てる。」

マコも、タニアも、めいちゃんも。

それぞれに経験の差を覆せるだけの個性を持っている。

もしも試合で遅れを取る事があれば、それは彼女たちの力を引き出せないビルダーの責任」

今度はヒライも退かず、アムロに対し、真っ向から啖呵を切った。  
言いきった、その言葉に偽りは無い。

エビナ・マコトと出会い、今日まで続けて来た同好会の日々。

失った筈の夢の続きを見ているようで、本当に楽しかった。

だからこそ今のまま、夢のまままで終わらせたくは無い。

クルスの厚意に甘え、超級堂で続けている同好会ではあるが、この時間は永遠ではない。

部室が欲しい。

正式な部活動として、ガンプラに興味のある女子が集まって、めいめに笑い合う事の出来る場所が、あの学院の片隅にほしい。

そして、それは決して夢では無い筈だ。

アムロの言う通り、強豪のひしめき合う西東京大会。

そこで結果を残す事が出来れば、彼女たちの実力は、正しく熱意として世間に伝わる筈なのだ。

「……んで、その戦いに、リーオーは無くて良いのかの？」

「えっ?」

「作ってやれば良いではないか?」

うぬの考えた最強のリーオーを、あのスペシャルな二年コにでもアムロからの思わぬ言葉に、思わず戸惑いが漏れる。

逡巡し、しかし、結局はふるふると首を横に振るった。

「必要ない。」

リーオーは特別な機体、だけど、勝つための機体ではない。

最強のリーオー、それはきつと、突き詰めれば単なるツールギス

「カカ、殺人的な加速も無いしの」

「あの子たちには、もつと相応しいだろう機体が、他にある。」

そこにリーオーを押し付けるのは、私の自己満足、プロの仕事じゃない」

「……………」

「私が作るリーオーは、この世界にひとつだけ。」

まだ、そのリーオーは帰って来ない。

だから、あの人が遊べなくなつて帰ってくるまで、私は待つ」

ヒライ・ユイの宣言を、アムロはしばし、押し黙って聞いていた。

が、その内に「カカ」と、いつもの高笑いをした。

「カカカ! 痒い! 尻がむず痒いのうツ!」

「ごちそうさまじゃ、ヒライ・ユイ!」

あんな放浪の放蕩の童貞小僧の何処が良いのか、わしにはほとんど理解出来んわい」

「……………」

「うん? 何じゃそのツラ、何ガンくれとんのじゃ?」

「…………自分の気持ちに嘘をつくのは、良くない」

ぽつり、とヒライが言った。

たちまち車体がぐらりと揺れた。

「おいッ! シートから蹴り落とすぞヒライ!!」

何度も何度も言うておろうがッ

奴が! 奴が! 奴がッ!!

奴の方が一方的に、わしに惚れ込んだるだけなんじゃ、とな!!」

「うん、よく知ってる。」

ナガラ・リオは、あなたの事が本当に大好き」

ヒライが言う。

ハンドルを掴み損ね、車体がひととき大きく蛇行する。

「……前見て運転して」

「うっさいわい死ね阿呆！」

やめやめやめやめ！ この話はやめじやツ!!

ヒライ！ 次の札幌大会、骨のありそうな奴はおるんかい？」

アムロが強引に会話をドリフトさせる。

ヒライは一つ溜息を吐いて、パラパラと手帳のページをめくり始めた。

「——ムサシマル・トモエ（武蔵丸友恵）、十六歳。」

使用機体は大雪山タンク。

元柔道全日本女子の強化指定選手で、独自のカスタムアームを活かした懐の深さが最大の武器。

格闘機殺しの異名は伊達では無く、水際に引き摺りこまれて脱出できた者はいない」

「うん？ え、え、えっ？」

何かその情報、間違つたらんか？

タンクなのに格闘機なんか？

いや、ちゅうかタンクなのに水中戦なんか？」

「私たちの機体とは、おそらく相性は最悪。」

才能、胸囲、若さ、どれ一つ取ってもアムロに勝ち目は無い」

「おい、いいかげんな事を言うなや！」

今のガン普拉バトル界に、わし以上のヒロインなんぞおろうてか!?」

「実力とはにかく、年齢と体形は如何ともしがたい」

「やつかましいわいッ！」

ええじやろう、誰が世界の中心か、五時間後にキツチリ教えてやるわい」

アムロが叫ぶ。

エンジンが猛り、たちまちデコトラが加速する。

キラキラと水面が煌めき、ようやく世界が白みがかかり始めていた。

『女一代夢幻舞』

乙女たちの情熱を乗せた天女が、どこまでも海岸線を走り続けていた。

・  
・  
・

——同時刻。

西東京の空にも、ようやく日の光が溢れ始めていた。

爽やかな明朝の河川敷に、一人の少年の姿があった。

黒帯で結んだ、白の胴衣姿。

無人の世界に、腰を落とし、半身をとって構えていた。

「セイトー」

少年が動いた。

その心根まで現れるかのような、真っ直ぐな正拳突き。

たちまち腰を返し逆突き、さらに前に踏み込んでの上段蹴り。

流れるような動きであった。

鮮やかに髪の毛を振り乱し、心のままに少年が躍動していた。

次元霸王流拳法。

カミキ・セカイであった。

季節は流れ、彼もまた聖鳳学園の二年生へと進級していた。

様々なドラマがあった。

ガンプらとの出会い、ホシノ先輩との出会い、コウサカ・ユウマとの出会い。

幾つもの出会いがあり、戦いがあり、友情があり、夢があった。必死に跳び上がり伸ばしたその手は、いつしか日本の頂点にまで届いていた。

自らの手でガンプらを作れるようになり、バトル部にも新しい後輩が出来た。

けれど、どれだけ世界が変わろうとも、変わらぬ日課がこの河川敷にあった。

「ハアツ」

裂帛の気合いと共に、禪身の掌を打ち出した。

大気が一瞬震え、やがて、無人の河原に静寂が戻った。

と、不意にその時、ぽんぽん、と後方で拍手が鳴った。

「やあ、相変わらず朝から元気がいいな」

「……ああー」

声の主に気が付いて、セカイも眩しげに顔を上げた。

ロードワークの途中で会って、一言二言、言葉を交わすだけの相手。だが、そんな関係も、ここ暫くは随分とご無沙汰になっていた。

洗い晒しのTシャツにジーンズと言うラフな格好。

時代錯誤の下駄履きが、階段を下りる度に、カラン、コロン、と音を立てる。

伸びるに任せた蓬髪は、あの頃よりも更に長くなったか。

左手には、なぜか不似合いなトランクケースを抱えていた。

発展途上であった身長は170を超え、それゆえセカイには、一瞬、誰だか分らなかった。

そんな中、色素の薄い両の瞳だけは、あの日のような蒼穹を映していた。

ナガラ・リオであった。

「おはようございます、しばらくぶりですね、ナガラさん」

「ああ、おはよう。」

へへ、ちよつと馴染みの顔を見に戻って来たんだが、何だか行き違いになったみたいだね」

「ありや？ それはツイてなかったですね」

「ああ、それで退屈してたんだ。」

カミキくん、また少しだけ、俺と遊んじゃくれないか？」

「ええ、いいっすよ、俺で良かったら……」

と、言いかけた所で、不意にセカイが、この少年にしては珍しい意地悪な笑いを浮かべた。



「……けど、ナガラさん、どっちで？」

セカイが両手をかざし、くい、くいっ、と球体を握るような仕草を見せた。

それを見たりオは目を丸くして、次いで、恥ずかしげに視線をトランクへと向けた。

可愛らしい小さなトランクケース。

その中には、一体のガンプラが眠っていた。

無表情の、テレビモニターのような頭部を持った機体であった。

純白の機体は、しかし、よく見るとそこかしこに細かな傷が入り、すっかりくたびれていた。

機体の名称は、OZ-06MS『リーオー』

新機動戦記ガンダムWを代表する量産型モビルスーツ。

ありふれた、どこにでもある……。

しかし、それゆえに特別な機体であった。